

コトタマ学

言霊の会 島田正路

第一号（第九十号）会報集成書 上卷

会報「コトタマ学」集成書の発刊に当たって

昭和六十三年（一九八八）、言霊の会の月刊会報を世に出してより十七年余、号数が二百を超えるることとなりました。一号分約十三グラム、バツクナンバー全部で二・六キログラムを超えます。言霊学を学ばれる方々の便宜を図るために本にまとめることとしました。取り敢えず、第一号より一七三号まで、内容が重複する箇所を除いて七百余頁となります。そのため、二冊に分け編集、発行することにしました。

言霊学とは昔、布斗麻邇といわれ、太古の私達日本人の祖先が発見し、私たちに遺してくれた、

言葉（言）と心（靈）とに関する究極の学問であります。心と言葉といえ、人の営みの一切というものが出来ましよう。この本を手にした方は、頁をアトランダムに開き、そこにある一章をお読み下さるならば、人間の極く普通の行為の中に、言霊という生命の粒子が鑲められた寶石の如き真理の内容に出会うことが出来るであります。若し、一号より通読して頂けるのならば、生命を構成する五十個の言霊とその活動の結論の中に、いまの世の中では決して発見することが出来ない「光の言葉」、如何なる心の暗黒をも一瞬にして消し去る霊葉の存在と、その光の言葉が放射される心の過程とを御理解頂

けることとなりましょう。この光の言葉こそ廿一世紀より始まる人類の第三生命文明時代の扉を開く鍵そのものなのです。

最後にこの集成書の編集とゲラの全部の制作を一手にお引き受け下さった田亀の次郎氏、また文章の全校正を担当して下さいましたM・I氏、初号より現在まで会報の入力、印刷をして下さいましたS氏、N氏、スタジオ・ハーティ氏、出版に到るまで慈母の如くに愛で鼓舞して下さいましたK・M氏等々へ心より感謝申し上げます次第であります。

平成十九年七月二十三日

著者 記

●コトタマ学上巻 目次●

昭和六十三年

- 創刊のことば 1 / 霊能・易ブームについて 1 / 日本語について 13
言霊と年代について 22 / 大嘗祭 24 / 春の七草 33
新年の行事について 34

平成元年

- 日本のおとぎ話 45 / 桃太郎 45 / 舌切り雀 (日本のおとぎ話 二) 47
浦島太郎 (日本のおとぎ話 三) 49 / 猿蟹合戦 (日本のおとぎ話 四) 55
花咲爺 (日本のおとぎ話 五) 58 / カチカチ山 (日本のおとぎ話 六) 60
再び霊能について 65 / 魂の変態について 73 / 霊の本 77
俳句と和歌について 83 / 神倭皇朝 91 / 言霊学 (ことたまのまなび) 95

言霊学随想

夫婦岩 97

平成二年

言靈学随想

立春立卯 99 / 神様の戸籍 その一 108 / 神様の戸籍 その二 117
 神様の戸籍 その三 (秋葉神社続き) 126 / 再び大嘗祭について 130
 神様の戸籍 その四 136 / 会報三十号の発行に当たって 146
 神様の戸籍 その五 148

平成三年

言靈学随想

神様の戸籍 その六 157 / ドンデン返し 164 / 神様の戸籍 その七 166
 神様の戸籍 その八 176 / 国引き・言向け・国譲り 182 / 壺切りの太刀 185
 神様の戸籍 その九 186 / 神様の戸籍 その十 195 / 七夕 (たなばた) 204
 神様の戸籍 その十一 214 / 梅雨の晴れ間に 222 / 神様の戸籍 その十二 224
 「神様の戸籍」について 231 / 神と人 233

世界語

243 / 盤古大神 243 / ころも 243 / 人間の好時節 244

平成四年

言靈学随想

天の橋立 245 / 枕言葉 248 / いろは歌 250 / 孤独 257
 遊魂について 257

たぬきそば 260

平成五年

壁 261 / 旗印(思い出すこと、思うこと) 269

言霊学随想

G氏来訪 279 / 釣糸 280

平成六年

穀物の種(古事記神代巻) 283

言霊学随想

天地憧憬 289 / 太安萬侶の墓 290 / 稲 293 / トップ・クオーク発見 297

T氏に会う 299 / 秘宝 301

平成七年

炬燵を囲んで 303 / 炬燵を囲んで その二 311 / 底・中・上筒の男三命について 320

「古事記と言霊」刊行に当たって 329 / 八十禍津日の神 338 / スメラミコト 347

著者退院の弁 356

言霊学随想

終末感について 358 / 経綸 367

358

289

279

昭和六十三年

●創刊のことば

世界は唯一の空間の拡がり

世界は唯一の歴史の流れ

世界は唯一の人類の集まり

世界は唯一の真理の動き(小笠原孝次氏随想より)

人類唯一の真理の研究と普及のためにここに「言霊研究」

を世に送ります。

言霊とは人間精神の至宝であり、日本語の原典でありま
す。大方の御熱読を期待します。

昭和六十三年七月

言霊の会

【収載】第一号(昭和六十三年七月)

●霊能・易ブームについて

最近霊能や易占いブームが続いています。

若い人達で各々の心の悩みの解決を求めて霊能者や易者
の門を叩く人が多いそうです。

霊能も易も現代心理学の領域を越えたオカルト的分野に

属しています。

一口に霊能といってもいろいろなものがあります。過ぎ
去った昔の出来事を霊媒を使って現在に再現したり、まだ
到来しない将来の運命を予測したりします。又眼前にいな
い人の職業、性質、年齢、既往症等を霊視して当てたりも
します。その他新興宗教などで先祖供養とかお手当療法で
病気を治すこともあります。

易占いは少々方法を異にし、占うのに算木を使用します。
五十本の筮竹の操作の結果、並んだ数によって人事百般を
占うのですが、出てきた数的表示と占ってもらう人の状況
の関係を見透して予見するのは飽くまで易者の《感》であ
って、これも又一種オカルトの世界に属すと言うことがで
きましよう。

以上のような現象は所謂現代の常識のみから考えると思
慮を越えた不可解なものということになります。その
ため霊的推測が当たればそれは奇跡といわれ、信心の対象
ともなります。果たして霊能とか易占いとかは単なる気ま
ぐれの当て推量でしかないのでしょうか。

それともそれらオカルト現象を支配している原理法則が
存在し、それらの活動は信用してよいものなのでしょうか。

物質文明華やかな現代の人間も一度自分の心の問題となると真昼間から急に暗闇に飛び込んだ如く盲目になってしまいます。心理学者も容易にはオカルトの世界に飛び込んでその法則なり真理なりの存在の有無を解明しようとはしません。だから一般の人々特に若い人々が心の迷いから又は旺盛な好奇心からこの世界に心を奪われていくのも無理からぬことでしよう。

幸い人間精神の全構造とその操作に関する学問である言霊布斗麻邇の原理が余すところなく解明され一般に発表されたことです。この原理法則に基づいて霊能とか易占いの実体を隅々まで照らし出すことが出来るようになりました。霊能とは易占いとは一体どのようなものなのか。心の構造を明らかにしながら、その鏡の前に極めて合理的に映し出してみましよう。それによってオカルトの世界の迷信的部分が一掃されることが出来るならば幸いでありませう。

霊能の世界は又易の働きも人間の心の先天部分に、即ち心の現象が起こつて来る以前の動きに関係しているということが出来ます。人間の頭脳内に発想が起こり具体化して言葉として発声され又は行動が開始されます。言葉や行動

が現われてしまえば現実的意識の世界の出来事です。霊能や易占いはその出来事となる以前のこと、頭脳内に起こりつつあるもの、又は、それ以前の状態に係するものと考えてよいでしょう。それらの真偽を確かめるためには人間精神の先天、後天を総合した構造を明らかにすることから始めなければなりません。すべての判定には判定の基準が必要です。

先ず、姿を映し出す鏡の作製から始めることとしよう。霊能者はよく人間の過去を今あるかの如く再現して見せます。人間の表面意識がとうに忘れ去ってしまったものを思い起こさせます。又まだ来ぬ将来の出来事を予見します。このようなことを可能にする根拠は人間の精神のどんなことに基づいているのでしょうか。過去とか未来とかいわれるものは現在とどのように繋がっているのでしょうか。例を仏教の禅にとつて考えて見ることにしましょう。

禅の言葉に「過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得」というのがあります。過ぎ去ってしまった現象はもう存在していないのだから今そのあるがままに再現することは出来ない。現在とは何かと考えても現在は一瞬々々移つて行つてこれが現在だと捕捉することは出来ない。未来も

又まだ来ていないのだからこれですよと示すことは出来ない。以上のように過去も現在も未来も今まで考えていたようには真実味はなく確乎とした存在ではないと意識に言いさかせてしまうと、心は真実何に頼ることも出来ないリズムに陥ってしまうでしょう。しかし以上の精神作用が種々の心的現象が起こって来る本源の世界即ち《空》の自覚を求める禅の修行として行なわれるならば、次々に生起しては消えて行く日々の現象に心を追い廻されていた自我意識がすうーと消えて、現象の根元の宇宙である《空》を確認することに導くのです。この時意識の大きな転換が起こります。

今までは日々日常に次々と起こる心の現象の中に身を置いて、自分や他人との関連に於いて自我を意識していた自分が、その関連の上での自我意識が消えてしまい、広い広い唯一つしか存在しない宇宙がそのまま自分の生命の本体であることに気付くのです。広々とした無限の宇宙が自我の本体なので、自分の視点はそのまま宇宙の中心であることが確認されます。自分即宇宙であることの確認です。

「天上天下唯我独尊」です。

小さい自我ではないこの大きな我即ち宇宙の眼で個々の現象を見る時、禅宗の所謂「一念普く観ず無量劫、無量劫の事即ち今の如し」の言葉が真理であることが了解されます。今一瞬の人間の思いの中に過ぎ去った無限に永い出来事を見るのが出来ます。過去の莫大な量の出来事が総合されて今の一瞬を形成していることを知ります。この過去の一切の出来事が一丸にこめられて活動している永遠の《今》を観ることが出来ます。この今、此処の一点を日本の古神道は「中今」と呼びます。過去といい未来と呼ぶものもつまり永遠の今を構成する内容に他なりません。平たく謂えば一瞬の今の中の思いの中に人類の過去のすべての出来事は記憶としてこめられているということです。ですから永遠の今である中今の内容を、起こってきた年代順の関連で並べて行けば《過去の歴史》が形成されることとなり、その中今の内容を計画の希望に従って並べれば《未来》が展望されることとなります。又宇宙の眼で見る時精神の世界には時間とか空間とかの障壁が全然存在しないことが確認出来ます。一切は永遠の今の内容に過ぎないのですから。哲学的に表現しますと時間・空間とは人間の精神思考の形式又は範疇であると表現されます。精神的宇宙は透明で見通すの

に時間的空間的な障害はないのです。

靈能者の靈力による過去の再現とか将来の子見の能力は以上の如き精神宇宙の構造に拠っているのです。勿論靈能者の大部分は《空》の自覚はありません。けれど各靈能者それぞれは何らかの方法で自我意識を薄れさせ自我を無にして透明な永遠の今の世界に触れようとする努力がなされています。永遠の今に一瞬間でも接触することによって靈能は發揮されます。靈能者が過去や未来の眞実を言い当てるのはこの永遠の今に触れるから可能なのです。このことが靈能を可能にする第一の条件です。靈能を信用出来るか否かの判定は第一に靈能者がこの大きな宇宙即ち空の宇宙に眞実触れているかどうかを見ることです。触れていなければ靈能でなく単なるごまかしです。

空を自証した禅坊主は又「汝と吾と同根、又奇特なり」と言います。君も僕も同じ宇宙を根として生えて来た枝同士だ。お互い様何と有り難いことではないか、といった意味でしょう。肉体的には全く別々の存在である汝と吾が、実は同じ先天的な宇宙から発現して来た兄弟なのだということです。それ故先天世界に触れることが出来るならば自と他の別は取り払われて自分を見るが如く他人の過去・未来

を看取することが出来ます。

個としての肉体を持ち、生まれてから集積して来た知識と経験の総合が人間の自我だとのみ思い込んでいる人には、上述の靈能の説明に示された現象はある特殊な人の特別な能力であるとは思えないかも知れません。しかしそうだと決めてかかれないことは少し考えて見れば明らかです。心の宇宙である《空》の自覚はなくとも空と同様の広さを感じさせるのは子に対する母親の愛ということが出来ます。それ故子供に何事が起こると母親は誰よりも早く胸騒ぎを感じ、変事の起こったのを知ることが出来るのではないのでしょうか。得手不得手の差こそあれ人間は誰しも自我意識の執着を捨て広い宇宙を垣間見ることによる種々の洞察の修行をするならば、靈能は必ず開けてくるものなのです。それは大工さんが経験の積み重ねによって腕を上げ、ピアニストが毎日の練習によって上手になって行くのと同様に変換することはありません。

これまで私は種々の靈能活動が可能である根拠を仏教の禅の《空》の立場から説明して来ました。今からはもう一歩踏み込んで言霊原理の立場から靈能の詳しい法則について検討して行くことにします。禅の《空》即ち精神的宇宙とは

一切の現象がその宇宙から発現して来る根元の宇宙であり、それ自体は何もない唯現象発現のエネルギーが満ち満ちている宇宙です。所謂先天宇宙です。この宇宙から現象が発現しようとする時、この先天宇宙の内部でどんなことが起こるのか、起こって来る現象の根本要素はどんなものかを余す所なく解明したのが言霊原理です。精神宇宙の先天と後天即ち宇宙内に現象が起こる以前と起こって来た世界一切の構造と活動を明示した学問です。ですからこの言霊原理から見れば人間が発想し行動する精神現象はすべて明らかに説明することが出来ます。霊能現象も例外ではないわけです。検討に入りましょう。

人間社会には地位とか品位とか言うものがあります。霊能の世界には霊位といったものが存在します。下位の霊能者は自分の住む霊位の世界の中では霊能を働かすことが出来ても、それより高次の霊位の世界については決して見透したり見定めたりする霊能を発揮することが出来ません。否その高次の霊位の世界の存在すら覚知することが出来ません。このことが霊能者の能力を判定する第二の観点です。霊能に五段階あります。それは人間精神に五次元の世界があるからです。人間が生まれて成長し自覚が進んでゆく

順序に従って説明しますと、最初は五官欲望の次元です。何々がほしい、何々になりたい、より豊かに安楽になりたいという欲望の世界です。食べたり、稼いだり、何々になりたいと欲する心は人間が生きていくための最初で最低の必要欠く可からざる能力です。この次元が人間の唯一つの世界だと思つて疑いを持たずに一生を終わる人も少なくありません。霊能をこの次元でのみ発揮する霊能者が如何に多いことでしょう。金運・結婚運・出世運だけが霊能や易判断の世界だと思つている霊能者・易者が大部分ではないでしょうか。

次の人間自覚の段階は知識能力の次元です。五官感覚の世界で経験した現象と現象相互の関連の法則を見つけてゆく段階です。一般に知識・学問の世界のことです。一般の霊能・易占いの能力はこの次元に直接関係することは少ないようです。何故ならこの世界では専ら合理性を求めるところが目的であり、それに反しオカルト世界はその非合理的故に人々の関心を引くのですから。唯オカルト的に断言された結論を後で補足説明する為にこの世界の既存の論説が使われることは大いにあります。易占いで出た八卦の判断の説明に易経という本に書かれた八卦の法則の解釈を補助

手段として利用することがよくあります。

人間の持つ性能の第三段階は感情の世界です。一般にこの世界から発現して来るものは宗教・芸術の活動です。先にお話しした禪の《空》とはこの世界の自覚のことです。人間精神のあらゆる現象が起こって来る根源の宇宙です。宗教の信仰上この宇宙の存在を自覚する時、救われとか空観と呼ばれます。寂光の浄土などと表現されます。この宇宙を芸術の上で求めた時、無限で無礙な光であり、最高調和のリズムとして受け取られます。芸術に於ける名人・巨匠とはこの世界の光やリズムを追求し、つきとめた人達です。そして本文の主題である霊能者や易占の人達も生まれつきでか、又は何らかの方法や筋道でこの世界と直接に接触することが出来る人達なのです。この世界が一切のオカルト現象の基礎であります。この宇宙は人間精神現象の発現して来る大本の世界ですので、この世界に何らかの視点を持つ人がそこから発する現象を見透すことが可能となるわけです。

人間精神の第三の霊位として現象の根源である宇宙そのものが登場して来ました。ここで言霊学のことを簡単に説明しておきましょう。この根本宇宙の内部はどうなっている

のでしようか。この所謂精神の先天構造についての説明はここ二千年の間存在しませんでした。精神現象というのはどの様にして発現して来るのか、その現象は厳密に分類すると何種類あるのかは精神宇宙の先天構造によって決まります。この精神的解明がないのですから人類のここ二千年の歴史は学説、論文が入り乱れ、片時も安定を得ることはありませんでした。しかし精神の先天構造の解明が過去の人類の所有として存在しなかったではありません。今を遡る五千年乃至八千年以前に既に解明され言霊フトマニの原理として日本の大和言葉制定の原典となり、諸種文化発祥の規範となっていた時代が永く続き、そして訳があって今から二・三千年前意図的に文明の表面から隠されてしまったのです。このかくされた期間中精神の先天構造を示すものとしては宗教書に於ける比喩的な象徴や易経の数的表現などがあるに過ぎませんでした。

この二千年にわたる精神原理の隠没の時代は全くの暗黒の時代であったということが出来ます。

幸いなことに明治天皇に始まる諸先輩の努力により古事記、日本書紀の神代巻を手掛かりとして言霊の原理は三千年前にあったと同じ姿で復元されました。先に述べました

人間精神の靈位を表わすのに言靈学は五つの母音を当てはめず。欲望が発現して来る第一段階から順次人間の自覺の向上に随つて第二、第三……と母音はウオアエイと並びます。禪で単に空といつて表現された宇宙は、実はウオアエイと五つの宇宙が次元的な界層を作っている宇宙でありました。第三の感情の宇宙であるアの次に第四のエ、第五のイの宇宙が続きます。エとは《選ぶ》即ち第一から二・三の三つの世界のうち、今は何を行爲として採用するかを選ぶ人間の選択性能が発現して来る宇宙であり、最上段の第五番目のイの宇宙は既出の四つの性能を根本的に統括する人間生命意志の次元です。人間の活動をこの最上段の生命意志でとらえたのが言葉の言葉(Word of words)である言靈であります。

靈能者はその靈能を發揮するためには根本宇宙と接觸することが必要条件であるのですが、その宇宙というものを言靈学によつて五つの界層(ウオアエイ)の次元の重なりと詳しく知ることが出来ると、靈能者の靈位の判定に極めて便利となります。先に説明しました靈能のウ・オの段階を通りこしてアの靈位に達しますと、その靈能者は宗教的、

芸術的なインスピレーションを駆使することが出来ます。人の迷いを救つたり、又は芸術的な才能に恵まれることになりません。

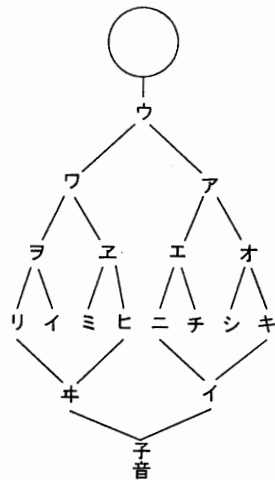
又、この第三番目の宇宙までの靈能は人間の吉凶禍福を左右しますが、道徳的善悪には直接関係しません。例えば靈能によつて金儲けとか立身出世とかに役立つアドバイスはしますが、金儲けや立身出世がその人の人生全体にどの様な意義を持つかなどの問題は全くネグレクトされています。靈能が個人の吉凶禍福の域を超えて社会、国家、世界とか、又は人間とはといった道徳・政治の分野に關係するためには、靈能者の靈位が第四番目の言靈エの次元に高められることが必要となります。靈能者にしてこの次元に入る人は希なことであります。この次元にある靈能者はその場限りの個人的吉凶判断は口にしません。人としては今かくかくすべきであるという至上命令としてのアドバイスをすることとなります。第四のエの次元から發する現象は道徳・政治の諸相なのでから。靈位の最上階である言靈イの宇宙では個人的な問題は消えてしまい、全人類的な文明創造のための経綸のみが問題となります。生命意志であり言靈である次元から見る時、この次元が人間生命構造

の根底でありますので、人類は全体として一個の人間であり、歴史とは人類として唯一筋の生命の流れであることが理解し得る段階なのです。と同時にこの次元から見る時人間の心の営みをすべて見通し調和させることが可能であります。以上説明してきました人間の五段階の霊位を仏教は第一段階から順に衆生(ウ)声聞(オ)縁覚(ア)菩薩(エ)仏陀(イ)と呼びます。

以上霊能者の霊位について言霊の立場から判断の基準を説明しました。言霊の観点から見ると、この霊能者はこの段階の預言や過去の再現は出来るが、それ以上のものは不可能である……という区別が容易になる筈であります。次に霊能者は過去の再現とか将来の予言をする場合人間生命構造のどの部分を霊視することとなるのでしょうか。過ぎ去ってしまった既に存在しないものやまだ姿を現わしていないものをどの様にして再現し言い当てるのでしょうか。再び言霊学によって人間精神の先天構造を見ることにします。これが霊能判定の第三の観点となります。

下の図001-Aは空である先天宇宙から現象である子音が現われるまでに先天宇宙の内部で何が起るかを言霊で図

図 001-A



示したものです。日本の古神道では天津磐境と呼びます。ウからイまで先天(アマ)構造が五段階で活動しますので天の五葉坂であり、それが天津磐境となりました。何も現象がない宇宙(母音)から現象が起り、次々に現象が変化して終に最後に結果(半母音)となって

図 001-B

ワ									ア
ヲ									オ
ウ			三十二子音						ウ
エ									エ
キ	ニ	ヒ	リ	シ	ミ	キ	イ	チ	イ

終結しますが、その現象を引き起こして結果を實現する主体は人間生命意志の根本リズムを表わす八つの父韻キシチヒミリイニなのです。この八つの父韻がアオウエの四母音に働きかけて現象の最小単位三十二子音を生み出します(図001B)。この八父韻は現象を生み出す人間意志に備わった根本のヒラメキといったものです。ドイツ哲学でいう Funke 火花がこれに当たります。空である宇宙はこの八つの父韻の定まった変化のリズムに誘われて現象を起こしながら最終結果をもたらします。この時《空》である五母音の宇宙のどれに父韻が働きかけるかによって父韻のリズム即ち八つの父韻の並び方が違つてきます。左にそれぞれの父韻の並び方を書きます。

ウの宇宙 — キシチニヒミイリ
オの宇宙 — キチミヒシニイリ
アの宇宙 — チキリヒシニイミ
エの宇宙 — チキミヒリニイシ
イの宇宙 — 八父韻の順序不定

そして靈能者は人間の先天構造のこの八つの父韻のリズ

ムを雰囲気として靈感することによって靈能を發揮するのです。人間の今、此処の中今の一念には先の図001Aに示された如く母音も父韻も備わっており、その内の父韻の配列の順序を察知することによって過去の再現も将来の予言も可能となるわけです。勿論靈能者の大部分は言靈学を知らず、母音も特に父韻のことなど知ってはいません。しかし靈能者が靈感によって察知するのは先天構造の内部の父韻のリズムなのです。それ故言靈学の父韻を自覚するならば、靈能者の過去・未来の靈視の真偽の判断は全く容易なことと言えます。

以上で靈能といわれるものの内容を人間精神構造の学問である言靈学の立場から解明しました。これによって所謂靈能が人間の精神構造の何処に関連して起こって来るかが大体お解り頂けたことと思います。今まで靈能とは神秘的なもの又は人間の極めて特殊な才能のように思われて来ました。しかし言靈学という人間精神の科学の鏡の前に靈能のメカニズムが解明されて見ますと、靈能というものがそれ程神秘的でも特殊なものでもなく、人間の持っている天与の性能の一部にすぎないことが了解されて来ます。そしてそれとは全く逆の言い方をするならば今まで平々凡々

な当たり前の言行と思われていた私たちの日常生活や職業上の営みが、実は精神の先天構造の活動によって産み出されて来る宇宙そのものの神秘靈妙な営みなのだということも了解出来るでありましょう。人間精神構造を自覚すると否とに拘わらず人間が生きているということ、これに過ぎる靈能はありません。大工さんは家を建てる靈能者であり、科学者は新しい法則や技術を発見する靈能者であり、家庭の主婦は家事育児一般の靈能者ということが出来ます。人間は職業や家庭生活を通じてその人の靈能を高めて行くことがこの世に生まれて来たことの天与の使命と考えることによつてその人の一生は栄えあるものとなるでしょう。

次に易占いについて一言しましょう。易法の原典は数千年前このかた日本固有のアイウエオ五十音言靈学であり、中国の太古の聖王といわれる伏羲氏の時その原理のうちの数学的法則部分が中国に伝えられて易となつたものです(そんな馬鹿なことがと思われる方は五十音言靈学を学んでみて下さい。成程と了解されること請け合いです)。言靈学は人間精神の根本要素を先天十七、後天三十二、それらの文字化として一、合計五十で表現します。

その内の先天十七の構造は先に書いた図001・Aで示され

ます。それに対して易はといいますと、易の繁辭伝という本に「大衍の数五十、その用四十有九……」とありますように易の根本数が五十と定められ言靈学に一致します。

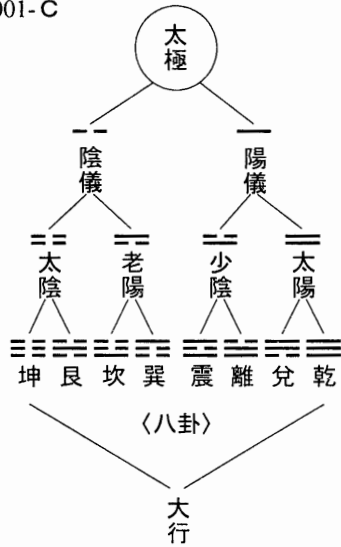
又同じく繁辭伝に「易に太極あり、是れ兩儀を生じ、兩儀四象を生じ、四象八卦を生ず」とあります。実際に易を立てる時はどうするかという大衍の数五十というように五十本の筮竹を使います。この五十本の中から一本を抜いて占筮の中心本体として太極に象ります。従つて実際に運用する筮竹の数は四十九本です。「その用四十有九」となります。

次に四十九本を無心に二つに分け両手に持ち、天地の兩儀に象り……諸種の操作を繰り返して最後に八卦を得ることになります。詳しいことは省きますが操作の全体を図示すると図001・Cとなりますが、如何に先の言靈先天図001・Aと似ているかに気付かれましょう。

唯違ふ所は言靈の先天図はその要素が人間の自覚によつて捉えられた精神構成要素の実体であるのに対し、易のそれは飽くまで原理の運用機能の面だけに限られた概念的表徴であるに過ぎないこととあります。それ故言靈の先天図を心中に自覚するならば、そこより現われる現象は自ずと

察知されますが、易占いによって現われた《卦》はそれだけでは占いの実相を示すことにはならないで易経の繁辭伝その他の易の解説書を参考として占いの実際に適合するように御託宣は脚色されなければならぬことです。易占いで出て来た《卦》を占いを頼んだ人の実状に合うようにするた

図 001-C



めに如何に脚色して話すかは易者の経験に依ることであり、これも亦易者の靈感が必要です。この場合易の八卦とは言霊字でいう八父韻のことであり、一般の靈能者が靈感で察知する人間意志のリズムを易者は五十本の筮竹の操作にて割り出します。易者の無造作の筮竹の操作で出た卦がどうして人間の運命と関係するのでしょうか。簡単に解説しましょう。

易者と依頼者との靈的關係は両者が占筮のために向き合った瞬間に始まります。この靈的交流の雰囲気の中で易者は依頼者の全生命とみたてた五十本の筮竹を操作して行き

ます。操作は易者の無心が必要です。易者の先入観を入れず無心である時、筮竹の動きは依頼者の生命の流れを象ることになるからです。又その筮竹の操作は丁度言霊学に示された精神先天構造と同様の構造をなぞらって行なわれます。その結果は乾兌離震巽坎艮坤の八卦として示されますが、これは言霊学に

於ける八父韻の動きを数的概念として表わしたものです。

概念ですから元の実体に戻し実状に合わせるためには易者の解釈と判断が必要です。この時にも易の繁辭伝その他の参考書を基準にして易者の靈感が加わるようになります。かく考えて来ますと、易占いは筮竹を使いながらその全体に易者の靈感が働いていることとなります。それ故易者が行を修め徳を積み、明智と理に達した人となるならば、殊更に筮竹を用いなくても吉につき凶を避けることが出来る筈です。中国の左伝という本には「聖人は卜筮を煩わさず」といい荀子という本には「善く易を為める者は占わず」と書い

てあります。このことは先に挙げた所謂霊能者についても「霊能者に於いて徳に達すれば日常平凡の言動がそのまま霊感である」といったことと同様なのであります。この意味でキリスト教の聖書には如何なる占いの行為も禁止すると書いてあるのです。

人が常に今、此処に真実を見つめる実相を見て虚心に物事を判断していくならば、言い換えると人が我に於いてでなく神に於いて生きるならば、その判断に誤りはなく従って一切の予見も過去再現も必要ないこととなります。

最後に所謂お手当療法について一言します。人間の掌からは神秘的エネルギーが放射されると言って病氣治療に利用されています。新興宗教の中にはこのエネルギーを神の光だとして宗教活動に応用している所もあるようです。このエネルギーについては諸説紛々であります。此処で確認しておきましょう。人間の生命意志のエネルギーです。ヨーガではプラーナーと呼んでいます。生命意志は人間が生きるための根底のエネルギーですから、これを放射するお手当療法が時に効果を挙げることも有り得ることでしょう。唯その場合注意しなければならないことがあります。

それは放射するエネルギーと人間生命とのメカニズムを正確に把握確認していない場合、このお手当を日常万能と思ひ込んでいますといろいろな矛盾が起こって来ることです。病気が治らなくなったり家庭の中が乱れて来たりします。このワン・パターンの弊害を避けようと宗教団体の中には感謝の献金をせよとか、先祖供養を奨めたりなどしているようです。

そこでこれらの迷いを打ち切るためにお手当療法と人間生命との関連を言霊学によって明らかにします。

お手当療法の放射エネルギーは生命意志のエネルギーであるといいました。言霊学によって生命意志(言霊イ)は人間性能の五段階の最上階にあって他の四段階即ち選択智(言霊エ)感情(言霊ア)理知(言霊オ)欲望(言霊ウ)を統轄するものです。意志エネルギーに依存し、これを強調しますと、それに統轄されている他の四つの性能の内部に当然変革が要求されて来ます。生命意志のみが強調され他の四性能が変わらなければ全人格としての破綻が起こることは避けられません。それ故お手当療法に依存する生活が永い期間続く人に対しては、その人の心理を観察して人格成長をどの様に伸ばして行くかの研究が伴わなければなりません。

ん。これに失敗しますと依存者の病気はかえって重くこじれたり、精神の苦悩が深まったりします。新興宗教などではこれを補うために「先祖供養をせよ」とか「感謝報恩の献金を奨める」「新しい信者獲得への奉仕」など信者の人格内の変革に対応する手段を講じます。これも亦ワンパターンの弊害を免れることは出来ません。更にこの治療エネルギーを神の光であると思ひ込んで宗教教団の権威の象徴として設定しますと、信者はすべて統率された人格となり、人格の自由な成長が妨げられます。真実の宗教の目的である神の子宇宙の子として何者にも支配されない「天上天下唯我独尊」の悟りへの探求を永遠に凍結してしまふ教義が出来上がり「宗教は阿片なり」とならざるを得なくなります。お手当治療やプラナーナ療法を表看板にする宗教者の心すべきことであります。お手当治療は飽くまでこの世には物質ばかりでなく霊的なものが存在することを示す為にのみ活用して療法による神様のご利益を強調することを止め、聖書にあるように「汝の信仰汝を療せり」という魂の完全な自由の立場を強調することが肝要であります。

【収載】 第一号（昭和六十三年七月）

● 日本語について

今は世を挙げて国際化の時代、横文字は町に氾濫している。その一方日本の伝統への指向も消えてはいない。羽織・袴・振り袖・打ち掛けの姿は結婚式で見られるし、茶道・華道・能楽・歌舞伎・相撲等も盛んである。しかしこれら日本的と思われるものもその歴史を調べるとたかだか数百年乃至千年程に過ぎない。日本人はこの列島にそれよりずっと以前から住んでいたのであるから日本的なものはそれ以前から存在していた筈である。それではもともと日本的なものは何かと考えるとそれは日本語ということになる。私達が日常しゃべっている日本語程日本的なものには他にない。

日本人が日本人であることの証明であるといっている日本語について現代の日本人は余りにも知らな過ぎるのではないか。日本語は何時頃どの様にして作られて来たのか。誰も知らないようである。日本語のルーツを求めて昭和六十二年春東京で大規模な研究会が開催され、日本は勿論外国からも大勢の学者・研究者が集まって十日間にわたって熱心な討論がかわされた。その結果結論は「不明」というこ

とになったと新聞で大きく報道されたものである。多分言語学その他の学問のあらゆる理論を使って討論が行なわれたに違いない。にも拘わらず日本語のルーツを探ることが出来なかつたのは何故か。更に深くこの問題を掘り下げて考えて見よう。理由として大きく分けて二つのことが考えられる。その一つは日本語が作られる過程に最も厳密な原理・原則が存在しており、現代の言語学の考え方では容易にはその原理の領域に入つて行くことが出来ないことである。もう一つは日本語を制定する原理・原則そのものが日本の歴史のある時代にその時の為政者により文明経営上の大きな意図の下に故意に日本人の表面意識から隠されてしまつたことによるのである。今より以上のことを明らかにしながら日本語のルーツに迫ってみようと思う。それによつて読者が日本語の内容の素晴らしさに気付かれるならば幸いである。

日本語が作られるのに厳密な原理・法則があつたなどといえれば現代の学者からは多分冷笑か失笑でもつて迎えられるであろう。更にその原理がある時代を劃して隠没させられたといえれば氣違ひ扱いを受けること間違ひあるまい。しかしその日本語制定の原理が発見され昔あつた如く復元公

表された現在、それは事実なのであり、人が自己の先入観を一応脇に置いて虚心坦懐示される原理の中に踏みかけていくならば百パーセントの理解を得られることは確実なことである。

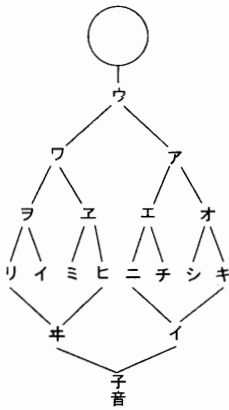
日本語が作られた根本原理は古代に於いては布斗麻邇（フトマニ）と呼ばれた。現在我々はアイウエオ五十音言靈（コトタマ）の原理と呼んでいる。フトマニというと太占を連想し古代に於ける鹿の肩骨を焼いて出て来た紋様による占いと思われがちであるがそうではない。この原理の出処原典は何か。奈良時代に撰述された古事記・日本書紀の神代巻である。原理を故意に隠没させたことを示す歴史的事件とは何か。神倭朝第十代崇神天皇の時に於ける三種の神器の同床共殿制度の廃止と伊勢の皇大神宮の創祀の事実である。そうはいつてもこれだけ述べたのでは読者は何のこともだか分かるはずはない。そこでこれより日本語の原典であり原理である言靈布斗麻邇の原理の内容に立ち入つた立場から日本語成立の経緯とその変遷の歴史を述べることによつて読者の理解を求めようと思う。

生物学的に見た大昔における人類の生活は野山の獣とそれ程変わらなかつたことであろう。それが多分一万年以上

程も以前のことと思われる時から人類は自己の心が存在するということに気付いたのであった。そして心とは何かの探究が始まった。場所は何処か。古事記に高天原とあるから多分地球上の高原地帯チベット・インド・アフガニスタン辺りの高原地方ではなかったか。人類文明の揺籃時代である。文明とは何か。言葉と数と文字である。言葉は文明の母(いろは)であり、数は文明の父(かぞ・かず)である(昔の日本語では父をかぞ、母をいろはと呼んだ)。この探究は長い年月がかかったことであろう。今日隆盛を極めている物質科学文明の成長のために人類は三、四千年を費やして来たが、太古は悠長な時代であったろうからもっと長い年月を要したに違いない。遂に人類は自己の内面に存在し絶え間なく変化活動している心の全貌を解明し、それを言葉として表現することに成功したのであった。人間の心の構造とその活動の法則としての言葉の原理の完成である。

その心と言葉の一致した原理によれば精神の根本要素は丁度五十個ある。その夫々にアイウエオ五十音の単音を当てはめて麻邇(マニ)又は言霊(コトタ

図 003-A



マ)と呼んだ。キリスト教のマナも仏教の摩尼(宝珠)も同意味の世界語である。五十個の内訳は現象として発現する以前の先天部分の要素十七個、現象として発現した後天の最小要素三十二個、それらを文字として表わす要素一個、合計五十個である。更にその五十個の活動運用の基本動作が五十あり、総合計百個の原理である。このことは科学が物質の構造を先見部分として原子核内の素粒子乃至電子を、後天構造の最小単位として各原子を発見し命名したとと比較すれば理解し易いかも知れない。物質と同じく心もまた原子核内要素・電子、それに原子に相当する要素によって構成されているのである。精神の要素を人間の発声する単音と結合させ、精神であると同時に音声である要素として自覚し、精神の原理即言葉の原理である言霊の原理を完成させたのであった。後述する古代日本語の大和言葉はこの五十音の組み合わせによって作られる。

次に発見された原理を簡単に述べよう。先ず精神の先天構造は十七個の言霊で構成される。(図 003-A)

頭の中に何の発想も起こらない時、凶に示される如く精神宇宙そのままである。○で示される。禪でいう空である。この空なる宇宙は何も起こってはいないけれどすべての現象がそこから起こるエネルギーに満ちた宇宙である。この宇宙の中に何かが起こり始める。現象が起きるきざしとして先天部分に何かが起こったこと、その最初の動きの存在にウと名付ける。言靈ウである。言靈ウがどんな内容の音であるか。ウをふりがなして見ると有・生・動・有の如くその意味内容を窺い知ることが出来る。一面白一色の雪がまだ消えぬ春の初め自然の眠りから覚めて一番に咲く花はウの眼又はウの芽即ち梅という名が付いたのも言靈の原理によっている。牛(うし)馬(うま)の名前も言靈シ・マの内容が分かって見るとその絶妙な命名に驚嘆するのである。

ウの次にアとワが出て来る。これはやがて主体と客体の自覚となる大本の存在である。ウとしてきざしたものが、それは何かなという思考が働くと同時に考える方の主体側と考えられる側の客体側に分かれる。主体側がアで客体側がワである。吾(あれ)と汝(われ)である。

このようにして先天部分の精神構造は合計十七個の言靈から成り立っている。詳しくは当会発行の「続言靈」原理編

を参照して頂きたい。先天の十六番目に出て来る言靈がイであり、十七番目がキである。言靈イ・キは人間生命の根本意志である。古事記にはこの言靈イ・キを説明するために神の名前を当ててイザナギノ神・イザナミノ神という。先天構造の最後に出て来る生命意志の働きでいよいよ後天の現象である子音が創生されることとなる。人間は仕事を始めるときに、イザ、と掛け声をかける。イは十六番目の言靈である。十六夜をいざよいと呼ぶ語源である。

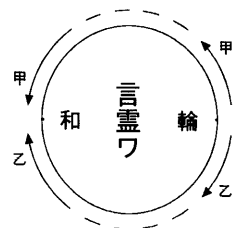
時が来て高天原のフトマニ言靈の原理の自覚者(靈知り)の中から選ばれた人々がその生命の原理を基礎とした理想の社会を創造するために平地に下って来た。古事記はこれを天孫降臨という。そして最終的に落ち着いた所がこの日本列島であった。靈知りによる理想社会の建設が始まった。言靈原理に則り物事の名前が創られ伝え広められていった。文化社会の始まりである。物事に対して名を付けること、それを広めること、伝承して行くことが文化である。

さて理想社会とはどんな世の中かについて一言しよう。人類は長い間心の底から熱望しながら実際にはますます理想とはかけ離れた世の中に住んで来たために理想世界とは何かの定義を忘れてしまっている。理想社会の内容を端的

に言えばそれはあらゆる物事の名前がそのまま事物の実相を表わして何人によっても間違いない了解されることが出来る社会である。平和という言葉がある。この言葉程多くの人々から憧憬されながらこの事のためにどれ程多くの人の血が流された言葉はない。或る主義の人達にとつては押し付けた平和であり、或る人達には押し付けられた平和であつたからである。「平和を闘いとうろろ」などよく聞く言葉である。言葉による大和言葉の平和を示す言葉は唯一一字ワである。ワは和であり輪である。輪の曲線の上の一点に立つた二人が意見の相違を生じる。お互いに自分の主張を述べれば述べる程曲線状の一点から反対方向に走って行き両者の距離は遠くなって行く。両者が夫々自己の内容をこゝとん調べ尽くし主張し尽くした時、再び両者の間に友情が生まれ、輪の反対側の一点に於いて両者は再会する。手を握り合う。これが和である。(図003-B)人々の内容・意見が悉く置き足らわしてしかも全体として調和する。これが言葉ワの内容である。それ故初めの意見の相違は更に大きな調和をもたらすための研究過程であつて単なる争いではない。言葉ワの生命構造に於ける意味を自覚するならば、和の意味は実相として捉えられ、争いに逸脱することは全

くあり得ない。ワは結論であり、実相そのものである。そこに別の解釈を必要としない。この時意見の相違だけを区切って取り上げ、その時点で平和とは何かを考えると思考には何らかの概念が入り込んでくる。概念には種々の解釈が伴っている。そこに争いが起こることとなる。この争いが和を得るまでには幾多の悲惨時と時間の自然的経過を必要とするのである。このように実相がそれ自体に具備していない言葉、聞く立場立場で如何のようにも解釈出来るアイマイな言葉を昔くちなわ(口縄)といった。蛇にたとえられている。キリスト教ではこの口縄(蛇)にイブが誘惑されアダムと共に知恵の樹の実を食べエデンから追放されたと教えている。これに反し精神の要素と言葉の要素が融合した言葉とその結合によつて命名された言葉即ち大和言葉はそれ自体が直接に事物の実相を表わしているから解釈によつて相違することがない。かかる言葉は世界中で大和言葉唯一つである。大昔この言葉が世界中に流布されて「世界は唯一つの言葉であつた」と聖書に書

図 003-B



かれたのである。又この言葉はマナと呼ばれ「マナは神の口より出ずる言葉なり」「言（ことば）は神なり」とも言われた。仏教では摩尼と呼ばれ「仏の言葉は異なることなし」（法華経）と書かれている。

人間は単に情報の伝達にのみ言葉を使うのではない。頭の中で考えるのに言葉を使う。言葉を使うことこそ生きるということであり、言葉は生命であり、神である。その言葉が直接に真実を表現する言葉であるのと、概念というべールを媒介として解釈せねばならぬアイマイな言葉であるとの差が、一方では理想社会を他方では暗黒社会を現出させるのである。かくて世界は言霊原理に導かれた平和な精神文明華やかな時代が数千年続いたのであった。各民族の神話はすべて太古に於いて神代と呼ばれる理想社会が存在したことを伝えている。それはおとぎ話ではなく実話なのである。

以上がこの文の冒頭に述べた「何故現代の言語学的研究が日本語のルーツを解明出来ないか」の第一の理由である。人間精神の先天と後天の構造をすべて明らかにし、その要素に五十音の一拍一音を当てはめ、言葉即実相のマニの原理を発見し、その結合によって事物に命名した古代日本語

のルーツを明らかにするのに概念的思考である現在の言語学の手法は余りにも力不足であるからである。そのルーツが仏教で言う空の更に奥にある処の真理に属している事を知らぬ限り、その内部に踏み入ることは不可能なのである。

次に日本語のルーツ解明が困難である第二の理由となる精神文明の中核である言霊の原理の故意なる隠没の話に入ろう。言霊の原理を精神文明の基礎として日本を中心に世界の平和な時代が永い間続いた。人類の第一の文明としての精神文明完成時代である。民間に伝わる古代史竹内古文書にはこの間日本の皇室はニニギ皇朝・ヒコホホデミ皇朝・ウガヤフキアエズ皇朝と続いたと書かれている。一代の皇朝には何人何十人の天皇が即位された。丁度神武天皇より昭和天皇まで百二十四代を神倭（カンヤマト）皇朝と呼ぶのと同様である。ヒコホホデミとは言霊（ヒコ）の実りの文化（ホホ）がたわわに現われ出た（デミ）時代という意味である。精神文明完成の時代であったことを示している。次に続くウガヤフキアエズ皇朝は精神文明の爛熟期であった。と同時にその名が示す如く精神文明に加えてもう一つの文明即ち物質文明探究の萌芽が出ようとする時代でもあった。その名は感覚・現識（げんしき）に基づく文化（神屋・カヤ）即

ち物質文明がまだ完成されていない（フキアエズ・葺不合）事を示している。事実三、四千年程前日本朝廷に於いて人類文明創造の方針に大変革の決定がなされたのであった。人類は一万年前心とは何かの探究を始め、やがて精神文明の華を咲かせた。今や物質とは何かの研究を始める時が来た、というわけである。

物質探究促進の精神基盤は生存競争である。精神的平安安心の土壤には生存競争など起こりようがない。他より一刻でも早い発明発見を得ようとする競争が科学文明促進となる。急速な科学の進歩を促すためには精神文明の中核である言霊の原理即ち言葉の原理を一時的に社会から隠没させるよりよい方法はない。ウガヤフキアエズ皇朝の末期この大方針が決定され、世界中にその施策が行なわれた。世界の精神文明の成果を示すほとんどの施設・史跡は破壊され姿を消して行つた。焚書とは中国ばかりでなく世界各地で行なわれたものである。民族の神話が書かれ、そのなかで人類の第一の文明である精神文明の存在した事実が単なるユートピア的神代の物語として書かれることとなった。その後の外国における事態の変遷は省略して日本国内の歴史的事実を取り挙げよう。日本に於ける精神と言葉の原

理である言霊フトマニ隠没の政策を決定したのは神倭朝第一代神武天皇であり、その実際の実行者は第十代崇神天皇であった。同じ政策の決定者・実行者であるため神武天皇と崇神天皇は「御肇国天皇」（ハツクニシラススメラミコト）と同じ名前で呼ばれるのである（日本書紀）。百二十四代にわたる神倭皇朝の使命——言霊フトマニの原理の隠没による物質文明創造促進の政策の一翼を担う——の始まりである。日本書紀崇神天皇の章に「是より先に、天照大御神・倭大国魂、二の神を、天皇の大殿の内に並（ひな）り祭る。然して其の神の勢を畏りて、共に住みたまふに安からず。故、天照大神を以ては、豊鋤入姫命に託けまつりて、倭の笠縫（かさぬい）邑に祭る」とかかれている。伊勢神宮のはじまりである。この事件を同床共殿制度の廃止という。この時まで人間精神の理想完成体を五十音言霊の配列で示した天津太祝詞音図を天照大神として歴代天皇の御座所に齋（い）き祭っていた。ということとは天皇自身が言霊フトマニの原理を自覚し、その原理に則つた政治の実現・実行者であったことを意味する。天皇は聖（靈知り）であった。その原理を御座所から遠ざけ神として信仰の対象として祭つたということは、天皇が言霊原理の自覚体得者でなくなつたことを示す。その時

以来日本人の意識から急速に言霊原理の存在は薄れて行き、二千年の歳月が経つ。言霊原理は厚いベールの中に奥深く隠されてしまったのである。これが現代人にとって日本語のルーツすなわち言霊原理に到達することを困難ならしめている第二の理由である。

しかし時の為政者は唯単に原理の隠没を図つただけではなかった。原理の隠没はそれによる精神荒廃・生存競争の時代を現出させ物質科学追求の基盤を作るための方便であるから、人類が物質探究の完成を遂げた暁には再び精神と言葉の原理は蘇らなければならぬ。その原理復興の将来に備えての施策も同時に行つたのである。その主たるものを二つ述べよう。

その第一は伊勢神宮創建に当たつての本殿造形の妙である。伊勢神宮本殿の構造を「唯一神明造り」という。時来り将来言霊の原理が人間の意識に再び蘇るのに備えて本殿の建築構造は五十音言霊図のうちの天照大神を表す天津太祝詞音図を象る形に設計されている。千木・鰐木・数招・カズオギ・階段の数等すべて五十音図の象形である。正に唯一なる神の実体が明らかとなる造り方である。特に本殿中央にご神体として立てられている忌柱(真柱)の祭り方

は意味深長である。忌柱は一尺角長さ五尺の白木の柱であり、その内の二尺が地表下にある如く立てられている。五尺の数意は一尺づつ区切ると上より言霊母音アオウエイを表象する。アは感情(宗教・芸術)、オは悟性(学問・科学)、ウは現識・欲望(産業)、エは英智(道徳・政治)、イは生命意志(言霊フトマニ)を表す次元宇宙である。言霊原理が単なる信仰の対象として祭られて以来、その生存競争の時代には言霊エと言霊イの二つの次元は人間社会の自覚の表面から時来る迄隠没するとの黙示である。誠に心憎いばかりの造形である。(詳しくは「言霊」参照のこと)

言霊原理の蘇りにそなえた施策の第二は奈良朝における古事記・日本書紀の撰定である。同床共殿の制度廃止後七百年奈良時代に入り、言霊原理の将来に於ける蘇りに備えて古事記・日本書紀の編纂撰上が行われた。古事記と日本書紀の神代卷は神話の歴史の形をとっているが、実は神話でも歴史でもなく言霊フトマニの原理の教科書なのである。今簡単に解説しよう。(詳しくは「続言霊」原理編参照)

「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天の御中主の神。次に高御産菜日(たかみけのすび)の神。次に神産菜日(かみけのすび)の神。……」

古事記神代卷の始めの文である。ここに言う「天地の初発の時」とは天文学的・物理学的・生物学的な宇宙の始まりのことでない。人間の心の中に発想が始まる常なる今・此処のことである。古事記神代卷が人間精神内部の構造の書であることに気づかねばならない。まだ何も起こらない心の宇宙を高天原という。そこに先ず何かが生まれ動く。この自覚態が言靈ウである。古事記は天の御中主神と呼ぶ。心の宇宙の中心にやがて我なる主人公の自覚となる実在の意である。読者が心の中を顧みて常なる今・此処の心の初めの動きを把握するとき、天の御中主とは何と絶妙な名前を付けたものかと驚くのである。この初発の意識が分かれて言靈アとワになる。古事記は高御産巢日・神産巢日と呼ぶ。言靈ア・ワから更に進展して言靈オエエヲが現出する。かくて次々に五十個の言靈が生まれて来るが、古事記は言靈自体を書かず、その代わりに五十の神の名を登場させ、その神名の指し示す意味によって将来研究者が個々の言靈を自覚出来るよう神の名前に工夫が施されている。例えば言靈エを示す神名は国常立神である。國家が恒常に成り立つ実体の意味である。言靈エの次元から道德・政治が現象

して来る事を考えると神名の付け方の正確さが理解出来る。古事記には天御中主神より建速須佐男命まで丁度百の神名が出て来る。前半の五十神は五十個の言靈を示し後半の五十神は精神の基本運用法を示す名が付けられている。以上古事記神代卷の意図について解説した。尚日本書紀は古事記の言靈解説を補足する意図で作られたものである。かくて精神文明の原器である言靈原理が隠された結果、爾後の世界並びに日本に於いては弱肉強食の生存競争の社会が現出した。この社会を指導する基準は言靈ウ・オ・アの次元(欲望・悟性・感情)の三性能のみであり、人間の最も微妙な性能言靈エ・イ(英智と生命意志の原理)は人間の自覚から完全に埋没した。従ってその原理によって制定された日本語のルールも日本人の脳裏から忘れられたのであった。

生存競争社会の現出による物質文明創造促進の政策は成功した。人類は三千年の努力により現在見られる如き物質科学の成果を手にする事が出来た。人類の第二の文明である物質文明の華は咲いたわけである。それは同時に三千年間人間の意識から隠没されていた第一の文明である精神文明の心髄言靈フトマニが人類の自覚の表面に再び浮かび出

るべき時である。そうでなければ人類生命の調和は保つことが出来ない。幸い近代に入り先ず始めに言霊の原理に氣付かれたのは明治天皇であった。天皇は言葉の誠の道として側近と共に研究され、以来現在まで古事記・日本書紀を基礎とした言霊の解明は進み、当会報で示す如くその精神即言葉の原理の全貌を世の人に呈示する事が出来るまでになった。物質構造の先天の学である原子物理学が創始されたのは明治時代であった。その同じ時代に精神構造の先験の学である言霊フトマニが再び人間の意識に蘇ってきたことは、人類の文明創造の歴史が大きな生命意志の一筋の流れの現われであることを示すものとして興味深いことである。

私達日本人が日常何の屈託もなく話している日本語が以上述べたような構造と変遷の歴史を持つていることを知る人はまことに少ない。しかし将来物質構造の解明と並行して人間精神の構造の研究が進む時、その研究の仕方は如何に多様であつても、突き止め得られた心の最小因子の眞実を何の概念説明もなく直截簡明にずばりと表現する方法はアイウエオ五十音言霊以外に存在し得ないことに世界が氣付く時もそう遠い将来ではあるまい。日本語はあらゆる意

味で精神的には勿論又将来科学眞理(例えばコンピュータ)との結び付きに於ても素晴らしい言葉なのであることを日本人に知って頂きたいものである。そのことが日本人が最も日本的なものを知り同時に世界の中での眞の役割を知る道なのである。

話が原理的に過ぎた嫌いがある。個々の日本語の言霊的意味を説明しよう。人の住む建物の家(イエ)という。語源は五重(イヘ)である。人間の交転極まりない心(コロコロ)が語源)は五つの重畳の次元宇宙アイウエオ五母音より発現して来る。人間の心の家は五重(イエ)なのである。

「あおによし」は奈良の枕詞である。現在の如何なる辞書にも「意義不詳」つまり分らないと書いている。しかし言霊の立場からは意味は明瞭となる。言霊アは感情の世界。言霊オは悟性の世界。アから宗教芸術が、オからは学問が現出して来る。「あおによし奈良」とは宗教・芸術・学問が盛んな奈良の都ということである。

【収載】第三号(昭和六十三年九月)

●言霊と年代について

言霊原理が発見された時を筆者が推定して今より五千年乃至八千年前などというところ、現代の歴史学者は途方もない夢物語としか受け取らないであろう。物質的な実証のみに基礎を置く現在の歴史学の立場からは「さもありません」と同情することは出来る。しかし歴史を学ぶ者が一度現に生きている自己の精神の内部に、更に自分が話している日本語の一言一音の根源に踏み込んで行くならば、事情は一変すること必定である。その一例を挙げよう。

中国に易経という書がある。その翻訳本に謂う「易の成立に関しては、古来相伝えて、伏羲が始めて八卦を画し、文王が象辞を作り、周公が爻辞を作り、孔子が十翼を作ったと称せられている。」(岩波文庫・易経・四ページ)ここに出て来る人物の生存年代を調べると、孔子は今より約二四〇〇年前、周の国家が興ったのが三二〇〇年前である。文王・周公はその国の王であった。周の前に殷があり、その興ったのは三八〇〇年前である。この殷の存在までは歴史学が確認している。

初めて八卦を画したという伏羲氏とは中国伝説に残る三皇五帝といわれる聖人の内の三皇の一人である。あとの二皇は燧人(すいじん)氏・神農氏。五帝の中には有名な堯・

舜がいる。中国の古書によれば殷の国家の前に夏という国があり、その前が三皇五帝時代であったとあるから、伏羲氏は少なくとも五〇〇〇年以上前の人物と推定するのが妥当である。

さて易経にある易の組織を見ると、「易に太極あり。これ兩儀を生じ、兩儀四象を生じ、四象八卦を生ず」と謂う(図001-C参照)。陰陽未分以前の一元の実体である太極から兩儀・四象・八卦と経過して人事一般の現象を生じて来る精神の先天構造を表している。これを言霊学の天津磐境(てんじんいばんぎょう)の原理ウーア・ワーオエエヲ……(図001-A参照)と比べると構造が全く同じであることに気付く。唯異なるのは言霊が現象の根源実体そのものであるのに比べ、易の太極・兩儀・四象等は概念を用いた解釈であることである。太極と聞けばその哲学的・概念的な意味は分かる。しかし太極の実体である言霊ウを自覚したことにほならない。禅の「空」は座禅の指導書に千言万語を用いて説明されている。然し空を悟る人は少ない。言霊ウを知ったなら太極の説明は如何ようにも説明出来るが、逆に太極という概念から言霊ウを把握するためには法華経の所謂十劫といわれる永い修行を必要とする。この事から易とは日本から言霊の原理

が概念的・数学的な解釈の形で中国の伏羲に伝わったものであることが証明される。

伏羲が易を始めて現在まで五千年、言霊原理の発見はそれ以前でなければならぬ。言霊原理発見の時が五千年乃至八千年の昔と推定される所以である。

【収載】第四号（昭和六十三年十月）

●大嘗祭

私達が日常生活して行く中で接する宗教行事の精神的な意味の説明から話を進めることにしよう。先ず結婚式に呼ばれるとする。神前に米・塩・干魚・菜・葉の束・酒などが供えられている。正月には二段の鏡餅が飾られる。神主さんが現れて御幣（ぬさ）を持って一振り二振り出席者の祓（はらい）をする。出席者は神妙な態度でかしまっている。以上はいとも当たり前の光景となっているが、そこに何故？ という理性的疑問を起すすと当たり前とも言えなくなる。神前に供え物をするのは私達の日々の生活の糧をお与え下さる神様に感謝の意を表すため、と説明する人がある。御幣を頭上で振るのは、御幣に神様が宿っていて、

それで人々の汚れを清めるのだともいわれる。勿論その説明が間違っているというのではない。しかし疑問を更に進めて供え物は何故米・塩・魚・菜・酒……鏡餅なのか、御幣は何故電光形に折った紙を用いるのか、となると出席者は勿論神主さんにとっても当たり前なことではなくなってくる。そこにもっと深い精神的な意味があると考えられる。今回はそれをコトタマの学問の上で説明を加えて見よう。

大昔の日本人は神というものが、言いかえると人間生命の根本構造というものがどんなものか知っていた。その根本の構造は五十個の要素で成り立っている。それぞれにアイウエオの清音五十を当てはめてコトタマ（言霊）と呼んだ。更にこれら物事の実相音を組み合わせることによって万物の名前が付けられた。ここで一つの光景を思い浮かべてみよう。科学者が始めて未知の元素を発見したとする。それ以前種々の現象を観察している内に、そこに何かが生じなければそれぞれの現象が合理的に説明出来ないことに気付く。そこに何かがあるのだ。何か。幾多の実験の末にその何かの正体が解明される。新しい名前前の元素の発見誕生となる。そこに何も存在しなかったなら名前も付かない。又存在したとしても新しい名前が付かなければ世の中の存

言霊原理が発見された時を筆者が推定して今より五千年乃至八千年前などという、現代の歴史学者は途方もない夢物語としか受け取らないであろう。物質的な実証のみに基礎を置く現在の歴史学の立場からは「さもありません」と同情することは出来る。しかし歴史を学ぶ者が一度現に生きている自己の精神の内部に、更に自分が話している日本語の一言一音の根源に踏み込んで行くならば、事情は一変すること必定である。その一例を挙げよう。

中国に易経という書がある。その翻訳本に謂う「易の成立に関しては、古来相伝えて、伏羲が始めて八卦を画し、文王が象辞を作り、周公が爻辞を作り、孔子が十翼を作ったと称せられている。」(岩波文庫・易経・四ページ)ここに出て来る人物の生存年代を調べると、孔子は今より約二四〇〇年前、周の国家が興ったのが三二〇〇年前である。文王・周公はその国の王であった。周の前に殷があり、その興ったのは三八〇〇年前である。この殷の存在までは歴史学が確認している。

初めて八卦を画したという伏羲氏とは中国伝説に残る三皇五帝といわれる聖人の内の三皇の一人である。あとの二皇は燧人(すいじん)氏・神農氏。五帝の中には有名な堯・

舜がいる。中国の古書によれば殷の国家の前に夏という国があり、その前が三皇五帝時代であったとあるから、伏羲氏は少なくとも五〇〇〇年以上前の人物と推定するのが妥当である。

さて易経にある易の組織を見ると、「易に太極あり。これ兩儀を生じ、兩儀四象を生じ、四象八卦を生ず」と謂う(図001-C参照)。陰陽未分以前の一元の実体である太極から兩儀・四象・八卦と経過して人事一般の現象を生じて来る精神の先天構造を表している。これを言霊学の天津磐境(てんじんいばんぎょう)の原理ウーア・ワーオエエヲ……(図001-A参照)と比べると構造が全く同じであることに気付く。唯異なるのは言霊が現象の根源実体そのものであるのに比べ、易の太極・兩儀・四象等は概念を用いた解釈であることである。太極と聞けばその哲学的・概念的な意味は分かる。しかし太極の実体である言霊ウを自覚したことにほならない。禅の「空」は座禅の指導書に千言万語を用いて説明されている。然し空を悟る人は少ない。言霊ウを知ったなら太極の説明は如何ようにも説明出来るが、逆に太極という概念から言霊ウを把握するためには法華経の所謂十劫といわれる永い修行を必要とする。この事から易とは日本から言霊の原理

在とはならない。存在するものとその名前は一体である。

名前とはその存在の全ての内容を含んでいる。近代の哲学者ヤスパース、ハイデッカーは事物の実際の存在（実存）

とはその名であるという結論を出したと聞いている。話が理屈っぽくなって恐縮であるが、これら哲学者の結論も尚正確ではない。いろいろな事物の名前を形造っている日本語の一音一音のコトタマが実際の究極の存在なのである。

「名の名とすべきは常の名にあらざる誠（真言）の名」といったのは真言宗の開祖弘法大師であった。真言とはコトタマのことを指している。以上のことを頭に入れておいて神前の行事の説明に入ろう。

万物の实体は名（前）である。コトタマである。供え物の魚・菜・はその名の象徴である。酒はサカで万物の性を表している。剣の判断力で切れば性が現れる。又酒が入ると人の性が現われて来る。海老はエの霊で、道徳・政治の次元である言霊エの働き（霊）を表している。米は稲で人間生命意志である言霊イの音であるから直接コトタマを意味する。天照大神が耕す精神的な田（五十音図）の作物でもある。塩はシの霊の意で、言霊シは父韻で中心に静まり収まる韻である。塩が入ると味も固定する。落ち着き固ま

って実相が現れる。「汝は地の塩なり」とは聖書の言葉である。以上の如く昔の日本人は日々の糧の感謝の印を神の前に供えながら、同時にその供え物の名によって神そのものを自覚していることの証を表していたのである。

次に鏡餅と御幣の意味を述べよう。神前には二段の鏡餅を供える。餅は百道の意である。精神的に見た現象の要素は全部で五十個である。唯五十個あると勘定しただけでは自然そのままの状態にすぎない。だからその五十個を心の中で整理検討して、どのような配列にしたら人間の行為の鏡となる心構えが出来上がるのか、という運用法が問題となる。昔の日本人はこの手順も明白に知っていた。そしてその手順が又丁度五十あったのである。鏡餅の上の段は精要素五十個のコトタマを表し、下の段はその操作法の手順五十を示し、合計百個の道であるから百道であり、それが人間行為の鏡となるもの故鏡餅となるわけである。この百の道によって神というもの、言い換えれば人間の生命というもののすべてが尽くされている。

百道に因んで古事記の話を挿入しよう。古事記の神代巻には始めの天御中主神より結論を示す天照大神・月読命・須佐男命の三貴子の誕生まで丁度百の神の名前が出て来

る。このうち天御中主神より火の迎具土の神までの五十神は精神の要素であるコトタマ五十音である。それぞれのコトタマの実相が分かるように神様の名前で表徴している。

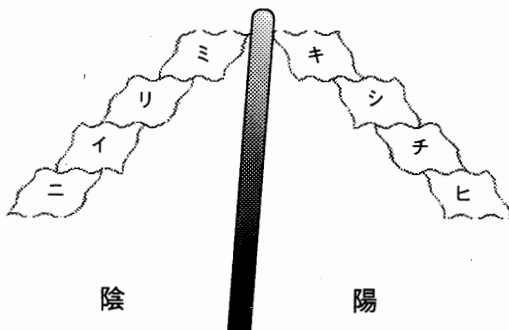
次に五十一番目の金山毘古の神より九十七番目の上津綿津見の神までの四十七神は五十個のコトタマをどのように配列すれば最上の精神の構図が出来上がるかの運用検討の手順を神様の名前で示している。その運用の結果得た結論が三つ出来る。その三つの結論を三人の神名で表す。天照大神とは言霊エである政治・道徳を実践するための精神の鏡の構図であり、この鏡の言霊の配列の五十音図を天津太祝詞音図あまつふとりのりという。月読命とは言霊オとアである学問と芸術・宗教の世界の精神の構図を示し、須佐男命とは言霊ウである欲望と権力の世界の心の構図を表している。全部で五十個のコトタマを操作する手順が結論である三つを加えて合計五十あることを神様の名前で説明しているのが古事記神代巻なのである。五十個のコトタマを祀る宮は五十鈴川の辺りにある伊勢神宮であり、五十の操作法を祀る宮は天理市にある石上神宮である。(古事記参照)

次に神主さんが手にする御幣の話に移ろう。結婚式・地鎮祭などの式場で神主が御幣を持って参列者のお祓いをす

る。関係者の穢れを取り除き物事がスムーズに運ぶようにする為の行事である。御幣とは何を意味するのか。精神的に見ると人間の行動とはすべて言霊の母音に父韻が働きかけ子音を生むことから始まる。五十音図で見ると向かって右の母音から物事は始まり、中間の八つの子音を経て左側の半母音に至って結果となっておさまる。物事の進行が目的・結果に

向かってうまく行くかどうかは中間の八つの過程にかかっている。その過程を決定するのは人間の創造意志である言霊イの現れである八つの父韻である。御幣の電光形の紙の下げは父韻の変化を象ったも

図 005-A



のである。(図 005・A)現象には必ず陰陽・作用反作用がある。父韻キシチヒは陽性音であり、ミリイニは陰性音である。キミ・シリ・チイ・ヒニがそれぞれ一対を作る。古事記はキシチヒの陽性音を塩みつ珠といいミリイニの陰性音を塩ひる珠と呼ぶ。父韻の配列がそれぞれの次元に適當であるならば必ず好結果が得られる。御幣によるお祓いとは創造意志の働きである言霊父韻の配列よかれと打ち振って物事の順調な進展を願うという本義を示している。各次元の創造に適した父韻の配列を左に示す。

ウ(欲望・産業・権力)	キシチニヒミイリ
オ(悟性・学問・科学)	キチミヒシニイリ
ア(感情・芸術・宗教)	チキリヒシニイミ
エ(英智・道徳・政治)	チキミヒリニイシ

御幣の幣の字に因んだ話を付け加えよう。幣をみてぐらとも読む。神に奉る物の総称である。語源はみてぐり(御手繰り)で、十本の手の指を曲げたり伸ばしたりする動作である。先に書いたようにすべての現象は母音から始まり八つの父韻の働きを経て結果である半母音におさまる。全

部で十数である。この十数の判断を古事記は十拳劔といひ、その操作は十本の指の御手繰りによる。御手繰りに二種ある。その一つは指を一つ一つ折り曲げて物事の道理を理解して行くことである。全部握り終えた時が真理の内容を掌握した事となる。この形を幣(握手)という。紙幣のことも握手という。通貨は人間の労働の所産の価値を総合し掌握している意である。御手繰りのもう一つは握った指を反対に一つ一つ伸ばし起こして行くことである。指を握って獲得した真理・法則を今度は時と場所に応じてその価値を活用して行くことが大切である。その動作は起手であり、実際には掟(おきて)となる。第一条……第二条……という法律として世の中の約束事となる。

以上御幣(御手繰り)について余談を付け加えたが、握ぎ手と起き手は陰陽・表裏をなしている。握手が確かな物でなければ起手も完全を期すことはできない。何を基準として握ぎ手を進めるか。究極的には精神の根本要素であり言葉の言葉であるコトタマの段階で物事を掌握し、応用しない限り、人事百般の解決はあり得ない。石上神宮に伝わる「ふるの言本」に「一二三四五六七八九十をタハ(田の葉)である言霊と組め」と教えている。

最近新聞紙上に天皇即位時の皇室の色々な行事・儀式について憲法に照らして合憲か違憲かの論争が盛んになって来たようである。その是非はそれぞれの関係者にまかせることとして、それら皇室の儀式の眞の意義を言霊学の立場から説明を試みよう。今回は大嘗祭(だいじょうさい)について話そう。戦前新嘗祭(にいみさい)という祭日があつた。毎年十一月二十三日、天皇がその年新しくとれた稲を天地の神々に供え自らも食す儀式が宮中で行われた。大嘗祭は天皇即位の儀式として一代に一回のみ行う特別の新嘗祭のことである。この大嘗祭の儀式の内容を言霊学で検討して行くと過去三千年にわたる世界人類の文明史のあら筋が浮かび上がってくる。

大嘗祭にはそれに先立つて日本中で二ヶ所を占い主基田・悠紀田と名付ける二つの田を設定する。神に供える清浄な稲を作る為である。さて祭場として宮中または特定の場所に主基殿・悠紀殿と呼ばれる建物を中心として黒木かやぶきの祭殿が新築される。大嘗祭において新天皇は悠紀殿・主基殿の順で中に入れられ、悠紀田・主基田で収穫された稲を神々に供えられ、自らも食される。この儀式に伴う種々の慣習・儀礼があり、儀式には宮中初め大臣・官僚が従

う大規模な式典であるという。儀式が終了すれば直ちに祭殿は取り払われるのである。以上が大嘗祭の概略であるが、主基田・悠紀田の意味並びに大嘗祭全体の意義などは神道界や学者の間にも不明な点が多く、ただ古い時代の定めに従うのみ心掛けられていると聞いている。しかしこれらの意義は言霊学の目を通せば誠に明瞭となつて来る。

神 倭皇朝第一代神武天皇以来、又第十代崇神天皇の言霊原理との同床共殿制度が廃止されて以来、日本はそして世界は人間精神の根本構造の原理の自覚を失つてしまつた。人間社会のいろいろな文化活動を統一しコントロールする精神原理が隠されてしまつた結果、世界は欲望追求・弱肉強食の時代に突入することとなつた。この時代には二つの互いに相容れない文化活動が並存することとなる。一つは精神とは反対の物質の構造を探究する科学と物質の豊かさを独占しようとする霸道政治であり、他の一つは闘争の社会の中にあつて少しでも人間らしい生活を求めようとする宗教・芸術の分野である。

この事を古事記に則つて説明しよう。伊邪那岐の命は三柱の貴子(うすみこ)を生み終え、御頸珠の玉を天照大神に賜いて「汝が命は高天原を知らせ」と言い、月読の命に「汝が命は夜の

食国を知らせ」といい、次に建速須佐男

の命には「汝が命は海原を知らせ」と言
つたと神代の巻にある。精神界におけ
る三権分立の決定である。この場合御
頸珠とはコトタマの原理のことであ
り、高天原とは形而上の日本のことを
意味している。

月読命の夜の食国とは物事の実相で
ある言霊の原理を表徴する太陽が沈ん
だ夜、うすぼんやりとした月の光で事
物を見る哲学宗教の世界ということ。

そこには決定的な人生の解決はない。
須佐男命の海原とはウの名のはらのこ
とで人間欲望にもとづいた産業経済と物質科学の分野を意
味している。

三権分立の内天照大神に授かった御頸珠である言霊の原
理は、崇神天皇の同床共殿の制度の廃止以来、天皇の、そ
して日本民族の自覚から忘れられてしまった。この時より
人類の文明創造のコントロールの力は失われ、世は弱肉強
食の生存競争の時代となった。この時代の精神の構図を言

図 005-B

天津金木音圖

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ									イ
ウ		ユ					エ		ウ
エ									エ
ヲ	口	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

悠紀田

主基田

靈圖によって表すと、われわれが幼い時
から教わったアイウエオ五十音図とな
る。これを天津金木音図という。(図005

B参照)音圖の向かって右アカサタナの
半分を主基田という。上段のアカサタナ
は「明らかなき悟りの田を成せ」と訓むこ
とが出来る。その中心に言霊のすが存在
するのでスの田(主基田)と呼ぶ。宇宙の
初めの状態は澄み静まっている。そこへ
帰る努力の仕事は宗教や哲学の分野の主
催者月読命の仕事である。他方音圖の向
かって左ハマヤラワの半分を悠紀田と名
付ける。その上段ハマヤラワは「端をま

とめて八つの律に並べて和をつくれ」と訓める。すべての現象
を八つの律に整理する道の仕事であり、中心に言霊ユが位
するからユの田(悠の気の田)で悠紀田と呼ばれる。須佐男
命の物質科学の世界である。

同床共殿制度の廃止の方針によって天照大神の言霊原理
による統率力を失った世界は、三権分立の内の残りの二種
——月読命と須佐男命が天津金木音図という世界の土俵の

中でがっぷり四つに組んで相譲らぬ状態が続くことになった。宗教は三千年の暗黒の社会の人々の心の慰めとして慈悲と愛を説き、仏の国・神の国の実現を求めて長い間見果てぬ夢のような努力の旅が続けている。哲学はいろいろな精神現象の観察を基礎として現象の根本となる実在を求めて種々の概念と仮説の樓閣を築き続けている。その実行の領域は主として東洋全域であった。仏教・キリスト教・儒教・イスラム教・ヒンズー教等、又東洋哲学もすべて東洋地域から始められたものであった。他方物質科学を中心とした武力と金力を以て世界に影響を及ぼそうとする活動は主に西洋地域を基盤として発展し、遂に今日見るような物質文明を築き上げてきたのである。月読と須佐男の両者はそれぞれ命をすりへらす努力を続け、それなりに成果を上げて来たのであるが、お互いにその力によって他方を制圧する力はなく、又お互いに他方を受け入れる能力も余力も持ち合わせていない。宗教も哲学も如何に愛や慈悲を説き、又双方の統合の理論を打ち立てても、権力と金力を駆使する生存競争の世の中を改心させ極楽浄土や神の国を建設することは出来なかつた。原爆実験に反対して実験の海に乗り入れた精神主義者のフェニックス号も何の効果も上げ

ことは出来なかつた。他方世界の物質科学と金・権力も、薄明かりの中でしか真理を見ることの出来ない「月夜見」の領域である宗教の世界が死守している人間の人間性を完全に押しつぶすわけには行かなかつた。物質共産主義の国家の中でもキリスト教会は個人の自由として存続しているのである。金木音図の半分である主基田の宗教哲学の言い分からすれば、人類の精神的な幸福は光輝いているはずである。人間は既にもつと善良な社会を手に行っているはずである。しかしそうではなかつた。一方悠紀田の物質科学の成果は限らない便利を提供してくれた。しかしそれによって人間は仕事の中で追い廻され命をすりへらす結果となつている。月読と須佐男の並存の状態はもうこれ以上続いても如何なる解決もないことを人々は知り始めているのである。

以上のことを前置きに大嘗祭の説明に入ろう。古事記の三権分立の宣言に示されるように、月読命の宗教・哲学・芸術の活動も須佐男命の物質科学・産業経済の分野も、天照大神である言霊原理による道徳政治の中に於て共存することによって初めて人類の福祉を円満に増進させることが出来るものである。宗教・芸術は天照大神の言霊原理を論

理的に説明し、原理の自覚に至る修練の指導に当たることによって「附き読み」としての任務を全うすることが出来る。物質科学・産業は天照大神の精神文明に新しく物質文明の成果を提供することによって初めて幸福のための科学となる。須佐男とは主である天照大神を佐ける男とも訓むことが出来る。三権分立しながら三権が共存することによって人間社会は完璧な発展を期待されるのである。

太古日本の天皇(スメラミコト)は言霊原理の体得者として、その原理による道徳政治の実行者として天照大神と一体であった。この状態を三種の神器と天皇との同床共殿という。神倭朝十代崇神天皇の時この制度は廃止され、言霊の原理は伊勢神宮の奥深く神として祀られた。言霊の原理は世の表面から隠されたのである。理由は精神の第一文明について第二の文明である物質文明の創造を促進するのに必要な生存競争の世の中を出現させるためであった。天皇は大神と一体である座から下り、大神を祭る神主の長となられたのである。天照大神と同一体である立場から大神を拜む立場に下られたのである。しかし世の中がどのように変わろうとも、天皇の地位がどうなるうとも、古事記に示された天照大神・月読命・須佐男命の三権分立の体制は、

人類が文明を創造していく上で必要なものであるから、天皇は一年に一度は、又一代のうちで一度は天照大神と一体となるべきことを宮中の儀式の形で後世に残したのであった。それが年に一度の新嘗祭の儀式であり、特に新天皇が即位に際して一代に一度挙行される大嘗祭なのである。天皇はこの儀式の役目になり切ることによって天照大神との一体化を試みる行事である。

大嘗祭で神に供えられる稲は何を意味するのか。稲はイの音である。人間精神の自覚の進化は母音ウオアエイの次の順序で行われる。最上段のイ次元は生命意志の世界であり、そこに把握され自覚されるのがイの音であるコトタマである。稲とはコトタマの表徴である。三権分立の決定の時、三人の御子にそれぞれの領分を決められたが、天照大神にのみ御頸珠の玉が授けられた。言霊の原理は天照大神の独占である。稲を取り扱うのは天照大神の役目である。天皇は悠紀殿にいる須佐男命に悠紀田で採れた稲を供える。ということは悠紀田の領域で発展しつつある物質科学・産業経済の独走に対して天照大神のコトタマの原理をもつて三権分立のあるべき姿に帰れと諭される姿である。又主基田の稲を主基田の月読命に供えられることも、哲学・

宗教のあるべき姿を原理の光の下に明確に示されることである。言霊の原理は忘却され、天照大神は岩戸の奥に隠れ、月読・須佐男の二権の独走は飽くまで三千年間の物質文明創造のための仮そめの世の中の方便なのであって、時来たらば天照大神は表に現れ、言霊原理の下に再び三権分立・共存の世の中が来ることを示す黙示が大嘗祭である。しかも天皇は供えられた稲を自らも食され、相当の時間悠紀殿・主基殿にお留まりになると聞く。天皇御自身本来は言霊の原理を自覚され、天照大神と一体であるべきことを形の上で示されるのである。この場合稲は言霊を、そして天照大神を表徴していることが了解されるであろう。以上言霊学の立場から大嘗祭の意義を説明した。

言霊原理が隠された仮そめの世の三千年の間に科学・産業は今日見るが如く目覚ましい発達を遂げた。月読と須佐男の二権分立からはもう何の得ることがないことも見極められた。今こそ天照大神の出現、言霊の自覚者の誕生が切望され、又その絶対の時である。そして天皇家は、大嘗祭の儀式の黙示の如く崇神天皇以前のコトタマの自覚を持ったスメラミコトに帰られる時かとも思われた。しかしすんなりとそうはならないことも今では明瞭である。三権分立を

再び人類の上に復元させるためにはまだ幾多の紆余曲折が予想される。昭和二十一年一月現天皇(昭和天皇)は古事記の神話を一切否定され人間天皇を宣言された。神話の否定は大嘗祭の意義の否定であり、真理の復活を予想して遺された皇室の儀式による型一切の否定である。天皇の詔勅の取り消しは決してない。大嘗祭や剣璽渡御の儀などが現状の中でもし行われるとするならば、それは何の意味も持たぬ茶番劇というより他はない。

この問題について日本の国民はどのように考えたらよいのか。現天皇(昭和天皇)による古事記神話と天皇位との関係の否定、人間天皇の宣言は神武天皇より現天皇まで百二十四代続いた神倭皇朝の役割が終わったことを告げたものである。又神話の否定宣言は天皇の御自覚があったか否かに関係なく、神話の形で黙示されていた言霊の原理が、伊勢神宮や宮中の賢所に天皇家の宝として秘蔵されていた状態から民間へ、又世界へ靈的に解放されたことと解釈することが出来る。皇室は三千年にわたる神器の秘蔵の役目を終えられ、精神の宝であり三種の神器に表徴されるアイウエオ五十音の言霊原理の研究は広く一般社会に開放されたのである。それ故人間精神の根本原理は誰でも、少なくとも

も日本語を話すことが出来る人なら誰もが一個の人間として研究修得することが可能となった。事実明治天皇から言の葉の誠の道の名で始まったこの原理の復元・解明は、現天皇の人間天皇宣言以来人間精神の生きた構造の原理として哲学的にも心理学的にも理解出来るように急速に解明が進んだのである。

最後に言霊学からする一つの願望を述べよう。皇室御一家の中から、またはそれに近い人々の中から、唯一個人の資格で、全人類の中の一員という自覚の下に五十音言霊学を勉強され、日本の皇室が幾千年にわたって継承・実行されてきた伝統の真の意義を知る方の出現することを期待したいものである。この事が人間天皇宣言を生かす唯一つの道だからである。その出現が現実となるならば、その方は単に日本のスメラミコトというだけでなく、旧約聖書にある「世界は一の言^{ことば}であった」と時と同様に世界のスメラミコトとして、キリスト世紀にかわる新しい世紀を建設する責任者(靈知り)となられるはずである。これは単なる夢ではない。人類が過去三千年間方便によって言霊ウオアの三次元のみに局限されていた知識の束縛から解放され、言霊エ(英智)と言霊イ(コトタマ)の二次元を加えた人間の五つの

全性能を自覚した立場から見れば、当然の一つの結論なのである。(詳しくは「統言霊」歴史編皇室の将来の章を参照下さい)

【収載】第五号(昭和六十三年十一月)

●春の七草

せり・なづな・ごぎょう・はこべら・ほとけのざ・すずな・すずしろといえは春の七草である。正月邪気を祓うとして七草粥を作って食べる。実はこの行事は、隠されたコトタマの原理を後世に黙示するために広められた習慣である。すずなは鈴である人間の口から発する言葉の名でコトタマのこと、すずしろはコトバが耕される代^{しろ}で言霊図のこと。なづなは名の綱で、五十音図は名(コトタマ)が綱のように横に連なっている。ごぎょうは五行を意味し、アイウエオ五母音のことで、宇宙の五つの次元を表す。せりは選^えるで、言霊エである英智の働きを示す。はこべらは運ぶ、運用するの意。コトタマ五十音を選び、運用して行くと最後に仏の座である最高の道德の鏡を表す天津太祝詞音図が完成する。

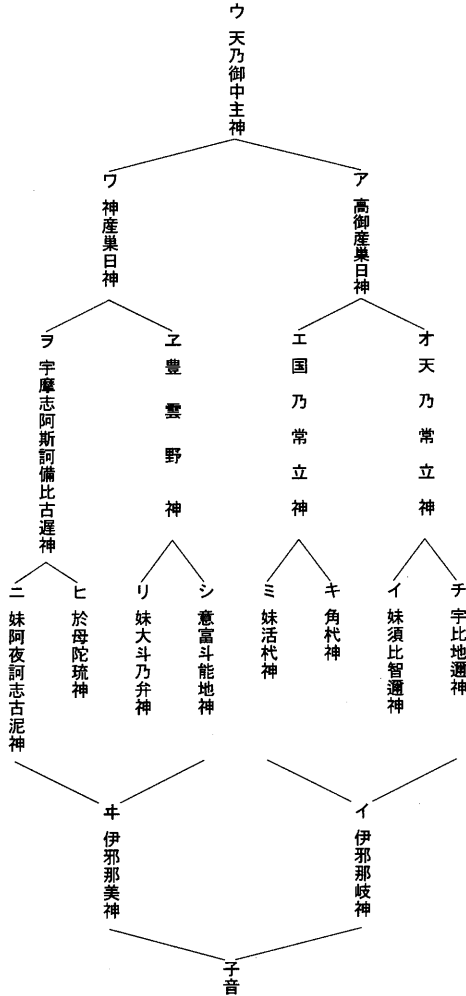
七草粥で新年をことほぎ、精神の七草・言霊原理をもつて三千年の闇夜の邪気を祓って「梅で開いて松でおさめる（大本教お筆先）」新しい世紀を創造することが現代日本人の使命である。

【収載】第五号（昭和六十三年十一月）

●新年の行事について

師走も中半をすぎ新年を迎えるのも間近となった。そこで私達日本人の古くからの伝統として何気なく行っている数々の新年の行事について、更めて日本語を造った原典である言霊の原理の立場から解説を試み

図 006-A



ることしよう。私達の遠い祖先が民族の宝である言霊の原理を後々の代までも伝えようとした意図の合理性に頭が下がるものがある。

言霊の原理というのは、日常普通に生きている人間が頭の中である思いが起こり、言葉として発声する今・此処の瞬間の心の構造を言霊の配列でもって表したものである。言葉として発声してしまえば現象は既に現れている。現象

以前には頭脳中でどんな操作が行われているのだろうか。

この先天構造は十七個の言霊によって示される。昔の人は天津磐境と呼んだ。磐境とは五葉坂の意であり、五段階の言葉の構造をしている(図006・A)。

さて一月は年の始めである。人々は旧年のいろいろな思いを大晦日でご破算にし、一月一日からの新しい年を新しい心で始めようと思う。この新しい思いに言寄せて言霊の原理を伝統行事として後世に遺そうとしたのが新年の行事である。新年の行事として一月中に六回の祝事がある。一日、三日、七日、十一日、十五日、二十日であり、それぞれの日取りが言霊の原理に係している。一つ一つ説明して行こう。

一日(元日)

一は物事のはじまりである。この一から物事を考えようとする。物事の真実は把握することが難しい。一の前は何か。ゼロである。何も無いことである。ゼロを知って一を考えると物事の真実がよく分かってくる。例を挙げる。テレビドラマによくあることだが、若者が一人希望に燃えて地方から大都会に出て来る。しかし都会のあまりの大きさ、恐

ろしいほどの雑踏に圧倒されて心細くなり、希望どころか自分の存在すら吹き飛んでしまいそうな孤独感におそわれる。自分とは何と小さい存在だったことか。絶望感に泣き出したくなる。若者の心はゼロに帰る。その時それまで会ったこともない人の親切を受け、若者の心に微かではあるが温かい希望が甦って来る。若者の最初の希望は胸ふくらむ希望である。甦った来た希望は小さいけれど感謝に包まれ地に足がついたものである。

この心の経緯は心の先天構造を説明するのによく適っているように思われる。何の現象も起こらない時、宇宙は正に空虚である。そこに何かが生まれて来る。何か分からないうが、何かのエネルギーの突出である。現象の芽となる始めの動きといったらよいであろうか。この存在を言霊ウと名付ける。それは丁度若者がはつきり何をしたいという目的がないが、しかし何かをせずにはいられない気持ちで都会に出て来るのに似ている。胸ふくらむ希望であり欲望であるが、自分が社会の何であるか、何か方法を持っているかも知らない。うづきうごく欲望の世界、これが言霊ウである。幼稚ではあるが人間の初発の性能ということが出来る。人間が物心つく始まりでもある。この現象として起こ

ろうとする初めの動きが心の先天構造の第一の段階である。天津磐境（五葉坂）の最初の坂である。一月元日というのはこの最初の心のステップを表徴した行事である。

古事記神代巻はこの最初の心の動きである言霊ウを表示するのに天の御中主の神という神名を用いている。宇宙の中の一点、それは宇宙が無限大であるから一点がどこにあるろうと、その一点の動きのある処が宇宙の中心である。天の御中主の神とは宇宙の真中にある主人公たる意識の働きといった意味である。それは正に徒手空拳ただうづく希望だけに身をまかせて都会に出て来る若者の心そのままではないか。唯決意を新たに一日中何もしない状態、元日はそのようにして過ぎて行く。

三日

先天構造の第二段階までに言霊ウ・ア・ワの三個が現われる。この三数を表徴するのが正月三日の行事である。再び若者の心を見ることにしよう。胸ふくらませる「俺が」という希望も都会の巨大さに押しつぶされて、シュンとしてしまふ。大都会の中の孤独を味わう。自我は消え入るばかりである。今までの希望の空虚感に絶望する。その時名も知

らぬ行きずりの人のちよつとした親切と励ましの言葉に合う。若者の絶望した心に一点の灯がともる。人生は甘くはない。けれど無常な風ばかりではなく、温かさもある。若者に新しい勇気が湧いて来る。なんだか分からないがやらずにはいられぬ野望（言霊ウ）は、初めて飛び込んだ大都会という対象物（言霊ワ）の巨大さのうちひしがれ、絶望して空漠たる精神の空虚に帰り、そこで何かの心温まるものに触れて社会という対象に向き合っているわれ（言霊ア）に気付く。このようにして心の宇宙の何もない処に以上のウーワーアの三つが芽生えること、それが心の全ての現象の始めである。ゼロの宇宙から一、二、三が生まれ出て物の息吹が始まったことになる。

古事記は右に述べた言霊ア（主体となる宇宙）を高御産巢日の神といい、言霊ワ（対象となる客体の宇宙）を神産巢日の神と称している。主体と客体はお互いに噛み合い結び合つて（カミムスビ）後の現象を産んでゆく霊（働き）がある。その時高御産巢日（タカミムスビ）と神産巢日（カミムスビ）の両者は高御産巢日の方の頭にての一字が多いだけが相違している。タとは田であり、言霊を耕す田、即ち五十音言霊図の自覚のことである。主体のアには創造の自覚がある

が、客体のワはその自覚を持たず、主体の呼びかけに唯受身で応答するのみであることを示している。言靈ワ・ア・ワが揃うと創造の気配が動き出す。そこで天の御中主神・高御産巢日の神・神産巢日の神の三神を造化三神と呼ぶ。古代中国の老子は「一、二を生じ、二、三を生じ、三、万物を生ず」と数の理でこの消息を説いている。三つが揃って現象を生む気配が出て来る。正月も三日になると人々は今年の計について考え始めるのである。

七日

心の先天図の第三段はオ・エ・ヲ・エの四個の言靈が並ぶ。三段階までの合計数は七である。七日正月はこの七を表示した行事である。更に先の若者の心について検討しよう。社会(言靈ワ)に対してほのぼのとした自己意識(言靈ア)を回復した若者は、初めの無鉄砲な野望ではなく、小さいけれど足下を見た第一歩を社会の中に踏み出そうとする。さてどうしたらよいか。この時先ず心に浮かぶのは自分の過去である。どの学問が得意だったか。生かせる趣味はあるか。性格はどうだろう。又自分が職を見つけるとすると世の中にはどんな仕事があるのか。このように自分の

持っている過去の知識を思い起こそうとする主体の心の世界、これが言靈オである。それに対して思い起こされる客体の心の世界が言靈ヲである。

過去の知識・経験が思い出されると、次にそれらの中から、どれとどれとを選んだらよいか、が問題となる。この知識を生かしてこの仕事が出来たのではないか。自分の性格としてそれをやり通せるか。このように言靈ヲの中から今・此処で必要なものを取りだし、選ぶ心の主体の世界が言靈エである。そして選ばれる客体となる心の世界が言靈オである。一般には経験や知識の関連の合理性を求める言靈オと、その経験の中から適当なものを選び出す合目的性の言靈エとを混同する人が多いが、実は全く違った人間の性能なのである。

言靈オのことを古事記は天の常立の神、言靈エを国の常立の神、言靈ヲを宇摩志阿斯訶備比古遲の神、言靈エを豊雲野の神と表示している。経験の合理性を求める言靈オとは自然の宇宙(天)が恒常に(常)に成立する(立)言靈(神)であり、その間に応答する言靈ヲとは、古事記に「葦牙のごと萌え騰る物に因りて成りませる神」と説明されているように、葦の芽(阿斯訶備)のように何処までも連鎖上に

連がりながら関連性を持った靈妙な(宇摩志)実体(比古)ということである。この宇宙から、現象を概念の関連性で説明しようとする学問一般が現われ成立することが理解されるであろう。この関連性のことを昔の人は生命の玉の緒と呼んだ。玉の緒が切れた時が人間の死である。

合目的性の選択の心である言靈エは国家(国)が恒常に(常)成立する(立)の実体(神)であり、その客体である言靈エは十四個の言靈(豊)を組んだ(雲)分野(野)の実体(神)の意である。十四個とは「アイウエオ、ワ、ヒチキミリイニ」という先天構造の中の基本的十四言靈を意味する。この説明は紙数の関係で省略するが、日本国の古い名である豊葦原の瑞穂の国の豊も同じ語源を持っている。又古事記は先天構造の第三段までに現われる七つの神を隠り神と呼ぶ。現象としては全く姿を現わすことなく、そこから現象が現われて来る元の世界である実在という意味である。形あるものはその中に眠っているともいえる。実際に正月七日頃までは正月気分が残って、実活動の意欲はまだ少なからず眠っているようである。

正月七日には七草粥を食べる習慣が古くからある。春の七草とは「せり なづな ごぎょう はこべら ほとけのぎ

すずな すずしろ」である。七草の名それぞれは言靈の原理に關係するよう選ばれている。それぞれの名の示す意味については会報前号に載せてあるからここでは省略する。

十一日

正月十一日の行事を鏡開きという。物事はそれが始まる発端から終焉まで十の経過がある。これも前号(第五号)で述べたことであるが、その経過を数え確かめるのに手の指十本を使う。事物の推移を一つ二つと指を折って調べ、十指が全部握られた時、物事の法則が掌握されたこととなる。これを握手即ち幣という。全体の法則を把握した規範である鏡が出来上がる。この法則を社会に適用しようとする場合には、法則として握られた十本の指を一本ずつ起こして行くこととなる。起手であり掬という。十一とは十指で把握した鏡の法則を最初の一として起こし始めた数である。社会活動の始まりである。鏡開きの意味は以上である。

十五日

正月十五日は小豆粥の祝いの行事である。心の先天図の第四段はヒチキミリイニの八つの父韻が並ぶ。第四段ま

での言霊の数の合計は十五となる。十五日の祝はこれに依っている。八父韻とは何なのであろうか。又先の若者の心に戻ろう。言霊オとエが現れて自分の過去の知識・経験が検討され、今食べていくのに必要な道はここにしようとの選択が出来た。しかしそれだけでは実行に移れない。実行するには決定を実現する手段が必要である。言霊の母音の宇宙というのは現象が現れて来る大本の世界であるから、それ自体は大自然の實在である。それから現象を起こし、創造行為を始めるためには人間の側からの働きかけが要る。それは生命創造意思の現れである人間の意志のリズム父韻の仕事である。意志が母音實在に働きかけるリズムに八つの型がある。それをヒチシキミリイニの八つの父韻で表す。今までに現われて来た四つの母音に八つの父韻が働きかけて八掛ける四で三十二の子音(現象)が生まれることになる。

古事記は八つの父韻のそれぞれに神の名を付け、父韻の八つのリズムを暗示している。その詳細については当会発行の「言霊」の書を参照頂きたい。今は唯父韻を黙示している神の名を挙げるにとどめることとする。宇比地うひぢの神・チ、妹須比智いもすひぢの神・イ、角杵つのかい神・キ、妹活杵いもいくち神・ミ、意富斗能地いふとのかみ

神・シ、妹大斗乃いもおとのか弁神・リ、於母陀おちだる琉神・ヒ、妹阿夜いもあや訶志古あやしこ泥神・ニ、である。ここで付け加えたいことは、八父韻とは今・此処の一瞬の人間の意志の働きの八通りの型であり、人間の意志の動き方はこれ以外にはない。この意志の根本的な動き方を概念に換えて説いたのが中国の易の八卦―乾兌離震巽坎艮坤―である。

正月十五日の小正月に小豆粥を食べる理由は何か。これも古事記に依っている。古事記は神話の形式によるアイウエオ五十音言霊の原理の教科書であり参考書である。人間の心の宇宙は言霊五十音から構成されているが、それら五十音のそれぞれが心の宇宙に占める位置も確認されている。古事記はその位置を鳥の名前で、黙示している。八つの父韻については始めは筑紫の鳥といい、後にもう一度確認して「次に小豆あずき島を生みたまひき」と書いてある。明らかに(あ) 続つづく(う) 気き(き) の縄張り(しま) の意である。言霊五十音図に於いて八父韻は横に並んで向かって右の母音(発端)と左の半母音(終結)を結び、初めから終に至る経路の有様を明らかに示すのである。小豆島の意義を後世に遺すために定められた小豆粥の習慣の意義を了解されるであろう。

二十日

人間が言葉を発する以前、頭の中でどの様なことが起こったかという心の先天構造を順序を追って説明してきた。

正月の行事とはその先天構造の言霊原理の黙示である。そして正月の行事もこの二十日で終わる。先天構造の最後の第五段には生命創造意志である言霊イ・キが出て来る。初めの無鉄砲な野望(ウ)が都会の大きさ(対称ワ)に会ってくじかれ、ささやかな自分(主体ア)に気付き、自分の経験(オ)の中から適当な生き方(エ)を選び出し、それを実現する手段(八父韻・ヒチシキミリイニ)に思いをめぐらした。そして最後の創造意志が「いざ」と現われて、実行の活動が始まることとなる。古事記は言霊イに伊邪那岐の神、言霊キに伊邪那美の神と黙示している。いざと十六番目に出て来るから十六夜をいざよいと言うことは前号(第三号)で述べた。第五段にイ・キが出て先天構造は十七個の言霊の出現で完成される。それなら何故正月の最後の行事は十七日ではなく二十日に行なわれるのであろうか。

先天構造は第五段の言霊イ・キで完成され、これより三十二の子音実相が生み出される。先天と合わせて四十九と

なる。この四十九を神代文字で表わす要素一を加えて合計五十個である。更にその五十個の言霊の操作法を合わせ、総合計百となる。言霊の原理は全部で百の道であり、百道が即ち鏡餅が出来る。この要素と操作法の全部の原理を古人は五十のコトタマ布斗麻邇と呼んだ。それは心の先天構造の天津磐境と結論である天津神籬から成り立っている。二十は「ふと」と読める。正月の行事はすべて言霊原理の黙示であることを伝えようとして、正月最後の行事を二十日に定め、布斗麻邇を表徴したのである。古代の日本人の知恵を偲ぶことが出来る。尚後世布斗麻邇を太占と書いて吉凶の占いの意味となった。言霊の原理は人事百般の基本であるから、未来の予言に応用することも可能であるためであろう。

以上昔から伝統の正月行事について言霊学の立場から説明して来た。それは単に故事来歴を明らかにする為ではない。私達が日常何気なく使っている言葉が発せられている、その根本的なメカニズムを知ることが、今日のように複雑化した世の中を人間が住みよい社会にするために最も重要と考えるからである。言葉は諸文化の基本である。しかし口は禍の元とも言われる。幸いに我々日本人は言葉と魂が

一つになつてゐる言靈ことばたまの原理によつて出来てゐる日本語を持つてゐる。「口は幸福の元」とするために是非とも日本語の真髓を知つて頂きたいものである。

ここで歴史学者に提案がある。古事記の撰録者は太の朝臣安萬侶あそみやすまろである。近年その墓が発掘され実在の人物であつたことが確認された。本会報で毎号説いてゐるように、古事記神代卷は単なる神話でも歴史書でもなく、神々の名前とその行為の形を取つた言靈原理の教科書なのである。撰録者安萬侶は原理を熟知してゐたからこそ古事記の編纂が可能だつたわけである。言靈原理を布斗麻邇ふとという。それ故太の安萬侶の太の字は「おほ」と読まず「ふと」と読むのが妥当ではなからうか。ご一考を願う次第である。

正月の行事の次に正月の祝いに用ゐる飾り物の意義について述べよう。まずは贈物につける鬘斗まゆたうから始めよう。鬘斗はのしあわびの略である。四角形の色紙を細長く、上は広く下は狭く六角形に作り、ひだをつけて折りたたみ、中に「のしあわび」を細く小さく切つたのを張り付けたものであり、贈物に添える。鬘斗は古代の両刃の劍つるぎの形である。劍は物事を断ち(太刀)切つて分析し、それを再び総合し劍

「連氣れんき」して行なう人間の判断力を表徴してゐる。言靈で言えばアイウエオ五母音の自覚が自己の内に確立された姿である。あわびはアとワの靈たまの黙示である。アは我であり、ワは汝である。靈たまとは我と汝を結び渡す父韻を意味してゐる。そこでのしあわびを贈物に付ける意味は剣である自分の判断力即ち自分の生命全体を挙げて、私(ア)と貴方(ワ)との精神的交流(ヒ)を希望します、という願望を贈物に込める印なのである。

次は松竹梅の門松である。梅は先に説明したように万有(ウ)の芽めを意味してゐる。心の先天構造の始めの動きであり、言靈法則の第一を表徴してゐる。松は陰陽・水火むくはを示す。松の葉は根本が一つで二本に分かれる。先天図のウからアとワが分かれる二段の法則を表わしてゐる。「三千世界、一度に開く梅の花、梅で開いて松でおさめる神国の代が来るぞ」とは大本教開祖出口なお女史のお筆先である。先天図の第一・二段で言靈原理全体を代表させ、言靈の原理で世界の政治が運用される世の中が来ることを予言したものである。竹は田氣たけを意味する。田は五十音言靈図。その氣きであるから音図を埋める五十音の言靈のこと。昔皇室のことを竹の園生そんせいと呼んだ。中国前漢の時、梁の孝王の御

園を竹園と称した故事から、皇族の異称と説明されているが、実は田気である言霊の原理によって世を知らしめす天皇の園即ち皇室又は皇族の意である。門松は言霊原理を表徴する松竹梅を門口に立て、今年が名実共に佳き年であることを願ったものである。

正月の飾りで最も豪華なのは床の間の蓬萊である。最近正式な飾りをする家は極めて少なくなった。その島台は富士山を象つて日本の国土を表わし、そこに住む高砂の尉と姥を画く。高砂は高いさごの略。砂が高くなって丘のようになった所。富士山である。尉と姥とは万物の創造神である伊邪那岐・美の二神のことである。ここで少々祝言能のことを付け加えよう。高砂とは昔播磨の国(兵庫県)の地名。この地の名物である「高砂の松」は、黒松と赤松が根本で合わさったもので、又一名「相生の松」と呼ばれ、相生が相老に通じることから祝言能「高砂」が作られた。そしてこの能に真似て松に老翁・老婦・つる・かめの形を画いて祝賀のことに使われるようになったのである。根本が一つに合わさる黒松・赤松の相生はウアアの言霊の最初の法則を表わし、つるとは剣であり、かめとは御鏡(亀鑑)を黙示したものである。

島台に置かれる鏡餅は百個の言霊の道で百道を意味し、上が五十個の言霊、下が五十の操作法で紅白に重ねられる。鏡餅の下に敷かれる裏白は白い方が裏になるようにする。白とは儒教では白法といわれ、仏教では言辭の相と呼ばれる言霊原理のことである。この三千年間の間言霊の原理が裏に隠れて表面に出ないこと、即ち天の岩戸隠れを黙示している。昆布と馬尾藻(ほんだわら)の海藻は沖津藻葉・

辺津藻葉で百葉である言霊を表徴している。沖津は起こす意で陽性音の母音を、辺津は遠い意で陰性音の半母音を黙示している。柿は神気を、海老は慧靈(エ言霊)を示し、電光形に作られた紙の幣は人間の知性のひらめきである父顔を形取っている。麻を飾るのは、人間の最高道徳の精神構造の鏡(八咫鏡)の内容である言霊図の上段の配列アタカマハラナヤサを表徴したものである。

最後には注連繩について話そう。標繩・七五三繩とも書く。実際には尻(知)九目繩の略である。繩は左捻りで、三筋・五筋・七筋と順次にわたらの茎をより放して垂れ下げ、その間に紙の幣を下げて作る。標の字が示すように、宗教的には浄・不浄の場を区別するために張り巡らす繩(結界)である。精神の原理の上で見れば、時と場所の違いで如何よう

にも解釈される概念の言葉の世界と、見誤ることのない実相のそなわった言葉の世界とを分け隔てる境界線を意味する。何をもって境界とするかとなると、

七五三繩又は知九目繩の名前がそれを説明している。(図 006・B 参照) 図は数学の魔法陣で縦横斜めどのように足しても数が十五となる。この図を中国の易は洛書と呼ぶ。真ん中の五をわれに見立てる。五の口で吾とはうまい作字である。吾の廻りを八つの数が取り巻く。易でいえば八卦、言霊では八つの父韻を数に置き換えたものである。父韻というのは吾である母音と汝である半母音を結んで現象を生む人間意志のリズムである。縦横斜めどの足し算も同数となるということは、吾の主体と汝の客体とが順序正しい父韻の配列で結ばれていることを示している。父韻の配列が正しければ、三十二子音の実相が明らかかな時と処に叶った現象が生み出される。失敗も迷いも起こらない。父韻の正しい配列ということを数字の配列に置き換え、特に図の中央を横に結ぶ七五三に代表させて七五三繩で境界を意味させ、注連繩と名付けたのである。であるから境界線を

図 006-B

四	九	二
三	五	七
八	一	六

形成するのは、一見して見誤ることのない実相音である三十二の子音である。図の九つの目が明らかかな結び方の故に、

知九目繩と書く。繩の語源は名和である。繩に垂らす幣は父韻を表わす。この名和が張られた内側は五十音霊の幸倍う高天原であり、外側は言葉の曖昧なために常に争いの絶えない三千年の現実社会を意味している。

【収載】第六号 (昭和六十三年)

平成
元年

●日本のおとぎ話

今から二千年の昔、物質科学文明の進歩を促進するため
に精神文明のエッセンスである言霊の原理は日本人の意識
の底に隠されてしまった。崇神天皇によって三種の神器と
天皇との同床共殿の制度の廃止が行なわれたのがその現わ
れである。同時に将来物質文明が完成に近づいた時、再び
言霊の原理が日本人の脳裏によりがえり、物質文明の原理
と共に車の両輪となって、人類の新しい時代を建設するた
めの準備として種々の施策が講じられた。私達が子供の頃
母親から聞かされたおとぎ話もその施策の一つであるとい
ったら驚かれる方も多いことであろう。

大切な教えを後の世に遺そうとする時、書物として保存
することは考えられる第一の手段である。しかし秦の始皇
帝の焚書の例もある。母から子へ、そして又母から子へ童
話として語り伝えて行くことは或は最も確実な保存の方法
なのかも知れない。日本に伝わる桃太郎や舌切り雀・花咲
爺などのおとぎ話は、実はアイウエオ五十音の言霊の原理
を巧みに内容に盛り込んだ譬え話なのである。そのおとぎ
話のいくつかの作者は平安時代の学者菅原道真だという説

がある。今に天神様と尊敬され、学問の神様と讃えられる
菅公ならば、と肯かれる。因みに学ぶの語源は真名・真奈
で五十音言霊のことである。これより有名なおとぎ話のい
くつかについて、著者の言霊学の師故小笠原孝次氏より教
えられた所に基づいて説明して行こう。請う、ご期待であ
る。

【収載】第八号（平成元年二月）

●桃太郎

昔ある処におじいさんとおばあさんが居ました。おじい
さんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。
川上から大きな桃が一つ流れて来ました。持って帰ってそ
の桃を割ると中からかわいい男の子が出て来ました。桃か
ら生まれたので桃太郎と名付けました。桃太郎はすくすく
と成長して立派な若者になりました。ある日桃太郎は「こ
れから鬼ヶ島へ鬼退治に行つて来ます」と申しました。お
じいさんとおばあさんは日本一の黍団子を作つてお弁当に
持たし励ましました。途中で犬・猿・雉・（熊）が黍団子を
貰つて家来となりました。そして勇んで鬼ヶ島に乗り込み

悪い赤鬼・青鬼をさんざんに懲らしめました。鬼達は終に降参し、もう悪いことは致しませんと言つて自分達の宝物を全部差し出しました。桃太郎は家来と共にその宝物を持つておじいさんとおばあさんの所へ帰りました。めでたし、めでたし。

出来れば古事記神代巻を参考にして頂きたい。おじいさんとおばあさんの名前を伊邪那岐神・伊邪那美神という。創造主であり、言霊の神である。おじいさんは山へ柴刈りに行った。山とは八間で、人間の知性が現われる大本のリズムのこと。柴は霊葉で人間の霊性を表わす要素の言葉の意味で五十音の言霊のことである。おばあさんは川で洗濯した。川の名を筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原の川の瀬という。洗濯とは禊祓のことである。言霊の数は五十個、その五十個の言霊をどのように並べたら人間精神の完全な鏡が出来るかの操作手順が五十あり、この手順を禊祓という。合わせて百の原理である。川から桃が流れて来るとは禊祓によつて百(桃)の原理が出来上がること。正月の鏡餅(百道)も同じことの表徴である。桃の中から桃太郎が生まれるとはこの百個の原理を理解し、これを運用する人が生まれたということである。百個の人間生命の根本原理

で人類の歴史を創造して行く実行者である。古事記の「黄泉国」の章に「伊邪那岐命、桃子に告りたまはく、汝吾を助けしがごと葦原の中つ国にあらゆる現しき青人草の、苦き瀬に落ちて、苦しむむ時に助けてよと告りたまひて、意富加牟豆美命と云う名を賜ひき」とある。梅若の狂言にある「桃太郎」は伝説の桃太郎のことで、その中でシテの桃太郎はみずから意富加牟豆美命と名乗る。大いなる神の稜威の身という意味で、言霊の鏡に基づいて歴史を創造する神である天照大御神のことを示している。

桃太郎は健やかに成人となり、鬼ヶ島を征伐しに行く。鬼のおは言霊オのことで、物事の関連性(緒・尾)を調べること、鬼のにはその関連性を学問として第二次的にまとめて行くことで、そこから科学・産業の世界が展開して来る。それは古事記に示される須佐男命の支配する世界であり、人類に素晴らしい便利な生活の道具(宝物)を実現した。と同時に権力闘争の道具に使われ、戦争による生命の危険・人心の荒廃・公害の発生をももたらした。何時までもこの宝物を鬼の独専の手に委せておくわけにはゆかない。天照大御神の生命の原理の中に取り込まなければならぬ。おじいさんとおばあさんは黍団子を作つて桃太郎に持た

せた。黍とは伊邪那岐・美の岐美である。古事記のなかで岐美二神の結婚によって生まれて来るのは、三十二の実相の単位である言靈子音であり、円満玲瓏な言靈の玉(団子)である。百個の言靈によって組織された人間精神の完成体の鏡に照らし合わせることによって、初めて科学の成果を人類の福祉に奉仕させることが出来ることとなる。桃太郎から黍団子を貰って犬(言靈イ)、猿(言靈ウ)、雉(言靈オ)そして熊(言靈ア)が家来となってお供をした(現在は熊が省略されている)。仏教で言えば仏陀に従う四天王のことである。この場合桃太郎は原理(言靈ア)に基づいて言靈ウオア(欲望・経験知・感情)を自由に操作する実践智である言靈エに当たる。

かくて桃太郎は四天王を従えて鬼ヶ島に乗り込み鬼たちを征伐した。物欲と権力闘争に明け暮れしている世の中に姿を現し、言靈の原理を高く掲げて世の矛盾を解消し、鬼ヶ島の宝物である科学文明の利器が人類全体の幸福な生活に役立つ恒久平和の世界を実現させた。桃太郎の凱旋である。めでたし、めでたしというわけである。以上桃太郎のおとぎ話は現代の科学文明が完成に近づいた時、その科学文明と数千年以前すでに完成されている精神文明のエッセ

ンスである言靈原理とが相携えて人類の新しい第三の文明を創造する様相を予言した譬え話だということが出来る。

【収載】第八号 (平成元年二月)

●舌切り雀(日本のおとぎ話 二)

むかしむかしあるところにおじいさんとおばあさんがいました。家の竹藪では雀が大勢楽しく暮らしていました。ある日おじいさんの留守の時におばあさんの作った糊を雀が食べました。怒ったおばあさんは雀の舌を切ってしまいました。舌を切られた雀は泣きながら唐の竹藪に逃げて行って、そこでがやがやとしがない暮らしを続けたのです。やがておじいさんが雀のいる竹藪へ久しぶりに訪ねて来ました。雀達は大喜びでおじいさんにご馳走し、帰りにお土産にといいって軽い竹箆と重い竹箆を出しました。おじいさんは軽い方を貰って帰り、開けてみますと宝物が沢山出て来ました。それを聞いたおばあさんが出掛けて行って重い竹籠を貰って帰り、開けて見ると汚いものや妖怪が沢山飛び出して来ました、とさ。……

雀は必ず人家の近くにゐる。そのことから国民民衆の意味に譬えられる。「舌切り雀」の雀の語源は鈴埋めである。伊勢神宮を五十鈴の宮という。鈴は人間の口の形で言葉のことであり、特に五十鈴といへば五十音の言霊を示す。五十音言霊をそれぞれの魂の中に埋めて頂き、五十音言霊を組み合わせた神の国の言葉である古代大和言葉を使って生活しているのが日本民族である。おじいさんとは古代精神文明華やかであった時、五十音言霊の原理に基づいて政治を行っていた日本の天皇(スメラミコト)のこと、おばあさんとは日本の政治家・学者・宗教家と解釈する。古代天皇(スメラミコト)の治世の下に日本の国民は楽しく何の不安もなく暮らすことが出来たのであった。

おじいさんが留守の時雀がおばあさんの作った糊を食べてしまった。この短い文章は歴史的に哲学的に深い意味が含まれている。先ずおじいさんが留守をした、ということとは、言葉がそのまま物事の真実である五十音言霊の原理に基づいて政治を行う責任者であった日本天皇がいなくなった、ということである。実際には神倭朝第十代の崇神天皇による三種の神器の同床共殿制度の廃止であり、それまで天皇の政治の鏡であった五十音言霊の原理を信仰の対象と

して伊勢神宮に神として祀って、その真理の実体を日本人の意識の表面から隠してしまったことである。日本人は次第に言霊の原理があるということすら忘れてしまうようになる。

次におばあさんは糊を作った。大道廢れて仁義あり、という言葉がある。人間が人間精神の構造を知り、その構造が示す行為の手順をしっかりと理解しているならば、人として行うべき道についての教え(仁)や、人間社会の道徳の教え(義)などは特別に定める必要はない。大道である言霊の原理が隠されてしまった結果、第二次的な手段としておばあさんである世の政治家・学者・宗教家は国民の守るべき教えとして則(法律)・教(教科書)・典(宗教)を作ったことである。人間生命の深奥に達した人(聖)がいれば、世の中に難解な法律など必要はない。法則は簡単なほど生きたく働きをする。人間の魂が曇って来れば来るほど、事細かな法律を作って悪を制限する必要が生じて来るわけである。実はおばあさんはそれらの教えを作ったのではなく、印度、中国、朝鮮などから輸入したのである。儒教・仏教それに下つてはキリスト教などである。

雀はその糊(教)を食べた結果、次第に上古の大和言葉の

原理である神の言葉を話せなくなってしまう。日本国民は舌を切られ、借り物の外国の考え方によって生きるよりほか道はなくなつたのである。泣く泣く唐(外国)の竹藪に逃げて行って弱肉強食の世の中のしがない生活を送ることとなつた。現代までの日本人のことである。

二千年の歲月が流れた。昔雀が楽しく竹藪で遊ぶことが出来た時のおじいさんが久し振りに雀を訪ねて来た。言葉の原理が復活し、その原理を把持して政治を行う人が国民の前に姿を現したのである。おじいさんを迎え雀達はいそいそ喜んでご馳走し、雀踊りを踊って歓迎した。雀踊りとは古事記にある天之岩戸の前の天之宇受売命(あめのみうすめのみこと)の神楽舞のことである。

おじいさんは雀からお土産に軽い竹箆を貰って帰った。開いてみると宝物が沢山入っていた。それを見たおばあさんは真似をして出掛けていって重い竹箆を貰って来た。開いて見ると汚いものや恐ろしい妖怪が飛び出して来た。ツヅラとは綴つづること、言葉を綴り合わせて文明を創造・運営して行くことである。軽いツヅラとは一音一音が実相の最小単位である五十音言葉の言葉の原理であり、一音が即真実であるから廻りくどい解釈も必要なく、意見の衝突も

起こらない。人間の魂が自由自在に表現される軽い綴りである。それを開くと人間生命の原理に則つて物質文明を自由にコントロールして人類に福祉をもたらす色々な方策が現れて来る。それに引き換え重いツヅラとは重苦しい哲学概念や希望的観測による真実を遠くに見る学説や理論である。それを開けると解釈の相違による紛争や戦争という厄介な化け物が飛び出して来る。この竹箆のことをギリシャ神話ではバンドラの箱という。ジュピターがプロメシウスに贈つた禍の箱である。中には宗教的・哲学的・道徳的概念理論が一杯に詰まっている。

以上舌切り雀の話は古事記の天照大神の岩戸隠れと岩戸開きを説明しているのである。

【収載】第九号(平成元年三月)

●浦島太郎(日本のおとぎ話 三)

浦島太郎は海辺で亀を助けました。亀は御札にと行って浦島太郎を背中に乗せて海の中の竜宮城へ連れて行きました。竜宮では乙姫を始め大勢の人達に迎えられ、毎日大歓迎の宴会が開かれ、その楽しさについて三年が過ぎました。

ある日浦島太郎は乙姫に「長い間おもてなしを頂きましたが、故郷に帰らせて頂きたい」と申しました。「それは名残惜しい」と言つて乙姫はお土産に玉手箱を下さり、「この箱は決して開けてはなりません」と言いました。浦島太郎は再び亀の背に乗り故郷の海辺に帰り着きましたが、元の友達や知人は皆死んでしまつていて、村には知らない人ばかりです。途方に暮れた浦島太郎は開けると言われた玉手箱の蓋を開けたのです。すると中から白い煙が立ち昇つて、浦島太郎はいっぺんに白髪のおじいさんになつてしまいました、とさ。……

このおとぎ話は昔現実にあつた歴史的事実を基とし、それに言霊の原理を織り交ぜた絶妙な物語である。先ず話の基となつた歴史的事実から始めよう。

紀元前二百二十一年秦の始皇帝が天下を統一し秦の皇統を二世より万世に伝えようと計画した。そのために皇帝はお氣に入りの家臣徐福という占い師(方士)に童男童女大勢を与えて、沢山の船を備え、何年かかつても東方の国にあると伝えられる「不老不死の仙薬」を見つけて持つてくるようにと命令した。徐福は航海の末日本の熊野に上陸した。神倭朝第七代孝霊天皇の御代のことと伝えられている。東

方の国の仙薬とは何か。中国の古書「列子湯問第五」に次の如く書かれている。

渤海の東、幾億万里なるを知らず、大谷有り。実に惟れ底無きの谷なり。その下底無し。名づけて帰墟ききよという。八紘九野の水、天漢の流れ、之に注がざるは莫なきに、増すこと無く減ること無し、其の中に五山有り。一に曰く、岱輿たいよ。二に曰く、員仄えんせつ。三に曰く、方壺ほうこ。四に曰く、瀛洲えいしゅう。五に曰く、蓬萊ほうらい。其の山、高下周旋三万里。……珠汗しゅかんの樹皆叢生そうせいし、華実皆滋味有り。之を食くえば、皆老いず死なず。居る所の人は、皆仙聖の種にして、一日一夕、飛んで往来する者、数かずう可からず。

始皇帝は右の東方の五山にある不老不死の仙薬を求めたのである。ここで話は言霊の原理のことに、そして日本の歴史のことに移る。右の列子の文の中の仙聖とは仙人と聖人のことである。大和言葉で仙人のことを「やまひと」とい、聖人のことを『ひじり(靈知れいち)』という。『やまひと』とは山に住む人の意味ではない。やまは八間である(図010、B)。この図形は人間の心の先天構造を表わす。中心の間に自分という自覚が入る。とすると廻りの八つの間(八間)

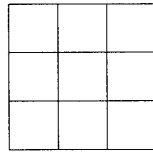
には人間の自我が周囲のものに働きかけて現象を起こす人間知性の根本リズム八種類が入る。言霊学で言うヒチシキミリイニの八つの父韻である。この八個の根本知性を知っている人を古代ではやまひとと呼んだ。知性の八つのリズムがウオアエの四つの母音宇宙に働きかけて現象の単位である三十二の子音を産む。先天の母音・父韻と後天の子音の夫々を言霊又は霊と呼ぶ。この人間の心の全体の構造を知覚している人を霊を知る人の意で霊知り

(聖)と呼ぶ。アイウエオ五十音言霊で示される人間精神の構造原理は人種・民族の如何を問わず、人間が人間という種である限り永久に変わることのない天壤無窮の真理であり、この原理に基づく政治は万世一系に変わるこ

とのない恒久平和の世を実現可能にするものである。このことから列子湯問篇に書かれ、秦の始皇帝が秦朝を万代に安定させようとして求めた不老不死の仙薬とは、実は古代日本の建国の原理であるアイウエオ五十音・三種の神器の原理であったことが了解されるのである。

民間に伝わる秘められた古代史(竹内文献等)によれば、人間の心の構造を表し日本語を作る法則でもあるアイウエ

図 010-B



オ五十音言霊の学によってこの日本が建国されて以来、霊知りによる政治の世が続いた。この間ニニギ皇朝、日子穗穗出見皇朝が相次いで興り、日子穗穗出見皇朝の時精神文化はその極みに達した。精神(日)の所産の文化(子)の実りの穂(穂穗)が豊に現れた(出見)時代である。次に興った鶴草葺不合皇朝は精神文化の爛熟期であり、同時に物質文化の芽が吹き出した時代でもあった。物質文化(ウ

神屋)がまだ発達していない(葺不合)時代という意味である。そしてこの皇朝の末期に至り、霊知りによる政治の方針を大きく変える決定が下されたのであった。それまでの精神文化について物質文化の促進を第一の目標とする方針である。そのために計画された施策が精神文明の

基礎である五十音言霊の原理を、物質科学文明が完成されるまでの期間世の人々の意識表面から完全に隠してしまうことであった(この間の経緯についての詳細は「古事記と言霊」歴史編参照のこと)。この方針の実行のために新しく興されたのが神武天皇に始まる神倭皇朝である。そして実行に移したのは第十代崇神天皇であった。秦の始皇帝の命を受け不老不死の仙薬であるアイウエオ五十音言霊の原理を

求めて方士徐福が来朝したのは、原理を隠してしまふ計画が実行に移されようとする寸前の第七代孝靈天皇の時である。

以上の靈知りによる政治の原理が存在したと、それによつて歴史的事実を背景にして浦島太郎のおとぎ話を考へて行こう。

「春の日の霞める時に ぼきの 孝にい
で居て 釣舟の とどろう見れば 古の
事ぞ念ほゆる 水の江の 浦島の見が
堅魚釣り……」(万葉集一七四〇)

昔徐福の来朝は外交上の大問題であつた為か、万葉集始め其の他の歌集に「浦島の子」の歌として取り上げられている。浦島太郎の浦は裏に通じる。古代日本は言靈の幸倍う国即ち靈の国であり日本の国であつた。表の国である。これに対し外国は夜見国、常夜の国、月読国で裏の国である。ここでは中国のこと。裏の島の太郎であるから中国の思想の本筋を受け嗣いでいる人という意味である。

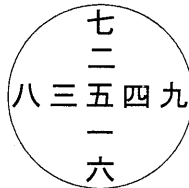
中国の易経に「河・凶を出し、洛・書を出して、聖人こ

図 010-C

洛書

四	九	二
三	五	七
八	一	六

河図



れに則る(周易繁辭上傳)とある。河とは黄河、洛は洛水のこと。中国の古代の王であつた伏羲は黄河から出た神馬の模様によつて八卦を画し、禹王は洛水を治めて神龜を得て、その背中の模様によつて易の基本の法則を作つたと伝説にある。それ故易をもつて吉凶を占うことを龜卜といふ。浦島太郎が龜の背に乗つたと言ふことは易経の原理を体得した徐福が、と言ふことと同じ意味である。

何をしに……。五十音言靈の原理のうち、その先天構造を天津磐境といい、後天の構造を天津神籬という。この先天と後天の言靈の原理をそれぞれ数に置き換えて日本から中国に伝えたものが河図であり、洛書である(図010-C参照)。徐福が東を目指したと、浦島太郎が龜に乗つて海に出たのは、不老不死の仙薬といわれ龜卜の法則の基礎であるアイウエオ五十音の言靈原理を求めて竜宮へ、日本へ来たのである。

海とは産むの意。人類社会の文化を産んでいく現象の底に原理の殿堂である竜宮がある。その原理とは何であり、存在する場所は何処であるか、古代の世界

の人々は知っていたのである。竜宮とは竜の宮の意。竜は性で事物の性質のことを示す。この性質は何から生まれてくるか。易では乾兌離震巽坎艮坤の八卦の概念で示し、その概念の大本は言霊ヒチシキミリニの八つの父韻である。日本に伝わる三種の神器の曲玉を八性の曲玉というのもその意味である。この原理である珠玉の宝物のあるところが竜宮城である。

浦島太郎は竜宮の乙姫始め大勢の人の歓迎もてなしを受けた。そして浦島は夢心地になり、思わず三年の月日を過ごしてしまった……。乙姫とは音秘の謎である。人間の精神の構造を創造意志の法則として捉え、その実体を言葉の原理として把握し、それを秘め蔵しているの意味である。それ故竜宮とは日本のことであり、又日本の当時の皇室のことでもある。そして乙姫とは上古の靈知り天皇のことを意味している。当時の中国は日本のことを東海の姫氏国とも呼んでいた。姫は秘めに通じる。そこにある五山(列子)とは日本の松島、天橋立、高千穂、興津清見瀨、富士山の五か所のことである。そこに住む仙聖の不老長寿の薬である五十音言霊の原理を徐福浦島は日本の皇室に請求したのである。

請求を受けた日本皇室は困惑した。これが昔の日子穂穂出見か鶴草葺不合朝の時であつたならば、日本皇室は生命の原理の保有者として、その原理を世界各民族の神話や哲学・宗教の形に鑄直して世界各地に教伝するのが仕事であつた。しかし時は移り今神倭朝第七代孝靈天皇の時には、言霊の原理を隠してしまふ大方針が第一代神武天皇の時に決定され、その政策が現実に実施されようとする寸前の時である。天皇は五十音原理の実行者ではなく、音を秘める乙姫とならうとする時期である。徐福の要求に応じて日本伝統の原理を教えるわけには行かない。しかし世界の強國秦を相手に無碍に断わることも出来ない。かくて浦島太郎を迎えた竜宮城は連日連夜の歓迎の宴が開かれた。実は歓迎どころか要求に対する答えを一日延ばしに延ばす苦肉の策である。

浦島は宴会せめの思わぬ三年を過ごした。そしていよいよ故郷に帰ることとなつた。乙姫は竜宮城のお土産として玉手箱を「決して開けることのないよう」と言つて浦島に与えた。浦島は長い間のもてなしを感謝し、別れを惜しみながら再び亀の背に乗つて故郷に帰つて行つた。しかし竜宮である日本の皇室は何事もなく浦島徐福を送り返し事態を

乗り切ることが出来たことに胸をなで下ろしたことである。物語には乙姫と浦島とはお互いに名残を惜しんだとあるが、実は全く反対のことを表わすための皮肉の修飾である。

玉手箱とは寶石を入れておく小さな箱である。玉とは言霊のことを言う。また埴土箱ともいう。言霊を埴土(粘土板)に記して焼いたものの箱ということ。言霊を昔麻邇(まに)といった。皇室の立太子の儀式に『まな垂の儀』というのがある。ヘブライの神宝に黄金のmana壺がある。皆同じ意義のものを示している。玉手箱をまた玉匣ともいった。この玉匣の言葉は「蓋」または「明ける」の枕詞となった。時代が下がって奈良・平安の時代となり、玉匣を明けるとは男女関係の肉体の蓋を開けることに転化した。

恋いつつも今日はあらめど玉匣明けなむあすをいかで暮さむ(万葉集) 玉匣三室戸山の狭名葛さ寝ずば遂に有りかつましじ(万葉集) 明けながら年ふることは玉匣身のいたづらになればなりけり(後選集)

まことに優雅な表現であるが、玉手箱の本来の意味は言霊の埴土札を入れる箱であり、それを開けば人間生命意志の構造をそのまま言葉として表わした人類永遠の真理が入

っている。神武天皇以後の世界文明経営の大方針によって今はもう開いてはいけない時である。物質文明が完成に近づくまでは玉手箱は封印しておかなければならない。その中身を知ることが出来た人は全面的に公表してはならないことをも知っていたのである。聖徳太子や役行者・弘法・菅原道真そして日蓮も仏教・儒教その他神社神道等に事寄せて真理の存在を暗示しただけであった。乙姫が浦島に与えた玉手箱は、中に入るべき言霊の麻邇名を抜いた空っぽの箱であったのである。

浦島太郎は再び故郷の土を踏んだ。しかしその故郷の浜辺には元の住家も知っている人も亡くなっていた。浦島が竜宮で遊んでいた三年とは実はそれはそれは長い年月であったのだ。途方にくれた浦島が開けることを乙姫から固く禁じられて来た玉手箱の蓋をとってみると、中から白い煙が立ち上って中には何も入っていなかった。浦島は忽ち白髪の老人となってしまったのである。

徐福が故国に帰り着いた時は、彼の主人秦の始皇帝は既にこの世になく、秦の僅々数十年の政治は終わっていた。日本から持ち帰った土産物からは、不老長寿の仙薬麻邇の原理の実体を見つけることが出来なかったのである。後世

日本の歌人はこの事件を笑って次のように歌っている。

百千たび浦島の子は帰るとも蕨姑射の山はとききはなるべき(千載集) 常世辺に住むべきものを剣刀おのが行からおそよこの君(万葉集)

始めの歌にあるはこやの山とは方壺山と列子にある日本の高千穂の峰のことである。言霊五十音を並べて精神の理想構造を立体的に図形化する時、これを高千穂の奇振嶽と昔呼んだ。浦島徐福が幾度求めて来ても、言霊の原理は教えませんよ、ということである。次の歌は万葉集浦島の子の歌の反歌として詠まれたものであり、常世辺すなわち外国に住んでいればよいものを、判断力の根本原理を求めて日本にやって来て失敗した愚かな人よ、と徐福を笑った歌ということが出来る。

秦朝の命令を受けて徐福が来朝した出来事があったて以来、二千二百年の歲月が過ぎた。その間に玉手箱や不老不死の仙薬のことも、天壤無窮・萬世一系といわれる言霊原理のことも、中国人は勿論当の日本人すら全く忘れ去ってしまった。しかし言霊原理の謎を含んだおとぎ話は母から子へ、母から子へと語り継がれ、皇祖玄宗の経綸の定める如く真の玉手箱の蓋が二十世紀に入って開かれ、生命の主

体性である創造意志の法則・原理が世界に公表され、その原理に従って人類の新しい文明創造の歴史が始まろうとしているのである。

(このおとぎ話の解説の大筋は小笠原孝次氏の所説に拠る)

【収載】第十号(平成元年四月)

●猿蟹合戦(日本のおとぎ話 四)

蟹がむすびを持っていました。そこへ柿の種を持った猿が来て交換してくれと頼みました。猿は手に入れたむすびをすぐに食べてしまいました。蟹は柿の種を播いて大切に育てました。柿の木は見事に大きくなり、実が実りました。そこへ猿がやってきて身を取ってやろうと言って木に登り、おいしい柿の実は自分で食べてしまい、青い柿を蟹に投げつけて殺してしまいました。蟹の子が悲しんでいるところへ蜂と栗と白が来て「よし仇を討ってやろう」と言いました。そして力を合わせて猿を懲らしめ改心させました、とさ。……

蟹は神似である。何故神に似ているか。昔神といえは言霊構造のことであった。それは人間生命の構造であり法則

であり、人間はそれによって生きるからである。五十音言靈図のうちアオウエイ、ワヲウエキの母音・半母音をそれぞれ蟹の左右二本の手に、キシチヒミリイニの八つの父韻を八本の脚に見立てると蟹の体型は言靈図に似ている。蟹は神似である。猿は古事記で国津神の猿田彦として出て来る。猿を申(もうす)と書くと言葉の意味である。申とは国津神の言葉の意である。古事記にある天津神の言葉というのは言靈の原理に則って制定された言葉を示している。仏教で「仏の言葉は異なることなし」といわれ、キリスト教で「はじめ世界は一つの言葉であった」と説かれた。人間の思考の先天と後天が言靈の原理によってきちんと整った言葉のことである。それに対し国津神の言葉とは発生したままの洗練されていない無秩序で無法則の言葉という意味である。

次に柿の種とは神気の意で、これもまた言葉のことである。むすびとは古事記にある高御産靈・神産靈等の産靈を示し、父韻と母音を結んで子音現象を産む言靈布斗麻邇の法則のことである。猿は蟹からもらったむすびを食べてしまった、ということは蟹から教えられた言靈による産靈の法則を聞きかじっただけで忘れてしまったことである。

しかし蟹は猿から貰った柿の種を大切に育てた、ということとは無秩序・無法則な世界のいろいろな言葉を、自分の姿である布斗麻邇の法則に会わせて洗練し育てていったのである。

やがて見事な柿の実が実った。整理された言葉の文化が現出した。言靈の原理に基づいて造られた言葉による人類社会が出現した。けれどそこへまた猿がやって来て、熟した甘い実は自分が食べ、未熟な渋柿を蟹に投げて殺してしまった。蟹が猿に殺されることが今日までの二千年間の人類の宿業である。その宿業をキリスト教では原罪と呼ぶ。生まれながらにして人間が背負っている罪である。個人の所為では決して解消することが出来ない罪である。「エホバ言いたまひけるは視よ民は一にして皆一の言語を用ふ。今既に此を為し始めたり……去来我等降り彼処にて彼等の言語を消し互に言語を通ずることを得ざらしめんと エホバ遂に彼等を彼処より全地の表面に散らしたまひければ……是故にその名はバベル(淆乱)と呼ぶる」(創世記第十一章)。聖書は人間の精神の原理である人類唯一の言葉が乱れたことを以上のように表現している。同様のことを古事記では「速須佐男命…勝さびに天照大神の宮田の畦離ち、

その溝埋め……(天の岩戸の章)と書いている。天照大神が耕す田とは言霊五十音が入る五十音図のことである。速須佐男命が五十音図の畦を取り払ったり、溝を埋めたりして言霊で出来上がっている大和言葉の原理を乱したという意味である。言葉が乱れることから人の心はお互いに完全な理解が困難となり、いろいろな犯罪が起こって来る。大本の言葉を乱す罪(原罪)を神道では天津罪といい、それが原因で発生して来る社会全般の罪を国津罪と呼んでいる。

殺された蟹の子が嘆き悲しんでいるところへ蜂と栗と曰が尋ねて来て敵討ちを約束しました。蜂とは「蜂の比礼」という神代文字のこと。比礼は霊頭で、言葉を頭わすものは文字である。神代文字はすべて言霊の原理・法則に則って作られている。栗とは繰るの意で、順々に数えること。言霊の操作運用法の意である。曰は餅を搗く道具である。餅は百道で言霊の数五十、その運用法五十、合計百個の原理を表わす。正月の紅白二段の鏡餅はその百個の原理を表徴したものである。

曰はその鏡餅を搗く道具であると同時に、その鏡餅の内容をも表している。古事記神代巻は言霊原理の教科書であって、神様の名前を連ねて言霊を示している。最初の天乃

御中主神・言霊ウから火之迦具土神・言霊ンまで丁度五十神・五十言霊が揃い人間の精神要素五十個を表している。

次の五十の神名は言霊の操作法を表し、合計百神が出揃ったところで言霊の神である伊邪那岐・美二神の仕事は終わる。日本書紀にはこの状況を次のように述べている。「是の後に伊弉諾尊・神功既に竟へたまひて靈運当遷、是を以て幽宮を淡路の洲に構り、寂然長く隠れましき」。言霊を自覚する始まりは天御中主・ウであり、百神全部が出揃って自覚が完成し伊邪那岐神が永久に隠られる宮は淡路の洲(巢・澄・静・皇)である。このウからスで言霊原理の内容は全部整う。曰とは以上のことを意味している。曰は餅(百道)を搗く道具であると同時に鏡餅の内容でもある。

蜂は神代文字、栗は言霊の操作、曰は言霊原理の全内容と検討してくると、この三つとは蟹(神似)である言霊の原理(布斗麻邇)の更に詳細な内容ということになる。この三者が協力して猿を散々に懲らしめ、降参させて改心させ、蟹の敵討ちをした。現在三千年の暗黒の闇の中から蘇って来た人間性の正当な言葉の原理を、不完全な色々な言語がもう再び消滅することがないこととなる。蟹は平和に自分の

産靈ウツロを食べ、精神と物質の両原理を兼ね備えた人類の新しい文明の創造を開始することとなる。

おとぎ話は猿を懲らしめる有様を詳しく伝えてある。蜂

は猿をチクリと刺し、栗は囲炉裏いろりから跳ねて猿に火傷を負わせ、白は待ちかまえて猿の上に馬乗りになり、抑えつけて謝らせた、とある。このことは現在通用している言葉による社会の運営が行き詰まり、生命構造そのものである神似の言葉が世に復活する時の状況を鋭く示唆しているように思われる。現在まで日本の上古には文字が存在せず、いわゆる神代文字というものは後世の偽作であるというのが通説である。しかし蜂が猿をチクリと刺すということは、近い将来動かし難い事実として蜂の比喩といわれる神代文字が発掘されることを暗示している。現代の学説を文字通りチクリと刺すこととなる。次に栗が跳ねて猿に火傷を負わせる。栗である精神の運用法がその独特の力を發揮して、生命とは言葉であることを広く世に知らせることになるであろう事の示唆である。そして最後に白が猿を抑えつける。生命即言葉の原理と不完全な言葉の論理とが全面的に比較討論の場に取り上げられ、その結果世界の一の言葉として言霊布斗麻邇の原理が精神的世界憲章となることの暗示

である。

【収載】第十一号（平成元年五月）

●花咲爺はなをかじい（日本のおとぎ話 五）

正直なおじいさんと欲張りのおじいさんが居ました。正直じいさんの飼っている犬が裏の畑で「ワンワン」と鳴いて土を掘れといえます。そこを掘ってみると宝物が沢山出て来ました。それを見た欲張りじいさんは犬を無理に借りて行き、犬の鳴いた処を掘ると汚いものが沢山出て来ました。怒った欲張りじいさんは犬を殺してしまいました。悲しんだ正直じいさんは犬を地に埋めて、その後に松の木を植えました。その松はずんずん大きく育ちました。正直じいさんはその松で臼を作り餅をつくともた宝物が沢山出て来ました。欲張りじいさんが臼を借りて餅をつくともた汚いものが出ましたので、怒って臼を割って焼いてしまいました。正直じいさんがその灰を集めて撒くと枯木に花が咲き殿様から褒められました。欲張りじいさんが真似をしてその灰を撒きますと、咲いている花は枯れ、人々の目や鼻に入ると苦しめましたので、殿様からきつく叱られてしまいました。

た、とさ。……

このおとぎ話は精神原理である布斗麻邇と物質的原理の研究との対比の物語である。正直じいさんは言霊イ(言霊原理)と言霊エ(道徳)を操作運用する人、欲張りじいさんは言霊ウ(産業・経済)と言霊オ(学問・科学)を運営する人と解く。犬はイ奴である。イは言霊であるから犬とは言霊布斗麻邇を人に見立てた時の、その召使ということになる。畑はその領域・分野のこと。正直じいさんが畑で犬の示す所を掘ると宝物が出て来た。言霊の原理に則って政治を行うと精神文化の花が咲き、平和な社会が現れて来る。

しかし魂が言霊ウとオの境涯に限定されて生きている欲張りじいさんがその段階の法則に基づいて物事を運営すると、その意に反して汚いものが沢山現れて来る。言霊ウは欲望の世界であり、言霊オは経験知である。その人は物質面だけまたは自分の個人的経験知でしか物事を見ることが出来ない。人類社会の永遠の福祉という見地は起き去られている。個人の見解が集る所には必ず意見の衝突が起る。度を超した競争が始る。精神的な物質的な禍が現れて来る。今日の政治・経済状況を見れば瞭然である。物質主体の考えが増加するに随って言霊のことは忘れられて行く。

犬は殺されてしまった。

正直じいさんは殺された犬を懇ろに葬って埋め、その上に松の木を植えた。その松が育つと、それで臼を作って餅を搗いた。宝物が沢山出て来た。松はその葉が元から二本に分れる形によって陰陽を表す。物事の真相は先ず主体と客体に分れて分析しなければ明らかとならない。と同時に分析して明らかになったものを再び総合して、元の姿に組立てた時、初めて人間はその真相を把握したことになる。これをまつり(祭・政・真釣)と呼ぶ。臼は「猿蟹合戦」の項で述べたように、言霊ウからスにいたる言霊の百個の原理(百道・鏡餅)のことで、言霊布斗麻邇の内容を譬え示している。百道の前半を五十鈴宮(伊勢)といい、後半を五十神(石上神宮)と呼ぶ。正直じいさんが臼で餅を搗く即ち言霊の原理に則って政治を行うと人類の調和のとれた精神的施策が次々に打出されてくる。ところが欲張りじいさんが真似て餅を搗くと、物質的欲望に偏した政策は悪政と公害を招来することとなった。欲張りじいさんは怒って臼を焼いてしまった。

正直じいさんがその臼の灰を集めて撒いたら枯木に美しい花を咲かせることが出来た。欲張りじいさんがまた真似

をしてその灰を撒いたら咲いている花も枯れ、人々の目や鼻に入って悩ましたので、殿様から敵く叱られた……。灰は葉霊で言霊のことである。言葉の言葉であり、生命即言葉の法則である。これを撒くとは言霊の法則に基づいて広く世界に施策を行うことである。この原理によれば三千年の闇を破って蘇って来た精神の原理と、今や完成に近づいている物質の原理とを総合した人類の第三文明の花が咲き恒久平和がもたらされる。しかし欲張りじいさんが言霊ウとオのみを操作して物質優先の施策を行うならば、とどのつまり世界戦争となり核爆弾が人類の上に降注ぎ、花ばかりか人間そのものが絶滅してしまふ。欲張りじいさんの撒く灰は放射能の「死の灰」である。このおとぎ話の作者は実際にそのことを予想して書いたのであろうか。誠に現代に於いて見ると恐ろしくも的確な預言となつてゐる。

「雑感」出雲風土記意宇郡の章に「八束水臣津野命……今は国引訖えぬと詔りたまひて意宇の杜に御杖衝き立てて、意恵と詔ひき」とある。水臣津野命は須佐男命の系統の神である。御杖とは人間天与の判断力、軍隊で言えば指揮刀である。意宇とは言霊オ(科学)とウ(産業)のこと。国引と

は世界統一である。大国主即ちエホバ神(神選民族)が科学与産業を手段として世界統一を成就する時が近づいた。左程遠くない将来には実現する。その時「意恵」と言う。統一後の人類はオウからオエ(道徳)に精神転換する。二十一世紀は科学与道徳の時代である。科学に法則がある如く道徳にも法則がある。日本語の中に秘められた言霊布斗麻邇である。

【収載】第十二号(平成元年六月)

●カチカチ山(日本のおとぎ話 六)

昔ある処でおじいさんが悪さをする狸を捕まえて家の軒先に吊るしました。狸はおじいさんの留守におばあさんをだまして殺し、自分がおばあさんに化けて死んだおばあさんの肉を狸汁といつておじいさんに食べさせました。そこで狸は正体を現わし「ばば食ったじよ。流しの下の骨を見る」と悪口を吐きながら山へ逃げて行ってしまいました。おばあさんの骨を見て嘆き悲しんでいるおじいさんの処に兎が訪ねて来ました。話を聞いて兎はおばあさんの仇討ちをする約束をしました。早速兎は山に狸を訪ねていっしょ

に柴刈りに行こうと誘いました。柴を背負って帰る途中、兎は狸の後ろでカチカチと火打ち石を打ちました。狸が怪しんでたずねると「ここはカチカチ山ですよ」と答えます。そのうちに狸の背中の柴に火がついてぼうぼうと燃え出しました。狸は大やけどをしました。翌日狸が痛がって寝ていると兎が薬売りになって来て、狸の背中に唐辛子を塗ったので狸はいっそう苦しみました。次に兎は狸を誘って川へ魚を釣りに出掛けました。兎は木の船、狸は泥の船に乗りました。泥船は水に溶けて狸は溺れ死にました。兎はおばあさんの仇を討ちました、とさ……。

かちかち山のおとぎ話は言霊の原理と宗教と科学との関係にまつわる人類の歴史の粗筋を予想した予言的物語である。さておじいさんは上古の日本の天皇、おばあさんは日本の政治家や学者と見ると話の筋が通る。ここでこの物語の主役の一人である狸の意味について考えて見よう。狸親爺かみおやじという言葉がある。ずるがしこい老人という意味であるが、「あの狸親爺」と蔑む言葉の中に「世事にたけて案内に真実をついて来る老人」という気持ちが含まれている。狸を一名マミという。東京に狸穴まみあなという地名がある。マミは真実まみで真実・実相じんじつということ。誰が見ても納得する事物

の実相を意味している。仏教では諸法空相・諸法実相と説明し、禪坊主は「柳は緑、花は紅くはな」などと洒落た表現をする。「菜の花や 月は東に 日は西に」と俳句は動かし難い実相を詠む。

また狸は田抜きの意である。かけそばの上に揚げ玉をのせたものを狸そばという。揚げ玉とは天ぷらの中身が抜けたものである。そこで田抜きの田とは肝腎な内容の意を示している。その内容とは何か。ここで言霊の問題に入る。天照大神は伊勢の裂口代五十鈴宮にまつられる神である。裂口代は鈴の枕詞。鈴は人間の口を開けた形で言葉のことを意味している。五十の鈴であるからアイウエオ五十音の言霊のことである。言霊五十音には先天である父母音十七と後天である三十三相が揃っていて、人間本来の自由な発想から現象を創造してゆく過程が全て明示されている。五十音図は四角形に区切られて、丁度田の形である。古事記では天照大神は菅田かんだを耕していらつしやる。言霊図を運用して歴史を創造しているということである。そこで田抜きとは肝腎な言霊の原理を欠如しているという意味である。以上のことからこの物語の狸というのは物事の実相は説くが、それを自由に操作運用・整理して歴史を創造して行く

能力のない思想ということである。ここでは主として仏教である。仏教は慈悲を説き魂の救済は説くが、そこからは歴史を創造する自由な発想は出て来ない。

二千年以前崇神天皇によって精神の法則である言霊の原理が人々の意識から隠されてしまつて以来、国民の心の支えとしてこの狸である仏教が輸入された。特に聖徳太子以後は盛んになった。おばあさんである日本の政治家や学者はそれまでは言霊の原理の操作による政治運営に精を出していたが、輸入された仏教思想によって次第に洗脳されて行つた。おばあさんは殺されてしまつた、のである。こうして奈良朝・平安朝と時代が進むにつれ狸の思想がおばあさんの頭に入り込み、おばあさんに化けてしまつた。即ち仏教は古神道に代わつて日本の国教となり、天照大神は実は奈良東大寺の大日如来なのだと言われ、聖武天皇は自らを「三宝の奴」(三宝は仏・法・僧のこと)と称するまでになつた。おじいさんがおばあさんの肉を食わされた、という事になる。役行者や菅原道真などの古神道に明るい人々が排斥されたのである。

狸が去つた後に流しの下におばあさんの骨が散乱していた。下の図形(図013・A)を聖書では「アダムの肋骨」という。

言霊原理の象徴であるが、その図形の中に言霊が書き入れられることよつて初めて人間の精神構造を表わす言霊図が出来るのであるが、骨組みだけでは実体が分からない。これが同床共殿の制度が廃止され言

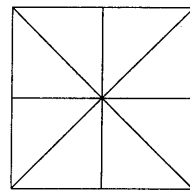
霊の原理が隠されてしまつた以後の日本神道の姿である。神道にはいろいろな儀式がある。神殿の構造にも意味がある。

皆言霊の原理を表徴しているもののだが、その意義を神主自身知ることなく唯猿芝居をしている。おばあさんの死骸の骨を大切に昔を偲んでいるのが現在までの神道である。

こうして悪たれをたきながら狸は山へ逃げて行つた。

今なおこの山の名は有名である。高野山金剛峰寺、比叡山延暦寺、身延山久遠寺などである。それら山の中では狸入道が緋や紫の衣を着て、般若湯に顔を赤くして、ふんぞり返つて世の中の戦乱の世相にただ手をこまねくだけで暮らして来た。このような表現は何も仏教をけなすために言っているのではない。言霊の原理が隠され、聖や仏がこの

図 013-A



世にいなくなつた仏教でいう像法・末法の世の真実の姿であり、歴史の現実なのである。

骨になつてしまつたおばあさんの姿を見て嘆き悲しんでいるおじいさんの所へ兎が訪ねて来た。そして殺されたおばあさんの敵討ちをすることをおじいさんに約束した。……ここで兎が登場した。古事記では兎は大國主命の章で「稲葉の白兎」として出て来る。兎は有裂うつよの意である。ウとは五感で捉えられる世界のこと。その世界に存在する万有を裂く即ち分析してその構造や性質を説明しようとするとして、一般に科学のことである。この科学を表徴する兎の出現でこのおとぎ話の主題である三千年にわたる日本と世界の文明創造の主役が全て揃うこととなつた。第一の主役は日本の古神道である言霊原理の自覚者・日本の天皇であり、第二は言霊原理が隠された後創世された宗教(仏教)であり、第三の主役は物質世界の真理を究明する科学である。古事記はそれら主役のそれぞれの精神構造を神の名前で表現している。第一の言霊原理の運用の精神に天照大神、第二の宗教・哲学の精神は月読命つきよみ、第三の科学精神に須佐男命である。この三者の三つ巴の葛藤が日本と世界のここ三千年の歴史を織りなして行くこととなる。

兎は山に狸を訪ねて、柴刈りに誘つた。めいめい柴を背負つて山道を行きながら兎は狸の後ろでカチカチと火打ち石を打つた。狸があやしむと兎は「ここはカチカチ山だ」と答えた。狸の背中に火がついて大火傷を負つた。……柴とは桃太郎のところにも出て来たが、霊葉むすぶの詛りである。言霊または言葉の道理を意味する。カチカチ山とは神の道の山の意で、兎と狸がカチカチ山へ柴刈りに行つたとは、物事の真理を探る競争を兎の科学と狸の宗教・哲学がしたということである。言霊の原理が隠されてから二千年、世界の文明は宗教と科学によつて造られて来た。初めのうちは宗教の方が断然優位であつた。ガリレオが地動説を説いてキリスト教会の厳しい宗教裁判を受けたことは有名な話である。

しかし時代が進み科学の進歩が早まるにつれて、社会の主導精神は宗教・哲学から科学の手に移つて行つた。科学は精神の霊たまではない物質の火を次々に発見して行つた。木を焚く火から第二の電気でんきの火、そして第三の原始の火を点すまでになつた。この原始の火の発見によつて従来の社会や国際政治の様相が一変することとなつた。そのすべてが兎の科学の進歩によつて狸の宗教・哲学の社会に対する指

導力を日一日と低下させて行く原因となる。

狸が火傷で苦しんでいるところへ兎が菓売りになつて見舞いに来て、狸の火傷に唐辛子を塗つたので狸はますます苦しんだ。……唐辛子の唐は中国を越えた広く西洋の諸国と考えると、唐辛子とは近代物質科学ということにならう。近代科学の成果が生んだ巨大な軍備競争、ハイテクの開発による人間生命意識の変革などに対して、仏教を始めとする各宗教や哲学が何らの指導や影響を与えることが出来な
いでいる。狸の混迷はますます深くなつて行く。

次に兎は狸を誘つて魚釣りに行つた。兎は木の船に乗り、狸は泥の船に乗つた。泥の船は水に溶けて沈み狸は溺れ死んでしまつた。こうして兎は首尾よくおばあさんの敵討ちをしたのでした。……むかしは魚をナと言つた。岩魚いわいそなどに今でもその名が残されている。魚なは名なの表徴である。物事の眞実の姿を発見して、これに見合つた名前を付けること、これが物事の道理を極めることである。兎と狸が魚釣りをしたとは前述と同じく科学と宗教・哲学の眞理探究競争である。科学には発見した眞実を一定の言葉と数式で表現する正確さがある。科学の眞理は発見者以外の人でも、その示された方法と数に従つて実験すれば何時でも同じよ

うな結果が得られる。それに対し宗教・哲学などは全てその眞実を表現するのに比喻や概念を使う。それらは人によつて解釈が違つて来る。「以心伝心」と言つて分かる人だけが分かればよい、といった態度である。表現の正確さということで宗教・哲学は科学に到底太刀打ち出来ない。宗教の墮落・哲学の貧困が叫ばれる昨今である。

こうして社会の科学的な近代化が進むにつれて、世の中の指導精神としての宗教・哲学の力は狸の泥の船のように水の底に沈んでしまつた。現在イランが叫んでいるイスラム革命なども世界中から全く奇異な目で見られる現状である。そもそも宗教・哲学とは古事記のいう月読命の支配する領域である。闇の中に月の光でうすぼんやりと読む学問という意味である。眞実即言葉である言霊の原理を操作する神が天照大神で太陽に譬えられる。言霊の原理から言霊を差し引いて実相だけを残したのが宗教・哲学である。そのため眞実は見ることが出来ず、それを表現するのに廻りくどい比喻や概念を使う。人によつて解釈が異なつて来て物事の姿を薄ぼんやりとしか伝えることが出来ない。それにひきかえ科学は古事記で須佐男命の世界である。須は主に通じる。主とは天照大神である。須佐男とは主を佐ける男の意

味で、科学は完成された暁、主である天照大神の精神原理と共に相携えて人類の新しい第三文明時代を創造する。月

読命の宗教・哲学はその時までの精神的な繋ぎである。仏教でいう像法・末法の時代の仏教・キリスト教・儒教や、骨ばかり残っている日本の神道等はやがて崩壊してしまふことを預言したのがこの「カチカチ山」のおとぎ話である。

カチカチ山のおとぎ話はここで終わるが、ことの成り行きの上で当然考えなければならぬことである。月が沈めば陽は昇る。自然現象では当然である。しかし歴史の創造は自然現象ではないから人が成さねば物事は成就しない。二千年前日本人の意識から隠された言霊の原理は如何にして復活するか。それは実に泥船と共に沈んだ狸である宗教・哲学の仕事なのである。

新たに復活して来た言霊布斗麻邇がその真理であることを知って、その真理を広く万人のものとする仕事の中に宗教・哲学は新しい生命が与えられる。昔おばあさんを殺してそのおばあさんに化けた狸が溺れ死んで、再び逆に本当のおばあさんに生まれ変わること即ち宗教・哲学が自己の限界を知って自らの分を知り、自らの本尊である言霊布斗麻邇に立ち返る役目の一日も早く気付くことが希望される

のである。その事が成就した時カチカチ山の物語の真実の幕が下りることとなる。

【収載】第十三号（平成元年七月）

●再び霊能について

先に会報第一号で最近ブームとなっているいろいろな霊能現象について言霊学の立場からの説明と批判を試みました。今回は再び霊能の問題を取り上げて、一般には霊能現象とは思われていない社会の現象と霊能との関係を考えて見ることにしました。それによって読者のみなさんが社会の中で営まれるごく普通の生活が、実は生命の霊妙な力動によって支えられているものを知って頂ければ幸いです。

世の中には、そんなものは絶対に信じないという人も居ますが、神懸かりとか霊能・靈感とかいわれる現象は実際に起こり得ることであります。時には突然前後の知識・状況に関係なく思ってもいなかった知恵のひらめきや、過去の記憶の蘇りが起こって来る。筆者も今日までそういう霊的現象を幾十度となく目の前に見たり聞いたりした体験を

持っています。唯ここで全ての靈能について言えることは、靈能力を持つ人々が靈能が何処から起こって来るか正確に分かっていないことです。勿論それら靈能に接する一般の人もそれを知りませんから、その現象は神秘性を増します。そこに神という概念が登場して一応の納得ということになる。神や仏が起こしたといえれば疑いに対する取り敢えずの答えになるからです。

何故神秘だと感じるのでしょうか。人々が従来使っている通常の知恵、商売上のテクニック(言靈ウ)、学問の理論的な思考(言靈オ)、感情の動き(言靈ア)、それにいろいろな道徳観(言靈エ)などではどうしても説明することが出来ないからです。事実靈能などの神秘現象は、普通私達の意識が認めている欲望・学問・感情・道徳の世界とはかけ離れている境域から起こって来るものなのです。従来の世界の人々が認めている知識や知恵の段階よりももう一段上に、更に高い人間の最も確実な知恵によって成り立っている次元の段階が存在していて、何かの折りにその領域の扉に隙間が出来、その隙間を通して中の知恵が瞬間的にほとばしり出て、人間に知覚されるのです。これが靈能体験です。そしてこの通常の知恵の一段上の次元を言靈学は言靈

イと呼びます。生命の創造意志の次元です。

世の中に普段通用している四つの知恵ウオアエ(この四が世をヨと呼ぶ語源です)より更に一段高い知恵が存在することは、いわゆる靈能だけでなく宗教的又は芸術的体験によって確かめられています。宗教的体験によってこの一段高い次元に接した人は「神仏に通じた人」として民間宗教では教祖と崇められ、従来の宗教では聖者とか上人とかと呼ばれました。この領域に接するのは宗教的体験だけではありません。芸術の分野に於いても同様です。絵・彫刻・音楽・詩・小説等の創作・労作の途に於いてより崇高な美と真実の世界に没入することがあります。この世界に接し得た時の創作は一見して他のものとは全く違っていることが分かります。例えば有島武郎の小説「カインの末裔」について見ましょう。作者は粗野な主人公の不運で粗暴な暮らしの一生を逐一追っています。楽しい明るい場面は全くありません。それどころか、粗暴な振る舞いの描写は克明です。にも拘わらずこの小説全体は温かい救われに包まれているのです。崇高な世界に接しながら書かれた作品には真実を描写する精緻な冷酷な観察と、文章全体を包む何物をも許す温かい光に満ちています。

小説をもう一つ取り上げましょう。横山利一の「春は馬車に乗って」という短編があります。結核で転地療養中の妻を東京に住む夫が見舞う場面が描かれます。そこでは長い間離れて暮らしている未だ若い異性同士の、一見穏やかでない大人の会話が交わされます。二人とも決して甘っちょろくはありません。けれど小説の全文は題名の「春は……」の如く底無しの明るさに包まれています。こういう文章は高次の世界に接している時でしか書くことは出来ません。仏教に「色即是空」という言葉があります。色とはいろいろのことではなく、この世の中に姿を持った存在という意味です。芸術が色である実相を描写するには透徹した観察眼が要求されます。と同時にその観察する眼自体は小さい自我の経験による眼ではなく、自我を越えた崇高な美と眞の次元の眼(空)である時、小説の傑作が生まれるのです。俳聖芭蕉は色の観察を突き詰めて「古池や 蛙とびこむ 水の音」と実相を完成し、「あらたふと 青葉若葉の 日の光」と暖かさの根元を描いたのでした。

高次の眞実と美の世界に接続している小説は、右の他に芥川龍之介や国木田独歩等の作品の中に見出す事が出来ます。しかし宗教的・芸術的修行や労作の途で出会うこの高

次の世界との接触は、時間的にはそう長い期間ではありません。多くの場合は僅か数分間から長くて数日間乃至数ヶ月ぐらいが限度です。その世界との交流の歓喜の体験は、それがまるで夢ではなかったかと思われるほど、時間が来るとすうっと消えてしまいます。残るのは元の木阿弥の凡庸な自分一人です。そして崇高な美の世界との接触の歓喜が余りにも素晴らしかったがために、それを体験した宗教家・芸術家はその世界にいつも住んでいたい希望に駆られます。宗教者は一生の間自己の心の中に光を求めて、菩薩の行を続け、芸術家は絶えざる渴望を満たそうとして足掻きます。有島武郎は悶掻き苦しんだ末に自殺してしまいました。過去に見ることが出来た素晴らしい世界が、今度はいくら見ようとしても見ることが出来ない悲哀に自らの死を選んだのでした。芥川龍之介は把もうと焦る空しい努力に身も心も滅ぼしてしまつたのでしよう。

一度は見る事が出来た崇高な超越世界の体験を再び見ようと努力して、見ることが出来ず、求めても求めても超越世界に住むことが出来ぬ自分を発見する時の幻滅ほど悲しいものではありません。芭蕉は俳諧の究極の境地に安住することを求めて旅に出ました。「旅に病んで 夢は枯野を

かけ廻る」彼の辞世の句でありました。詩人ゲーテは死に臨んで「もつと光を」の言葉を遺したのでした。

既成の宗教はこのような悲哀に負けず、崇高な仏の世界に常住するための修行法を色々工夫しています。禅の曹洞宗の開祖道元は超越世界に接霊する方法を日常の行住坐臥の座禅に求めました。浄土真宗の親鸞は光明世界に住むことの出来ぬ自我の悪業をそのまま肯定し、「とても地獄は一定住家ぞかし」と言つて自我の地獄をそのまま安住の境と諦観し、念仏だけが真実なのだと言ひ切つたのでした。悲哀と幻滅を乗り越えて行くいわゆる菩薩行を阿弥陀経には阿弥陀仏の修行中の名であった法蔵菩薩の誓願として次のように説かれています。「我超世の願を建つ。心無上道に至るとも、この願満足せずば、誓つて正覚を成らじ。」超世の願とは超越世界に常住する願いのことです。

大乘の中の大乘経典といわれる法華経にもこの最高の次元の世界を極めることの困難を説いた次の経句があります。「諸仏の知恵は甚だ深く微妙であつて、その知恵の門は難解で入ることが難しい。一切の声聞や辟支仏の知る能はざる所なり(方便品)。経文中にある声聞とは仏教の経文を聞いてその理論を学ぶ人のことであり、辟支仏と

は一度は仏教でいう空の悟りを得、超越世界に接することが出来た人のことでもあります。その人でも超越世界である仏の知恵の中に常住することは難しいと説かれているのです。更にこの難解難入を嘆いた中国の聖僧寒山の詩に次のようなものがあります。

我聞く天台山 山中に琪樹有り 永言して之を攀ざんと
欲すれども石橋の道と暁るなし 此に縁つて悲嘆と生じ
幸居してまさに暮れんとす 今日鏡中と視れば 颯々と
して鬢髪垂れて素の如し

琪樹とは精神的な宝の実が熟する樹のことで、仏教でいう最高の仏の世界を譬えたものです。仏が手にする摩尼宝珠のことであります。石橋とはこの世から超越世界に渡る橋です。中国第一の聖僧といわれる寒山にしてそこへ渡る方法が分からないことを嘆いたのでした。

世の中には数多くの霊能者がおり、極めて短時間とはいへ超越世界の知恵を感じて色々な霊能力を發揮しています。過去三千年の間多くの聖者・菩薩が神秘体験を得て高次の崇高な領域に常住することを願つて苦心の修行を続け

て来ました。各宗教書にはその超越世界を目指す修行の方法や心構えが事細かく説明されています。にも拘わらずその高次の世界に没入することは困難であり、常住する人がでないのはどうしてなのでしょう。理由は唯一つです。その人間生命の最も高次の、従来の四つの人知であるウオアエの次元を超越した知恵の世界の内容を直接に表現する言葉がなかったからです。その世界を譬えて言う言葉は沢山あります。キリスト教では天国、エデンの園、神の国、降臨する生命の城等、仏教では極楽、仏国土、又は「菩薩を教える方、仏が護り念する所」(法華経)等と説かれます。しかしそれらの表現は高次の世界を遙かに望む地点からの名前であって、その世界そのものの内容を示したものではありません。菩薩の行を極め、仏の境地に限りなく近づいた聖僧寒山は、その境地を表現する言葉の持ち合わせがなかったのです。修行といい、研究といい一切の文化活動は到達した境地や発見された事実に必要な名を付けることによって活動は完結します。名が付かなかつたら、その修行や研究は始めからなかつたのと変わりありません。修行により超越世界に限りなく近づくことが出来た寒山であったからこそ、その世界を表現する言葉を持たないことを、琪

樹によじ登ってその宝を取ることが出来ないことを嘆くことが出来たということも出来ます。

仏教信仰は教行信証を大切にします。教とはかくすれば悟り得るぞという教えです。行とはその教えに従って修行することです。その修行も漫然と行なうのではなく、そこにこの道を行けば必ず悟りに入るといふ堅い信心が必要だと説かれます。そして最後に証が強調されます。証とは修行して悟り得た境地を言葉や文字や絵として表現することです。表現することが出来て初めて修行は完成したことになります。それなら幾多の霊能現象を可能にし、聖者・聖僧がそこに常住することを渴望して来た超越世界の内容を的確に表現することが出来る言葉は存在しないのでしょうか。いいえ存在します。各宗教書に譬え話として書かれている以上、昔は確かに存在しました。そして世界の文明を経営する上での理由により、世界的には三千年、日本に於いては二千年の間、人々の表面意識から隠されてしまったのでした。そして真実の言葉とその意味が存在しなくなつた世界の一時しのぎの精神的支柱として、方便上創設されたのが現在世界にある各宗教であります。既成の宗教が人

間の最高次元の存在することを説きながら、その次元に踏み込んで内容を明らかにすることがないのは以上の理由によるのです。今その真実の言葉とその法則が二千年の忘却の中から日本人の脳裏に甦って来ました。その言葉をアイウエオ五十音言霊布斗麻邇ふとまにといいます。人間の超越した第五の精神次元の世界の内容を明らかに表現することが出来る世界で唯一の言葉です。

子供の頃から見慣れているアイウエオ五十音にそんな意味があることなど当の日本人でさえ思ってもいないことでありましよう。五十音表が作られたのはそれ程古い時代ではないと主張する国語研究者も多いのですから。しかし今度復活したアイウエオ五十音言霊の原理の上に立って調べてみると、古代日本語はこの原理に基づいて作られたということが分かって来ます。ですからこれは少なくとも、数千年以前に存在した原理なのです。この原理によれば人間の心は五つの次元の階層から成り立っています。

図 009-A

		韻 父						
半母音	キ	シ	チ	ヒ	ミ	リ	イ	ニ
	三十二子音						イ	エ
							ア	オ
							ウ	エ
							オ	ウ

母音

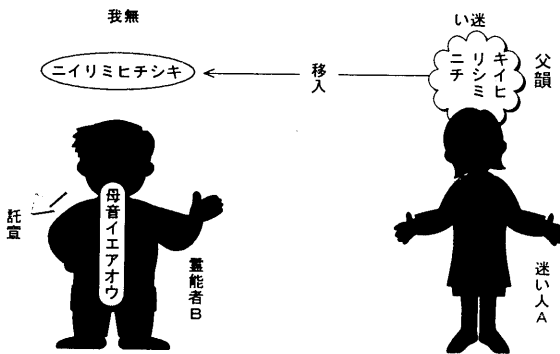
す。そのそれぞれの次元に自覚成長の順序に従ってウオアエイと名付けます。原理についての詳しい説明は当会発行の「言霊」を読んで頂くとして、ここでは簡単に説明しましょう。その五つの次元の最高段階である創造意志言霊イの視点から心の全体を分析しますと、人間の心は丁度五十の要素によって構成されていることが分かります。この要素を言霊ことばたまと呼びます。この五十音の言霊は人間の心を分析し煮詰めていって、もうこれ以上分析出来ない最終の要素の全部でありますから、人間の心の現象でこの言霊によって表現し説明することの出来ないものは存在しません。世の中の人々が不思議だと畏怖する霊能現象も然りです。

五十の言霊を分類しますと、ウオアエイの五母音、ウワエキの半母音、キシチヒミリイニの八つの父韻と三十二の子音に分かれます(図 009・A 参照)。母音とは人間が目を閉じて無我でいる時の姿と言ったらいでしょうか。何も考えていないけれど、そこから心の現象が現われて来る大

本の心の世界です。半母音はその純粹の我に対する^{なと}汝の世界です。この我と汝が無我で無言であるならば現象は起こりません。我と汝との間で心の交流が始まると何らかの事が現われて来ます。現われて来た現象が子音です。そして我と汝の間を飛び交う心の閃きと言ったものが父韻です。ドイツ古典哲学では火花^{ツィンク}と呼びました。二人の学者が論争する時、

両者の間に火花が散るといわれま
す。しかし火花が散るのは論争の時
だけではありません。人間の行為の
すべてにこの火花が散ります。我と
汝の間を飛び交って母音を刺激し現
象を起こす創造の火花が父韻です。
人間の根本意志が起す創造のバイ
ブレーションと言ったら分かりやす
いかもしれません。人間が行動を起
こそうとする時、言いかえると頭脳
内で言葉をまとめようとする時、八
つの父韻の火花が次から次へと閃き
駆け巡って、それがウ(欲望)オ(理

図 009-B



論)ア(感情)エ(道徳)の母音宇宙に刺激を与えて現象を生
んで行きます。この場合八つの父韻が母音に結びつく配列
は、母音ウに結びつく配列、オに結びつく配列……と母音
の次元に従ってそれぞれ特定の並び方があります。配列を
間違えれば現れる現象は支離滅裂となります。

右のことを頭に入れながら霊能のメカ
ニズムを考えてみましょう。一番ポピュ
ラーなものを例に引きます(図 009、B 参
照)。何か迷っている人 A が霊能者 B の
所に行きます。A は迷っているのですか
ら頭の中の創造の父韻の火花をどの順序
で閃かしたらよいかで迷っているので
す。B は霊能状態になるや自意識が殆ど
なくなります。無我となります。と言う
ことは先に書きましたように現象が起こ
る以前の大本の世界であるウオアエイ五
母音そのままの状態です。そこに A の順
序の定まらない八つの父韻が感情移入的
に結びつくのです。B は無我です。先入
観がありません。人間は迷った末に先入

観を捨てれば方策は自然に立つてくるものです。即ち母音の次元に特定の父韻の配列の整備が霊能者Bの中で行われます。Bの口から順序の整った言葉となつてAの行動の指針が飛び出して来ることとなります。これが最も一般的な霊能のメカニズムであります。五つの母音の宇宙というのは、先の「霊能について」の会報(第一号)で詳しく説明しましたように、自他の区別のない、時間空間を超越したものでありますから、この感情移入が可能なのであります。以上例に引いた霊能現象の他に色々な種類の霊能があります。が、人間の創造意思の現れである八父韻と母音との結合という立場から考えるならば、一切の霊能のメカニズムは手に取つて見るが如く明瞭に理解することが出来るものになります。

以上言霊学の立場から霊能力のメカニズムを調べて来ました。今日まで不思議なことと思われてきた霊能現象が言霊の立場から見る時、いとも当然のこととして受け取ることが出来ます。神秘のベールは取り払われたのです。神秘でなくなつたと言うことはその存在の意義が失われたことを意味しません。霊能現象はこれからも変わらざることでしょう。唯その現象によって示される事項が真実であ

るか否かの審判が、霊能現象が起こつたすぐその場で可能となりました。その審判の基準となるのが言霊の原理であります。古代言霊原理による霊能・信託の審判を沙庭と呼びました。琴弾ことづまとも言います(古事記・神功皇后の章参照)。霊能といい、神仏という従来ただ畏怖されるだけであつた存在が人間の心の深奥にある合理性の鏡によって明るみの中に照らされることとなりました。これは画期的なことでもあります。このことの理解が進むならば人類社会は精神的に一段の進化を示すことは間違いありません。霊能は不可思議なものではなくなりました。同時に霊能の不可思議のベールを剥がした第五次元の言霊の原理から私達の日常生活を見る時、毎日毎日繰り返される出来事、朝起き飯を食べ夜寝るという当たり前の言動の一つ一つが、実は人間の心の最も奥深い宇宙にある父韻と母音の呼び合いによつて生み出されるいとも霊妙な現象なのだということを知ることが出来ます。

夏空の入道雲から突然鳴り響く音を雷といひます。雷鳴は響き渡つて大地を震わせませす。言霊のことを大昔五十神いそかみ土と呼びました。五十音言霊をそれぞれ粘土板に書いて素焼きにしたことからその呼び名が出来ました。人間が発す

る言葉の一つ一つは五十の言霊が鳴り響くことによって生まれます。人の言葉は雷なのです。ですから人を動かし、時には世界を動かす力があります。日本語の原理が全世界を動かし、恒久平和の新世紀をもたらすのもそう遠いことではありません。

【収載】第九号（平成元年三月）

●魂の変態について

蝶は成虫となるまでに幼虫―蛹―成虫と三態の変態をする。辞書で変態metamorphosisの意味を調べると「形を変換すること。生物学的には個体発生の途中で、親と全然異なった形を取る」とある。この意味では人間は変態はしない。赤ちゃんから成人し老人となるまで形の上では蝶に見られるような著しい変態はない。しかし人間の魂は五態の変化が可能である。以下人間の魂の五段階の変態について考えることとしよう。蝶はその蝶が生きている限り幼虫―蛹―成虫と自然に変態する。しかし人間の魂の変態はその人間が生きている間に自然に起こるわけではない。その人が希望し努力して初めて変態が可能となる。一生の間初めの段階から

変態進化しない人間もいる。

まず人間の魂の初段階は五感覚を基礎とした欲望の世界である。赤ちゃんは腹が空けば母親の乳房を吸う。成長するにつれて玩具を欲しがる。綺麗な服を着たいと言う。更には金がほしい、地位が欲しい、名誉を得たいと欲望はエスカレートする。皆五感覚を基礎とした欲望の所産である。欲望には限りがないから人によってはこの欲望の段階だけが人間の心の世界だと思ひ、一生をこの世界だけに暮らすこととなる。この人にとって人間の魂の変態して行く他の段階である学問・感情・道徳等は自己の欲望を達成するための手段であるに過ぎない。その典型を現代の政治家に見ることが出来る、と言ったら失礼になるであろうか。

変態の第二段階は学問の世界である。第一の欲望の世界で出会った出来事を経験として、それら経験と経験との間の相互関係を考へて行く段階である。一般にはこの作業を学問・科学と呼んでいる。かく行ったらかく成った。だから今度そう成りたければ、かくしたらよい。これが学問の始まりである。子供が成長してこの知恵がつくことを物心がつくという。小学校から中学・高校・大学と進む毎にこの知恵が体系化して来て、学問・科学の形が出来上がって

来る。第一の欲望経験を掌握してそれを体系化したのが学問である。ここで人間は個々の体験の立場から理論的体系の段階へ進化変態したことになる。近代の大型産業化がその典型である。このことから人間の魂の進化変態というのは、一つの段階の出来事を体験によって総合して、それによって今迄の世界とは全く異なった世界に飛躍することとすることが出来る。それは蝶が幼虫である芋虫から形の全く違う蛹に変態するのと同様である。

人間の魂の変態の第三段階は感情の世界である。と言うと読者は疑問を持たれるであろう。感情は確かに第一段階の欲望とも第二段階の学問とも異なったものではあるが、人間は生まれた時から感情は持ち合わせている。今殊更に第三段階の進化として感情の世界を持ち出すのは何故なのか、と。人間は感情の動物だなどと言われる。感情のない人間はいない。けれど感情の世界はこれだ、と純粹の感情の世界を指摘して取り上げることの出来る人は居るのであるか。大方は欲望と理論と感情がごちゃ混ぜになつて区別が付かず、自己のコントロールが効かずに暮らしているのが実情ではなからうか。ここで言うところの魂の第三段階の変態の世界とは、自分の感情がよつて生まれて来る大本

の世界をはつきり認識した境地のことを言うのである。この第三の境地への変態はどうしたら可能なのであろうか。

純粹な感情の世界に入るためには宗教的または芸術的な修行が必要である。従来宗教とは心悩めるものの慰めのために存在すると思われてきた。勿論その効用もないわけではないが、眞実には人間の魂の五段階の変態のうちの第二から第三の段階への変態の修行の方法を説くものとして最も重要な存在意義がある。その修行は、第二の学問の段階の修行が進歩の学であるのに対し、これは退歩の学と言うことが出来る。学問は身につけるといふ。身につけたいろいろな知識や信条は自我を形成する。自我の内容である知識や信条が大きく深くなる程学問は進歩し価値を増す。それに反し第三段階の道は身に付けた知識を再点検して、それらの知識は自我の身の廻りにつけた着物なのであつて自我そのものではないと心の内に否定して行く道である。

「汝ら翻りて幼児の如くならずば天国へ入るを得じ」

「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」

これらの教えは皆第三の段階へ変態するための方法を示すものである。こうしてその退歩の修行の末に出会うものは、その昔自分が無自覚に赤ん坊として広い宇宙の中へ生

まれ出て来たその宇宙が、実は自己の意識の本体そのものであると自覚認識される世界である。自我の束縛から解放されて広い宇宙と一体となる。この時人間は、丁度蝶が脱皮変態するが如く小さい自我の皮を破って自由な天地に飛び出す変態の様子を実感するのである。

飛び出した宇宙は果てしもなく広い宇宙であり、そこには仏教で寂光の浄土と呼ばれる如く和やかな温かい光が満ちている。そこでは従来色と思われていたものは全て光である。赤い色とは実は赤い透明な光であった。「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光……」とある阿弥陀経の意味が文字通り了解される。ふと我に返ると小さな小さな自分を抱いて生かして呉れる宇宙の愛が心の底からの幸福感・安堵感となつて感ぜられる。従来自分が勝手に生きていると思つていたその自己が、実は大きな愛に抱かれて生かして頂いている事を悟る。この世界が感情の発露の世界であり、芸術・宗教の心はこの宇宙から発現して来ることが理解される。

右の第三の段階の世界では、第一・二の段階の束縛から離れた自由な解放感の気分を味わうことが出来る。しかしこの自由解放は四六時中続いているわけではない。宗教的

修行によつてこの自由を得た人は、自己一人に於いては束縛から離れて自由である。しかし社会には自分だけでない、まだ不自由な我に生きている人間が沢山居る。この中に入れば元の木阿弥に帰ることとなる。芸術家も芸術活動に没頭している時は美の世界に自由に遊ぶことが出来るが、それ以外の時間は従来煩わしさに帰らねばならぬ。具象の絵を修めて美の世界を究めた後は社会の現象に自己の思うがままの想像力を働かし、抽象の絵の中に遊んだのがピカソであった。宗教家の中には限られた時間の光明にあきたらず、常時魂が光明の世界に住むことが出来るよう新しい修行に出発せんと決意する人が居る。この新しい出発の時から人間の魂の進化変態の第四段階が眼前に開けて来る。この段階は人間の道徳の世界である。

魂の第一・二・三段階は自利の行動である。欲望も学問もまた自己の自由を求めることも全て自分のための行いである。それが第三段階で自己の自由を得てから後、光明への常住へ向かう道は利他の道である。欲望と学問と感情をその場その時でどのように選択して行動したらよいかの判断力を養成する段階であり、とりもなおさず道徳の世界のことである。自らは既に救われている。だからまだ魂の自

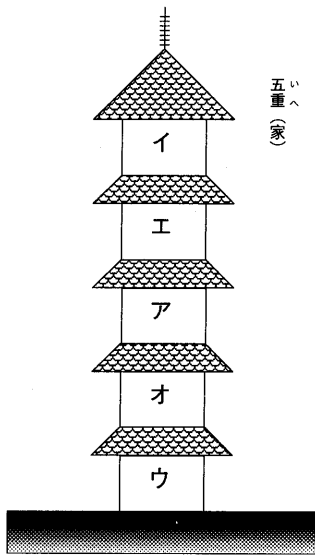
由を得ていない昔の自分の境涯に居る人々にどうしたら自由を知らすことが出来るかの修行である。仏教ではこの行を菩薩行ぼさつぎょうという。その知恵を般若はんにやと呼ぶ。この道は道德の道であり、政治の仕事でもある。

第一段から第三段に進む変態の道はむしろ短いものといふことが出来る。欲望と学問とで構成された自我の内容を反省してそのそれぞれを統一することは、自我の内容が有限であるからその反省・退歩の道も有限である。それに対し第四段の利他の道は、自分を取り巻く他の内容が無限ともいえる程多様であるため、それらを救う道も限りなく遠い。仏教はこの道の遠く長いことを「弥陀五劫思惟の願」とも「大通智勝仏十劫座道場」などと表現している(劫とは無限の時間の単位)。地球上の人間ひとりひとりを善導してこの世界に一人の悟らない人も居ない世の中を築くことは全く夢のようなことである。それなら恒久平和の真善美が整った人類社会を創造することは不可能と諦めなければならぬのか。否、希望はある。魂の第四段階の変態を完成させる法則であり、更に魂の進化の最高段階である第五段の精神の内容を余すところなく表現することが出来る原理が現在の人間の意識の上に復活して来たからである。その原

理をアイウエオ五十音言霊ふとまにの原理という。

この原理は三千年前までは「世界は一つの言ことばであった」(聖書)として世界統一の基本法則の言語であり、その時の為政者により故意に人類の物質文明が完成に近づくまで人間の表面意識から隠されたものである。魂の進化の最終段階は人間の創造意志の世界である。この世界の原理法則である五十音言霊によって見る時、人間の魂の一段より五段に進む人間の精神の構造は簡単明瞭に表現することが出来る。人間の魂が五つの段階に於いて進化変態すると説明出来るのも実はこの言霊の原理によるからである。魂の変態の順序に従って第一段欲望から言霊ウオアエイの五段階が存在する。人間の魂はこの五段階(五重いへ)を住家とする。日

図 010-A



本語の家の語源である。(図O10・A)

魂の第二段階である学問による物質科学の高度の発達
第一段階の欲望に基づく産業経済を今日見るが如く繁栄さ
せることが出来た。第五段階の創造意志の原理の復活再現
は、物質文化の上に第四段の道德政治の社会を建設するこ
とを可能にする。これによって人類は新しい変態を成し遂
げ栄光の世紀へ羽化登仙するのである。

【収載】第十号（平成元年四月）

● 霊の本

数年前のこと、ある日、前に文部大臣をやったことのあるK代議士の取り巻きといわれる人から私に電話がありました。「近日代議士がある国際会議に出席の為アメリカに行くのだが、日本の国名はニッポンが正しいのか、それともニホンと発音するのがよいのか、貴方の言霊学の立場からの正しい呼び方を教えてもらいたい」ということでした。そこで私は即座に次のように答えました。

「日本の国の名前は古代大和言葉で言えばニッポンでもニホンでもなく、ヒノモトです。日本に漢字が輸入されてか

らヒノモトを漢字で日本と書くようになりました。そして日本を音読みするようになってニッポンまたはニホンと呼ぶようになりました。ニホンとニッポンの違いはホとポとの清音と半濁音の違いです。言霊学では清音は実相を表す音であり、半濁音はパッと点るとかボンと鳴るとか言うように実相が表れる発端を示す音です。ですから今の日本の国を若々しいこれから発展して行く国と思うならばニッポンと呼び、既にしつかりした形が出来上がった完成した国と考えたければニホンと発音したら良いでしょう」と。K代議士がアメリカへ行って日本をニホンと言ったか、ニッポンと呼んだか、その後の報告は聞けませんでした。

さて日本の国の古代の名前はヒノモトであり、漢字輸入以後日本となったと書きました。日本書紀第二十二推古天皇の章に「小野臣妹子を大唐に遣わす」とあり、この日本からの遣使のことは隋書、倭国伝に「大業三年その王多利思比孤、使を遣わして朝貢す。……その国書に曰く、日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙なきや、云々。帝これを覽て悦ばず、……」と記されています。世界を東洋と西洋に分け、東洋の中の最も東に位置するのが日本の国ですから、日本のことを日出ずる国・日の本の

国・表の国などと言い、外国を日没する国・夜見の国・裏の国などと呼んだことも理由がないわけではありません。

しかし漢字渡来以前わが国をヒノモトと称えた理由は決して太陽が初めに昇る国という意味からだけではありませんでした。わが国の国名は漢字で書くと日の本ではなく霊の本の方がより正しいのです。日本の古代名ヒノモトとは太陽が初めに出る国で日の本ではなく、実は霊である人間の精神の根本、またそれを土台にして始まる精神文明の基本原理が保存され継承されている国という意味で霊の本と呼ばれたのです。そして精神の根本となるものが言霊であり、言霊はまた霊と言いました。

人の語源は霊止です。精神が留まっているものの意です。霊が留まっているものが人ですから、霊とは人間が人間であるための根本の条件と言うことになります。このことをうまく表現した物語が旧約聖書出エジプト記にあります。

曠野で神の声を聞いたモーセが「あなたの名前は何と言うべきですか」と問うたのに対して神は「I am that I am」とモーセに告げます。この英語は色々に訳されていて意味不明瞭なのですが、日本語の霊止と言う語源から考えるとよく分かって来ます。最初の「I」（私）は神です。次の「I」

はモーセを指します。全訳しますと「我（神）はモーセをあらしめているものである」となります。聖書のこの記事と同様の意味のことが日本の秘史である竹内古文獻に次のように載っています。鶴草葺不合朝六十九代神足別豊鍬天皇の時モーセ来る。帰るに臨み天皇モーセに告げて曰く「汝モーセよ。汝一人より他に神なしと知れ」と。この言葉も霊止の意味をよく表しています。人間が人間であること以外に神はないのだ、と言う意味でしょう。

人が人であるための根本精神の構造は日本人の遠い祖先達によって今から少なくとも数千年以前に発見されました。その場所はたぶん中央アジアの高原地方であつたと推察されます。その発見された原理によれば、人間の心は五十個の精神要素から成り立っています。その内訳は現象として現れる以前の先天内容が十七個、現れた後天現象の単位が三十三個です。この五十個の要素に内容に応じてそれぞれ五十の清音を結びつけました。その心の単位であると同時に言葉の単位であるものを言霊または単に霊と呼びました。この自覚された言葉と精神の要素のことを世界の各宗教はいろいろな表現でその存在を示しています。儒教では白法と呼び、仏教では種智といい言辞の相といいます。

聖書には「神の口より出ずる言葉」・マナ・「初発に言あり、言は神と共にあり、言は神なりき」と表現しています。この言霊とその原理の自覚者を「聖霊知り」と言いました。聖の集団が自覚された言霊の原理を基礎とした人間社会を創造しようとして高原地帯から住み良い平地に下って来ました。そして永住の地として定めたのが現在私達の居るこの日本列島でありました。今から少なくとも五千年以上前のことです。

度々書くことですが、人間の文明とは何か、というと言葉と数と文字ということが出来ます。言葉のエッセンス(言葉の言葉)が言霊です。物が動き・動かす動作が起きますと数の概念が芽生えます。物を此処から彼処へ移動させたとすると場所は一から二に増します。そこに数という考えが起きます。心の動きを言霊の動きとして考えた時の数を数霊と言います。中国から漢字が渡来するまで日本には文字がなかったという現代の説は誤りです。日本古来の神代文字が立派に存在しました。この文明の基本である言葉・数・文字の創造によって聖達の日本に於ける社会建設の業が進められたのです。文明社会の始まりでした。言霊の原理に則って物事に名前が付けられました。数の運用

によって社会の制度が作られました。言霊と数霊の原理に則って各種の文字が定められました。言霊の原理による文明社会の統治者をスメラミコトと呼びます。言葉を統べる(統一する)人の意です。スメラミコトの政治による道徳と文化の平和な世の中が永く続きました。

スメラミコトの政治の世は邇邇芸皇朝・日子穂々出見皇朝・鵜草葺不合皇朝と続きます。皇朝とは十数人乃至数十人のスメラミコトが続く王朝を意味します。邇邇芸とは二の二の芸すなわち第三次的な文明の意です。真実に似たものが麻邇である言霊です。その言霊により建設される社会は第三次的な芸術社会ということです。日子穂々出見とは言葉(日子)の実り(穂)が見事に現われた(出見)時代を意味します。次の鵜草葺不合皇朝も精神文化の爛熟期ということが出来ます。言霊の原理に基づく各種の精神文化が世界の各民族の特色に合うように脚色されて世界中に伝播された時代でありました。中国の王伏羲に伝えられた易の法則は言霊の天津磐境の原理の写しであり、時が下ってはイスラエルのモーセ・イエスに、中国の孔子・孟子に、印度の釈迦に伝えられた宗教も言霊原理の一部を教典に直したものであります。その当時の日本は文字通り世界の「霊の本」

であつたのです。

鵜草葺不合の時代は以上のように精神文化の最も発達した時代でありましたが、同時に人類の第二の文明である物質文明創造の芽が出始めた時でもありました。言霊ウ欲望の神屋である産業・経済（鵜草）が未だ出来上がっていない（葺不合）時代という意味を示しています。古事記の鵜草葺不合命を祭る宮に九州日南海岸にある鵜戸神宮があります。この神宮の社殿は面白いことに洞穴の中に建てられています。ウの神屋が葺不合と記されるように洞穴の中の状態で、物質科学文明の完成まではまだ外に現われないとの呪示であるのでしょうか。そして鵜草葺不合皇朝の終わり、今より約三千年前、時のスメラミコトにより世界の政治に関する重大決定が下されたのでした。それは人類の第二の文明である物質科学とそれに基づく産業・経済の進歩を促すために、人類第一の文明である精神文化の基礎となつている言霊の原理を一定期間人類の意識から隠してしまふこととです。物質科学というものは生存競争・弱肉強食の社会において、より早く発達します。その競争社会の出現のためには政治に対する精神原理の適用を科学文明の完成の時まで停止しなければなりません。そのために成り立たし新し

い皇朝の名を神倭皇朝といひます。神武天皇より昭和天皇まで百二十四代続きました。

神倭皇朝の第一の使命は精神の原理である言霊と数霊と神代文字を日本人の意識の表面から忘れさせ、またその原理の世界への伝播を停止してしまふことでした。その大綱は第一代神武天皇によつて計画され、第十代崇神天皇によつて実行に移されました。精神原理の表徴物である三種の神器の天皇との同床共殿制度の廃止がそれでありました。日本の国内においても、また外国に対しても言霊の原理は隠されてしまつたのです。この時以来日本の国は「霊の本」であることを止めました。その結果名実の内の実である霊を失い、名をとつて日本の国名は「日の本」となりました。時代は下りますが神道と儒教と仏教とに精通していた聖徳太子は「霊の本」の国の誇りをもつて隋の国王に送つた国書に「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す……」と書いたのでしょうか。

神倭皇朝の第二の使命は隠された言霊の原理が物質科学が将来完成された暁再び日本人の意識に甦るのに備えて、原理の表徴物を種々の建造物や宮中の儀式の中に保存することでありました。伊勢神宮の造築、宮中に於ける儀式の

決定、大祓祝詞や古事記・日本書紀の撰定等はそのための施策だったのです。伊勢神宮の本殿の構造形式を唯一神明造（ゆいふくたのまうぞう）といえます。唯一つの神が明らかとなる作り方の意味です。その構造を詳しく調べるとアイウエオ五十音の言霊原理を見事に映し出して来ることが分かります。このことについては号を改めて解説することになります。七十二年太安麻呂によって撰上された古事記の中の神代巻は単なる神話ではなく、神話の形式による言霊の原理の教科書として編纂されたものです。この内容については「言霊」「続言霊」にて詳しく解説しました。これらの他現代まで踏襲されている宮中での種々の儀式の大半は言霊の意義に則って定められた形式であり、一度言霊原理に気付いた人の目から見れば直ぐに分かるように作られています。以上種々な施策の中に将来原理の復活のための準備が整えられたのでした。

神倭皇朝の発足より約二千七百年、物質科学の完成は漸く間近に迫ってきました。その間日本は文物共に外国からの輸入に頼り、かつては日本民族の独壇場であった精神文明の粋である言霊・数霊・神代文字も民族の意識から完全に忘れ去られ、文化といえば外国よりの伝来物と考えるこ

とが常識にまでなりました。日本国家の名前も霊の本（ちもと）から日の本（ひのもと）へ、そして日本（にほん）と移り変わりました。神倭朝は先の昭和天皇の人間宣言によって百二十四代その使命として来た精神原理の形式的保存の任務を終了したのでした。日本の国民の一部にはこの所の経済的繁栄の精神的バックボーンを作ろうと、皇室の伝統行事の大々的復活を意図する運動が起こっているやに聞いています。それは皇室を中心とした日の本（ひのもと）国家復興運動と言うことが出来ます。しかしその表現は不可能なことであります。昭和天皇の人間宣言によって宮中の伝統行事の神話的意義の一切は完全に否定されてしまっているのですから。

日本と世界の現状と将来に思いを致す人は、さらに深い洞察が要求されています。日本民族の発生以来課せられている本質・使命に気付くべき時です。その真実は私達が日常使っている日本語の中に、言の葉の誠の道として秘められています。幸い宮中賢所に秘蔵されていたアイウエオ五十音言霊の研究は明治天皇を始めとする多くの人々の努力により、現在この会報で皆様にお伝えし得る程にその全貌が解明されてきました。日本固有の精神原理は不死鳥の如く蘇ったのです。日本民族とは現在の経済的発展の更に先

に、民族語である日本語の中に秘められた人間の精神の原理をもつて人類の精神的繁栄のために貢献する使命を負った民族であることに気付いて頂き度いのです。日本は文字通り霊の本の国となる時を迎えているのです。

終わりに最近社会的な話題となつてゐる耶馬台国と卑弥呼のことについての感想を付け加えておきます。蘇因高という名前をご存じですか。日本は中国より伝来の漢字を使つていますが、漢字を讀む発音は大きな相違があります。先に書きました日本の推古天皇の時、遣隋使として中国に派遣された小野妹子の中国名が蘇因高というのです。中国は妹子の音読に因高を当てました。発音が似ているように全然違つた人に思われて来ます。

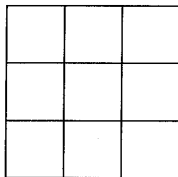
さて耶馬台国と卑弥呼とは中国の魏の時代の歴史書に倭(日本)人伝として記されている、三世紀中半の出来事です。この中国の書にある耶馬台国とは日本の何処なのか、卑弥呼とは実際どんな人だつたのか、ということではここ二十年ほど種々の論争が起つています。そこで靈の本の国名についてお話ししたついでに倭人伝についても一つのヒントを提供しておきます。耶馬台国とは大方の人は日本名大和と解釈しているようです。現在の奈良県です。し

かし昔奈良地方の名前であつたと同時に大和は国の名前としても使われていたことが推測されます。なぜなら大和の語源は八間止です。八間とは図 011-A で表される人間の創造意志の原律・法則です。人が靈止であるのと同様に八間止とは文明創造の原理が存在する処または国として国家の名前ともなります。とするならば外国に対しての日本の国名にヤマトを使い、それの音読みに中国に於いて耶馬台を当てたことが想像されるではありませんか。

卑弥呼については更に簡単です。日本の皇室に属する人は全て当時日の御子と呼ばれました。敗戦前までその言葉は生きていました。卑弥呼とは日の御子の中国における音読みとして付けられた名前とするならば筋が通るではありませんか。妹子を因高と音読みされたことに比べればまだずつとましな事です。とする

と卑弥呼はこつちだ、あつちだと論争する事自体余り意味をなさなくなります。日の御子は日本の各所にいて差し支えない事になりますから。耶馬台国と卑弥呼に関する混乱

図 011-A



の論争は、たぶん紀元四、五世紀以前には日本に中央集権的政府の存在はなかったという現代の歴史学的な誤りに原因しているように思われます。

【収載】 第十一号（平成元年五月）

● 俳句と和歌について

最も日本的なものの代表に俳句と和歌が挙げられます。俳句や和歌が短い句の連結によって計り知れないほど多様で奥深い情景を表現することが出来るのは、それが日本語の持っている靈妙な機能によっているように思われます。俳句と和歌については既刊「言霊の随筆」の中で、何故俳句は十七文字であり和歌は三十一文字であるか、またその十七と三十一の数字が示す意義から俳句と和歌の持つ特徴について解説しました。今回は更に俳句は何故五七五の三句計十七文字、和歌は五七五七七の五句計三十一文字の構造を持つかについて言霊学の立場から話を進めることにします。言霊学の理論のこととなりますと話が少々難解になるかもしれませんが、日本語の持つ特殊な性能を知る上で必要な問題でありますのでお許し頂きたいと思えます。

言霊学は言葉の学問であると同時に人間の心の構造の学問でもあります。言葉の単音の一つ一つが心を形造っている要素を表わしているとすれば、その言葉が即真理であり真実であるということが出来ましょう。そのような言葉を説明して聖書のヨハネ伝に「太初に言あり、言は神と偕ともにあり、言は神なりき。この言は太初に神と偕ともに在り、萬の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之に由らで成りたるはなし。之に生命あり、この生命は人の光なりき」とあります。このような内容を持った言葉があり、更にその言葉が生命の構造そのままに表現されるならば、それは人の心を動かさないとはいえません。さてそのような言葉とは古代大和言葉やまとことばといわれる日本語であり、俳句と和歌が人間の心の構造そのままに五七五計十七文字、五七五七七計三十一文字で作られていると申し上げたら驚かれる方も多いのではないのでしょうか。説明して行くことにします。

私達日本人の祖先は遠い昔、人間が思い・考えるということはどういう事なのかを研究し、長い年月を費やして心の構造の解明に成功したのでした。それによれば心の究極の要素は全部で五十個です。そのそれぞれに五十個の清音

を当てはめて名前を付けました。現在私達が日常使用しているアイウエオ五十音です。その一つ一つを言霊と呼びます。言とは言葉であり名であります。霊とは心を構成している最小の単位の内容です。言であり同時に霊である存在ですから言霊といえます。

全部で五十個の言霊の内訳を見ましょう。人間の心の現象言葉が現われる以前、唯頭脳内で何かの発想が起こる、いわば心の宇宙の先天部は十七個の言霊から成り立っています。その先天はまた五つの母音、五つの半母音、八つの父韻から構成されます。母音とは物事を考える方の側である主観的・能動的な宇宙のことです。それに対して半母音とは考えられる方の側である客観的・受動的な宇宙のことです。父韻とは主体と客体とを結び現象を生んで行く人間の根本知性の原律のことです。行為とは主体性の宇宙である母音から始まり、八つの父韻の働きかけを経て、半母音の客体に至って終結します。この働きが心の宇宙の先天部分です。

先天部分の父韻と母音・半母音の働きによって人間の言葉が発言され、現われてくる心の後天的な現象の単位は全部で三十二個あります。これが三十二個の子音です。次に

半母音の中のウが転化して名を文字に表わす人間性能となりません。以上十七個の先天、三十二個の子音と文字化一音が総計五十個の言霊の内訳です。人間の心はこの五十個の言霊で出来上がっていて、五十以下でも五十以上でも人間(ホモ・サピエンス)ではなくなりません。

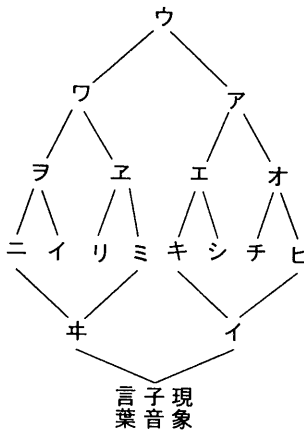
さて右に説明しました人間の心の言霊による構造を頭に入れた上で俳句と和歌について考えてみましょう。俳句は五七五の十七文字から出来ています。「古池や 蛙飛びこむ 水の音」の芭蕉の句も古池・蛙・飛びこむ・水の音と分解してしまいますと何の変哲もないごくありふれた言葉です。しかしそれらの言葉が五七五と結ばれますと「古池や」がまるで太古から続く悠久の時を経て来たもののように感じられ、また「水の音」の余韻があたかも宇宙全体に広がって行くように感じさせるのです。蕪村の句「菜の花や 月は東に 陽は西に」も同様です。月と太陽の運行に代表される天地の営みのエネルギーが眼前の菜の花の黄色の色に凝縮しているような大きさと小ささを併せ持つて表現されています。このことはまた嵐雪の「梅一輪 一輪ほど 暖かさ」についても言い得ることです。冬の寒さを耐え忍んで漸く春を迎えようとする天地の営みが梅花一輪の

中に芽を吹き出す様子を詠んで、無限大と小さな現在の一点との同一性という俳句の精神を是程端的に表現出来た句も珍しい事です。

俳句は何故たったの十七文字でかくも大きくて、しかも繊細な情趣を描き出すことが出来るのでしょうか。それは先ず第一に俳句の十七文字に注目しなければなりません。十七数とは人間の心の先天宇宙を構成する言霊の数なのです。先に説明しましたようにこの十七の言霊は五段階に発展的に活動します(図012・A参照)。古神道でいう天津磐境(いんげん)(五葉坂はつきか)です。この中には純粹主觀宇宙である五つの母音、純粹客觀宇宙である四つの半母音と精神の創造意思の現れである八つの父韻を含んでいます。

人間の頭脳内に或る発想が生まれるという事は、単に個人的な記憶とか行動というだけではなく、個人を越えた精神の宇宙全体が振動を起こして、それが人間の頭脳と呼応して言葉という創造物を生んで行く過程なのです。昔の人は言霊のことを神鳴りに譬たとえました。

図 012-A



言葉とは正に天がどよめき稲光りして生まれた創造の言葉なのです。「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」であつたのです。十七文字とは先天宇宙が鳴りどよめくことの現れです。宇宙が鳴りどよめいて創造する今・此処の一点の他に人間の生命が存在するところはあります。逆に表現するならば、常に変化して止むことのない人生を、今・此処の一点に於いて捉える時、その一点の内容が先天である十七個の言霊で表された人間の生命そのものなのです。俳句の十七文字が永遠の今と無限の宇宙の中の此処一点を目に焼き付ける如く明らかに表現出来るのは以上の心の構造によるのです。

次に考えられる第二の点は俳句が五七五の三句の繋がりに由来していることです。俳句が十七文字から出来てくるといふだけでは、永遠の今と無限大の中の此処との関係は考えられても、それを人々に印象付ける理由が全部出て来るとは限りません。俳句十七文字に芸術的価値を与える根拠は五七五の配列にあります。

す。「鶏頭を 縫いとりしごと 雨あがる」(風渡野選集)の句が読者に感銘を与えるのは、その句の素材のせいばかりでなく五七五の俳句そのものの持つ韻リムにあります。それではこの五七五の調メカはどんな意味を持っているのでしょうか。

図 012-B をご覧下さい。私達が幼い時から教えられたアイウエオ五十音図です。度々お話しすることですが、五十音図というのはただ五十音の字を覚えやすいように並べたものではありません。向かって右の縦の列アイウエオの五つの母音は、人間が未だ何の発想も起こさないうで頭が空である時の人間の姿です。自我とはこの五段階の宇宙を住家としています。ウは欲望の宇宙、オは学問の、アは芸術・宗教の、エは道德の宇宙であり、そしてイは言葉そのものの宇宙です。その主観の宇宙である空の中に一つの発想が起ります。それが言葉となり行動となり環境との交渉となつて物事は進展します。そして最後に結果が出て物事は終わりとなります。終わってしまうと物事は元の空に帰ります。終結して帰る客観の宇宙は音図の向かって左の縦の列ワヰウヱヲが表しています。この時物事の始まりであるア行と終わりであるワ行を結んで現象を次々に発展させて

いくものが創造意志のリズムである八つの父韻です。日本人なら誰でも知っている図 012-B の音図は言霊学では天津金木音図と呼んで人間精神の中で欲望を中心に据えた心の構造を表す音図です。この場合八つの父韻はキシチニヒミイリと並びます。

さて今は俳句・和歌を考えているのですから言霊でいえば芸術の世界であるアの次元です。言霊アを中心に据えた心の構造を表す五十音図に於いては既刊「言霊」で詳しく説明しましたように父韻はチキリヒシニイミの配列となります。この配列をア行で表しますと、第一行からアタカラハサナヤマと並びますので、第二番目から読んでタカラ(宝)音図と名付けています。そこで最初の

図 012-B

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ウ									ウ
エ									エ
ヲ									オ

父韻チについて考えてみましょう。これも「言霊」の中で説明したことです。父韻チとは「宇宙全体がそのまま現象

となつて現れようとする韻」です。芸術の心とは対象物への自己全体の投入から始まります。絵であれ、音楽・文学であれ、美の対象になり切ることによって傑作は生まれて来ます。美の世界を表現するために全身全霊の投入があります。このことこそ父韻チの「精神宇宙全体がそのまま現象となつて現れる韻」そのものです。そうなりますと発端であるア行と結論であるワ行とを結ぶ八つの父韻の第一番目の父韻チは、俳句に於いては作者自身の存在自体ということになります。ですから主体と客体とを結ぶ八つの父韻は作者自身である父韻チを引いて七つとなります。

純主体である五つの母音、純客体である五つの半母音、その主体と客体とを結ぶ八つの父韻によって人は物事を創造していくのですが、俳句の五七五の調は正しくこの人間の根本的な創造のリズムとピッタリ一致しています。俳句が短い言葉の連結でありながら永遠の今・無限の中の一点である実相の現れを人に伝えることが出来るのは、五七五の調が人間の想像力の構造に一致して居るからであります。

初め何もない宇宙の中に一つの動きが起こり言葉となつて現れるまでの人間精神の先天構造(図 012・A)を古神道は

天津磐境と呼びます。その内容は言霊十七個です。この性能は人間誰でもが天与された大自然宇宙そのものでありますから、図形で表しますと円形○となります。次にこの天与の十七個の言霊の運用によってどうしたら行動の鏡が出来るか、の結論を天津神籬(霊諸招)と呼びます(図 012・B)。この動きは自然ではなく人為であり文化活動でありますから、大自然の円形に対して自覚体の形である四角形(方形)で表します。円は先天であり方は後天です。円は天与のものであり、方は人為の自覚された姿です。この円と方の理論は古代の王の墳墓の前方後円の形にも当てはまります。先天と後天の構造を自覚している人ならば王としての資格あり、というわけです。

俳句の構造が以上の先天と後天の形と一致してゐるのは驚くべきことです。五七五の調によって後天自覚の構造と一致し、更に合計十七文字が先天構造の言霊の数と符合しています。俳句は美的感覚によって人間の生命の構造を見事に映し出しているのです。俳句は人間の心の全貌を必要にして充分に表現する事が出来る最小形の文学ということが出来ましょう。俳人芭蕉はその生きた時代から考えて日本

古神道の言霊の原理を知っていたはずはありません。けれども以前から日本にあった連歌や和歌の道から更に一步進めて、苦心の末に日本語の精神とその根本のリズムを会得したのであるう事が想像されます。それなるが為に俳聖と呼ばれるのでしよう。

次に五七五七七の和歌について考えてみましょう。先に書きましたように人間の心は五十個の要素(言霊)によって成り立っています。この五十個の内訳は先天要素十七、後天子音数三十二、文字化一音です。この後天の実相音の数三十二のことを頭において三十一文字の和歌を検討しましょう。

和歌のことを敷島の道といいました。「敷島とはヤマトの国の別称。崇神天皇及び欽明天皇が大和の国磯城(しき)郡磯城島に宮居されたのに由来する」と辞書にあります。

磯は「いそ」と読みます。五十のことであり、敷島の道とは五十音霊の道ということであります。事実、昔和歌といえは三十一文字を用いて叙事・抒情を事としながら、そのなかに大和言葉の原典である言霊の原理を折り込むことによって人間の生の深みを自覚していく修練の道でありました。

さて字余りは別として和歌は三十一文字で出来上がっています。その数は人間精神の後天要素数三十二に一つ欠けています。この欠けている一数こそ和歌を詠む作者自身の心なのです。この作者自身とは三十二音の内何に当たるのでしようか。「続言霊」で詳しく説明した所ですが、十七個の先天が活動して実相子音をタトヨツテヤ……の順で生んで行きます。作者自身の心とはその最初の音である言霊タに当たるのです。先に述べましたように全霊投入の父韻チが芸術世界である母音アと結んで生まれる言霊タこそ作者自身なのです。またこの一の欠如があるからこそ和歌は三十一文字をもって自由に物事の表現が出来るのだという事が出来ます。そしてその数が言霊の後天実相の数に相当していることから、和歌は叙事・抒情の細やかな表現を事とする特徴を持っています。そのことは俳句の十七文字が先天要素数であることによって永遠の今・宇宙の中の一点の表現を眼目としていることと極めて対照的です。

和歌が三十一数であることから物心の現象のこまやかな描写が特徴となりますが、和歌の五七五七七の調はその特徴を実現する格好の手段となります。先に書きましたように五七五の調は最初の五は主体である五つの母音を、終わ

りの五は客体を、そして真ん中の七は主体と客体を結んで現象である子音を生む父韻の配列をそれぞれのリズムによって表現します。この五七五だけでも先天が活動して現象を生む形式は整っています。その上に和歌には更に七七と父韻の配列を表すリズムが続きます。このことは後天の現象を再度・再々度にわたって生むことで描写する情景を詳細なものにする効果を盛り上げます。この七七の調の重なりによって和歌は完全に俳句とは別の状況を作り出しています。舞台の美しい背景の前の華やかな衣裳の舞は和歌であり、背景なしの素踊は俳句と譬えることが出来ます。

終わりに書評を一つ付け加えることにしましょう。新潮社刊「人麻呂の暗号」なる本について知人より批評を求められ読んでみました。その内容によれば万葉集に載る柿本人麻呂の歌は、その歌の読みに当てられている漢字を中国語または朝鮮語の意味の方から解釈してみると、表面に現れている歌の意味とは全く違った意味と意図が暗号の如く隠されているのが判明して来るというのです。叙事・抒情の歌の裏に死の暗い予感や時の朝廷に対する絶望的な批判が秘められている、という趣旨のようです。また現代の国語学では意味不詳とされている枕詞についても新しい解釈が

可能になった、という主張です。まことにユニークな研究で今後ともこのような試みは次々に出て来ることが予想されます。万葉集の原本はすべて日本語の発音に漢字が当てはめられているのですから当然のことです。

ただこのような研究に於いて気を付けなければならぬ事があります。それはこの本の著者がいみじくも本の中で指摘してありますように言葉には陰陽の意味があることです。その陰陽の意味のどちらを取るかは研究者の主観に任せられます。外国語をもって日本語を探ろうとする場合、この陰陽の意味の取違いをすると研究はあらぬ方向にそれてしまいます。その上時代の大きな隔たりのために起こる間違った先入観が加わります。現代人の迷信の一つに如何なる時代の人々も現代人と同じ思考をすることを、それを疑うことすらしないことが挙げられます。万葉集の歌を現代人の感覚から字句の解釈だけの研究で真相に迫ろうとしても、それは部分的な真理でしか有り得ません。端的に申し上げますと万葉集の解釈をする場合、研究者自身がそのテクニックは兎も角精神的な高みの点で万葉集と少なくとも同格の歌を詠み得る人であることが要求されることです。

まして柿本人麻呂の歌となると、その条件は更に厳しいものが加わります。何故なら人麻呂が大和言葉の原典である言霊布斗麻邇の原理を知っていた人であり、その原理に基づいて作られ現在まで神社神道で使用されている大祓祝詞おほはらいのこゝろの完成者と伝えられる人だからです。人麻呂の歌を一首例に挙げましょう。

皇おみは神にしませば天雲あまぐもの雷いかづちの上にいほり處するかも

(万葉集二三五)

この歌は天皇が雷の岡に出でましし時に人麻呂が作ったとありますから、歌の意味はいとも明瞭です。天皇は現人神あらひとがみでいらつしやるから雷の鳴る雲よりも高い尊い座にお住みになるのだ、といった意味でしょう。ところが先に触れましたように、昔の和歌とは歌が表す意味の裏に言霊の原理を折り込んで、言霊の自覚の修練の道でもありました。天皇は何故神なのか、その理由が歌の裏に秘められています。雷いかづちは五十神土いひかづちです。五十音を粘土板に刻んで素焼きにしたもので五十音言霊を表します。天雲の天は高天原精神界を意味し、雲は「組む」の呪示で古事記によく見られます。

處いほりするは宿とするの意と同時に言霊イである言葉の原理を掘って探すの意を含めます。そこで全訳しますと「天皇は神であるから、高天原の精神の高みにお住まいになつて言霊の原理に基づく五十音の操作(政治)をしていらつしやる」の意味になります。

言霊の原理を勉強して、その自覚がウオアエイと次元的な進化をする過程で言霊アの理解が成就しますと、人間の肉体の死の観念が広い宇宙観の中に永遠の生として吸収されます。この自覚がない限り人間の生命構造の原理である言霊布斗麻邇は理解することが困難なのです。言霊の理に通曉していた人麻呂がその美しい歌の中に他の意味を折り込むことがあるとするならば、それは個人の死や絶望などではなく、日本民族の歴史創造の見通しや精神構造の自覚に關することである筈なのです。人麻呂の精神が住んでいた次元については、言霊字による枕詞の意味や、更に大祓祝詞の意味を明らかにしますと一層ご理解頂けることになりますが、今回は紙数の関係上これで筆を置きます。

【収載】第十二号(平成元年六月)

●神倭皇朝

筆者宅へ時々訪ねて来るY氏が耳慣れないことを言った。

「神武天皇から昭和天皇までの百二十四代中贈名に神の字が付く天皇は三人しかいませんね。」果してそうなのかと調べてみると神武・崇神・応神の三天皇だけであることが分った。右に述べた百二十四代を総称して神倭皇朝と呼ぶ。その名の出所は第一代神武天皇の名前（諱）が神倭伊波礼毘古命であることに拠っている。この二千七百年にわたる神倭皇朝の建国の意図とその精神は何であったのか。今後歴史の問題として種々の論議が交されるであろうが、ここでは日本語の原典である言霊学に基づいた文明史の立場から考えてみることにしよう。

神倭皇朝の歴代の天皇の漢風の贈名については、続日本紀に「神武等の贈名は淡海御船勅を奉りて撰す」とある。淡海御船なる人が真に歴史の真相を知っていたか否かは分らないが、贈名に神の字が付く三人の天皇の治績を調べてみると神倭皇朝の時代を貫いている歴史創造の精神がはっきり浮彫りになって来るのは興味深いことである。

古事記は神武天皇より以前を神代と呼び、邇々芸命・日子穗々出見命・鵜草葺不合命三柱の神の代が続いたと伝えられている。度々書くことだが、古事記の神代巻は歴史書ではなく、神々の名前による言霊原理の教科書であり、原理の応用問題を呪示したものです。神武天皇以前の歴史を記した民間に伝わる竹内古文書は三代の命の名とは邇々芸皇朝・日子穗々出見皇朝・鵜草葺不合皇朝というそれぞれ十数代または数十代の天皇が続いた皇朝の名であることを明らかにしている。

邇々芸皇朝とは言霊の原理に基づいてこの日本に精神文化の社会を建設する創世時代の皇朝であり、次の日子穗々出見皇朝とは精神文化の花が豊かに咲き出た完成期の皇朝であった。次に興った鵜草葺不合皇朝は引続き精神文化の爛熟した時代であったが、同時に人類の第二の文明といふべき物質文化の芽が始めた時でもあった。以上挙げました皇朝の特質はそれぞれの皇朝の名前を言霊学によつて見ると明らかにすることは今迄度々説明されて来ました。そして葺不合朝の終りに文明創造の方針に重大転換の決定が下されたのです。そのために新しい使命をもって興ったのが神武天皇を初代とする神倭皇朝でありました。

神倭皇朝建国の目的は人類第二の文明である物質文化の完成です。物質科学を基礎とした産業・経済の振興です。科学や産業交流の基盤は生存競争の社会です。そのためには葺不合朝までの精神文化の基礎であつた言霊布斗麻邇の原理を人類の表面意識から物質文明完成までの期間隠してしまわなければなりません。そして鶉草葺不合朝まで日本民族の精神の支柱であつた言霊原理に代つて、民族の一时的な心の拠所として外国からの宗教・文化などの輸入を進めることとなります。同時に将来物質文明が完成に近づいた暁、隠された第一文明の原器である言霊の原理が人類の意識に復活するための準備を整えておくことも必要です。手短に述べますと神倭皇朝の使命は以上のことに要約することが出来ます。このような建国の精神がどのようにして展開されていったかを神武・崇神・応神の三天皇の治績の上で検討して行くことにします。

神武天皇

神倭皇朝第一代天皇であり、日本書紀は始馭天下之天皇と呼びます。前に挙げた神倭皇朝建国の精神・目的の大綱

を決定した天皇です。その施政の精神は「大人制を立てて義こゝろ必ず時に随う。苟くも民に利有らば、何ぞ聖の造に妨たがらば、どんなことでも聖の行なうわざとして妨げはしないの意です。神倭朝以前では人間精神の根本構造であり同時に言葉の原理でもあつた言霊の原理によつて政治を行なうならば、国民の福祉と行く末は自ずと決定されて行くものでした。それは言霊の原理に基づく演繹の方法でありました。それが神倭朝が始まつてからは国民の利益の観点からする帰納法の政治精神に変わったことを知ることが出来ます。言霊の原理を隠そうとする政策の下では当然に起こるべき政治精神の大変化であつたのです。

崇神天皇

神倭朝第十代の天皇です。この天皇のことも御肇国天皇と呼ぶことから崇神天皇が神倭朝第一代天皇であり、それ以前の九代は後世の創作だと主張する歴史家がいるが、そうではありません。神武天皇が神倭朝の意図の大綱を決定し、崇神天皇に至つてその方針を政治の実

際の制度の上に実行したことで同じ名前が付けられているわけです。その実行の最大のものには三種の神器の同床共殿制度の廃止でした。崇神天皇の時までは天照大神を表徴する八咫鏡を含む三種の神器(劍・玉)は天皇と共にありました。それは天皇が三種の神器の実体である言霊布斗麻邇の原理の自覚者であり、その原理による政治の実行者であったことを意味しました。その神器を天皇の座右から離し、神という信仰の対象として、神宮に祀ってしまったのです。

日本書紀に次の如く書かれています。「是より先に、天照大神・倭の大国魂、一二の神を、天皇の大殿の内に並祭る。然して其の神の勢を畏りて、共に住みたまふに安からず。故、天照大神を以ては、豊鍬入姫命に託けまつりて、倭の笠縫邑に祭る」

神といえは拝むものと思う現代人から見れば、天照大神を笠縫邑に祭ったということは神を尊ぶ態度と考えられるでしょうが、天照大神と呼ばれるものの実体であり、政治運用の鏡である言霊原理より見るならば、それは天皇の意識から言霊の原理が失われ、政治への運用を停止したことを意味しています。こうして神武天皇による神倭朝の大方針は、崇神天皇に至って日本の皇室と言霊原理との訣別

という政策となつて実施に移されたのでした。古事記の神代巻に示されている天照大神の岩戸隠れの事件が起こったのです。言霊の原理の完成体である天照大神が岩戸隠れた後には、東洋を地盤とする宗教・哲学の基礎精神である月読命と、産業・経済の基本精神である須佐男命が人類を支配するために残されました。日本民族はこれよりこの二神の支配する精神と物質の文化の外国からの輸入によって生きて行くこととなりました。カナリヤが日本語の原典という歌を忘れた時代に入ります。そして外国からの文物の本格的な輸入を国是と決定した天皇が第十五代応神天皇であります。

応神天皇

天皇の母親神功皇后は神示を得て天皇をお腹に宿されたまま三韓(今の朝鮮)を攻めて属国となし、九州に帰還した後に生んだのが応神天皇であります(古事記)。三韓出征の時は既に神功皇后の夫君仲哀天皇は崩御されていて皇后は摂政の立場にあつたから、応神天皇はお腹に宿られている時から三韓を授けられていたという奇異な運命を背負われ

た天皇であります。九州にある宇佐八幡宮の祭神についての説明書を見ますと、一の御殿八幡大神、二の御殿比売大神、三の御殿神功皇后とあり、更に八幡大神が現身の応神天皇となつて現われた、と書かれています。八幡とは『ヤハ』と読まれ、イスラエルのヤーエの神即ちエホバ神に通じます。日本の神の名では須佐男命といひます。朝鮮の古代名壇君国は日本を去つた須佐男命が建てた国だといふ説のあることから、応神天皇の出征と朝鮮との靈的関係が推察されます。エホバは戦いの神、産業の神ですから、応神天皇以来日本の国が外国の文物を輸入することによつて国家の発展を計ることに専心することになつた精神的状況がよく推察されるのです。事実この時代学者阿直伎・王仁の来朝、儒教・易・曆法・医法・天文等の伝来、呉・織等産業人の渡来が相次いだのでした。日本書紀には建内宿弥始め官民こぞつて渡来外国人を歓迎し、日本人の学問・産業の交流に精を出したことが書かれています。この時以来日本は精神・物質の両面にわたり輸入文化によつて生きるこゝとなつたのです。

以上のように画期的な時代を生きた神武・崇神・応神三天皇のそれぞれの治績を考えますと、それがそのまま、現

代に至る神倭朝の国是の大筋となつたことが了解されます。天照大神として日本民族特有の精神と言葉の完成された原理は岩戸（五十葉戸・日本語）の中に隠れ、代わつて古事記に示される如く常世の国・外国の神（精神）である月読命（哲学・宗教）と須佐男命（科学・産業）を輸入摂取することによつて国家を創造して行く時代であります。このように考えますと神武・崇神・応神の三天皇の名に付けられた神とは、本来の日本系の神ではなく外国系の神であることが明らかとなります。この事実を洞察してか天理教の中山ミキ教祖が「高山の眞の柱（天皇のこと）は唐人や、これがそもそも神の立腹」というお筆先を遺したのも、成程とうなずけることであります。

神倭皇朝建国より二千七百年、時代のいろいろな曲折はありながら神武・崇神・応神の定めた国是は脈々と生き続け、外国文化の摂取・消化の妙味を發揮して、日本国家は現在見る如き物質的繁栄を遂げました。神倭皇朝の建国の目的は見事に達成されたといつても過言ではありません。日本の繁栄と同時に世界に於ける人類の第二の文明である科学文化も漸く完成の域に達してきました。情報技術の進歩は世界の如何なる地方で起こつた出来事も直ちに全世界

の人の知るところとなりませぬ。情報の場では世界は唯一一つの社会です。人類全体が唯一一つの運命共同体である様相を深くして行きます。第一の精神文明に次いで人類は第二の物質文明の時代を終了しようとしているのです。

人類の第一文明である精神文明の基本であった言霊布斗麻邇の原理を人類の意識から隠したのは、第二の物質文明の創造を促進させる為の方便でありました。それ故物質文化が完成をみるとき、その言霊の原理の復活がなければなりません。それは鵜草葺不合朝天皇の意図に違わず人類意識の上に甦って来ました。最初に精神原理の存在に気づかれたのは明治天皇でありました。その時期が物質科学の最深奥の学として原子核内構造に人間の研究の光が初めて当てられた時と丁度期を同じくすることは興味深いことです。爾来九十年言霊の原理を現在この会報で発表される如く太古にあったと同様の姿に復元され、もう少して完成されようとする物質科学との共働による人類の第三文明の創造開始に備えて満を持している状況です。

精神原理を隠し、物質文化を興し、同時に再び精神原理を復活させる、という神倭皇朝の使命は完全に成就したのです。時期も正しく昭和天皇は皇室と古事記の神話との関

係を否定する宣言を出しました。昭和二十一年々頭の人間天皇宣言がそれです。百二十四代続いた神倭皇朝は昭和天皇を以て終焉を告げました。二千七百年の治世の画期的時代といえば神武・崇神・応仁・明治・昭和の五天皇の時代を挙げる事が出来ましよう。

現在の皇室に太古の言霊原理の自覚がなく、さらにその原理を神話に基づいた伝統の儀式として保持した意義も否定されました。今は、正しく天皇の空位時代であります。その意味の現われか、明仁天皇は「憲法を遵守する」平成（平民と成る）天皇となりました。神倭皇朝に次ぐ新しい皇朝の樹立が可能か否か、それは日本民族の今後の課題であります。

【収載】第十三号（平成元年七月二十日）

●言霊学（ことたまのまなび）

言霊学は当言霊の会が考え出したものではない。日本人の遠い遠い祖先が人間の心を研究し、長い間かかって到達した人間精神と言葉の究極の原理である。日本語はこの原理に基づいて作られ、日本の国家並びに世界はこの原理に

よる秩序ある平和な政治が布かれていた。日本や世界各民族の神話が伝える所謂神代の時代である。

この原理による政治は世界においては三千年以前に、日本においては二千年前崇神天皇の時に意図的に廃止された。この時より言霊の原理は宮中賢所の秘宝として、伊勢神宮内外の唯一神明造りの構造として、また古事記・日本書紀神代巻の神話という形の謎として後世の人のために残されたのであった。

近世に至り初めて言霊の原理の存在に気付かれ、その復興に努められた方は明治天皇である。以来数々の諸先輩の血の出るような復元研究が続けられ、戦争後は民間の手に移り、現在当言霊の会がその任を担当している。

言霊学は明治天皇により「言の葉の誠の道」と呼ばれた。

一般に考えられる三十一文字和歌のことではない。天皇に「天地を動かすという言の葉の誠の道を誰かしるらん」という御製がある。言霊学は人間精神の構造とその操作法を余す処なく解明した学問である。その真実性においてこれに匹敵し得るものとしては唯一つ、近い将来完成が期待される物質の究極構造とその動きの学問である原子物理学が考えられるだけである。言霊学と完成された原子物理学とは、

同じ人間生命の表裏としてその真理性を比較対照することが可能となるであろう。

心と物との学問の対照は今迄幾多の例はあった。しかしその双方の学問が、もうこれ以上に進むことが出来ない究極・最終的真理でない限り、対照の発想からは必ず迷信や信仰が作り出される。言霊学は心の究極の学問として、完成されるであろう物理学との対照に充分耐えられる精密なものである。

【収載】第十八号（平成元年十二月）

言靈学随想

●夫婦岩

伊勢にお参りした人はほとんど二見浦に廻る。二見浦の美しい海岸と海上の夫婦岩を見物するためである。二見浦については先に拙著「言靈」随想編で触れたことがあった。筆の語源は「ふたみて」であり、物を書くということを書かれる対象だけでなく書く人の心も同時に表現することになる、ということの説明した。この見る主体と見られる客体との間にどんな交渉が起こって現象が生まれて来るのか。筆で物を書く時、心の中でどういうことが起こっているのか、そのメカニズムをトコトン追求したのが古神道言靈学である。

夫婦岩は大きい夫岩と小さい婦岩が並んでおり、二つの岩の間にしめ縄が結び渡されている。言靈五十音図と比べて見ると夫岩は主体で五母音である。婦岩は客体で半母音に当たる。二つの岩を結ぶしめ縄は主客を結んで現象を創造する生命のリズムであり、八つの父韻で表わされる。従

来しめ縄のことを尻(知)九目縄・七五三縄などと書いてしめ縄の実際の意義を易的的概念で説明して来た。言靈学の父韻の意味が明らかになった現在、概念による二次的な説明は影が薄くなった。

さて二見浦の岸より東を望む時、天照大神に譬えられる太陽は丁度夫婦岩の間から昇るといふ。昇る太陽である天照大神の精神構造を夫婦岩が見事に表徴しているものと説明して来た。しかしこの説明にはひとつ気になることがあった。岸から東に向かって夫婦岩を見る時、それが天照大神を表わす五十音言靈図を示すのならば、夫婦岩は向かって右が主体・母音である夫岩であり、向かって左が客体・半母音である婦岩である筈なのである。ところが実際には夫岩が左にあって大きく、婦岩は右にあって小さい。音図と位置が逆である。

伊勢神宮の特集を出すに当たって参考のためにいろいろな文献を漁った。その中に松本清張氏の「お伊勢参りの変遷」に関する記事(旭屋出版刊)を発見し、うなずくものがあった。昔からお伊勢参りは龜山・松坂方面からの陸路をとる人がほとんどであった。が中には海路船に乗って伊勢をを目指す集団もあったという。この場合二見浦は船旅の終

わりを告げる伊勢神宮への遙拝所であつたという。夫婦岩は海から岸の彼方伊勢神宮に向かうのならば、向かつて右が夫岩、左が婦岩と言霊図と一致するのである。疑問がひとつ解けた次第である。

【収載】第十七号（平成元年十一月）

平成二年

●立春立卵

著者昨年十月東北地方へ旅行に出掛けた時のことである。新幹線が上野を発車して暫く経ち気持ちも落ち着いたら頃、ふと前の座席の背の網の袋を見るとカラフルなパンフレットが入っている。「自由にお持ち下さい」とあるので、つれづれなるままに一冊手にとつて一頁を開いて見た。「卵が立つて本当ですか」という題で獣医師である立卵研究家・津野正朗氏の話が載っている。面白そうなので思わずつり込まれて読んで見た。

津野氏は一九八六年三月、百個の卵を同時に立ててしまふという世界記録を樹立した人物だという。この前人未到の記録はギネスブックに載り、今なお津野氏は立卵の世界チャンピオンであるそうだ。卵を立てるコツは氏のアドバイスによると次の様であるという。一、ガラス板など平で堅い板を用意する。二、振動は禁物なので注意する。

三、表面に水滴が付いた卵は立ちにくい。四、ゆで卵でなく生卵を使う。五、生まれてから三〜十日経った卵が最適、とのこと。そして卵が立つ原理として津野氏は次

の様には話している。

「卵が立つからには卵そのものに要因があるわけで、実はその表面構造に秘密があるんです。顕微鏡で見ると卵の表面には砂丘の連なりのような凹凸が一面にあります。〇・五ミリから一ミリくらいの周期で、小さなうねりが全体を覆っているのです。私はこれを『砂丘様表面構造』と呼んでいます。簡単にいえば卵の底にある数ヶ所の凸部分が支持点となって卵が立つわけです。」そして慣れて来ると卵を立てる角度を少しずつ変えてやれば支持点の分布状況が指先で分かってくるという。つまり「もともと卵は立つ様に出来ている」というのが、科学的な真相の様である……。

以上は板の上に卵を立てる時の話であるが、パンフレットの文章はさらに立卵の意味・内容を範囲を広げて続けている。ここに来て言霊学の研究者としての著者の目は更に引きつけられることとなった。パンフレットの文章をそのまま引用することしよう。

中国の約二千年前の古書「天啓」、「秘密の万華鏡」には「立春に卵が立つ」という記録が残されているという。一九四七年、UPの中国特派員であったランブルという男がこのことを知り、その年の立春に

上海で立卵実験をやっている。当時日本でも関心呼び、なんと中央氣象台の予報室が同じ日に立卵実験をして、新聞紙上を騒がせたほどである。「なぜ立春なのか。子供の頃知ったこの謎解きが、今に至るまで私の心を捉えて離さないんです」と、津野さんは語る……。

「なぜ立春なのか」の疑問は物理学的に、または生物学的にいくら研究してもたぶん永久に答えは出て来ないのではないか。何故なら中国のこの「立春に卵が立つ」という記録は、物質科学で考えられる事実を表わした言葉ではないからである。言い換えると、一年のうちの立春の頃が気候が卵を立てるのに何か適した影響を与えるのだろうか、または立春の頃鶏が産む卵が一年のうちで一番卵が立つに適した構造となっているのはいか、という様なことを表現しているのではないことである。それならどんな意味があるのか。それは精神的な大きな事実を日常の平凡な言葉で後世に伝えようとした中国人の深い英知の現われなのであり、更に考えて行くとその表現が、言葉の言葉といわれる日本語の源泉である言霊ことたまの原理に由来していることが分かって来る。以下詳しく説明することとしよう。

話は飛ぶけれど誰でも知っている年中行事なとばなに七夕の祭り

がある。七月七日の夜、天の河の東西にある牽牛と織女の二星が年に一度の逢瀬を楽しむのを祭り、児女が手芸の上達を祈る行事、とされている。中国から昔に伝来したと伝えられている。この七夕の祭りほど有名ではないが、立春の朝の食事の前に食卓に卵を立てて拝む習慣があったという。これも中国よりの伝来だそうだ。何故立春に卵を立てて拝むのだろうか。七夕の祭りは勿論、この卵を拝む行事にしても、単なる思いつきの行事が数千年も続くはずがない。そこには深い意味があるに違いないのである。

中国の「老子」という古い書物に「道一を生じ、一、二を生じ、二、三を生じ、三万物を生ず……。」という言葉がある。道といえは道理とか真理とかいうことであろう。道理が一を生む、といっても何のことか分からない。けれど一般に西洋の学問が目の前に起こる色々な現象を互いに比較し、その共通点を求め、その究極において物質的にも精神的にも一番初めの宇宙像といったものを求めるのに対し、東洋の哲学は一番始めに存在するものが既に分かっているという立場から個々の現象がどうして発生して来るかを説くのが常である。孔子が書いたといわれる易経という本の中にも「この故に易に太極あり、これ両儀を生ず。兩

儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず……。』とあつて、太極という初めの根本の存在から次々と現象が現われ来る過程が説かれている。東洋のものの考え方をこのように見ると、老子が言った「道一を生ず」の一とは根本的な存在である心の宇宙ということを表わしているようである。そして初めに書いた立春の朝食膳に卵を立てて拝むという習慣は、卵を人間の住む唯一の宇宙と見立てたお祭りに違いないのである。卵を拝むとは人間誰にでも共通普遍な一つしかない心の宇宙を祭る、ということなのである(卵が何故一を表わすのか、は後に詳しく説明する)。

一を祭ることで何の効用があるのか、と思う人があるかもしれない。ここで少々余談になるかもしれないが、現代の迷信について触れてみよう。「この科学が発達した時代に今更信仰なんて」という言葉をよく聞く。新聞紙上でもある人の意見としてよく見るのである。しかしこれ程の誤りと迷信は少ないと同時に、この言葉をはっきりと迷信だと片づけない現代の風潮に問題があるとも言えるのである。世の中には誠に奇妙奇天烈で一見して迷信であることが分かる信仰もあるが、それも承知した上でさえ、科学の発達が信仰という人間の態度を否定してしまふという考え

が途方もない迷妄である、ということを知って頂きたいのである。

人類は過去数千年の歴史の営みの中で二つの分野の文明を創造して来た。たった二つの文明である。その二つとは精神と物質という二つの分野である。もつと正確に表現するならば次のようになる。「考える、故にわれあり」と言った哲学者がある。この考えるということはどういうことなのか、を心の内面を反省することによって求めて行く立場がある。この立場から哲学・宗教が発生して来る。この道は数千年来東洋地域を中心に発展して来た。これとは反対に「考える」対象となるものをあくまで対象物として研究して行く分野がある。科学である。この立場は過去は主として西洋を中心として発達して来た。同じ何かを考える、という事実を一方は内側に、一方は外側に向けて追求して行く。お互いに立場も求める方法も違うのである。だからいくら科学が発達しても、人間はどう生きるべきかを教えてはくれない。科学は信仰に取って代わることは出来ないのである。科学的合理精神が世界で最も旺盛な西ドイツ(當時)の国民に迷信がまた最も多いという統計が出ているのである。

それなら哲学とか宗教は結局何を求めているのだろうか。それが先に書いた「一」である。人間の心は今泣いたかと思うと、もう笑う。今日の関心も明日は忘れられてしまう。人間の心はころころと変転極まりない(ころころは大和言葉の心の語源である)。この掴み所のない心の出来事は一体何処から発生して来るのか、を考えるのが哲学であり、宗教であろう。その発生の大本を禅では空と呼び、また他の宗教では極楽とも天国とも呼ばれる。末法の世といわれる現代では空とか極楽・天国と呼ばれて来た大本の世界を実際に体験し、確かめた人が誠に少ないから、そんな結構な所があるなんて全くはかない心の慰めに過ぎないと現代人は思い込んでいる。人々に極楽や天国を説教するお坊さんや牧師さんでさえ「あなたは実際に極楽や天国に住んでいるのか」と尋ねられれば、答えは「いいえ、唯そこに住みたいと努力しているのです」であろう。実際に東京駅に行ったことがない人に東京駅の様子を尋ねなければならぬという全く奇妙な世の中が現代という時代なのである。これでは「この科学の発達した時代に今更信仰なんて」といわれても無理はないのかもしれない。

しかし宗教の各教祖が教えてくれた極楽・天国・空・救

われと呼ぶ世界は実際に敵として存在するのであり、それを信じると信じない、見ると見ないとに関係なく人間の心はそこに住み、そこに生きているのである。そして各教祖が教えてくれた修行の道を忠実に心の反省によって求めるならば、自分の生命がそこに生かされていることを目の前のリングを見るように確実に知ることが出来るのである。そして東洋の哲学・宗教はその大本の世界が既に分かってしまった所から記述が始まるのだ、ということである。立春に卵を立てて拜むという中国の儀式は、生命の根元である世界を心に刻むための儀式だということが出来る。

生命の大本である唯一つの世界・宇宙を祭って何の効用があるのだろうか。それを考えてみよう。人々はこの世を浮世または憂き世という。何事につけ争いと心配の絶えない世の中である。何故争いや心配が起るのか。簡単にいえば自分の望む心と相手の思いが、または自分の周囲の状況が相反するからである。自分が期待したとおりに妻がやってくれない。自分の予想に反して世の中が動いてしまった。等々みな心配の種となる。相反するもの同士を何とか合わせようと苦心するが、事態はますますこんがらがって来る。人は一生乱れた糸のしがらみから抜け出ることが出

来ない。生命の根本の世界から生まれ出た枝葉と枝葉をだ
け考えて丁度良いようにしよう、とするのであって、一時
的にはともかく長期の調和はとも無理である。要は自分
の心も他人の心も共に発生して来る唯一つの宇宙に一度帰
ればよい。禅の言葉に「吾と汝と同根、また奇特なり」とあ
る。「お前と私は元々同じ根から出て来た兄弟・同胞な
のだから争う必要はないわけだ。意見はどんなに異なつて
も何とか妥協点を見つけて仲良くやって行きましようや」と
いう友情が湧きさえすれば物事はスムーズに行く。争い
や心配事を解決する最も確実な道は大本に帰ることであ
る。「おうちがだんだん遠くなる、遠くなる」という童謡が
ある。人は誰もが青雲の志を抱いて世の中に飛び出す。し
かし事、志に反して次第に憂き世に沈み込んでしまう。失
望する。勇気を持って立ち上がる手段は、無一物で飛び出
した青年の時代の心に帰ることであろう。「今来たこの道
帰りゃんせ……」と童謡は言う。著者が以前座禅に精を出
していた時、よくこの歌を口ずさんだことを思い出す。

さて人間全ての心の根本宇宙である「一」を心に刻み込む
効用は理解することは出来た。それによって今迄悩んでき
た心の葛藤を解きほぐすことは出来る。出発点に戻ることに

は出来る。けれど新しい気持ちで「もう再び失敗し失望は
しまい」と世の中に再出発して行って必ず順調に仕事が出
来るのだろうか。生きるための方法は一生の間暗中摸索し
なければならぬのだろうか。そんな疑問も起こって来は
しないか。如何にして生きるのか、の確実な法則はないの
だろうか。

この疑問について考えるために、哲学や宗教とは違つても
う一つの分野の科学を取り上げることにしてしよう。科学では
今世紀(二十世紀)のはじめから原子物理学が発達した。そ
れまでの科学は水とかガラスとか空気とかの物質の組成で
ある酸素・水素・窒素や炭素……とかいう元素までの研究
に止まっていた。各元素は化学反応によつて化合したり分
解したりはするが、元素そのものは壊れないもの、その奥
に研究の手を延ばすことは出来ないもの、と思つていたの
である。ところが原子物理学はその壁を突破してしまった。
各別個の物質の要素と思われて来た水素とか炭素とかが、
実際には目に見えないがその奥の究極の存在である電子と
か陽子・中性子……という原子核内の要素から見る時、永
久不変の存在ではないことが分かつて来たのである。

このことは先に書いた哲学・宗教の立場で言う「一」の宇

宙を、科学は既に突き破って更に深く突き進んでいることを物語っているというものが出来よう。科学は個別である枝葉である化合物から元素までの世界を突破して、目には直接見えることはないが、確実に物質という存在を形成している原子の領域(宗教という空の宇宙)を確認してしまっているのである。これが科学的に見た「一」の宇宙である。

それだけでなく科学はその「一」の世界の内容に更に深く研究のメスを入れて、その直接には目で見ることが出来ない世界の内容である電子・陽子・中性子やその他の核子を次々と発見し、原子核内の構造を説明する日も近い模様である。この「一」の内容が明らかになれば科学は自由自在に物質を合成・生産することが可能となろう。

この日の出の勢いの科学の現状と現在の哲学・宗教とを比べて見よう。世界の哲学・宗教は確かに「一」を掴んでいる。しかしその「一」である大本の宇宙の内部の消息については、たとえば話や曖昧な概念的説明があるばかりで、どうもすっきりしないのである。「一二を生じ、二三を生じ、三万物を生ず」と言っても、一は分かるとして次の二とは何なのか、まして三とは、全く漠然としている。易経でいう太極・兩儀・四象・八卦……にしても全て概念上の説明

であって、兩儀とか四象とかが実際に心の宇宙の中の何を指すか、の点はぼかされてしまっている。その実体は全く暗中摸索するより他はない。それに比べて科学は「一」である原子の内容を電子・陽子……とそのものズバリと命名し、その大きさ、電荷の数量まで明らかにしようとしている。これでは人類の文明を支える哲学・宗教と科学という車の両輪は、科学の輪が年々大きくなっていくばかりである。哲学の貧困が叫ばれて既に久しい。

このままでは物質科学の怒濤のような進撃の前に貧困な人間の心は押し潰されかねない。物質の豊かさの中に人間社会が崩壊して行くという何とも情けない事態も考えなければならなくなった。この全く奇妙なそして危険な事態を回復して物質が豊かであるがために更に人間が住みよい平和な時代を築く方策はないのだろうか。ある。高度に発達した物質科学を人類の福祉のためにのみ役立つようコントロールすることが出来る人間精神に関する原理の出現である。この要望に応えることが出来る唯一つの精神原理としてここに言霊(ことたま)の学問を登場させることにしよう。

東洋の宗教・哲学が未だ明らかにしていない「一」の宇宙

の内容についてわが言霊学はどのように解明しているか。言霊学が明らかにする「一」の内容、所謂心の先天構造について話を進めることにしよう。

言霊学の教科書に二冊ある。古事記と日本書紀の神代巻である。今回は日本書紀を取り上げることとする。「…天地未だ割れず陰陽分かれざりしとき、渾混れたること鶏子の如くして、溟滓にして牙を含めり……」(神代上の巻)。

先に書いた現象が出て来る「一」の宇宙が鶏子(鶏の卵)であるとする文章がここに見られる。宇宙(天地)の始めが鶏卵の如くである、ということ以下言霊学で説明して行こう。

この始めの宇宙はただ澄み切っていて何も無いのではない。その中に一切の現象が生まれ出て来る牙(兆)が含まれ充滿している。次の日本書紀の文章に移ろう。「時に、天地の中に一物生れり。状葦牙の如し。便ち神と化爲る。国常立尊と号す。葦の芽は枯れて何もない河原の土の中から、春ともなれば動物の牙のように、また角のように伸びて来る。この葦の芽のようなものを日本書紀は国常立尊(神)と呼ぶのである。

国常立尊とはどんな意味を持つのだろうか。国とは組んで似せる、の意。「一」の宇宙から出て来る現象に言霊を組

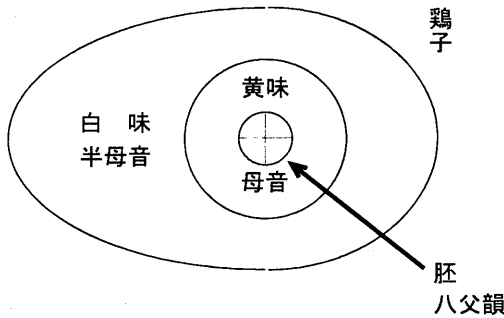
んで現象の実相に限りなく似た名前を付ける。これが人間の文化活動である。国(組似)とは一切の現象を指している。現代国といえは国家のことであるが、国家は文化活動の集大成である。その現象(くに)を恒常に(とこ)成立させる(たち)力(かみ)というのが国常立尊の意味である。国の代わりに囷とも書く。物語で有名な水戸黄門は光囷という。中に八方が入る。八方といえは易でいえは八卦のことであり、言霊学ではチイキミシリヒニの八つの父韻である。父韻とはウオアエの四つの母音に働きかけて現象(くに)を生んで行く根源の兆としてのエネルギーである。

民間神道には節分の夜、良の金神国常立尊が世に現われて世界を救うという予言が行なわれている。うしとらとは東北の方向、金神とはカネ(神音)の神で言霊のことであり、特にこの場合八つの父韻を指している。数千年も前から言霊の五母音のことは東洋哲学で風水空火地の五行などと名を付けられ概念として説明されているが、八つの父韻の方はわずかに易の八卦としての名が付けられているだけであった。しかし八つの父韻は現象を生む生命の根本のエネルギーであり、人類の歴史が大転換を迎える日(節分)に人々によって自覚されることとなる、という予言である。

さて鶏卵の話に戻ろう。「一」である宇宙はまず陰陽の両儀に分かれる。両儀とは主体と客体、能動と受動、雄と雌という二者である。言霊学はこれにア(吾)とワ(我)と名付ける。易は両儀四象を生ず、という。アとワはそれぞれアオウエ・ワヲウエの四母音・四半母音に分かれる。母音と半母音は鶏卵の中では黄味と白味として見事に区別されている。

しかし黄味と白味だけがあっても雛ひなごは生まれぬ。黄味と白味との間に受精された胚子があり、その胚子が成長して雛が生まれて来る。この卵の構造を言霊学に移し替えて見ると、黄味はアオウエの母音、白味はワヲウエの半母音であり、胚子を受精させるものが八つの父韻である。言霊父韻チイキミシリヒニは母音と半母音を真ん中から刺戟し、逆に見るなら母音と半母音は自己の中に父韻を包み込むことよって現象を生んで行くのである。生み創造された現象の単位が子音である。以上のように日本書紀は受精された卵子で

図 019-B



ある胚子を受精以前の精子と見て、鶏卵を宇宙の内容として説明しているのである。

さて鶏卵を「一」の宇宙と見てその構造を説明する話は一応ここで終わることになるのであるが、人間の生命が色々な現象を創造する構造を説明する言霊学は更にその奥の消息を明らかにしているのである。話は少々難しくなるかもしれないが簡単に触れておくことにしよう。

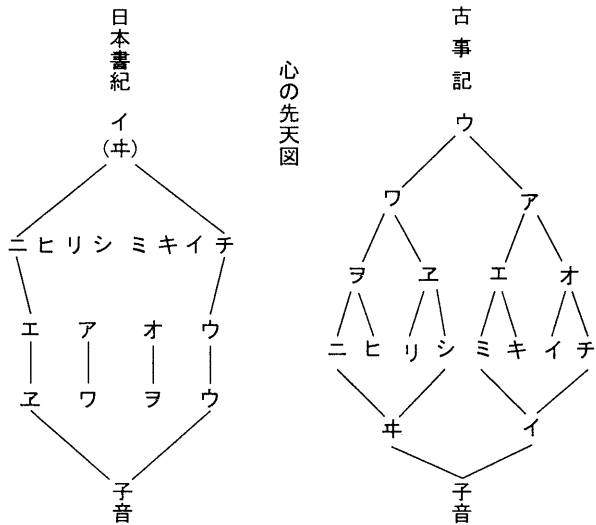
父韻と母音・半母音とを結合させて第三の現象である子音を創造するのは誰か、という問題である。父だけでも子は生まれない。また母だけでも子は生まれない。能動者である男性と受動者である女性を結びせて第三の子を生じさせるもの、言い換えると男性である父と女性である母とを、理の上で一步引き上げて「親」という存在にさせるものが考えられる。これを生命の創造意志という。この親のことを宗教は造物主と呼ぶ。造物主は全てのものの親である。重ね

て言うがそれは母音でも半母音でもなく、また父韻でもない。これら母音・半母音や父韻の一切を統括し操作して万物を創造する究極の存在である。この生命意志を言霊学は親音イと名付けるのである。

以上が鶏卵を宇宙と見立てた生命の構造についての言霊学の説明である。日本書紀は宇宙の始めを生命の兆(まき)してである国常立尊(父韻)から説き始め、古事記はその兆(まき)が育っていく母体(母音)から始まっている。一見矛盾するように思えるが、実はそうではない。両者はどちらが前、他方が後ということがない同時的な存在なのである。国常立尊の八つの葦牙(あしな)は宇比地邇神以下の八つの父韻であり、葦牙を包み込んで育てていく母体は天乃御中主神・高御産霊神・神産霊神……の十個の母音・半母音である。参考までに古事記・日本書紀の先天図の順序を図019-Cとして示そう。

言霊学の理論説明となると話がどうしても難しくなってきた。そこはご容赦をお願いして中国の古書が伝える「立春立卵」の結論といったものに進もう。「卵を立てる」と古書にある真の意味は、この文章の始めに述べたような平らな板の上に卵を工夫して立てることでもなく、また立春の朝、食卓に卵を立てて飾って拝む習慣のことを言っているので

図 019-C



もない。立卵というのは鶏卵によって古人が表徴した人間の心の宇宙の構造を言霊(ことたま)として明らかにした究極の原理を、心の中しっかりと自覚し確立することを意味している。

人間がこの言霊による心の構造の原理の自覚を完成させた時はどんなことになるのだろうか。この言霊の原理は、原子物理学が近い将来完成させるであろう物質の究極構造の原理と、丁度人間生命の表と裏として対比することが出来る精神の究極構造の学であるから、科学が人類にもたらした物質文明の豊かな成果を人間の福祉に百パーセント役に立つものとして運用しコントロールすることが可能となる。

国家間の戦争や社会主義と資本主義の確執、労使間の紛争、自然環境破壊等の問題は乱れた糸を解いて行くように解消して行くであろう。国家間の垣根は最小限度にまで取り払われ、やがて名実共に備わった地球連邦の創設となろう。かくて人類は二千年にわたったキリスト紀元を卒業し、精神と物質両原理が手を携えて進む新紀元創造の時代が到来する……その方法と経路は如何。それも究極の精神原理が指示するであろう。

「卵が立つ」とは人間による言霊の原理の自覚の確立の意味であった。立春とは古代日本の神代歴史の一月元日に当たる。元日はすべての事の始めである。言霊原理の自覚の完成された時、その時が人類の新時代の始まりである、とい

うことを儀式という形式で後世に予言したのが「立春立卵」なのである。

「注」

以上本文にあるように昔中国より伝来したといわれて来た「立春立卵」や「七夕」の祭りが、もともとは我が国の古代神道である言霊学による人間の心の構造に関する原理と、その原理法則による人類歴史の巧妙な予言であつたことが了解される。それが中国に渡り、我が国における言霊の原理の隠匿以後単なるお祭りの儀式として世の中に伝わり、それがまた逆輸入の形で日本にもたらされたものであろう。七夕の祭りの言霊学の意味を知るならば、読者はその史実を更に確信するであらう。「七夕」については稿を改めてお伝えする予定である。

【収載】第十九号（平成二年一月）

●神様の戸籍 その一

日本全国津々浦々いたる処に神社が建っている。大きいのは伊勢の皇太神宮や出雲大社を始めとして、小さいのは村社・部落社から個人が祭るお社まで、その数は計り知れ

ない程である。神社であるからにはその中に必ず神様が祀られている。伊勢神宮には天照大御神、出雲大社には大国主命が祀られている。天満宮の御祭神は学問の神である菅原道真公、東京代々木の明治神宮の御祭神は明治天皇である。これらの神社と御祭神については信仰心がないといわれる現代人でも大方の人は知っていることであろう。

しかし神社の中には御祭神が全く分かっていないが、その神様がどんな働きをするのか、人間生活とどんな関係にあるのか、となると全く分からないままに唯それが神様だから、ということとで参拝されている神社が余りにも多いのである。またある神社ではその御祭神の本来の意義が長い年月の移り変わりのうちにすっかり忘れられ、本来の姿とは全く異なった内容の神様として崇められている場合もある。たとえば四国の金刀比羅宮などは御祭神の意義が少なくとも二回は変わって来た。現在同宮は航海安全の神として船会社の信仰の対象となっているようであるが、金刀比羅宮の本来の意義が理解されると、その御祭神の内容の移り変わりが世の中の変遷と一致していて誠に興味深いこととなる。

神社の中には本社の他に日本各地にその末社(事業で言えば支社・出張所)を多数持っているものがある。八幡・稲荷・住吉・浅間・白山・日枝・金比羅・諏訪・鹿島・香取などの神社がそれである。これらの神社の末社の数を合計すると恐らく全国の神社全体の数の半数を占めるのではなからうか。

神社の御祭神がどんな神様なのか、どんな働きがあり、人間生活全般とどんな関係にあるのか、などに関わりなく年始の初詣などには多くの人々の参拝で神社は埋めつくされる。参拝者の御祭神に対する祈願は、清々しい気持ち・家内安全・商売繁盛・受験合格・厄除・方除等を求めるご利益信仰なのである。神様を祀る神社の側でも参拝者のこの風潮を察知してか、御祭神の意義の普及よりか、ご利益の効果の方を宣伝して参拝人の数が増すことにのみ専念しているように見える。

昔から日本神道の神様は八百万やっぴゃくまんの神といわれている。それぞれの神様の名前に違いがある以上、それらの神様の意味・内容や働きにも自ずと違いがあるはずである。多くの参拝者を集めるこれらの神々がどんな神様なのか、その神様と人間生活との関係はどうなっているのか、を調べ、

日本人の魂の奥底に流れる偽りない心情に触れることが出来るならば、意義あることであるに違いあるまい。いわば神様のルーツに迫ることであり、神様の戸籍調べということが出来る。

さて神様の戸籍調べをすると先ずその戸籍の元となる戸籍台帳が必要となる。神様の戸籍台帳とは何なのだろうか。昔、その時の朝廷が諸国の神社の神名・神社の格式・領地などを定めた記録が遺されている。しかしそれはその時代々々の神社の格付けであり、神様の内容ではない。神というものと人間の生命との深い関係を明らかにしない限り、神様の戸籍調べとはならないだろう。問題がここまですると神とは一体何なのだ、ということになってしまうのである。

現代人の大方は「昔、ある地方で尊敬されていた人が死んだ後、その人の靈魂を祀って神社を建て、またはある時ある部族に御利益を与えたと信ぜられる出来事の靈的な原因を神として祀ったものが大きく国家的な信仰を集めて神社となったものであらう」ぐらいに考えることであらう。

勿論そういう神社も多数あるのであって、天智天皇を祀る近江神宮、南朝の忠臣楠氏を祀る湊川神社、幕末期の蒲生

君平を祀る蒲生神社等その例である。しかし日本の神社すべてがそうなのではない。特に古事記・日本書紀の神代巻に出て来る神様となると人間の生命の、そして人類の歴史の奥底の処で人間を生かし歴史を創造している精神的な実在を表徴して居るものなのである。いわば人間の生命そのものである存在なのだ。神様の戸籍をこのことから考えて行くことにしよう。

筆者はよく「神様って何なんですか？」と尋ねられることがある。そこで辞書を参考にしてみよう。「神—人間の宗教心の対象となる超人間的な威力を持つもの。宗教によって異なる。たとえばキリスト教では、宇宙を創造し支配すると考える全知全能の唯一絶対の主宰者(上帝・天帝)をい、神道では皇祖神を始め各地神社の祭神を称した」とある。

辞書のこの説明を読むと筆者は直ちに仏教の正像末三時の予言のことを思い出す。正像末三時とは正法・像法・末法の三つの時代ということである。正法時とはお釈迦様が死んだ後の五百年間のことで、教・行・証が整っている時代である。人間が仏となるための教え、仏に達するまでの修行、その修行を積み重ねば仏様になることが出来るという証

明の三つが揃っている時代ということである。次の像法時代というのは正法時に次ぐ千年間のことで、仏となるための教えと仏に達しようとして修行する人はあるが、仏になり得たという証果を得た人がいない時代である。教行の二つはあるが証はない時代である。

次の末法の世は万年といわれ、仏の教えが人々の関心から消えてしまい濁悪の世相が続く時代である。お釈迦様がなくなつて二千五百年余、今は末法の真つ只中ということになる。仏となるための教えがなくなつてしまふと仏と人のつながりが消えてしまつて、唯仏という言葉だけが残る。そうなると仏様とは人間界からはかけ離れたもの、そして人間に対して超越した力を持っているものと考えられるようになり、人間は唯々その前に頭を下げ御利益を頂くようお願いすることだけが可能な存在となつてしまふ。この末法の世の人々の仏様に対する態度はそのまま先に書いた神様についての辞書の説明と一致してゐるではないか。

日本の神道の神々に対する日本人の考え方の移り変わりにも正像末と同じことが言えるのである。今より二千年以上昔、日本には素晴らしい精神文明の華が咲いていた。その文化の中心となつていたのが、アイウエオ五十音の言霊

の原理であつた。正法の時代、仏教では仏に至る道(教行証)が備わつていた。同様に日本神道に於いては人間が人間であることの全てが明らかにされていたのであつた。人間の心の一切は言霊の原理によつて理解し表現することが出来た。人間を人間として生かす一切の条件、これを神といわないで他に神は何処にいるだろうか。古代の日本人は神(かみ)といへばそれが何であるか、その内容を明らかに知つていたのである。

それなら神とは何なのか。神とは言霊である。人はそれによつて考え、それによつて表現し、それによつて生きてゐる。この時代、人々は他人の言葉や世の中の出来事の表現に対して、それがどんな意味を持つのか、を考え解釈する必要がなかつた。言葉がそのまま物事の真実の姿(実相)を表わしてゐたからである。聖書ヨハネ伝に見るように「言は神なりき」であつた。

この時代、人の神に対する態度は斎(いつ)くことであつた。斎くの語源は五(いつ)作る、である。五とはアイウエオの五母音のこと。作る、とは心の中にアイウエオと一つ一つ築き上げて自覚して行くことである。人間の心は五つの母音の五重(いつぶ)の構造の中に住んでゐる。家の語源である。人は心

の住家である五母音を自覚することによって人間の精神の全てを、言い換えると神を知るのである。これが齋く、である。現代の宗教の難しい言葉では神人合一（神と人とが一体となった状態）という。

今から二千年前、神倭朝第十代崇神天皇の時、言霊の原理の精神文明創造のための運用が停止され、その原理は神として神社に祀られてしまった。神といわれるものの内容であり、人間が人間として生きる一切の条件である言霊の原理を理解して、それを世の中の文化創造のために使用することが出来る人がいなくなり、原理は信仰の対象となる神様として神社の中に封じ込められてしまったのである。この時以来、神は齋くものから拝むものに変わってしまった。拝むと愚かとは同じ意味の言葉である。愚かな人間が超越した力を持つ神様を拝む時代となったのである。

先に仏法の正法末の三時代のことを書いたが、それに比べて神道は正法から末法へ一挙に転落したことになる。強いて神道の像法時代を求めるならば、神倭朝第一代神武天皇より約一千年の間を言うことが出来ようか。この時代には言霊の原理の政治その他の文化創造への適用は停止されたが、原理の理解者は相当数残っていた。神というものが

何であるか、の内容の理解者が全くは無くなってはいない時代だったという事が出来る。言霊の原理が日本の文化社会から姿を消して二千年、現代は神道においては末法時代のどん詰まりということが出来る。神社の神主さんもそこに参拝する人々も、念頭にあるものは唯々「御利益」という世となったのである。

前置きが長くなった。というのも神様の素姓・戸籍調べのための戸籍台帳として、日本神道の基礎であり、同時に古代日本語の原点であるアイウエオ五十音言霊図が必要であることを知って頂きたいためである。この戸籍台帳に照らし合わせることによって神々の精神宇宙に占める位置、従って人間の社会とどう関連して行くかが手に取るように明らかになって行くであろう。

日本の神は八百万やおよぼすの神といわれる。事それ程に数が多い。神社の数も無数である。さて、その多い神社の中のどれから戸籍調べを行ったらよいか。となると先ず一番に考えられるのは高祖神といわれる天照大御神を祀る伊勢神宮であるが、このお宮については昨年（平成元年）この会報の特集で詳しくお伝えした（会報第十四号、十七号）。そこで筆者が思い出すままアト・ランダムに神社と御祭神について感

想を書き綴って行くことにする。当然取り上げるべき神社を書き忘れたり、内容に研究不足のこともあろうかと思う。その点御容赦願ひ度い。

雄山神社

この神社の名を聞いてどここの社かすぐ分かる方は山登りに関心のある人である。立山連峰の中の標高三〇〇五米雄山々頂にこの神社は建っている。御祭神は古事記・日本書紀に出て来る伊邪那岐神である。何故この神社を第一番に取り上げたか、というと、この御祭神が日本の八百万の神々を創世した父の神だからである。立山とはもと父の山と言った。トトが後世タテに訛ったのである。万物の父であり、創造主神・造物主である神の住む山の意であつた。

記・紀にある伊邪那岐神は言霊学という言霊イ(宇宙生命意志)を表徴する神名であることは今迄幾度となく書いた。言霊五十音そのものを表す神である。いわば神様の戸籍台帳そのものである。古事記神代巻には伊邪那岐神が妻神である伊邪那美神と力を合わせて多数の御子神を生むことが記されている。大事忍男神・石土昆古神・石巢比売神・大戸日別神……と御子神が出来る。御覧になるようにそ

の神々の名の中に石とか日とかいう自然の中に存在するものがあるためか、一般には伊邪那岐という神が宇宙が出来始めるために自然の物を作り出して行く有様を記したのであろうと思つてしまふ。しかし事實は決してそうではない。昔の人はそんなに幼稚な精神の持ち主ではなかつた。

宇宙生命の意志が頭脳中枢に働きかける。その刺激によつて頭脳中枢を形成している先天の精神要素十六個の言霊が活動して、後天現象の単位である三十二個の子音を生んで行く。古事記はこの純粹な精神の側から見た万物の創造を伊邪那岐神の「子生み」として説明しているのだ。この精神構造の解明発見は丁度、現代科学が物質の原子核の内部の構造を明らかにしつつあるのに匹敵する人類文明の成果なのである。伊邪那岐神言霊イ以下先天十七個、後天三十二個、言霊の文字一合計五十の言霊で人間の心は構成されている。人間の心はこの五十個の言霊以外のものではなく、五十個が欠けることもない。そしてわが古代日本の言葉は先天・後天の五十個の言霊の實際に即した組み合わせによつて制定されたのである。このような組成による言葉は世界の中でも日本語より他には存在しない。

この雄山神社は夏の登山シーズンともなると、神主さん

が毎日山に登り、参拝者に御神酒を振る舞って呉れる。筆者がこの神社にお参りしたのはもう十年程も前のことである。八月中旬のよく晴れた日だった。前日標高二千五百米の室堂の山小屋に泊まり、翌朝早く起きて登った。途中の残雪を踏み岩場を過ぎて雄山々頂に着いたのは朝九時を少し廻った頃であった。参拝者が十五人程集まったところで神主さんが御祓いをし、御神酒を注いで呉れた。岩登りの汗ばんだ肌に山の冷氣と御神酒、まことに爽快であった。

その後で神主さんが東の方を指さして山下の雪溪の彼方に連なる後立山連峰・槍ヶ岳・穂高連峰等の山々の名を教えて呉れた。本州の背骨に当たる峰々を一望する景観は見事であった。雄山神社参拝を終え、山頂社務所脇の売店で土産に金色の小さい鈴を一個買い、筆者が立山連峰の縦走に移ったのは十時であった。その時の気分の清々しさは霊峰立山と呼ぶにふさわしいものであったことを記憶している。

尚雄山神社の撰社はトトの山の山麓立山町、富山鉄道線山嶸寺駅より徒歩三百米の処にある。

白山比咩神社

この神社は石川県石川郡鶴来町にある。金沢市野町より北陸鉄道の電車で三十分、加賀一の宮駅前である。創建は崇神天皇の時と伝えられる。撰社・末社の数は全国に多数であるが、その社名は白山比咩神社ではなく白山神社と呼ばれている。御祭神は伊邪那美神であるが、神社の発行する案内書には「御祭神は白山比咩大神(菊理媛神)・伊邪那岐神・伊邪那美神」と書かれている。この四神のうち伊邪那岐神については雄山神社の項で説明したが、残りの三神である白山比咩大神・菊理媛神・伊邪那美神はどんな関係にあるのか、については神道学者や霊能者の間で議論が分かれるところであり、誠に興味深いものがあるが、此処では伊邪那美神についてのみお話しし、他の三神の関連については後に白山神社の項で詳しく説明しようと思う。

この神社の所在である石川県は昔加賀の国と言った。その語源は「カカの国」であり、お母さんの国の意である。伊邪那岐神は万物の親のうちの夫・父であり、伊邪那美神は親のうちの妻・母である。岐神は言霊イ、美神は言霊キである。今迄何度となく説明したように、主体であり吾である言霊母音と、客体であり汝である半母音とが同交感応して実相である子音を生むのだが、その時の母音と半母音の、

感応の契機となるのが万物の親である伊邪那岐・美神である言霊イ・キである。

筆者がこの神社に参拝したのは先に書いた立山の雄山神社参拝の翌日、八月中半の猛暑の日であった。立山を下し、麓の雄山神社の摂社に参拝した後、電車を乗り継いで金沢市に着いたのは正午近くになっていた。あわよくばその日の内に白山々頂まで登ろうと思っていた思惑がはずれた。白山々頂まで登山口の別当出合から五時間かかるから、午後遅くからの登山は無案内の人には無理である。やむなく白山への途中にある白山比咩神社参拝のみに変更した。杉木立のウツソウとした境内はさすがに涼しかった。鶴来町のこの神社が下社で、奥社は白山(標高二七〇二米)山頂にある。神社の案内板に白山の山自体が神の御神体だとあり、神社の一角に霊峰白山を望む遥拝所が造られていた。

参拝が終わり社務所で神社の案内書と共に小さい鈴を一個買った。この神社の鈴は銀色であった。雄山神社の金の鈴、白山比咩神社の銀の鈴。鈴は人が口を開いた形を示している。鈴は神の口より出る言葉、言霊である。宇宙の意志である言霊イとキの鈴が鳴ると次々に全部で五十の鈴が

鳴り出す。人間の精神より見る宇宙はこの五十の鈴・言霊で全てである。鳴り始めは言霊イ・キである伊邪那岐・美の神であり、鳴り終わりは人間精神の理想の鏡を表す伊勢五十鈴の宮の天照大神である。

岐・美二神の金と銀の鈴は紐で結んで今でも筆者の机の傍らに置いてある。時々手に執って振ってみる。よい音である。まるで天地創造の響きのように。……言霊の勉強を始めて最後に伊邪那岐・美の二神、言霊イとキの内容その働きの様相をはつきりと自己の心中に把握することが出来た時、人間は初めて人間とは、ホモ・サピエンスとは何であり、何処から何処に人類の歴史を創造して行つたら良いか、が明瞭に理解され、その実行が可能となるのである。

枚岡神社

この神社は大阪より近鉄奈良線に乗り、枚岡駅で下車すると駅の裏側にある質素な神社である。筆者が今年(平成二年)春参拝した時は大々的な改修工事をしていった。社内には御祭神は天兒屋根命・比売大神・齋主大神・武甕槌大神とあり、創建は神武天皇の時、天皇天種子命に命じて祀らしめた、とある。

枚(ひら)は靈頭ひらで、靈を言靈の靈と見れば、枚とは言を靈と結びつけたものの意で言靈のことである。または靈を言靈ととれば、枚は言靈を形に頭したものの意で神代文字のことともなる。御祭神である天兒屋根命とは天の兒即ち言靈子音で出来ている屋根の法則またはそれを司る役目の人の意である。皇祖神である天照大神の精神構造を言靈五十音で表した音図は、向かつて右側の母音が縦にアイエオウと並び、上段は横にア・タカマハラナヤサ・ワと並ぶ。この横のA段は音図の一番上の段で建物で言えば屋根に当たる。このA段の自覚に立つ時、人間は最もよく物事の真相を明らかにすることが出来る。そのA段の自覚された法則またはそれを司る祭祀の役目の人に与えられた名が天兒屋根命である。祭祀の役目であるから齋主大神ともいう。武甕槌神については別項で解説しよう。

神武天皇とは神かみやま倭皇朝初代の天皇である。この皇朝の任務はそれ以前の鵜草葺不合皇朝まで栄えていた人類の精神文明の原器である五十音言靈の原理を政治に運用することを止め、原理を神として神社の中に祀りこめてしまい、弱肉強食の生存競争の社会を現出させ、それによって物質文明の進歩を計ることであった。そのため天皇は原理を色

々な神社の形で神として祀らしたのである。天種子命とは天の田あめの音たの命の意である。言靈図は田の形をしている。天の田の音とは五十音言靈のことで、天種子命とは五十音言靈を司る役人の意である。神武天皇より前までの天皇は文字通り聖(靈知)天皇であったから言靈を神として神社に祀る習慣は存在しなかった。皇祖皇宗や外国の国王などの御靈みたまを祀る宮はあったが、神社は存在しなかったのである。神を祀る神社の始まりは神武天皇即位より数年前からである。

天兒屋根命なる神名で表される政治上の役目は神倭皇朝の時代に入ってからなかとよは中臣氏に受け継がれた。中臣の寿詞よじという祝詞のりとが現存していることによってその名は知られている。代々朝廷において祭祀を司る役職であった。後年六四五年一族から出た中臣鎌足は中大兄皇子と共に蘇我氏を滅ぼし大化の改新を成し遂げた功績によって藤原姓を与えられたことで有名である。以後昭和の代まで藤原氏は日本の政治の中枢に永く関係することとなる。

【収載】第二十六号(平成二年八月)

●神様の戸籍 その二

枚聞神社

この神社一般には「おかいもんさま」と呼ばれる。九州は薩摩半島の南端の海岸より富士山の形で聳える標高九百米余りの開聞岳かいもんだけを御神体とする神社である。交通は西鹿児島より指宿・枕崎線で開聞駅下車五百米の処にある。開聞の開は枚の訓読みの変化であらう。神社の案内板には創建は神代、御祭神は大日靈命おほひるめのみこと他八柱の皇祖神とあつた。

大日集命とは古事記には伊豆能売いずのめと書かれています。大日集も伊豆能売も伊勢神宮の天照大神の働きに名付けられた神名である。大日集とは昼ひるの眼めということ。人間が万物の靈長といわれるための根本性能の眼目という意味である。

それは言靈エの理性の働きであり、今・此処で自分は欲望（言靈ウ）・経験知（オ）・感情（ア）のどの性能によつて物事に対処したらよいか、の選択智のことである。経験知（オ）が既に過ぎ去つた出来事の間に関連を概念によつて探求する夜の眼である（常に物事の姿をぼんやりとしか把握する事が出来ない）のに対し、昼の眼は実相である言靈によつて裏付けられた至上命令として発動される智慧であり、物

事を昼間の光で見る理性の働きである。古事記がこれを伊豆能売と呼ぶのは御稜威みりやうゑの眼の意である。御稜威とは大いなる働きということ。

社の名前が枚聞となつていて、昔からこの名前に変わりがないことが古書で明らかであることから、言靈（枚・靈頭ひら）を神として祀つた神社であることは明白である。それなら祭神大日靈命とはどんな言靈の構造に対してつけられた神名なのであらうか。それをこの神社の御神体である開聞岳の形が示しているのである。

富士山のような円錐（または角錐）の形をした精神構造を昔は高千穂の奇振嶽くしほをたけと呼んだ。説明してみよう。人間の心を表す言靈の数は五十である。この五十個の言靈を操作して五十の過程を経て到達した人間精神の最高の境地に名付けた神名が天照大神である。五十個の言靈と五十の操作法が天照大神の全内容である。これを図示すると天照大神を表す天津太祝詞音図あまのひるぎのねがひを上下・陰陽にとつた百音図で示される（図027・A参照）。図の中央にフル・フルの四文字が現れる。この四文字の箇所を摘んで図の平面と直角の方向へ引き上げる。すると頂点がフルフルで底辺が図の周囲を作る言靈で構成された五段階の角錐形が出来る。これが高千

穂の奇振嶽である。

フルとは振るで鈴を振って言霊の力を振るうこと。活用・運用の意。天照大神の言霊の力(大日靈・伊豆能売)が振るわれて、実践智を中心にした理想の人間文明社会が建設される。奇振くびの奇は靈妙な、の意。高千穂とは歴史上で言えは言霊の原理に基づいた理想国家建設のために天孫にぎのみこと邇々なほ芸尊あそみが日本に天降った場所である。哲学的に言えは言霊の原理を活用するアイデアが湧き起こる頭脳中枢である。そこで高千穂の奇振嶽とは言霊の原理が靈妙に發揮する力、という事になる。枚聞神社の御神体が開聞岳である、と表徴した古代日本人の言霊学的な意図が理解されるであろう。

筆者がこの神社に参拝したのはもう十数年も前のことである。その年の五月末、家内と観光を兼ねて南九州の神社廻りをした。日向の高千穂神宮に始まり、岩戸神社、宮崎神宮、青島神社、鶴戸神社、霧島神宮と古事記神代巻に出

図 027-A

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
キ									イ
エ									エ
ヲ									オ
ウ	ス	ユ	ヌ	ル	フ	ム	ク	ツ	ウ
ウ	ス	ユ	ヌ	ル	フ	ム	ク	ツ	ウ
ヲ									オ
エ									エ
キ									イ
ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア

て来る神々を祀る神社を廻った。最後が枚聞神社であった。小さいお社で、地図に枚聞の枚ひの字がなければたぶん参拝のため九州の最南端まで足を延ばすことはなかったであろう。小さい社ではあったが、神社の拝殿から見えて、社の後方に聳える開聞岳の姿は立派であった。山の頂上に奥社がある、という。登山の気が起こった。

神社参拝の日は指宿まで引き返して泊まり、翌朝早く出発して八時半頃登山開始。開聞岳は高々標高九百米余の山であるが、海岸から急に聳えている独立峰である。登山口から丸々九百米を登らなければならない。頂上まで三時間かかった。普通山は葛つづみ折まジグザグに登る。この山は珍しく山腹全体を螺旋状に巻いて登るのである。頂上まで山腹を一廻り半する。九合目以上は岩場であった。頂上に丈一米に足らぬ奥社があった。

山頂からの眺めは素晴らしい。北に大きな池田湖を望み、眼下は九州南端の海岸線が美しい。秋か冬の晴れの日には遙か南西諸島が見えるのだそうだが、春の霞のため残念な

がら見ることが出来なかつた。錘形の山容、螺旋状の山道は私にメソポタミヤ地方にあるというジグザートを想起させる。ピラミッド・ジグザートそれに高千穂の奇振嶽みな古代における言霊原理を表徴する呪物である。日本の神代と言われた時代の終わり、言霊原理によって全世界の精神文明が築かれていた事実を後世に伝えようとして、この枚聞神社を遠く南方から全世界を望む開聞岳に祀った日本人の祖先の大望と気宇がひしひしと迫ってくる思いに打たれて山を下りたのであつた。

石鎚神社

主体と客体、母音と半母音が父韻の刺激によって感応同交すると全部で三十二個の子音が生まれる。母音・半母音や父韻が未だ現象として現れる前の先天(空相)の要素であるのに対し、三十二の子音は姿を現した後天現象(実相)の要素であることは今までに度々説明した。この三十二の言霊子音の一つ一つを神として祀る神社が日本各地にある。この子音を祀る神社を一、二取り上げて説明してみよう。

石鎚神社は四国は愛媛県西条市(予讃線石鎚山駅下車五百米)に本社がある。本社の他に石鎚山々頂に頂上社、登

山口に成就社(中社)がある。御祭神は古事記神代卷にある石土毘古神(言霊ト)、役小角の創祀と記されている。

石鎚神社が祀る石土毘古神の正体である言霊トを解説するについて、今は余り世間で知られていない事をお話ししよう。読者はいろは四十八文字を御存じであろう。四十八文字を一字も重複することなく全部使って見事に一つの歌を作っている。一般には弘法大師の作といわれているが、実はもつと古いものようである。

いろはにはへとらるぬると(色は匂えど散りぬるを)

わかよたれそつねならむ(我世誰ぞ常ならん)

うぬのおくやまけふこえて(憂の奥山今日越えて)

あささゆめみしむいもせずん(浅き夢見し酔いもせずん)

いろは歌を右のように四節に区切って、その意味するところを漢詩で表してみると

諸行無常

是れ生滅の法なり

生滅滅し已れば

寂滅して樂しみと為す

となる。この世の中にあるものは何一つとして永久に存在するものはない。この常のないということが世の中に存在するものの法則なのだ。生まれ出たり滅び去ったりする世の中のことに心の拠所を求めることが出来るのだ、という意のない楽しみの境地に住することが出来るのだ、という意味である。この世の中に起こる出来事をよく観察して、終わりにすべてのものは空に他ならない、ということに気づき、一切の現象が出て来る根源の心の宇宙を自覚する心構えと手順を説いたのがいろは四十八文字なのである。と同時にこの手順を示す四十八文字が、その空である心の宇宙の中にある全ての要素——五十(四十八)言霊をも表している。

以上のいろは歌の内容の示す意義を頭に入れておいて、古事記の伊邪那岐・美二神が三十三の子を生んで行く順序を考えてみよう。「既に国を生み竟へて、更に神を生みたまひき。かれ生みたまふ神の名は大事忍男神。つぎに石土毘古神を生みたまひ、次に石巢比売神を生みたまひ……」と古事記にある。そして生まれて来たこの神は第一段階として大事忍男神より火の迦具土神まで三十三神である。

この三十三の神名が言霊の子音を表徴しているものであって、神名の指示する順序に従って言霊を並べてみると――

タトヨツテヤユエケメ　クムスルソセホへ

フモハヌ　ラサロレノネカマナコ　ン

となる。

心の宇宙の中で先天である十七個の言霊が振動すると逐次現象が生まれて来る。とは言っても先天が活動したからといって、頭脳の手順としては直ぐに現象としての言葉が出て来るわけではない。先天が動いた後で頭脳の中で状況・習慣・気力の大小等の取捨選択が行われる。この段階が「タトヨツテヤユエケメ」の十言霊である。次に頭脳内では来上がつて来てまだ言葉にならないイメージを、言葉として組み表現する段階となる。この段階が「クムスルソセホへ」の八言霊である。

言葉として生まれて発音された言葉は空中を飛んで行く。人間の身体を離れていったからと言って、その言葉は単なる音となるのではない。言霊として言(音)と霊(心)を備えている。この飛んでいる段階が「フモハヌ」の四言霊である。

言葉として発音され、その言葉が空気に飛んで行ったから現象は完結したか、というところがそうではない。「喉が渴いた」と思つて奥さんに「お茶」と言つただけでは現象は完結しない。その言葉を奥さんが聞いて「今うちの旦那はなにか言つたが、そうだお茶が欲しいと言つたんだな」と了解することで一つの現象は完結する。

発音された言葉が、自分であれ、または他人にであれ、耳で聞かれ、頭脳内で再びあれかこれかと咀嚼され「ああ、こうだつたんだ」と了解されて初めて現象は終了する。この受け入れられて了解される段階が「ラサロレノネカマナコ」の十言霊である。最後の言霊コで現象としての子が生まれるのである。言霊コの次の言霊ンは了解され承認された内容のイメージ化である神代文字化を表している。そして了解され終了した一つの現象・行為は記憶となつて再び心の宇宙である元の先天に帰つて行くこととなる。

以上のように検討してみると、頭脳の先天構造が活動を始め、種々の取捨選択の後に言葉として生まれ、発音されて口から飛び出し、それが耳で聞かれ、復誦検査され、了解されて、一つの現象が終了するまでに、心の宇宙の中で先天後天の言霊五十音が全て活動することが理解されるで

あろう。そしてこの心の活動の一循環の過程が心の宇宙の全てなのである。この一循環の手順以外に心の活動はあり得ない。人間の行為は千差万別無数であるが、一度言霊の立場に帰つて現象を見ると、この五十個の言霊で一切が表現されるのである。(この手順の詳細については「古事記と言霊」一〇七頁のイラストを参照下さい)そして現象である言霊子音を生んで行く三十三の手順を生まれ出て来る三十三の子音によつて表現したのである。このような表現の妙を「言霊の幸倍へ」と呼ぶ。

さて先天の活動によつて生まれて来る子音のうち第二番目にある石土毘古神言霊トとは如何なる言霊なのか。

先天の活動が起きると子音をタトヨ……と生む。その第一番目の言霊タ(大事忍男神)とは度々説明するように田に通じる。田は稲を育む処。稲(いね)とはいの音で言霊のと。田の形は五十音言霊図に似ている。即ち言霊タとは言霊図全体ということで、言霊で捉えた人間の人格全部ということがある。剣道の試合で、相手に向かつて自分の全身全霊で打ち込むときの気合いには、タチツテのタ行の音を使うことによつて了解されるであらう。日常茶飯の行為も、その始まりでは人格全体が躍動するのであり、一挙手

一投足にも人間の全人格がにじみ出ているのもこの始まりの言靈タによるのである。

全人格である「タ」と生まれ現れたものが現実社会のこの行為となつて行くために二つの関門を通ることとなる。

その関門の役目となるのが第二と第三番目に生まれる子音トとヨである。現れ出た全人格の前に戸(ト)が立てられている。どんな戸か。十の戸である。言靈図で十といえども、確かに母音と半母音並びにその二つに挟まれている八つの父韻計十個の言靈即ち言靈図の横の列のことである。これも今迄度々説明したことだが、人間の行為がウ(欲望・オ(経験知)・ア(感情)・エ(実践智)の内のどの次元で行われるかは八つの父韻の配列によって定まる。全人格の現れである「タ」は先ずこの父韻の配列という主体的な意志の法則の関門を通り規制され、形作られて行く。

人格全体である「タ」が言靈図の横の列十個の言靈の戸によって主体的に規制され、形を与えられた次に、言靈ヨ(石巢比売神)によって更に定まった形に作られて行く。言靈ヨとは四であり世である。「ト」による主体的な規制の次に「ヨ」による客観的な規制を受けるのである。一つの思ひが社会の中で実現して行くためには世の中のしきたり(慣

習)に従う必要がある。世の中の現象は四つの母音ウオアエの次元で形成されている。世と四の言靈法則上の関連を理解されるであろう。石土昆古の石は五十葉で言靈のこと。土とは主体的に(昆古)育む処。石巢比売の巢は住家の意。生命活動が生まれ出て来る住家の意。

以上先天構造が活動を起こして、現象として現れた最初の全人格的なエネルギー「タ」が、次に生まれる言靈トとヨという主体と客体の法則によって規制され形成されて行く過程を説明して来たが、この過程的な説明の中に読者が言靈トというものの内容を汲み取っていたら、と希望している。言靈トとは世の中に存在している一切の物や事の名の中にある「と」と呼ばれるものの内容・意味の全てを含んでいる言靈なのである。

言靈五十音の中で、母音(半母音)それに父韻については、古代よりの宗教・東洋哲学・易经等の教理の中で、きわめて概念的にであるが、或る程度説明されて来た。しかしこれ等の活動によって生まれて来る現象の単位である三十二個の子音については、その概念的な記述さえもない。唯実相(真実の姿)といい、「柳は緑、花は紅」などと芸術的な表現があるだけであった。

真実の姿とは何なのだろうか。「群盲象を評す」という諺がある。盲目の一人は象にさわって「鼻の長いもの」と言った。次の一人は「皮膚がざらざらしたもの」と言い、次の一人は「どっしりと重そうなもの」と評した。物事はそれぞれの見方によって異なった姿に見える。しかし象という動物の真実の姿は唯一つしか有り得ない。この唯一つしかない姿を真相という。この真相を調べて行くと究極的には三十二個の単位があり、その一つ一つに三十二個の子音を結びつけて名を付けたことは、日本古神道言霊学の世界の中で唯一・独特のものなのである。

事実そのものの要素のことであるからそのものズバリの説明の方法がない。それ故にこそ人間精神の秘宝と言われ、キリスト教で「神の口より出ずる言葉」と呼ばれ、仏教で摩尼宝珠とたとえられて来たのであった。そうであるから先に述べた人間の心を構成する五十個の言霊の循環という新しい立場からの石土毘古神(言霊ト)についての解説が、今後の言霊学の研究者にとって真相の単位である言霊千音を理解する上で、少しでも役に立つことが出来るならば筆者無上の光栄なのである。

石槌神社を創建した役小角(役の行者)とは如何なる人で

あったか。その生涯についてはほとんど伝わっていない。ただ日本全国を行脚して各地に神社・霊場を創祀したと、またその奇矯な言動により時の朝廷より憎まれ、伊豆の大島へ流罪になったことが伝えられている。流された年は奈良に遷都が行われる前、文武天皇三年(六九九年)であった。

役小角が生きた時代とは、言霊学の見地から日本歴史を見た場合如何なる時であったのだろうか。第十代崇神天皇が言霊原理を神として神社に祀って以来約七百年、言霊に關する日本人の意識が漸く消滅して行こうとする時であった。日本の伝統を守ろうとする人々はこの言霊の原理を後世に遺そうとして種々の手段を講じつつある時である。

伊勢神宮の式年遷宮の制度を定めて、五十音言霊図の表徴である神宮の唯一神明造りの構造様式を長く後世に遺す施策が講じられた(文武天皇十三年、六八五年)。元明天皇五年(七二二年)太安麻侶によって言霊原理の教科書である古事記が撰上され、ついで元正天皇四年(七二〇年)日本書紀が編纂された。今日言霊原理が完全な姿で復活することが出来たのも、この二書の教えに負う所大なのである。

時の朝廷によるこれらの諸施策が行われている真っ直中

に役小角の各神社創祀の活動が行われ、また伊豆への流罪が行われている。この事から推察すると、言霊原理の伝統護持の運動から見て、朝廷内の正統な言霊学者からすれば、役小角の運動はアウトサイダー的存在であったのかも知れない。或は言霊の伝統を後世に遺すための朝廷の種々の施策を生温いとして、役小角が急進的行動に出たのかも知れない。その当時の経緯がどうであったにせよ、現在日本各地に残る役小角の創建になると伝えられる神社・霊場に筆者自身を置いて見る時、その業績と不撓不屈の精神が今もなお彼が生きてある如く感ぜられるのである。役小角の言霊学上また歴史上の功績は極めて大である、と言うことが出来る。

筆者が石槌神社の奥社のある石槌山に登ったのは昭和六十一年の五月十二日のことであつた。前日泊まった四国西条市から石槌山行きの一乗バスに乗り、登山口下車、ロープウェイに乗り換えて登山の基地「成就」に着く。そこに成就社がある。石槌山信仰の行者さんの基地とのことであつた。成就社参拝は九時。それより登山にかかり、高さ数十米の鎖場や処々の残雪を越えて難儀したが、四国の最高峰石槌山頂(標高一九八二米)に着いたのは正午頃であつた

か。

天気は快晴。山頂直下の奥社に参拝後、頂上よりの景観を楽しむことが出来た。北方斜め下に瀬戸内海に点在する幾多の島々が見える。空気が澄んでいれば南方遙か太平洋は土佐の海が遠望出来るとのことであつたが、春霞のため残念ながら見えなかつた。奥社わきの山小屋の人が「今日は珍しく九州の山が見えるよ」と指差す彼方、雲海の上には阿蘇・霧島の山々が半ば霞んで見えた。周囲の山並みを併せたその景観はさすがに四国最高峰にふさわしく雄大であつた。今から千三百年前、役の行者がこの山頂に立ったのか、と思うと、その意図の壮大さに身の引き締まる感があつた。

山頂奥社の傍らに小さい石碑があつた。その碑文の終わりに「神主十亀某」の名を発見し、その奇しき因縁に驚いたものである。言霊の見地からすると、十亀の亀は甕かまに通じる。甕はミカとも読む。言霊を粘土板に刻んで素焼きにしたものを甕かまという。とすると十亀なる姓は十(ト)言霊を意味する。言霊トを石土毘古神として祀る神社の神主さんの姓が言霊トを意味する十亀氏とは奇縁という他はない。

この神主さんの祖先は何時の世から石槌神社に関係したのであろうか。

下山途中で白装束の年七十才にはなるであろう一人の行者さんと一緒になった。背は高く眼光鋭い、役小角はこのような人であったか、と思わせる行者さんであった。木陰での小休止の折り、その人からいろいろな修行のことを聞いた。「修行は成就社より山頂に登り、山頂で大声でお経をあげて下る。若い時は一日三回成就と山頂を往復した。三百六十五日降っても照っても修行を欠かしたことはない。今は年をとって一日二回の山頂詣りとなった。それでも山頂で朗々と唱えるお経は誠に気持ちがいい」と語ってくれた。神社にお経とは変に聞こえるであろうが、これは中世より行われた神仏混淆の権現信仰のためであろう。言霊子音トを石土毘古神として神社に祀って千三百年が経つ。その間、石槌山の行者は光を求め神の真髓に触れようとして一日三回の山頂詣りを続けたという。今、言霊原理は石土毘古神という和光同塵の着物を脱ぎ捨てて、言霊トとしてその真実の姿を顕現した。言霊の勉強は難しい、と言う。しかし既に整然とした学問体系としての姿を現した原理に対し、石槌山々頂詣り一日三回という修行の気迫

を以て勉強にいそしむならば、その原理の理解・自覚は容易なことではなからうか。筆者つくづく自戒の念を起したものであった。

秋葉山本宮 秋葉神社

この神社は東海道線浜松駅の北方四十キロの所にある。御祭神は火の御具土神。秋葉山を御神体とし、創建は古代と伝えられている。神社の案内書によると、奈良時代の初代の天皇であった元明天皇の御歌「あなとふと秋葉の山にまし座せる、この火の本の火防ぎの神」によって防火の神社として世に崇められて来た、とある。

ところが皮肉なことに五十年程も前にならうか。この神社火災により社殿および秘蔵の宝物等そのほとんどを消失してしまつた。御利益信仰の立場から見れば、防火の神様が火事で焼けてしまつたことは「世も末」と言われかねない。神社を弁護するわけではないが、この神社の御祭神についての真実をお知らせし、それによって古代の日本人が到達していた精神の深みを読者にお伝えしたいと思う。

古事記神代巻を見よう。「……次に大宜都比売の神を生みたまひ、次に火の夜芸速男の神を生みたまひき。またの

名は火の炫毘古の神といひ、またの名は火の迦具土の神といふ。この子を生みたまひしによりて、御陰やかえて病み臥せり……」とある。

人間の思考能力の先天部分が活動を起こし、その最後の伊邪那岐(言霊イ)と伊邪那美(言霊オ)の二神が「いざ」と立ち上がって、子を生んで行く。その三十二番目の子が大宜都比売の神(言霊コ)であり、三十三番目が火の迦具土の神(言霊ン)である。この火の迦具土の神が生まれて先天十七個、後天三十三個合計五十個の言霊の数が全部揃うこととなった。心の宇宙の中にはこの五十個の言霊以外の要素は存在しない。伊邪那岐・美の二神が共同で生む子供はこの火の迦具土の神までで終わりである。子供の数はこれまで、ということを生んだことで母親の伊邪那美神の女陰が焼けて病気となり、もうそれ以後子供は生めなくなつた、と古事記はしやれた表現を用いている。

さて三十二番目の子である大宜都比売神と古事記に書かれる言霊コとはどんな音なのか。コは子に通じる。伊邪那岐・美二神が生んだ子である。それは先天の空相に対して後天の実相の単位としての子である。この子音に古事記の選者は大宜都比売と名を付けた。大いに宜しき都を秘

めた(比売)存在(神)という意味である。生まれ出た実相である子音は、親を離れた独立した存在でありながら、大なる都(言霊コ)に於ける時と所と位置とをちゃんと秘め持つている子という意味である。

先の石土毘古神(言霊ト)で説明したように、先天の活動によつて発想が起こり、やがて言葉となつて発音され、それが耳で聞かれて咀嚼され「ああ、そうだったのか」と納得されて、発想は事実として確定する。この確定した事実が言霊コである。納得された事実は何時・何処で・どんな意味を持った出来事であつたか、が厳然と確定してしまふ。それは動かし難い事実であり、言霊コとはその意味の子音なのである。それなら火の迦具土神(言霊ン)とはどんな子音なのだろうか。

【収載】第二十七号(平成二年九月)

●神様の戸籍 その三(秋葉神社続き)

発音され、耳で聞かれ、納得されて確定された事実は次にどうなるだろうか。出来事が終了すると、次に忘却が待っている。忘れられてしまふ。しかし人間の意識が忘れて

しまったからといって、その出来事が全くの無として消えてしまうわけではない。完結した事実は始めに発想が起った元の頭脳の先天宇宙に帰って行く。そして必要があれば人間はそれを記憶として再び意識に取り出すことが出来るのである。

以上の完結した事実が先天に帰り、また人間の意識に記憶として蘇って来る現象を、この現実の世界で実際の形をもって役目として果たしているものがある。事実の完結、忘却、再び記憶としての蘇りという現象は飽くまで頭脳内の無形のものであるが、もう一つ、この現象を社会の中の有形のものとして表しているものがある。それは何か。文字である。特に古代大和言葉における神代文字である。秋葉神社が祀る火の迦具土の神・言霊ンとは言霊五十音をその言霊の内容を示すよう作定された神代文字のことである。

一つの出来事が起こり、そして終わった。それだけなら先に書いたように忘却が待っている。元の空に帰る。その時、忘れられる前に文字によって文章に書き綴るとしよう。書いてしまえば次に忘れ去られるであろう。けれど文字として、文章として記されたものは、人間の眼に触れられる

時、何時でも何処でも元の出来事を今、此処にあるかの如く再現することが出来る。それが文字の働きである。特に古代の神代文字は、言霊五十音のそれぞれの内容がそのまま見る人に理解出来るような原理に則った形で作られたものであるから、それを見る人の理解に曖昧さを残さない。空相・実相の言葉の原理をそのまま伝える文字である。事実を記憶と同様に人間に再現させる最適の働きをする文字なのである。

古事記はこの言霊ンを表徴して三つの神名を当てている。火の夜芸速男の神・火の炫毘古の神・火の迦具土の神である。各神名の火とは霊で言霊のことである。仏教に「声字即実相、文字即涅槃」という言葉がある。「声字即ち声に出す言葉は実相を示すが、それを文字に表すと、実相が眠った姿となる」と言っている。眠った姿を表すことは夜の芸術(夜芸)である。しかしそれが人の眼で読まれると直ちに(速)実相を現す働き(男)がある。火の夜芸速男の神とは神代文字を示していることがよく了解されるであろう。

次の火の炫毘古の神はそのものずばりの神名である。神代文字を人の眼で見れば言霊(火)が文字の背後に輝いて見える。次の火の迦具土の神はどんな表徴であろうか。迦具

は「書く」の呪示である。昔言霊五十音を一つ一つ粘土板に刻んで素焼きにしたものを甕かまと言った。その五十個をもつて人間の精神構造を図形で示したものを甕神かまがみと呼んだ。御鏡に通じる。それ故火の迦具土の神も神代文字を示している。各々の神名とも古事記の撰者が言霊の表徴に際しての苦心の跡が忍ばれるのである。

神代文字である言霊の神名がなぜ火防ぎの神と崇められるようになったのであろうか。その理由は次のようであろう。事実である言霊が文字となる時、言霊の言は視覚上表面に残るけれど、言霊の霊は再び人に読まれるまでは背面に眠ることとなる。先に「夜芸速男」で述べた時と同様である。霊の火は一端消えてしまふ如く見える。火が消える、ということが火事に於ける消火の意味に転じて、防火の神の信仰となったものであろう。

以前より秋葉山本宮秋葉神社は山の中だ、と聞いていた。何かの用のついでにお詣りするといふわけには行かない。関心はあったが参詣は長いこと延び延びになっていた。今年、平成二年二月家内の誕生祝いの旅行先を東海地方にすることとなった。良い機会である。が行き方が分からない。地図を前にして浜松市の遠州鉄道本社に電話した。美しい

女の人の声が道順を懇切に教えてくれた。参拝の手順が整った。

旅行第一日の宿泊地焼津を早朝出発し、東海道線浜松駅下車。駅前広場の西側に遠州鉄道新浜松駅がある。そこで遠州鉄道に乗り換え、四十五分程で終点西鹿島に着く。そこには東海道線掛川より浜名湖の北を通り新所原に至る昔の二俣線、現在の天龍浜名湖鉄道が通っている。駅前のバス停から秋葉神社行きのバスで、天竜川の支流沿いに茶畑の続く道を進むこと四十分。神社前に着く。

秋葉山本宮秋葉神社は鬱蒼たる樹林の山の麓にひっそりと建っていた。話によればこの山麓の宮は仮宮で、前の戦争中、秋葉山頂の神社は火災で焼失し、やむを得ず仮宮を麓に建てたのださうである。昭和六十一年山頂の本殿は再建され、参拝者は山頂まで通じる車道で本殿に行けるといふ。定期バスは日曜祭日だけしか行かぬさうだ。山頂まで徒歩二時間余とのこと、筆者旅行の時間の都合上、山麓の仮宮の参拝のみでお許しを願った。その仮宮も数十年の風雨に耐えて質素で風格が感ぜられた。

参拝を終え、社務所に拙著「言霊」を奉納した。お返しにと御神茶一缶を頂戴した。社務所を辞去し、鳥居から続く

石段を下って来ると不意に「バスにはまだ間がある。お茶呑んで行きましよ」と社前の茶店のおばさんから声をかけられた。そろそろお昼時である。山菜そばを注文した。食べ終わってまだ帰りのバスの時刻まで暫く間がある。神社の前は広場となっており、その向こうは川が流れている。丁度二つの川の合流点で、清流が音を立てていた。川辺で家内と腰を下ろし、川の水音を聞いていると、思ひは何時しか言霊の原理による歴史の大きな変動の中に沈んで行った。

崇神天皇による同床共殿制度の廃止以来、暗黒の世の底を潜って来た言霊の原理は、各宗教書によって予言された如く、明治以降の諸先輩の努力によって昔あったと同様の姿で復活した。言霊の真理が信仰対象の神というベールをかなぐり捨てて、われわれ日本人の、そして世界人類の前に栄光の姿を現した。二千年の長い間、真理を信仰という形で世の中に伝えて来た神社信仰の責務は終了したのである。これからは真理の人間による直接の自覚とその一般への普及の努力こそ神社の務めである、ということが出来る。

「1+1=2」を「私は信じる」とは決して言わない。「である」と言う。真理である言霊原理は和光同塵の信仰の対

象である火の迦具土の神なる名前から抜け出して、言霊ンとして神代文字の姿を既に人々の前に現したのである。火防ぎの神と崇められてきた秋葉神社の社殿が火災で焼失した事実の神霊的理由を求めらるならば、正に右に示したように秋葉神社の神様自体の変貌の歴史的事実の上に求められなければならないであろう。日本民族のみが持つ人類の秘宝であるアイウエオ五十音言霊の型を写した神代文字の人類文明の中に占める意義は、社会の中の「消防」の役割とは比べものにならない重要さがあることに意義を差し挟む人は居ないであろう。

秋葉山本宮秋葉神社の祭神、火防ぎの神、火の迦具土の大神とは実は二千年の世を忍ぶ仮の名であり、本名は日本民族の伝統であるアイウエオ五十音言霊の内の一つ、言霊ン。神代神名^{かみ}文字なのである。

ふと我に返って、バス停の方を見るとそろそろバスが来る時刻なのか、数人の人が集まって来たようである。旅行第二日目の宿泊地浜名湖北三ヶ日に向けて秋葉神社前を離れたのは正午を暫く廻った頃であった。

【収載】第二十八号(平成二年十月)

●再び大嘗祭について

科学がマクロ的分野で宇宙空間の構造や法則を余す所なく解明し、ミクロの視野で物質というものの構造や組成の一切を研究し尽くしたとしよう。その時、人類は宇宙の如何なる星へも計算通りにロケットを到達させることが出来、またこの世に存在する如何なる物質も科学のコントロールの下に置くことが不可能ではなくなる。現在の科学はその目標に向かって着実に進歩の度を早めている。

翻って人間の精神について考えてみよう。若し人間の心の構造とその動き、それに人間が文明を創造して行く心の仕組みの全てが解明されたとしたら、どんなことが考えられるだろう。結論を言えば、地球上の人間一人一人、社会的国家的自立性をそれぞれ損なうことなく、しかも人類全体の文明を理想的な目標と計画に基づいて、数千年という長い期間にわたって創造・推進させて行くことが可能となるのではないか。

科学の一応の完成はもうそう遠い将来ではないであろう。そして人間の精神の探求は既に今より数千年以前の太古に於て事実この日本に於て完成されていることである。

解明された精神の法則は五十音布斗麻邇と呼ばれる言霊の原理であり、その原理を自覚して人類文明創造の責任を負う人を聖(霊知)天皇(スメラミコト)と言う。日本人の祖先であり、古神道ではこの霊統を皇祖皇宗と申し上げているのである。

皇祖皇宗である日本人の祖先は言霊の原理に則って日本を中心として全世界に見事な精神文明を築いた。そして或る時、今より約三、四千年以前、世界に精神と物質両方の文明の完備した社会の到来を目指して、言霊の原理に則って人類歴史創造のための計画を確立して、その布石を敷いたのであった。爾来、日本並びに世界はこの皇祖皇祖の経綸の下に運営されている。太古がそうであった如く、中古も現代も、そしてこれからの将来もこの皇祖皇宗の経綸の下にある。この計画は人間精神の基礎原理に則って行われたものであるから、この五十音言霊の原理の自覚がなければ、世界の正統の政治を行うことは出来ず、過去の一贯した歴史を知ること、将来の正確な展望を持つことも出来ない。

さて大嘗祭の話に入ろう。大嘗祭については二年前、会報第五号で詳しく解説したことから、その記事を参照いた

だければ幸いである。大嘗祭の儀式の様式は、他の宮中の主な儀式と同様その根拠を古事記・日本書紀の神代巻ににおいている。またその記紀の記述の全ては、太古に於て、発見・完成された五十音霊の原理を物語的な謎の形で表徴した神話である。であるから大嘗祭を大本の言霊の原理から見ると、一見何のことか分からない儀式の形式が、実は人類の文明創造の歴史の精神構造を見事に映し出している表徴形式であることが明らかとなって来る。

以上のことを頭に入れておいて、さて大嘗祭とはどんな儀式なのだろうか。辞書を見よう。「大嘗祭——天皇即位後はじめての新嘗祭。秋冬の間に、昔は陰暦十一月の中の卯の日に、大嘗宮で行われた。これに先立ち悠紀・主基の二地方を定めて新穀を奉らせ、当日天皇みずからこれを天照大神・天神地祇に供える。おこなめまつり。だいじょうえ」とある。文中の新嘗祭について更に辞書を引くと「大祭の一つ。十一月二十三日、天皇が当年の新穀を天地の神々に供して自らも食する行事」と書かれている。

辞書の説明を補足・具体的にすると次のようである。皇居内またはその他特定の場所に大嘗祭のための大嘗宮を新しく建てる。大嘗宮は八つの建物から成るが、その内の主

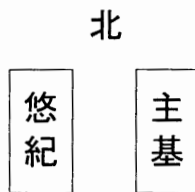
たるものは主基殿・悠紀殿の二つであり、北に向かって右側が主基殿、東側が悠紀殿とするのが本来である(図028-A参照)。

二年前の会報に主基・悠紀の位置を上の如く書いたら、大嘗祭の一研究者より「現在遺されている最新の文献によれば、主基は左に、悠紀は右になっており、貴方の説とは逆である」との指摘があつた。新聞などの記事を見ても確かに逆になつていようである。一方、ある大学教授による

と「明治天皇の京都より東京への遷都の折、都の位置の変化によつて主基・悠紀の位置の設定基準を取り違えてしまったらしい」という主張もある。どちらが正しいか、は説明が進むにつれて自ずと明らかにされるであろう。

大嘗宮を新築するより前、日本全国より選んで二つの地方を主基田・悠紀田として設定し、そこより採れた稻を宮中に奉納させる。大嘗祭に際しては、新天皇は一人にて主

図 028-A



基殿・悠紀殿に籠もり、献上された新穀を神に供え、自らも食される。祭りが終わると直ちに大嘗宮は取り払われてしまう。

以上が大嘗祭の儀式の大筋である。大嘗祭の形式が何を意味しているのか。主基・悠紀の二つの意味は何か、などについて宮内庁や学者の間にもはっきりした定見がないようである。またあつたとしても、それは信仰と国民感情に根ざした戦前の国家思想の生き残りか、比較民俗学的推察の域を出るものではない。しかし五十音言霊学と古事記・日本書紀を結んで、それに基づいて人類の歴史を考えると、大嘗祭を捉えてみると、その儀式の意味が明らかとなつて来る。

五十音言霊学で見ると、大嘗祭の儀式の形式はすべてわれわれが現在使っているアイウエオ五十音図(図028・B参照)に拠っている。古神道でこれを天津金木音図という。物質(金木)文化を基本とする時代の人類の精神構造を現している。現在に見るように、物質欲望に基づく社会の精神

的な主宰者を神道では大国主命おおくにぬしのみことという。

この神に二人の妃があつた、と古事記に見える。

図 028-B

図音木金津天

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
キ									イ
ウ		ユ					ス		エ
エ									オ
ヲ									

田紀悠

田基主

須勢理毘売すせりひめと八上比売やがみひめである。この二人の後の名で夫君である大国主命の精神の二つの内容が示されている。須勢理のヌは澄す・主す・巢すで静かな悟りの境地を示し、セリは選せり・競せりで競争し努力する姿。須勢理は悟りに向かつて努力する姿を意味し、実際には宗教・哲学・芸術活動を指している。この妃の名の意味は天津金木音図の向かつて右半分の構造とも相通じる。音図の最上段はアカサタナである。「明らかな悟りの田たを成なせ」と読める。明らかな悟りの田(精神構造)を成せ(完成させる)

とは正に宗教・哲学・芸術の仕事である。この向かつて右半分の音図の中心に言霊スが位置している。それ故この音図の半分を現して主基(ヌの気)と名付けるのである。主基殿の語源である。

大国主命のもう一人の妃である八上毘売のヤガミとは、八数の原理を醸かむまたは嘯かむ、と示している。人間の全人

格を表す十数から人間の主体性である母音と目的性である半母音を除いた八という数は、神道で八拳劔と呼ばれ、変転極まりない物質現象の八変化のみを追いかける学問活動(醸む・嚙む)を意味し、これは実際には物質科学のことである。これはまた、金木音図の向かって左半分の精神構造に通じている。その上段ハマヤラワは「端をまとめて八数の列の和を作れ」と読める。端とは目に映る現象のそれぞれのことであり、「八拳劔でまとめて結論を出せ」という意味で、正に現象を調べてその法則を探索する科学を指している。その左半分の音図の中心にユ言霊が入る。悠紀(ユの氣)殿の語源である。またユの田であるからユダとも言う。ユダヤ民族に通じる。悠紀殿の精神の実行責任を担う民族の名である。

更に古事記を検討してみよう。古事記の始めに伊邪那岐・美二神の子生みの話がある。ここで人間精神の先天・後天の要素計五十個の神々が生まれる。アイウエオ五十音の言霊である。次に古事記の話は生まれ出た五十の言霊の操作・運用の段階に入り、終に人類文明を創造する典型的な三つの結論を生む。三貴子 Ⅱ 天照大神・月読命・須佐男命の誕生である。生みの親である伊邪那岐神は三人の子に

文明創造の役割分担を決めた。天照大神は高天原を、月読命は夜の食国を、須佐男命は海原を治めよ、とである。そして天照大神にのみ御頸珠を賜った、とある。言霊原理のことである。

右の月読命の夜の食国とは、天照大神の言霊による昼間の光で見る物事の実相を、月の光である概念で以て捉えたぼんやりした世界のことである。宗教・哲学の分野を示している。その活動の手段として概念が与えられている。須佐男命の海原とはうの名の原(分野)の意味で、感覚欲望に基づく世界であり、産業・経済・科学がその分野である。そして天照大神は与えられた言霊の原理により、弟に当たる他の二つの精神分野をコントロールして、三権が調和分立した理想の精神道徳の文明を築いていた、のが人類の太古の歴史であった。

今日より三千年前、精神文明ばかりでなく、物質文明をも兼備した理想世界を作るための方策が、皇祖皇宗の経綸として日本の朝廷に於て決定された。物質文明を急速に発達させるための精神基盤である競争世界を現出させるための手段として、道徳政治の鏡である言霊原理による世界文明のコントロールを停止したことである。日本の朝廷に於

て「鏡と天皇とが同床共殿」であるとの制度が廃止され、言霊原理の政治への適用を止め、原理は八咫の鏡として、天照大神という神として、伊勢神宮に祀られたのであった。

この出来事を古事記は天照大神の岩戸隠れの神話としても伝えていゝる。岩戸とは五十の言葉(言霊)の戸という意味である。かくて太古の三権分立の中心である天照大神は裏に隠れ、世界は月読命と須佐男命の

二つの分野だけが残った。三千年来、

世界は先に述べた大國主命の代となつたのである。大國主命の文明の精神を須佐男月読命と名付けている日本

の古書もある。先に挙げた須勢理毘売は月読命と、八上比売は須佐男

命と、精神として同系列のことを御理解頂けると思う(図028-C参照。小笠原孝次氏著、主基と悠紀より引用)。

かくて二千年前よりこのかた人類は天照大神という名で表徴される五

十音言霊の原理の自覚を失い、月読命に表徴される宗教・

哲学と、須佐男命に表徴される科学と産業の二分野が勝手

図 028-C

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
須勢理毘売命	月読命	月の世界	仏儒耶回の宗教	印度・中華・アラブ	八上比売命	須佐男命	星の世界	科学・産業	欧・米

気候に活動するのみの世となつた。しかし何時の日か、太古の人類の精神文明に匹敵する程の物質文明の完成を迎える暁には、一時的に隠された精神文明の鏡である言霊の原理は再びこの人類の上に蘇らなければならない。その時までの人類の暗黒の期間、言霊原理の自覚を失つた天皇は、原理の表徴である天照大神を祀る伊勢神宮の大神主として、信仰の形で太古の文明統治の三権

分立の制度を、即位の儀式として体験することによって自らの責務を自覚する、そのための儀式が大嘗祭なのである。大嘗祭の夜(夜は言霊原理の隠れている暗黒の期間を意味する)天皇は唯一人にて主基殿と悠紀殿に籠もり、月読系統の神々並びに須佐男系統の神々に新穀(稻)五十音(言霊)を供え、自らも食されて、言霊原理の下に人類が三権分立の調和のとれた物心両文明が兼ね備わつた理想の時代を創造する型

を示されるのである。これが大嘗祭の儀式の意義である。時は来た。方便として作り出された弱肉強食の競争社会

に育まれた物質科学は、今二十世紀に入って遂にその探究のメスを物質の核内構造の分野に入れ、物質とは何かを解明する寸前である。宇宙空間には大小幾多のロケットが廻っている。これ以上物質科学の進歩が独走すれば、その物質的反映の故にかえって人類の不幸を招く事態が考えられるまでになった。

一方、精神の分野ではどうなっているか。この二千年の間、伊勢神宮の神として、古事記・日本書紀の神話の呪文として、また宮中の大祭の儀式の伝統として仮初めの姿で受け継がれてきた言霊の原理は、奇しくも物質科学のメスが物質核内構造に入ったと時を同じくして蘇り始め、明治天皇を始め幾多の先輩諸氏の努力の結果、太古にあったと同様の形でその本然の姿をこの日本に現したのであった。月に表徴される月読命の哲学・宗教と、星に譬えられる須佐男命の物質科学的産業世界だけが存在する三千年の暗黒の夜の終わりが来て、東の空に太陽に譬えられる天照大神の実際の姿であるアイウエオ五十音言霊の原理が燦然と輝き始めた。もう人間精神の秘宝の法則を型どったお芝居である宮中の伝統儀式はその役割を終了した。その二千年の伝統的役割が終わった事実を全世界に向かって宣言した

のが先の昭和天皇によって終戦直後に発せられた詔勅であった。「古事記・日本書紀は単なる神話に過ぎず……」と皇室との関係を完全に否定されたのである。天皇御自身がその真意を知っていたか否かは問題ではない。論言汗の如し（漢書劉向伝）。天皇の言葉は取り消しが効かない。また取り消す必要もない。日本人の祖先である皇祖祖宗の言霊の原理による世界歴史創造の経綸が、いとも合理的にその歴史の筋書きを示しているからである。

さて日本皇室の伝統の行事の一つであった大嘗祭が宮中において来月舉行されようとしている。誠に可笑しなことである。この平成の大嘗祭は、日本皇室の伝統の意義の上からも、また日本と世界の歴史の進展の上からも、何の關係もない無意義なものなのである。その存在理由が昭和天皇の詔勅によって既に消え失せてしまっているからである。

太古にあった如き言霊の原理の自覚がなく、更に古事記・日本書紀の神話の伝統さえも失った今の平成天皇の時代に残されたものは唯一つ、日本経済の驚くべき急成長と、全世界の経済一辺倒の民主主義化の奔流があるだけである。それは大国主命（須佐男命）の経営する経済と権力によ

る世界統一の仕事の最終的総仕上げの段階に突入したことを示している。

具体的な歴史として言えば、この三千年間各民族の裏に居て、人類の物質科学文明の完成と、その成果がもたらす金権力とによって、世界を統一する任務を遂行して来た神選民族であるユダヤ民族の仕事の完了する時期である。この仕事を古神道は大国主命の「国引き」と呼ぶ(出雲風土記)。

最近の世界の目まぐるしい許りの変化——ベルリンの壁の崩壊・東西両ドイツの統一も、東欧諸国の民主化も、米ソ協調もそしてイラクのクウェート侵攻も、すべて右の観点に立つ時、その行方は掌にとるように明らかとなる。平成の時代に起こり、また今後起こるであろう日本と世界の變動は、全てこの裏からする世界の経済的統一の仕上げの仕事なのである。

そして金権による世界統一の作業が終わりに近づく時、三千年間続いた二権併存の大国主命の世界が、太古にそうであったように、言霊の原理によってコントロールされる三権分立の理想世界に移行するための世界人類の精神と制度の全てにわたって大改革が開始されるであろう。最後の

審判である。これも皇祖皇宗の経綸の筋書きが明らかに示している所である。これを古事記は大国主命の天孫への「国譲り」と呼んでいる。

この時、現在の日本の皇室またはその子孫の中から、太古に見る如き現身を持った靈知りの世界のスメラミコトとして起ち上がり、皇祖皇宗の世界経綸を実行する責を担う人物が現れるか否かは、唯ひとえに日本語の底に秘められて来たアイウエオ五十音言霊の自覚如何にかかると事なのである。

【収載】第二十八号(平成二年十月)

●神様の戸籍 その四

戸隠神社

戸隠神社はJR長野駅より北西十八軒、バスで約一時間の所にある。主祭神は手力男命たぢからをのみこと。(神社案内によると奥社の祭神は天手力男命・九頭竜大神くすりのりゅう・中社祭神は天思兼命あまのむねかね、宝光社祭神が天表春命、日御子社祭神は天鈿女命あまのむすめとある。文中にて詳しく説明する。)既に神倭朝八代孝元天皇の時の記録に出て来る古い神社である。後に役小角がこの神社

に關係があつた、と伝えられている。

手力男命といえは、ある年齢以上の人なら誰でも知っている古事記神話に登場する神である。古事記「天の岩戸」の章を見よう。

「ここに須佐の男の命……天照大神の忌服屋にましまして神御衣織らしめたまふ時に、その服屋の項と穿らて、天の斑駒と逆刺ぎに刺ぎて墜し入るる時に、天の衣織女見驚きて樓に陰上と衝きて死にき。かれここに天照らす大神見畏みて、天の石屋戸を開きてさし隠りましき。ここに高天原皆暗く、……ここに萬の神の声は、さ蛇なす満ら、萬の妖悉くに発りき……」とある。

「天の岩戸」の章を現代語で大筋を述べてみると次のようになる。

「天照大神が嘗む高天原の田んぼや服屋に弟神の須佐男命が乱暴を働いた。天照大神はその様を見るに耐えず、天の岩戸の奥に隠れてしまった。そこで高天原は真つ暗となり、日本の国も暗黒の世となり、いろいろな神の声が入り乱れ、すべての禍事が起こった。困り果てた高天原の神々は、天の安の河原に集まってどう対処したらよいか、を相談した。その結果、高御産巢日の神の子、思金の神に考えさせて天

の岩戸の前に種々の準備を整えた。天の宇受売の命が神懸りして岩戸の前で裸踊りをした。その格好が可笑しいと神々が皆笑い出した。

岩戸の中の天照大神は、岩戸の外の世界は皆暗く、人々は悲しんでいる筈なのに笑いさざめくとは如何なることか、と岩戸を開け、外に身を乗り出した時に、岩戸の脇に隠れて立っていた手力男命が、大神の手を取って引き出し奉った。天照大神の再びの出現で、高天原と日本の国は明るくなり、元の姿に戻った」

以上が戸隠神社の祭神手力男命にまつわる古事記の神話である。日本ばかりでなく外国も含めて、民族の神話というものが昔のユートピア的願望の創造した文学作品に過ぎない、と考える人が多いようである。しかし今に伝わる古代の神話は、実は人間の生命の根本原理に基礎を置いた人間そのもの、またはその長い歴史を謎の形で表した物語なのである。古事記・日本書紀の神代卷は、今迄度々述べて来たように人間の精神の基本構造である言霊の原理が、ある一定の期間民族の意識から隠されてしまう間、神の物語という謎の形で後世に遺された民族の遺産なのである。神話が問いかける謎を正確に解くことによって、人間の真の

姿とその歴史の真相が明らかになって来る。

手力男命に関する古事記の神話はどう解釈すべきなのか。人類が迎えようとしている新しい時代に、手力男命と神話の中で呼ばれるものはどんな役割を担ったものなのか、以前から筆者自身の一見明らかに分かっているように、何処かぼんやりとした問題であった。それが戸隠神社に参拝して、一挙に解決したのだった。文字通り参拝の御利益と言ふべきであろう。

筆者が観光を兼ねて戸隠・木曾御岳両神社参拝を思い立ち、家を出立したのは昭和六十一年八月二十五日早朝のことであった。午前十時前特急あさまで着いた長野駅前は猛暑であった。十時少し過ぎ駅前発戸隠キャンプ場行のバスに乗った。バスは長野市内からバードラインに入り、走ること一時間、戸隠神社奥社前に着く。さすがに戸隠高原は涼しかった。

鳥居をくぐると奥社参道が真っ直ぐに延びている。奥社まで穏やかな登りで徒歩三十分(片道)とのこと、あきらめて帰って行く人も居る。参道は広い土の道で杉木立が気持ちよく続いている。漸く道が急な登りとなると、もう奥社は近い。参道の長く立派なのに比べ、奥社本殿は其程大き

くはない。案内の立札に本殿祭神は天手力男神、別社祭神は戸隠大神と九頭竜大神とある。参拝を終え、庭園を散策の後、帰途についた。社務所の脇から神社の背後に聳える戸隠山への登山道が上がっている。そこを過ぎて元の参道を高原の気持よい日差しを楽しみながら下って行った。

天照大神が弟神須佐男命の乱暴な振舞に会って岩戸の中に隠れた、とは神話の話である。この神話の内容を實際に歴史的事実としてどのようなことが起こったか、を考えてみよう。今から約三千年以前、その時まで栄えていた日本を中心とした世界の精神文明の他に、物質科学文明の建設を促進するために、政策の大転換が始まった。物質科学の急速な発達と精神基盤は弱肉強食の生存競争の社会である。その社会を出現させるための一時的方便として、道徳平和の政治の鏡である五十音言霊の原理は世界人類の意識から隠すことが必要である。そのために撃国されたのが神武天皇に始まる神倭皇朝であり、また第十代崇神天皇による八咫の鏡と天皇との同床共殿を定めた制度の廃止であった。

言霊の原理は天照大神という信仰の対象として伊勢神宮の奥深く祀られてしまった。生きた政治の原理法則が、実

際の政治への運用を停止され、神宮の奥に隠されてしまったのである。この事件こそ神話の天照大神の岩戸隠れとして示される内容の歴史的事実なのである。

精神的真理を方便として隠す作業にも工夫・苦心を要したことであろう。隠す作業には、方便の必要がなくなつて真理が再び世の中に現れるための準備をも併せ考えなければならぬからである。戸隠神社の存在がすべて、その真理の甦りの準備のために造られたということが出来る。隠す方の人の第一人者は神倭朝第一代神武天皇である。物質文明創造促進のための政策を決定した。第二番目に第十代崇神天皇が挙げられよう。言霊原理を伊勢神宮に神として祀り、真理を隠す施策の実行者であつた。

他方、再び現れるための準備の諸施策が講ぜられた。その内の一つとして戸隠神社の創設があつた。この神社に関する記録が崇神天皇の二代前、孝元天皇の時に既にあることが、それを物語っている。岩戸に隠れた神が再び岩戸の外に現れる時にも人の努力・工夫が必要であらう。真理の甦りの任に当たる人の出現を期待して手力男神と称するのであろうか。岩戸とは五十葉戸いそはの呪示である。五十音言霊の前に立てられた戸である。時が来て人間の潜在意識の底

に隠された五十音言霊の原理を、再び人間の顕在意識にまで浮かび上がらせ、真理を生きたものとする作業をする人すべてを手力男神と称するのであろうか。

神話の手力男神をそう考えるならば、本殿脇の別社に祀られる戸隠大神と九頭竜大神という神名の意味も自ずと明らかになる。神話の中に出て来る竜または蛇は、古代文字か主義などの考え方のパターンを表している。九頭竜とは九つの頭を持った竜の意。物事の現象を九段階の変化として捉える判断力のことで、古神道は九拳ここのつかあつちま劔と呼ぶ。天照大神の言霊原理によつて物事を見る十拳劔に対して、概念によつて見る月読命の判断力である。実相を完全に把握する十段階の判断力に対して、実相の概念的説明に終始して、物事をボンヤリとしか見得ない判断力である。その判断では十段階の内の総結論である第十番目が欠如せざるを得ない。言霊の原理が隠され、何時の日か手力男神による真理開頭が待たれる暗黒の時代には、月読命の系統に属する九拳劔を持つ判断力が言霊原理の代行を務め、時が来て真理が開頭される時、その手力男神の活動の基礎となる知識(主として東洋哲学)の働きが九頭竜大神というわけである。

もう一つの祭神・戸隠大神とは、その暗黒の期間、戸の中に隠れ、時が来て手力男神が手を取ってお出しする隠れた姿の天照大神のことである。別社の二神とは天照大神と月読命のことを指している、ということが出来よう。

いろいろな思いをめぐらしながら、もと上がって来た参道から自然観察路になっている遊歩道に入った。徒歩二十分ほどで中社に通じているという。杉の木立から雑木林の中の道にかわる。夏の木々が秋を迎えようとしている風情が空気をヒンヤリさせている。遊歩道の左側はなだらかな丘が続き、かやとの中の道が飯繩山に向かつて上がっているのが遠くまで見えた。人氣のない静かな高原の道を散策すること三十分、中社に着く。

中社は古いお寺の本堂のような質素な大きい社であった。参拝を終えて、神社の側に廻ると、ふと古い立札が眼にとまった。中社に祀られている神名が書いてある。立札の板も字の墨も長い間の風雨にさらされて黒ずみ薄くなっているが、それでも明瞭に読み取れた。天八意思兼命あめのやじつのおもひかねのみこととある。私の眼が思わずその立札に釘付けになった。記紀の天照大神の岩戸隠れの神話にある手力男命の役割についてボンヤリ抱いていた疑問が一気に氷解したのである。

神社案内書に戸隠神社の中社の祭神は天思兼命あめのぢかひかね、と書いてあるのは以前から承知していた。思兼命も手力男命も「岩戸」の神話に出て来る。共に天照大神を岩戸からお出しするために尽力した神である。唯それだけの関係で思兼命を中社に祀つてあるのか、と思ひ、また淡い疑いを持つてもいた。別社・撰社ならともかく、奥社と中社との関係は何かもっと深い霊的關係がある筈ではないか。中社の神名がただ天思兼命でなく天八意思兼命とあることが、この疑問を一気に解決したのであった。

天八意思兼命あむやじつの八意やじつに、心ではなく意いの字を当てたのは、明らかに根本意志の八律の展開である言霊の八父韻を表示している。宇宙生命意志である言霊イはチイキシリヒニの八つの父韻に展開して、四つの母音ウオアエに働きかけて三十二個の現象子音を生む。頭に八意と八つの父韻が冠せられている以上、思兼命おもひかねの思兼とは、単なる「思慮深い」という意味でなく、思神音おもひかねの意味にとるのが順当である。思神音は神音かみねを思ふの意。神音はこの場合実相の単位としての三十二個の子音である。

天照大神の岩戸隠れに表徴される五十音言霊学が隠されて以来、九頭竜大神である東洋哲学や古くからの宗教書に

よって、五つの母音に関して是比较的詳しく説明されて来た。中国の五行説やインドの五大説がそれである。しかし八つの父韻と三十二の子音については、その存在のおぼろげな示唆の他は説明がなかった。八意ヤチである八父韻の存在から現象の究極の要素である三十二個の子音の自覚が完成することこそ、長い間岩戸に隠れていた天照大神がその岩戸から現れ出ること、即ちアイウエオ五十音言霊の原理の自覚の完成の時である。

二千年の間、人類の潜在意識の底深く眠っていた言霊の原理は、今より百年前初めて明治天皇御夫妻がその存在に気付かれて以来、幾多の先輩諸氏の研究努力の結果、徐々にその全貌を表し始めた。古事記で言えば、岩戸に隠れた天照大神が岩戸の外の八百万の神々の笑いどよめきを怪しくあや思つて、岩戸を細めに開いて少し身を乗り出された、という所に当たる。五母音・八父韻・三十二子音の言霊学の方法が徐々に整備されて来たのである。理論的な完成である。

しかし理論的完成が天照大神の出現を意味しない。理論は言霊オの次元である。天照大神とは言霊原理による理想の道徳政治の実行のための智慧の神であり、言霊エの次元

である。その出現のためには理論の理解から理論自覚とその運用の能力の段階に入るために、さらに一段階の進歩飛躍を必要とする。原理の自覚とその運用のためには、八父韻の自覚による三十二子音の見識が必要不可欠のものなのだ。奥社に祀られる手力男神の実際の役割如何。それは中社祭神の神名、八意思兼命で示される如く八父韻の自覚による三十二子音の見識の完成である、ということが出来る。

八つの父韻の動きを明らかに自覚することによつて（八意ヤチ）、三十二の子音の見識を進めていくこと（思い神音おもいのかみね）こそ、言霊学の総結論である天照大神を岩戸よりお出しする決定的条件なのである。筆者言霊学の勉強を始めた頃、手力男神とは天照大神である言霊の原理を再びこの世に甦らす仕事に従事する人々の役割に対する呪示だ、と思つていた。それも全くの誤りだとは言えまい。しかし天の岩戸の前に集う神々は手力男神の他大勢いる。思兼神、天津麻羅あまら、伊斯許理度売いしこりどめの命、玉の祖おやの神、天の児屋こやねの命、布斗玉ふとたまの命、天の宇受売うすめの命等である。そして最後の締め括りが手力男神なのだ。だから手力男神とは、正確には八つの父韻を自覚して三十二子音の開眼を可能にする言霊学の最終段階の研究者の役割に与えられた神名なのだ、ということ

が出来る。

更に言えば天照大神の手を取って岩戸から引き出し申し上げたことで「手力」の名がついた。と同時に手力は田力に通じる。言霊学の論理的な把握のみでは言霊工の実行の知恵は發揮することが出来ない。原理を自己の魂の中に実現・自覚することによって初めて原理の政治への運用が可能となる。田とは五十音言霊図のことである。田力男とは言霊原理の力を發揮する人の意味になるであろう。

手力男神の現代歴史の上での役割が以上のように明らかになって来ると、この神と共に岩戸の前に集まった神々の名前の現実の意味も自ずと説明されて来る。その中で天の宇受売の命(細女)の神名は歴史的に最も興味深いものなので、付け加えておこう。

天照大神の八咫の鏡の基礎となる言霊工を中心にした五十音図(図 029-A 参照)を天津太祝詞音図と呼ぶ。その音図のウの段のうち

最後のウを除いた九個の配列ウツクムフルヌユスを、ウよりスに至るのでウスで天の宇受売の神という。その父韻の

図 029-A

天津太祝詞音図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ									イ
ヱ									エ
ヲ									オ
ウ	ス	ユ	ヌ	ル	フ	ム	ク	ツ	ウ

配列は言霊工の道徳政治の精神が物質科学による産業経済をコントロールする方法である。

勿論天照大神の隠れていたここ三千年の世界は産業経済の独走する須佐男命の時代であった。その音図は金木音図と呼ばれ、ウ段はウクスツヌフムユルウの配列である。天照大神が再び現れて人間社会の各部門をコントロールする

時、それぞれの部門の精神を生かしながら、然も新しい道徳社会の一要因として受け入れて行くのが天照大神の仕事である。例えば産業経済のウクスツヌフムユルウの競争原理をそのまま生かして、尚かつ他の社会部門との協調をしっかりと保つようコントロールする方法がウツクムフルヌユスの天の宇受売の命の精神というわけである。

共産主義は理論としての各人平等・共産という立場から人間の欲望本能を仕事のノルマと規定の賃金を以て押さえ込もうとする。資本主義は競争原理によって産業の進展を煽る。敗者は惨めである。人間の精神の構造から考え

て双方とも無理なやり方である。人間の欲望に基づく産業・研究の競争心理を生かしながら、しかも団体・地域・世界全体を協調精神でまとめる方法は唯一つ、人間の本有の性能の一つである言霊エのタカマハラナヤサの心構えだけである。この心構えを仏教では仏陀の摂取不捨という。

人間には五つの性能が与えられている。欲望(言霊ウ)、経験知(オ)、感情(ア)、実践智(エ)生命意志(イ)である。

この五つの性能が全部協調して実践智(エ)を中心として社会創造に励む時、人間社会は精神的ストレスの禍いが少ない。古事記は天照大神(言霊エ)を出現させるための岩戸前の神々の準備によって、ストレスのない理想社会の創造を巧みに表現している。岩戸前の神事は伊斯許理度売の命(言霊イ段)、天の児屋の命(ア段)、玉の祖の命(オ段)並びに天の宇受売の命(ウ段)の母音の四段階の理念を準備して集会を開き、この四つの性能の考え方を天照大神(言霊エ)に見て貰うことによって、その中心となる知恵の御本尊である天照大神にお出ましを願う、という神々の段取りであり、神庭会議の計画であったのである。そして最後の極手が八父韻による実相子音の自覚完成者である手力男命というわけである。四母音に手力男命の八父韻の自覚が加わる時、

初めて天照大神という五十音言霊の実行の鏡が完成する極手となるのである。

中社参拝を終え、下がってくると道には土産物店や宿坊が並んでいる。時刻はお昼を大分廻っていた。腹が空いた。家内と昼食は何処にしようかと物色して、新築して間もないように見えた「極意」なる屋号の宿坊に入り、名物の戸隠そばを注文した。名物に美味しいものなし、というが、此処のそばは絶品であった。それに給仕に出た若い娘さんの物腰・言葉遣いの上品だったこと、戸隠の話になると家内との会話に必ず宿坊「極意」の思い出となる。このような体験も旅の醍醐味の一つと言えよう。

下社に当たる戸隠宝光社は中世の神仏混淆の時の産物との話、時間の都合もあり宝光社参拝は省略して戸隠高原を後にしたのは午後二時半を少々過ぎた頃であった。途中長野善光寺に立ち寄り、市内を駅近くまで徒歩観光し、駅前のホテルに泊まった。明日は木曾御岳の登山である。天気はどうであろうか。

御岳神社

J R 木曾福島駅前を朝九時に出発したバスは王滝川沿い

から御岳湖沿いに溪谷を上がり、御岳スカイラインに入る。ジグザグの自動車道を上がり上がる。十時三十七分終点田ノ原に着く。此処は木曾御岳(三〇六三米)の七合目に当たり、御岳への王滝登山口である。登山口は他に三箇所あるが、此処よりの登山が頂上に最も早く行けるそうだ。

木曾御岳は信仰の山である。老若男女、白装束の登山者を多く見かけることが出来る。この神社はJR木曾福島駅の西方二十キロ、御岳頂上に奥社、王滝登山口一合目の王滝部落に里宮がある。祭神は国常立尊くにとこたち、その他大己貴命おほなむち・少彦名命すくひなと神社案内に見える。創建は大室二年(七〇二)と伝えられている。その後、桓武天皇の御代、弘法大師が登拝し、それより神仏混淆の信仰が起こり、修験道の白装束登山が始まった、と「御岳神社縁起」(天正二十年Ⅱ一五九二)は伝えている。

七合目田ノ原付近は開けた高原で、池塘が広がり自然公園となっている。立派な山荘もあり、冬はスキー場ともなるそうである。この田ノ原より御岳頂上剣ヶ峰に向かって西北方に真っ直ぐ登山道が上がっている。頂上まで約三時間で行けるといふ。午前十一時登り始める。登ること五六百メートルの処に遙拝所がある。祭壇があり、山頂に向かって

中央に国常立命、向かって右に大己貴命、左に少名彦命、その他御岳大神とある。此処からは御岳の山容をはっきりと望むことが出来る。木曾御岳山とは剣ヶ峰・摩利支天・継母岳等山群の総称で、その最高峰が剣ヶ峰(三〇六三米)なのだそうだ。八合目まで白松しろひまわり曾の樹林が続く。天気は高曇り、雨の心配はなさそうだ。

「般若心経は国常立尊の祓いなり」言霊学の師、小笠原孝次氏は筆者にこう教えた。般若心経とは色即是空、空即是色の心の宇宙(言霊ア)の存在を教える仏教の経典である。国常立尊とは国家社会(国)を恒常に(常)成立させる(立)法則(神)を自覚した人(尊)の意で、古事記・日本書紀の神代巻が教える言霊エのことで、木曾御岳神社の祭神である。

国家社会を成立させる法則といえは、それは政治・道德の原理のことである。人間に与えられた性能のうち、欲望(言霊ウ)・経験知(オ)・感情(ア)の三つの性能をコントロールして社会創造を推進して行く働きのことである。この働きを自覚することこそ言霊学の学問の目的である、といつても過言ではない。人類の文明を創造する根本精神であるからだ。

「般若心経は国常立尊の祓いなり」と教えられた時、言霊学

の初心者であった筆者には般若心経というものの存在が大きく眼前に聳え立つものとなった。言霊学の奥深く踏み入ろうとする者は、先ず般若心経によって自らの心のわだかまりを祓い去ることが肝腎だ、と受け取ったからである。古神道言霊学は人間の心の全構造を明らかにした学問である。これを理解し、心を形作っているそれぞれの要素を自らの心の中で納得するためには、先ず自分の心そのもの、心の宇宙を知らなくてはならないであろう。心の全景を見ることがなしに、心の個々の出来事だけを詮索しても、それは経験知を増やすばかりで、人間誰しもが生きている心の構造全部を理解することにはならない。

師はそのように注意することから始まって、言霊学の教科書である古事記の神代巻を講義されたのであった。

「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天の御中主神、次に高御産巢日の神、次に神産巢日の神。この三柱の神は、みな独神に成りまして、身を隠したまひき。

……」

「天地の初発の時」とは、宇宙にまだ何事も起こらない時の心の宇宙そのもの、のことである。この宇宙の中心に初めて現れて来る意識、天の御中主神(言霊ウ)、次に高御産巢

日の神(ア)、ついで神産巢日の神(ワ)が、やがて理解されて来る、と古事記は説く。その「天地の初発」を先ず知るための自己の心の祓いの教科書が般若心経なのだ。それ以来、色即是空、空即是色の般若心経の内容の理解が筆者のどうしても通らねばならぬ言霊学の関門として立ち塞がったのであった。

今、般若心経を以て人の心の祓いをする御本尊、国常立尊を祀る御岳神社の奥社のある木曾御岳山に登ろうとしている。師より言霊学の手解きを受けてから早や二十年余の歳月が経過していた……。

道は白檜曾の林から這松地帯に入り、やがて八合目を過ぎた。そこからはほとんど樹々の姿は消え、岩ばかりとなる。筆者も家内も長時間のバスの中の暑さに疲れてか、少々高山病気味となり、岩場の急坂を登る足が重い。度々休むこととなった。岩を積み上げて作った避難小屋がある。一息しながら途中であった白装束の老婆二人の言葉を思い出した。

二人とも七十才はとくに越えたと思われる老婆で、お互いに手を取り合うようにして降りて来て、一息している筆者の傍らによるよるとしながら腰を下ろした。「昨日は

田ノ原から七時間かけて頂上にお詣りした。今朝は七時に頂上の小屋を出発して、此処まで五時間余になる。上りは這ってでも行けるが、下りは這うわけにもいかず、骨が折れる。それでも今年もお詣りが出来て有り難い」と話す。

行程普通三時間のところを倍以上の七時間かけて登り、下りはあの分だとそれ以上かかることだろう。信仰の力は大了したものである。年をとっても、焦らず氣力と弛まぬ努力があれば、こんな高い山にも登ることが出来るのだ。登山だけに限らない。生あるうちは、あの老婆の如く焦らず、弛まず一日一日を、一步一步を努力して行けば、事は必ず成るものであろう。筆者・家内とも深く頭を下げる思いがしたのである。

【収載】第二十九号（平成二年十一月）

●会報三十号の発行に当たって

高き空 黙然と摘む 零余子わかしこかな

零余子は粒は小さく器量も悪い。近頃好んで食する人は少なくなつた。しかし晩秋の澄んだ青い空の下で、山の芋

の蔓から摘まれる零余子を見ていると、何か宇宙に漲るエネルギーがこの小さい粒の中に凝縮されて詰め込まれたような感じがして来る。摘まれなければ人知れずに地に落ちて、来年の芋の蔓となって延びる。

思えば人間も同様である。広い宇宙と両親の愛の中に生み落とされて、環境に順応しまたは環境に反抗しながら手足を伸ばす。人間の意識の住家は狭い肉体なのではない。広い広い宇宙なのだ。

この人間の意識の始めを古事記は詳細に説明する。「天地の初発はじめの時、高天原に成りませる神の名は天の御中主みなかつぬしの神（言霊ウ）……」人間には天与の五つの性能がある。ウオアエイの五つの母音の世界から現れて来る。ウは欲望、オは経験知、アは感情、エは実践智、イは生命意志の世界である。五つの性能があるから、言霊の学問に対する人間の態度にも五つの段階が出来る。

欲望の次元から言霊学を見ると、何だか得体の知れないつまらないもの、と感じるのであろう。「訳の分からぬ一銭にもならぬもの」という言葉が返って来る。経験知の立場から謙虚に聞くならば、言霊の概要は理解される筈である。何故だかは分からぬが、言霊学の主張は本当らしい、とい

うことになる。その理解された立場から見ると、過去の日本と世界の歴史、社会の変動の経緯の大筋が成程と思われて来る。けれどこの性能からは、将来のことに關しての見通しは真つ暗である。過去の理解は出来るが、将来は分からない。経験知とは過ぎ去つたものについての知識の積み重ねなのだから当然である。

以上の欲望(ウ)と経験知(オ)の分際を知るためには人間が自分の生命の本性を知る必要がある。自分の意識、考え、感じ方の本体が自我であると思うことは幻なのであつて、実は宇宙そのものなのだ、ということを知らなければならぬ。言靈アを知ることである。その立場に立つて初めて欲望と経験知の世界の、それまで気付かなかつた真実の姿(真相)を知ることが出来る。この段階で人間は初めて自身自身の主人公となるのである。自分の生活に關する限り何の主義・主張にも、また靈的影響力にも依存することのない文字通りの創造者となるのである。けれどもこの段階では自分の住む社会と世界を他者としか見ることがない。

更に段階が進むと、宇宙そのものの意志(言靈イ・古神道で皇祖皇宗の経綸と呼ぶ)とその原理の運用法(言靈エ)を知るようになる。今後の世界はどうなるのだろうか、から

今後世界をどのようなものにして行けばよいか、どのようにするか、に意識が変わる。社会と世界が他者から自己の責任の場へ変わる。一人のスメラミコト(言葉を統べる人)の誕生である。

言靈字は難しい、とよく言われる。それはオギャーと生まれた時から天から授かつている自分の性能の全部を知らされていないために、五分の二の部分(イとエ)が意識の外にあるが故である。知らないものは、現にそれが自分の中で動いていても気が付くことが出来ない。靈知り(聖)滅して二千年、末法の世のなせる業である。三人寄れば文殊の知恵という。「三三人わが名(イエス・キリスト)によりて集まる所には、我もその中に在るなり」とも言う。言靈字がどうしても難しいと思う方は、足繁く「言靈の会」にお運び頂きたい。小さい零余子もお互いに切磋琢磨すれば、魂は磨かれ心の真相に触れることが出来る筈である。

会報が今月で三十号となった。発刊以来二年六ヶ月が経つたことになる。この間、日本は昭和から平成に変わった。日本経済は世界驚異の高成長を持續している。世界も大いに変わった。ソビエト・ロシアを始め東欧諸国の変革、欧州統合への機運、東西関係の融和、どれをとつても大変化

である。と同時に武力を以て外交活動の手段としないことを国是としている日本の世界に対する影響力が、日本の政治家、経済人、そして国民が意識する以上に、世界の中で飛び抜けて巨大なものになって行く様相を見逃してはなるまい。

今後日本も世界ももつともつと急速に変わって行く。その変革の終章を迎えた所で、世界の誰もが予想しないドンデン返しが待っている。この世界の歴史の終幕であり、同時に新しい世界の開幕の主役となるのが人類の精神の秘宝である言霊の原理なのだ。日本と世界の今後を最も冷めた眼で見通し、最も熱き責任に於て見守る世界で唯一の予言書が本会報なのである。

「言霊の会」は新世紀を担う霊知りであるスメラミコトが出現するまで世界歴史創造上の縁の下の力持ちの役目を黙々と遂行しよう。

新しい時代への舞台の台本は既に出来上がっている。旧世界の変革の終章は近付きつつある。新しい時代の建設は——乞う、御期待である。

「新しい時代の配役希望者募集中！」

【収載】第三十号（平成二年十二月）

●神様の戸籍 その五

御岳神社 続き

九合目を過ぎ胸突き八丁、更に急な登りとなり、やがて王滝山頂に着く。午後三時、王滝山頂神社に参拝する。大きな山小屋がある。中に入って見ると、二三人の人が忙しく働いている。「明日、小屋を閉じる準備をしている」という。最高峰剣ヶ峰は行く手の火山灰土の荒地の更に向こうに聳えている。重い足を引きずって進むこと二、三十分の距離である。雲が垂れ込めて来て天候が怪しくなった。今にも雨が降りそうである。

午後四時、やっと剣ヶ峰頂上直下の山小屋に着いた。旭館という。予定より随分時間がかかったものである。幸い、三千米余の高度にもかかわらず小屋には風呂の設備があった。疲れた身体には何よりの御馳走である。入浴・夕食の後、早めに二人だけの個室で床に入った。夜中何時頃であったか、目が覚めて部屋の小さい窓から外を見た。ガスが立ち込めて視界は零である。明朝の良い天気は望めそうもなし……。

目が覚めた。直ぐに眼を窓にやると外は既に明るみかけ
ている。時計を見ると四時四十五分。急いで服を着て登山
靴を履くのもどかしく外に出た。薄明かりの空に雲一点
もない。昨夜の暗雲が嘘のように晴れ渡っている。「しめ
た、日の出が拝める。」山小屋の真上の頂上に登る。頂上
の御岳神社奥社は今、立て替え中と見え、資材が薄暗がり
の中に積んであるのが見える。明け方の山頂を吹き渡る微
風に眠気が吹っ飛んだ。

空が次第に明るさを増し、頂上よりの眺望が開ける。そ
の三百六十度の眺めの素晴らしさは譬えようもない。高度
二千米程より下はすべて雲海に覆われて下界は見えぬ。そ
の雲海の上に日本を代表する三千米級の山々がすべて頭を
出して連なっている。東に向かえば右より南アルプス・中
央アルプスの山々が連なり、南アルプスは塩見岳と思われ
るその向こうに高く富士山が孤高の姿を表している。眼を
左に転ずると八ヶ岳連峰・蓼科山が顔を出し、更にその左
に北アルプスの山々、槍・穂高の山群、その左に近く迫る
のは乗鞍岳であろう。更に左を見れば雲上になだらかな山
容を現すのは加賀白山である。それより左、西方は眼下に
御岳の摩利支天・継子岳の連なりの他は雲海の白一色、何

もない。絶景・絶景。自分が今、自分の足で踏んでいる此
処御岳の三〇六三米の頂上を中心として三六〇度の大バノ
ラマが見渡されている。

東方のやや北よりの山の端の空に小さい赤い一線が現れ
た。次の瞬間、一点ピカリと曙光が眼を射る。「出た」と誰
かが叫んだ。日の出である。一点の活光が御岳山頂からの
大バノラマに一瞬、生命を入れるように輝いた。八ヶ岳は
赤岳よりやや南、権現山か編笠岳のあたりから日は昇りだ
した。一つの点は見ると燃え上り、御岳全体が、
そして雲海が真っ赤に燃え上がって来た。頂上にいた二、
三十人から歓声が上がる。合掌する人も居る。筆者は姿勢
を正して家内と共に「高天原成弥栄」を唱えた。時に八月二
十七日午前五時十二分三十秒であった。「まじり気のない
日の出」を見たのだった。

下山は登りの苦しさが嘘のように足取りは軽かった。南
アルプスの上に顔を出した富士山の姿が美しい。九合目あ
たりで一羽の雷鳥に出会った。人を恐れず数米の近くに寄
っても意にせず高山植物の実をついばんでいる。帰途遙拝
所に寄った。山頂で一夜を過ごし、朝素晴らしい日の出を
見た御岳の山容を遙かに見ながら祭壇に向かって祝詞を唱

えた。秋の近いことを思わせる澄んだ空に雲一点もなく、高原の爽やかな風が吹き渡って遙拝所は静かである。

そのベンチに腰掛けてみると、登山を終えた安堵感が心の中に広がって来た。その安堵感の奥の方から、「般若心経は国常立尊の祓いなり」と先師が教えて呉れた御岳神社の祭神、国常立尊そのものの言霊学的構造が一つのイメージとして筆者の心中にまとまって来るのが感ぜられた。

「国常立尊のお出ました」と呟いたのだった……。

国常立とは民間信仰で、良の金神と呼ばれる神である。

この神様は厳格な正義の神で、昔暗黒の世の初めの時、悪い神々に疎まれて、「炒り豆に花の咲く時現れる」と言っている良の方角に隠れてしまった、とお筆先に書かれている。良とは北と東の間の方角で、方位学で最も清浄な方角といわれる。金神の金は神音で、金神とは言霊の神を意味し、言霊工即ち国常立尊のことである。「炒り豆に花の咲く時」とは炒った豆からは発芽することのないの譬えから、人類の非常の時を意味している。国常立尊とは人類の大転換の時に姿を現す神だということの教示である。

右に挙げた民間信仰の言う暗黒の世の初めとは、現実の歴史でいえば何時のことか。それは今より二千年前、第十

代崇神天皇が神鏡と天皇御自身との同床共殿の制度を廃止して、言霊の原理をこの世の表面から隠し、力の強いものだけが世の中にはびこる弱肉強食の覇道の社会が始まったことを指している。

「炒り豆に花の咲く時」とは何時か。正に現代である。科学文化の急速な発達と科学産業の発展のために、却って人類全体の生存そのものが脅かされている大危機の今のことである。この時、予言された如くの良の金神、国常立尊である言霊の原理が人間の意識にはつきりと姿を現して来た。

この言霊の原理が世に甦るための将来の拠り所として、約千三百年前古事記・日本書紀が編纂されたのであることは度々お知らせした。記紀の神代巻は言霊原理の教科書なのである。それなら古事記と日本書紀は共に同じ内容のことが書かれているのか、というところではない。簡単に言えば、古事記は人間の精神の構造についての言霊の原理の全容を説き、書紀は古事記に示された言霊による精神の構造をすべて知った上での、日本民族の使命遂行の方法即ち言霊工(実践智)を説くのである。

古事記は先に書いた如く「天地の初発の時……」に始まって、天の御中主の神(言霊工)・高御産巢日(たかみけすなび)の神(ア)・神産

巢日の神(ワ)等々十七の神々が生まれて来る。人間の心の先天の部分の構造である。神産巢日の神(ワ)の次に現れる神名を挙げると——宇摩志阿斯訶備比古遲の神(言靈ヲ)・天の常立の神(オ)・国の常立の神(エ)・豊雲野の神(エ)と大自然の内容を示す母音・半母音の言靈を現す神々の名である。

その次に初めて宇比地邇の神(言靈チ)から妹阿夜訶志古泥の神(言靈ニ)に至る人間の創造意志の働きのリズムである八つの父韻を現す八神の名が出て来る。そして最後に「いぎ」と立起する人間の意志そのものである伊邪那岐・美(言靈イ・キ)の二神が登場して来る。ここま

でが人間の心の先天の部分である。古事記はその後、心の後天部分である三十三の子音、先天後天合わせて五十音の言靈の操作である四十七の手順、それによって出来る三つの結論としての宇宙像(天照大神・月読命・須佐男命)の誕生を説き、総合計百個で人間の心の全構造を明らかにしている。

ところが日本書紀はどうであろうか。書物の冒頭を国常立尊から説き起すのだ。国常立尊とは言靈エである。言靈エは言靈ウ(欲望)・オ(経験知)・ア(感情)の三つの母音

性能をコントロールして社会文化を創造して行く道德・政治の活動の能力である。他の三つの性能をコントロールして文化を創造する、という以上、その三性能についての全ての構造や機能など人間の心の全部について理解し尽くした立場に立つことが出来て初めてそのことが可能となるであらう。

かくて古事記は人間の心の構造とその動きを言靈で示し、その上で結論理念を確立する事を主眼として編纂されたのであり(七二二年)、その八年後日本書紀が古事記の原理に則つて実際の創造活動を起す動きの法則を後世に遺すために選上された(七二〇年)であることが理解出来るのである。

古事記と日本書紀との神話の内容の相違を以上のように考えると、書紀の神話の冒頭の文章の意味が手に取る如く明瞭に解釈されて来る。

「古は天地未だ割れず、陰陽分れざりし時、渾沌れたること鶏子の如くして、ほのかにして牙を含めり。……時に、天地の中の一物生れり。状葦牙の如し。すなわら神となる。国常立尊と号す。……」

右のように日本書紀は宇宙を鶏の卵に譬えて心の宇宙か

図 030-A

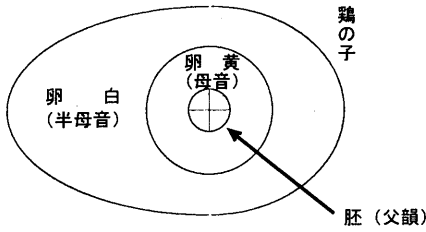
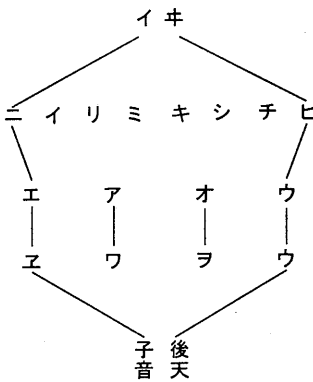
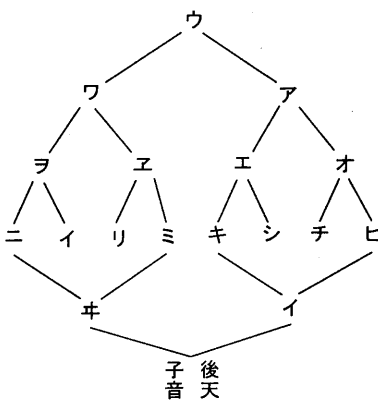


図 030-B



ら初めて神(言霊)が現れて来る様子を説明している。
 鶏卵の構造を古事記が示している心の先天構造と比べて見ると、卵黄が母音、卵白が半母音に当たる。そして「天地の中に一物生れり」と鶏の卵の生命が宿る。胚である。宇宙創造の初めである生命意志であり、言霊と言う父韻に当たる。その初発の活動体を日本書紀は国常立尊と名付けた(図030-A並びに会報十九号「立春立卵」参照)。

古事記は人間の心の先天構造を大自然である母音から説き起こし、日本書紀は創造主の働きである父韻から説き始めるのである。(図030-B参照)。母音も父韻も同じ先天構造の要素であるから、どちらから先に説き始めても矛盾はない。けれどその説明の目的とする所が全く違うのである。古事記の母音の存在から説き始める立場からは、言霊の原理の教科書として人間の精神構造についての学問(言霊学)

が成立するのに対し、日本書紀の父韻から説き起こす立場からは、原理に基づく行動実践の法則(言霊工)が示される事となる。

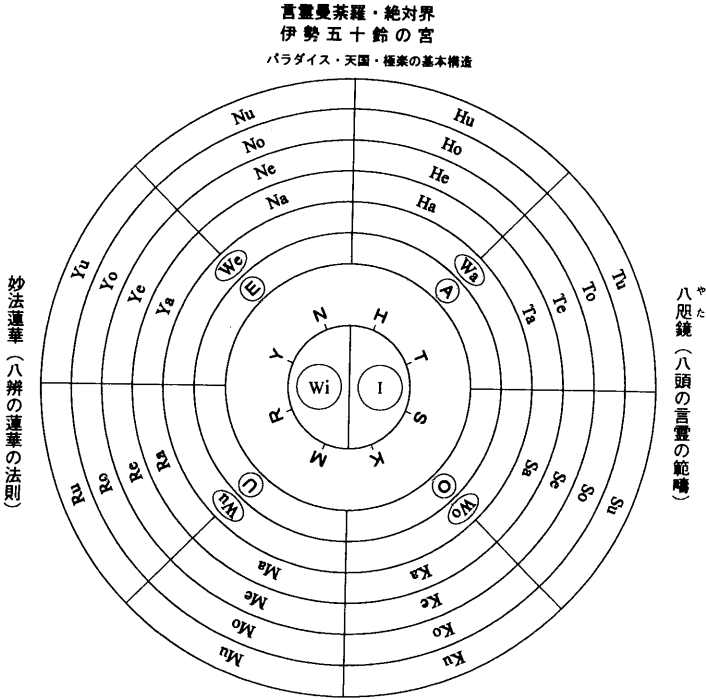
筆者の師、小笠原孝次氏は言霊学に於ける上述の発想の立場の進化を「言霊学に於けるコペルニクスの転換」と呼んだ。大自然である言霊母音の存在から考える立場(天)から、所謂人間の創造意志から出発する立場(地)への転換は正しく言霊学の天動説より地動説への転換と呼んで然るべきものであろう。

その上で師は日本書紀の発想に基づいて、創造主である言霊イ・キとその創造意志の展開である八つの父韻の活動から説き起こす人間の生命の創造行為の図式を完成させたのである(図030-C参照)。

以上の古事記より日本書紀への言霊学上の視点の進化は言霊の原理を勉強する

上での大きな指針ともなるのであろう。言霊原理の勉強者

図 030-C



小笠原孝次著「言霊開眼」より引用

は古事記とその言霊学的な解説書によって、五十音言霊に

よって構成された人間の心の構造と、心の中でその五十の言霊がどのような手順で動くか、またその動きの末に人間の文明創造上のどのような結論に到達するか、の原則を学ぶことが出来る。しかしこの立場は学問(言霊学)の段階であって、日本古来の伝統である言霊布斗麻邇のすべてではない。

言霊の原理の概要を理解した人は、更に歩を進めて、自己反省によって自分の生命の本質を知ることが必要であろう。それによって如何なるものにも束縛されない精神の自由な立場、心の宇宙そのものに立ち返ることが出来る。自己とは生かされ育まれているもの、と知る。同時に過去も現在も、そして将来をも人類の歴史の歯車を陰に陽に言霊の法則に基づいて廻している日本人の祖先、皇祖皇宗の経綸を知ることとなるのである。またその経綸の中の一員として生きることの使命と鴻恩を感じる。言霊学上の言霊アの自覚の完成である。

魂の遍照は更に続く。反省と勉学によって自分の世界・社会に対する視点を上げて行くことである。皇祖皇宗の自分を導いて下さった鴻恩を感じたら、報恩の生活の出発である。この念を抱く時、人は人類の歴史に対して始めて責

任を感じる。同時に言霊の動きが即自分であり、また他人の動きでもある、と知る。言霊を自分の外に見ることから内にあるものに変わる。伊勢五十鈴の宮の五十の鈴が自らの中で鳴る。人間とは人類歴史の創造者なのである。

此所で視点は始めて生命の創造意志の立場に立つことが出来る。一人のスメラミコト(統めら御言)の誕生である。言霊イ・尹の自覚の完成である。日本書紀の冒頭の文書はこのところの消息を伝えているのだ……。

御岳山七合目の遥拝所のベンチに腰掛けて、自然と湧き起る魂の昂揚を感じていた。当時の筆者の日記帳を見ると次のように書いてある。

「遥拝所にて心中感ずることあり。以前より国常立尊と言えば、単に言霊エ、または『般若心経は国常立尊の祓いなり』という先師の言葉によって空の体得のみにこだわって来た。今朝、御岳山頂の日の出の一瞬の光のひらめきによって魂に新しい生命が吹き込まれた感がある。心の一切のこだわりを突き破って言霊エ、それも八父韻を基本とした文明創造意志の担い手としての皇祖皇宗の経綸の実行者である国常立尊の甦り・誕生の時が来たことを厳粛に知ったのであった」と。

天は飽くまで高く。夜明けに山頂から見えた一面の雲海は此処ではすっかり姿を消してしまっている。遥拝所の静けさの中を心地よい微風が渡る。「戸隠に、そして木曾御岳に来て良かった」戸隠では言霊の原理が不死鳥の如く甦り、人間の意識の中で再び産声を上げる時の仕組みをはずきりと知ることが出来た。ここ御岳では、人間の心の構造の学問としての言霊学から歴史創造活動の原理に飛躍する生命の光のひらめきを感じることが出来た。人類歴史待望の国常立尊の誕生である。今より世界の歴史の車輪は文字通りの世紀末に向かい、更に新しい世紀へのドンデン返しに向かつて轟々とその回転の速度を速めることだろう。

遥拝所に続く高原の地塘の園地を散策し、登山口田ノ原の山荘に入って家内とビールで乾杯した。高原の空気の如く爽やかなビールの味であった。田ノ原発十時五十三分木曾福島駅行きのバスで帰路に着いた。バスの車窓から遙かに木曾御岳の姿が美しい。

(この項終わり)

【収載】第三十号（平成二年十二月）

言靈學隨想

仏教の禅宗に伝わる話である。達磨大師が壁に向かつて座禅をしていた。慧可という人が外の雪の上立って達磨に言った。「私は一所懸命に修行して来ましたが、まだ悟ることが出来ず、心の平安を得ることが出来ません。どうか先生、私の心に安らぎを与えて下さい」と。達磨が言った。「貴方の心に安心を与えてくれ、というなら、貴方の心を此処に持つてきなさい。そうしたら安心を与えよう」と。慧可が答えた。「その心がなにかと求めて来たのですが、未だに手に入れることが出来ないのです」達磨が言った。「貴方のために心を安心させてあげたよ」と。

人の心は変転極まりない。今鳴いた鴉がもう笑う。人の陰口を気にしたら一生こそそこそと生きねばならぬ。流行を追ったら一生見栄を張ることになる。心の中に間断なく浮かび上がって来る思いや欲望に捉われて、身を任せていると泡沫の人生で終わらねばならない。

楽しい、悲しい、という心の現象が唯一つしかない広い

宇宙(空)から生まれて来るのだ、ということを感じて、変転極まりない心の思い、欲望が捉え所のない泡のようなもの、と確かめることが出来た時、人の心の視点が宇宙そのものに帰る。どんな境遇の下にあっても、生きていくことが掛け替えない尊い有り難いものであることを知る。今迄泡の如く儂く思われていた出来事の真実の姿(実相)が見えて来る。「貴方のために安心させてあげたよ」という達磨の言葉が自分の心の中で厳しくも温かく確かめられる。人生の明と暗の分かれ目が何処にあるかが理解される。

明も暗も含めて、全ての心の出来事が、どのようにして生まれて来るか、の心の内容を余すところなく解明したのがアイウエオ五十音言靈の原理である。

現代日本語の大半はこの原理に基づいて作られた。だから日本人がこの日本語を話している限り、個人の生活はもとより、民族の将来も使命もこの原理によって決定され、その行方を正確に推測することが出来る。

日本の言葉の原理は、日本人ばかりでなく世界人類の精神の秘宝であることが、そのうちに世の人に理解されて来る。その時から世界の恒久平和が開かれるのだ。

平成三年

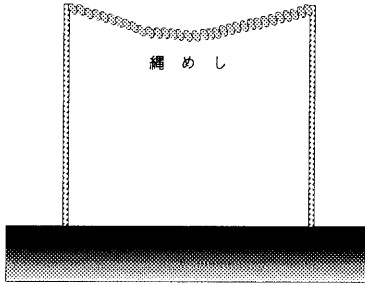
●神様の戸籍 その六

大神神社

この神社の名は大神と書いて「おおみわ」と読む。この読み方が一つの謎である。神社の所在は奈良県桜井市、三桜井線三輪駅から三百米の処にある。また大和古道の一つ、天理市の石上神宮に始まり南に延びる山の辺の道の終点近くにこの神社はある。わざわざの参拝者と共に山の部の道散策の人の参拝も多いように見える。

神社案内によれば祭神は大物主神並びに大己貴神・少彦名神とある。この神社には拝殿のみあって本殿はなく、神社背後の三輪山を御神体とする由である。日本で最も古い神社といわれ、第十代崇神天皇の時より社運が隆盛になった、と伝えら

図 031-A



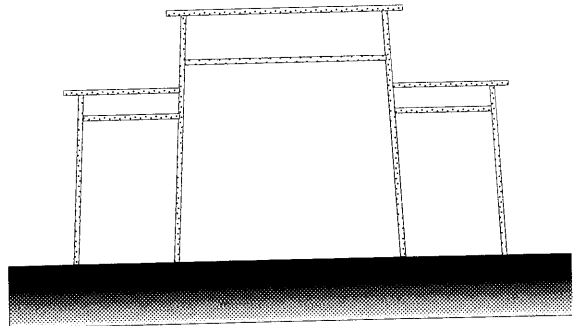
れている。

この神社に参拝して特に眼につくのは鳥居である。

先ず初めは、駅より歩き参道を進み石段を登り切った処、拝殿前にある鳥居である。二本の柱を立て、それぞれの頂点を結んで一本のしめ縄(七五三縄・尻九目縄)が渡してある(図031-A参照)。

更に目を見張らされるのは、駅からの参道ではないので余り人々が気付かないようであるが、南参道に立てられた三つの鳥居が一緒になった形をした大きな鳥居である(図031-B参照)。この鳥居からは、神社拝殿の背後・丁度北方

図 031-B



に御神体である三輪山が望まれる。

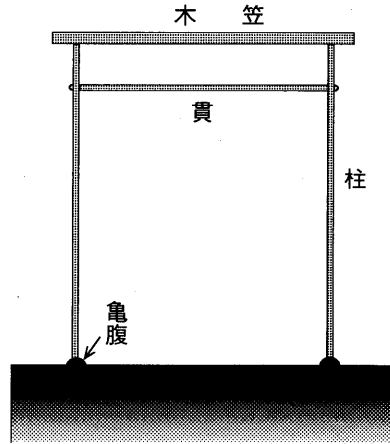
実はこの三つ組

の大鳥居の形は大神社の御祭神の戸籍内容と深く関係した形なのであり、神秘的で雄大な意味を持っている。追々詳しく説明することとしよう。

神社に参拝する人は参道に立てられた鳥居をくぐる。「これから神様にお詣りするのだから気持ちを引き締めよ」と告げるように鳥居は立っている。鳥居とは何なのだろうか。辞書を引こう。「鳥居——神社の門。左右に掘立てた二本の柱の上に笠木かさぎを載せ、中に貫ぬきを入れたもの」とある(図031-C参照)。

鳥居は単に神社の門だけの意味なのだろうか。そうではない。実は鳥居とは、それをくぐり神社に参拝する人々に

図 031-C



参拝の対象である神様とは何であるか、を表徴し示したものである。五十音言霊図(図031-D)を参照願いたい。

先に「神様の戸籍」の序論で、神とは何か、言霊である、ということの説明した(会報二十六号)。言霊五十音は神といわれるものの内容を表している。神の内容とは人というものの内容である。人というものの存在と行為を成

立させる一切のもの、それが神である。

そのことを頭に入れておいて五十音図と鳥居との形を比較してみよう。音図に向かつて右の五つの母音は私自

図 031-D

		八 父 韻									
		ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
半母音	キ										イ
	ウ				三十二子音						ウ
	エ										エ
	ヲ										オ

体の意味し、鳥居の右の柱がそれを示している。私とは五つの性能(ア||感情、イ||意志、ウ||欲望、エ||実践智、

オ(經驗知)において生きてゐる。音図の向かつて左の五つの半母音は私に対する貴方を意味し、鳥居の左の柱がそれに当たる。

私と貴方が向かい合つて、何らかの思いや言葉が交わされると、そこに現象が生まれる。われわれ日本人の遠い祖先は、私と貴方との間を飛び交う思いや言葉、言霊学でいう創造意志の八つの波動のパターンである八父韻を、鳥が此方の枝から彼方の枝に飛び交う姿に譬えて、二本の柱と柱との間に笠木を渡して、神とは、人間の創造活動とは何かを形に示し、鳥居と名付けたのである。

鳥居の左右の柱が母音・半母音であり、笠木が八父韻であるならば、その門をくぐつて神の前に詣でる人々こそ神によつてこの世に生み落とされ、三十二相の現象子音として、それぞれ異なった姿を持ち、生来の使命を持った神の子であることが了解されて来るのである。

鳥居の語源を五十音図の上から以上のように説明すると、次のような疑問を持たれる人がいるかも知れない。「鳥居が五十音図の表徴とするなら、母音のA行と半母音のW行を意味する鳥居の二本の柱の上に渡した笠木の両端が、両方の柱の外に突き出ているのはどうしてか」と。誠にも

つともな疑問である。そしてこの疑問に率直に答えてくれるのが図031Aで示した大神神社拝殿前の特異な鳥居なのである。

先に書いたように、この鳥居は左右二本の柱の頂点を結んで一本のしめ縄が渡してある。大神神社が日本最古の神社といわれていること、それに加えて「しめ縄」と呼ばれるものの真の意味を知る時、大神神社のしめ縄を渡した鳥居が、日本各地の神社に見える鳥居の原型を示しているに違いないことが了解されて来るのである。

さて神道で「しめ縄」とはどんな意味があるのか。以前会報誌上(第十七号)で一応説明したことがあったが、ここで再び検討してみよう。辞書を引いてみる。『しめなわ——注連縄・標縄・七五三縄。「しりくめ縄」の約で、わらの尻を切らずにそのまま込めて置く縄の意といわれる。漢語の「注連」は水で注ぎ清め、連ねて張る縄で、出棺後に家の入り口に張つて亡魂が再び家に帰つて来ないようにしたものという。神前または神聖な地域などに掛け渡し、内外を区画し、不浄と隔てをするために引き渡す縄。新年に門戸に張るのは災神の入らぬようにとの意からである。縄は左捻りが定式で、三筋・五筋・七筋と順次にわらの茎をより放

して垂れ下げ、その間に紙四手(しで)を下げる』とある。

辞書の漢語「注連」の意味は別として、神道におけるしめなわの意味をもう一步突っ込んで考えてみよう。

辞書にしめ縄とは「しりくめ縄」の約だとあった。その意味はしり(尻)を切らず、そのまま込めておく、と説明する。しかしこの説は後世の作り事で、しりくめ縄とは「知九目縄」の意である。図031・Eを御覧頂きたい。

図031・Eの内の上の図は易で洛書と呼ばれ、八卦の基本図形である。正四角形を縦横三つに区切ると、九つの四角形が出来る。そこにそれぞれ九つの目(一から九までの数)が入る。この数は縦横斜め、どの方向も、その三つの数の和は十五となる。数学で魔法陣という。真ん中の五は八卦を見る主体である吾を示す。五である主体の言葉

を發する口で漢語「吾」の語源となる。

五を取り巻く八つの数は

図 031-E

二	七	六
九	五	一
四	三	八

ヒ	ニ	チ
リ	キイ	イ
シ	ミ	キ

主体である吾が外界(貴方)にどう対処したらよいか、の八卦を数の並べ方で示したものである。八卦が整えば物事は

よって決定される。それがまた人間の生活の全ての初めであり、それが神である、ということが出来る。その人間の

順調に運ぶ。この状態を縦横斜めの三数どれを加えても合計十五となる数の調和で譬えている。八卦が乱れば事態は混乱する。

右に説明した中国の易の洛書は、実は日本古代の言靈学の原理である八つの父韻が数に置き換えられて中国に伝えられたものである。父韻チイキミシリヒニは私と貴方との間に働く人間の創造意志のリズムであり、私と貴方の間にやり取りされる言葉や思いを創り出す元となる意志の波動である。図031・Eの下の図に見るように、真ん中に創造する主体であるイ(キ)が入り、その廻りの八つの枠に言靈の八つの父韻が入る(中心にある意志のイと父韻のイは同じ

ではない。ローマ字で書くとき意志のイは《I》であり、父韻のイは《Yi》である)。私と貴方との間にどんな言葉が交わされるか、によってどんな出来事が起こるか、が決まる。言い換えると私自身(貴方)にどう対処する仕方、即ち八つの父韻がどんな順序で並ぶか、に

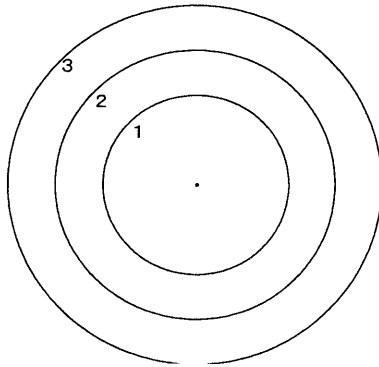
創造の法則を知る、即ち九目を知るための縄で知九目縄——尻九目縄と呼ばれるのである。縄(なわ)の語源は名和(なわ)である。名である言葉の順序の調和(なわ)の意である。

また縦横斜めに並ぶ三つの数の代表として七五三を取り、七五三縄でしめ縄と読ませるのである。更にしめ縄を三筋・五筋・七筋と放してわらの茎を垂れ下げて作ることで、七五三の数の調和を強調しているのである。またそこに下げる神四手(かみよっぺ)とは言霊父韻の働きを型取ったものである。

右のしめ縄についての言霊学上の説明によつて、大神神社拜殿前の鳥居の二本の柱と、その上に渡されたしめ縄が言霊五十音図の右側の五母音、左側の五半母音と、両方を結ぶ八つの父韻を、即ち参拝の対象である神とは何ぞやの説明を造形化したものであることが理解されて来るであろう。これが鳥居の原型なのであり、現在日本各地に見られるような、笠木が二本の柱の外に突き出した鳥居は後世の美化された産物であることも了解頂けるものと思う。

尚一言付け加えると、鳥居の上に渡された笠木とは言霊

図 031-F 輪 三 大



五十音図で見ると母音と八父韻と半母音、即ち五十音図の上段の十の言霊に当たっている。十の理(ことわり)で十理(とり)となる。古代大和言葉の鳥(と)の語源である。

大神神社拜殿前のしめ縄を渡した鳥居の意味の説明はこの位にして、次に南参道にある三つ組の鳥居の示す意味についての説明に入ろう。

文章が余りに長くなるから、先ず結論から述べよう。「おのみわ」とは大三轮即ち偉大なる三つの輪の意である。

言霊ワといえば、その内容を端的に表す言葉は我・和・輪等であろう。我とは吾に対する汝であり、始めに対する結果の意でもある。和とは戦争や混乱が静まった状態のことであり、ま

た多くの数の合計とか、調和を意味する。輪は円い形をしたものであり、詳しく言えばそれは輪の一点で正反対の方向に離れて行った両者が、無限大の時間と距離の経過の果てに、ある一点で再び相会する事を表している。以上の言

靈ワについての説明から「おおみわ」の意味を図031Fで想像して頂きたい。

この三つの輪の重なりを哲学用語を借りて説明してみよう。弁証法という言葉がある。「思惟・精神・歴史等の発展を反対物・矛盾の闘争・総合の三つの段階の変化として捉える思考法」と辞書に見える。

人間の頭の中に、また歴史のある時代に、一つの状態が存在している。その状態が最も盛んになった時、その考えや時代の風潮の中に今迄の状態とは全然反対の状態が新しく興って来る。同じ考え、同じ歴史の中に正反対のものが争う。やがてそれら正反対の両者は、時の経過と共に両方のそれぞれの特徴を失うことなしに次の全く違った状態で統合される。初めの状態が正、それと反対の状態が反、それら正反の二つを総合する立場を合、と考えると、所謂正反合の弁証法的な考え方が成立する。「大三輪」の意味を考える時、この弁証法的な考え方が良い参考となるのである。

大神神社の大三輪(偉大なる三つの輪)とは、人類の数千年に渡る文明の進歩の様相を、三つの段階(輪)の発展の形で表徴した言葉なのである。真ん中の輪は太古に栄えた完成された人類の精神文明の時代を表し、第二の輪はここ三

千年間地球上が一色に塗りつぶされた物質文明の時代を意味し、第三の大きな輪は現在その展望が眼前に開かれようとしている精神文明と物質文明の枠が総合された第三文明時代を予想させているものを意味している。

大神神社の南参道に聳える如く建てられた大きな三つ組の鳥居は、右に述べた人類の歴史の三段階の飛躍において人間の考え方のそれぞれのパターンを表徴したものである。向かって右の小さな鳥居は太古の精神文明時代の精神構造を、向かって左の小さい鳥居は現代まで三千年間の物質文明創造の時代の精神構造を、そして真ん中の大きな鳥居は来るべき第三文明時代における物心両方の原理を車の両輪とした文明創造の精神パターンを表している。古代人の素晴らしい創造精神と、それを見事に表徴した造形力には全く驚嘆の他はないのである。

今を遡る三千年の昔に、人類文明全体を見渡す大きな視野を持ち、その文明の数千年に渡る発展の様相を把握していたばかりか、その歴史原理を簡潔な形に表現して後世に遺すことが出来る人が実際に居た、という事実を現代の人はとても信じていることが出来ないのだろうか。

しかし言霊布斗麻邇の学によって人間精神の全構造とそ

の動きの法則を余すところなく知ることが出来るならば、過去・現在・未来の人類の歴史の大筋を知り、それによって将来を予測することは容易なことなのである。「おのれを知り、相手を知らば、百戦戦うも危うからず」と孫子の兵法は教える。更に自身も相手も含めた人間そのものを全て知り尽くせば、人類の行く道は自ずと明らかに見通すことが可能なのである。

大神神社が右に説明した「大三輪」を何時の時代から「大神」と書くようになったか、筆者は知らない。けれど大三輪が表徴する人類の文明の歴史が三つの段階で飛躍進歩するという考え方の意義の悠大さに気付くならば、三つの輪の法則が即ち神であり、大三輪を「大神」と表現しても何ら不思議なことではないように思われるのである。

ここで一言書き添えておきたい事がある。現代の歴史学の一説によれば、古代において出雲族いづもと関係の深かった三輪族と、大和地方において日本全土の統一・中央集権化を進めていた大和族との間に種々の闘争・融和の交渉があったと主張されている。或はそれも事実であったかも知れない。ただ古代の歴史を考える場合、歴史を今日見る如き権力闘争のみから推理すると歴史の大筋を見失う恐れがある

ことに留意しなければならぬ。もう一段高い視野から歴史を見るならば、その大和族の中央集権化による三輪族の統合に際して、三輪族の氏神であった大物主神が、大和族の高次の政策によって歴史創造の理念にまで高められ、国家全体の神として採用された、と考えることが出来る。その精神的経緯については後程古事記・日本書紀について詳しく触れることとする。また各時代の歴史的事件についての詳細は今後の研究に待たねばならない。

以上大神神社の特異な二様の鳥居の説明から神社の内容について書いて来た。いよいよこれからこの神社の祭神大物主神の戸籍調べに取りかかることとしよう。筆者この大神神社と御縁があるのか、前後数回参拝する機会に恵まれた。昨年秋の参拝時には拙著「言霊」を奉納し、南参道の三つ組の大鳥居もこの眼で確かめることが出来た。また拝殿前の笠木の代わりにしめ縄を渡した鳥居の語りかける意味に気付き、興味深い思いもしたのである。

今迄の神様の戸籍調べは筆者の各神社への参拝・旅行記の形をとってお伝えして来た。今回は趣向を変え、日本の古典である古事記・日本書紀を尋ね、古典の中の頭の旅行記の形で話を進めようと思う。

(次号に続く)

●ドンドン返し

推理小説には話の最終場面でドンドン返しがあり、思わぬ犯人が現れる、ということがある。それが名作家の手になると胸がすくような結末となる。これは小説の話であるが、現実的に私たちの住む地球上で、私たち人類が長い長い間宮んで来た文明の歴史が、今や最終章のドンドン返しに向かって日一日と近づきつつあることに気が付いている人は少ないようである。

現在の科学技術の進歩は目覚ましい。また日本の国はここ十年か十五年で全く豊かになった。日本人は自由と繁栄を謳歌しているように見える。この繁栄と自由さえあれば、多少の公害や国際的な不安はあっても、なんとか人間の知性によって克服し、やがてはこの地球上に人類の楽土が作られるのも夢ではない、と心の何処かで考える人も多いのではないだろうか。

しかし人類の歴史は直線的にそういうことには決してならない。そうなる前に劇的なドンドン返し待ちかまえて

いる。この転換期のことについて昔の宗教書や予言書がいろいろ説いているが、すべて比喩や謎であって、そのものズバリの真相はない。世界歴史のドンドン返しとはどのようなものだろうか。

それは人類社会全般にわたるいとも現実的な、そして純粋に精神的な転換である。これを説明しよう。

今、地球上には五十億余の人々が生活している。その一人一人が全く別個の思いや感情で動く。それによって国家や人類の歴史が刻一刻と創造されて行く。その千差万別に見える思想や行動であるが、人間の心の一番奥に存在している創造意志の立場（言霊原理）から見ると、たった三つのパターンで動いていることが分かる（図031-G）。

その一つはここ三千年の間の弱肉強食の生存競争の時代を指導する精神原理である。物質文明発展を促進させる基礎原理であり、現在見る如き産業経済の社会の中に典型的に生かされている。ここには弱者の生きる道はない。この精神構造を五十音の言霊で表したのが天津金木音図である。人間の欲望とその経験知に基づく西欧型の社会の原理である。

その二は第一の物質的欲望に対抗して、その独走を防ぐ

作用をする宗教的・芸術的精神の原理である。人間の物質的欲望のみに身を委ねるならば、物質的繁栄はあるかも知れないが、社会は地獄に墮ちること間違いない。その欲望の奔流を多少なりとも和める人間の性能である愛と慈悲と美しさを求める感情的精神のパターン、それは宗教と芸術であり、東洋型社会の精神原理である。言霊でその構造を表すと宝音図となる。

右に述べた第一と第二の人間の精神パターンの相互の葛藤が彩なす社会相の歴史がここ三千年来の人類の歴史であった。人々は戦争と戦争との間の束の間の平和に生きることをの喜びを見出す生活の連続であった。仏教はこの世を憂き世と呼ぶ。生きる事が全くはかない世の中であり、人はこの不安から逃れることは出来ない、と諦めよと教えられて来たのである。

しかし人生そう捨てたものではない。第一の欲望パターンと第二の愛と慈悲のパターンを程良くコントロールして、この地球社会を人類の福

図 031-G

木 金 津 天									
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
キ									イ
ウ									ウ
エ									エ
ヲ									オ

宝									
キ									イ
エ									エ
ワ	マ	ヤ	ナ	サ	ハ	ラ	カ	タ	ア
ヲ									オ
ウ									ウ

詞 祝 太 津 天									
ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
キ									イ
エ									エ
ヲ									オ
ウ									ウ

祉と繁栄の場とすることを可能にする第三の精神パターンがこの日本に存在する。言霊布斗麻邇と古代から呼ばれる人間の実践智の原理であり、その精神構造を天津太祝詞音図という。この原理に則って作られたのがわが日本語なのである。日本語の中にこのような人類の精神の宝の原理が隠されていることを、当の日本人のほとんどの人が未だ知らずにいる。

現在の人類が近い将来迎えるであろう歴史のドンデン返しとは、世界の歴史を創造する指導精神が、第一と第二の精神パターンの葛藤から第三の人間の実践智の原理に転換

することである。但しこの轉換は、衣服の流行色が赤から青に変わるといふような自然・連続的な変化ではない。全くのドンデン返しの変化なのである。これを理解するためには言霊の原理より見た人類の歴史の筋道を知らねばならぬ。

今から三千年前、それまで栄えていた太古の精神文明創造の原理であった言霊布斗麻邇の指導の下に、太古に精神文明が存在した事実とその原理を人間の記憶より隠し、物質文明発展促進のための方便として生存競争の社会を現出させる方針が決定された。そしてその競争を指導する究極の原理を行使する責任者としてユダヤ民族の長モーゼが選ばれたのである。その原理をカバラと呼ぶ。爾来、その霊統を受け継ぐ人々の陰の指導の下に、物質文明は現在見る如き繁栄を極めるに至った。物質文明社会における世界秩序の完成は目前である。

かくてカバラの原理の霊統を引き継いで来た人々が、その成果を携えて使命の完了を言霊原理の継承者の前に報告するため、この日本に姿を現す日が来る。これは三千年来の歴史の約束事であり、世界のドンデン返しはこの時より始まる。人類の文明創造の指導精神のパターンが根底から

変換される時が来たことである。新しい歴史の幕開けである。

けれどこの劇的な出来事は、日本人のみならず世界の人々の殆どが知らぬ内に行われるであろう。「目を覚まして居れ」とは予言書の教えるところであり、民間宗教はこの歴史の経緯を「九分九厘の一厘の仕組」と呼ぶ。

この時から国際紛争を解決する手段としての戦争は永久になくなるであろう。物質科学文明は唯一人類の福祉と繁栄にのみ奉仕することとなる。世界と各国家の政治と経済の制度は全面的に改革される。

三千年の間待ちに待たれた、世界人類の恒久平和の時代への歴史的轉換の時が近いことに気付く人は幸福である。

【収載】第三十一号（平成三年一月）

● 神様の戸籍 その七

大神神社続き

大神神社おみかみの祭神である大物主神については、古事記・日本書紀に二度その記録が見える。先ず最初は第一代神武天皇の章であり、次には第十代崇神天皇の章である。神武・

崇神という言霊学より見た日本の歴史上の重要な天皇の時代に大物主神が登場して来ること自体、この神が歴史学上に占める役割の重大さが窺われる。記録の検討に入ろう。古事記・日本書紀の歴史をたどる頭の旅行であるから、地図としての古事記と日本書紀をお手元に置いて頂ければ便利かと思う。

先ず古事記の中つ巻神武天皇の章を見よう。「かれ日向にましましし時……然れども更に、大后とせん美人を希ぎたまふ時に、大久米の命まをさく……」文章を口語体に直すと次のような筋となる。

神武天皇が東の方、大和地方に向かって出発される以前、まだ日向(宮崎県)に御在住の頃、正皇后となる乙女を求めていらっしやった。その時、大久米の命が申し上げるには「ここに一人の姫が居ます。神の子と言われています。そのわけは三島の渥(あそ)の娘で勢夜陀多良比売(せやたたらひめ)という人がいました。美人でしたので美和の大物主神が恋をしまして、ある時赤い矢になって娘の家に忍び込み、首尾よく結婚して一人の乙女が生まれました。名前を比売多多良(ひめたたら)伊須余理比売(いすけよるひめ)と申します。それ故神の子といわれるのです」と。神武天皇はこの伊須余理比売を召されて皇后と

しました。

以上が古事記神武天皇の章の中の大物主神の記録である。これを文字通りに見て、そのまま歴史だと考えると全く途方もない話のように思えるが、これが言霊学の意味を秘めた謎の形の神話なのだ、ということが分かると、その真意が自ずと明らかにされて来る。古事記を尋ねながら追々とその謎を解いて行くことにしよう。

「日向にましましし時……」と古事記にある。記・紀によれば神武天皇(神倭伊波礼毘古の命)はその兄の五瀬の命と共に日向(今の宮崎県)より兵を率いて東に向かい、幾多の艱難の末に大和の畝火(うねび)の白檮原(かしはら)の宮に於て第一代天皇に即位された、と伝えられる天皇である。兄の五瀬の命はその東征中に戦死された、とある。

以上の古事記の文章から、神武天皇は大和白檮原の宮に於て天皇に即位する以前から美和の大物主神と関係が出来たことが分かる。ということは神武天皇が第一代天皇として建国した神倭皇朝(昭和天皇まで百二十四代)の建国の方針と大物主神とが密接に関係していることが出来る。大物主神とは前号会報(第三十一号)で述べたように大いなる(大)物質文明の(物)主宰的(主)精神(神)なのであ

る。

そこで神武天皇に始まる神倭皇朝が成立するまでの古代日本の歴史を民間に伝わる歴史書によって調べ、その長い日本の歴史の中で、神倭皇朝が如何なる歴史的使命を持って建国されたのか、またその建国の使命と大物主神との關係を明らかにして見ようと思う。

古事記によつて日本の太古を尋ねると、神武天皇の建国までに邇々芸尊・日子穗穗出見尊・鵜草葺不合尊の三神がいた、と書かれている。これを民間に伝わる歴史書の一つである竹内文献で見ると、古事記に見える三柱の神とはそれぞれの名を冠した皇朝の名前であることが分かるのである。そしてそれぞれの皇朝は十数代または数十代の天皇が皇位を継承したことが書かれている。古事記と民間史との間でこのような相違がどうして出来たのだろうか。そのことを言葉の言葉である言霊の原理から見ると極めて興味ある事実が浮かび上がって来る。

古事記に於ては、高天原の天照大神の命令を受け、この日本に降臨したのが天孫邇々芸尊である。これを言霊の原理により見るならば、純粹の精神界(高天原)の究極の精神原理(天照大神)に則つて、この日本に於て理想の文明を築

くために渡つて来た人々、これが天孫邇々芸尊である。邇々芸とは二の二、即ち第三次的芸術の意。言霊の原理は第一次の真理であり、この原理によつて作られた言葉(大和言葉)は第二次の芸術であり、その真理の言葉に相応しい政治・経済の制度(国家)は第三次的芸術ということが出来る。その芸術の実行責任者は言霊原理から見て子の子で孫に当たる。天孫邇々芸尊と呼ばれる所以である。

日子穗穗出見尊とは邇々芸皇朝の創業を受け継ぎ、言霊(日子)の精神文化の成果(穂々)が咲き誇つた(出見)皇朝の時代であつた。次の鵜草葺不合皇朝とは、引き続き精神文明が隆盛を極めた時代であつたが、同時に人類の第二の文明と言うべき物質文明の芽が育ち始めた時代でもあつた。言霊ウである物質的欲望(鵜)の文明(草)がまだ完成されていない(葺不合)時代の意である。

かくて鵜草葺不合皇朝の末期、日本の朝廷において、人類文明創造の方針の大転換が決定し、その時まで繁栄した精神文明に代わつて、物質文明完成促進のための方便としての諸施策が講ぜられたのである。その方針に則つて誕生するのが神武天皇を初代とする神倭皇朝だつた。神武天皇の兄である五瀬尊は、竹内文献によれば鵜草葺不合皇朝第

七十二代天皇と記されている。葺不合朝最後の天皇であったのである。

以上のように長い日本の歴史の中から神武天皇の時代の意味を調べて行くと、神武即位以前に美和の大物主神の子を正皇后として迎えた、という古事記神話の現実的な意味が見事に浮き彫りにされて来るであろう。神武天皇を初代とする神倭皇朝の使命・役割が、それ以前の皇朝である葺不合朝の末に決定され、その内容が「大物主神即ち大いなる物質文明の主である精神」ということになったのである。

しかも単なる大物主神ではなく、前号(第三十一号)に説明したように美和(三輪)の大物主神である。神武天皇が神倭皇朝を建国した理由は、単に物質文明の完成促進を意図したのではない。人類の第一文明である精神文明の次に、第二の文明としての物質文明を築き、更にその後第一の精神文明と第二の物質文明とが協調しあう人類の第三文明の建設を潜在的計画として秘めた上での物質文明への出発であった。「美和(三輪)」の大物主神という神名がその日本人の祖先の悠大な意図をよく表現している。

更にこの「三輪」という人類文明の三段階の飛躍的發展の様子を、大物主神の子であり、神武天皇の皇后となった姫

の名前がそれを言霊学的に表徴していることである。

一般に古事記・日本書紀に出て来る古代の神や人の細君達の名前には、その神や夫君の歴史上の使命・役割や官職の内容等を言霊学に照らして表したものが多いのである。

例えば天孫邇々芸尊のお后きさきとなった二人の姉妹の名前である。姉は岩長姫といい、妹を木花咲耶姫このはなさくやひめという。岩長とは五十葉いほ(言霊)の原理を永久に(長)継承し精神文明を発達させて行く使命を意味し、「木花咲耶」とは浪華津なみわづに咲くや木の花……と古歌に歌われる如く、商業を中心として物質文明を創造する役割をも表している。二者共に天孫とその継承者が果たさねばならぬ両面の使命なのである。

神武天皇の皇后となった比売多多良伊須気余理比売という名前は言霊学的にどんな意味を表しているのだろうか。

最初の比売ひめは秘めてひめているの意で、潜在的にということである。多多良たたらの多は田を指している。田とは稲いねを作る処。

稲はイの音で言霊を意味する。五十音言霊図は田の形をしている。多多と田が二つ重なるが、最初の田は人類の第一の文明である精神文明の原理である天津太祝詞音図を指し、次の田は第二の文明である物質文明をリードする精神の構造である天津金木音図かなぎを表している。

多多良の良は言霊で物事が遠的に発展拡大する現象の音である。そこで多多良とは最初に精神文明、次に物質文明と続いて、その後で両者が総合して第三のものに発展して行く様相を暗示している事である。

次に伊須氣余理姫の意味の検討に移ろう。伊須氣の伊は母音ウオアエイの意で、人間の創造意志の要素、言霊のことである。須は主である主人公の意。氣は霊で精神のこと。余理は選るの意。伊須氣余理で言霊に則る精神で選び創造して行くことの意となる。そこで名前全部を総合して見ると、比売多多良伊須氣余理比売で潜在意識的に精神文明の次に物質文明を重ねて行き、その末に言霊の自覚の下に次の(第三の)文明を創造して行くことが秘められている人、ということになる。

以上見て来たように皇后となった比売多多良伊須氣余理比売という名前が、夫君である神武天皇の神倭皇朝創業という歴史上の使命・役割の内容をはっきりと示していることが了解されるであろう。

更に右の神武天皇の皇后の名前が示す精神内容を生んだ親である美和の大物主神という神とは、数千年の長きに渡る第三文明建設という歴史を創造する上での精神内容を持

った神霊に名付けられた名前であることも理解される。この内容は前号会報(第三十一号)で説明した大神神社の三つ組の鳥居の意味とも一致したものである。

神武天皇が大和の白檮原かしはらの宮に於て即位して国を建てたということは、単に群雄割拠の野蠻の土地を統一し、日本に始めて中央集権化の国家を建てた、ということではない。三輪の大神神社の祭神大物主神の精神内容に見られる如く、神武天皇即位以前に長い世界の精神文明時代が存在し、それについて第二の物質文明という目的のために創造された皇朝なのだ、ということを理解せねばならないであろう。古事記の神武天皇の章に見える大物主神の記録の検討はこの位にして、次に崇神天皇の項に移ろう。この項に関しては古事記より日本書紀の方が詳しいので、書紀の記録を中心にして考えて行くことにする。

日本書紀の神武天皇の章に、この天皇を称して「始馭天下之天皇」とあり、第十代崇神天皇の章にもこの天皇を「御肇国天皇」とある。そこでこの天皇の称は本来崇神天皇に与えられたものであったのが、神武天皇にもおよびされ、崇神天皇が実質的に大和朝廷の建設者であるのに、皇室の起源を更に古くさせるため神武天皇を造作(作

り上げ)したという説がある。(山波書店、日本古典文学大系六七、日本書紀上、補注三二二〇)

しかし右の歴史家の一説は事実ではない。太古に於ける精神文明を隠し、物質文明の世を創造する大方針を実行するために新しい皇朝を樹立したのが神武天皇で、いわば立案者であり、崇神天皇はその方針を受けて、皇室や政治の制度の上に実際の改革を實行した方なのである。新しい使命を持った皇朝の、一方は立法者、もう一方は実施者であるので、「はつくにしらす」と同じ称で呼ばれるわけである。

それ故にこそ大物主神に関する崇神天皇章の記録は神武時代より一層的に表されている。国家の方針が精神文明から物質文明に実際に転換された時の為政者の苦悩が崇神天皇の治績に明らかに読みとることが出来るのである。日本書紀の記録に従って順を追って行くことにしよう。

日本書紀によれば、崇神天皇即位四年十月、天皇は詔勅を下し「わが皇祖皇宗が天津日嗣(世々受け継いで誤りのない原理即言霊の原理)の光によって政治を行って来たのは、世の中を調和し、国家を治めるためであった。今、私もその流れを継承して国民の幸福を希う。どうしたら先人の教

えに従って今より永久に日本の国を栄えさせることが出来るようか……」と政治への決意を述べられた、とある。

ところが天皇の希望とは裏腹に、詔勅のあった翌年から日本の国内に大きな災難が起こる。「即位五年、国内に疫病が蔓延し、国民の多くが死んだ。六年、国民は土地を離れて流浪し、また謀反を起こす者も出て、その勢は朝廷の力を以てしても治めることが困難な状態であった。そこで天皇は朝早くから夜遅く迄お心を悩まし、天神地祇に何処に政治の誤りがあるのか、教えてほしいと祈った」と記されている。

ここで崇神天皇の政治上の大改革が断行されることとなる。この改革は試行錯誤の苦難に満ちたものであった。そしてこの改革に当たって大神神社の大物主神の活躍の場面が現出して来るのである。

改革の最初は、初代神武天皇の建国の大方針を受け継ぎ、太古の政治の原則であった言霊の原理を、この時より政治への適用を完全に廃止して、朝廷の制度の上にそれを実施することであった。所謂三種の神器の天皇との同床共殿の制度の廃止であった。日本書紀はこの出来事を次のように伝えている。

「これより先、天照大神と倭の大国魂の二柱の神を、天皇の御座所の中にお祭りしていた。しかし打ち続く厄災のことを考え、この神の勢の大きすぎることを恐れ、天皇と共に神がお住みになることが適當ではないと思われた。そのため、天照大神については、豊鍬入姫命に託して倭の笠縫の邑に神の社を作つて祭つた。倭の大国魂の神は淳名城入姫命に託して祭らせた。ところが淳名城入姫は髪の毛が落ち、身体が痩せて神をお祭りすることが出来なかつた」

右の書紀の記録を言霊学によつて解説しよう。

天照大神を宮中から倭の笠縫に移して祭つた、ということとは、今まで幾度かお伝えしたことであるが単に神の社を移したということではない。それ以前、政治の法則としていた言霊の天津太祝詞音図(天照大神)の原理を、実際の政治に適用することを停止して、尊ぶべき神様として神社に祭つたのである。この世の中に生きて活動していた原理を神社の中にじつと眠っている神として、単なる信仰の対象として、この世の表面から隠してしまつたことを意味している。これが神武天皇の方針の最初の実行であつた。

最高調和の言霊の原理の政治への適用を完全にシャット

アウトしてしまつたのであるから、その後に出る世の中は生存競争の社会である。人々は互いに競い争つて自分の才能を主張して行くことによつて社会文化を発達させて行く世の中である。この国家社会を治めて行く精神的基盤を倭の大国魂の神に求めようとしたことである。現在、この神を祭る大倭神社は奈良県天理市にある。祭り主となるよう委託された淳名城入姫は病氣になり、祭ることが出来なかつた、とある。この神を祭ろうとする心構えに何か誤りがある、ということなのであらう。

現在の倭神社に遺されている「大倭神社注連状」は、「伝え聞く、大国魂神とは、大己貴神の荒神なり」と教えている。大己貴神とは、出雲大社に祭られている大国主神の別名。天照大神の弟神、須佐男命と呼ばれる物質文明をリードする精神構造の、日本の政治への適用の霊的責任者が大国主命である。神武天皇以来今日まで日本の社会を主宰する霊的責任者である。

荒魂とは人間のウオアエイの五段階の性能の内、言霊アの感情の次元に働く神の霊能のことである。感情性能へ作用すれば信仰の心を起こす。それ故大国魂神とは神武天皇以後の日本の文明創造を主宰する大国主命の働きの内の

信仰心に関する神霊ということが出来る。

この神の祭りを委託された淳名城入姫が病気になって祭ることが出来なかったのは、神武天皇に始まる政治の革命以後の日本が、大国主命の精神に、単に感情的な信仰心だけで対処するだけでは不足である、ということのお告げである。その後の日本の国を治めて行くには大国魂神の信仰だけでは駄目だということを知らされた事である。

崇神天皇の苦惱と試行錯誤は続く。日本書紀はそれを克明に伝えている。

即位七年二月天皇は詔みことづかひして「昔わが祖先は大いに政治の基本を確立して、朝廷の勢は盛んであった。しかるにわが代となると災害ばかり起こるようになった。これは朝廷の政治に誤りがあるためであり、神々に咎とががあるわけではない。何としてもこのような事態となった理由を明らかにしなければならぬ」と仰せになり、浅茅原という処にお出ましになり、神々をお祭りして祈られた。

すると靈験あらたかに倭迹迹日百襲姫命に神霊が憑かかりて言った「天皇は国が治まらないことを心配することはありません。私を敬い祭るならば、世の中は治まるでしょう」と。天皇は問う「貴方は何という神ですか」神霊が答えて「私

は大倭の国の内にいる神、名を大物主神という」と。

崇神朝の記録にここで始めて大物主神が登場した。神懸かりになった倭迹迹日百襲姫は、その地位と巫女的性格から、これを魏志倭人伝に見える女王の卑弥乎と見なす説がある人である。

この名を言霊字で解釈すると次のようになる。倭は大和で調和を意味する。迹迹は十とで、五十音図を上下陰陽にとった百音図のこと、フは霊である。迹迹日で五十の言霊と五十の運用法を合わせた八咫の鏡を指し、百襲もよおは百の衣のことで、八咫鏡を構成する百個の言霊は人の心が着ている衣である。倭迹迹日百襲姫の名全部で八咫の鏡といわれる言霊の原理に関する霊能を持った姫であることが理解される。この姫の神懸かりで大物主神が登場した、ということはその出現が言霊の原理から見て歴史上正当なことを意味している。

大物主神は延喜神名式・出雲神賀詞に「大物主神は大穴持神（大国主神）の和魂にぎみたま」とある。和魂とは人の心の性能ウオアエイの言霊エ（実践智）の段階に作用する働きである。先に崇神天皇は大国主命の荒魂に当たる大国魂神を祭ろうとして祭ることが出来なかった。その誤りを正そうとして

大國主命の和魂に当たる大物主神を祭れ、という御託宣となつたわけである。

神武天皇以前は、言霊の原理に基づく精神文明の時代であつた。その後建國された神倭皇朝は物質文明の促進を國是とするが為に言霊の原理を隠し、崇神天皇の時に至つて、これを天照大神として神宮の奥に祭つてしまい、原理は信仰の対象である神となつた。代わつて国家政治の指導精神となつたのが、強者が弱者に勝つ生存競争の原理(言霊で言えば天津金木音図)であり、神名で表せば須佐男命・大國主命である。その実践を志す神倭皇朝の政治の指導原理としては大國主命の荒魂(言霊ア)である大國魂神では役立たず、大國主命の和魂(言霊エ)である大物主神でなければならなかつた。倭迹迹日百襲姫の御託宣は當を得ていたのである。

ところが、天皇が神に教えられた通り大物主神をお祭りしたけれど、国内の災害は治まらなかつた。天皇の苦惱は更に続くのである。

天皇は齋成沐浴して身を潔め、祈つて言つた「私は神に対して礼を尽くしていないのであろうか。落ち度があるなら夢の中でも教えて貰いたいものである」と。するとその

夜、夢に一人の貴人が部屋に現れ、大物主神であると名乗つて言つた「天皇よ、もう心配なさることはありません。國が治まらないのもわが為す業、もしわが子である大田田根子というものを祭主とするならば、すぐに災害は治まるでしょう」と。

更にその年の八月、天皇の三人の側近の人が共に同じ夢を見て、天皇に奏上した。「昨夜、夢に一人の貴人が現れ、次のように教えて呉れました。『大田田根子命を以て大物主神の祭主となし、市磯長尾市を以て大和國魂神の祭主とするならば、世の中は太平となるであろう』と」

天皇は自分と同じような夢の言葉を聞き、お喜びになつた。そして國中に布告を出し、大田田根子という人を捜し出し、大物主神の祭主とし、長尾市という人を大國魂神の祭主として、それぞれお祭りしたところ、長く続いた災害は漸く止み、天皇の苦惱は去つたのだつた。「ここに疫病は初めて止み、國中は漸く静かになつた。五穀豊穰となり、國民に豊かな暮らしが戻つた」と日本書紀は伝えてゐる。ここに神倭皇朝二千年の文明創造上の政治の大綱が確定したのだつた。

大田田根子と市磯長尾市の二人の名を検討しよう。

大田田根子の大は偉大な意。田田は先にも書いたが、二つの言霊図を示している。初めの田は精神文明の原理である太祝詞音図を、次の田は物質文明の原理の金木音図である。根は音で言霊の意。子は人のことで運用者である。大田田根子の全部で精神と物質の両文明の指導原理が存在することの歴史創造上の大いなる意義を知っている人という意味となる。

次に市磯長尾市の名を見よう。市はいの道で言霊のこと。磯は五十で五十音を意味する。長は永久の意。尾は言霊オで学問のこと。市は道。大國魂神を祭る信仰には、それに添えて学問が必要なことを教えたのである。崇神朝以後の生存競争の時代には、大物主神の物質文明創造を促進する実践の精神と共に、大國魂神の信仰と学問の道の必要性を付け加えたわけである。

崇神天皇は神倭朝初代神武天皇の方針を実行に移そうとして、太古の精神文明を創造した言霊の原理を天照大神の名の下に神宮の奥深く隠し、その指導原理に代えて国を治めるに大國魂神という大國主命の信仰の働きを以てしようとして失敗した。次に大物主神なる大國主命の持つ実践智を採用したが、これもうまく行かなかつた。そして最後に

祭主となった大田田根子の名が示す如く、崇神朝が実行している政治の大改革が、単に精神文明より物質文明への転換というだけでなく、精神文明より物質文明へ、そして将来、これら二つの文明を総合して更に大いなる第三の人類文明の創造に連なるための現在の大改革なのだ、ということ、即ち単なる大物主神でなく、「三輪」の大物主神の精神の実践なのだ、ということを自覚し実行し終えた時、以後二千年を支配する崇神朝の大改革の業は精神と制度の両面に於て完成したのであった。

以上今より二千数百年以前の、神武天皇より崇神天皇に至る日本政治の大改革の歴史を、三輪の大物主神という神名の示す道を辿りながら、言霊学の磁石を頼りに旅を続けて来た。文化の度の薄いと思われがちな大昔に、人類の数千年にわたる文化創造の歴史の悠大な洞察が存在していたという事実を、読者はどう受け取られるであろうか。

筆者は今、昨年十一月、大和路の旅行の折の大神神社参拝の時のことを思い出している。特異な三つ組の大鳥居の彼方、秋の陽に映える大神神社の拝殿の藁の輝きは一幅の絵画を見る如く美しかった。そしてその背後の御神体である三輪山の秀麗な姿。それは印象深いものであった。ま

た以前、天理市の石上神宮から山の辺の道を辿り、この三輪山の姿を仰いだ時の、日本人の心の故郷に帰り着いたような心の安堵感をも思い出した。

今、その安堵感から、中東戦争の戦火渦巻く歴史の現実を直視しよう。崇神朝に始まる人類の第二文明の完成は極めて間近である。「三輪」の大神が指し示している第三文明の時代を迎えることが出来るか、否かは、日本人の真の心の故郷である日本語の中に秘められた言霊の原理の活用如何にかかっている。大三輪の鳥居の真ん中に建つ大鳥居はそのことの表徴なのである。

大和なる 三輪の社やしろ

大物主の 神の名に秘む

三輪の神事かむこと

【収載】第三十二号（平成三年二月）

●神様の戸籍 その八

金刀比羅宮

金刀比羅宮ことよみのみやは日本全国に支社の多い宮である。本宮は四国の香川県琴平町ことよみにある。拜殿まで行くのに千数百段の石

段を登ることである。世間では一般に「金比羅さん」と呼ばれ親しまれている。浪曲の清水次郎長外伝「森の石松」の代参する神社がこの金刀比羅宮である。

神社案内によれば、この神社の祭神は大物主神であり、創建は神代と伝えられている。

大物主神といえは会報前全号と前号（第三十一号、三十二号）で大物神社祭神として詳しく解説したこととて、更めて金刀比羅宮の祭神として書くことはないのであるが、この金刀比羅宮の祭神については事はそう簡単には済みそうもない。この神社の祭神ほどその名前や内容について変遷の多いものは他にないようである。先ずその名前と内容の変化について見ることにしよう。

金比羅こんひらの名について辞書を引いて見る。「こんびら」「金比羅・金比羅」仏教で（ボン・Kumbhira）仏教の守護神、十二神将のうちの宮毘羅くびら、十六神将のうちの俱吠嚕くべらに当たる。わが国では大物主神と混同して金比羅権現くまがねといひ、讃岐の象頭山に祭り、海上の守護神として広く民間に信仰され、諸所に支社がある。「この辞書の説明を見ただけでも変遷の複雑さが窺えるのである。

次に奇異なのは本殿の祭神と奥社祭神の関係である。普

通奥社の祭神は本殿祭神と同じか、または深い関係のある神霊である。ところがこの神社の奥社には、本殿の祭神である大物主神とは直接に関係のないこの社の宮司だった人の御霊を祭つてあることである。

更に気が付くことは、「枚聞神社」「枚岡神社」の項で説明したように、枚とは霊頭で言霊または言霊を文字化して粘土板に刻んで焼いた神代文字のことである。金刀比羅の比羅と、神社の古くからの所在地である琴平の平がこの霊頭と関係ある筈なのだ。

右のことに関連して筆者が直ぐに思い出すことがある。筆者山歩きが好きで、東京の奥多摩の山路は隈無く歩いて来た。御岳山から日の出山を経て青梅市の日向和田に下りる尾根道の間際に、小さいが何とも奥ゆかしい神社が建っている。名を「巖の金比羅」という。巖は五十葉で五十音言霊のことで、金比羅の言霊または神代文字との関係を教えてゐる。

続いて思い出すのは古事記神代卷の「鳥生み」の章に出て来る四国に関する記事である。「次に伊予の二名の鳥を生みたまひき。この鳥は身一つにして面四つあり。面ごとに名あり。かれ伊予の国を愛比売といひ、讃岐の国を飯依比古

といひ、粟の国を大宣都比売といひ、土佐の国を建依別といふ。」

この文章は何もない空なる生命宇宙からウーアワーオエヲエー……と初めて人間の意識が生まれて来る順序を言霊で示した天津磐境の原理を教えている呪文である(詳しくは「言霊」参照)。古事記が編纂された奈良朝の時代、既に言霊の原理の説明に四国の鳥が引用されている、というところが、讃岐の金刀比羅宮が日本の太古よりの秘宝である言霊の原理と深い関係があるのではないか、と思わせるのである。

筆者がこの金刀比羅宮に参拝したのは昭和六十一年五月のことである。五月晴れの風の穏やかな日であった。空は晴れていたが、参拝する筆者の心は必ずしも五月晴とはいかなかった。この神社の祭神について余りにも疑問が多すぎたからである。疑問をまとめると次の様になる。

一、金刀比羅や琴平の名前から推して言霊の原理と関係がある筈である。真偽は如何。

二、言霊原理と現在の祭神大物主神との結び付きは……

三、神仏混淆により大物主神と仏教の守護神クンピラとは如何にして結び付いたか。金比羅権現がなぜ航海の神となったか。

四、本社祭神の大物主神と奥社祭神の人の御魂との関係如何、等々。

有為転変は世の習い、という。この世にあるものは全て長い年月のうちには形や内容が変わって行く。神道のうちで最も神秘で尊厳とされる伊勢神宮の本殿の床下に安置される「心の御柱」ですら、長い歴史のうちにはその長さ・太さに変更があったことが記録によって明らかなのだ。形ばかりでなく精神的なものも例外ではない。しかし神社の祭神のように大勢の人々の魂の奥底に関わる霊的なものになると、たとえ変化の波にさらされたとしても、その変化の底に確かな一筋の流れがなければならぬ筈なのだ。その一筋の真実とは何なのだろうか。こんな事を考えながらの参拝であった。

JR金刀比羅駅構内のロッカーに旅の荷物を預け、身軽になって駅前通を金刀比羅宮に向かう。本殿までに千数百段の石段が待ちかまえている、と聞いたからである。商店

街を暫く行き神社の石の階段にかかる。この石段は比較的一段一段が高く、足の弱い人はさぞ骨の折れることであろう。ただ階段は長いところでも十数段位しか続かず、階段と階段の間に数歩の平たい踊り場があるので、それ程難儀ではない。石段の両側には古風な土産物屋や食べ物の店が軒を連ねて、如何にも古いお宮の風情である。

この石段の参道には江戸時代さながらの竹駕籠が往来する。頼めば屈強な担ぎ手が二人で、下から本殿まで千数百段の石段を駕籠で担ぎ上げてくれるのである。大の男が二人大骨を折るのであるから、賃金は相当はすまなければならぬまい。それに駕籠の中の人を見ていると、狭い所に座って揺られている。そう楽ではなさそうである。これも旅の思い出となるのであろう。

漸く石段登りに飽きる頃本殿前に着く。大きな立派な社殿である。お詣りを済ませ、立札を見ると主祭神は大物主神とあり、脇社に御后神の三穂津姫命が祀られている。三穂津姫命とは高御産巢日神の子とある。その他別社として造化三神である天御中主神・高御産巢日神・神産巢日神が祀られている。

本殿付近は大勢の参拝者や観光客で賑やかである。休憩

所で一息の後、本殿右脇の道を進み、やがて奥社への石段登りにかかる。本殿参道の賑わいに比べ奥社参道は人の影もまばらで、高度がいくらか上がったせいもあって風がひんやりとして落ち着いた雰囲気である。この石段も長い。本社参道と違い両側に一軒の家もない。どこかで鳥の鳴く声が聞こえて来た。

漸く奥社々務所に着いた。参道はそこから左に直角に曲がり、急な最後の石段を登り切ると、そこが奥社である。質素な造りの奥床しい感じのする社殿である。家内と共に参拝し、「高天原成弥采」を唱えた。社前に暫くの間佇んでいると、私の心中の思考と疑問の有耶無耶の霧が自然に払われて心が澄んで行くのが感じられた。私の中に何か感心が起こったようである。それは何とも清々しい靈気なのである。

奥社拜殿を辞して階段を下り再び奥社々務所に戻った。社務所脇の案内板に奥社祭神の由来が書いてある。

「今より三百年前、金刀比羅宮の官司を務めていた金剛坊なる人が諸国を遍歴して修行を積み、この地に帰って数々の奇跡を現した。その功績により金剛坊の御魂を嚴魂命として奥社に祀る」と。

この文書を読んでいる内に奥社祭神との感応の理由や、金刀比羅宮祭神の変遷についての葛藤の糸がスラスラと積りて行ったのである。金刀比羅宮の祭神の移り変わりの由来を説く鍵は奥社の神霊にあったのだった。古歌に「末の夜の麻の乱れは草薙の太刀より他に積くものぞなき」とある。草薙の太刀とは人間天与の判断力のことであり、言霊によって人間精神の先天の構造を現した天津磐境の原理のことである。この原理から見ると、この世の中の如何なる葛藤や難問も、時と処との変化の底から解決の道が開かれることをまざまざと体験したのであった。

奥社の祭神である嚴魂命の嚴は「いづ」で尊嚴の意、また御稜威で神道にあつては単に尊嚴の意ではなく、皇祖祖宗の神霊の現す徳の威力のことである。古事記神代巻には「伊豆能売神」とあり、天照大神の言霊学上の精神構造の内容に付けられた神名である。三百年前、この宮の官司であった金剛坊は諸国を修行して歩き、その間に伊勢神宮やその他の神社に参籠して、神道の奥義である言霊の原理の一端に触れることが出来たに違いない。

そして最も重要なことは、金剛坊が修行の末に辿り着いた日本古来の神道の極意である五十音言霊の原理が、実は

金剛坊が官司を務める金刀比羅宮が太古に創建された当時の御神体そのものであったことである。それ故にこそ金刀比羅の神社の名前も所在地琴平の地名も成る程と頷かれるのである。その名前が元を糺せば言靈頭ことひらであり、言靈またはそれを形に表した神代文字のことなのであるから。

御神体が言靈に直接関係のある神社は例外なく神倭朝第一代神武天皇即位の前後の時代の創建である。先に会報で取り上げた枚聞(第二十七号)・枚岡(第二十六号)の両神社また然りであった。金刀比羅宮もその創祀の当時は、粘土板にアイウエオ五十音を刻み素焼きにした神代文字を御神体とする宮であったに違いない。

官司であった金剛坊は、自分の務める神社の大本の祭神の神霊の縁に導かれて、金刀比羅宮が創造された根本の道理に行き着くことが出来たのであろう。縁によって言靈原理の一端に触れることが出来た金剛坊は、そこに辿り着くまでに経験した修行の業を応用することによって、人の眼には奇蹟と思われる行為の数々を見せることなど朝飯前のことだったに違いない。ちょうど昔役行者がやった如くに。金剛坊が到達した境地が、神社創建当時の御神体の真理の一端であったが為に、現在の金刀比羅宮の御神体である

大物主神以前の精神であったこと、その故に金剛坊は巖魂命として奥社に祭られることとなったのである。筆者が奥社参拝の折りに称えた「高天原成弥栄」に感応したのもこの様な御神霊であったからである。

それなら言靈を祀る神社に何故大物主神が入ることになったのか。これが次の問題である。

神倭朝第十代崇神天皇の時を境として、日本の国はそれ以前の精神文明から名実共に物質文明尊重の世に変わった(第三十一、三十二号 大神神社の項参照)。精神文明の基礎であった言靈の原理は世の表面から完全に隠されることとなった。言靈を祭った枚聞神社ひらき(鹿児島)はその名前の枚ひら(言靈)に言靈の名残を留めるだけで、祭神は大日靈命おほひるみのみこととなり、枚岡神社ひらか(大阪府)も同様に祭神は単に天兒屋根命あめのこやねとなった。

大日靈命とは古事記に伊豆能売神とあるように天照大神といわれる人間精神の理想構造の言靈学的内容に名付けられた神名であり、天兒屋根命とは言靈五十音図の最上段ア段(家屋で言えば屋根に当たる)を呪示する神名であるから、神社創建当時の御本尊である言靈を隠した後に於いても、言靈を暗に示していることで当然の変わり方と言える

かも知れない。しかしここ金刀比羅宮に於いては、御本尊を隠した後に、言霊の時代の次の時代を担う歴史的精神を以て御祭神としたのである。大物主神(大いなる物質文明の主人公たる精神)の登場であった。

大物主神は会報前号(第三十二号)で三輪の大物主神として説明した。それは言霊ことたまの幸培さちばう古代精神文明の次に来る三千年の世界を統一する物質文明の精神である。大國主命の和魂にぎみたま(実践智)の神である。それも単に物質文明推進の神ではなく、精神文明の次に物質文明を推進し、その完成の暁、両文明を総合する第三の文明の建設の可能性を秘めた「三輪」の大物主神である。

かくて金刀比羅宮は祭神として裏に精神文明のエッセンスである言霊の原理を秘め、表は物質文明推進の実践智である大物主神を祭ることとなった。三百年前、官司金剛坊は修行によって神道の奥義である言霊原理の一端に触れ、神社の裏の祭神を掘り起こし、その功により巖魂いわたま命として奥社に祀られた。神社の裏の隠された神が奥社の神として鎮まった事になったのである。

中世、仏教の全盛を迎え、日本の神道の神は仏教の仏が仮に世の中に現れたもの、との神仏混淆の風潮が興った。

金刀比羅(言霊頭)の名と仏教の守護神である宮毘羅みやびらの名が似ているというだけの理由で金毘羅権現と呼ばれるようになった。仏教の宮毘羅が権かみ(仮)りに大物主神として現れた、という意味である。金毘羅権現は讃岐の象頭山に祭られ海上の守護神となった。その理由は……。

そもそも三輪の大物主神も、仏教の守護神宮毘羅にも航海に關係する何物もない。それが何故海上の守護神と呼ばれるのか。それはこの神社に秘められた祭神言霊に由来する。言葉は人の心を運ぶ乗り物である。船に譬えられる。御船代みふねしろと呼ばれる。辞書を見よう。

ふなしろ《船代》伊勢大神宮の神体を納める樋代(ひしろ)を奉安する箱。石船(いはぶね)の形をしているという。みふねしろ。

石船は五十葉船いそはふねで五十音言霊を入れて運ぶ乗り物の意。言葉は心の船、とは此処より来ている。金刀比羅宮が元来伊勢神宮と同様言霊に關係する神社であったが故に、また言霊は舟形の箱に乗せられて祭るが為に、その霊を引く金毘羅権現が海上交通の守護神とされるようになったのである……。

奥社々務所から本殿へ戻る石段を下りながら、参拝前筆

者がこの神社祭神について抱いていた疑問が次から次へと水解して行くのを感じていた。二千年余の長い歴史の中で移り変わっていった金刀比羅宮祭神の名前や内容の経緯が、丁度乱れた糸を解きほぐす様に一筋の真実となつて解明されたのだつた。これも金刀比羅宮の、特に奥社参拝の御利益といえるであろう。と同時にそれは《末の世の糸の乱れ》を解く草薙の剣である言霊の原理のお陰であつた。

奥社参拝の清々しい靈氣の感じは本殿に戻る頃まで続いていた。清らかな参道を五月の風に乗つて来る時折の鳥の鳴き声を聞きながら、長い歴史の中を旅する人として、筆者の心は一幅の画のなかにある様な感じだつたのである。

本殿に戻り、更に一つの発見があつた。本殿祭神である大物主神の御后神として三穂津姫命とあり、高御産巢日神の女と説明してある。古事記は大物主神の妻神を「三島の湟咋が女、名は勢夜陀多良比売」と書いている。三穂津姫の三穂とは三段に發展して行く(靈穂)を渡して行く(津)の意で「三輪」の大物主神の意に通じている。更にその三段階の發展は飽くまで人間の精神が主体となつて推進されて行く事を強調して「高御産巢日神の女」と付記されるのである。高御産巢日は主体性(言霊ア)神産巢日は客体性(言霊

ワ)であつた。古事記の「三島の湟咋が女、名は勢夜陀多良比売」の名は言霊学によつて見ると三穂津の意味を更に詳しく形容した名前なのである(説明省略)。

本殿よりの帰途は石段を左にそれて神社庭園に入り、つじ・さつきの花を賞で、宝物殿に入った。小品ではあつたが、宮本武蔵の「落雁図」が印象に残つた。石段下に着いた時はお昼を少々廻つていた。石段脇の「虎屋」なる店で名物の盛りそばを食した。素朴な味であつた。午後早く琴平の町に別れを告げ、善通寺に向かう。弘法大師生誕の地である。

(この項終わり)

【収載】第三十三号(平成三年三月)

●国引き・言向け・国譲り

湾岸戦争がイラクの敗北に終わった。アラブ民族主義に決定的なクサビが打ち込まれた。これによつて世界の民族主義の先が見えて来た。

四十五年前、東洋において日本民族主義が、西洋においてドイツ・イタリヤの民族主義が崩壊した。その後毛沢東・周恩来の死去により中華民族思想も実質的に姿を

消した。唯一つ残ったアラブ民族主義も、今度の戦争後、
紆余曲折はあろうけれど次第に力を失って行くこととなる。
世界の歴史は大きな転換点にさしかかっている。

民族主義の退潮の後に何が来るか。世界は近代個人主義に基づいた経済主義一色に塗り潰されよう。これに乗り遅れたものは貧困のドン底に喘いで、他国の援助の下にただ追従して行かざるを得まい。

その結果、極めて高度のハイテクに裏付けられた経済機構によって世界の統一が実現する。この統一の完成はもうそう遠い将来ではあるまい。

ここに至る歴史の成り行きを日本の古代神話は大國主命の「国引き」と呼ぶ（正確には大國主命の祖父ヤマトノミコト命）。出雲風土記）。国引きとは世界中の国家・民族を自己の目的の下に引き寄せて、世界を一つの思想と権力の下に統一することである。大國主命とはここ三千年の物質文明創造の歴史の霊的主宰者に名付けられた名前である。

この国引きに用いる引綱を風土記には「三自の綱」と書かれている。現代哲学で言えば正反合の弁証法的思考法

のことである。この弁証法的思考原理の正系の伝統は三千五百年の間ユダヤ民族によって受け継がれている。

竹内古文献によれば、昭和天皇まで百二十四代続いた神倭皇朝の前、鵜草葺不合皇朝六十九代神足別豊鋤天皇が来朝のユダヤ王モーゼに「汝モーゼ、汝一人より他に神なしと知れ」と詔して、言霊ウ（欲望）の原理である天津金木（カバラ）を授け、欲望の世界を主眼において世界統一の事業をモーゼに委嘱したのであった。この時以来三千年、金力と権力による世界全民族の統一はユダヤ民族の使命となった。彼らが神選民族と呼ばれる所以である。

世界の歴史と現状をこの視点から見ると、ユダヤ民族の使命の達成が目前であることが理解される。金力と権力による世界統一の後には何が来るのか。人類を金力と権力の枠の中に永久に閉じ込めておくわけには行かない。その時について風土記の神話は極めて簡単明瞭に教えてくれる。

「今は国引き訖えぬ、と詔りたまいて、意宇の杜に御杖衝き立てて、意恵と詔りたまいき」

意宇の杜とは人間の持つ五つの性能の内のお（経験知・

学問)とウ(欲望・感覺)の領域ということである。その領域に御杖(判断力)を立てて意思おぼえといった。経験知と欲望の世界から発現する科学と金力とによるユダヤの世界統一の事業は終わった(意思おぼえ)ということ、と同時にその次に来る世界に必要なものは意思即ち言霊オ(科学)と言霊エ(実践智・言霊の原理)なのだ、ということも併せて教えて呉れるのである。

この意宇から意思への移行は世界人類が直面する三千年来の文明の大転換である。ユダヤの原理の霊統の継承者が、その原理と使命を授けられた魂の故郷・日本に舞い上がって来る。彼等が人類の中核となって完成させた物質科学と世界統一という成果を携えて、彼らの使命の完了を報告する為である。報告を受けるものは誰か。彼等にその使命を授けた神足別豊鋤天皇の世界文明創造経綸の原理、言霊布斗麻邇の継承者である。この人が日本の皇室から現れるか、または全くの民間人からは、今は言えぬ。

ユダヤ民族が持つ産業と科学の原理に日本はどのように対処するのか。古事記は言う。

「建御雷の神……出雲の国の伊耶佐の小浜に降り到りて、十掬とつかの劔を抜きて浪の穂に逆さに刺し立てて、その劔の前に踏みあぐ坐いて、その大國主の神に問いたまいしく……」

得意満面の世界統一の完成者に対して、彼等が長い間難辛苦して達成した事業は、実は物質文明創造促進のためにとられた一つの方便であり、今後は彼等の天津金木の原理(カバラ)では用をなさず、それに代わって十掬の劔といわれる言霊五十音天津太祝詞音図ふたごのりの原理によって世界の恒久平和の世を建設して行くことになること、を申し渡すこととなる。この説得を古事記は「言向けことむけ」という。

言向けに当たって古事記は「十掬の劔を逆さに立てて」とユダヤに対する言霊原理の対処法を述べている。単に「十掬の劔を立てて」といえば太祝詞五十音図の威力を示すことである。「逆さに立てて」とは、天津金木の思考法から生まれた種々の文化・思想・主義などを全て五十音言霊図に向かつて還元し、それぞれの主義・思想が五十音図のどの部分に当たる内容なのかを検討し、人間性全般に占める時処位を決定することである。仏教的にいえば三千年にわたる物質文化創造時代の物心両面の産物全ての「供養」を行うことである。唯受け入れるのではなく、五十音言霊の原理

に照らし合わせてそれぞれの適否・善悪を決定して行くのである。

「言向け」の結果、大國主命の天孫（にぎのみこと）邇々（くにく）芸尊への「國譲り」となる。権力と金力による世界統一の原理である天津金木（カバラ）をユダヤが放棄して、各國・各民族が大調和の下に生々發展することを可能にする天津太祝詞の原理による世界政治に移行することを承認することである。「國譲り」とは統一された世界をユダヤが日本に譲ることではない。世界統治の原理を天津金木より天津太祝詞に交換することである。ここに初めて各國家・各民族の特性は高揚され、更に大同調和の世界が実現される。戦争は永久になくなるのである。

「國引き」は完了間近である。「言向け」の準備は大方出来上がっている。「國譲り」の実現とは人類が各民族の神話の中でユートピアとして久しく渴仰して来た物心両文明が協調發展する恒久平和の世界の到来を意味している。

古事記の示す「國引き」「言向け」「國譲り」の詳細な説明と、それが現実の世界に現れる状況については、今後会報誌上において逐次明らかにされるであろう。乞う、御期待である。

【収載】第三十三号（平成三年三月）

●壺切りの太刀

最近皇居に於て立太子宣命の儀が行われた。その際天皇より皇太子に「壺切りの太刀」が渡された、とニュースに報ぜられた。この事の意味について述べよう。

宮中の賢（かしこ）所（ところ）という宮がある。それは文字通り賢い所の意である。世界中で最も賢い所なのである。何故ならそこに言葉の言葉、知恵の中の知恵、靈の靈である五十音言靈が神代文字として一字々々粘土板に刻まれ素焼きにされて、壺の中に入れられている、からである。

皇太子は立太子の儀に当たり、天皇より壺切りの太刀を授かり、儀式に於て「壺の封印を切り」、中を見る壺切りの儀式を行う。

太古、日本の聖（ひたり）天皇はアイウエオ言靈五十音の原理に則り万物調和の政治を行っていた。二千年前、崇神天皇によりその言靈の原理は一時的方便として政治への適用を停止され、その意味内容を呪示表徴する器物としてのみ遺されたのである。壺切りの儀はその呪示の一つである。皇太

子は壺の中の五十音言霊を見ることにより、天皇の本来あるべき姿の自覚を促される。

近い将来、壺切りの儀式が、その表徴的儀式としてのお芝居の域を脱し、現に生きる人間の魂とは五十音言霊であることを自覚し、その原理を以て日本の、そして世界の政治を知ろしめすことの出来る人の出現が待たれる時である。

〔収載〕第三十三号（平成三年三月）

●神様の戸籍 その九

八幡神社

八幡神社は全国に支社・末社が無数である。その数の多いことでは日本の神社の内で稻荷神社と双璧をなすであろう。

それ程数多く々人々に親しまれている社を持つ八幡神社であるが、その祭神である八幡様の原籍は何処からか、となると全く不明である。八幡神なる神の名は日本古代の書である古事記・日本書紀にも載っていない。実はこの神様の原籍・出所が不明であることが、この神様の持つ性質・

内容と日本国家との関係、また世界歴史の筋道と大いに関係があることを暗示しているのである。順を追って解明して行くこととしよう。

京都で有名な石清水八幡宮の御祭神を調べると「誉田別尊・比咩大神・息長帯比売命（男山）」となっている。鎌倉の八幡宮も同様である。誉田別尊とは神倭朝十五代応神天皇であり、息長帯比売とはその母親の神功皇后のことである。応神天皇とその皇后、ならびに皇太后の御魂が何故今日見る如く日本の国民に親しまれる各地の八幡様の祭神となったのか、全く合点の行かぬ話ではないか。

八幡様の本社は九州大分県にある宇佐八幡宮である。J R日豊本線宇佐駅より車で数分の処にある。全国多数の支社・末社を持つ本宮に相応しく立派な社殿と広大な境内を持つ神社である。この神社に参拝して立札に書かれた御祭神の説明を読むと、右の疑問の一端が解けて来る。

宇佐八幡宮は三つの本殿がある。第一殿は祭神八幡大神、第二殿は比咩大神、第三殿は神功皇后とある。創建は二十九代欽明天皇の三十二年八幡大神の神霊が現れ、四十五代聖武天皇の神龜元年（七二四年）一之御殿を造営奉斎したことに始まる、と書かれている。二之御殿は天平二年（七三

○年)、三之御殿は弘仁二年(八一二年)創祀である。さらに立札の説明には「八幡大神が現身うしなみの応神天皇となつて現れた」と書かれている。

「八幡大神が現身の応神天皇となつて現れた」ということで、全国の八幡神社の御祭神が応神天皇であることの理由が分かった。応神天皇を祭ることと八幡大神を祭ることとなるわけである。それなら八幡大神とは如何なる神なのであろうか。

右の宇佐八幡宮の説明以上に八幡大神の正体を明らかにする記録はない。八幡様は出所不明の神様だ、といつてよい。ところがこの神様はめつたやたらと歴史に登場して来る。先ず八幡様は奈良時代、道鏡みちのかがみと和氣清麻呂わきよしみろの確執の際の記録に登場するのを始めとして、清和源氏の氏神であり、八幡太郎義家の八幡様での元服の話、三代将軍源実朝みなもとのさねともが鎌倉鶴岡八幡宮で甥なつとの公暁くみよに殺された記録、その他室町時代「八幡大菩薩」の旗を立てた日本の海賊船わいぞう(倭寇)が中国沿岸から東南アジアの海を荒らした話等々。そして八幡信仰は全国に波及したのである。

これほど日本全国に広がっている八幡信仰がその始まりは「神が応神天皇の現身として現れた」という一事なのであ

る。とするなら応神天皇として現れたことの歴史的な背景と、かくまで日本の庶民に親しまれるようになった事の霊的理由はどのようなものであろうか。この経緯を明らかにするのが言霊学研究のこの会報の役割である。そして八幡信仰が全地球的視野を以て見るべき大きな問題であること、が御理解頂けることになる。

応神天皇は母君神功皇后のお腹にいる時から天皇の位に立つという特異な運命を持った方である。その誕生前後の事情は余りにも劇的であるから、古事記の記録に従つて述べよう。

十四代仲哀天皇は皇后息長帯比売おきななかつらしひめの命と共に筑紫(九州)の訶志比かしば(現在香椎)の宮にお住みになり、熊曾の国を平定しようとしていた。その時皇后は神霊を呼んで教えを受けようとなさつた。天皇は琴を弾き、大臣の建内たけうちの宿弥すくねは沙庭をした。(昔神霊をよせる時、巫女の近くで琴を弾いた。そのため神懸かりをすることを「琴弾き」とも言った。また神懸かりで示される言葉が正しいか否かを判定することを沙庭といつた。)

神の教えは次のようであつた。「西の方に国がある。」金銀その他財宝多数である。神は今この国をわがものとしよ

うと思ふ」と。仲哀天皇がお答えする「高い所に登って西の方を見ても、そのような国は見えません。ただ海が広がっているばかりである」。そして嘘つきの神だと言つて持っている琴を横に置いて弾くことを止めてしまわれた。

すると神は大層お怒りになり「この日本の国はもう汝の治むべき国ではなくなつた。汝は自分の考え通り熊曾征伐に行くがよい」と仰せられた。

そこで建内の宿弥が申し上げた「天皇様、それは畏れ多いことです。お氣を取り直されて御琴をお弾き下さい」。天皇は心が進まぬまま琴を手に取り、しぶしぶお弾きになつた。まだ時がいくらか経たない内に琴の音が聞こえなくなつた。直ちに灯をつけて見ると、仲哀天皇は既に崩御されていたのだつた。

一同は恐れて天皇を前葬の宮殿に移し、国中の大祓おほはらいをして神の御言葉を請うた。

神のお告げが再び下つた。「この日本の国は汝(息長帯比売)のお腹にいますお子が治める国である」と。

建内の宿弥が申し上げる。「畏れ多いことです、大神様。御腹にいます御子はどういう御子でしょうか」

神「男の子である」

建内の宿弥「今この様にお教え下さっている神様は何という名の神様でしょうか」

神「これは天照大神の御心である。また底筒の男・中筒の男・上筒の男の三柱の大神である。今まことにわが教えた西の国を求めようとするならば、日本全国の神々に礼を尽くし、わが魂を海を渡る際の御船の上に祭つて、真木の灰を瓢箪に入れ、また箸と木の葉の皿を沢山作つて、それらを海に散らし浮かせて海を渡りなさい。きつと上手行くくであらう」と。

かくて息長帯比売(神功皇后)は御腹に仲哀天皇の子を宿しながら、軍船を備え海を渡り、新羅・百済しんら くだらの国を征服して日本に仕えさせ、九州に帰還したのだつた。そしてまだ九州に着かない内に御腹の御子が産まれそうになつた。それをなだめ宥めながら九州(筑紫)にお帰りになり出産なさつた。応神天皇である。

以上が神功皇后の朝鮮出兵についての古事記の記録の概略である。因みに皇后が応神天皇を産まれた御胞衣えんを箱に納めて埋めたと伝えられる処に、現在笠崎八幡宮が祀られている。博多の東、JR線箱崎駅前にある。

さてこの神功皇后の朝鮮出兵が日本の長い歴史の中でど

んな意義を持つのかを考えてみよう。出兵を教えた神のお告げに対して本気で考えようとしめない仲哀天皇がたちどころに生命を失った、というのであるから、その出兵は歴史上重要な意義のあることと考えられよう。

その上、更に不審に思われることがある。この時の朝鮮出兵が天照大神並びに底・中・上の筒の男神三神の神懸かりによって行われていることである。天照大神といえば人間精神の言霊学的な理想構造に名付けられた神名である。人類の大同調和の神である。また底・中・上の筒の男の神とは天照大神と呼ばれる人間理想の精神を表す五十音図の各エ・ウ・オ段の言霊の配列に名付けられた神名であり、古事記の墨江の三前の大神である。

その神の命令が人間精神の究極の構造を表す言霊の原理に則って出されていることは「真木の灰を瓢箪に入れ、また箸と木の葉の皿(葉盤)を沢山作って、それらを大海に散らして……」とあることよって明らかである。真木は松(霊の木)のこと。灰は言と霊で言霊のこと。瓢箪は酒を入れる器。酒は「さか」で性質。それに言霊(灰)を入れるとは、行為の道理が言霊の原理に則っている、ということの呪示である。「箸と皿を散らす」とは瓢箪の中の言霊を箸と皿で

敵も味方もみな食べよ、ということ、この出兵が言霊の原理に叶ったものであり、成り行きに逆らうことが出来ないぞ、ということである。

全て認めて受け入れ、その各々に所を得しめる太陽神である天照大神が何故日本に他国への侵略を命令したのか。そのことが何故言霊の原理に則ったもの、と書かれているのか。そこにはこの出兵が国際間の政治の道徳的な善悪を超えた人類文明創造上の問題と関係があるに違いないことを示している。そうでなければ天照大神は荒振る神、戦の神となってしまふのである。

それなら神功皇后の朝鮮出兵は日本の歴史、世界の文明創造の歴史の上で、どのような意味を持っているのだろうか。八幡大神が現身の応神天皇として現れた、ということの歴史上の意義如何、ということになる。

さて話を古事記神代の巻に移そう。古事記の神話は次のように書かれている。

はじめ伊邪那岐・美の二神は協同して言霊の五十神を生む。生み終わって妻神である伊邪那美神は自分の領域である客観世界に去って行く。後に残った主観世界の主人公である伊邪那岐神は生まれた言霊五十音を操作運用して人間

理想の精神構造の音図を手にすることが出来た。その音図の工段(実践智)の責任者として天照大神、才段(経験知)の責任者として月読命、ウ段の責任者として須佐男命の三人の子(二貴子)を得たのであった。

伊邪那岐神は三人の御子に「天照大神は言霊原理を以て高天原を、月読命は言霊世界の解説者として哲学・宗教の世界(夜の食国)を、須佐男命は産業・経済の世界である海原を治めよ」と命じられた。初め三人の御子は高天原の言霊原理に従って、力をあわせて各領域を治めていた。人類が手にした最初の神の国、理想世界の出現であった。この神話を実際の歴史の上で求めれば、今より五千年程以前までの、日本古代の邇々芸・彦穗々出見皇朝の頃のことということができる。

更に神話を見よう。三人の御子の協調の時代が破れる時が来る。末弟の須佐男命が自分の領域である産業・経済を治める仕事を止めてしまひ、我俣を言い出した。父親である伊邪那岐神が尋ねると「私は母のいる根の堅洲国に行きたいのです」と須佐男命は答えた。根は音、堅は片、洲は静まる、の意。片方とは陰陽の片方で、ここでは陽である父親とは反対の客観世界に行き度い、と言った。

神話にある右の須佐男命の言葉は、実際に如何なることを指すのであろうか。

初め三人の御子が協調する時代の須佐男命の仕事とは、言霊の原理を物質世界に応用することのみを務める産業・経済の仕事であった。人間の主観の真理の客観世界への応用に過ぎぬものであった。ところが或る時を契機として須佐男命の独走が始まる事となる。「物質世界には客観世界(母親伊邪那美神の世界)特有の原理法則がある筈である。私は姉上の天照大神の主観の真理の世界を離れ、物質世界独自の研究をするために、母の国、客観世界に行きたい」ということである。

伊邪那岐神は須佐男命に告げた。「お前がその気持ちなら、言霊の幸培う高天原日本に居ることはよろしくない。外国へ行ってお前独自の研究を進めるがよい」と。須佐男命という物質世界特有の原理・法則の研究集団が日本から外国に進発して行ったのである。歴史上の時は鵜草葺不合朝時代(約五千年前)である。この日本から外国に渡った須佐男命なる精神・理念の外国名をエホバ(ヤーエ)と呼ぶ。

鵜草葺不合朝の時代は高天原精神文明の爛熟期であった。と同時に外国に於いては、五千年以前より日本の神倭

朝建国の三千年以前までの二千年間、物質文明の芽が各分野で形を現して来た時代でもあった。須佐男命研究集團の仕事が成果を挙げ始めて来たのである。

ここに至って日本の朝廷に於いて日本並びに世界の文明創造の方針の大転換が決定されたのだった。精神文明より物質文明への転換である。その時まで栄えていた人類の第一の文明である精神文明の中心であった言霊の原理を社会から隠し、方便としての生存競争の世界を現出させることによつて第二の文明である物質文明の創造の促進を計つたのであった。世界に物質文化が栄え始めたのである。

今より二千七百年前、新しい方針に基づいて神倭皇朝が建国され、第一代天皇として神武天皇が即位した。第十代崇神天皇の時、名実共に古代の精神文明は幕を閉じた。日本に於ける物質文明の始まりである。そして日本の物質文明は、その時まで二千年間、外国に於いて発達して来た物質研究の成果の輸入から始めねばならなかったのである。鵜草葺不合朝まで精神文明を世界に輸出していた日本は、これ以来、物質文明輸入を国是とすることが必要となつていたのである。

以上神倭朝十四代仲哀天皇の時に至るまでの日本と世界

の歴史の大略を古事記と実際の歴史を突き合わせながら駆け足で見えて来たのであるが、この状況から世界の大きな歴史の流れの中で、当時の日本が外国からの文物の輸入が急務であつたことを理解することが出来る。

更に近代まで二千年間、文物の輸入は日本の国是として続いたのである。

かくて仲哀天皇の皇后、神功皇后への神懸かりとして朝鮮への出兵が促されたのだった。国家の歴史上必要な経緯として天照大神の神霊が下つたのである。その目的は何か。表面上は外国の物質文化を日本に輸入する切っ掛けを作ることであり、裏面ではその物質文明研究の指導精神である古代日本から外国に進発して行つた須佐男命、即ち、エホバ(ヤーエ)の神霊との再会合、ドッキングであつた。

世界の歴史上の新しい神霊の受け入れ、それは国家にとつて重大な出来事であり、またその神霊の受け皿としての人物は精神的に肉体的に「汚れなき人」が必要であつた。そのために選ばれたのが神功皇后の御腹に宿られた赤子としての応神天皇(誉田別尊)であつた。応神天皇は母親の御腹の中で朝鮮に渡り、その汚れなき身に外国神であるエホバ(ヤーエ)の神霊を宿し、日本に帰つてこの世にお生まれに

なつた。

それは応神天皇の誕生であり、同時に応神天皇を現身とする神エホバの日本に於ける出現でもあつた。鶴草葺不合朝の時まで、天照大神と月読命と共に三権分立、協調の神であつた須佐男命が、独自の文明と法則を研究するため三神の協調から離れて外国に於いて独走を開始し、エホバ（ヤエ）神として物質の研究を促進し、その初期的な成果である文物を携えて応神天皇として日本に姿を現した。その神の日本名を八幡大神といふのである。八幡はまた「ヤーハ」とも読むことが出来る。

この時より約二千年、日本に於ける生存競争を精神基盤とした文物の研究・産業経済の発達は主として八幡大神の神霊的影響下にあると言つて過言ではない。八幡信仰が日本全国に広まり、八幡神社が各地に建てられているのも、以上の理由によるのである。ここ二千年、日本は生存競争の坩堝くわくの中にある。その競争場裡から今日見るような日本産業・経済の繁栄が現出して来たのであつた。

事実古事記・日本書紀には、応神天皇の時を契機として朝鮮を経ての外国の文化の渡来が盛んになつたことが記されている。古事記についてその記録を記そう。

「この世に、……新羅人が渡つて来た。建内の宿弥はこの人達と連れつて埴の池と渡り、百濟の池を作つた。また百濟の国の昭古王が阿知吉師といふ人につけて牡牝の馬と献上した。また大刀と大鏡と貢つた。賢しき人、和通吉師について論語十卷、千字一巻と貢つた。また鍛冶職人車素、織織人西素と貢つた。秦氏・漢氏の祖先であり、酒の醸造家であつた須須許理が渡つて来た。……」

これらの人々は実は遠く西方からのユダヤ人の子孫なのである。彼等はその産業・経済上の才能の故に、次第に日本の政治の中枢にまで入つて行くようになる。

八幡信仰にはお祭りの時の御輿みこしが付き物である。この御輿みこしを昇かぐ習慣が遠く西方のユダヤのエホバの儀式から来たことをご存じであろうか。ユダヤに三種の神宝がある。黄金のmana壺・十戒石・アロンの杖である（神の表徴物として日本の三種の神器、曲玉・鏡・劔に当たる）。この神宝を木の箱（契約の櫃はこ）に入れ、棒を通してユダヤ十二部族の内の祭祀を行うレビ族に昇がせ、軍隊の先頭に立たせてヨルダン川を渡つた、と旧約聖書に見える。これが日本に伝わり、神社の御輿の起源となつた。エホバは戦の神、ねた

みの神、敵を滅ぼす神である。八幡様の御輿も荒れるのが常である。また八幡大神は武家である源氏の氏神となった。源・足利・徳川などの幕府の頭領は全て源氏であった。

以上が八幡大神の信仰の内容とわが国の関係との由来である。この大神の日本に及ぼす神靈的な影響はこの記述だけに止まるわけではない。八幡大神のわが国への渡来より二千年近く経った今日、この大神が目指す世界の歴史上の仕事がその目的を達成する日を目前にしているのである。その間の歴史の筋道を更に明らかにしよう。

社会の文明を創造して行く人間の代表的性能である言靈エ(実践智)オ(学問)ウ(産業)の担当者天照大神・月読命・須佐男命の三権協調から一人抜けだし、独自の活動を求めて外国に渡った須佐男命の外国名エホバの靈的責任者であるユダヤ民族は、彼等の王国の滅亡後、民族の大移動を開始する。十二部族のうちの祭祀を司ることを務めとするレビ族は予言者の命令に従って東に向かい、シルクロードを通って次第に各民族と融合し、中国に入った。長安の都市街の区画が彼等の故郷エルサレムの市街の形を移したものであることは明瞭である。先に述べたような神倭皇朝以後、特に応神天皇以後中国・朝鮮から日本に渡来した人た

ちのほとんどは、彼等東漸のユダヤ人の子孫である。

レビ族以外のユダヤの十一部族は西に向かった。各民族の中に入り、彼等特有の産業経済の才能を生かして国家の中樞を掌握し、物質科学の研究、産業の繁栄に貢献した。彼等は東に向かったレビ族と異なり、彼等の民族の純血性を守り、世界各民族の背後に居て世界の経済の実権を握り、全世界の経済的統一を完成させようとしている。彼等は本拠を現在アメリカに置き、彼等の祖先が目指した物質文明の完成、経済的権力による世界統一という二つの成果を携えて、太平洋を渡り、二千年前、彼等の仲間である東漸のレビ族の子孫が待つ日本に於て、ユダヤ十二部族の魂の故郷・日本に神エホバの幕屋を立てようとその準備完了間近である。

独走のエホバ(ヤーエ)の日本への帰還とは、五千年前そうであった如く、天照大神・月読命・須佐男命の三人の御子として協調体制を組んだ昔の須佐男命への復帰を意味している。この時五千年前の三権協調と異なるのは何か。須佐男命が独走した言靈ウの分野の物質科学を完成させていることである。昔は精神の原理である言靈の法則を物質面に応用するのみが須佐男命の仕事であったが、今や言靈の

原理と丁度表裏に当たる完成された物質科学の真理として、言霊の原理による第一精神文明に次ぐ第二の物質文明を完成させたことである。人類はここに初めて物心両真理が車の両輪として整った第三の文明時代に入ることとなる。

以上八幡神社に関する故事来歴を書いて来た。八幡大神とは五千年前に日本から外国に去り、二千年余前再び日本に渡って来た所謂外国系の神である、とは、読者にとつて耳新しい事ではなかつたらうか。

筆者が八幡神社の本宮、宇佐八幡神社に参拝したのは昭和六十二年五月の事であつたと記憶している。東京より博多行きの新幹線を小倉で下り、日豊本線に乗り換えて宇佐駅下車。宇佐神宮は駅前より北へバス十分程の処にあつた。広い境内の深い木々の森に囲まれた処に立派な社殿が建っていた。社殿は三つある。第一殿八幡大神、第二殿比売大神、第三殿神功皇后、とあり、三つの御殿は大きき略等しく、等間隔に横に並んで建っていた。参拝を終えて県都大分に向かう車中、「八幡大神が現身うつそみの応神天皇となつて現れた」という神社境内の案内板の言葉が妙に気になつてゐる事に気付いたのだつた。

四年が経つた。その間昭和天皇の崩御があつた。その頃の日本と世界の状況を言霊学によつて見て、二千六百年前の神武天皇より百二十四代昭和天皇までの神倭皇朝が名実共に終焉したことを知つた。と同時にその百二十四代の天皇の中で、名前に神の字がつく天皇は唯の三人に過ぎないことに気付かされたのである。第一代神武天皇、第十代崇神天皇、そして今会報の主、第十五代応神天皇である。そして三天皇の名の中にある神とは外国より渡来ワケの八幡大神ヤエであることを確認出来たのであつた。

「高山の眞の柱は唐人や、これがそもそも神の立腹」

天理教教祖中山みき刀自のお筆先はこう嘆いている。高山の眞の柱即ち日本の天皇は外国の魂を持った人だ、といふのである。天照大神の御神霊の神懸かりである天理教祖のお筆先にして初めていみじくも言い当て得た真実と云うことが出来る。

天理教祖が嘆いたその神倭皇朝も終わりを告げ、同時に日本に於ける八幡大神の、外国に於けるエホバの神の目的である物質科学の完成、権力による世界統一も極めて間近となつた。この仕事を終了した暁、八幡大神・エホバの神

は、日本の精神の浄土・高天原に舞い上がり来たり、「最後の審判」と呼ばれている神劇を展開した後、高天原に於ける天照大神・月読命・須佐男命の三権分立・協調の須佐男命に復帰することとなる。独走する時代の須佐男命の名エホバ・八幡大神はここに独走の目的を達成し、元の須佐男命に回帰する。その本来の名が示す如く、主(須)である天照大神の世界経綸を物質文化をもって助(佐)ける弟神(男)としての務めに帰るのである。(以上この項終わり)

【収載】第三十四号(平成三年四月)

●神様の戸籍 その十

白山神社

この神社の本宮である白山比咩神社については先に会報二十六号で既に書いた。ここで白山神社として再び取り上げるには理由がある。石川県石川郡鶴来町にある本宮白山比咩神社発行の案内書に「御祭神は白山比咩大神(菊理媛神)・伊邪那岐神・伊邪那美神」とある。創建は崇神天皇の御宇と伝えられている。その案内書にある四神のうち伊邪那岐・美の二神については既に会報二十六号で説明した。

だが白山比咩大神(菊理媛神)についてはまだ触れていない。そこでここに白山神社の祭神としてその戸籍を明らかにしようと思う。

白山神社は日本全国処々に見ることが出来る。その祭神のうち伊邪那岐・美の二神はともかく、白山比咩大神別名菊理媛神については古書に余り詳しい記録がない。全然ないわけではない、菊理媛神なる神名は古事記にその記載はないが、日本書紀に唯の一度だけ登場する。しかもその登場の仕方が如何にも奇妙奇天烈というか、尻切れトンボというか、兎に角変わっている。実はその変わった登場の仕方自体が、日本人の祖先皇祖皇宗の人類歴史を創造する経綸の深謀遠慮の現れである、ということが出来るのである。追々に説明して行こう。

白山比咩大神別名菊理媛神については神道学者や神霊研究者の間でいろいろな推察や議論が多いようである。というのもこの神の名が右の如く日本書紀に奇妙な現れ方をするところがその一つの理由であろう。伊邪那岐・美二神と言えば、人類文明創造の主神であり、日本神道や神霊研究にとって重要な神である。その伊邪那美神と深い関係にある白山比咩大神または菊理媛神の原籍をしっかりと定めること

は、言葉の言葉である言霊の学の役目でなければならず、また原理の立場に立たぬ限り、この神名の説明は不可能でもある。

先ず菊理媛神なる名が日本書紀に登場する場面を記すことから始めよう。以下書紀の文章の引用である。

一書に曰はく、伊弉諾尊、追いて伊弉冉尊の所在す処に至りまして、便ら語りて曰はく「汝を悲しとおもうが故に来つ」とのたまふ。答えて曰はく「族、吾をな看まし」とのたまふ。伊弉諾尊、従ひたまはずして猶看す。故、伊弉冉尊、恥ぢ恨みて曰はく「汝已に我が情を見つ。我、後汝が情を見む」とのたまふ。時に、伊弉諾尊亦怒らたまふ。因りて、出で返りなむとす。時に、直に黙して帰りたまはずして、盟ひて曰はく「族離れなむ」とのたまふ。又曰はく「族負けじ」とのたまふ。……その妹と泉平坂に相闘ふに及びて、伊弉諾尊の曰はく「始め族の爲に悲み、思衣ひけることは、是吾が怯きなりけり」とのたまふ。時に泉守道者曰して云々く「言有り。曰はく『吾、汝と已に闘と生みてき。奈何ぞ更に生かむことと求めむ。吾は此の國に留まりて、共に去ぬべからず』」との

たまふ」とまうす。是の時に、菊理媛神、亦曰す事有り。伊弉諾尊闘しめして善めたまふ。乃ら散去けぬ。(傍線筆者)

以上が菊理媛神が登場する場面の書紀の一節である。この文だけでは何のことであるか分からないので、この文章の前後の状況を補足しながら現代文に訳してみよう(伊弉諾・冉尊を岐・美命と古事記に則つて表す)。

始め岐美二人の命は協同して三十三の子音(大事忍男神・言霊夕より火の迦具土の神・言霊ンまで)を生んだ。子音の全部を生み終えて、もう母親である美の命は生むべき子種がなくなつた。次の仕事は生まれた子の整理・検討することであるが、この仕事は主体である岐の命の責任であつて、美の命は関与出来ない。物を作り出す仕事は主体と客体の感応同交によつて行われるが、作り出された物をどう扱うかは主体の仕事であつて、客体は関係ない。そこで美の命は元の純客観の世界に帰つて行つた。

妻の命に去られてみると、夫の岐の命は美の命が懐かしくなり、暮る心に耐えられず妻の命の居る客観世界に追いかけて行つた。ところが、その時の客観世界はその世界を研究するための科学がまだ発達しておらず、整理されていない汚い処であり、その責任者であ

は、言葉の言葉である言霊の学の役目でなければならず、また原理の立場に立たぬ限り、この神名の説明は不可能でもある。

先ず菊理媛神なる名が日本書紀に登場する場面を記すことから始めよう。以下書紀の文章の引用である。

一書に曰はく、伊弉諾尊、追いて伊弉冉尊の所在す処に至りまして、使ら語りて曰はく「汝を悲しとおもうが故に来つ」とのたまふ。答えて曰はく「族、吾とな看まし」とのたまふ。伊弉諾尊、従ひたまはずして猶看す。故、伊弉冉尊、恥ぢ恨みて曰はく「汝已に我が情を見つ。我、後汝が情を見む」とのたまふ。時に、伊弉諾尊亦慙らたまふ。困りて、出で返りなむとす。時に、直に黙して歸りたまはずして、盟ひて曰はく「族離れなむ」とのたまふ。又曰はく「族負け」とのたまふ。……その妹と泉平坂に相闘ふに及びて、伊弉諾尊の曰はく「始め族の爲に悲み、思哀ひけることは、是吾が情まなりけり」とのたまふ。時に泉守道者曰して云さく「言有り。曰はく『吾、汝と已に国を生みて、奈何乎更に生かむことと求めむ。吾は此の国に留まりて、共に去ぬべからず』」との

たまふ」とまうす。是の時に、菊理媛神、亦曰す事有り。伊弉諾尊聞しめして善めたまふ。乃ら散去けぬ。(傍線筆者)

以上が菊理媛神が登場する場面の書紀の一節である。この文だけでは何のことであるか分からないので、この文章の前後の状況を補足しながら現代文に訳してみよう(伊弉諾・冉尊を岐・美命と古事記に則つて表す)。

始め岐美二人の命は協同して三十三の子音(大事忍男神・言霊タより火の迦具土の神・言霊ンまで)を生んだ。子音の全部を生み終えて、もう母親である美の命は生むべき子種がなくなつた。次の仕事は生まれた子の整理・検討することであるが、この仕事は主体である岐の命の責任であつて、美の命は関与出来ない。物を作り出す仕事は主体と客体の感応同交によつて行われるが、作り出された物をどう扱うかは主体の仕事であつて、客体は関係ない。そこで美の命は元の純客観の世界に歸つて行つた。

妻の命に去られてみると、夫の岐の命は美の命が懐かしくなり、暮る心に耐えられず妻の命の居る客観世界に追いかけて行つた。ところが、その時の客観世界はその世界を研究するための科学がまだ発達しておらず、整理されていない汚い処であり、その責任者であ

る美の命は夫に「私を見ないで下さい」と言った。しかし岐の命は感情のおもむくままに妻を見てしまふ。

汚い自分の姿を見られて妻の命は「私に恥をかかせた」として大変怒つた。夫の命もそのことを恥じ、主観世界の高天原に帰ろうとする。但し黙つて帰つては来ないで、「貴方とこれからは離婚しよう。貴方が客観世界で今後何をしようとも、主観世界の立場から私は負けませんよ」と言った……。

そして追いかけて来た美の命と、主観世界と客観世界の間にある泉平坂で道引の石を間にして向き合つた時、岐の命は美の命に「貴方が居なくなつたのを悲しみ、更にお慕ひしたのは私の未練からであつた」と言った。この時客観世界の道しるへをする人が岐の命に申し上げた。「美の命様が貴方様に申し上げることがあるといふことです。それは『客観世界の主宰者である私は、主観世界の責任者である貴方と力を合わせて国や子供を生んで来ました。全ての子を生んだからには、どうして今後貴方と共同の生活を生きようとするでしょうか。私はこの客観世界に留まつて仕事をし、貴方と共に主観世界に行くことは出来ません』と仰つておられます」と申し上げたのでした。

この時、菊理媛神が（あることを）申し上げた。岐の命はその言葉を聞いてお喜びになつた。岐の命と美の命はそれぞれの世界へ向

かつて泉平坂を去つて行つた。

以上が日本書紀の文章の現代訳である。だが現代文で書いても仲々理解は難しいかも知れない。何故なら昔は哲学的な用語がなかつたから、主観・客観世界の交渉によつて物事を創り出して行くメカニズムを擬人的に表現しており、現代人には分かり難い事になつてしまふ。けれど現代人が自分の心の中に、主観と客観の区別をしっかりと把んでしまふならば、昔の人が用いた擬人法の神話の意味が、現代の哲学的概念による説明よりも遙かに分かり易いものになつて来るのである。

もう一つ、この文章を読んで戸惑うのは、菊理媛神の出現が余りにも唐突なことである。また何か意味深長なことを伊邪那岐命に言つたに相違ないのであるが、その内容の記録が全く欠けているのだ。そしてその言葉を聞いた岐の命が「善めたまふ」と、取つて付けたように書かれていることである。そして菊理媛神なる神名はこの他日本書紀に一度も記載されることがない。にも拘わらず、菊理媛神即ち白山比咩大神を祀る白山神社は日本全国に多数見られることである。

一体この菊理媛神とはどんな意義・内容・役割を持った神なのであろうか。

先ず日本書紀の先の一節を読んで、唐突に菊理媛神が登場し、尻切れトンボに消えてしまう文章には、前後に文字の欠落があることは確実であらう。「是の時に、菊理媛神、亦曰す事有り。伊弉諾尊聞しめして善めたまふ。乃ち散去けぬ」では菊理媛神が何と言ったか。それを聞いて伊弉諾尊が何故喜んだのか。その会話が済んで直ちに両者は別れて行って、文章は一段落しているのであるから、その会話のやりとりはその後の歴史の行く末にとって重要な内容であることは間違いない。

かかる文章の欠落が日本書紀編纂当時の故意のものか、または編纂以後の故意によるものか、更には年月の移り変わりの間に起こった偶然的出来事による文章の欠落か、は文章そのものからは定かには判定し難い。しかし日本書紀並びに古事記の神代巻が単なる神話ではなく、神話形式をとった日本語の原点であるアイウエオ五十音言霊学の教科書であり、手引き書であることが明らかにされた現在、その日本語の出発点に立ってこの文章を見るならば、この日本書紀の文章欠落の意味が自ずと明らかになる筈である。

検討を進めて行くことにしよう。

白山比咩神社の奥社は加賀白山の山頂にある。先の会報(二十六号)で述べたように伊邪那岐神は人類文明の創造神であり文明の父である。伊邪那美神は母である。岐神を祭る立山は父(と)の山、美神を祭る白山は加賀(かか)の山で、母の山の意であり、岐神は文明創造の意志の主体の主宰者であり、美神は客体の主宰者であった。白山神社の祭神白山比咩大神(菊理媛神)は白山(かかの山)に祭られる神であり、客体側の神であることは明瞭である。

ここで主体と客体ということについて改めて考えてみよう。現代科学は客観世界の学問だといわれる。それに対して言霊学を含めて一般に東洋哲学は主観世界の学問である。人が何か物を見た瞬間は主体も客体もない。自分がその物であるか、そのものが自分であるか、区別がない。けれど一度人がその物を「何か」と考えると同時に見る主体と見られる客体に分かれる。この当たり前とも思われる主体と客体とに分かれるという出来事が宿命とも言える人間の心の本質の一つなのである。

人が物を見た瞬間、人と物は一枚(禪宗の言葉)である。何か、の考えが起けると同時に一枚が二枚即ち主体と客体

に分かれる。この時見たり考えたりする主体を脇に置いてしまい(哲学用語で捨象と呼ぶ)、見られた客体の現象を概念でもって法則化する(抽象)時、科学が成立することとなる。科学には見る方の人の立場のご都合は入らない。若し個人的な都合が入ったならそれは科学ではなくなる。一つのことについて見る人それぞれ相異なったデータを出したら、それはそのままでは科学のデータにはなり得ない。

それに対して見る側、考える側の学問はどうであろうか。見た瞬間は主客の別はない。一枚である。「何か」の考えが起こって主客二枚に分かれる。ここまでは科学の場合と同じである。しかし次からが違ふ。主体性の研究は科学とは反対に客体を捨象して、主体を抽象化して行く。そこに人の心の構造が解明されて行くことになる。

話を更に進めてみよう。見た瞬間の一枚から「何か」が加わって主客の二枚に分かれて後、科学は主の側を捨てて客の側に向かつて抽象化を続けて行くのだが、現代科学は客体の方向の現象世界を突き破って、既に眼に見えない物それ自体の世界、即ち物というものの先験の部分に突入して、その原子核の内部の構造を明らかにしつつある。物が大きい・小さい、色は赤か白か、形は円いか三角か、香りは何

か、という物の現象の世界を突破して、大小・色・形・香りがどういう仕組みで現象として現れて来るのか、の物とは何かの根本構造を明らかにしつつある。

科学とは反対の方向に研究する心の科学ではどうであろうか。それは今から数千年以前に日本人の祖先によって心の現象の要素ばかりでなく、心の現象が現れて来る元の世界、心そのものの、心の先天構造が既に明らかにされた事は度々お話しして来た。十七個の先天、三十三個の後天要素の言霊である。

人が物事を研究して行く上で、主体方向に進む心の学問と、客体方向に向かう科学との相違を以上のように考えた上で、伊邪那岐・美の二神が「族離れなん」と離婚した事の人類文明創造上の意味について検討して行く事にしよう。そうすることによって菊理媛神の正体も解明される筈である。

さて読者は現在皇室が使っている菊の紋章の由来をご存じであろうか。天皇家が使用する十六弁の菊花紋章は日本人の大方は御存知であろう。竹内古文獻によればこの使用の始めは非常に古いことが記録されている。十六弁の菊花は十六方位を表徴している、と説明されているが、理由は

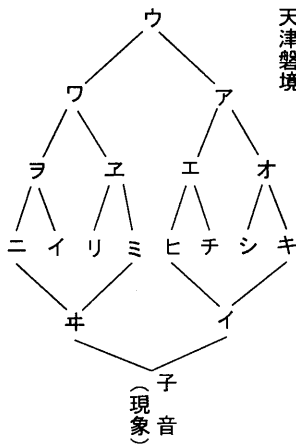
それだけではない。言霊学が具体的に説明してくれる。

天皇のことを昔スメラミコトといった。その意味は世界中の一切の言葉(ミコト)を統べる(スメラ)である。世界の言葉を聞こし召し、統一する。菊花はその「聞く」の表徴である。聞くのは何を、の意で十六方位の世界の国々と解釈することも出来る。しかしそれでは何故統一することが出来るか、の天皇たる資格が出て来ない。古代天皇は武力・権力での統一ではなく、徳力による統一の責任者であったのである。

人は他から来る言葉の音声を耳で聞く。耳で聞いたものを頭脳に還元してその言葉の真実の意義が探られる。人は可笑しいから笑う。しかし悲しかったり、怒ったりする時にも笑うことが時にはある。真相はどうなのか、を頭脳で判断する。その頭脳といわれるものが、心の先天部分である。まだ「こ

だ」という何かの判断がなされる前の根本的な動きの部分のことである。この先天部分は言霊学で天津磐境いはいまといわれ、

図 035-A



十七個の言霊から成り立っている(図 035-A 参照)。

初めの言霊ウは古事記で天乃御中主神といわれ、第二段のア・ワは私と貴方、主と客に別れる根本世界のことである。第三段の言霊オエエラは経験知・実践智の世界であり、第四段の八音は人間の意志の創造リズムの父韻である。そして最後の第五段に古事記でいう伊邪那岐・美の言霊イ・ヰがあつて、先天構造の十七音全部整って「イザ」と創造が始まり、子音が生まれて来る。

古代の天皇となる資格は精神の先天の構造である十七の

言霊(ヒ)を知る(聖)ことであつた。天皇はこの心の先天構造の自覚によつて世界の言葉を統一し、世界文明創造の経綸を行ったのである。この先天十七音のうち、十六番目のイと十七番目のヰを一本化した姿を古事記は伊邪那岐大神と呼ぶ。万物創造の主神である。この立場に立つ時、先天の構造は

全部で十六個ということが出来る。世界の言葉を聞こし召す(菊)天皇の天与の能力は十六個から成る。天皇の紋章に

十六弁の菊の花が用いられる由来はここより来ているのである。

話を元に戻そう。古代の日本人の祖先は、心の現象を生み出す心自体が言霊十七個の先天構造であることを早くから解明していた。解明したところで伊邪那美神は客観世界に去って行ったのであった。夫神の伊邪那岐神は妻神恋しさの余り追って行き、妻神の穢い醜い姿を見た。主観世界の心理の眼で客観世界をのぞいたのである。まだその昔、客観世界は言霊による理路整然とした主観世界とは違い、研究は進まず雑然たるものであったのである。そして自分の過ちに気付き、主観世界の高天原に逃げ帰って来た。

黄泉国と高天原の境である黄泉平坂にある道引の石を間にして岐・美二神は向かい合い「族離れなん」と言って離婚することとなった。古事記はこれを「事戸を渡す」と呼ぶ。言葉(事)の境にしっかりと戸をつけて外(客観世界)より内(主観世界である高天原の言霊の原理)に入って来られなくなったのである。言葉の境とは言葉の言葉である言霊と、言霊の一つ一つを組み合わせて出来た言葉(言霊の複合言語)との境という意味である。または言霊と外国の言葉との境と言ってもよい。これによって世間で使われている言葉だけ

をいくら考えてみても、言霊そのものを自覚することは不可能となったのであった。

そのことはまた次のように言うことが出来る。世界にはいろいろな宗教・哲学・思想がある。言葉や文字に関する理論がある。それらの研究が如何に精密な理論を展開しようとも、伊邪那岐神の純主観の内部の先験構造である言霊の原理の領域にはたとえ半歩たりとも足を踏み入れることが出来ない。また同時にやがて完成されるであろうところの、美神である純客観の科学原理である物質核内構造の原理に主観的な学問が立ち入ることも不可能なのである。両者はそれぞれの完成された姿に於て、初めて同じ生命の表裏としてのみ照合することが可能なのである。これが岐美二神の離婚の神話が呪示する学問上の意義である。

言霊の学そのものの手解きから入らない限り言霊の原理を自覚することが出来ない、と言う古事記の呪示が真実であることは次の三点によって明白となろう。

言霊の学以外の研究によつては……

一、頭脳の先天構造である言霊十七音から成る天津磐境の自覚が出来ない。

二、五十音言霊の学の総結論

であり、神道で八咫の鏡と呼ばれる天津神籬(図 035-B に示す天津太祝詞音図)の自覚と理解が出来る。

三、右の自覚がないためにこの二点の自覚によって行われる皇祖皇宗の人類文明を創造する経緯を知ることが出来ない。

さて、以上のことを踏まえながら本論である白山比咩大神(菊理媛神)の戸籍の説明に入ろう。

白山比咩大神の白は「白す」とあるように言葉の意味する。中国に太古結繩の政・白法の世があった、と記録されている。白法とは言葉の原理の意味である。言辞の相が滅して世は乱世となった、ともある。白山の山は八間を意味している。一切の言葉は根本的には八つのリズムを持ってゐる。白山比咩大神とは言葉の神であることに間違えな

図 035-B

天 津 太 祝 詞 音 図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
キ									イ
エ									エ
ヲ									オ
ウ									ウ

天 津 神 籬

比咩は秘めているの意である。白山比咩全部で言葉の原理を秘めているということになる。

白山比咩の別の名である菊理媛神はどうか。菊は聞くに通じる。理は漢字として道理を意味するが、大和言葉の「リ」にも同様の意味がある。菊理媛神とは言葉を聞く理を秘めている働きのこととなる。

白山比咩も菊理媛も以上のことから言葉の道理であることが明白である。にも拘わらず、この神はカカの山である伊邪那美神の山、即ち客観世界に祭られているのである。

以上のことを総合してみる時、次の結論に導かれる。白山比咩大神別名菊理媛神とは、言葉の原理の働きのことである。伊邪那岐神と離婚した伊邪那美神の客観世界を対象とする言葉、言い換えると主観世界の言霊の原理と断絶した言葉の原理である。現実的に言えばここ三千年の間、世界から言霊の原理が隠されてしまった時代に通用している日本語又は外国語一切の原理のことである。

旧約聖書に「全地は一の言語、一の音のみなりき。……エホバ言ひたまひけるは、視よ民は一にして皆一つの言語

を用ふ。……去来我等降り彼処にて彼等の、言語を消し、互いに言語を通ずることを得ざらしめんと。……是故にその名はバベル(消乱)と呼ばれる。是はエホバ彼処に全地の言語を消したまひしに由てなり」と示されたように、一の言語、一の音(言霊の原理)を忘却した客観世界を対象としたバベルの時代の言葉とその働きを白山比咩大神またの名菊理媛神というのである。

以上のように白山比咩大神(菊理媛神)の内容を明らかにするならば、書紀の中に「是の時に、菊理媛神、亦白す事有り。伊弉諾尊聞こし召して善めたまふ」と菊理媛神が突然に現れて「亦白す事有り」としてどんなことを言ったのかの内容も推察することが出来る。即ち「貴方(伊弉那岐)と共にことごとく子供を生んだのですから、離婚して客観世界に留まることになって後は、貴方との共同で生んだ言霊の自覚をたとえ失ってしまったも、客観世界の立場から言語を作り、やがては客観世界独特の原理を完成させて行くことにしましょう」という意味のことをいったに違いないのである。これに対して伊弉那岐命が「それはよい事です」と賞めた、というわけである。

それなら伊弉那美神と白山比咩大神又は菊理媛神とはど

んな関係にあるのか。これらの神を人格として捉えるならば同一の神ということが出来る。これら神名を心の中の内容や働きと見るならば、伊弉那美神は客観世界全体の主宰者であり、夫神である岐神と組んで言霊を生んだ神である。生み終えて岐美二神が離婚した後に、客観世界を対象として研究する世界の言葉とその原理に対して白山比咩大神又は菊理媛神と呼ぶこととなる。

日本書紀の編纂者は何故このような唐突な文章を書き残したのであろうか。この尻切れトンボの文章は決して書紀編纂以後の歴史の中で起きた偶然の事故による一部の文章の欠落のためではあるまい。そう言い切る理由は唯一つ、事故のための欠落とするには余りにも文章欠落の箇所が巧妙すぎる。どう巧妙なのか。

古事記・日本書紀の神代卷は神話形式を借りた言霊原理の手引き書なのである。何故原理をそのものズバリと書かず、神話の形の呪示に留めたのか。それは崇神朝より二千年間は言霊原理の存在を明らかに世に示すことが皇祖皇宗の御経綸に反することだったからである。書紀に於いて菊理媛神の突然の登場とその折りの言葉の欠落も同様の理由による。

太古に於ける言霊原理の発見、その原理による精神文明の建設、その原理の隠没とその間に於ける物質文明の建設、原理の復興・甦りという原理盛衰の経緯は人類の文明創造の歴史を貫く唯一本の動脈なのである。この筋道を視点として見る時、菊理媛神の所業は書かねばならず、書き過ぎてはならず、書紀の編纂者は極めて難しい選択を迫られ、現在遺されている如き書紀の文章に決定したことが推察される。その選択が正しかったことは、言霊原理が二千年の暗黒の世から不死鳥の如く甦って来た現在、この書紀の奇妙な文章の内容とその意味がスラスラと解き得たことによつて証明されるであらう。

主体世界の言霊原理が世の表面から隠されている間に、客体側に顔を向けた言葉が二千年の社会を支えて来た。それは菊理媛神の仕事であった。白山神社が日本全国に見られるはこの為である。その二千年間に客観世界の研究は須佐男命の独走という形で今日見る如き物質文明となつて花が咲いたのである。

岐の神の言葉の原理に次いで、美の神の領域の物質科学が完成する時、双方の領域の究極の真理は生命の表と裏としてお互いに照合され、その真理性が裏付けられる。「族

負けじ」と競い合った末の目出度き再会である。心と物の真理を両輪とした人類の新文明の出発である。この時菊理媛神の使命は発展的解消し、元の伊邪那美神と一体化する。立山はトトの山、白山はカカノ山と共に相並んでお互いに円満な夫婦の姿に帰る事となる。(この項終わり)

【収載】第三十五号(平成三年五月)

●七夕(たなばた)

よく晴れた夏の夜、大空を見上げてみよう。天の川(銀河)を挟んで東西に織女と牽牛の二星が向かい合つて年に一度の逢瀬を楽しむといわれる。七夕のお祭りである。天の川まで地球からどの位の距離があるだろうか。じつと仰ぐだけで宇宙の神秘さ、美しさに心が魅せられて来る。この大空に心馳せて、昔の人は色々な願事を託して来た。七月七日の七夕のお祭りもその一つである。この七夕の行事が、実は人類の数千年にわたる歴史の推移を予言した私達日本人の祖先、皇祖皇宗の言霊の原理による計画を表徴したお祭りなのであることを知る人は少ないようである。七夕とはどんな夢をかけた行事なのであろうか。

先ず七夕を辞書で引いて見る。「五節句の一。陰暦の七月七日の夜、天の川の東西にある牽牛・織女の二星が年に一度会うのを祭り、児女が手芸の上達を祈る中国より伝来の行事」とある。また織女星については「初秋の頃天の川の辺りに現れる」とあり、また「琴座のアルファ星(ヴェガ)の漢名」と見える。牽牛星については「わし座の首星。天の川を隔てて相對する織女星との七夕伝説で古来著名。ひこぼし。漢名、河鼓」と書かれている。

さて右の織女と牽牛の二星にまつわる七夕(棚機とも書く)の言霊学的説明を始めるのであるが、辞書にこの七夕の祭りが中国から伝来の行事と書かれているものを、敢えて日本古来の言霊(コトタマ)の学に基づく行事である、と主張するのはどんな根拠があるのか。次に織女星と牽牛星とは何を譬えたものなのか。第三に織女星は「初秋の頃天の川の辺りに現れる星」といわれるが、特に七月七日と限定したのは訳があるのか。この二つの星が年に一度天の川を挟んで東西に向き合う、ということとはどのような意義を主張しようとしているのか。天の川とは実際になんの表徴なのか。等々問題は多岐にわたっている。それらの問題を一つ一つ解決して行くことによって、七夕の祭りが実は

人類の数千年にわたる文明創造の大ドラマの展開を表徴するものであることが明らかになって行くのである。検討を始めることにしよう。

中国の古い書物に「列子」というのがある。その書の「湯問第五」篇に次のような文章がある。

「渤海の東、幾億万里なるを知らず。大壑有り……」中国の昔の字なので余りに読むのに難しいから、日本の現代文にして載せると次のようになる。

「渤海の東の方、幾億万里とも知れない所に、大きな谷があります。この谷は本当に底なしの谷で、その奥は限りなく深くて、帰墟と呼ばれています。天上界のすべての水、天の川の流れなど、全部この谷に注ぎ込んでいるのに、水量は一向に増えもせず減りもしません。谷の中に五つの山があつて、岱輿^{たいよ}といい、員嶠^{えんきやう}といい、方壺^{ほうこ}といい、瀛洲^{えいしゅう}といい、蓬萊^{ほうらい}といひます。……頂上にある建物は、皆金銀宝石で出来ており、そこに生息している鳥獣は、皆真っ白であります。また、玉の木が群がり生えており、果実は皆おいしくて、それを食べると、食べた人は皆、老け込みもせず、死にもしません。そこに住んでいる人は、皆仙人の類で、昼となく夜となく、山から山へ飛行して往き来する者が数限りがありません」(明治書院、

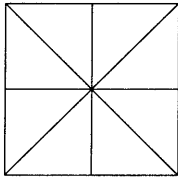
新釈漢文大系、列子)

列子なる人は約二千五百年程前の人である。その当時、中国に於いて既に伝説となつてしまつていた古代日本のことについて列子が綴つた物語が右に挙げた文章である。谷の中にある五つの山とは、松島、天橋立、高千穂、興津清見瀨、富士山の五ヶ所のことといわれている。そこに住む仙人とは大和言葉で「やまひと」即ち八咫(図036・A)の言霊父韻の原理を知る人の意である。人里離れた山に住む人のことではない。

昔、列子が仙人が住むといつた日本を中心として、世界には精神文明の花が咲いていた。その文化をもたらす根本法則がアイウエオ五十音言霊の原理であつた。言霊の原理に則つて言葉を作り、数理に応用し、物理の上にも適用して、その成果は広く世界中に伝播されていた。七夕の伝説の起源はこの時代の出来事に由来してゐるのである。

古事記神代卷の「三柱の貴子」の章を見よう。

図 036-A



この時伊邪那岐の命大く歎げして詔りたまひしく「吾は子を
生み生みて、生みの終に、三柱の貴子を得たり」と詔りたまひて、その
御頸珠の玉の緒もゆらに取りゆらかして、天照大神に賜ひて詔り
たまはく、「汝が命は高天原と知らせ」と言依さして賜ひき。かれ子の
御頸珠の名を御倉板拳の神と云。次に月読命に詔りたまはく「汝
が命は夜の食園と知らせ」と、言依さしたまひき。次に建速須佐男
命に詔りたまはく「汝が命は海原と知らせ」と、言依さしたまひき。

古事記の神代卷は神話の形式をとつた言霊原理の教科書であるから、右の文章の言霊の原理について意味を考えて見よう。

人間の心を構成している言霊の数は全部で五十個である。次にその言霊を操作する方法が五十ある。五十個と五十の合計百の原理の結論が天照大神、月読命、須佐男命の「三柱の貴子」というわけである。初め伊邪那岐命は伊邪那美命と共同で五十の言霊を生む。生み終えて美命は純粹の客観世界である黄泉国に帰って行つてしまふ。その後の言霊五十個の操作と整理は主体である伊邪那岐命の仕事である(このことは前号で詳しく説明した)。そして整理の結

論として三柱の貴子が誕生したのであった。伊邪那岐命は三人の子にそれぞれが統治する三つの分野の分担を決めた。

天照大神は言霊の原理(御倉板拳の神)を授かって高天原日本に於て実践智(言霊工)の責任者となり、月読命は天照大神の言霊原理の補足の仕事(夜の食国)である宗教・芸術を分担し、須佐男命は海原(ウの名の原)である物質世界の産業・経済を担当することとなった。以上が古事記神話の言霊学に於ける意味内容である。

事実、太古の世界の精神文明の時代には平和で心豊かな社会が続いていたのであった。天照大神といわれる言霊の原理に基づく実践智を運用する聖(霊知り)の集団が世界を統治し、月読命と呼ばれた集団が世界の人々に文化・教養を広め、須佐男命と名付けられた集団は精神文明の応用による生活物資(衣食住)の工夫を世界に伝えて、それぞれの分担の仕事を遂行し、「世界は一の言葉、一の音のみなりき」の平和な社会が繁栄したのである。武力でなく道徳による世界統一の世であった。この事実は今に各国、各民族の太古の神話として伝えられている。それは単なる神話のおとぎ話ではなく、事実として歴史的に存在した平和の時

代であった。

この平和な精神文明の時代は永く続いた。極めて大ざっぱな推定ではあるが、今より八千年前から三千年位前まで五千年間続いたのである。この五千年間の後半を過ぎた頃、今より四千年程前であろうか、高天原日本の三権分担の内部に異変が起こった。精神文明の中で物質生産の分野を受け持っていた、須佐男命集団の三権分担制度からの離反である。

古事記の三権分担を定めた章に続く文章を引くと次の様である。

かれおのもおのも依よせし賜たまへる命のまにま知らしめす中に、速須佐男命、依よせしたまへる国と知らずして、八拳須心前やつかひけななまきに至るまで、啼なきいさらき、その泣く状さまは、青山は枯山かきなす泣き枯らし、河海は悉ことごとくに泣き乾ほしき、こゝを以もつて悪あむる神の音ねなひ、袂さ蜷はえなす皆満みなみり、萬の物の妖まじはつ悉ことごとくに発おこりき、かれ伊邪那岐の大神神、速須佐男命に詔みことりたまはく「何とかも汝いませは言依ことよせせる国と治さらずして、哭なきいさらる」とのたまは、答こたへ白しろさく「僕わがは妣ははの國根くにねの堅洲かたす國くにに籠かまらんとおもふがからに哭なく」とまおしたまひき、こゝに伊邪那岐の大神神、大おほく忿いかして詔みことりたまはく「然しからば汝いませは、この國にはを住すまり」と詔みことりた

まひて、すなはら神逐ひに逐いたまひき。

伊邪那岐命が定めた三権のうち物質生産を分担していた須佐男命は考えた。「今迄姉上が授かった言霊の原理を物質の面に応用することで生産の仕事を担当して来た。然しよく考えてみると、物質には精神の原理とは性質を異にした別の法則があるに違いない。これからは父上から決められた方法ではない別の法則の研究に専心することにしよ」と。そして自分に命じられた分担の仕事をしなくなつたのであった。

「八拳須心前にいたるまで啼きいさちき」とは誠に巧妙な呪示である。精神の法則である天照大神の言霊の原理は考える主体である母音と考えられる客体の半母音、その主客を結ぶ八つの父韻が横に順序よく並ぶ五十音図の横の十音が整っている。その判断力を十拳剣と呼ぶ。それに対し須佐男命が始めようとしている物質研究に於いては、考える主体も考えられる客体も自覚せず、ただ主客間に起る現象だけを追求する学問である。それは八つの父韻のみが問題となる。須佐男命の判断力を八拳剣という。

須は靈気の呪示である。言霊をまた霊という。八拳剣の

判断力によって物質の変化の法則を研究するのが科学である。啼きいさちき、は涙を流し泣いたことを、言葉を探し求めて鳴いたに掛けてある。研究とは道理を追求して最後に言葉としてまとめることである。心前とは心に納得するまで、の意。「八拳須心前に至るまで啼きいさちき」全部で物質の変化の法則を納得出来るまで追求した、の意となる。科学的研究は対象となる物質を何処までも分析・破壊することから始まる。分析・総合することで物事の性質は明らかになって行くが、総合された物は、その次にはまた分析・破壊されて行き、細分化は止まることを知らない。科学研究の宿命である。その状態を古事記は「青山は枯山なす啼き枯らし、河海は悉に泣き乾しき」と形容している。まるで今日日本で見える乱開発による公害を予言する様な文章である。

その時まで道徳的実践智の調和の世界であった高天原日本に全く異なつた人間の思考が乱入したのだった。社会的混乱が起こつた。「ここを以ちて悪ぶる神の音なひ、狹蠅なす皆満ち、萬の物の妖悉に発りき」と古事記は形容している。

高天原における三貴子の三権分担を定めた当人の伊邪那

岐命は須佐男命に尋ねた。「お前は分担を定められた高天原での仕事をせずに、今迄なかつた事を何故始めたのか。」須佐男命は答えた。「私は母である伊邪那美命のいらつしやる客観世界の研究がしたいのです。」根の堅洲国とは音の片方が静まっている国という意である。音の片方とは主体意志である伊邪那岐命の陽音(チキシヒ)とは反対の、客体意志である陰音(シリイニ)の静まっている伊邪那美命のいる半母音のことである。科学の研究は飽くまで客観世界(半母音)を対象とする。

この須佐男命の願いを聞いた伊邪那岐命は大いに怒った。自分が知らない世界を研究したいと自分の子が言い出したのである。しかし考えてみると、それも人類の発展にとってやらなければならぬ仕事であることに違いない。人間の主観世界の研究は既に完成され、言霊の原理として世界の統治に活用されている。しかし客観世界はまだ未知のもので、人類の研究のメスが入っていない。息子の願いももっともな事ではある。

そこで伊邪那岐命は須佐男命に次の様に告げたのであった。「お前の願いはよく考えて見ればもっともな事である。しかし客観世界の研究には破壊分析が付き物であり、この

調和のとれた高天原日本でその研究をやることは適當ではない。お前がどうしても、というのなら、その研究は外国(黄泉国)に行つてやりなさい」と。かくて須佐男命の高天原日本よりの追放が決まつたのであった。

それは三権分担して仲良かった三貴子の長い離反であつた。姉の天照大神と弟須佐男命は、片や主観世界の言霊原理の保持継承者として、もう片方は客観世界の真理の探求者として、また片や高天原日本の統治の主宰者として、もう片方は外国における求道の放浪者としての道に、それぞれ別れ離れて暮らすことになつたのである。

須佐男命は高天原日本を去つた。何時の日か、自らの目指す客観世界の探求を完成させ、再び主観世界の姉君と相会う日の到来を夢見ながら……。

初期の物質科学研究集団としての須佐男命学派の日本出發は、多分今より四千年以上前のことと推察される。その集団は日本を離れて初めに朝鮮にわたり、壇君国を建設した。次に今の中国の東北部に進み、そして中国に、更に世界各地に移つて行つた。彼等の研究は初めのうちは精神原理の物質への適用の域を出なかつたが、次第に物質科学特有の方法を開発して行つた。本草学、東洋医学、初期数学、

天文学等次第にその研究の成果を表す様になったのである。

千年の歳月が流れた。今より三千年程前、高天原日本の朝廷に於いて人類世界の文明を創造して行く方策を転換する決定が下された。それまで日本における言霊の原理を鏡として栄えて来た世界の精神文明の時代を終了させ、人類の第二の文明である物質文明を發展させる方策に切り替えることとなった。ささやかではあったが發展しつつあった物質科学の研究の促進のために、世界を一時的にはあるが生存競争の坩堝くわうの中に投入することが必要となったのである。物質科学は競争社会に於いて最も速く進歩する。そのため、その時まで盛んであった日本より世界各民族に向けた精神文明の輸出を停止する手段がとられたのである。

高天原日本より世界各地への精神文明の輸出が停止された結果、世界の各民族・国家にとって精神文明の中心であった高天原日本の存在は、年月の経過と共に次第に遠いものになって行った。今会報の最初挙げた列子の文章に「渤海の東、幾億万里なるを知らず、大壑たがく有り……」と書かれた如く、中国にとっても高天原日本と精神文明の鏡である

言霊の原理の存在が意識の外の遠いものと思われる様になったのである。世界中に民族対民族の、また民族内部間の戦争が起こり始めた。平和で心豊かな調和の時代が存続していたという記憶は薄れて行き、何時の間にか事実存在していた精神文明の時代がユートピア的願望の神話・伝説として語られるようになって行ったのである。

中国に於いて七夕の祭りが語られる様になったのもその頃のことである。「織女と牽牛の二星が七月七日の夜、天の川の東西に向き合う年に一度のお祭り」とは、先に示した高天原日本に於ける天照大神と須佐男命という人類の精神文明と物質文明のそれぞれの旗手の別離と、将来必ずこの二人の旗手が相携えて第三の文明を創造して行く理想の時代の到来を渴望することを表徴するお祭りなのである。

七夕伝説が創られた背景は以上の如くであるが、これより伝説の内容と細目の説明に入ることしよう。これによって七夕のお祭りが日本に由来していることがお分かり頂けると思う。

織女と牽牛の二星の名前の解説から始めよう。織女とは日本神道の天照大神のことである。古事記に「天照大神の忌服いみはたぎ屋にましまして神御衣かみみそ織らしめたまふ時に……」と

図 036-B

天津太祝詞音図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ									イ
ヱ									エ
ヲ									オ
ウ									ウ

ある様に、神の衣を織っていらっしやる神である。神の衣とは空間を横糸にとり、時間を縦糸にとって織りなす人間の心の経緯、人類の歴史のことである。

度々書くことであるが、人間の五つの基本性能である欲望(言霊ウ)、経験知(オ)、感情(ア)、実践智(エ)、生命意志(イ)のうちの言霊エの実践智(この領域から社会・世界の道徳・政治活動が展開する)の精神構造を五十音の言霊で表した図を天津太祝詞音図という(図 036-B 参照)。その精神構造を実践の鏡として神格化したのが天照大神である。

牽牛とは須佐男命の表徴である。牽牛とは牛を引く、と書く。牛(ウシ)のウは人間の五性能のうちの五官感覚による欲望の宇宙である言霊ウであり、牛のシは今・此処に静まる韻である。牛を見ていると宇宙の感覚エネルギー

がそこにどっしりと静まり据えられている如く感じられる。大和言葉「牛」の語源である。

その五官感覚と欲望の宇宙から現出して来る社会現象は産業・経済であり、科学である。その社会活動の典型となる人間の精神構造を五十音言霊の配列で表した音図を天津金木音図と呼ぶ(図 036-C 参照)。日本人誰もが幼児に学校で教えられるアイウエオ五十音図がそれである。その音図で示された精神の原理・法則に名付けられた神名が須佐男命である。須佐男命とは七夕で牽牛と呼ばれる如く、言霊ウの欲望の宇宙から現出さ

れる科学・産業の社会を牽引して行く統率原理に名付けられた神名である。次に七夕の「七月七日」の由来について考えてみよう。織女星は初秋の頃天の川の辺りに現れるといわれる。初秋の頃を殊更に七月七日と限ったのは七七で四十九の数に意味があるから

図 036-C

天津金木音図

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ									イ
ウ									ウ
エ									エ
ヲ									オ

天津磐境

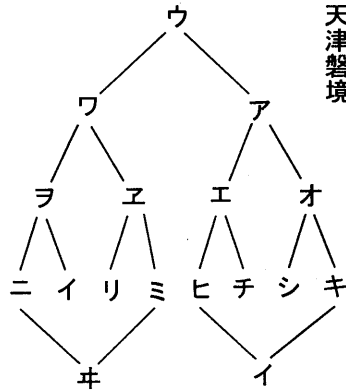


図 036-D

である。それはどんな意味か。

中国から昔伝来したものの一つに易というのがある。今では大道易者に見るように人生相談的な占の方法とのみ思われているが、本来は数千年以前の聖王の一人に数えられる伏羲が原理を作り、後に孔子がその哲学的理論によって解説した、と伝えられる人間の精神構造の原理なのである。更にこの易を日本の言霊学の立場から検討すると、易とは日本の古神道で天津磐境と呼ばれる人間の精神の先天構造を示す原理と、天津神籬と謂われる人間精神の完成された全構造の原理が、数と哲学概念に置き換えられて中国

易の太極図

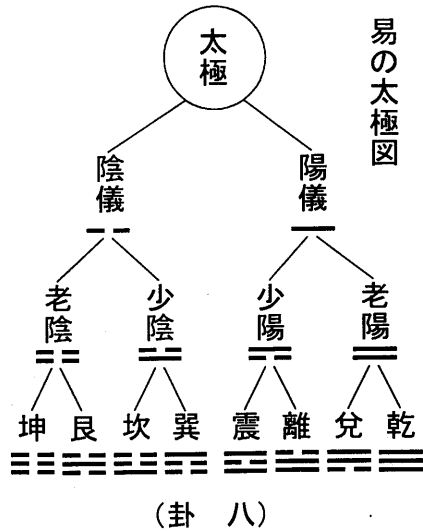


図 036-E

父韻の概念化であることが明らかに了解されて来る。何故ならヒチシキミリイニの八父韻は事実実体であり、その概念的説明が乾兌離震巽坎艮坤の八卦なのであり、実体が先に存在して初めてその説明が可能となる、というのが道理だからである。

易占いに於いては五十本の筮竹を用いるのだが、初めにその五十本から一本を抜いて、占いの中心本体である太極に象るので、実際に運用する筮竹は四十九本である。この操作を易では「大衍の数五十、その用四十九」と表現して

にもたらされ
たものである
ことが明らか
になって来る
(図 036-D、036-E
参照)。

例えば易で
謂う八卦とは
言霊学の創造
意志のリズム
である八つの

いる。七夕の七月七日とは七七、四十九の易の運用数によつてその元の五十個である言霊の数を表徴しているのである。七月七日に織女・牽牛の二星が会う、とは、言霊の原理が再び人類の意識に甦つて来た時に、精神と物質の二大文明がお互いに完成された姿で比較照合される、という意味の予言である。

次に織女、牽牛二星が出会う「天の川の辺り」の天の川とは何を表徴しているかを考えよう。五十音図を頭に画いて頂きたい。向かつて右の五母音は純主体の宇宙である。向かつて左の半母音は純客体宇宙である。言霊の原理は純主

体宇宙の究極の法則であり、現代科学は純客体の真理である。人の心の流れは川上の母音から川下の半母音に向かつて流れ、物事を創造する。七夕の天の川はこの心の流れを表徴している。心の流れは小にしては一人の人の一生であり、大にしては人類の長い歴史でもある。

この心の流れについては、キリスト教の聖書創世記によく表現されている(図

036-F参照)。

図 036-F

知 識 の 木	ワ	ンソビ	芸術	ア	生 命 の 木
	ヲ	ンホギ	科学	オ	
	ウ	テラフユ	産業	ウ	
	エ	ルケデヒ	道徳	エ	
	キ		言霊	イ	

(キリスト教は言霊の原理を欠く)

「エホバ神エデンの東の方に園を設けてその造りし人を其処に置きたまへり……またその園の中に生命の樹および善悪を知るの樹を生ぜしめ給へり。河エデンより出でて園を潤し、彼方より分かれて四の源となれり……第一の名はヒソンという……第二の河の名はギボン……第三の河の名はヒデケル……第四の河はユフラテなり……」

高天原日本の言霊原理による精神文明の世界各地への輸出が停止されてから約五百年の後、わが日本に於いても言霊の原理の国家政治への適用が停止されることとなり、精

神文明より物質文明を主眼とする国家が現出する。神倭皇朝の建国である。更に下つて五百年余、言霊の原理は世の表面から完全に消えることとなった。崇神朝による神鏡の同床共殿制度の廃止である。以後高天原日本から高天原の名が消え、外

国の文化を輸入することを国是とする国家に変貌した。この国においても過去における輝かしい精神文明の時代は夢の如きものとなり、単なる神話として語り伝えられることとなった。その結果中国から七夕の伝説も輸入されたのである。

大空の彼方、壮大な天の川の流れを挟んで相向かう織女と牽牛の二星の麗しいきらめきを想像して頂きたい。同時にその広大無限の宇宙のドラマに言寄せて、戦乱のドン底からやがて何時の世にか平和で豊かな人類社会が実現することを渴望して創られた中国の七夕のお祭り・伝統が、実は私達日本人の祖先である皇祖皇宗が人類の文明創造のために計画した政治の経緯なのであることを、潜在意識の底から想い起こして頂きたいものである。

一九九一年代の現在の世界は、自分独自の物質法則を求めて、高天原日本を出発して行った須佐男命が、数千年の辛苦の末に、物質科学文明の完成とそれによる世界再統一を達成しようとする寸前の時である。

織女・牽牛の二星に表徴され約束された人類の精神と物質の二大文明の原理が、双方とも完成された姿で、人類の文明創造の長い歴史の変遷の末に、初めて輝かしい逢瀬を

迎える日は間近である。織女と牽牛、天照大神と須佐男命、精神と物質とは人間生命という掌(たなごころ)・田(のの心)の表と裏なのである。裏と表が共に相携えて創造する新しい文明の世紀は始まろうとしている。

【収載】第三十六号(平成三年六月)

●神様の戸籍 その十一

諏訪神社

諏訪神社は日本全国に支社・末社の多い神社である。その本社は長野県諏訪湖近くにある。上社・下社に別れ、上社は上諏訪市(JR中央線上諏訪駅より六キロメートル)に、下社は下諏訪町に在る。

祭神は建御名方神たけみかたとその妻神である八坂刀売神やさかきとめ。更に事代主神ことしろぬしを配祀する。日本最古の神社の一つに数えられている。この神社は拝殿はあるが本殿がない。背後の山を御神体と称している。

諏訪神社の祭神、建御名方神についての記録は古事記神代卷の「国譲り」の章に載っているが、日本書紀には全くない。古事記の神代卷は言霊原理の教科書・手引き書であり、

日本書紀はその補足の書である。その見地から言えば、古事記にあつて日本書紀にその記述がない、というのは珍しいことである。古事記の撰者である太安万侶の言靈学に基づく配慮による挿入説話であることも想像されるのである。

まずここで建御名方神の記録された古事記の文章を引くことにしよう。古事記の「国譲り」の章とは、天孫邇々芸尊がこの日本(古名は豊葦原瑞穗国、中つ国)に降臨するに際して、その時まで日本を統治していた大国主命に、天孫へ統治権をお返し申し上げるよう説得する(言向け平し)経緯を述べた章である。以下その抜粋である。

……そこで天之鳥船の神を建御雷の神に添えて遣わされました。お二方の神は出雲の国の伊耶佐の小浜に降りて十拳剣を抜いて波の上に逆様に刺し立てて、その剣の切先に安座をかけた大国主命にお尋ねになるには「天照らす大神、高木の神(高御産巢日神)の仰せ言で問いの使いに来ました。あなたの治めている葦原の中つ国は我が御子の治むべき国であると御命令がありました。そのことについてあなたは どう 思いますか」

大国主命が答えますには「私は何とも申すことは出来ません。

私の子の事代主の神が御返事申し上げるでありましょう」と申しました……。

依つて天之鳥船の神を遣わして事代主の神を呼んでお尋ねになつた時に、その父の神様に「この国は謹んで天の神の御子に献上なさいませ」と言つて……。

「この他にまだ申すべき子がありますか」と大国主命に尋ねますと「私の子にはこの他に建御名方神がいます。この神以外にはございませぬ」と答えました。

この時、建御名方神が千引きの石を手の上にさし上げて来て「誰だ、わしの国に来てヒソヒソと話しているのは。それなら力くらえをしよう。わしが先にその手を掴むぞ」といいました。そこでその手を取らせますと、立つている氷のようであり、剣の刃のようでありました。そこで恐れて退きました。今度は建御名方神の手を取ろうと言つてこれを取ると、若い葦を掴むように掴みひいで、投げうたれたので逃げて行きました。

それを追つて信濃の国の諏訪の湖に追い攻めて、殺そうとなさつた時に、建御名方神の申されますには、「恐れ多いことです。私を殺さないで下さい。この地以外には他の土地には行きません。また私の父大国主命の言葉に背きません。この葦原の中つ国は天の神の御子の仰せの如く献上いたしますよう」と申しました。……

以上少々長くなつたが、建御名方神に関する古事記の記録である。この建御雷の神の説得（言向け平し）があつて天孫邇々芸尊の日本への降臨の準備が整うこととなつた。これを古事記は「国譲り」という。

右の神話を読むと、一見大昔の出来事と言つていられるように思える。しかしよく考えて見るとそうとばかりは言えないのである。古事記の神話は昔のことを言つていられるのではなく、常に「今・此処」のことを説いていることに気付く。

「国譲り」が行われるのは「今」であり、「此処」である。何故なら古事記の神話は言霊の原理の手引き書・教科書なのであり、言霊の原理は人間の生命の精神面の法則なのであつて、生命の法則であるからには、常に今・此処に働いて人類の歴史を創造しているという事が出来よう。それ故今起こらうとする事件に対する予言書ともなり得る。この事情を心に留めながら、建御名方神の検討に入ることとしよう。

先に「白山神社」の項で明らかにしたように、天照大神・月読命・須佐男命の三貴子のうち、五官感覚による欲望の世界（言霊ウ）を分担する須佐男命は、母親伊邪那美神のいる根の堅洲国（客観世界）の研究をするため高天原日本

より外国に出て行つた。その集団の社会の中での活動は物質科学の研究と産業・経済の振興、並びにそのための政治である。そしてその指導精神の日本に於ける神名を大国主命というわけである。

その言霊ウに基づいた大国主命の世界に、新たに天照大神の言霊原理による道徳の政治（言霊エ）を始めようとするためには、大国主命に主権を返上するよう説得することが前提となる。社会全体の精神革命である。古事記「国譲り」の章はその説得交渉の方法を明らかにするのが目的である。かく見ると、古事記「国譲り」の章が単なる神話でなく、神話の形を取つた言霊原理による歴史創造の予言書である、とすることが了解されるであらう。

天照大神の使いとして説得（言向け平し）の役に当たつたのは建御雷神と副使として天鳥船神の二神である。この二神はどんな神なのであろうか。

建御雷神は古事記「黄泉国」の章に「次に御刀の本に着ける血も、湯津石村に走りつきて成りませる神の名は、……次に建御雷の男の神。またの名は建布都の神、またの名は豊布都の神。……」と書かれている神である。建は田気の意である。五十音言霊図は田の形をしている。その中に

生じる気とは言霊のことである。雷とは五十神土の意で五十音言霊を粘土板に刻んだもの。また雷は自然現象であるが、人間の発する音声も実は「神鳴り」であって、これに五十個の要素と五十の基本の運用法がある。この要素と運用変化とをまとめて主体的に十拳の剣で整理・判断して得た生命の最高調和の精神構造の組織を建御雷神の神と名付けたのである(建御雷神の男の神と建御雷神との相違については拙著「古事記と言霊」に詳しい)。

次に副使となった天鳥船神は「神々の生成」の章に「次に生みたまふ神の名は、鳥の石楠船の神、またの名は天の鳥船といふ」とある神であり、言霊ナを表徴している。鳥とは私と貴方の間を言葉が飛び交う姿である。古神道で鳥の名前が出て来れば、すべて言霊の表徴である。石楠は五十葉を組んで澄ます(楠)こと。船は神を祭る御船代である五十音言霊図のことである。五十音を組んで澄ますと物事の真実の姿である名(名前)が出来る(詳しくは「古事記と言霊」参照)。

五官感覚に基づく産業経済と物質科学研究をこととする社会の統治権を返還するように説得するのに何故主体的に把握された五十音言霊の原理(建御雷神)と物事の真実の姿

である名前を表す言霊ナ(天鳥船神)を適当とするのだろうか。その理由はまた「国譲り」の文章の中に示されているのである。

「十拳剣を抜いて波の上に逆様に差し立てて、その剣の切先に安座をかいて大国主命にお尋ねになる……」とある。自己自身である母音、貴方自身である半母音、それらに挟まれた八つの父韻計十の言霊の自覚が整っている判断力を十拳剣という。即ち建御雷神の判断力である。その十拳剣を「波の上に逆様に立てて、その剣の切先に安座をかいて」とある。「剣を立てて」とあれば、その剣の威力を正常に發揮することである。「逆様に立てる」となると、威力を發揮するとしても逆の作用であることを示している。

逆の作用とは何か。それは相手が自分のことで分らないもの、どうしてよいか迷っているものを質問させて、それを言霊の原理で悉く解答を与えてやることである。普通に「剣を立てる」とは言霊の原理の真理を説くことであり(演繹的)、「逆様に立てて」とは言霊の原理そのものを説くのではなく、相手の事情に応じて原理に照らしてその不明の点を解決してやる(帰納的)ことである。そしてその際に天鳥船である言霊ナ(名前)が必要となるのである。

人が、または社会がどうしてよいか分からずに迷うということはどういうことなのだろうか。それは物事の真実の姿が見えない為である。真実の姿を見つけてそれに合った名を与えることによって人は一つのことを解決した、ということになる。真実を見ること、それは建御雷神の五十音言靈図に照らす判断力であり、それに正當な名を与える作業は古事記にある鳥の石楠船の神の役目である。十の理の判断力で五十音言靈を組んで澄まして、物事の内容を表す名(船)を確定することである。二神の働きが両々相俟って如何なる難問をも解決して余す処がない事になる。

以上述べた説得者である二神に対して説得される方の神々は如何なる意味を持つのであろうか。

第一人者である大国主命については前に説明した。人類の第一文明である精神文明に次ぐ第二の物質文明時代の指導精神である須佐男命の日本に於ける総責任者の名が大国主命である。この神に子が二人いる。事代主神と建御名方神である。神々の話であるから、子が二人ということは、大国主命の支配する精神の領域を二分して、二つの異なった精神分野であるという事でもある。

まず事代主神から始めよう。事代主神の事とは事物の現

象のことである。代とは苗代・靈代等の言葉があるように、物を育てたり、入れたりする容物のこと。主は主人公・責任者の意。事代主神全部でこの物質文明社会即ち産業・経済・政治の指導精神ということになる。例えて言えば総理大臣といったようなものである。

次に建御名方神はどうか。建御名方神の建は田気であり、田の形をした五十音言靈図に生える気、といえは言靈のことである。御名とは何か。言靈は全部で五十個ある。精神現象を細分して行き、もうこれ以上分けることが出来ない処まで来て、五十個の要素を発見し、その五十個の要素にアイウエオの五十音の単音をそれぞれ当てはめて名を付けた。その掛替のない名が御名である。

以上の建御名までは全く純精神界の言靈の原理のことを言っているように見える。しかし建御名方神は物質文明の支配者である大国主命の子であることに注目しなければならぬ。建御名の次に方の字がついている。方は片の当て字である。精神界の要素である言靈の御名とは全く対照的な(片)御名、といえは物質を構成している要素である原子、その他原子核内の各要素のことを指していることが理解されるであらう。

建御名方神の神話が創造された古代は既に言霊原理により人類の精神文明の栄えていた時代であった。同時に物質文明をこれより振興させる必要を感じ始めた時代でもあったであろう。その時代に、将来起こるべき物質研究がその究極において、精神の研究が言霊を発見した如く、物質の究極の要素を発見することを予想して、その物質の要素に建御名方という名を考えたに違いない。

建御名方神とは物質科学研究の精神、またはその責任の霊統に名付けられた名前である。そのことを妻神の名、八坂刀売神が証明している。八坂刀売は八性求めるの意である。科学的研究の場合、研究者の純主体、純客体の自覚は捨てられ、現象変化の八つのリズム（八性）のみが研究の対象となる。

この神話が創られた時代には、物質研究の結果については唯予想があるだけで、実体は不明であった。それ故諏訪神社には拝殿があつて本殿がない、という事の理由もそこに見出すことが出来よう。事代主神が物質文明社会の総理大臣とするならば、建御名方神は科学技術庁長官または科学アカデミー総裁といったところであろうか。

以上大國主命の二人の子の、物質文明時代における役割

・分担について説明した。言霊ウの欲望性能の社会的活動である産業・経済と、それらを基盤とする政治を事代主神が行い、言霊ウの経験を学問として理論体系にまとめて行く経験知の言霊オである科学研究の分野は建御名方神の分担であった。

初め建御雷神と天鳥船神の事代主神への「事向け平し」は比較的順調に行われたことが古事記に記されている。事代主神は「恐し。この国は天つ神の御子に献りたまへ」と即座に応じているのである。須佐男命・大國主命と続く神の霊統はこの世界に生存競争の社会を現出させ、それを基盤として物質科学文明を興し、それより得た富によって全世界を統一することを使命とする。その統一が達成されようとする時、統一以後の世界を更に永遠の繁栄の中に置く為には、彼等の得意の性能である言霊ウ（欲望）と言霊オ（経験知）のみでは事足りないのだ、ということ薄々は感じている為であろう。それ故言霊ウオアエイの五段階の性能を自由に運用する高天原の使者の前には、比較的承服が早いこととなるに違いない。

しかし物質科学の探査者である建御名方神の態度は頑迷である。高天原よりの使者建御雷神・天鳥船神の前へ登場

する仕方が「千引の石を手の上に差し上げて来て、誰だ、わしの国に来てヒソヒソ話をしてるのは……」である。現在経験知である科学研究の成果は目覚ましいものがある。その世の中は物質的繁栄を謳歌している。そこに今迄聞いたこともない精神の原理を持って来て、国を渡せとは何たる訳か、ということである。

元来、物質の探求は大昔高天原の精神原理の他に物質特有の法則があるに違いない、という発想から須佐男命が高天原を飛び出し、独自の方法で研究を始め、ここに漸く完成させた物質科学である。その完成された物質科学の真理は、精神の究極真理である言霊の原理と人間生命の表と裏の関係で比較対照されるべき科学独特のものなのである。そんな簡単に一方の真理に頭を下げてたまるか、というわけである。そこで両者の間に力くらべが始まることとなる。

人は自己反省に基づいた宗教体験に入るとすぐに気が付くことがある。例えば「人を裁く勿れ」と教えられる。そうなるうと務める。けれど完全にそうなることは困難である。口では言わなくても、心の中で人を裁いてしまう。そして人を裁く原因は自分が最も大切だと思っっている心の中の信条・信念の存在なのである。この信条や信念は経験知によ

って身に付けたものである。経験知を仏教でカルマといい、業と呼ぶ。そして科学的知識も広い意味でこのカルマと作業というものの産物なのである。

科学という字を御覧下さい。科まがの学問と書く。科とは罪と同じ意味である。また建御名方神の引込んだ諏訪湖は信濃の国(長野県)にある。信濃は昔科野しなまと書いたこともあった。人間社会の中で科学技術だけが独走すれば、公害だの原爆戦争の危険が増大する事となる。

建御名方神は高天原からの使者の前に登場する時、千引の石を持って現れた。千引の石とは道ちを持って境を引く石(五十・言霊)の意で、清浄な精神界の高天原と善悪混合の現社会との間に引かれた言霊特に言霊子音のことであるが、建御名方神の持つ千引の名はそうではなからう。純粹の「物質」とは何かを示す物質の原子核内構造の解明に裏付けられた物質原子のことを予め指しているのであろう。この線引きによってニュートン物理学と現代原子物理学との間の区別が明らかになるそうである。

建御雷神と建御名方神の力くらべが始まった。近代科学が究明した物質の真理は日本古来の精神的真理である言霊の原理に匹敵する人類第二の宝である。けれど三千年の暗

黒の中からこの世の中に再び甦って来た精神の原理言靈布斗麻邇と、完成された物質科学の真理とが、双方手を携えて新しい文明世界を創造して行くことは人類歴史の当然の道なのである。しかもその創造活動の主体はあくまで精神の側にある。両者の力比べは建御名方神の完敗に終わることとなる。

建御名方神は逃げて「科野しなのの国の洲羽すわの海（長野県諏訪湖）」に行った、とある。その上で誓った言葉がまことに意味深い。「畏れ多いことです。殺さないうで下さい。この諏訪の地以外には決して行きません。わが父である大国主神や、兄の事代主神にも逆らいません。高天原の御命令のままにこの国は献上します」である。

その誓いとは「この諏訪の地以外には決して行きません」である。自分独自の真理を求め、高天原を去って外国への放浪の旅に出て、物質文明建設を目的とする集団の大眼目は主佐すさである。主である言靈原理による精神文明（主）を究極に於いて助ける（佐）の意である。この責任靈統を須佐男命すさのわかみことという。その物質文明の中心となるのが物質科学である。その研究の究極の精神を表徴して、古事記は諏訪と呼ぶ。主和すわの呪示である。完成された科学の原理は、同

じ人間生命の表と裏として精神の真理である言靈の原理（主）と協調（和）して人類の新しい文明時代を建設して行くことに次の時代に於ける存在理由を見出さなければならぬ。自分だけでは科学の独走となり、人類は滅亡の運命に陥るであろう。建御名方神は決して諏訪（主和）の地から他処へ行ってはならないのである。

以上が長野県諏訪大社の祭神、建御名方神にまつわる古事記神話の言靈学的な、また歴史の現実的な意味である。大国主命・事代主神並びに建御名方神を説得（言向け平し）に成功して、建御雷神は天照大神の下に「返りまい上がりて、葦原の中つ国を言向け平しし状さまをまをしき」と古事記は記している。人類の第三文明時代の夜明けの到来である。

人類の歴史が始まって一万年が経つ。その間、人類は二つの仕事を成し遂げた。たった二つである。その一つはアイウエオ五十音言靈の原理を中核とした精神文明であり、もう一つは今や完成されようとしている物質科学を基盤とした物質文明である。言靈の原理は太古に於て発見され、人類の精神文明を創造し、今より三千年前、物質文明の創造促進のための方便として一時的に隠された。以来三千年、人類は生存競争場裡に今日見る如き物質文明を作り上げて

来たのである。

物質科学自体は、如何にそれが高度にハイテク化されたものであっても人間社会の今・此処の方策を決定し得る能力を持ってはいない。物質文明が永遠に人類の幸福に役立つ存在となる為には、精神文明の中心である言霊の原理との協調に俟ねばならない。建御雷神の大国主神・事代主神と建御名方神への言向け平しの際は、実際の人類の歴史の上でどんな光景を展開するであろうか。その時期は眼前に迫っている。聖書は言う。「主の道を直くせよ、天国は近づけり」

(この項終わり)

【収載】第三十七号(平成三年七月)

●梅雨の晴れ間に

会報「言霊研究」が今三十七号で発行四年目に入りました。発刊以来の読者の皆様の御指導・御鞭撻に心より感謝申し上げます。

ここ三年間、世界は正に激動の時代でありました。人々が昨日の悲しみ、喜びに浸る間もなく、今日は新しい変動の渦に巻き込まれる、といった時代になりました。それは

まるで神様が、若しくは悪魔がやり残した仕事を最後の一日で何もかもやってしまえ、と眼の色を変えて急いでいるように見えます。

唯、心許ない事には、人々はこの速度を増した渦巻きの流れが結局何処に流れ込もうとしているのか知らない事があります。眼前に起こっている目まぐるしい事態に対して、その分析と対応に魂を奪われ、流れの行く先など考えている暇がない、といった状態です。現在最も必要なことは、良きにつけ悪しきにつけ今の変動が全体として何処に行き着こうとしているのか、更にその終着点を迎えた時、人類は更に新しい時代をどのように築いて行けばよいか、をはつきり知ることでありましょう。

明治の時代、大本教祖の出口ナオというおばあさんが世に出て、日本の将来を占う数々のお筆先を遺しました。その予言の通り日本は世界大戦を自ら引き起こし、敗戦の憂き目を見ました。予言の大半は既に現実のものとなって過ぎて行きましたが、今後の世界を占う予言がまだ残っています。「世の中の建替え、建直し」、「九分九厘の一厘の仕組」、「梅で開いて松でおさめる神国の到来」のお筆先です。

教祖の跡を継いだ出口王仁三郎氏はお筆先の「日本の建

替え、建直し」の第一歩として、縁の下から当時の陸海軍将校を扇動して太平洋戦争を起こし、日本を敗戦に導きました。旧大日本帝国は滅亡しました。「建替え」の完成です。

それなら大本教祖が予言した「建替え」の後の「建直し」とは戦後出現した経済大国日本のことなのでしょいか。そうではないようです。何故ならお筆先は「一厘の仕組み」また「梅で開いて松でおさめる神の国の到来」を予言しているからです。戦後復興された経済大国日本は、物質の国・金権力の国ではあっても、神の国とは決して言えない代物であります。

「一厘の仕組み」とは、戦後の日本の経済復興が当の日本国民に物質的繁栄をもたらすだけでなく、その日本が完成された人類の物質文明の世界の中心地となって世界が統一された時、その九分九厘の統一の中から、本来日本の国民の心の中に秘蔵されている一厘の精神の原理の力が初めて発動されることになること、を謳ったものなのです。その精神の原理とはお筆先が「梅で開いて松でおさめる……」と形容した言霊布斗麻邇の天津磐境のことです。それは人間がホモ・サピエンスの種を守る限り永遠に変わることのない人間精神の頭脳の思考構造を示しています。

世の中の将来をこの様に靈的に大雑把にお話ししますと、ほとんどの人は頭ばかり大きくなった精神主義者の夢物語と思われることでしょう。けれどヨーロッパに於けるベルリンの壁の崩壊、ロシア共産体制の変動、悪夢の如き湾岸戦争の決着、日本のバブル経済の消長等、ここ三年の歴史を振り返ると、その回転の速さの異常さに何かデーモニッシュな力が働いている、と思わない方はいらっしゃるでしょうか。その眼に見えぬ力に圧倒されたように人々はその対応に右往左往しているのです。

太古に言霊の原理を発見し、その原理に基づいて世界の歴史を創造して来た本来の日本民族の霊統の継承者である皇祖皇宗の学問の立場から見ると、世界の辿る今後の道、日本がアメリカ・ヨーロッパ・ロシアが、そして中国・朝鮮・アジア・アフリカの国民の行くであろう将来の道はたなごころ掌を指す如く明らかにすることが出来ます。

「言霊研究」会報はそれらの道筋を事あるごとにお知らせして行く方針であります。

皆様の御多幸をお祈り申し上げ、ご挨拶を終わらせて頂きます。有難う御座いました。

【収載】第三十七号（平成三年七月）

●神様の戸籍 その十二

稲荷神社

中国の古書「老子」に和光同塵という言葉がある。日本式に言えば光をなごめ、塵にまみれる、となるであろうか。自己の智徳の光を和らげて現さず、俗塵の間に交じっていること、という意味である。稲荷神社の御祭神の戸籍を調べている間に時折筆者の脳裏をよぎった言葉はこの和光同塵であった。

稲荷神社は日本各地、津々浦々にあり、その数は計り知れない程であるが、そのうち有名なのは京都の伏見稲荷、愛知県の豊川稲荷、それに茨城県の笠間稲荷の三稲荷神社である。

まず三稲荷の所在地から見ることにしよう。京都の伏見稲荷大社はJR奈良線稲荷駅または京阪電鉄伏見稲荷駅の近くであり、豊川稲荷はJR飯田線豊川駅または名鉄豊川稲荷駅下車徒歩五分の処、笠間稲荷はJR水戸線笠間駅下車、稲荷まで直通のバスの便があるが、駅より歩いてもらいほど遠くはなす。

筆者青年時代在学した学校が笠間市の比較的近くにあったので、笠間稲荷神社には現在まで数回お詣りする機会があった。笠間稲荷の御祭神は宇迦之御魂命、創祀は孝徳天皇の代、白雉(白鳳)年間と伝えられている。

京都の伏見稲荷大社には筆者昨年(平成二年)五月参詣の機会に恵まれた。駅前の稲荷神社の門前町を従えた堂々たる白壁朱塗りの大社であった。神社案内によれば御祭神は稲荷大神、配祀神として宇迦之御魂大神、佐田彦大神、大宮能売大神、田中大神、四之大神と書かれていた。創建は奈良時代元明天皇の代、和銅四年という。

豊川稲荷には筆者昨年二月参詣した。前記二つの稲荷神社に比べて豊川稲荷は全く様子を異にしている。先ず第一、この稲荷は神社本庁発行の全国神社案内にその記載がない。豊川稲荷は神社ではないのである。「それでは」と全国寺院一覧を調べて見ると、あった。曹洞宗妙厳寺、寺内に安置する茶吉尼天を稲荷として崇め祭ると書かれている。これを見て筆者は驚くというよりは戸惑ってしまった。稲荷といえは宇迦之御魂とはかり思っていたのだが、とんでもない飛躍した現実に行き当たったのである。

そこで茶吉尼天とは何か、を調べて見た。辞書に次の様

に説明されていた。「空行母と訳す。インド左道派密教の神で、人の死を六ヶ月以前に知り、その心臓を取って食うという。仏教に混入して胎藏界の大黒神の夜叉とされ、またわが国では古来、稻荷の神体として信仰され、三河豊川稻荷のものが最も著名。」何とも奇怪至極な話ではないか。

同じ稻荷でありながら伏見と笠間も御祭神が稻荷大神や宇迦之御魂であるのに、豊川は茶吉尼天なのである。どうしてこの様な変異が現実のものとして起こったのであろうか。

そこで茶吉尼天についての辞書の説明の中の用語を片っ端から調べて見ることにした。すると次の様である。

胎藏界〔大日如来の智の聚集を金剛界というのに対し、大日如来の理の方面を胎藏界という……〕

大黒神〔ビルシャナの化身で暗黒界の闘いの神。本邦では七福神の一つとして、あるいは大國主命と同一視されて民間信仰となった。〕

夜叉〔捷疾・勇健などと訳す。八部衆の一。地上または空中に居り、容姿醜怪で威力があり、人の精気を奪い、または正法を守護する鬼神。〕

ビルシャナ仏〔大日如来のこと。〕

こゝまで調べて見ると、伏見・笠間と豊川の稻荷の共通の關係に光明が見え始めてきた感じがして来る。その關係の詳細は後程お話しすることにしよう。

稻荷神社には狐の石像が数多く置かれている。まるで狐が神社の御本尊ではないか、と見間違えるばかりである。

しかしそうではない。狐は稻荷の神の使いであることを意味している。狐が何故稻荷神のお使いといわれるのか。それは御饌神または大宣都比売神の神名から来ているのである。「けつ」の音が狐(きつね)となったわけである。

以上のことを予備知識として、いよいよ稻荷神社の神様の戸籍調べに入ることにしよう。

古事記の中で天照大神・月読命・須佐男命の三柱の神(三貴子)が誕生する章を見よう。

「この時伊弉那岐の命大く歎げばして詔りたまひし、吾は子を生み生みて、生みの終に、三柱の貴子を得たり」と詔りたまひて、すなわちその御頭珠の玉の緒ももゆらに取りゆらかして、天照大神に賜ひて詔りたまはく、「汝が命は高天原と知らせ」と、言依やして賜ひき、かれその御頭珠の名と、御倉板笮の神という……とある。

創造神である伊邪那岐神は五十個の言霊を操作運用して最後に人間が社会活動をする為の三つの基準・規範となるものを手に入れた。天照大神(実践智・歴史創造の鏡)、月読命(宗教・哲学・芸術の心)、須佐男命(産業・科学の精神)である。そのうち天照大神だけに言霊の原理を与えた。御頸珠の珠とは言霊のことである。この御頸珠のことを御倉板拳神と呼ぶ。

御倉板拳とは文字通り倉の棚の意である。その棚は言霊で出来ている。天照大神とは言霊を並べて構成した人間の実践智の理想構造のことである。天照大神を表徴する八咫の鏡に映せば物事の善悪、成否はすべて明白となる、と言われる。そのことをもつと正確に表現すると、五十音の言霊で構成された人間の行為の鏡に照らし合わせて、これは五十音言霊のうちのAとBから成立している、あればCとDからだ、と人間精神の産物の一切の成り立ちと実相を明らかにすれば、その物事の善悪、当否は正確に判別することが出来る。と同時にそれら一切のものが人類社会に正しく貢献できる様その時処位を定めることが出来る。御倉板拳とは人間が創造した一切のものをのせる棚なのである。

五十音言霊で構成された人類歴史創造の精神構造を祭った宮が伊勢神宮の内宮である。天照大神を祭つてある。天照大神は歴史創造の実践智の神であるから、人間の生産するもの、それが精神的なものであれ、物質的なものであれ、それら一切は歴史創造のための材料であるということが出来る。いわばそれら一切は天照大神が召し上がる食事の材料である。その材料を順序正しく「これは甘いもの、これは塩辛いもの……」と五十音言霊で出来た棚に並べて行く宮が外宮である。豊受姫神が祭られている。

豊受姫神の豊受とは十四槽の意味である。十四とはアイウエオ・ワ・キシチヒミリイニの人間精神の先天構造を構成する代表的な言霊の意味。槽は食物の入れ物で、豊受で御倉板拳と同様の意味となる。天照大神の食物はすべてこの豊受姫神によって整理され、料理される。整理されて人類文明創造の役に立つこととなる。

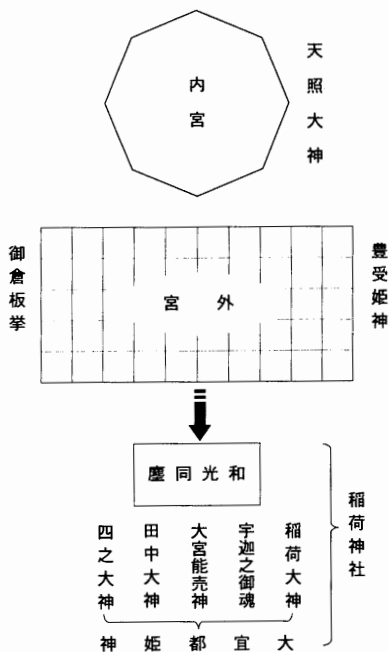
棚の上のせて整理し、料理するのが豊受姫神なら、棚にのせられて料理されるのは何か。それが古事記で大宜都比売神・宇迦之御魂と言われるものである。それは民間で稻荷神とも呼んでいる。その都の原住民は全て言霊子音(ユ)である。

大宜都比売神とは古事記の言霊五十音のうち四十九番目に生まれる言霊コに当たる。言霊五十音の中に、人類が生産する一切のものが並べられて、人類の住む精神の都が完成する。大いに宜しき都を秘めている働き(大宜都比売神)の意である。

大宜都比売神(大気都比売とも書く)はまた古事記の須佐男命の章に蚕・稲・粟・小豆・麦・大豆など農産物の神と書かれている。農業ばかりでなく、人類の産む物心両産物一切、この神の産物なのである。現に伏見稻荷大社の案に「もと五穀を初め全ての食物、蚕桑を司る神。歴史の途中から農業の神より殖産・興業・商業・屋敷神へと拡大した」と書いてあった。

大宜都比売神の次に伏見・笠間の祭神である宇迦之御魂神の説明に移ろう。古事記の須佐男命の系譜の章を見ると、宇迦之御魂神は須佐男命の子とある。須佐男命とは人間の五官感覚による欲望の世界である産業経済・科学(言霊ウ)の指導精神に名付けられた神名である。その子である宇迦之御魂神とはウ(宇)の世界を掻き繰って(迦)物を生む働き(御魂)という意味である。「うか」は食物

図 038-A



の意で、広い意味で物品生産の神である。その産物は全て伊勢神宮の外宮の神、豊受姫神が調理する天照大神の食物を並べる棚(御倉板挙)に並べられる。並べられることよって、その生産物が世の中に正しく貢献する役目と場所を与えられることになる。

以上稻荷神社を構成している神々やその内容について個々に説明して来た。そういった個々の分析だけでは稻荷神社というもののまとまった姿がイメージとして捉えられないであろう。個々の分析されたものは、終に総合されて全

体として真実の姿を現すことが出来る。図 038 A を参照して頂きたい。

伊勢神宮の内宮は人類が歴史を創造して行く上での最高の基準をお祭りした宮である。外宮はその基準である鏡に照らし合わせて、人類が生産する物や心の成果一切を受け入れ、人類歴史を創造して行く上でのそれら成果の正当な役割を決定して行く宮である。天照大神(内宮)と豊受姫神(外宮)は祭る方の主体の神である。

稻荷神社は伊勢の外宮の分宮である。同じ働きの神を祭っている。唯、稻荷神社として分宮される時、伊勢の外宮の豊受姫神はこの会報文章の最初に書いた如く、その光を和らげ町中の塵にまみれその姿と名前を消してしまった。

稻荷神社の真の御祭神は実は豊受姫神なのである。その名前が消えて、伏見の稻荷大社の案内板に御祭神として書かれている神々、稻荷大神、宇迦之御魂大神、佐田彦大神、大宮能売大神、田中大神、四之大神はすべて実の御本尊である豊受姫神によって祭られる方の側の神の名前なのである。

これらの神々が豊受姫神によって天照大神の食物(御饌)として調理される方の神であることは、夫々の神名が

明らかに示している。

先ず稻荷大神とは言霊イである音即ち五十音言霊の容器(槽)に納められ調理され活用されるもの(産物)であるから稲の荷物(稻荷)と書かれる。それらは調理されて五十個の言霊(五十鳴り)上に祭られるので「いなり」と呼ばれる。

五十音言霊図は言霊が集まった都(宮の子)である。その言霊図の棚にのせられ整理されるひとつひとつの人類の産物はその宮の枡の目に入れられる。入れられるものは「大宮の目(能売)」となる。大宮能売大神の名の由来である。

五十音言霊図は田んぼの形をしている。その田の中に入れて祭られるから、田中大神とも呼ばれる。

言霊母音のうちウ(欲望)・オ(経験知)・ア(感情)・エ(実践智)の四母音の精神宇宙は第五の母音言霊イの創造意志によってコントロールされている。言霊によって構成された天照大神の言霊図に懸けられ、各々その時処位を与えられるのは他の四つの母音宇宙から生まれ出たものである。それ故四之大神と呼ばれるのである。唯一つ残る祭神である佐田彦大神についてはまだ明らかではない。これからの研究に俟つこととする。

以上、伏見稻荷大社の御祭神はすべて姿と名前を消して

祀られている豊受姫神によって御倉板挙に並べられる神の名であることが理解されたことであろう。稻荷神社とは伊勢外宮の神が民間信仰となって天下った姿なのである。

稻荷神社のお使いの狐として狐があるのは何故か。天照大神の食物となるものを御饌神みけつといい、大宜都比売神おおいけつひめである。けつの音ねという意味から狐(きつね)が選ばれたのである。現在でも狐のことを「けつね」と呼ぶ地方がある。

次に伏見・笠間と異なり寺院に祀られている豊川稻荷の説明に入ろう。その御本尊は茶吉尼天であり、ある時期より仏教と入り混じって胎蔵界の大黒神の夜叉とされ、我が国では古来、稻荷の神体として信仰された、という。これだけでは何とも奇妙な話で直には納得し難いものであるが、前述の伏見稻荷の御祭神についての記述を参考にして考えてみると、その靈統の關係が明らかになって来る。

「茶吉尼天が胎蔵界の大黒神の夜叉になった」という。胎蔵界とは金剛界との対称であり、仏教で難解な箇所であるが、金剛界が大日如来の智の体用の聚集であるに對し、胎蔵界とは大日如来の智の理の方面をいう、と辞典に見える。金剛界とは大日如来の智慧の運用の領域であるのに對し、胎蔵界とは大日如来の智慧の理論構造そのものを言っている、ということである。

る、ということである。

更に大黒天とはビルシヤナ仏の化身であり、そのビルシヤナ仏とは大日如来のことを指している。とする結局茶吉尼天が大日如来の智慧の守護神となった、ということに落ち着くのだ。

日本の中世、仏教が最も盛んになった時代、本地垂迹説が行われた。日本固有の神々は、仏教の仏が衆生を救うために現れたものである、という説である。そして天照大神は仏教の大日如来の現れだとされた。

以上を総合すると豊川稻荷の茶吉尼天とは、天照大神の守護神であることを仏教的に表現したことになる。これは伏見稻荷の御祭神のそれぞれが、中心の姿を見せない豊受姫神の下に祭られる神々であると同様の形となるのではないか。それは共に天照大神の歴史創造のための材料を納める役割を担っている。すべては稻の荷物なのである。

弘法大師は衆生救済のため、大師誕生の地四国に大師靈場八十八ヶ所を開かれた、と伝えられている。多くの人々が難解な経文を読まずとも、八十八ヶ所を巡礼することによって一人でも多くの魂が救済される簡便な方法を考案したのであった。ところが時が経つにつれて、四国八十八ヶ

所の靈場は日本各地に移され、更に多くの人々が、四国に行かなくても、各地方の靈場を廻ることで救済の便を与えられることとなった。

稻荷信仰についても同様のことが考えられる。稻荷神社の眞の御神体は伊勢外宮の豊受姫神なのである。それが時を経て伊勢信仰が民間化されて分宮され、御本尊である豊受姫神は姿を隠し、名は秘められ、その神によって撰取され、受納される神々が代表として御祭神に納まったのであった。伏見稻荷の御祭神である稻荷大神・宇迦之御魂・大宮能売大神・田中大神・四之大神はすべてこの様な神名なのである。

更に中世に至り、稻荷信仰は仏教の分野にまで拡大され、荼吉尼天が天照大神である大日如来の理法の守護神の役目を負うて稻荷の御本尊と仰がれるようになった。和光同塵は人々の魂の救済のために何処までも方便として用いられたのである。かくて稻荷神社は農業・殖産・商業、更に屋敷神として日本各地、津々浦々何処にでも見られるようになった。

稻荷神社のあるところ、参拝者は跡を絶たない。人々は御利益ほしさに稻荷に参拝する。それら参拝の心の奥底で、

知らず知らずの内に人々は伊勢の外宮の神、豊受姫神との靈線を結んで行く。単に商業、農業……ばかりでなく、人間としての営みの一切が、科学的発見が、芸術作品が、そして政治的・道徳的努力が豊受姫神によって受納され、歴史創造の一つ一つの駒として活動の場を与えられるのである。日本人の祖先が後世に遺した深謀の現れといえることが出来る。

言霊の原理が日本の政治への運用を停止され、光を和め伊勢の神宮に神として祭られて二千年の歳月が経過した。その間、日本人が日本人であることの眞の証あかしは伊勢神宮への信仰の形でのみ保たれて来た。その神宮の神は稻荷信仰として更に町中の塵にまみれて私達日本人の心に「お前達の行く道はこっちだよ」と教えてくれたのであった。

今、言霊の原理は復活した。稻荷の民間信仰が、更に伊勢神宮の神祕が二千年の方便としての役目を終えようとしている。数千年にわたって運ばれて来た稲の荷物が、人類の理想世界建設のために、実際の歴史の上で料理される日は近ちか。

●「神様の戸籍」について

神様の戸籍調べも今号で十二回になった。日本の神社のうちで未だ取り上げていない主な神社は住吉、浅間、熊野、日枝、鹿島、香取、鷲おむすし、六所それに出雲大社等々であろうか。戸籍調べも余り永く続くとマンネリにおちいる恐れがある。連載はこの位で留めて、残された神社の御祭神については今後折々に会報紙上に取り上げて行くことにしよう。

ただこの連載を始めてから「神無月かんなづき」についての質問をよせられたことがあった。ここで簡単に説明することにしよう。

辞書を引くと「かみなずき——陰暦十月の異称。醸成月（かみなしずき）の意とも雷無月（かみなしずき）の意とも言う。俗説には、この月に八百万（やおよろず）の神々が出雲大社に集まり行き不在になるのと言う」とある。

右の「俗説」が正しいのである。更に補足すれば全国で神無月と呼ぶ陰暦十月を出雲地方に限っては「神有月（かみありずき）」と言っている。何故そう呼ぶようになったのであろうか。

日本の神道に天津神と国津神という言葉がある。この二つの言葉の相違について種々説明がされている。天津神とは天にまします神、又は天から下られた神、であるに對し、国津神はこの国土に生まれてこの国を守護する神、また天孫降臨以前からこの国土に土着していた神、と辞書にある。これは神話の上での説明であって正確な現実味に欠けている。神話で「天」といえば、それは人間精神の先天構造のことであり、その構造の構成要素である言霊の組織の自覚に直接関係のある神のことを天津神というのである。

例えば言霊五十音によって組織された人間精神の理想構造を表す八咫の鏡である天照大神、その鏡の構成要素である一つ一つの言霊を表徴する神、石鏡神社の石土毘古神（言霊ト）・枚岡神宮の天兒屋根神……は天津神である。それに対し言霊またはその自覚に關係のない神が国津神である。出雲大社の神である大国主命、諏訪神社の建御名方神……はその例である。

神倭朝第十代崇神天皇の代になり、物質文明を以て国家を建設して行く方針が確立され、言霊の原理は人々の意識の底に隠されてしまった。天津神は言霊の原理から切り離され、天津神である名実の実を一時的ではあるが失ったの

である。以来二千年間、物質文明の日本に於ける責任を負う神である出雲大社の大國主命が日本國建設の実務上の最高指導神となった。

出雲大社の大國主神を俗に縁結びの神という。男女の縁を結び神と呼ばれる。実は男女の縁ではなく、大國主神と全國津々浦々の神々との縁を結ぶことである。全國の國津神は勿論、言霊の原理という内容を失った天津神も競って縁を結び十月の月に出雲に馳せ参じ、一年間の縁を結ぶことに憂き身をやつす、ということになる。何故なら大國主命とは、高天原の主宰神天照大神に叛いて、高天原を去った戦いの神、ねたみの神である須佐男命(エホバ)の直系の神だからである。その神の御機嫌を損じては、如何なる神もこの二千年間は肩身が狭くてこの日本にいられないからである。

かくて結びの月である毎年十月は、全国の神々が馳せ参ずる大國主命の出雲は「神有り月」となり、その他の地方は「神無し」の月と呼ばれるようになったのである。以上が神無月の名の由来である。

崇神天皇以来二千年が経過した。世界の物質文明は皇祖皇宗の計画通り完成されようとしている。これと時を同じ

くして隠されていた言霊の原理は再び人類の意識の上に甦って来た。神話にある天の岩戸開きが始まり、天照大神と尊ばれて来た神の姿である五十音言霊によって組織された人間精神の最高の規範が世に掲げられることになった。

この五十音言霊の規範かがみに懸けられて先ず第一に禊祓(みそぎはらい)されるのは、人間でもその主義・主張でもまたその産物でもない。二千年の暗黒の世の中にあつて人々の魂の奥底を形成していた全國諸社の神社の神々なのである。五十音言霊圖の鏡に照台されて八百万の神々がそれぞれのあるべき真実の姿を明らかにされる。世の中の「建直し」は先ず精神の土台である神々の内容の建直しが第一番目に実行されなければならない。天津神は従来の言霊の原理の自覚の姿を取り戻し、高天原は更めて完成される。

十二回にわたった「神様の戸籍」調べはその神様の禊祓の実践の業であった。

家を建てるには先ず基礎となる土台が確立されなければならない。確かな土台の上に理想の人間の住家(五重一ごえい家)が姿を現す。世界の神々の禊祓によって神々の真の内容が解明された。世界の文明の新しい土台は完成されようとし

ている。この上に近い将来建築される人類の住む家は精神と物質の二大文明が理想的に調和した人類第三の新文明なのである。

【収載】第三十八号（平成三年八月）

●神と人

何年か以前、言霊学に関して「神とは何ですか、神と言霊との関係は……」と質問を受けたことがあった。この会報でお答えすることにしよう。とは言っても、神とは何か、人との関係は、言霊との関係……について難解な哲学論を展開するわけではない。人類の大転換期といわれる今、神という言葉の内容がどんな変化をすることになるか、を見詰めて行くだけである。

先に「伊勢神宮」特集や「稻荷神社」の戸籍調べのところでは伊勢の内宮と外宮との関係を明らかにして来た。ここで話を進めるために再び説明すると次のようになる。

伊勢神宮の内宮は天照大神を御祭神とし、八咫の鏡（やたのかがみ）が御神体である。外宮は豊受姫神を御祭神とし、御神体は内宮と同様である。

内宮の天照大神とは人類歴史創造の実践智の規範（かがみ）の神であり、外宮の豊受姫神は天照大神の食物を整理し、料理する神である。言い換えると内宮は人類歴史創造の鏡を祭り、外宮は人間の物心両面の一切の生産物を受け入れ、これを鏡に照らし合わせて歴史を創造する上での時処位と役割を決定する宮である。外宮の人間の生産物を整理する棚を古事記は御倉板挙（みくらたな）と呼ぶ。

以上が伊勢の内宮と外宮との関係である。昔から伊勢神宮の参拝者は先ず外宮にお詣りし次に内宮に、という風習が伝わっている。この風習が内宮と外宮との関係をよく物語っていると見えよう。

参拝者は先ず外宮にお詣りする。そこでその人の過去来歴、人柄、財産、家族、主義主張等々がすべて八咫の鏡の前に明らかに映し出され、その上でその人本来の社会の中での役割が決定される。外宮の御倉板挙の上に整理される。それから本来の神の子の姿で内宮の天照大神に御挨拶を申し上げる、ということになる。

伊勢神宮の御倉板挙の上に人類が生産する一切のものを整理して、歴史上の役割を与える、という働きを個人々々の魂の救済のための信仰の形で表したのが仏教の「摂取不

捨」である。親鸞上人の歎異抄の第一条には次のように述べられている。

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏もおさんとおもいたつ心のおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすと知るべし。その故は、罪悪深重、煩惱熾盛ぼんのうしじょうの衆生をたすけんがための願にまします。しかれば、本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なき故に。悪をも恐るべからず、弥陀の本願をさまたぐる程の悪なき故に。」

仏は善悪や老人や子供の別なくお救い下さって、決してお前だけは駄目だ、と捨てることはない(撰取不捨)の内容をこれほど率直に切実に吐露した文章は他にはあるまい。そしてその働きが個人救済としてでなく、人類歴史創造の原動力として示されるのが伊勢神宮の存在なのである。

仏教の撰取不捨といわれる阿弥陀仏と衆生、救うものと救われるものとの関係にあるのが伊勢神宮の内宮と外宮である。古神道言霊学においては「救う」という言葉を使わず

「真釣る」という。祭る、である。祭るのが内宮、祭られるものが外宮である。祭るものは天照大神という歴史創造の実践智の規範(かがみ)であり、祭られるものは外宮の御倉板挙に並べられる人類の生産物一切である。

伊勢に参拝した方なら誰でも経験することであるが、五十鈴川の清流を渡り、静かな参道を進み、内宮の正殿境内に入った時の何とも言い知れぬ神々しさ。精神の高み、崇高さを感じない人はないであろう。「何事のおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」の歌にあるように、日本人の心の故郷に帰ったような気がして来る。しかし神宮の唯一神明造りの造形と雰囲気が如何に荘厳であるにしても、その神宮が私達日本人が日頃使っている日本語の原点であるアイウエオ五十音の精神原理の表徴物であるに過ぎないものであることを知らなければならぬであろう。

伊勢神宮は今より二千年前、崇神天皇によって創建されたものである。その時以前、政治の原理であり、人類歴史創造の規範かがみであった五十音言霊の原理が、物質文明の興隆促進のため、政治への適用を停止され、一時的方便ではあるが信仰の対象である神として神社の奥に隠されてしまっ

たのである。これが神器と天皇との同床共殿の廃止であり、五十鈴宮伊勢神宮の創建であった。

以後の二千年間、世の中は弱肉強食の生存競争の連続であった。人間の五官感覚による欲望と経験知の性能の独走の世相を現出したのである。武力と金力による権力一辺倒の社会であった。平和とは戦争に疲れたものが憩う一時的休息の現象に過ぎなかつた。この期間、伊勢神宮の内宮と外宮、祭るものと祭られるもの、の關係も、日本人の心の奥底に秘められた、単なる理念に過ぎないものであった。本音であるアイウエオ五十音言霊は神の名の陰に隠れ、建前である信仰の神と、それにまつわる神話と、唯一神明造りの正殿の建造物だけが遺されたのである。

本音の五十音言霊の原理がこの世の中に戻って来た。二千年間の潜在意識の暗黒の中から、日本人に脈々と伝わって来た記憶としてアイウエオ五十音の言霊が昔のままの姿で甦って来たのである。本音が百パー

図 038-B

天津太祝詞音図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	アイ
ヰ									エ
ヱ									オ
ヲ									ウ

内宮（天照大神）

ワ									アイ
ヰ									エ
ヱ									オ
ヲ									ウ

外宮（豊受姫神）

セント姿を現してしまつた現在、建前としての種々の表徴物は今後どんな意味を持つことになるのだろうか。

復活した言霊の原理から見る時、伊勢神宮正殿の唯一神明造りと呼ばれた建築様式が、実はアイウエオ五十音言霊の原理を後世に遺す為に、その五十音図の組織を建築様式にそのまま移し替えた構造

にあることが判つた。

内宮の八咫鏡を御神体とする天照大神という神は、言霊五十音で組み立てられた人間の歴史創造の実践智の精神構造を示す天津太祝詞音図がその実体なのだ、ということが分かつて来た。

内宮の実態が明らかになると同時に、外宮と内宮の

歴史創造の、材料となるよう、その棚の上に整理することだ、という実際の意味が解明されて来た(図038-B参照)。

豊受姫神の豊は十四(トヨ)の意味で、アイウエオ・ワ・ヒチシキミリイニの五十音言霊を代表する十四個の言霊のことであり、豊受の受(うけ)は槽(うけ)で食物を入れる器のことである。これを古事記は御倉板挙と呼ぶ。

外宮とは実際には世界の生産物一切、思想・主義等を五十音言霊図に照らし合わせて、それぞれの時処位を決定する宮の意である。時処位の時とは、その現象がどういう時に起れば適当であるか、の決定である。処とはその出来事が何処に於て起れば、の場所の決定であり、位というのは人間精神の五つの次元の内のどの次元で起っているか、の検討である。

その時処位を五十音図上で決定するためには、時は現象の移り変わる変化の折り目のことであるから八つの父韻によって決定される。場所はその時の折り目に於ける現象の内容で明らかになる。位は人間の五つの性能である五母音のうちのどの母音宇宙から出て来たか、で決定されることになる。

世の中の出来事には必ず以上の時と処と位が備わっている。この時処位が人間性の全体から見て調和していれば歴史の運行は順調で平和であるが、全体との調和が乱れれば

混乱が起こる。過去の二千年間は人間性の五つの性能のうち、言霊ウオア(欲望・経験知・感情)だけが意識の中に入り、言霊イ・エ(言霊と実践智)は意識の外にあった。そのため人間性の中での欲望が独走することを許す結果となった。これでは世の中の混乱は当然ということになる。

言霊の原理の復活によって、右に述べた人間性全体の構造が五十音言霊図によってはつきりと示されることとなった。言霊図を規範(イ)として一切の人間の生み出す現象を歴史創造の全体に調和させる(実践智・エ)ことが可能になって来たのである。そしてこの事は長い年月、伊勢神宮の内宮と外宮、祭るものと祭られるものの関係として暗示・表徴されていたことが世界の歴史の上で実現可能なものとなったことを示して呉れる。

祭るものであった伊勢神宮内宮の天照大神の御神体である八咫鏡は、人間の精神構造を明らかにする五十音言霊図に、祭られる側の外宮の豊受姫神の御倉板挙に並べられる天照大神の食物は人類一切の生産物に、その内容が表徴物から現実のものに変わったのである。

祭るものも人間であり、祭られるものも人間の所産である。そのように時代相が変化することになる。そうなるこ

とが二十世紀から二十一世紀へ飛躍する人類の歴史の中心課題であることが次第に世間に明らかになって行く。

そうは言っても、人が人を祭るということは現実にはどんなことなのであろうか。

過去二千年、人が神を祭った。今や人が人を祭ることになる。その変化がこの現実の世界に展開される、ということとは如何なることなのであろうか。

右のことを考える時、直ちに筆者の心をよぎる一事がある。それは筆者の言霊学の師、故小笠原孝次氏の次の歌である。

よく見れば 弥陀が私に手を合わす

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

この歌を見た師の菩提寺の和尚さんは真つ青になり、「貴方は悪魔だ、もう寺に来て呉れるな」と怒ったそうである。人は仏に向かって掌を合わせ「どうか私の罪をお許しになり、心に平安を、そしてあの世で極楽に行けますように」と祈願するのが普通である。それが反対に仏が私に向かって掌を合わすなど、正に和尚さんにとっては悪魔の所業と思われたことであろう。仏(神)は救うもの、人は救われる

側のもの、という従来の立場からは、和尚さんの怒りも無理からぬものがある。

けれど筆者の師の歌は人間の心のもっと深い処から出て来たものである。仏(神)と人との関係をよくよく自分の心の中で検討し尽くした上で詠まれた歌なのだ。この間の消息を更に検討して行くことにしよう。

言霊学で言うアイウエオ五母音の宇宙を仏教では人間のさとの五段階の境遇として説いている。衆生(ウ)・声聞(オ)・縁覚(ア)・菩薩(エ)・仏陀(イ)である。この五段階にある人のそれぞれの心の内容を考えながら、神(仏)と人との関係を検討して行くことにしよう。

世の中には人間の五感覚による欲望の世界(言霊ウ)だけしか意識せず、その他の四つの次元の存在に余り関心を払わない人々が居る。この人の関心事は専ら「……たい」の欲望である。幼児の「お乳が欲しい」から、大人になって美しくなりたい、美味いものが食べたい、地位を得たい、金持ちになりたい……一生欲望追求の人生である。この人にも他の四つの性能がないわけではない。唯欲望以外の性能はすべて欲望達成の手段に用いられるだけである。この人の境地を仏教で衆生と呼ぶ。言霊ウの世界に住む人である。

この境遇にある人が神仏に対する態度は、ひたすら拜んで「家内安全、商売繁盛」の御利益を祈ることである。信仰に於いても欲望追求の範囲を出ることはない。

人間の次の段階は言霊才の世界の意識である。仏教で声聞と呼ぶ。学問の世界である。欲望追求の体験を積み重ねて、その経験と経験相互の関係を概念を用いて法則化して行く、いわゆる学問の段階・次元である。

経験の積み重ねと、その体験の概念による知識の体系化は人間に自我を形成させる。その自我からその人の思考・主義・信念等が主張される。人は何時しかその自我のみが自分自身である、と思いつく。けれどその自我とは極めて限られた個人の経験から組み立てられたものであるから、真実そのものではなく、真実のかけらに過ぎない。人間生命の全体を捉えることが出来ないから各自の主義・主張・信念は必ず意見の相違・衝突を生む。闘争である。この世界の学問研究が進められる限り、闘争は果てしない。仏教はこれを修羅道と呼ぶ。この論争によって時には数百万の人が死ぬことさえある。ロシア共産革命などその例である。仏教修行におけるこの段階を声聞しやうもんという。人の声を意見として聞いて見聞を広めることである。経文の解釈に終

始する。個人経験に基づく解釈は異端を生む。浄土真宗の祖、親鸞上人の弟子唯円房が編述した書物の名を「歎異抄」という。異なることを歎く書、という意味である。師祖親鸞の遺した教えと、その弟子達の解釈が余りにも異なっていることを唯円房が歎いた書物である。個人の解釈が如何に真実から遠ざかったものになるか、の例である。

この声聞の段階にある人は、この学問を続けて行けば何時の日か人間生命の真実に到達できる、と信じている。その人達にとって、何時か到達し得ると期待する生命の真実こそ神であり、仏である。彼等は信仰はなくとも、その意味での神仏を意識の外で信じている。その人達にとって神とは現在からは遙か超越した存在なのである。

人間精神の自覚の第三段階は言霊アの宇宙である。それは感情のよって出て来る元の世界のことである。この宇宙を知った人を仏教で縁覚と呼ぶ。

自覚の第二段階である言霊才の声聞の境遇にある人は、個人の経験とその概念による法則化を続けて行くことによつて、生命の真理に到達しようと励んでいる。しかしその形式の研究を如何に積み重ねて行っても、決して真理全般を手にすることは不可能である、ということを確認した時、

その人は始めて人間精神の自覚の第三段階を知ることが出来る。そこに自覚された宇宙とは、人間の心の現象が全てそこから現れて来る元の宇宙のことである。言靈ウの欲望も、言靈オの学問の心も、言靈アの感情も、すべてそれらの心が出て来る大本の宇宙の自覚である。

心の営みにはすべて原因と結果がある。物事は全て縁があつて生じる。その縁の法則を探るのが学問である。仏教で業縁ごうごんとも呼ぶ。その因果・縁の分際（限界）を知る時、心の宇宙そのものが自覚される。この境遇の人を縁覚（縁を覚る）と呼ぶ理由である。またこの境遇の人を阿羅漢（あらかん）と呼ぶ。言靈アを知る人の意である。自分が今・此処に生きていることの原因と結果を確かめることが出来れば、一切の悩みから解放される。自己自身が宇宙そのものであることを知り、魂の自由を得る。この意味でこの境遇は初地の仏である、ということが出来る。神仏の世界に一歩踏み込んだ人なのである。

自己の魂が宇宙そのものであることを知り、その宇宙から世の中を見る時、物事の真実の姿がはっきりと眼に映じる。宗教家は世間の虚妄を知る。画家は筆の向こうに美の光を見る。音楽家は音の中に宇宙のリズムを表現する。小

説家は世相の混濁の裏に限りない人の愛の存在を筆外に表現することが出来る。

けれど人生はそれで極まったわけではない。声聞から縁覚に悟りを進めて自らの煩惱（ぼんのう）の一切から解放された境地が人智の最高なのではない。自分が一切の束縛から離れて宇宙の寂光に包まれていることを知った人は、その境地の素晴らしさを未だ知ることない人々に伝え、啓蒙して行く仕事がある。これが小乗から大乘へ、自利から利他の行への出発なのである。法華経化城喻品は説く「長い修行によって自分の心の本体が宇宙そのものであることを知ったならば、その空（くう）は広い砂漠を旅する人にとつてのオアシスなのであり、そこで十分休養をとったならば、一念発起して更に人生の真理に向かって出発せよ」と。その一念発起の行を菩薩行という。言靈エの世界の自覚である。

自己の束縛から脱し、利他の行に入る菩薩に二つの種類がある、と仏典は説いている。一つは因位の菩薩であり、もう一つは果位の菩薩である。

自分が自分である原因と結果は比較的数が限られている。それを知ることがむしろ容易である。自利の行はたや

すい。しかし自分の他にある啓蒙の対称となる社会の人は無数であり、その業も無数である。その業縁からの開放をお手伝いすることは至難である。この容易でない功德を積んで、その末に人間の心とは何であるか、の一切の悟りに達しようとする菩薩を因位の菩薩という。修行の彼方に目標としてあるのが完成された仏の姿である。

菩薩が先のような因位の菩薩だけであつたなら、仏教とは「仏への道の教え」であつて「仏の教え」ではあり得ない。けれど仏教には果位の菩薩のことが明らかに説かれてゐる。

果位の菩薩とは、既に人間性の全てを覚り得て仏果を得たものが、衆生救済のために再び菩薩として世の中に姿を現したものだといわれる。そして仏の内容として法華經には人生第一義・種智・種子識・摩尼宝珠・「八歳の童女即成仏」・梵音・海潮音等々種々の比喩が述べられている。

觀世音菩薩・普賢菩薩・勢至菩薩等は果位の菩薩である。

お釈迦様が涅槃（ねはん）に入つて二千五百年余が経つ。

それ以来仏教界には幾多無数の因位の菩薩が仏の国を目指して功德を積んで来た。しかし一人の仏も現れることなく、仏の国も実現していない。理由は唯一つ、自分を導くにせ

よ、他人を教えるにせよ、仏の仏たる資格、すなわち人の人たる資格が明らかでないからであつた。将来救世の仏としての弥勒菩薩がこの世に下生するのは、釈尊没後五十六億七千万年と預言されている。この途方もない長い年月の預言も、唯一つ仏教自体に仏の仏たる資格が表徴だけであつて、眞の姿の明示がないためである。

先に書いたように、二千年の暗黒の中から言霊の原理が甦つて来た。神道に於ける伊勢の天照大神の眞実の姿であり、仏教の仏の資格であり、同時に人が人であることの精神構造を示すアイウエオ五十音霊の原理が、従来の神学や、哲学・心理学その他全ての学問と何ら矛盾することのない、そして更に生きた生命の原理として人間によって自覚されることが可能な姿で復活して来たのである。人間の精神に関する限り、隅から隅まで分らない処がなくなつた。

神とは何か、言霊である。仏の仏たる所以とは何か、言霊である。法華經は、八歳の童女も摩尼宝珠を手に入れば、たちどころに仏となる、と説いている。摩尼宝珠とは言霊を指した比喩である。言霊の原理を自覚し、それを運用する人、それが仏であり、神であり、それ以外の神も仏もあ

り得ない。仏教という果位の菩薩、既に仏果を得て再び衆生救済のため菩薩として現れた菩薩の出現が今こそ可能となったのである。

この文章の初めに伊勢神宮の内宮と外宮の関係について説明した。内宮は祭る宮、外宮は祭られるものの宮であった。祭りの語源は真釣まづり又は間連りまゐり、である。間まとは五十音言靈図の一つ一つの間のことである。五十音図に関連させて物事の眞の姿を明らかにすること、これが祭りである。

現在までの約二千年間、伊勢の内宮と外宮によって表徴されていた祭るものと祭られるものとの関係が、言靈原理の復活によって鮮明に現実の姿を現して来た。祭るものは人であり、祭られるものも人である。この事の実現によって人類は新しい文明創造の時代に入ることが出来る。

その実現のためには、人は先ず自分自身が祭られなければならぬであろう。自分自身が五十音言靈に則つて自らを祭るのである。祭る方法は仏教の自覚の五乗の段階が一つの教科書となろう。衆生(ウ)、声聞(オ)、縁覚(ア)、菩薩(エ)、仏陀(イ)と天与の五つの次元のそれぞれ独自の性能を確認して行く作業を自分自身に課して行くことである。

言靈アの自覚の次元に入つて、人は初めて自分の魂の本体がたった一つしかない宇宙そのものであること、自分が神の子であることを知る。人生の明暗、光と影を知る。幸も不幸もすべて自らの内にあることを知る。生命とは光であることを知る。心の底からの安心を知る。安心立命の安心である。

けれど其処に留まつてはいけない。自分の小さい魂の本体が宇宙であることを、光に満ちた宇宙であることを知つたならば、その宇宙に満ち満ちている光の正体を確かめるために勇気を奮つて更に自己の内部に突き進むことである。光とは靈ひ駆りである。言靈(ひ)である。その靈に五つの母音、四つの半母音、八つの父韻、三十三の子音があることを知る。自己の魂とはこの合計五十個の言靈であることを知る。

と同時にこの世界の歴史は、言靈の原理に基づいて人類文明の経綸者である皇祖皇宗の計画された一大ドラマであり、唯一無二の芸術作品であることを知る。そして皇祖皇宗とは他の誰でもない、自分自身であることをしみじみと知ることとなる。ここに至つて仏教の果位の菩薩の現実の世の中への出現である。その人こそ世界文明の創造者であ

り、世界歴史の経編者なのである。

「よく見れば弥陀が私に掌を合わす……」の師の歌の意味はここに来てお解り頂けるものと思う。我は我である。弥陀も我である。その弥陀が私に向かって掌を合わし「世の中のことはお前に委す、頼むよ」と言ってお下さる。「何の力もない小さい私でも、力を振り絞ってお報いさせて頂くより仕方がないではありませんか。」これは常日頃の師の述懐であった。

文章のしめくりとして、師の遺文の中からの引用をお許し頂くこととしよう。

「伊勢神宮は内宮と外宮の両者であつて、先ず外宮に参拝してから内宮に参拝する昔からのしきたりである。内宮は祭るものの宮であり、外宮は祭られるものの宮である。祭る主体は人類の生命意志の原理であり鑑である五十音言霊八咫鏡であり、その鏡の上に祀られる客体は個々の人間の靈魂思想である。全局の完全な鏡の上に祀(真釣)られるということは、個々の部分々々が不完全な状態であるままに、それでいて全体全局の調和を分担することである。「念仏衆生撰取不捨」と言われるが、かくの如き法によってこそ阿弥陀仏の四十八の本願が、すなわち極楽浄土の建設が成

就実現されるのである。外宮に祀られて自己の時処位を自覚した者は、やがて内宮の典範である生命意志の全局である八咫鏡の活用者となる。祭られる者である衆生の魂が祭るものである救世主、キリスト、仏陀の魂の境涯に到達する。最後にその人数は十四万四千人に達すると黙示録は予言している。」

最後に伊勢音頭のはやし言葉が面白い——

やあとこせ(喜い所伊勢) よいやな(世弥成)

あらら(安楽梁) これわいせ(これは伊勢)

【収載】第三十九号(平成三年九月)

言霊学随想

●世界語

太古、世界中に文化の交流が広く行われていた事の証拠に世界語の存在がある。例えば日本古神道で麻邇まにまたは布斗麻邇と呼ばれ、古事記に「太古ふとまにに卜うらえて……」と見えるものがそれである。仏教では摩尼まにという。観世音菩薩の持つ玲瓏な玉を摩尼宝珠と呼ぶ。キリスト教ではマナmanaという。更にヒンズー教ではマヌと見える。ヒンズー教の最高の教えの書をマヌの法典と呼ぶ(岩波文庫にその日本語訳がある)。

この世界語であるマニ・マナ・マヌは各宗教によって解かれる状況やニュアンスは多少異なるが、宇宙・天地の始まりや人間生命の起源に関係がある、ということでは共通している。

世界語である麻邇の実態がアイウエオ五十音の言霊であり、他の各宗教のマニ・マナ・マヌが言霊の概念的な説明をしているだけのもの、であることを知るならば、言霊の

原理に則って作られた日本語を日常話している私達日本人が、今後の世界の歴史を創って行く上で、重要な精神的責任を担っていることに気付くことになる。

【収載】第三十四号(平成三年四月)

●盤古大神

中国太古の神話である。宇宙に盤古大神一人が居た。自分が何者かが分からない。そこで自分に穴を二つ開けた。眼が出て来て自分の姿を見ることが出来た。また穴を二つ開けた。自分の出す音を聞く耳が出来た。……赤ん坊は母親の腹から世に出る。それは同時に宇宙から宇宙の中へ生まれ出る宇宙の出来事でもある。人は宇宙の申し子である。現代人は自分が盤古大神であることを忘れてしまっている。

【収載】第三十五号(平成三年五月)

●ころも

猿に玉葱を与えると、皮を一枚一枚剥いて行き、何も残らないで終に悲しみ怒り出すという。衣(ころも)とは心の

裳の意である。人は様々な心の裳を着ている。金よ、金よの衣、知識、名声、自信という衣。これらの衣を一枚一枚脱いで行くこと程心細いものはない。脱ぐ事に自分の価値が減って行くように感じるからである。正に猿の心である。古今の先達の言葉を信じてめげずに最後の一枚迄脱ぎ終わった時、人は生まれたばかりの赤児に帰る。持っていると思っていたものをすべて失った時、生まれながらに授かっているものが分かってくる。アイウエオ五十音言霊である。

【収載】第三十六号（平成三年六月）

●人間の好時節

梅雨明け宣言と同時に東京は連日の猛暑となった。街中の道は上からの太陽の光と、下からのアスファルトの熱で身体が焼かれる感じである。東京はここ十年程暑さがひどくなった。

禅坊主の詩に「春に百花有り秋に月あり、夏に涼風有り冬に雪有り。もし閑事の心頭に挂かくること無くんば、即ちこれ人間の好時節」とある。無駄事が心に引つ掛かつてなければ、暑さ寒さ四季折々楽しい季節なのだ、という意味

である。

眼前の困難に対する人間の態度に二つある。一つは「災難だ」として逃げ出したい、早く乗り切りたいと思うことである。もう一つは「自分に与えられた一生一度のチャンス」として有難く受け止めることである。

嫌だなと思っても、感謝で受け止めても、直面する事態は変わるものではない。けれど有難く思うと、不思議なことに物事の実情がはつきりと見えて来る。対処の方法も、自然に心の中から湧いて来る。感謝は物事を見通す心の光なのである。

そして心の光とその法則——それが言霊である。「太初はしめに言あり、言は神と共にあり……之に生命あり、この生命は人の光なりき」(ヨハネ伝)

【収載】第三十八号（平成三年八月）

平成四年

●天の橋立

新年明けましておめでとう御座います。読者の皆様の御多幸をお祈り申し上げます。

言霊研究会報が今月号をもって四十三号となりました。これもひとえに皆様のご声援のたまものとし心より感謝申し上げます。

さて筆者、昨年十一月下旬「コトタマの話」を脱稿しましたのを期に、家内と二人で京都府の北部、丹波の元伊勢神宮に参拝しました。二十六日十時三十分、天之橋立駅に着き、小春日和の砂浜を踏みながら日本三景の一つ天橋立(あまのはしだて)を徒歩一時間、渡り終わった突き当たり丹後国一宮元伊勢籠神社（おぼろ）があります。早速参拝し、社務所にて筆者著「言霊」を奉納しました。お返しに、と神主さんより元伊勢籠神社の御由緒を記した数々のパンフレットや絵葉書等を頂戴しました。

この元伊勢神社は伊勢神宮と同じ唯一神明造りの構造を社殿に持つ日本でも数少ない神社の一つであります。神道五部書の一つ「倭姫命世紀(やまとひめのみことせいき)」に

よると、第十代崇神天皇の時、それまで天皇と共に宮中にあつた天照大神の御霊代(みひしろ)である八咫鏡(やたのかがみ)を大和(やまと)の笠縫に遷され、神として祀られた、とあります。

その後御神器は丹波吉佐宮(よさのみや)といわれたこの地に遷り、四年間留まり、それより二十二ヶ所を廻って二十五番目の地である伊勢の五十鈴宮に神器が最終的に鎮まつた、といわれます。現在の伊勢神宮の内宮であります。

更にこの神社の社殿は次のように伝えていきます。「神代と呼ばれる遠くはるか昔から奥宮真名井原に豊受大神(とようけおおかみ)をお祭りして来ましたが、その御縁故により第十代崇神天皇の御代に天照大神が大和の笠縫邑からおうつりになり、これを与謝宮(よさのみや)と申して一緒にお祭りしました。その後天照大神は第十一代垂仁天皇の御代に、また豊受大神は二十一代雄略天皇の御代にそれぞれ伊勢にお遷りになりました。それによって当社は元伊勢と言われております。両大神が伊勢におうつりの後、天孫彦火明命(ひこほあかりのみこと)を主祭神とし、社名を籠宮(このみや)と改め、元伊勢の社として朝野の崇敬を集めて来ました」と。

元伊勢籠宮神社参拝を終え、神社右脇の参道を山峡に進むこと五分、奥宮の真名井神社があります。奥宮参拝を済ませ、再び天橋立を渡り帰路に着いたのでした。

神社から頂いたパンフレットによると、「天橋立の起源と神秘」と題して次のような文章が見られます。

京都府の北部、日本海に面した宮津湾の西端を小さく区切る阿蘇海(あそのうみ)の波静かな水面に、神秘なたたずまいを見せて真一文字にぼっかり浮かぶ特別名勝天橋立は、その昔は当神社の境内であり、また参道でありました。

その天橋立は、地形的にははるか昔に河川や内湾の土砂の流れを外界の激しい潮流が堰き止めて出来た砂嘴(さし)であると言われます。紺青の海に青々と生い茂る一文字の松原はまさに造化の妙でありましょう。

さて伝承によりますと神代の昔、天にあった男神イザナギノ大神が地上の籠宮の磐座(いはくら)に祭られていた女神イザナミノ大神の元に通うため、天から大きな長い梯子(はしご)を地上に立てて通われたというのです。すると一夜梯子が倒れてしまい、それが天橋立となったと伝えられています。

これは人間の心が純朴で素直であった古代には、神と人、天と地上とは互いに往き来でき、天橋立は神と人とを結ぶ魂の懸け橋と信じられていたのです。

以上の元伊勢のパンフレットが伝える天橋立の精神的内容を日本の古神道は天之御柱と言います。言霊で現しますと人間の心の中の地上ウから天であるイヘウオアエイと上って行く五つの母音の梯子ということが出来ます。ウは五官感覚に基づく欲望の世界、オは経験を基本とした学問の世界、アは感情の広がる宇宙自覚の世界、エは今・此処で何をなすべきかを決める英智の世界、イは言霊原理の世界となります。人は自らの反省と思索によってウオアエイの天井の梯子を上下して、人間に与えられた性能の全部を投入して人類の文明を創造して行く使命を持つ生物なのです。

天の梯子が倒れて、天と地との自由な往来が出来なくなつた時は何時ででしょう。日本書紀が教えてくれます。第十代崇神天皇の時、三種の神器と天皇とが同床共殿であるべし、という太古からの習慣を廃止した時からであります。その時以来日本に於て言霊の原理が政治に適用されること

がなくなつたのです。人々は欲望に基づく産業(言靈ウ)と経験知の学問(オ)と感情の世界からの宗教・芸術(ア)は知つていても、言霊原理(イ)と原理による政治・道徳の法則(エ)は意識の外に忘れてしまいました。天橋立の天上と地上を結ぶウオアエイの梯子はアとエの間で折れて倒れてしまったのです。

こうして精神文明の栄えた平和の時代は終わり、弱肉強食の社会の出現となり、二千年の歳月が流れることになりました……。

元伊勢への旅行から半月程が経つた或る日の午後、筆者は言霊学の師小笠原孝次氏の遺品の中にあつたガリ版刷りの師の感想文集の頁を繰っていました。その時、短い日記風の「暦日」と題する文章が目に残りました。

「『山中暦日なし』と言う。春夏秋冬の自然暦で動かず、盆暮れの世間の暦日を目安にせず。大本教祖は『国祖三千年の御仕組』と言つた。平田篤胤は天孫降臨以来五千年余と説いている。この千年を単位とする年月の上に、自分は自分の暦を樹てる。」

暦(こよみ)を樹てる、とは暦に書いてある日月の経過に従つて自己の生活や思索の設計をする、ということでしょう。

う。筆者の師は清貧洗うが如く、赤裸々な態度で一生を古代史と言霊学の研究に捧げた人でありました。春夏秋冬の季節の変化に沿う日常の生活に煩わされず、盆暮れの人の付き合ひに目もくれず、唯々言霊原理の開頭と日本人の先祖である皇祖皇宗の言霊原理による人類文明創造の御経綸の歴史と将来の見通しについて心血を注いだ人でありました。

古事記の神代巻の謎を解明し、人間精神の構造を手にとって見るように明らかに示した「古事記解義言霊百神」の原稿が出来上がった時、師はその感激を次のように表現しています。

「言霊の冊子が出来た出来たんだ 出来たんだよと大空に叫ぶ」

このようにして二千年の長い間、人間の頭脳の奥深く、潜在意識の底に隠されていた人間精神の秘宝である言霊の原理がこの世に甦つて来たのです。明治天皇を初め多くの先輩諸氏の御苦勞のお蔭で、今私達は学校で数学や国語などの学問を習うのと全く同じように、自ら望めば言霊の学問をすることが出来るようになりました。

先輩諸氏の「山中に暦日なし」と寝食を放擲した研究のお

蔭で、私達は今春夏秋冬の暦日も、盆暮れの世間の暦日ももちろんと目安にした生活を守りながら、しかも大本教祖の三千年の仕組も、平田篤胤の五千年の歴史をも学問として学び、思索することが出来るようになりました。正に元伊勢神宮記にある如く、天上と地上を結ぶ垂直に立った天橋立を自由に上下往来することが出来るようになったのです。

言霊ウオアエイと上がる学問と思索を完成し、言霊イエアオウと下がって人類文明を創造して行く実践活動に従事する原理が、小学校から大学までの学校教育の成果となる日もそう遠い将来ではないでしょう。その時こそ、地球上に戦争はなくなり、飢餓は消え、各民族共栄の昔神代といわれる時代と同じ恒久平和の世紀が訪れるでしょう。

「視よ、神の幕屋、人とともにあり、神、人とともに住み、人の神の民となり、神みずから人とともに在して、彼等の目の涙をどくどく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、悲嘆も号叫も苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり」（黙示録二十一章）

国祖三千年の御仕組の暦日の正月元旦はその時明けるこ

とになります。

【収載】第四十三号（平成四年一月）

（終り）

●枕言葉

あとによし宇梁の家には万代に吾も通はむと念ふ

（万葉集八〇）

あとによし宇梁の末師は咲く花のにはうが如く今盛なり

（万葉集三二八）

右の歌の初めにある「あをによし」は寧楽（奈良）にかかる枕言葉といわれます。昔の歌には「あをによし」の他に「ちはやふる」「たらちねの」「ぬばたまの」等々多くの枕言葉を

見ることが出来ます。枕言葉とはどんな意味を持っているのでしょうか。辞書を見ましょう。「枕言葉―主として古来の歌文に見える。

我国固有の特殊な修辞用の語句」と説明されています。

さて実際に右に挙げた枕言葉の意味を辞書で調べて見て下さい。その枕言葉の多くが「意味不詳」即ち意味が現代の

国語学ではよく分からない、と書いてあるのです。

古典である古事記や万葉集は元々日本の言葉に漢字を当てて書かれてありました。それを大勢の研究者が長いことかかって現代の如く日本人の誰でも読めるように翻訳したのです。四千首以上ある万葉集の歌の殆どは読めるようになりました。にも拘わらずその歌の中に出て来る多くの枕言葉の意味が分かっていない、という事はどういう事なのかでしょう。

その疑問に言霊の原理が答えてくれます。言霊という立場から見ると「語義不詳」と辞書に書かれた枕言葉の意味が明瞭に理解されて来ます。辞書に「我国固有の特殊な修辞用の語句」と説明されている、その「我国固有の特殊な……」とは、わが日本語が作られた法則である言霊の原理、という事とだったので。以下「語義不詳」といわれる二、三の枕言葉の意味を言霊によって説明して行くことにしましょう。

あとによし

度々説明して来ましたように五つの母音は人間の心の現象が出て来る元の宇宙を表します。その中でウは五官感覚

による認識の世界です。この心から社会的には産業・経済が営まれます。才言霊は経験知の世界です。ここから出て来るものは一般に学問といわれるものです。半母音のヲはその学問の結果(成果)を表します。アは人間の感情の世界です。この感情から宗教・芸術活動が現れます。次のエは選択知・英智の働きの世界です。この世界から道徳や政治活動が現れます。最後のイは意志の世界であり、言霊はこの次元に存在しています。純粹な言葉の世界でもありません。

奈良時代八十年は宗教芸術と学問が盛んであり、壮麗な奈良の都が建設されました。「あをによし」のアは宗教・芸術の心であり、あをのを(ヲ)は学問をする心であるオの成果(半母音)を示しています。宗教・芸術と学問が栄えている奈良、という意味を言霊そのものを使って「あをによし」と枕言葉で奈良を修飾したのでした。

らはやふる(千早振る)

辞書に「いちはやふる、の約で勢いの鋭いの意。神にかかると。続柄まだ不詳」とあります。言霊学で見ると次のようになります。「千早振る」の千は道のことちぢです。百の道で餅(もち)、神社の棟にある千木(ちぎ)とは道(道理)の氣を

表したものです。千早振るの「早」は文字通り早い意であり、「振る」とは運用する、活用する、の意味を表します。

神倭朝十代崇神天皇の時以前は言霊の原理が現実の世の中に活用されてきました。言霊とは言葉の要素であると同時に人間の心の要素でもあるものです。言霊の原理が活かされていた神代と言われた時代に於いては、人の言葉が聞けば、それがどんなことを意味しているのかの真相とその成り行きがどう決着するのか、の道が直に分かったのです。言葉によって物事の道理が真直に通るよう運用が可能な時代でありました。

右の理由で、「千早振る」は神または神代を修飾する枕言葉であることを御理解頂けた事と思います。今の国会に見るような、あくでもない、こうでもない議論百出、それでいて結論が仲々まとまらない現代の政治が「千早振る」すつきりした道義の政治に帰る日が待たれてなりません。

たらちねの(垂乳根の)

辞書に「枕言葉で両親・父母・母にかかると。意義不詳であるが、『たらちね』は『たらし』でほめる言葉。『ね』は尊称という。又赤子(あかご)を養い日月を足らしめる人とする意

(賀茂真淵)とも言われる」とあります。

言霊の立場から見れば「たらちねの」は「足道音の」の意となります。言葉の道理である言霊を生む音、と言う意味。

五十音言霊特にその中の三十二の子音はすべて「伊邪那岐・伊邪那美の命が天の浮橋に立つて天の沼矛(あめのぬぼこ)を取って……」と古事記にありますように、伊邪那岐・美の二神がお生みになりました。それによって二神は万物の親、創造神と呼ばれます。伊邪那岐命は言霊イ、美神は言霊キ。言霊イとキはすべての現象の要素である三十二の子音(子)を生む父母であり、親音と呼ばれています。万物を生む親の音(ね)の意味で父母・親・母にかかるとして「たらちねの」が使われるようになりました。

【収載】第四十四号(平成四年二月)

●いろは歌

いろは四十八文字について最近言霊学上新しく気が付いたことがあった。言霊の学問を初めて聞く方には理解し難い事が多いかも知れないが、我慢してお読み願いたい。

先ずいろは歌を四節に分けて仏教的意味を書いてみよ

う。

いろはにはへとらりぬると

諸行は無情なり

わかよたれそつねならむ

是れが生滅の法なり

うゐのおくやまけふこえて

生滅が滅し已ればおぼ

あさきゆめみしむひもせず

寂滅して為楽なり

この世の中に存在するものは常に移り変わって何一つ頼りになるものはない。この頼りにならない、ということをとコト心の中に確かめてしまうと、その頼りにならない色々な物事がこの世に現れて来る大元の宇宙が心に開けて来る。これが実は一番頼りになる自分自身の本体なのだ、

と知らされる。この宇宙を知ってしまえば、心配したり恐れたりすることはない。何時も安心して平安の毎日を暮らすことが出来る。これが仏教の悟りだ、というのである。

右の悟りへの道は、煩惱の世の中であって自己の安心を求める自利の行であって、仏教でこの教えを小乗と呼ぶ。

しかし仏の教えはこれで終わりなのではない。自分は仏の慈悲によって平安の境地に住むことが出来た。けれど世の中には教えを知らず、以前の自分のように執着と欲望の世に苦しんでいる人が沢山居る。自分を救ってくれた仏の

心を心として、それらの人々のために仏の教えを伝えることは出来ないものだろうか。ここから仏教の利他の行、大乘の教えが始まる。

大勢の人々を教化して、この世の中に仏の国を建設しようと務める人を仏教で菩薩ぼさつと呼ぶ。自分自身を救う小乗の道はむしろ易しい。自分のことを知りさえすればそれで足りる。けれど大勢の人を教える利他の大乘の道は難しい。人々の心は多様であり、その人々に接する方法も千差万別だからである。かくて菩薩の行とは「人間とは何であるか」を徹底的に知る道でもある。この修行の完成された姿が仏である。

大乘教典には人を救うための菩薩の心構えについては詳しく書かれている。しかし幾万巻の仏典を見ても、菩薩が目指す究極の仏の姿、仏とは何であるかの内容は一字も説かれてはいない。釈迦は「四十五年、我、一字をも説かず」と言つて涅槃ねはんに入った、と伝えられている。

以上苦しみの世に沈む人の立場から初期の悟りへ、更に菩薩より仏への修行について述べて来たが、その人間の完成である仏が仏であるための条件、人間とは何であるか、の根本原理が日本語の語源であるアイウエオ五十音言霊の

原理なのである。

さて「いろは歌」の話に戻ろう。先にいろは歌を四段に分けた中の一段目と二段目は全く仏教的説明の通りである。「いろはにほへとちりぬるを」(諸行無常)とは、衆生が自分の欲望を達成しようとして齷齪(あくせく)働き、やっと目的を達したと思う瞬間、欲望はもう次の目標に向かって人を駆り立てる。一生苦勞した拳句「浪速のことは夢のまた夢」と、はかなくこの世を終わる。この境涯を仏教で衆生と呼ぶ。言靈ウの段階である。

この言靈ウの衆生の境遇を思い返して、社会の中の自分を反省する段階、それがいろは歌の第二段目「わかよたれそつねならむ」(是生滅法)である。言靈オである。仏教ではその境涯を声聞と呼ぶ。

そして心の中で「わかよたれそつねならむ」と、この世の中にあるものに対する執着を捨て切ってしまうと、広い宇宙が心に開けて来る。これが言靈アの世界であり、この境涯を仏教は縁覚と呼ぶ。またその悟りが仏の悟りだ、と言うのが従来のいろは歌の仏教的説明でもあった。「うみのおくやまけふこえて」とは「憂い(心配事)に迷った葛藤の山々を今日(今)超えて見ると」の意味となり、そうすれ

ば「あさきゆめみしえひもせず」で「今迄際限なく追って来たこの世の欲の世界は浅きはかなき夢のようなものであった、この夢の世に酔って一喜一憂することのない安心の境地に入るのだ」ということになるわけである。小乗仏教の立場では確かにこの説明で完全である。これ以上の意味は出て来ない。

しかしこのいろは歌の第三、四段目を言靈ウの立場から更めて見てみると、仏教の小乗の域を超えて、大乘の意味内容が、更に仏教では説かれた事のない仏の姿の実態が明らかに浮かび上がって来る。いろは歌は人を最高の真理へと導いて呉れるのである。

いろは歌の第二段「わかよたれそつねならむ」でこの世の中への執着に見極めをつける時、人は広い広い宇宙が魂の住家だと知る。言靈アの宇宙である。人の境涯はそこで最終なのではない。更に言靈エイの二段階がある。いろは歌第三区分「うみのおくやまけふこえて」は言靈ウの立場から見ると一挙にアーエーイの段階を登ってしまう。人間とは何であるかの結論に導いてくれる。

五官感覚による認識の世界(言靈ウ)からその体験の体系化の世界(オ)、更にそれらの現象が出て来る魂の元の世界

である言霊アの宇宙を知った人は、次にそれら欲望(ウ)・学問(オ)・感情(ア)の三つの性能をどう選んで文明を創造して行くかの実践智の世界(言霊エ・菩薩)に入る。そしてその修行の最終目的地は、今迄のウオアエの四段階の行為を創造する人間の根本性能である創造意志(言霊イ・仏)の世界である。それは人間の行為を言葉として表現する言葉の原理、言霊そのものの世界であり、また人間とは何であるか、の結論でもある。

アイウエオ五十音言霊によって人間の精神構造の全容を知った。それで終わりなのではない。ではどうなるのか。それをいろは歌の第三・四区分が教えてくれる。「うゐのおくやまけふこえて」である。人間精神の構造(言霊イ)を知った人は更めて人間の魂の修行の出発点である五官感覚の世界(言霊ウ)に帰れ、といろは歌は教える。この五段階を全て修得した後、再び出発点に帰って来ること、それが言霊学の奥義であり、修行のクライマックスなのだ。それが「うゐのおくやまけふこえて」である。

図 047-A

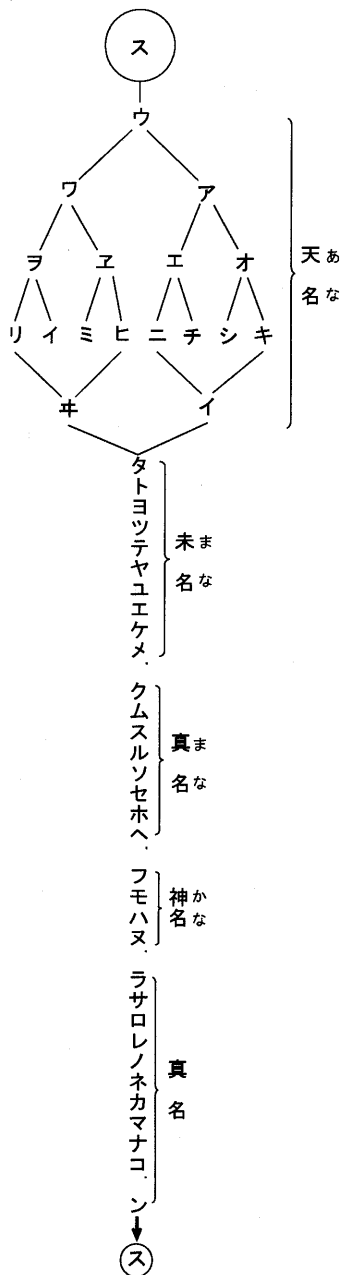
天津太祝詞音図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ									イ
エ									エ
ヲ									オ
ウ									ウ

「うゐのおくやまけふこえて」の「うゐ」は言霊ウ(欲望の世界)と言霊イ(言霊原理)の結論(言霊ヰ)であり、双方を結んで再びウに帰ること、それが言霊学の奥義(おくやま)である。それなら精神の最高原理と欲望の世界とを結び付ける、とはどう言うことなのであろうか。またその方法はどうな道があるのか。五官感覚による欲望の追求に奔走している人にまさか言霊の原理を講義せよ、と言うわけでもありません。その間の消息をいろは歌の第四区分が明らかに示しているのである。

「あさきゆめみしゑひもせす」の「あさき」は「浅き」と「あさの気」を掛けてある。「あさ」の気とは何なのか。図 047-A を御覧下さい。言霊エの実践智の精神構造である天津太祝詞音図では主体と客体を結ぶ八つの父韻は、ア段で示すと「タカマハラナヤサ」である。それ故主体から客体へ結び付く方法は「アタカマハラナヤサ」の経過をたどる。この心の運び方の順序を簡単に「あさ」と言い表す。父韻は人間の精神の先天構造の要素であり、また現

図 047-B



象として現れる以前のものであるから、あくまで気配であり、これを「あさの気」という。

「あさき」の次の「ゆめみし」に移ろう。表面の言葉だけ見れば単に「浅き夢を見て」の意となろう。これを言霊学から見ると人間精神の真相・精巧な構造を伝える言葉であることが分かって来る。

次の図047-Bは人間の文明を創造する行為が、言葉として頭脳中で如何なる経過を辿り、どんな順序で営まれるか、を創造意志の法則である言霊の立場から捉えたものである（既刊「古事記と言霊」一〇七頁参照）。

人間の頭脳中枢を場として、精神宇宙に先天十七個の言

霊の力動が起る。先天であり、現象以前の音であるからこれを天名と呼ぶ。この先天の働きによって現象の音である子音が生まれて来る。先ず初めにまだ音として発声されない理念としての真名（これを未名ともかく）が現れて来る。タトヨツテヤユエケメの十音である。次にその理念としての音を基として次第に現象として実際に発音される言葉が組まれて来る。その段階がクムスルソセホへの八音である。これを真名と呼ぶ。次々組まれて発音された言葉が口から飛び出す。空中にある音がフモハヌの四音である。これを神名という。空中を飛んだ音は耳で聞かれ、再び頭脳内で反芻検討されてその言葉の意味が了解され、神名は

真名に還元される。そして了解の後に再び宇宙に帰される。

以上の天名―未名―真名―神名―真名―宇宙と巡る循環の過程が言霊によって示される精神宇宙の全内容であり、人間の行為の全てである。宇宙にはこれ以上の要素はなく、またこれ以下では宇宙は成り立たない。思いが言葉となって発現して意志を伝える内容と順序を言葉の要素である言霊を以て示し、それがまた宇宙に存在する言霊全てであること、この不可思議・靈妙さを「言霊の幸倍え」と呼ぶ。

話が言霊子音という言霊原理の最も深奥の部分に入って難解となり恐縮であるが、それもいろは歌「ゆめみし」の「ゆめ」の意味内容の説明に必要なためである。さて更めて「ゆめ」のゆとめの二つの子音の言霊循環の中の位置を考えてみよう。

先天が理念(未名)として現れ、それが「クムスル……」と有音の神名に組まれる直前、そこに「ユエケメ」として「ゆめ」の子音が位置している。言霊ユを指示する古事記の神名は風木津別の忍男の神であり、言霊メは妹速秋津比売の神である。古事記神名は禪における指月の指であって、神名をいくら担ぎ廻っても何の意味もないが、それらが言霊子音の実体を呪示する名だと分かると、その大略の内容が

察知されて来る。

「風木津別」の「風」とは動きがあるが淡い存在の理念を表し、「木」はそれに反して動きは少ないが確固たる存在、即ち言葉を意味している。「風木津別」の「津」は陸から海へ出る処の意味から「渡す」動きと解釈される。「別」は陸地(頭脳内)と海(空気中)と分け区別すること。「風木津別」全部で、理念が次第に濃く整って来て、今にも現実の言葉に組まれるその直前、の状態を表している。古事記では風木津別の忍男の神の次に「海の神、名は大綿津見の神(言霊エ)」と続いている。理念が言葉として広い空中に渡される直前の状態であることがここでも察知される。忍男は大いなる霊の意。ユは湯が吹き出る様。

「ゆめ」の「め」は古事記神名で妹速秋津比売の神と示されている。速は早い意。秋津は明らかに渡すの意。妹または比売は共に女性で、主体に対する客体、原因に対する結果、能動に対する受動を意味する。また古事記には水戸の神速秋津日子神、妹速秋津比売神と記されている。水戸は港の意で、ここでも陸より海へ漕ぎ出す処を告げている。言霊ケは集める意がある。言霊メはその集まったもの、人間の眼もそこに物体の姿が集められる処である。

以上言霊ユとメについて長々と書いたが、言霊子音とは頭脳内の人間の心の一瞬の動きの一駒の描写であるから、その説明の曖昧さはお許し願いたい。以上「ゆめみし」で頭脳内で煮詰まって来た理念が言葉に組まれる直前の処を見ることが、と解釈することが出来る。その「ゆめ」は実際に私達が眠っている時に見る夢でもある。夢とは頭脳内の理念が言葉に組まれる前を直接イメージとして見たものである。

以上で「あさきゆめみし」は「天津太祝詞音図のアからサまでの父韻で組まれようとしている言葉の直接の理念を基とせよ」の意となることが了解される。

いろは歌は次に「ゑひもせず」と続いている。「ゑひ」は言霊エの実践智の結論(言霊エ)の内容(ヒ)の意。「もせ」は「申せ」口に出して言え、である。「す」は澄み、住み、巢の意で、また天地万物・文明の創造主神である伊邪那岐大神の座のこと。実践智の内容を宣した後は、物事が起こる前の創造主神(主)の座に帰る、ということである。この「す」について日本書紀は、言霊百神を生み、最後に天照大神・月読命・須佐男命の三貴子という言霊原理の三つの総結論を得て後、「幽宮を淡路の洲に溝り寂然長く隠れまし

き」と書いている。人間の一つの行為が終了すれば、宇宙は元の静寂(ス)に帰るのである。

以上いろは歌の言霊学よりの発見について書いた。五十音言霊の原理を知ったならば、その原理に則って更めて今迄辿って来た言霊ウ(欲望・産業)・オ(学問)・ア(感情・宗教・芸術)・エ(実践智・道徳・政治)の四性能を検討し、コントロールして、人類の文明を創造せよ、とその精神的方策(仏の道)をいろは歌は教えているのである。

奈良の天理市石上神宮に伝わる「日文四十七文字、布留の言本」は以上述べたいろは歌の「あさきゆめみしゑひもせず」を言霊四十七文字を重複することなく使って、更に詳細にその内容を述べたものである(「言霊」随想、日文の章参照)。

尚いろは四十八文字という時、「ゑひもせず」の次に「ん」が附く。言霊ンは言霊の文字化であり、また記録の意味である。人間の行為の一循環が終了し、静寂(ス)に帰った後に記録として「ン」が残る、という意味である。

【収載】第四十七号(平成四年五月)

●孤 独

筆者の言霊学の師、小笠原孝次氏はアイウエオ五十音言霊学と、言霊の立場から見た日本と世界の歴史とその将来の思索に一生を捧げた孤高の学究であつた。氏はその膨大な著作の傍ら幾多の珠玉の日記風の随想を残した。今後、時にその小文を紹介することにしよう。左は「孤独」と題する昭和三十二年（一九五七）頃の作である。

「孤独は神の最大の恩寵である。孤独は最大の自由である。孤独は自己の宇宙化である。宇宙はたった一つしかないから孤独である。實在なる神は宇宙にただ一つしかないから孤独である。孤独は神の姿であり、神の心である。」

『孤独よ、汝はわが心の故郷。孤独よ。』（ゲーテ）

【収載】第四十七号（平成四年五月）

●遊 魂 につ いて

再び遊魂についてお話ししましょう。私達は心配事のある時など床についても仲々寝つかれないことがよくあります。そんな時はあらぬ取りとめもない考えが次から次へと頭を過よって行きます。「こんなことを考えたって解決には

何の役にも立ちはしないのだから、もう考えるのは止めよう」と何度となく心に言い聞かすのですが、何時の間にかまたその取りとめもないことを考えてしまっています。そうして眠られない夜となります。

右のような心の迷いはどうして起こるのでしょうか。迷いという文字は八十八の道と書きます。色々な道が考えられて、さてどの道を行ったら良いか迷うことです。考えられる色々な道とはすべてその時までで経験したこと、人から聞いたこと、本で読んだりテレビで見たりして得られた方法です。一長一短と思われるそれらの道がお互いに葛藤を起こして、頭の中をぐるぐると駆けめぐり、どの道を選べたら良いか、それが迷いです。

そんな時、迷いに迷った挙げ句「下手の考え休むに似たり。その場になれば何とか良い考えが出るだろう」と頭の中を御破算にしてしまうと、結構良い方法が思い浮かぶものなのです。このいろいろな考えを御破算にすること、数学で言うところと零ぜろ点てんに戻ることに、よい考え（適切な物事の処理法）を手に入れる必須の条件です。この事を言霊で説明して見ましょう。

あゝでもない、こうでもない、と考えあぐむ事はいろいろ

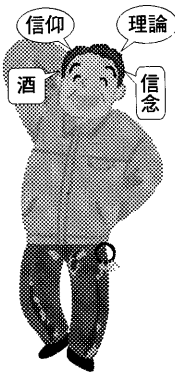
ろな経験知のぶつかり合いであって、言霊学で言えば言霊オの次元内の出来事です。頭の中でこれら経験知同士の葛藤に疲れて「出た処勝負より仕方がない」と頭の中での葛藤を御破算にします。考えることを止めます。ということは考え出した以前に帰ることです。それはいろいろな考えが出て来る大もとの宇宙、言霊で言えば言霊アに帰ることに なります。この広々とした自由な宇宙に心が抱かれているのに気が付きますと、人間の主体性が回復し、それまで葛藤を繰り返していた経験知を自由に選択・按配して実行に 一步踏み出すことが出来る実践智というものが働き出して くれます。言霊エからの活動です。

以上のような「迷いから一転して実行」の過程は、この世の中に生きて行く上でよく経験することと言ってよいでし ょう。ところが世の中の大方の人々が以上述

べた心の果てしない泥沼の葛藤を一生の間 間続けて、しかもそれを御破算にすることを全然知らずに過ごしたとしたら、考 えただけでぞっとする恐ろしいことでは ないでしょうか。そしてその恐ろしいこ とがそのまま現実であり、そこから抜け

図 052-A

遊
魂



出すことが出来ない世界、それがこの世の中なのです。人は一人前になり世の中に生きていろいろな経験を積 み、信念を持ち自信を深めて行きます。信念はともすると 他的信念とぶつかる時があります。心の中に、そして他人 の信念との間に戦いが起こります。この時、衝突した自分 の信念や経験を心の中で御破算にし、零点に帰ることがな い時、人は泥沼に足を取られ、次第に深みにはまって行き ます。仏教はこの世を八苦の娑婆しやばと呼びます。迷いから目 を覚まし創造に転換する英知が湧き出て来ない世の中なの です。その挙げ句、個人の人生の挫折や大にしては国家・ 世界・人類の破滅さえ招来し兼ねないのが現代の世相で す。

この御破算にすることを知らず一生の間続く心の葛藤は 何に原因しているのか、それが遊魂 のなせる業なのです。遊魂とは文字 通り遊びに出て家に帰ることを忘れ てしまっている魂です。ですから遊 魂は自分が家から飛び出しているこ とすら知りません。

昔からよく憑依霊だとか、狐憑き

・靈に取り憑かれた、とかいう言葉をよく耳にします。人間の心に何か人間とは違う靈が取り憑く、という意味でしょう。けれどこのような言葉は正確ではありません。人間の魂が何かの誘惑に乗って遊びに出て返って来ないので、この魂を遊魂と呼びます。しかも人はその遊びに出た魂を自分自身だと思い込んでいます。

靈が憑く、などと言うと、誘惑するのは動物の靈だと思いが勝ちですが、そうではありません。尖鋭的なマルキストなどはマルクス理論の中にドブプリ浸ってそこを住家としてしまっています。遊魂の遊び先はその他、あらゆる経験知、観念、信仰、理論から煙草、酒、美食、贅沢、ギャンブルその他多種多様限りがありません。

人間が理論を述べること、酒を飲むこと、美食をすること……等は決して悪いことではありません。けれど理論が人となり、酒が人を呑み、美食の中に溺れてしまつては、万物の靈長たる資格を放棄してしまふ事になりかねません。自分が遊びに出たまま帰ることを忘れていることに気が付き、生まれたままの真っさらな自由な魂の赤子に帰ると、神道はこれを鎮魂帰神と呼びます。他人の理論や習慣、ギャンブル、酒に逆上あがっている魂を鎮めて本来の神の

子としての自主性に帰る、ということですが。大方の人は自分が遊びに出たまま帰ることを忘れ、自分の魂の住家・故郷を意識も出来なくなっていることに気付かないでいます。

遊魂から言靈の原理を考えても、分かつたようで分かりません。何故なら言靈とは自らの魂の元の住家の内容なのです。魂の故郷に帰って見れば、五十音の言靈は自らの生命の中に生き生きと活動していることを知ります。心の故郷・住家に帰る、とは何処か未知の世界に帰ることではありません。生まれる前から存在し、生まれるとそこに産み落とされ、そして今が今迄絶えずその中に息づいている処に意識を帰すだけの話です。

経験を積み、知識を増やして行くのは進歩の学問です。魂の故郷に帰る道は退歩の学と呼ばれます。そこには創造の英智(言靈工)が無限に湧き出て来る生命の泉があります。

「あの町この町日が暮れる 今来たこの道帰りゃんせ
おうちがだんだん遠くなる 今来たこの道帰りゃんせ」

【収載】第五十二号 (平成四年十月)

言靈学随想

● たぬきそば

卵そばは鶏卵の入ったそば、鶏そばは鶏肉を入れたそばである。けれど狐そばは狐の肉を入れたそばではなく、狸そばは狸の肉が入っているわけではない。何故きつねそば、たぬきそばというのであろうか。きつねそばのことはさておき、今夜はたぬきそばの名の由来について話そう。

たぬきそばには天ぶらの揚げ玉が入っている。揚げ玉を何故狸というのか。揚げ玉と狸とは全く関連性がないように思われよう。狸は揚げ玉が好きだ、などとこじつけてはいけない。それなら何故。ここに言靈学の登場である。

狸とは田抜きの呪示である。田んぼで稲を作る。稲はイの音の意で、言靈イは五つの母音である人間天与の性能の最も奥にあって他の四つの母音で表される性能(欲望・経験知・感情・実践智)を統一している人間の創造意志の世界であり、そのイの音であるから言靈のことである。言靈を育てるところであるから五十音言靈図を田という。言靈

図は人間の心の全体を自覚した形を表している。人間精神の肝心要である。

揚げ玉は天ぶらの中の肝心要の種が抜けたもの、田抜きである。狸そばの名の由来、お分かりか。

【収載】第五十二号（平成四年十月）

平成五年

●壁

現代人の心の中には時間の壁と空間の壁という二つの壁があります。人間の心はこの二つの壁の中に閉じ込められて、まことに不自由この上ない生活を余儀なくさせられているのですが、不自由な生活も長い間続きますと、自然にそれに馴れて不自自とも何とも感じないようになってしまうのです。その結果、現代人は壁の向うに何があるのか、は勿論、自分の中の壁の存在すら意識出来なくなっています。では壁とはどんなものなのでしょうか。

先ず時間の壁から考えてみましょう。

近代科学技術は人類にまことに便利で華麗な社会をもたらしました。宇宙に人工衛星が飛び、地球上の交通・通信手段の発達は目覚ましく、何処に居ても地球上の出来事を即刻知ることが出来ます。地上数百階の建築も可能になりました。こうした科学技術の発達は現代社会の生活を一段と向上させましたが、同時に私達人間に一つの大きな迷信を植え付けたように見えます。「二千年・三千年以前の我々の祖先は穴を掘ってその中で生活していた位だから、

文化は発達しておらず、知性のない野蛮な生活であったのだ」という通念です。ですからたまに古墳の発掘で美しい色彩の絵などが見つかるのと、全く考えてもみなかったかのように驚嘆してしまふのです。

確かに古代には現代が誇る機械文明はなかったでしょう。自動車も飛行機もロケットもなかったでしょう。しかし我々が誇る科学技術とは趣おもむきを異にした精神文化の華が古代には咲いていました。それこそ現代人が夢にも思うことのない精神の深みの中に古代人は生き、心の法則を自覚し、活用していたのです。

右のように書きましても、現代の人々は「昔にそんな事もあったのかなあ……」とは思っても、その実感と確信は到底起っては来ないでしょう。それは現代と古代との間に二・三千年という時間の壁が存在するからです。

日本のみならず世界の各民族には古代の神話が伝えられています。そしてそれ等の神話は例外なく大昔に精神的に豊かで平和な仕合わせな世の中があったことを伝えていきます。けれども現代人の多くはそんな精神的に豊かな平和の時代が真に歴史的な事実だったのだ、とは到底思えず、単なる祖先のユートピア的物語位にしか思わないのです。そ

れは何故でしょう。現代人と古代人との間に越え難い心の壁、時代の壁があるためであります。現代の人々はその心の中の壁にさえぎられて、壁の向こうの古代の人々との心の交流が出来ず、ただ想像することによってのみ繋っているに過ぎないのです。

次に現代人の心の中の空間の壁の話に移りましょう。

心の中の時間といえば、個人的には生まれた時から今迄の生活や経験の記憶の流れといったものが考えられるでしょう。民族的には神代といわれる古代から現代までの歴史が考えられます。それなら心の中の空間とは何なのでしょう。時間を歴史の流れと見るならば、空間とは現在にある全てのものが占める心の広がりと解釈することが出来ます。少々分り難い言葉かも知れませんが、例を挙げて話を進めることにします。

たとえば現代人の心の広がりの中にある二つのもの、神と人との関係について考えて見ましょう。今の世の中の人々にとって、神を信ずる信じないに関係なく、神様というものには人からは見えないもの、触れることも理屈で考えることも出来ないもの、ということでしょう。ですから神様とは人間にとって何か分らないけれど、ただ信じることだけ

が出来ると言うことになります。人間の五官感覚ではとらえることが出来ないが、信仰する人にとっては、完全に存在するもの、ということになります。哲学的に言うると超越的存在と呼びます。

「私は神を信じます」という場合、その人は神様とは自分を愛の心で抱いて護って下さるもの、とは信じて、その神様とは具体的にどのようなものなのか、神様の内容如何ということは全然知りません。神様自体は分らないものなのです。それは神と人との間に壁があることです。現代人の心の中にはこの空間の壁が厳然と存在していて、神様の住む世界の内容を知ることなど、それこそ夢か空想でしか出来ないものと思ひ込んでいます。

以上お話ししましたように現代人は心の中の時間の壁にさえぎられて神代といわれる古代の人々との心の交流が出来ず、また空間の壁の故に神様とはただ信じ拜むことしか出来ないもの、と思ひ込んでいます。時間と空間の壁の中で誠に不自由な考え方や生活に訓らされてしまっています。その生活が不自由なのだ、ということすら知らないのです。さてそのような壁は現代人の心の中の何処にあるのでしょうか。どんな壁なのでしょうか。

現在の歴史学は過去の古い文献の研究や遺跡の発掘などによって古代がどんな時代であったか、を解明しようとしています。その歴史学の実証主義的な研究はそれなりの成果は挙げています。けれど日本の古代を探る現代の歴史学の研究の前に大手を広げて立ちふさがっている壁の存在に歴史学者は気付いていません。ですから現代人の心も古代人の心も全く変りないものと思ひ込んで、現代人の心をもって古代のことを推理してしまうのです。現代人の心の中にある壁に気付かぬ限り、歴史学が日本の古代の様相を明らかにすることは百年河清をまつに等しく不可能と言うより他はありません。

神社神道が興って現代まで二千年の歳月が経ちました。正月や神社の祭日などには神への参拝者は跡を絶ちません。けれどそれら神社への参拝者の心はすべて御利益信仰です。家内安全・商売繁昌・受験合格等々、多かれ少なかれ御利益ほしさの参拝です。壁の向うにいらっしやる神に御利益を与えて下さるよう頭を下げます。

参拝者だけではありません。神社の側でも御利益を宣伝して参拝者の数を増すことに専念しているように見受けられます。人間と全くかけ離れて、しかも絶大な力を持つ神、

という立場を強調することによって、神社の繁栄をはかることにみに熱心です。神は御利益を与えるもの、人は御利益を頂くもの、と区別をはっきりすることは、神と人間の壁を更に強固にするばかりではありませんか。

歴史学や考古学が現代と神代との間の時間の壁をこわす事が出来ず、宗教が神と人との間の空間の壁を更に厚く固いものにするばかりだとしたら、既存の全ての手段は「壁」に関する解決法とはなり得ないこととなります。現在の歴史学に頼らず、宗教にすがらずに人間の時間と空間の壁の正体を探る方法は何処にあるのでしょうか。

現代人の心にわだかまっている壁が何であるかはつきりと認識する方法がただ一つだけあります。心の中の時間の壁はどうして出来たのか、を人類の歴史の上で説明することの出来る方法は、また心の中の空間の壁は何処にあるのかを人間の心の構造の内部にしっかりと指し示すことの出来る方法がただ一つだけあるのです。それが言霊の学問です。

これから言霊学によって現代人の心の中の壁に光を当て、その正体を明らかにし、心の中から壁を取り除いて、現代人が考えたこともない、時間と空間の自由な天地に遊

ぶことが出来る道を考えることにしましょう。

先ず人間の心の中の時間と空間の壁は何時出来たのでしょうか。どのようにして作られたのでしょうか。

壁は人類の初めから存在していたものではありません。心の時間の壁も空間の壁も同時に、日本の歴史の流れの中の或る時点で於ける或る事件によって日本人の、そして人類全体の人々の心の中に構築されたのです。「そんな事があるのかな」と不審に思われるかも知れませんが、全くまぎれもない事実なのです。それは何か、何時のことか——

その事について日本書紀の第十代崇神天皇の章に明らかに示されています。

「是より先に、天照大神・倭大國魂、二の神と、天皇の大殿の内に並祭る。然して其の神の勢を畏りて、共に住みたまうに安からず、故、天照大神を以つては、豊鍬入姫命に託けまつりて、倭の笠縫邑に祭る。よりて磯堅城の神籬と立つ。……」

右の日本書紀の文章を分り易く要約しますと次のようになります。「その時まで天照大神（と大國魂神）を天皇の御座所にお祭りして来ましたが、神様の勢の強すぎるのをお

それ、神と天皇が一緒にお住みになることが出来ず、神様を宮中より出して笠縫の村に御祭神としてお祭りした」というのです。

一般に神様をお祭りする、といえば、今迄尊いとも何とも思わなかつたものの尊さを知り、それを尊び神社を造つて御祭神としてお祭りすることを言います。けれど日本書紀にある崇神天皇の「神として祭つた」という行為はそれとは全く違つた意味なのです。その真の意味内容について日本書紀の作者は殊更にはつきりとは書きませんでした。ですから後世の、そして現代の国学者や神道家は単に「それまで宮中にお祭りしてあつた天照大神を笠縫の村に遷宮した」と、いとも簡単に解釈したに違いありません。けれども事實はその解釈とは途方もなく違つたものであります。言霊学の立場から素直に日本書紀を読みますと、その意味の違いが明らかに見てとれることとなります。

では事實はどうだったのでしょか。

太古以来日本の国は精神の原理であります言霊五十音布斗麻邇の原理をバックボーンとして建国され、その原理によつて日本語を作り、文明を創造して来ました。政治の最高責任者である天皇は五十音言霊の原理の現実的な自覚者

(靈知り)でありました。その精神文明華やかな時代を古事記・日本書紀は神代と表現しました。言靈の法則によって得られた政治の最高原理の精神構造を天照大神と呼びました。

「形而上を道^{みち}といい、形而下を器^{うつわ}という」とあります。精神的な政治・道徳^{みちがみ}の規範^{かぎ}を天照大神と呼び、それを器物として表徴したものが八咫^{やた}の鏡^{かがみ}です。「その時まで天照大神を天皇と同じ宮殿に祭っていた」というのは、天皇御自身が五十音言靈による人間の精神構造を知っている覚者であり、その原理によって実際に政治を行う責任者であったという事を意味しています。

ですからその天皇が自覚していらつしやつた原理としての天照大神を天皇の御座所から離し、笠縫の村に遷^{うつ}し祭つたということは、五十音言靈の原理を政治の運用法として活用することを止め、ただ信仰礼拝の対象の神としてだけ残して、日本国家の精神文明のバックボーンとしての生き残原理は社会の表面意識から隠してしまつた事を意味するのです。

人間の心の中に生き続け、その自覚によって文明を創造して来た言靈の原理は、神として岩戸の中に、実際には神

社の中に隠れてしまいました。神と人との直接の交流がなくなつてしまいました。その時以来、人間の心の中に厚い壁が構築されたのです。文明の創造上、そんな重大な事が何故実行されたのでしょうか。度々この紙上で、お話ししてきましたように、精神文明に代る世界の物質科学文明の創造を促進するため弱肉強食・権力闘争の社会を現出させる方便でありました。

この時以来、日本人のそして広くは世界の人々の心の中に時間と空間の壁が次第に厚くなつて行きました。精神文明豊かな平和な時代が実際に長く続いていた事実は、この時以来昔の人の夢物語と思われるようになりました。神とは人間の心の中に生き、五十音言靈原理として自覚することが出来るという事実は忘れ去られ、神はただ信仰し御利益を願う超越した存在としてのみ考えられるようになって行つたのです。

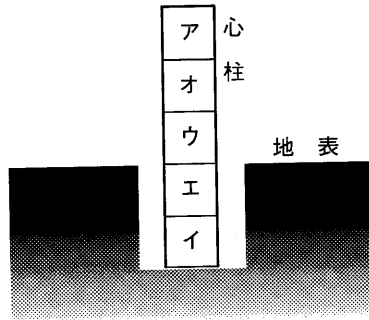
心の壁が何時から出来たのか、は右に示されました。それでは壁は心の何処にあるか、を考えてみましょう。

この答えは伊勢神宮の本殿下に祭られている心柱(忌柱^{いみはしら})の建て方が明瞭に示して呉れています。前にお話をしました事ですが、伊勢神宮の御祭神である天照大神は

本殿の床上、御船代の上に八咫の鏡を御神体としてお祭りされています。その御神体の丁度真下、床下に心柱が伊勢神宮の最も重要な秘儀として建てられています。

この心柱は松製で、太さ・長さに関しては時代によっていろいろな変遷があったようですが、鎌倉時代(一二七九年)の「内宮仮遷記」によりますとその時までの心柱は長さ約五尺、その内約二尺が地中に入っていたといえます(図056・A参照)。この一見奇妙な柱の建て方は何を意味しているのでしょうか。言霊学の見地から見ますと、先にお話ししました伊勢神宮を創建しました崇神天皇の意図を明瞭に説明する建て方であることが分つて来ます。そして壁が心の何処にあるか、に答えてくれるのです。

図 056-A



た構造であり、床下の心柱はその八咫の鏡を生む基礎となる人間の天与の性能を表わす五十音図(伊耶那岐神の天津菅麻音図)の母音の並び方を示しているのです。八咫の鏡は精神の完成構造であり、心柱はその基礎原理というわけです。心柱は親で鏡は子、という関係です。

菅麻音図の母音は縦に上からアオウエイと並びます。五母音を上から説明しますと言霊アは感情の宇宙、そこから芸術・宗教の社会活動が起つて来ます。言霊オは経験知の宇宙、そこから学問・科学が現われて来ます。言霊ウは五官感覚に基づく欲望の宇宙、そこから産業・経済的の社会活動が起ります。言霊エは実践智の宇宙であり、そこからは道德に基づく政治活動が現われます。言霊イは人間の創造意志の宇宙であり、その活動によって今迄お話ししました言霊アオウエの四性能が働き出すところの人間の根本性能という事が出来るものです。人間の心は以上の言霊アオウエイの五段階の宇宙に住

み、それ以外の宇宙はありません。

人間の心の宇宙が以上の五段階の構造なのだとしたら、心の壁は何処にあるのでしょうか。それを伊勢神宮の心柱の建て方が示しています。図を御覧下さい。壁は心柱の五母音アオウエイの言霊ウとエの間に存在します。現代人は言霊エとイに関しては全く目隠しされているのだよ、と告げるように心柱の五分の二の部分^二が地表より下に埋められています。その地表に当る処が壁なのです。

伊勢神宮が創建されてより二千年間、人々は言霊アの芸術・宗教活動、オの学問・科学の研究、それにウである産業・経済活動は盛んに行ってきました。心柱のうち言霊アオウの三尺が地表より上に出ているように、その三活動は目覚ましいものがありました。けれど言霊エである道徳は全く暗澹たる有様となりました。「何々すべし」「何々すべからず」の道徳は叫ばれても、その道徳の心自体に厳然たる法則のあることはすっかり忘れ去られてしまいました。権力闘争の政治はあっても、道徳に基づく理想の政治は夢物語になった二千年間でした。

夢物語でも語られている内はかすかな存在があるというものです。人間性能の最終段階、心柱の最下段が表徴する

言霊イの創造意志については、ここ二千年間、人々からその存在すら忘れられてしまいました。人間が社会に於いてウ(産業)・オ(学問)・ア(芸術・宗教)・エ(実践道徳)による文明を創造して行く上での根本原動力であり、生命意志の原理でもある言霊イ(言霊原理)は正しく生きた神そのものであります。人々はその存在を忘却し、ただ神社の中の拝む神として、人間とは全く超越した存在として祭り上げてしまったのです。人類は長い間自分にとって一番大切なものの自覚を失ったのです。

その結果、人間の社会はどうなつたでしょうか。言霊ウの世界では限らない欲望の追求が始まり、正に強いものが弱者の肉を食う獣同様の社会が現出しました。戦争が終つた瞬間から次の戦争の準備が始まる戦乱の世となりました。言霊オの学問科学は物質的豊かさをもたらしましたが反面精神的荒廃の「おまけ」がついてしまいました。言霊アの芸術・宗教は末法の世に金権と欲の奴隷と化した感があります。無理ありません。本来人間には五つの基本性能が備わっているのに、ここ二千年間、人類はその内のたった三つの性能の存在しか自覚せずに暮すことを余儀なくさせられたのですから。

自分の本来の行動範囲の五分の三に人間を押し込めたもの、それが心の中の壁です。壁は目にも見えず、触ることも出来ないのですが、厳然として存在し、私達の自覚をさえぎっています。仏教の禅宗ではこの壁を無門関と呼びます。正に門のない関所です。この壁は実は壁の向うにある人間の本来の性能の働きを邪魔し、動かなくさせているわけではありません。人間天与の五つの性能は人間がこの世に生きて行くためにフル回転しているのです。ただ人が生れてこの方、三つの性能以外、他の二つの性能の存在については誰も教えてくれない世の中が二千年間も続いていて、人々はその存在を自覚することが出来ず、その為人間はその行動を正確に認識することが出来ず、また起って来た事態に的確に対応することが出来ないでいるのです。

このような人間の不自由な社会の仕組みがこの世にもたらした唯一のお土産、それは三千年間人類の生存競争社会が開発した物質科学の華々しい成果であります。生きた言霊の原理を神社の本殿の中に押し込め、神と人との間を壁でさえぎった崇神天皇の意図は今や完全に達成されようとしています。ごく近い将来、科学技術によって得られた武力と金権によって世界は一応の統一を果すことでしょう。

しかし人間の心の中に壁を作った目的は達成されても、その壁が今ここで取り除かれなかったら物質科学だけが独走する地獄社会を招来することとなるでしょう。赤信号は已に点いています。核開発・環境破壊その他物質科学の独走の行く手には危険がいっぱいです。科学は限りなく人間社会を便利にはしますが、人類が如何に生きて行くか、の指針は何一つ与えてはくれません。

人間の心の中の壁を取り除くべき時が来しました。けれど過去二千年間の既存の如何なる方法も壁を除く事は不可能です。ではどうしたらよいか。人が迷った時、迷いを払うただ一つの道は原点に帰ることでしょう。人は時間を遡って壁が作られる以前の古代の心に帰ることです。空間の壁の彼方に踏み込んで、失われた神、超越した神を自分の胸の内に取り返すことです。その唯一の道は崇神天皇が伊勢神宮の中に祭り込んでしまった生きた言霊の原理をわが心の内に自覚することにあります。

五十音言霊の原理は二千年前まで生きた道徳政治の鏡として人類の精神文明を創造していた時と同じ姿に、現代人が理解し、自覚運用することが可能なまでに復元整備されました。人類はその昔、輝かしい精神文明を創造した後、

第二の物質文明を造る為の苦悩の二・三千年を放浪し、その目的を達し、今や漸く心の故郷である最初の精神の安養浄土に復帰することが可能となりました。希望の彼方に待っているのは心と物が完全に噛み合つて矛盾のない自由で平和な人類の第三の文明時代です。

「みたまあがり、去にませし神は今ぞ来ませる。魂箱たまばこ持ちて去りたるみたま、魂返へしなせそ」(石上神宮鎮魂歌)

魂箱(アイウエオ五十音言霊図)を持って、この世の中から高天原の天界に去ってしまった神が今この世に帰って来ました。もう天界に再び戻らないで下さい、と石上神宮に伝わる鎮魂歌が私達日本人に教えています。

人類社会はこの三千年の間、宗教・芸術に代表される精神文明と科学・産業・経済に見られる物質文明というお互いに相容れることがない二つの文明の相克の世相を生きて来ました。これら二つの文明を、東の大関宗教・芸術文明、西の大関科学・産業文明として左右に従え、地球という土俵の中央に登場する横綱、それがアイウエオ五十音言霊の原理であります。

横綱不在の土俵は歴史の仮初めの姿です。その土俵は波

瀾万丈であってもドングリの背比べ、縮りがありません。

世界は八苦の娑婆しやばを抜け出すことが出来ません。科学・産業に見られる探究心と欲望、宗教・芸術の目標である平安と美の精神を程よく調和コントロールして、人類の恒久平和の文明時代を創造することが出来るただ一つの精神の横綱、それがアイウエオ五十音言霊の原理なのです。相撲の横綱が化粧廻しの上に締める注連縄は二千年前、相撲の元祖野見宿弥以来の五十音言霊の名残です。注連縄は言霊八父韻ヒチスキミリイニを表わしたものです。

日本語の中に奥深く隠されていた人間精神の宝、五十音言霊の原理は固い心の壁を突き破って人間の意識に甦って来ました。その心の真理を手にして人類の第三文明時代を築く要かぎとなることが神代より定められた日本人の永遠の使命なのであります。

【収載】第五十六号(平成五年二月)

●旗印(思い出すこと、思うこと)

当会の名称は言霊ことたまの会といえます。会屋の玄関ドアの脇にその表札が掛っています。この名称・表札はいわゆる会

の旗印でもあります。旗印とは昔から個人又はグループが世間に向つて「私(私達)はこの様なことをやっているのだ」と宣言したものです。

言霊の会という表札を見た人は何をする処だと思つてしようか。言霊という言葉を知っていればの話ですが、多分「言霊のことについて研究し、その成果を発表し、世間に向つて普及・宣伝を目的とした会だろう」と思うはずですが、全くその通りに違ひないのですが、言霊の会にお入りになり、言霊の原理を勉強されますと、この会が言霊原理の研究・普及・宣伝という旗印だけでは充分に言い表わすことの出来ない内容を持つてゐることに気付くことになります。言霊の会には表に出ない別の色々な顔があるのです。それは何か。

言霊というのは、人間生命を精神の側から研究した結論である生命の根本要素のことです。言霊研究によつて人間の心の構造が明らかに理解されて来ますと、現在の世の中の常識と思われている色々な物の考え方の内容が如何にも不完全で誤りの多いことに気付くのです。その主たるものとして現在の宗教の矛盾、教育の退廃、道徳政治の欠如：等々が挙げられますが、それよりも更に重大なのは歴史

の問題です。

現代の歴史学は日本の歴史二千年、世界の歴史五千年などと申します。言霊の原理によつて日本の言葉の起源が明らかにされ、その視点から現代の歴史学の主張するところを見ますと、その余りにも近視眼的な見方、片寄つた見方、推理小説的であることが分つて来ます。言霊の原理によつて理解された人間の心の全構造の立場からその歴史を見直しますと、個々の人間の行為の集りである国家とか、人類とかいふものの長年の歴史の流れの筋道が今の歴史学が教えるものとは一風も二風も違つたものとして、人類生命の生きた大きな躍動のドラマとして事細かに理解されて来ます。

過去の人間の営み、人類の歴史の筋道が明らかになりますと、次に当然のことですが、日本は、また世界はこの先どのように變つて行くか、現状に対してどのような手を打つて行つたらよいか、の見通しや方策が自ずから心の内に浮んで来ることになります。

以上のような日本と世界の歴史とその将来に関する見通しの問題は、言霊の会の表札が示します言霊の研究・普及という原理・法則そのものの問題ではなく、言霊原理の応

用・活用から生れて来る事柄です。そこに言霊の会のもう一つ別の顔が姿を現わして来ます。

そこで、言霊の会は当然もう一つの顔、もう一つの表札・旗印を持つことになるのですが、そのもう一つの顔に何という名前を付けたらよいのでしょうか。筆者に言霊の学問を教えて下さった小笠原孝次氏は会の持つ二つの顔に、それぞれ「皇学研究所」と「第三文明会」という二つの名称を付けていました。

さて先師が掲げていましたこの二つの表札・旗印について今、思い出すこと、また新たに思うことなどをそのまま記して、読者の御参考に供することにしましょう。

私が初めて言霊の学問の教えを受けようと小笠原孝次先生の御宅に伺ったのは確か一九六三年、昭和三十八年、東京オリンピックの前の年のことでありました。当時先生は現在の東京都大田区西六郷、京浜急行線雑色駅（ざっしやく）より徒歩五分程の小さい神社の境内にある町会事務所の一隅に奥さんとお二人で住んでいらっしやいました。

案内を乞い、自己紹介をし、言霊学のお話をお聞きし度いと希望を述べますと、八畳程の一室に通されました。出

てこられた先生に挨拶し、更めて言霊学の入門の希望を述べますと、先生は色々私の勉強の経歴について質問されました。その会話の合間にふと先生の後ろの文机の上に立てかけられた長さ三十糎程の手製の表札に墨痕あざやかに書かれた文字、それが「皇学研究所」の五文字でありました。

私が初めて言霊の学問に入った時、その学問所の表札は言霊の会ではなく、皇学研究所であったのです。

その日は秋の陽がさんさんと輝く和やかな日であったと記憶します。先生は開口一番「言霊の学問は真面目な宗教なら何でも構いませんが、宗教信仰を卒業した方に説くべき学問です。何故なら言霊とは理屈ではなく事実そのもの、人間の生命そのものであり、生きた存在だからです。けれど結論を最初に言っても貴方には何の事だか分らないでしょうから、理論で説明が出来る処まではお伝えしましょう」と言って懇切丁寧に言霊五十音の学問の概要を話して下さいました。

その日を私の言霊学の入学日として、言霊学の勉強が始まりました。当時私は信州安曇野（あづみのの）に住んでおりましたので、月に一回上京し、先生の講義を受けました。その頃は先生御手製の謄写版の会報が月一回出る以外は何の教科書も参

考書もありません。ただ先生の御話の要点をノートに筆記して、家に帰ってからそれを繰返し読み直して、また先生の御話を思い出しながらの勉強が続いたのであります。

「言霊学の教科書は古事記・日本書紀です。参考書は仏教、キリスト教・儒教・教派神道の教典・経典それに東西の哲学、日本及び世界各国の歴史書です。また心理学・深層心理学等々も参考になるでしょう。そのうち、人と資金が集まれば、言霊学を教える道場と現代向きの教科書を作ろうと思います」これが先生の口癖でありました。

先生はまたこうも言われたものでした。「聖書や、仏教経典はそのものを読みなさい。現代の人々が書いた解説書を読まない事です。末法の世と言われるように、その解説には間違いが多すぎて、イエス・キリストや釈迦の真意を伝えていません。読み難く、時間がかかるかも知れませんが、経文や聖書の原典を読んで下さい」

まことに先生は明治生れの人によく見られる謹厳実直、理論の上でどんなアイマイさも残さない明快な言葉で話されました。また大変な博識で、世界の宗教の経典に詳しく、哲学・歴史学・論理学から東西の戯曲・小説・歌舞伎・和歌・俳句等々その才能・知識は驚くばかりでありました。

また時々訪れる欧米人とは何時間でも英語で対応する程英会話は堪能でありました。

次に先生の説く文章の一端を紹介しましょう。左の文は先生の論文が初めてまとまった一冊の本として出版された「第三文明への通路」の序文の書き出しであります。

「これから人間性の原理と世界文明史の真相について申し上げる。事は世界宗教と科学に関する問題であるが、従来の宗教や哲学の上で神とか仏とか言われて来た薄ぼんやりした観念を説教するわけではない。日本を中心とする歴史の流れを説くのであるが、国体信仰とか民族信仰とかいうような、閉鎖された島国的思想に立脚した言挙げではない。また人間性の本質に徹底的に触れることとなるが、然し業縁とか煩惱とか或は霊の作用とかいうような未解決な個人の物欲しげな暗中摸索の内容を引きずり回すわけではな

5。

神とか仏とか国体とか民族とか因縁とか霊とか、そうした問題の一切を明瞭に解決し得た結論である生粋の人間性の根本原理を三種の神器という。その神器を奉戴運用して全世界を指導経営して居られることが惟神の日本天皇の天職である。その天皇の指導の下に生命の芸術である文明の

創造に孜孜としていそしんでいる者が全人類である。その天皇の活動の全局についてこれから申し上げる……」

そしてその天皇(スメラミコト)と言われる人とはどんな人であるのか、どんな事をする事が出来る人なのか、を言霊原理の上から明らかにする学問の府が皇学研究所というわけでありました。

私が小笠原先生の教えを受けて言霊学の勉強を始めて数年が過ぎました。その間、私は居を信州より茨城県下妻市に移し、近くなった事として先生の御宅に度々伺いしてお話を伺っておりました。その頃先生の御宅も西六郷より渋谷区幡ヶ谷に変わっておりました。私の言霊学の勉強は理論の上ではほぼ理解が出来、他人にもお話が出来るようになっていました。或る日、先生の話伺い、終って帰ろうとした時でした。「島田さん、明日からも来ないでいいですよ」という先生の声が私にぶつかって来ました。突然の事で私は意を解しかねました。「何故ですか」との私の間に先生の余りにも素気ない答が返って来ました。「貴方に言霊の理論は全部お話しした。今の貴方にとってもう私(小笠原先生)は必要がない筈です。言霊は生きた生命です。理

屈ではありません。貴方が自分の心の中の生きて動いている言霊をつかまえたなら、その時はまたお会いしましょう。

更に「生きた言霊をつかまえるには、どうしたらいいのですか」と質問しようとする私の声をさえぎるように「さよなら」と一言、先生はもう後ろを向いてしまっているのです。取りつく島もありません。私は鳩が豆鉄砲を食ったように、ただ一礼してその日の訪問を終えました。

この時から私の反省と瞑想の生活が始まりました。一所懸命勉強した色々な知識や言霊の学問は頭の一隅に片付けて、理屈でない生きている生命の瞬間を見ようとする仕事です。この事は既刊「言霊」に告白しましたので省略することにいたします。私が瞑想の最中、仏教の経典で寂光の浄土と呼ばれる生命の光に満ち満ちた無限の宇宙、自分という人間がそこに産み落とされ、そこで息づいている広い広い宇宙を垣間見ることが出来たのもこの時分であります。その光を見た日は夜眠るまで幸福感と感謝の念に包まれ、心も体も心底より温かく、道端で会う人達がまるで生れた時からの知り合いのように懐かしく感じた事を記憶しております。

今でこそその自分が体験した宇宙を寂光の浄土だとか、

生命の光などと表現していますが、初めて体験したその時は、それが全く経験した事のない奇妙な出来事であり、自分にとってどんな意味があるのか、何と表現すべき現象なのかも知らないのです。いくら「もう来ないでいいですよ」と言われたとしても、こればかりは先生に会って聞いてみるより仕様がありません。早速東京の京王線幡ヶ谷駅近くの先生の御宅に飛んで行きました。

先生の御宅の玄関のドアを開け、「今日は」と声をかけました。私の顔を数カ月ぶりに見た先生は即座に「島田さん、貴方も見ましたね、光を。さあ、お上がりなさい」と声を掛けてくれたのでした。そして私が見た光の世界が阿弥陀経の中に「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、微妙・香潔なり」と書かれた極楽世界、寂光の浄土であり、禅宗で現象が生れ出て来る元の「空」と呼ばれる宇宙である、ということを懇切に教えて下さいました。

更に先生は次のように言われました。「人は全てこの光明世界に生かされています。ただ過去の思いを引きずっていたり、まだ来ない明日の取り越し苦労などのために、心が常に活動している今・此処を見るのが出来ないでいます。今・此処に活動する人の心は常に光明世界に住んでい

ます。そして今・此処に活動する心の内容、それが五十音言霊なのです。光明を見た後では言霊の原理は何故と問う事なしに、ただ事実として心の中で確認が出来るはずで、同志として共に研究して行きましょう」そして記念として先生が初めて光明世界を見ることの出来た体験記「明滅」の原稿を私に下さったのでした。

先生は「第三文明への通路」の出版と時を同じくして「皇学研究所」の活動機関として「第三文明会」を発足させました。

「劫初以来人類は二つの仕事をした。しかもたった二つきりである。その二つとは太古に精神文明が完成したこと、現在物質科学文明を完成しようとしつつあることである……」そして第一の精神文明と第二の物質科学文明とが車の左右の両輪のように相協力して新しい文明を創造する時代が近い将来、必ず来ることの予言と、その時代を実現するまでの歴史的経過を、第一の精神文明の中心であった言霊の原理に基づいて事細かに解説したのでした。

「第三文明への通路」の原稿は昭和三十年代の前半に書かれ、昭和四十年に出版されたものですが、その中に見通された世界と日本の情勢の予想は、以後今日までの三十年余

の推移を見事に描き出しています。昭和三十年代、日本は漸く敗戦の荒廃から立ち上ろうとしていた時でした。その時已に先生は日本の今日の経済的隆盛を予見し、更に今世紀中には世界の中心となる事を明言しているのです。そして最も重要なことは、日本がそうなった後で、日本民族が世界の歴史の中で本当の使命を遂行しなければならぬ事、その使命達成に不可欠なのが日本語の中に秘められた言霊の原理である、と断言していることです。

先生にとつては、言霊の原理の研究機関は皇学研究所であり、原理の応用・活用による歴史創造の仕事場が第三文明会ということであつたのです。先生はその教えの理解者も少なく、研究会報すら満足に出されなかつた時から、会の旗印は高々と掲げておられたのでした。

当時会の活動費用は乏しく、会報は全くの手製でした。先生がご自分の原稿を自ら謄写版の原紙に切り、手を真っ黒く染めながら印刷されました。私も時にはお手伝いをしたのですが、達筆の先生の代役は務まらず、会報の封筒入れや切手貼り等をやらして頂いた事を懐かしく思い出します。

年が過ぎて行きました。その間、先生の著書が次から次へと刊行されました。「古事記解義言霊百神」昭和四十四年、「大祓祝詞解義」同四十五年、長年発行した会報を校訂してまとめた「世界維新への進発」同五十年、「言霊精義」同五十二年、「言霊開眼」同五十五年、「言霊入門無門関」同五十七年であります。新しい出版毎に先生の思索が深まり、言霊の真実の姿が生き生きと描き出されて来るのが分ります。言霊布斗麻邇の原理は先生一代にてその全貌の大半が太古にあつたと同様の姿で復元された、と言つて過言ではありません。

昭和五十七年（一九八二）、先生は七十九才になられました。その昔、大学のポート部でコックスを務めたという先生の体力もかげりを見せて来ました。昭和五十七年十月に刊行された先生の最後の著述「言霊入門無門関」の末尾の章「ぜんしん禅箴」は先生が病床にあられた為、私がお手伝いした拙筆であります。

先生はその年の十一月二十九日、東京都渋谷区幡ヶ谷の病院で亡くなられました。あと三ヶ月ばかりで満八十になられる七十九才でした。先生は東京は下町、浅草の由緒ある商家の長男として生れ、青年時、人間の真実を求めて思

想界を遍歴し、遂に日本と世界の長大な歴史の中の一貫した筋道と、その歴史を創造する人間性の原理を身を以って極められた市井の大学者でありました。神様が天界から舞下りて来て、この世に必要なことを脇目も振らずに全て書き記し、終つたら「はい、さようなら」とさっさと天界に帰つてしまった、といったような方でした。先生が誰にも告げられる言葉は「言霊の原理は、『価なくして与えられたのですから、価なくして人々に与えよ』ですよ」でありました。先生がなくなる少し前、話して下さった事柄の中から印象に残つた事を二つお伝えすることにしましょう。

十月に入つて間もない晴れた日の午後のこと。私は渋谷道玄坂近くの病院に入院中の先生を見舞いました。先生は比較のお元気で三十分程「言霊入門無語集」の内容の検討などとして後、私はお暇を告げ、二、三步帰りかけました。「島田さん」の先生の声に呼び止められ、引き返しますと先生は次の話をしみじみとして下さつたのです。

「僕は長い間、人類の精神の至宝である言霊の学問をして来ました。またその原理の立場から日本と世界の歴史の筋道を知り、今後の世界がどう動いて行くか、どう対応しなければならぬか、を率直に発表して来ました。この予言

はいわゆる靈感でも何でもなく、言霊の原理から見た合理的な結論です。とは言つても発表した本人自身、絶対の自信とか証明を持つてゐるわけではないのです。若し誤つて人の心を迷わしはしないか、何度も何度も反省しました。どんなに反省してもこの歴史の見通しに誤りは見出しませんでした。島田さん、『第三文明への通路』で発表した世界の歴史の将来は本当です」

十一月初め、病院から自宅に帰られた先生をお見舞いに伺いました。奥さんとお二人の前に私が座りますと、先生は形を更めて「これは僕の遺言ですからお聞き下さい」と前置きしてお話なさいました。

「僕は自分のやれることは全部やり終えたような気がします。この位のものでしょう。これから先は島田さん、貴方がおやり下さい。お願いします。おやりになるなら、貴方の思うようにやって下さい。僕のやり方に囚とらわれることはありません。それは忘れて貴方の自由にやって下さい。これが僕の遺言です。ついでで申し訳ないが、僕が死んだら葬式は貴方が出して下さい。出来たら戒名は不要です。やめて下さい。」私は素直に「はい」と申しました。先生はその月の二十九日午後六時過ぎ亡くなられました。葬式の時、

菩提寺の和尚さんをお願いして、先生の戒名はこちらから申し出のように書いて頂きました。先生の俗名は小笠原孝次。戒名は言霊院孝次居士。

先生がなくなられて一年一年歳月が流れて行きました。

「貴方がやって下さい」と言われた先生の言葉は片時も離れたことはないのですが、私一人のように始めたらいいか、皆目分りません。言霊の仕事をするにしても私が責任を負うテキストもありません。意を決して私が思うように原稿をポチポチ書き始めました。漸く言霊の入門書として「言霊（昭和六十一年四月）、それに古事記に則って言霊を解説し、それに言霊原理から見た世界の歴史とその将来の歴史編を添えた「続言霊（昭和六十二年十月）が出来ました。準備完了、いよいよ微力非才、徒手空拳そのままの私が言霊の研究、普及の仕事を始め、先生との約束を果す時が来ました。昭和六十三年七月、会報「言霊研究」の第一号の発行となりました。

さて活動開始に当って問題なのは会の名称です。活動の旗印です。名称は色々考えられます。先生の使っていた名称をそのまま使わして頂くのも良いでしょう。また別に現代風な名もいくつか頭に浮かびました。けれど名称ばかり

でなく、会の運営をどう進めて行ったら良いか、どんな宣伝をしたら良いか、何も分っていません。何もかも振り出しなのです。そう、迷った時には原点に、零点に帰れば良いのだ、と思いました。「貴方の好きなようにやって下さい」先生の言葉が蘇ります。会の名称も原点に帰ろう。表札を見てそのものズバリの名、「言霊の会」と名付けました。会報も初めは知合いに読んでもらおう。その内に会の体裁も次第にはつきりして来る事だろう。何事も自然体、気張らない出発でありました。

このようにして、言霊の会は発足しました。会報「言霊研究」は第一号が発刊して今年で満五年になります。今月で五十七号です。この間日本も世界も大層な変り様をしました。ソ連邦を初め東欧共産圏の政治的解体による東西冷戦の終結、日本経済の膨張とバブルの崩壊、湾岸戦争による民族主義の退潮など、そのめまぐるしい変動は各国の政治・経済界を右往左往させています。東西冷戦後の世界の動向を把握することが出来なっています。科学産業の独走のつけが公害となって地球を覆って来ました。

蟹は甲羅に似せて穴を掘る、といわれます。生きとし生

けるものは本来与えられた性能というものがあり、生物はその性能に従って生活し、その本分から外れて生きることは出来ません。人間もその本来の性能によって生活し、文明を作り、歴史を創造して行きます。その人間本来の性能いわば人間の甲羅とはどんなものなのか、アイウエオ五十音言霊の原理がはっきりと示しています。

人類が歴史という穴を掘る本来の性能は、日本の伝統である言霊の学問によって、心の先天構造である十七個の言霊(五母音・四半母音・八父韻)と後天の要素である三十二の子音、それにン音(文字)合計五十個の言霊として明示されています。人類の歴史創造の原型はこの五十個の言霊であって、五十個より多くも少なくもありません。これが人間のこれっきりの分際なのです。

眼を閉じて静かに座ります。胸中に言霊五十音図がはっきりと輝き出して来ます。そこが世界人類を支える支柱であり、世界の歴史を創造する原点でもあります。

中国の物語「孫悟空」を御存じでしょう。悟空が金斗雲に乗ってどんなに遠くに飛んで行っても、阿弥陀様の掌(たなごころ)の上から抜け出すことが出来ませんでした。弥

陀の掌(田の名の心)とは五十音言霊図のことです。現代の人類という孫悟空は、どんなに乱暴で欲張りであろうとも、五十音言霊の法則から抜け出られることはありません。その法則を自覚した人が居る限り、大昔日本人の先祖である霊知り天皇が原理に基づいて計画した経緯に従って、世界の歴史は誤ることなく理想世界の建設に向ってその筋道を歩み続けて行くことが出来るのです。

言霊の会とは以上のような会なのです。その表札・旗印はただ一つ「言霊の会」ですが、その旗印には色々な顔があることを御理解頂けたことと思います。この会は現在、そして将来も静かに人間が人間である結論の真理を説き、愛と慈悲の眼で世界を見守り、その歴史の将来を澄んだ眼で見通して歴史創造の霊的エネルギーを放射し続けて行くことでしよう。

神代といわれる太古に人類の歴史の筋道を計画した霊知り天皇と同様な、新しい霊知り天皇がこの世に現われるまで、この会は誰にも知られることのない臨時の世界政府でもあるのです。

【収載】第五十七号(平成五年三月)

言霊学随想

●G氏来訪

三月六日夕刻、今迄会った事もないG氏なる人より電話、「吉祥寺の本屋で『コトタマの話』の本を買って読んだ。巻末に紹介されている『言霊』『続言霊』と会報『言霊研究』を送ってくれ」との依頼。その後の話が面白う——

「私は四十三歳の男子、二年前から思いもかけぬ神示(神懸り)が続いている。六ヶ月程前より好きだった読書が全然読む気が起らなくなつた。二ヶ月前から『あめのすがそ』とか『あおうえい』とかの神示が下りる。私には何の事だかさっぱり分らない。同時に『島田に聞け、島田に聞け』というお告げがある。けれど私の知人に島田という人はいない。数日前、町を歩いていて本屋さんの前まで来たら急に入り度くなつた。中に入って足が止つた処の眼の前に『コトタマの話』の本がある。著者の名前を見て驚いたことに島田とある。神示にある名前はこれだ、と思ふ、買って一気に読んだ……

今迄二年近くの間に頂いた神示の中で、自分には何の事だか全く分らなかつた事柄について、この本の中には全部その説明が載っている。『島田に聞け』という神示の訳がはつきり分つた。それで今電話しているのです」

その電話があつた日から二週間程過ぎた三月十九日の夕刻、G氏が我が家を訪れた。礼儀正しい謙虚な人で、一時間半程話をし「また伺います」と言つて本代や会費を置いて帰つて行つた。「読んで沙庭(正否の判断)して下さい」と今迄の神示の一部を印刷した本一冊と最近の神示の自筆の便箋三枚を置いて行つた。最後に私の質問に「この神示を下さるのは国常立命です」と答えてくれた。

渡して呉れた神示の「日月伝文」と名付けた本(二七〇頁余)と三枚のノートを讀んだ。世界の歴史の中でのスメラの経綸とユダヤの経綸の關係、その原動力となる人間の心の持ち方の相違、天津磐境・天津神籬の法則、世の中の大転換における建替え・建直し^{だとう}の到来等々、言霊の原理から見て極めて妥当な事が書いてある。同時に「近い内に世界の情勢について重大なことを教えるから、心を静めて世の中を謙虚に暮しているように」とG氏自身を戒めている。讀んだ範囲では真実のお告げであることが分つた。

G氏の神懸りの御本尊、国常立命とは人類の歴史を創造する精神に付けられた神名であり、その実体が言霊の原理である。だから言霊の立場から見れば、神示の内容やその意義の当否は全て判断出来る。言霊こそ最高の霊能だからである。その点でG氏の神示の内容には何一つ目新しいものはなかった。けれど一つ注目してよい事がある。

物質の世界には時間・空間の障壁があって、好きな処へ直ぐに行く事は出来ない。けれど心の世界にはその障壁がない。或る出来事は同じ因縁を持つ人ならば物質的伝達手段を用いることなしに感知することが可能である。言霊の会の「コトタマの話」出版という出来事を、会のことも、著者のことも知らなかったG氏が国常立命(歴史を創造する神)の神懸りによって知り、訪ねて来たという事実は、世界人類の歴史創造の上に当会の活動が着実に影響を与え出しつつあることの証拠だ、ということが出来る。

霊知りである皇祖皇宗の世界文明創造の経緯が、長い二千年の隠れた裏の仕組から、今漸く表の仕組に姿を現わして来たことの事実を、私達はG氏の来訪によって知ることが出来たのである。

九分九厘の一厘といわれたその一厘の活動が創造の中心

で息付き始めている。新世紀文明創造の時は着実に近づいている。

【収載】第五十九号(平成五年五月)

●釣糸

師より聞いた話である。師がその師・山腰明将氏より言霊学の手解を受け、世に言霊の学が存在を流布宣伝していた時のこと、ある日、群馬県高崎在の禅宗の坊さんに「貴方は弁舌爽やかに言霊の学問を吹聴する。言霊学が人間の心と言葉の学問だ、と言うからには、貴方は当然、禅宗で謂う人間の心の宇宙、空を御存じでしょうな」と言われて愕然とした、という。

この時以来、師は毎日降っても照っても釣竿と釣箱を持ち、多摩川の川辺に出掛けて行った。都会の喧騒を離れ、朝から晩まで釣箱に腰掛け釣糸を垂れた、餌を付けずに。坐禅によって空観を求めたのである。一本の傘が日傘になり、雨傘の用を足した。春から夏に移り、秋から冬を経て、再び春が廻り来た時、師は自らの心の本体が広い広い唯一つのこの宇宙そのものだ、という事が理屈なしに分った、

という。

端坐して 我と私語する 霜夜かな

尿して 仰げば斜め 天の川

師の述懐の句である。昭和二十年代も後半の頃であった。中国に太公望の故事がある。賢人呂尚は大望を抱きながら世に用いられず、自らの才能を認めて呉れる人の来るのを待つて渭水に終日釣糸を垂れた。待つ事久しく、遂に文王に際会し、総理大臣となり、天下太平の政治を行い、太公望と呼ばれたという。約三千年前、周の時代の話である。

私は今、師が釣糸を垂れた多摩川の辺りに住んで、師と同じく釣をしている。餌もなく、鉤も糸も、竿さえない言葉の釣糸を垂れる。何を釣ろうとてか。心の真実の住家である空を求めるためではない。自らの才能を認め用いて呉る主人公との際会を待つのではない。ただ只管に人を釣る。自らの利害を離れて人の心の真実を求め、この世の中の真実を求め、この人類世界の真実を求めることを念願する人、その人を釣る。人間精神の宝である言霊の原理の自覚の下に、人類の歴史の創造に自ら責任を持つとうと志す人を釣る。

その人達と共に手を携え、日本人の祖先、聖（靈知り）天皇の人類文明創造の経綸の仕事に奉仕して、世界の恒久の平和を建設するためである。

私は終日、ひたすらに釣糸を垂れる。

【収載】第六十六号（平成五年十二月）

平成六年

●穀物の種(古事記神代卷)

古事記神代の巻の中の「須佐の男の命」の章に「穀物の種」という一節がある。須佐の男の命が高天原から神逐いに追いつけられる文章と出雲の国での活躍の文章との間にこの一節が挿入されている。角川文庫本、武田祐吉氏注釈の古事記にはこの文の注釈として「この一節は挿入神話である、文章が前の章からよく接続しない事に注意……」と書かれている。太安麻呂は本当に前後接続しない文章を挿入したのであろうか。ところが言霊学から見るとその挿入が矛盾したものでない事が了解される。このことについてお話しよう。先ず一節の全文を載せる。

「また食物と大気都比売の神に乞ひたまひき。ここに大気都比売、鼻口また尻より、種々の味物を取り出でて、種々作り具へて追る時に、速須佐の男の命、その態を立ち伺ひて、穢汚くして奉るとおもほして、その大宜都比売の神を殺したまひき。かれ殺さえましし神の身に生れる物は、頭に蚕生り、二つ目に稻種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき。かれここに神産栗日御祖の命、こを取らしめて、種と成したまひき」

先ずこの一節が挿入される前の古事記の文章の中で須佐の男の命に関するところを簡単に検討してみよう。伊耶那岐・美(二神の子生みによって先ず天の御中主の神(言霊ウ)より火の迦具土の神(言霊ン)まで五十の神即ち五十個の五十音言霊が生れる。その五十神の中の四十九番目の神が大宜都比売の神・言霊コである。大宜都比売の神とは大いに宜しき都を秘めている神という意味で、五十音言霊の一つ一つが集って大いに見事な生命の姿を形造っているそれぞれの要素(コ)であるということの意味している(古事記と言霊(大宜都比売の神参照))。

岐美二神の子生みによって五十個の言霊を得た。次に二神のする仕事は人間の精神生命を構成するこれら五十個の言霊を操作活用することによって人間に与えられた性能を発揮するための理想的な構図、言い換えると心の典型を自覚することである。天の御中主の神より数えて五十一番目の金山毘古の神より百番目の須佐の男の命までがこれに当たる。そして結論として九十八・九十九・百番目の神天照大神・月読命・須佐の男の命が誕生する。これを三貴子と呼ぶ。

御祖である伊耶那岐の神は三神それぞれに統治の分担を定められた。天照大神には「高天原を知らせ」、そして統治の原理として御頸珠即ち言靈布斗麻邇の原理を授けられた。月読命には「夜の食国を知らせ」である。最後の須佐の男の命には「汝が命は海原を知らせ」と御命令になった。そこで三神の分権が始った。天照大神は言靈原理による道徳政治を、月読命は哲学・宗教・芸術を、そして須佐の男の命は海原即ちウの名の原(分野)である科学・産業・経済を分担することとなつたのである。

ところが、五官感覚の対象となるウの分野の分担を命令された須佐の男の命は素直に言われた事に従わなかつた。「速須佐の男の命、依さしたまへる国を知らさずて、八拳須心前に至るまで、啼きいさちき……」と古事記にある。そして伊耶那岐の神の「お前は何故哭くのか」という間に「僕は妣の国根の堅洲国に罷らむとおもふがからに哭く」と答えるのである。伊耶那岐の神は大層忿つて「然らば汝はこの国にはな住まりそ」と言つて神逐ひに追い出したのであつた。その後、古事記「誓約」の章にある天照大神と須佐の男の命との確執があつて、須佐の男の命は高天原から妣の神のいます根の堅洲国に去つて行く。そして出雲の国で

の活躍・経営が始まることとなるのだが、この文章である「穀物の種」の節はその高天原から去ること、と出雲での活躍との間の挿入文というわけである。

以上「穀物の種」の言靈学上より見た意義を説明するのに必要な古事記の文章を挙げて来た。さてここで本論に入ろう。「穀物の種」の一節には先ず「また食物を大気都比売の神に乞ひたまひき」とある。この場面は勿論、須佐の男の命が高天原から妣の国へ行こうとする時のことであることは明白であろう。その時の食物とは何の事であるのか。高天原から旅立つて行くための単なる持参のお弁当ということではあるまい。古事記の神話が全て言靈原理の教科書として書かれていることを思えば、そうでない事は直ぐに分る。では何か。これを知るためには須佐の男の命が御祖伊耶那岐の神の命令に反して何故妣の国に行こうとしたか、の意味を知る必要がある。

言靈そのものの神である伊耶那岐の神言靈イは子を生み生みて最後に三貴子を生んだ。そして三人の御子にそれぞれ統治の分担を定めた。

伊耶那岐の神が定めたこの三権分立の分担とは、初めは勿論永久に言靈原理の法則の行き渡つた高天原日本の中で

の分担という事であった。ところが、言靈ウの物質研究という分野担当の須佐の男の命がその仕事に取りかかって見ると、その時までには確立している精神原理とは一見正反對の法則が物質世界を支配している事に気付いたのであった。その様子を「八拳須心前に至るまで、哭きいさちき」と表現されている。

八拳須とは文字通りでは八つの拳を並べた長さの鬚の意である。「ひげ」は靈氣即ち父韻を表わす謎である。高天原を知らず天照大神の持つ道徳政治の判断力はア・タカマハラナヤサ・ワと父韻が並ぶ十拳劍という。これに対し、この時より始まろうとする須佐の男の命の物質世界探究の判断力は主体・客体自体の自覚を共に欠いて、父韻がカサタナハマヤラ(金木音図)、またはカタマハサナヤラ(赤珠音図)と並ぶ八拳劍と呼ばれる。「八拳須心前に至るまで哭きいさちき」とは、八拳劍の物質世界に於ける分析判断法を心行くまで(心前に至るまで)調べた(哭いた)の意である。言靈父韻に関することなので「哭いた」と表現する。

その結果、言靈ウである五官感覚に基づく物質世界の真理の探究法は、高天原の精神の活用法とは全く違つた方法であることに気付いたのであった。そこで須佐の男

の命は「僕は妣の国根の堅洲国に罷らむと思ふ」と父神に答えるのである。高天原の主観世界ではなく、妣神伊耶那美神のいる客観世界に行つて物質世界の探究を始めたい、というわけである。「姉神である天照大神の統治する高天原精神界には已に立派に完成された言靈布斗麻邇がありま

す。けれど高天原にはまだ発見されていないもう一つの真理があることに私は気が付きました。私は今より高天原とは別の外国へ行つて、客観世界の真理を探究することにし

ましよう」との宣言であります。

この出来事の次に続く「天照大神と須佐男の命との『誓約』の章では、姉弟の二神の精神界と物質界との統治の原理に関して、お互いにその優秀性を競う場面が画かれ、その末に高天原の神々は須佐男の命に「千座の置度」を負せ高天原から追放した事が記されている。千座とは道の倉の意で五十音言靈図を示し、置度とはその前に置いた戸の意味である。須佐男の命が望む「客観世界の探究の結果得られるであろう物質世界の真理は、そのままでは精神原理である言靈五十音の真理に入ることには出来ないぞ」という断絶の宣言ということが出来よう。

須佐男の命が大気都比売の神に食物を乞うた、という「穀

物の種」なる挿入話が、簡単に言つて以上のような前置きの下に於ける話であることを頭に留めてその説明に入ることにしよう。

須佐男の命は妣神伊邪那美の神のいる客観世界の探究に旅立つ前に、大氣都比売の神に食物を下さい、と言つた。

大氣(宜)都比売の神は言靈コ、大いなる氣(言靈子音、実相)で人間の心の宮(都)を形成する存在である。それに食物を乞う、とは客観世界探究の材料となるものは何か、物質研究は何を拠り所に進めて行けばよいのか、その研究の方法となるものを求めた、ということである。そこで大氣都比売の神は自らの身体である言靈五十音を以て、それを結び合わせた御馳走、即ち物事の実相を表わした言葉を須佐男の命の前に差出した、ということである。

大氣都比売の神の差出した言葉は、高天原の精神原理に則つた言葉であり、心の先天構造の法則より導き出された理路整然とした言葉である。ところが、その高天原の精神原理とは違ふ客観世界の物質の真理を求めようと決意した須佐男の命には、その整然とした精神原理が穢汚く思へた。その時まで心の拠り所であつたものが、考え方が違つて来ると、その善悪に関係なく穢汚らわしく思われるものであ

る。先の敗戦によつて、それまで国民の美風と称せられたものが一変して全國民から嫌われるようになったのと同様である。

須佐男の命は大氣都比売の神を殺す。実相を表わす言葉の要素である大氣都比売の神を殺すと、その実相音を裏付けている心の先天構造の生命は失われて、生命の自覚のない物事の名と言葉だけが残される。科学的研究は研究する主体の意識は初めから捨象されている。主体を捨象し、客体を抽象する。生命の自覚を失つた物事の名と言葉は、更に人間の欲望的な経験知によつて破壊される。これが個々の現象の観察から始まる科学研究の態度である。

殺された大氣都比売の神の身体から蚕、稻種、粟、小豆、麦、大豆の六種のもが生れた。須佐男の命の研究対象である客観世界の神産巢日の神はこれらのものを種として用いた、とある。この文章は六種類の農作物が生り、これを種として栽培した、ということではない。そこには人間の思考に関する重大な転換の意義が謎の形で示されているのである。六種類の種とは須佐男の命の物質界探究の思考の種という意味である。

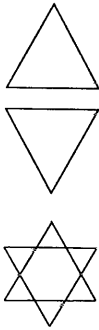
須佐男の命が物質世界の原理を求めて、独自の探究方法

を発見しようと高天原を後にするまで、伊邪那岐御祖の神が須佐男の命に命令した物質世界統治の方法は、已に解明されている精神原理そのものの物質世界探究への適用、ということである。哲学的に言うなら、已に分明に確立されている精神原理である心の先天構造の法則を演繹的に物質研究に適用し、応用して行く事であった。しかし須佐男の命はその方法に満足しなかった。高天原精神界には言靈布斗麻邇の原理でよい。しかし物質研究には他にその世界独自の方法があるはずである。だから従来の高天原の方法を穢汚けがれたものとして嫌った。大気都比売の神を殺してしまつたのである。

精神原理という生命を失つた大気都比売の神の身体から生れて来た蚕・稻種・粟・小豆・麦・大豆という六つものは何を意味するのだろうか。主体の原理である言靈的意義を失つたところから始まる科学的研究の方法——正反合の三角形を成す弁証法である。図で示せば次のようになる(図078・A)。

上図(△)は形而上学的弁証法、中図(▽)は形而下学的弁証法、下図(☆)は

図 078-A



その総合である。形而上・形而下で六つの方法となる。殺されて精神原理の自覚を失つた大気都比売の神である現象音のみの言葉から、その現象の拠つて来る法則を求めようとするには、高天原の演繹的方法を用いることは出来ず、個々の現象をある観点より観察し、データを集め、その関連を推理し、推理を一つ一つ積み上げて行く帰納的な研究方法の開発・発見となつたのである。大気都比売の神の身体から生えた六種の種とはこの科学研究の三または六数を以て表わされる帰納法と哲学で呼ばれる方法のことである〔注一〕。

神産巢日の神とは言靈ワ、高御産巢日の神・言靈アの主観宇宙に対して純客観宇宙のことである。主観の観点より見た宇宙は言靈五十音布斗麻邇の原理として高天原に於て自覚されている。今、客観の方向から宇宙を観察・研究する方法が須佐男の命によつて開発された。神産巢日の神はこの方法を採用し、研究の種たねとすることを承認したのである。「穀物の種」の章の末尾の文章、「神産巢日御祖の命、こを取らしめて、種と成したまひき」とは以上のような意味である。

須佐男の命が高天原より追放され、次に出雲の国の八俣の大蛇征伐の物語となる間に、以上説明して来た「穀物の種」の一節が挿入された理由が了解されたであろう。この経緯を通じて、古事記神代の巻の神話が単なるおとぎ話ではなく、人間の心の余すところのない解明と、その解明された精神構造の観点に立って、日本を含めた世界人類全体の文明創造の歴史の根幹を述べた真理の書であることを銘記して頂き度いと思っております。

〔注一〕この三または六数を基本とする思考方法の話は古事記の前章「誓約」の中の須佐男の命側に生れる多紀理毘売・市寸島比売・多岐津比売の三妃神の話と内容相通じるものがある。

【収載】第七十八号（平成六年十二月）

言霊学随想

● 天地憧憬

平成六年一月三日夕刻、「天地憧憬」というNHKの十五分間のテレビ番組を見た。それは春 酩たげなわの東京は奥多摩の山河の風景を映し出しながら、その奥多摩をこよなく愛した日本画家・川合玉堂の絵と歌と句を随所に折り込んだ美しいテレビ詩集とでも言ったものであった。

画面は次々と奥多摩のやさしい山並みと清らかな溪流を画き、かぶせるように玉堂の歌と句が映し出される。それは美しい自然とその光と恵みに対する画家玉堂の自然賛歌であり、「天地憧憬」である。感動のため詩の文句を覚えていないが、終り近くにあった一句は漸く記憶に留めることが出来た。

「春の影かげ かがやき老の 涙かな」 玉堂

決して上手な句ではないが、絵を通して美の境地を切り開いた老人玉堂が自然の大きいなる 営いとなみみの光と恵みに対し

ての生命賛歌としたら、これ以上の句はないのではなからうか。それは俳聖松尾芭蕉の句

「あらとうと 青葉若葉の 日の光」

と同様の境地であったに違いない。

JR青梅線御岳駅近く、多摩川の溪流の辺りに玉堂美術館はある。その展示室の一隅に「大雪」と題する小品を見た時の感動を忘れることが出来ない。玉堂は一粒の雪も、踏跡ふみあとも画く事なしに奥多摩の道筋の大雪の風景を描き出している。

絵は写生に始まって写生に終るといふ。初めの写生は実物を飽くまでも忠実に写し出す筆の修行である。修行が進めば、先ず筆の付加または省略が起る。絵に於ける自我の主張である。その主張の末に、終りに自我が消え、写生の対象も消え、対象でも自我でもない天地の鼓動、大自然の営みとしての美の世界が現出する。眼前の対象の写生が天地の賛歌の写生に変わる。これが圧倒的な美の世界であり、言霊学で謂う言霊アの境地である。それは真実の「あそび」の心でもある。「あそび」とは言霊アを注ぐ心こころ(霊)の意である。川合玉堂の絵の境地が、俳句の自然賛歌・天地憧憬の心

と一つとなつて私の心を捉えた一瞬であつた。

この美しい山川草木の地球を滅してはいけない、と思う。

その美しい山河を絵に歌に句に小説に見事に表現することが出来る人間の社会を滅してはいけない。人間の住むこの地球の山河は素晴らしく、美を憧憬する人間の能力もまた捨てたものではない。

しかしその美を求める芸術の心にも、愛を説く宗教の心にも、それ自体この混濁の世を理想の世界に転換させる能力は備わっていないことである。それは限りなく美しく、いとおしいものではあるが、あそびの心なのだ。

現代に於て人が騒乱の世を收拾し、恒久平和の世界を求めようとするならば、言霊アのアそびの境地から更に竿頭尚一步を進めて、言霊原理(言霊イ)を学び、その原理に基づいた生命創造の知恵(言霊エ)を自らのものとする事が必要である。

その時、人はこの地球上に精神と物質の根本原理を総合した理想の人類文明を建設するために計画された日本人の祖先である皇祖宗宗の壮大な経綸の歴史とその深い大御心とを発見するであろう。人はこれによってのみ新しい世紀を切り拓く事が出来る。

【収載】第六十八号(平成六年二月)

●太安萬侶の墓

奈良で古事記の編纂者太安萬侶の墓が発見され、その時まで安萬侶とは架空の人物だとの通説が誤りであることが分つた、というニュースを聞いたのはもう大分昔のことである。ガイドブックによれば、その墓は奈良市此の瀬町の茶畑の中にあると記されている。

この度、一年前より「古事記と言霊」のテーマで会報に連載記事を書いていることもあって、安萬侶の墓参りを思い立ち、家内と共に訪れたのは今年二月二十二日の事である。その日の奈良は氷点下の寒さであつた。奈良市内より二時間一本という北野・水間行のバスに乗つて三十分、矢田原口なるバス停で下車、そこから徒歩二十分とある。ところが墓地に至る道標が一本も立っていない。点在する数少ない農家の門口で道を探ねながら、田んぼと畑と茶畑の中の起伏に富んだ農道を進むと雪が降り出して来た。行手が見えなくなる程の大雪となつた。四度道を探ね、ようやく安萬侶の墓に辿り着く事が出来たのだつた。

墓地は小さな盆地状の土地の北側、南面する岡の斜面の

中腹の茶畑の中にある。道路からコンクリートで整備された階段を十メートル以上登ると墓の正面に達する。直径五

米程の円墳である。家内と共に墓前に合掌し、

「高天原成弥栄^{たかまはらのなやかさ}」を三唱し、更に心中で安萬侶の霊に話しかけた。

「貴方が編纂選上された古事記上つ巻の神話によって呪示されている言霊布斗麻邇の原理は、今日までに余す処なく解明され、皇祖皇宗の人類文明創造の歴史の大転換期の今、大いに役立つ時となりました。御安心下さい。誠に御苦勞様でありました。」

心中の挨拶が終った時、あれ程降りしきっていた雪がピタリ止んだ。まるで私の語りかけに安萬侶さんの霊が感応した如くである。透明な静寂と千二百年余を隔てた奈良時代の安萬侶侯に今、まの当り会うような親しさと懐かしさを覚えて来た。家内は「伯父さんの墓にお参りしたみたいなの気持」と言って喜んだのだった。

雪が止んだ寒風の中で、墓の脇に立てられた奈良県教育委員会の史跡指定の立札の文章を書き写した。

史跡太安萬侶墓

太安萬侶墓は、東山山中の田原の里に所在する奈良時代の火葬墳である。

昭和五十四年一月、竹西英夫氏によって茶の改植中に発見されたもので、出土した銅製墓誌により、古事記の編者として有名な、太安萬侶の墓であることが明らかになった。

墓誌には「左京四条四坊従四位下勲五等太朝臣^{あそみ}安萬侶^{みずのとし}以癸亥年七月六日卒之養老七年(七二三年)十二月十五日乙巳^{きのとみ}」の四十一文字が刻まれ、居住地、位階と勲等、死亡年月日、埋葬年月日を記してある。

墳丘は直径四・五米の円墳と推定され、埋葬施設は中心部に墓壇を掘り、そこに木炭を敷いて墓誌を置き、その上に木櫃^{ちくひつ}を安置し、四周と上面を木炭で覆った木炭塚^{かた}であった。さらに、その上の墓壇全体にうすく木炭を敷いたあと、砂質土を版築状に硬くつき固め、木櫃の中には火葬骨、真珠などが収められていた。

奈良時代上級官人の墓としては、このように規模、構造、遺物の出土状況などが明らかにされた例はきわめて稀であり、昭和五十五年二月十九日史跡に指定された。

昭和五十六年十一月奈良県教育委員会

お墓参りを終え、私達は田墳の廻りに作られた道を一周した。太安萬侶の墓が昭和の五十年代になって発見された意義は何か。「奈良時代の上級官人の墓としては、このように規模、構造、遺物の出土状況などが明らかにされた例はきわめて稀であり」と述べられ、またその墓の主が古事記の編者安萬侶であったとは、これを単なる偶然と言えるのだろうか。

否、人類の歴史創造の底を流れる一貫した真理の立場に立つ限り、人間の魂の最も奥にある言霊の原理の観点に立つ限り、単なる偶然ということは決してない。ならば安萬侶の墓の発見された昭和五十四年頃、言霊学研究史上何が起ったのだろうか。直に思い当る事がある。それは先師小笠原孝次氏が「言霊学の研究上のコペルニクスの転回」と呼んだ「立春立卵」の原理の発見があったのが昭和五十三年の立春の日であった事である(会報十九号参照)。

日本書紀神代上の巻頭は「古に天地未だ剖れず、陰陽分れざりしとき、渾沌れたること鶏子の如くにして、漠溼にして牙を含めり……と始っている。鶏子即ち卵の中の生命の牙といえは精子のことであり、言霊で言えばチイキミシリヒニの八つの父韻である。生命活動の初めを日本書紀は

八父韻の實際活動である国常立の命から説き起している。ところが安萬侶の古事記では「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天の御中主の神(言霊ウ)……」と母音存在から説き始める。この両者の違いは何か。

父韻も母音も共に心の先天の内容であり、同時存在なものであるから、どちらから先に生命構造を説いて行こうとも矛盾はない。しかし言霊学を初めて学ぶ者にとっては、母音宇宙の存在から始める方が、八父韻の活動より説き始めるより遙かに心の構造を理解し易い。恒常不変の母音宇宙から説き始める古事記は言霊原理の静的把握であり、八父韻の力動から説き始める日本書紀はその実践的把握ということが出来る。古事記によって人間の心の全体構造を知り、これを卒業して初めて日本書紀が説く八父韻の操作による歴史創造の主人公としての立場に立つ事が出来る。古事記の選上(七十二年)の八年後に日本書紀が編纂されたのには理由があったのである。古事記は言霊学の教科書であり、日本書紀はその言霊原理に基づいた実践の書ということが出来る。学習より実践へ、古事記より日本書紀へ、そこには精神内部に天文学に於けるコペルニクスの転回が要求されるのだ。

太陽が地球のまわりを回るのではない。地球が太陽のまわりを回るので、というコペルニクスの転回を言霊学の上で成就した立春立卵の理論が昭和五十三年に解明され、言霊学を謎々の形で示した古事記の言霊学の教科書としての使命は成就した。安萬侶が後世に伝えようとした言霊の真理が「謎」という呪縛から開放され、真理は真理そのままに光を放ち出した。それは安萬侶自身が自ら創作した謎のベールの暗闇から開放された事でもある。だから太安萬侶は千二百年余の間の沈黙から光明の現世に姿を現わしたのであった。生れ故郷田原の里の茶畑の中から——。安萬侶の墓の発掘は歴史の必然であったのである。

十時五十分、私達は安萬侶の墓に別れを告げた。雪が霽れた往路を引返し、元のバス停に戻った。奈良行きのバスの時刻には一時間余の間がある。暖をとる店屋は一軒もない。奈良方向へバス道を歩く事にした。二停留所程歩いた道脇に質素な立看板が立ち、「春日宮天皇御陵」とある。道路から右直角方向に細い道が真直に延び、百米程先に鉄の柵で囲まれた御陵らしきものが見えた。春日宮天皇とは何人どなたなのか知らない。看板脇の石の碑に見事な和歌が刻んであった。声を出して詠んだ。

石いはし走る　　たるみの上のさわらびの

もえいずる春となりにけるかも

寒くて長い冬が過ぎて万物の生命いのちの春の訪れを喜ぶ光景と共に、先程お墓参りをした太安萬侶の古事記が示す世界文明創造の新たな時代の到来を寿ことほぐ光が心いっぱい広がって来るような歌であった。バス停横の椿の花の赤が眼にしみた……。春日宮天皇とは天智天皇第七皇子信貴王子であることを知ったのは東京に帰ってからである。

【収載】第七十号（平成六年四月）

● 稲

平成六年二月二十三日の朝日新聞朝刊に「稲作、四千五百年前にも」と題して次の様な記事が掲載された。

「岡山県真庭郡美甘（みかも）村森谷の姫笹原遺跡から出土した縄文時代中期中ごろ（約四千五百年前）の土器片から、イネの葉や籾（もみ）穀の細胞化石（プラントオパール）が検出された、とノートルダム清心女子大の高橋護教授（考古学）が二十一日、奈良市の帝塚山大学で開かれたシンポジ

ウムで発表した。稲作の起源は約二千五百年前とされているが、今回の発見でその二千年前に米が栽培されていたことが明らかになった。」

この事で稲作発祥の時が今迄通説であった二千五百年前から一気に二千年も遡る事となる。四千五百年前、縄文時代中期には「大集落が形成され、黒曜石・硬玉等の交易も盛ん。一部に平地(敷石)住居始まる」と日本史年表(三省堂編)に記されている。また四千五百年前と言えば、中国に於ては周以前の殷、その以前の夏の王朝が興った頃に当たっている。

以上は新聞の記事や歴史書に記された事をそのまま書いて来たのであるが、ここで一言言霊学の立場から問題を提起して見よう。新聞で実際に稲作が行われていたと報ぜられた四千五百年前、当時の日本人、即ち私達の祖先は現代の日本人が稲(いね)と名付けている植物を何と呼んでいたであろうか、である。「科学的に当時稲作が行われていた事が分つたのだから、当時それを何と呼ぼうと大した問題ではあるまい」と思われる方が多い事であろう。ところがこの一事が日本の歴史ばかりでなく人類全体の歴史にとっても重大な意味を持っているのだ、という事を告げ度い

のである。以下それを述べることにしよう。

結論から言おう。四千五百年以前、稲は何と呼ばれていたか。矢張り「いね」である。何故か。

「いね」の語源はいの音である。大昔、私達日本人の祖先は人間の心の住家とは何か、を発見した。心は五つの界層宇宙を住家とする。ウ(五官感覺)、オ(経験知)、ア(感情)、エ(実践智)、イ(創造意志)の五界層宇宙である。五重は家(いえ)の語源となった。

この五層の内、創造意志イの次元の見地に立つて人の心を見る時、心とは五十個の要素から成立していることが分つた。この五十個の要素の一つ一つにアイウエオ五十音のそれぞれを結びつけて、言霊と呼んだ。更に五十個の言霊を以て人の心の構造を表わすと、現在私達が用いているアイウエオ五十音図表が出来た。五十音図表は田んぼの形に似ている。言霊は音図の中に入る。稲は田んぼの中で育てられる。そこで稲のことをイの音即ち「いね」と呼ぶことになった、というわけである。日本の古代では全てのものに名は言霊の原理に則り命名されたのである。

稲の語源は明らかになった。しかし語源となる言霊の原理が四千五百年以前に発見されていたか、否かの証明はな

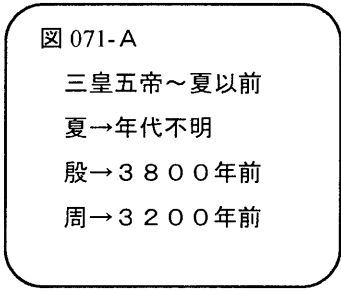
い。その証明はどうするのか。そこに日本と中国との関係が登場する。中国で興ったとされる易経がその証明に充分な鍵を与えて呉れるのである。

易経(岩波文庫・高田真治訳註)を見よう。「易の成立に關しては、古来相伝えて、伏羲が始めて八卦を画し、文王が象辞を作り、周公が爻辞を作り、孔子が十翼を作ったと称せられている……」とある。初めて易を作った伏羲とは何時の時代の人であったのか。

中国の太古の遺跡発掘に關する朝日新聞の記事を見よう。

「三皇五帝とは、夏時代よりも古い中国に伝わる伝説的な聖人たちのこと。三皇とは燧人(すいじん)氏、伏羲(ふぎ)氏、神農氏の三聖人をさす。また、五帝とは黄帝、帝顓頊(てんく)、帝嚳(きよく)、舜(しゆん)のこと。これまでの中国古代史研究では、中国の歴史は紀元前十八世紀頃の殷の時代から始まるとするのが定説。近年はそれ以前の夏時代の存在を証明する考古学的発見が一部で主張されているが、まだ中国国内でも意見が分れている」

以上中国の古代史にもアイマイな点があるが、整理のため中国の古代国家の年代表を作ると次の図071-Aのように



なる。殷の国が始まったのが三千八百年前、その前の夏の国が何年位続いたかは分らないが、夏より更に前と謂われる三皇五帝の中の伏羲なる人の生きた時代は、少なくとも五千年前より下った時代ではあるまい。

伏羲の年代を推定した上で、更に易の繫辭伝を見よう。「河・図を出し、洛・書を出して、聖人之に則る」とある。これだけでは何の事だか分らないが、註に「河図・洛書、河は黄河、洛は洛水。古昔伏羲は黄河より出でたる神馬の文

図 071-B

洛書

四	九	二
三	五	七
八	一	六

河図



いる。易の原理を「河から獲れた神馬や神亀の模様から作
った」などというのは、所謂神代の時代の譬話なのであつ

図 071-D

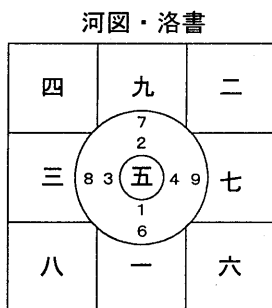
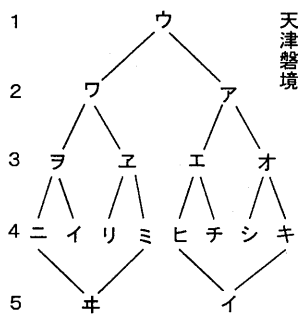
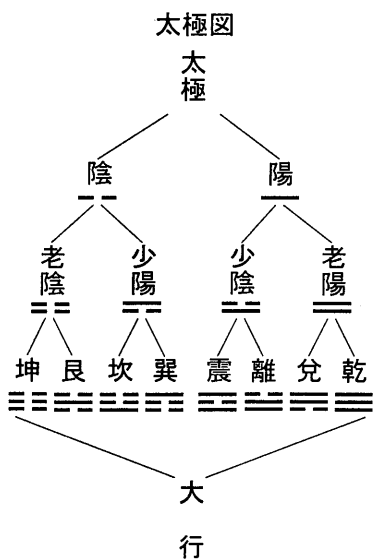


図 071-C



に則り八卦を画し、禹は洛水を治めて神亀を獲、その背文によりて洪範を作りりとの伝説あるを謂う。然れども此の事実の真否を詳にする能わず」と記されて



て、そこに実際の話である言霊の原理と易の理論との関係が粗上にのぼることとなる。

易で河図・洛書といわれる原理を示すと図 071・B となる。この数が入った図形を見ただけでは何の事か分らないであろうが、言霊学で天津磐境と呼ばれる人間の心の先天構造(図 071・C)と比べるとその内容が理解されて来る。磐境とは五葉坂の意である。五段階の構造となっている。この磐境の一二三段までを平面的に数で画くと易の河図となり、四五段が洛書に当る。即ち河図・洛書を合せて天津磐境という心の先天構造が出来上がるのである。この合せたものを易で太極図と呼ぶ。

神の先天構造を表わした同じものであることが分るのである。ただ違うことは、磐境が先天構造を心即言葉である言

以上の比較から言霊学の天津磐境と易の河図・洛書、即ち太極図が共に人間精

靈を以て示しているのに対し、易の太極図は第二次・第三次的な数乃至概念を以て表わしていることである。天津磐境が太陽の光そのものである天照大神の世界のものなのに対し、太極図はその太陽の光の夜間の反射光である月の光即ち月読命の世界のものである事が分るであろう。

太初に言靈字の天津磐境あり、であり、易の太極図はそれより派生したもの、第二次的なものである。歴史的に言うならば、言靈字が先に生れ、易経はその写しである、と言う事が出来る。民間に伝わる歴史書である武内古文書には「鵜草葺不合皇朝五十八代御中主幸玉天皇の御宇、王伏羲来たる。天皇伏羲に天津金木を教ふ」と記されている。「風が吹くと桶屋が儲かる」式の話ではないが、日本で四千年五百年前に稲作が行なわれていた、という新聞記事から、稲（いね）の名の語源、言靈原理と中国の易経成立との関係等について話を進めて来た。中国で易を始めた伏羲なる人物が今からどの位以前の年代の人であるか、正確には知らない。けれど五千年前より下る時代ではない事は確かである。その時代、伏羲に教えた天津金木（易）の原本である言靈布斗麻邇の原理は已にこの日本に存在していた事も間違はなく事実なのである。だから新聞がこの日本で稲作が行

われていたと報じた四千五百年以前、その作物に対して私達日本人の祖先は「いね」と名を付けていた事も了解される。

言葉は人間社会の最も重要な遺跡である、という事が出来よう。一つの言葉から重要な歴史的事実が明らかにされることも珍しくはないのである。

【収載】第七十一号（平成六年五月）

●トップ・クオーク発見

一九九四年四月二十三日の朝日新聞朝刊は一面トップで次の様に報じた。

「万物を形づくる基本粒子クオーク六種のうち、ただ一つ観測の網にからなかった『トップ・クオーク』の存在を、米国、日本、イタリアを中心とする共同研究グループが、米イリノイ州のフェミル国立加速器研究所の粒子加速器で確認した。来週にも公式に発表する模様だ。この報告で、物質の根源を探って来た今世紀の物理学で、最後まで残されていた大きな『宿題』が解決することになる……」

人類が物質科学の研究を始めてからどの位の歳月が経つ

たのであろうか。多分四、五千年位の事であらう。その長
い間の科学研究の究極のテーマは「物質とは何か」であつ
た。右に掲げた新聞のニュースは、科学研究がその究極の
テーマに一応の結論を出す時期が近づいた事を意味してい
る。人類が長い旅路の末に物質科学の完成を祝う日を迎え
ることもそう遠い将来ではなくなつた。

人類が文明創造の時代に入ってから一万年といわれてい
る。現代の日本の平均年齢八十才と比べれば、一万年は短
い時間ではない。その間、人類は當々と自らの文化を築い
て来た。そして私達が現在住んでいる如き文明社会を建設
したのである。

ではこの一万年の間に人類は文明創造の上で、一体何を
やって来たのだらうか。更めて考えてみよう。

一万年の努力の結果、人類は二つの事を成し遂げた、と
言うことが出来る。一万年という年月から言えば「たった
二つのこと」とも思えるし、當々たる努力の積み重ねとい
う立場から言えば「二つものこと」とも思える。その二つ
とは何か。

精神文明と物質文明の二つである。人類は子々孫々代々
に受け継ぐ努力によって、精神と物質の二大文明を完成さ

せて来た、ということが出来る。

人が何かを見た瞬間、それは心でもなく、物でもない。
物心未割である。禅ではこれを「一枚」と呼ぶ。そこに「こ
れは何か」の意識が働く時、一枚は二枚に分れる。見るも
のと見られるもの、主体と客体、心と物である。この二枚
に分れる、ということは人間に与えられた最も重要な心の
法則の一つである。この時、見る側の心をネグレクト(捨
象)して、見られる側(物)の現象を飽くまで外側にのみ見
て一定の概念に従つて抽象化して行く時、科学が成立する。
物質科学はこのような方法基盤の上に研究を進め現代物質
科学文明を建設した。

科学とは反対に、一枚が主体と客体に分れた時、見られ
る側の現象をネグレクト(捨象)し、見る側の心を内側に見
て、自らの生命法則の自覚に進む時、精神文明が成立する。
人類は、物質科学研究を始めた時より更に数千年以前、こ
の精神文明を完成して、その精髓をアイウエオ五十音言盡
布斗麻邇の原理としてまとめている。

あと数年で迎えようとしている新しい世紀は、以上の精
神文明と物質文明が人類の英知の俎上に上り、これら二つ
の文明を総合した新しい文明創造の幕開けの時代となるで

あろう。「トップ・クォーク」の存在確認のニュースは、私の耳に新時代幕開け真近を知らせる予鈴のように聞こえたのであった。

現代歴史学から見た人類の歴史は戦乱・抑圧・貧困渦巻き、自ら誇り得る歴史とは言えないかも知れない。けれど実はアイウエオ五十音言霊の原理によって計画された希望とロマンに満ちた栄光の歴史なのである。

【収載】第七十二号（平成六年六月）

●T氏に会う

先日、T氏に会った。六十才は過ぎていてであろうか、世の中の苦勞を知り尽くした感じの、腰の低い、よく喋る紳士である。

私は日本教派神道家の子として生れました。小さい時から神様はあるものと教えられ、朝晩御神前に礼拝するのに何の疑問もなく育ちました。二十才になる少し前の頃、果して神様は居るのだろうか、疑問を持ち始めたのです。それからというもの、色々な宗教を探し歩きました。どの宗教も神様の有難さ、心の安らぎ、感謝報恩、御奉仕、御供

養、御寄進等々の大切さを説いてくれますが、何かお座形で、その教団の経営で頭がいっぱいとしかわれませんでした……。

四十才頃になって既成の宗教団体に神を求めることを諦めました。自分一人の中に神を求め出しました。水を浴び、滝に打たれ、瞑想し、祈りました。立派な人、と聞けば会いに行きました。何時の間にか五十才を過ぎていました。

神様は現前しません。私は疲れ果てて来ました。望みは絶たれました。夕暮れ間近、ある地方の小さな宿屋の一室にボンヤリと坐っていた時です。突然、私は光を見ました。無数の美しい透明な光に包まれている自分に気が付きました。その光は、その時初めて私を包んでくれたのではなく、実は私が生れた時から私を育き、護り生かさせて来て呉れた光なのだ、という事を感じたのです。あの時の幸福感、安堵感は決して消えることなく六十才を過ぎた今でも続いています。私は小さい、小さい存在ではありませんが、神の子、仏の子、光の子、大宇宙の子であることを知らせて頂きました……。

その時以来、神といい、仏というものが特定の宗教の独占ではなく、この宇宙の中の生きとし生くるものは全て光

に包まれた宇宙の子、神の子であることを証明することが出来ました。現在私は仕合せな人も、悩める人もみんな光の中に生きる仲間として、心通う人々と手をつなぎ、堅苦しい宗教団体などでなく、この世に生きる事の喜びを確かめ合い、頒ち合う人達とのサークル活動に日本中を歩きながら楽しみと喜びの日々を送っております。

以上がT氏の述懐でありました。私は同氏の求道のご苦心と、光に合う事が出来た時の喜び、安堵感の如何ばかりであつたかに心から敬意を表しました。私にもささやかながらその経験があつたからです。するとT氏は姿勢を改めて次のような質問を寄せたのでした。

私は教派神道の家に生れ小さい時から言霊布斗麻邇の学問が神道の極意である、と聞かされました。けれど私は今、光の中に生き、心を同じくする人と力を合せて光の世界を建設して行こうと心は充実しています。この満ち足りた幸福感の現在に、貴方の説かれる言霊ことたまの学問はどんな意義を持っているのでしょうか。この仕合せの現在の私に言霊の学問は更に何を教えることがあるのでしょうか。

この質問に対する答えは次の様なものでした。

日本の古神道言霊の学によれば、人の心は五つの次元宇

宙たまの畳わりの中に住んでいます。それぞれの宇宙に五つの母音を当てます。言霊ウの宇宙からは、人間の果てしない欲望の世界が現われます。言霊オの宇宙からは経験知・学問・科学が現出して来ます。次の次元は言霊アです。この宇宙から人の感情が迸り出ます。一切の宗教・芸術の心はこの世界のものです。光といい神・仏・宇宙・愛と言うものもこの世界のものです。貴方が一人の人間として限りない安心と充実感を持つ事が出来るのも、このアという言霊次元を自覚なされたからです。

けれど人の心の住む次元はこれで終るわけではありません。更に言霊エとイという二つの次元を残しています。言霊アの次元は、光とか、神・仏の存在を自覚することの出来る次元ではありますが、光、神、仏そのものを知る次元ではありません。残された言霊エの次元とは道德と高度の政治の精神(英智と呼ばれます)が現出する宇宙であり、人類生命の真理に則った「かく為せ」という至上命令が出て来ます。言霊イとは人間性能の一番奥にあって、人間社会の文明を創造して行く創造意志の原理の世界のことです。言霊はこの次元に存在します……。

言霊アの次元からイ・エの次元に入って行くためには、

新しい決意と更なる魂の飛躍を必要とします。それは丁度、貴方が権力と理論という言霊ウとオの次元から、神仏や光の存在する言霊アの次元を求めて決意した時と同じような決意と飛躍です。自らが光に包まれて生きている事を知り、魂の平安を手になさったら、そこで英気を養い、その上で更に勇猛心を奮い起して、神仏や光の存在する次元ではなく、神仏や光とは何かの次元へ、人間生命の第一義の教えに向かつて勉強されることを願って已みません……。

以上のことは単に私の経験だけで申上げているわけではありません。世界の宗教はみんなこの事を教えています。

例えば仏教の法華経方便品と化城喻品をお読み下さい。「仏の教えは難入難解にして、声聞(耳学問)辟支仏(びやくしふつ)の独力で光の世界を見つけた人)の知る能わざる所なり」とあり、また「仏の教えにはただ一乗のみあって、二乗三乗あることなし。ただし、決意にぶき衆生のために方便として魂の救われという二乗、三乗の教えを説く」とあります。「仏の知恵は仏所護念、一切種智である。ここに至る道は砂漠の中の旅の如く困難多き道なるが故に、方便として仏は砂漠の中に魂の救われなる幻のオアシスを現出させ、旅人に充分な水と食糧を補給させる。心身共に休養をとったなら、更に

勇猛心を以て発心し、仏の第一義の教えに向つて旅立つがよい」とも教えます。この仏陀第一義の一切種智とはアイウエオ五十音言霊布斗麻邇の学問に他なりません……。

生きとし生けるものがすべて光に包まれた神の子、仏の子、宇宙の子であることを知りますと、そういう光の子が一人でも多く集まれば、国家・社会・世界は恒久平和に変わるだろうとお思いになり、希望なさるでしょう。しかしそれは貴方の錯覚以外の何ものでもありません。世界情勢を転換し、この地球上に平和の楽園を建設する唯一の道は、人類の文明創造の歴史を推進する唯一の原動力、言霊イとエの次元の法則と力動である言霊の学(まなぶ)だけなのです。

T氏は呆然と聞いていました。そして「よく考えねばならぬ事ですな」と言つて帰つて行つた。

【収載】七十四号(平成六年八月)

●秘宝

最近、例えばカタカムナ、ミカサフミ、ホツマツタエ、ウエツフミその他の古代文献について言霊学から見た感想や意見を求められる機会が多くなり、その都度率直な感想

を申し述べて来た。しかし考えてみると、それら古文獻の研究者に、その感想の基礎となる言靈学の概要を伝えることなしに感想・批判を述べることは、ともすると誤解を生じ易い。失礼ともなりかねない。今後それらの感想を發表する事を止めることとした。質問者御自身が言靈学を勉強なさる事によつて、それら古文獻に対する「沙庭」を自ら行つて頂き度い。何故なら、言靈学はそれら古文獻ばかりでなく、人間精神に関する一切の現象を「沙庭」することが出来る世界唯一無二の鏡だからである。

ただ次の二つの点について明言しておく事にしよう。その一つは、言靈学は人間の心と言葉に関する究極の内容とその働きのすべて即ち精神宇宙全体を解明・把握した学問である。だから、言靈学をマスターするならば、ただ一つしかない宇宙の一切を掌中にした事となる。法華経提婆達多品に「竜女一つの宝珠(言靈)あり、価値三千大千世界なり」と言靈の価値は全宇宙であると述べられている。

第二点。言靈の原理は今より少なくとも八千年以前に発見され、この日本で花開いたものである。爾来昭和二十一年迄、人類の歴史の幾多の変遷にも拘らず、日本皇室の賢所に保存される世界唯一無二の秘法として、一度も、また

一歩たりとも外に出た事がなく、ただ天津日嗣の聖天皇のみが知り得る人類最高の真理であり、人類文明の歴史創造の唯一の原器だということである。現在世に喧伝される諸古文獻は、この八千年のある時期に、言靈原理のごく一部が民間に流出した、その名残である、ということが出来る。

昭和二十一年一月二日の「人間天皇宣言」によつて、初めてこの真理は日本皇室独占の靈的束縛から開放され、日本語を話せる人なら誰しもが、希望する限りその真理の深奥に参ずることが可能となつた。この事実が現代こそ数千年に一度の人類歴史の大転換の時であることを私達に教えて呉れる。

【収載】第七十六号(平成六年十月)

平成七年

●炬燵を囲んで

「古事記と言霊」という題での二十回にわたるお話が先月で終了しました。小生しばし「ホッ」としている所です。このお話を通して古事記上つ巻（神代の巻）に秘められた言霊百神の謎はすべて解き明かされた事になります。「古事記の神話なくして言霊布斗麻邇は説く事が出来ず、また言霊の原理を踏まええない古事記の解釈は無意味な絵空事に過ぎない」と言われる事の意味が御理解頂けた事と思います。

古事記の神話の解釈を終えましたので、会報の原稿を読み返し、二十回にわたるお話を「古事記と言霊」という題の本として春までには出版したいと思っております。そして本が出来ましたら、その本を土台として主題となる言霊百神のお話を今迄より更に平易に、見る立場をいろいろ変えながら講習会を続けて行きたいものと希っております。

古事記の神話は「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天の御中主の神……」に始まります。この冒頭の文章より言霊百神の結論である三貴子（みはしらのうずみこ）まで、神話の謎は略百パーセント解明されました。

三貴子に続く古事記の神話は、言霊百神の原理を会得する

ならば、あとは原理の応用問題でありますから、すべて平易に理解することが出来ます。過去二千年の間、皇室賢所の秘宝でありました言霊布斗麻邇の原理が、一切の秘密のベールを脱いで日本人の前に姿を現わした事になります。

末法・末世といわれ、最後の審判近しと叫ばれる現世界の情勢を転換して、光明輝く大調和・恒久平和の世界を実現する事が出来る人類唯一の真理である言霊布斗麻邇の原理の殿堂に、志ある人ならば、日本語を話すことが出来る人ならば、誰でもその門を入ることが出来るようになります。禅宗「無門関」の中の言葉を引用するなら、その殿堂に入る門は正に「大道無門」になったのです。門を入り布斗麻邇の殿堂の中のただ一つの案内図として「古事記と言霊」の解説は役立つ事になります。

「古事記と言霊」の内容を、初めから三貴子誕生まで貴方御自身の心で準らえ、辿って見て下さい。その道は必ずや貴方を布斗麻邇の殿堂深く導き、古代日本人の祖先がそうであった様に、貴方を「霊知り」の境地に入らせることでしょう。疑問・不明と障害は全て取り払われました。言霊の殿堂に明々と燈火がともりました。そしてこの言霊の殿堂の

燈火は、二千年前、崇神天皇が宮中に於ける八咫の鏡と天皇との同床共殿制度の廃止以来、この地球上に初めてともった燈火なのです。この燈火は一度火がともってしまえば、二度と再び消えてしまう事はないでしょう。

「みたまあがり、去にませし神は今ぞ来ませる。魂箱もらて去りたるみたま、魂返えしなせそ」（石上神宮鎮魂歌）

古事記に秘められた言霊原理の謎は、一度人間心理の真相として解き明かされたならば、再び謎の世界に後戻りすることはありません。二千年間、日本皇室独占のものであった人類秘宝は、その霊縛から解き放たれ、人類の共有財産である精神的真理として姿を現わしたのでした。

さてここで少々話題を変え、崇神天皇以来二千年間、人々の意識の外にあった言霊の原理が、現在全面的に隠れる所なく皆様の前に姿を現わすまでに至った経緯をお話して見ることにしましょう。

私が言霊学の師、小笠原孝次氏に初めてお会いしたのは昭和三十九年、東京オリンピック開催の年でありました。その時まで私は言霊学という学問の存在すら知りませんでした。そういう訳で、その時以前の言霊学の研究発展の歴

史は全て師より聞いた話であります。

二千年にわたる原理隠没の暗黒の中から、初めて言霊布斗麻邇の原理の存在に気付き、この学問に光りを当てられたのは明治天皇でありました。後に昭憲皇太后となられた天皇の皇后は公家の一条家より皇后となられた方で、そのお嫁入り道具の中に三十一文字の和歌に関する奥義書があり、天皇・皇后はその書物により古来より日本伝統の言霊麻邇の学問の存在に気付かれた、と伝えられています。

聞き知るはいつの世ならむ教島の大和言葉の高き調といその神古き手振もとしてみむ物知る人と尋ねいてつ、天地も動かすといふ言の葉の誠の道と誰か知るらむ

右の御歌は明治天皇が如何に言霊布斗麻邇の原理を渴望なさっていたか、を示す御製です。お歌の中の「言の葉の誠の道」とは三十一文字の和歌の道を指すのではなく、その和歌を作る奥義である言霊原理の事であります。古代の和歌は現代のごとく単なる抒情・叙事の歌ではなく、その抒情・叙事の中に言霊の原理を歌い込むことによる言霊修行の方法の一つであったのです。

明治天皇・皇后の布斗麻邇研究の御相手を務めましたの

が山腰某なる天皇付きの書道の先生でありました。明治天皇がなくなられた後は、言霊研究は宮中の内には伝わらず、民間に流れ出たようであります。私が皆様にお伝えしている言霊の原理は、明治天皇の研究のお相手を務めた山腰なる書道家の子、山腰明将氏、それに続く小笠原孝次氏より不肖私とつながる学問の流れであります。

現在私の手許に山腰明将氏が昭和十五年三月二日より十回にわたり東京の築地水交社に於て行った「言霊、御鏡の解、萬鏡の源」なる題の講演の記録が遺されています。私の師がなくなる時、頂いたものです。当時は先の大東亜戦争が始まる前の年で、日本の政府、軍部の上層部には異常な危機感がただよっている時でありました。どんな事が今後起ろうとも、日本の国家を万全の安きに置くよい方法はないものか、の思案の末に、日本古来の天皇学といわれる伝統の学問の継承者だと言われる山腰明将氏に白羽の矢が立ち、話を聞くことになったのだそうです。当日、会場に集ったのは天皇を直接補佐すべき地位にある宮家の方々、陸海軍の高級将官、それに内閣情報局・警視庁のトップの人達でありました。その講演の要旨を筆記し、記録に残したのが私の師小笠原孝次氏であります。

山腰明将氏の講義は一週間に一回、十回にわたり古事記神代巻に則り、音韻学を以てする五十音言霊学の解説であり、聴衆を圧倒する堂々たる講義であつたそうです。ただ残念なことには、その解説内容は難解で、人間の心理との関連がまだ明らかでなく、聞く人の十分な理解を得られなかつたようであります。

この講義の記録を読みますと、内容に特筆すべき事があるのに気付きます。それは私の師小笠原氏、それに私の著書にありますのと一箇所として変らず、古事記上つ巻の冒頭よりの神名と五十音言霊の一つ一つとの結び付きがはつきり書かれてある事であります。明治天皇—山腰氏の父親—山腰明将氏と続く研究者の系譜から考えて、これらの古事記神名と五十音言霊との関連の記録は、明らかに宮中から出た事は間違いないという事であります。それは、言霊五十音の一つ一つを指し示す古事記神名との結びつき、例えば天の御中主の神を言霊ウと結びつける、という作業は、一人や二人の人間の思考研究では到底不可能な難事であり、まして言霊五十音のすべてに古事記の五十神を合理的に結びつけることなど、如何なる天才の頭を以てしても短期間でなし得る業ではないからであります。千数百年以前、

古事記・日本書紀制定以来、古代より伝えられて来た言霊原理に則り、宮中(多分賢所)に秘蔵・保存されて来たものからの写しであったに違いありません。

山腰明将氏の言霊学研究に対する態度は今から考え直すこぶる特異であったようです。「言霊学布斗麻邇は本来天皇の世界統治のための心得としての学問であり、その時が来た時、天皇に復命(復へり言)申し上げるべく私は研究している。君達に内容を詳しく説明しても余り意味がない」と言つて、私の師が山腰氏にいろいろ質問しても多くは話つてくれなかつたそうです。

それ故、山腰明将氏が昭和二十年代中半に急逝された時、私の師小笠原孝次氏は「途方に暮れた」そうです。山腰氏はその弟子宛にはそれ程多くの研究資料を遺しておいてくれなかつたからです。その時以来、師小笠原孝次氏の苦心の研究が始まりました。古事記神代卷と山腰氏の講演集を基礎として言霊学解釈の模索が始つたのです。

突然に勉強の師を失い、前途の指標を見出すことが出来なかつた私の師が選んだ道は、物事の第一歩に帰ることであつた、と言います。人類の秘宝である言霊学布斗麻邇の原理といえども人間の心の真理であることに間違いない。と

するならば、自らの心の反省によつて、心の内容とその動きを見つめるならば、言霊の原理と何処かで接点が発見出来るはずだ。師の宗教書、哲学書の勉強と修行が始りました。

昭和二十年代が終ろうとする頃、師は一年間の多摩川畔の坐禅によつて自らの心の本姿が広い広い宇宙そのものである事を知りました。そしてその心の宇宙の内部が活動を開始して現象を生もうとする瞬間が、古事記の冒頭の文章である「天地の初発の時……」であることに気付いたのでした。人間の心についての思索の成果が、見事に古事記と結び付いたのでした。言霊十七個から成る心の先天構造、三十三個の言霊より成る心の後天構造、合計言霊五十音によつて構成された人間の心の全構造が師という一人の人間の心の中の証明を伴つて確かめられて行つたのです。

二千年間の忘却の闇の中から、人間精神の究極の原理であります言霊学布斗麻邇が、生きている人間の心そのままの立場で、初めてこの世の中に「古事記解義言霊百神」なる書として姿を現したのは昭和四十四年六月一日のことでありました。師は自らに課せられた仕事の完成と、その言霊原理のこの世への復活の人類社会に及ぼすであろう意義の

重大さを喜んで――

「言葉の冊子が出来た出来たんだ　出来たんだよと大空に叫ぶ」という歓喜の文章をその著書の巻頭に掲げています。この日こそどんなに祝っても祝い切れない人類の歓喜と慶祝の日であつたということが出来るでありますよ。

師小笠原氏の主宰する第三文明会の講習会は、私が参加して十年間程は銀座で月一回行われていました。銀座二丁目、銀座通りに面した文房具店伊東屋の裏通り隣にあつたレストラン八真茂登の二階広間で、土曜日の午後の開催でした。小笠原氏の講義が二時間程あり、終ると懇親会に移り、五百円の会費で当時二万円はする御馳走が八真茂登から提供されました。師の講義より二万円の御馳走目当ての人もいたのではないか、と思われる程のサーブスでした。それというのもレストランのご主人山本氏は古くからの竹内文献の研究者で、師小笠原氏の後援者でもあつたからであります。

銀座で一、二を争う美味しい高級レストランでありましたが、残念なことに今は存在しません。

師は昭和五十七年十一月二十九日午後六時五十四分渋谷

区幡ヶ谷の病院でなくなりました。七十九才でした。師は神代といわれる古代の靈知りが特別にこの世に生まれて来た人のようで若き学生時代より日本の古代史研究と言靈学の解明に一生を生きられた人で、用が済むとさっさと靈知りの皇祖皇宗の許に帰つて行つてしまつた、としか考えられないような人でありました。師がなくなる二十日程前、師の遺言によつて不肖の私が言靈学の後の仕事を継ぐ事となりました。この所の詳しい消息は会報五十七号「旗印」に書いた事があります。

小笠原氏はその一生の言靈学研究によつて、古事記上つ巻の神話の冒頭に出て来る天の御中主の神より百番目の建速須佐男の命までの言靈百神のほとんどの神名の謎を解決しました。その努力と功績は誠に素晴らしいものであります。神名の解釈の内、残されましたものは、神代文字を表わす正鹿山津見神より戸山津見神での山津見八神と、禊祓の項の奥疎・辺疎、奥津那芸佐毘古・辺津那芸佐毘古、それに奥津甲斐弁羅・辺津甲斐弁羅の合計六神のみであります。

師がなくなつて十二年が経ちます。「後を頼みますよ」と遺言された私でしたが、ひたすら勉強に励むのと、他の人

に学問を話すのとは、立場に天と地の差があります。試行錯誤しながらその十二年間の内の前半は思索と自分の話を理解して貰うための参考書作りに時日を過ごしました。「言霊」続言霊が漸く出来上りました。師の文章から見ると大分見劣りするものでありましたが、兎も角準備は整いました。こうして言霊の会の発足となったのです。

言霊の会が発足してからの活動は皆様御存じの通りです。研究会報毎月一回の発行、最近の如く講習会の開催、全国から寄せられる各種の質問に対する回答、書籍の販売・発送等、言霊の会は次第に忙しくなつて来つつあります。平成五年二月に発売した「コトタマの話」が千七百部売れました。そして何よりも嬉しかった事は、師より学校の宿題のように遺されていた奥^{おんまか}疎神以下六神の謎を完璧に解くことが出来た事でした。これ等六神の神名の解明によつて、言霊百神についての不明点は解消し、「古事記と言霊」の解釈のお話を完結させることが出来たのでした。

以上言霊の会の現在の活動に至る明治時代からの歴史を簡単にお話し申し上げました。明治より平成まで約百年の言霊原理復活の歴史であります。崇神天皇より原理隠没二千年間の事を思えば、諸先輩の努力百年は目覚ましい年月

だ、と言うことが出来るでありません。さてここで今迄お話いたしました諸先輩の他に明治・大正・昭和の年代に言霊研究のために努力された方々のことにも触れておきましょう。私は極めて寡聞^{かぶん}にて、それ等の方々的一端を挙げるだけでありましようが、お許し願います。先ずお名前や学派の名前を挙げてみましょう。大石凝真澄、武智時三郎、内山智照、出口王仁三郎の大本学派、その他名古屋学派等を聞いております。

大石凝真澄氏は明治皇室の血脈を引く方だとか聞いた事があります。この方の言霊学その他の学問についての著述は多数あり、東京神田の古本屋を廻つて見れば、今でも「大石凝真澄全集」を見つけることが出来るのではないでしようか。

武智時三郎氏は元来仏教は法華經の行者であり、法華經の説く一切種智の主張から言霊学に入られた方だそうです。わが師小笠原孝次氏も一時同氏に師事した事がある、と師より聞いたことがあります。

内山智照氏も言霊原理について一家言を開かれた方だと聞きました。武智氏・内山氏の著書は私の本棚に一冊ずつ並んでいます。共に師より遺されたもので、お読みになり

たい方は私方へいらして下さい。両者共明治生れの方で、文章はかたく、難解です。

出口王仁三郎氏と大本学派については私はよく存じ上げません。私の本棚には「出口王仁三郎聖師口述出口王仁三郎言霊学」なる美麗な本が一冊置かれています。宗教的直観による五十音言霊私見、とても名付けたらよいものでしょうか。難解です。

名古屋言霊学派と呼ばれる方々の活動は盛んと聞いております。滋賀県の近江神宮の宮司さんの肝入りで、神宮で時折、会合を開いておられると聞きました。アイウエオ五十音に濁音・半濁音を加えて合計七十五音の言霊学を展開している、と聞いております。

以上挙げました方々の他にも、いろいろな日本の古典、または現代言語学を踏まえた言霊についての著述は町の書店で多く見られるようになりました。言霊は現在静かなブームとなっている感があります。日本人の眼が多少なりとも民族の昔に向けられるようになったものと、歓迎すべき事なのであります。ただここでは当会が日本伝統の学として保持している言霊学と、他の種々の言霊学との一つきわだった相違をお話申し上げるに留めておきましょう。

その相違点とは何か、簡単にお話します。当会の説く言霊布斗麻邇の学問は初めから終りまで古事記上つ巻の神話に出て来る神名の順序に従って五十音言霊の一つ一つを説き、五十音言霊によって構成されている人間の精神構造を明らかにし、更にそれら五十音言霊が心の中でどの様に動き、終に日本神道で天照大神（八咫鏡）と呼ばれる人類文明創造の規範（鏡）となる心の構造を作る事が出来ることであります。またその神名の示す順序に則って自らの心を見つめて行けば、その人自身が二千年以上前の日本人の祖先、霊知りの天^{すめらみこと} 皇がそうであつた如く、人間の心の全構造を自覚することが出来ることであります。

これに対し、種々列挙して来ました言霊についての言挙げは、研究者の宗教的・直観的経験知に基づく言霊領域の想像、推理の産物であり、結局概念的または信念的解釈の域を越えていない学説、また更には単なる大和言葉の語呂合せに終つてしまう可能性があります。

以上の相違点の結果、一方が人間の精神の全構造が明らかになつた立場から人類歴史の過去・現在・未来を見通す霊知り天皇の「経綸」を知る事が出来るのに対し、他の言霊学からは、それが如何に高尚な精神に裏付けられていまし

ようとも、その人類の歴史の経緯は決して見出すことが出来ないという決定的相違となつて現われて来ることを一言付け加えておきます。このお話に対して御意見が御座いましたら是非お聞かせ頂きたいものと思つております。

炬燵を囲んでのお話としては少々堅くなつたきらいがあります。話題を交えることにしましょう。何時もお話することなのですが、言霊の話をしますと、初めのうちは興味を持つてお聞き下さるのですが、話が少々核心に触れて来ますと「言霊学は難しい」という感想が返つて来るようになります。「どうしてなんだらう」とその都度考えます。仲々分りません。とうとう思ひは私が小笠原孝次師の所に初めて言霊のことを聞きに行った三十年前に戻りました。そうしたら「何故か」が分つたのです。三十年前の私も同様に「難かしい」と思つた事があつたからです。では何故難しいと思ふのでしょうか。

春になりました。桜が満開です。「きれいだな」と思いますが、その時「何故きれいなのか」と尋ねられたら、何と答えませうか。これは譬え話ですが、現代人は分らない事があると、常に「何故そうなる」「何時」「どうしたら」となります。とこ

ろが、満開の桜の花が人の心を奪わなければかりにきれいであるのは、人間が勉強し経験を積んだ末に気が付いた結果ではありません。経験未熟な幼い子供でも美しいと感じるのです。満開の桜の花を美しいと思ふのは、生れてから学んだ知識ではなくて、人間が生れた時から授かつている本来の性能によつています。言霊の原理というのも、それと同様に人間が生れた時には已に授かつている人間本来の性能とその構造なのです。

仏教の一番のお経といわれる法華経の中に「仏と仏とのみ居まして、諸法の実相を究尽したもう」という言葉があります。世の中の事を知り尽した人（仏）達が集つて、物事の実際の姿（実相、種智、言霊）を語り合つてゐる、という意味です。仏様だけが知つてゐるのが言霊の原理なのだ、と言つてゐます。しかしこの人類の未だかつてない大きな危機の時に、その危機を乗り切る唯一の鍵である言霊の原理を、ただ仏様だけが知ることが出来るものだ、なんて呑気な事を言つてはいられません。そのために二千年の暗黒の中から言霊の手ほどきの書物がこの世に姿を現わしたのです。言霊布斗麻邇の原理は、人がそれを知る、知らないに関わらず人はそれによつて生き、それによつて文明を創

造している根本原理です。

人間が経験を積み重ねて、その結果発見した経験的知識ならば、「何時、どうして、何故」と疑問を起して考えて行けば、学問はマスターして行く事が出来るでしょう。けれど人間が思い、考えるという行ないを可能にしている根本の人間性能については、その「何故」が通用しません。若し強情を張って「俺はどうしても何故を貫いて言霊のことを知る事にした」というのでしたら、大昔の日本人の祖先がしましたように、数千・数万の人間が数百・数千年の年月をかけて言霊の学問に辿り着いたように、膨大な努力を必要とすることでしょう。

では言霊の学問はどうしたら学ぶ事が出来るのでしょうか。いとも簡単です。御自分で分らなくなったら、その分らない処を先輩に質問することです。質問して分ったら、その分ったと思う事を御自分の心に確かめる事です。ただそれだけの繰り返しです。その繰り返し貴方を言霊原理の殿堂の奥に導いてくれます。それは譬えれば、職人の修行の方法に似ていると言えるかも知れません。(続く)

【収載】第七十九号(平成七年一月)

●炬燵を囲んで その二

私は以前、東京上野の博物館の奥まった一室に展示されている一振の日本刀の前で、まるで足を釘づけにでもされたように動かなくなってしまった事があります。銘は相州正宗、国宝と書いてありました。その刀の切先から柄元までの形の素晴らしさ、銚(にえ)・刃紋の何とも言えぬ優雅さ、その美しさに引き付けられてしまったのでした。

刀剣は人を斬る道具です。けれどこの正宗の刀は人斬道具の域を遙かに越えています。まさしく最高級の芸術作品です。金や銀の象眼があるわけではありません。飾り気の何一つない一振の刀から人の心を打つ何とも言えぬ光というか、香というか、が人の心を引き付けるのでしょうか。この刀を打った刀匠正宗という人の人柄は勿論のこと、これを所有し、あるいは腰に差していた侍の人柄さえ偲ばれる思いがします。人斬りの道具である刀を遙かに高揚・昇華させて、このような芸術作品に作り上げる力を人間は持っているのだ、という事に深い感動を覚えたのでした。

今では金属の科学的分析や鍛造の技術は大層発達しています。正宗の刀を光学的・熱学的に分析し、正宗と同じ材

料を集め、形も斬れ味も鎬(しのぎ)の形も全く同じような刀を機械的に作り出すことは可能なかも知れません。しかし、如何に科学技術が進歩しても、正宗の刀のあの香りが如く人の心に迫って来るなどやかな光をも再現することは不可能ではないでしょうか。

さて、現代人がこの正宗の刀と同様の、またはそれ以上のものを自ら作ることを志したら、どんな手段をとるでしょうか。先ず先に挙げた光学的・熱学的科学の方法で学問的な分析研究を行うでしょう。と同時に現代に聞えた刀匠の所へ行って弟子として入門することになるでしょう。刀を打つ方法を習い覚えるためです。一たび弟子となったら、師匠は弟子に「それは何故」の質問を連発することを許しては呉れないでしょう。弟子は刀鍛冶として一人前になるまでは、師匠のやること、言うことをそのまま素直に覚え修得することを要求されるのです。それは長い日本刀の伝統の手法の中には、「何故」と疑問では捉えることが出来ない何物かが含まれているからではないでしょうか。

毎度申上げていることですが、この世に生を享けた時から人間に授けられている性能には五種類があります。五官感覚に基づく欲望・言霊ウ、概念による経験知・言霊オ、

感情・言霊ア、選択智・言霊エ、創造意志・言霊イの五性能です。この五つの母音で表わされる五つの精神宇宙から現われ出て来る現象のうち、人間の概念による思考「何故だ」が適用出来るのは僅かに一つ、言霊オから現出して来る経験知の世界だけに限られています。それ以外の人間の性能領域には「何故」の問い掛けは通用しません。

こう申上げますと、読者からは反論の言葉が返って来ても知れません。「私はある時、一人でぼんやり坐っていましたら、急に言い知れない淋しさを感じました。その時の状況が淋しいわけではないのです。何故だろう、と自問自答しました。そして気が付いたのでした。丁度一年前に死んだ親しい友人のことが忘れられず、その友を失った悲嘆が時折心の中から浮かび上って来ることに……。この場合、淋しさという感情性能に対して何故という問いかけが行われるのは当然ではないでしょうか」と。

右のような反論は一見もつとものように思えるのですが、実際は見当はずれなのです。右の人が急におそわれた淋しさの感情に対して「何故」と問いかけたのは、淋しさの心が起る原因となった状況は何か、ということなのです。淋しさの感情の状況証拠を求めたのです。淋しいという感

情そのものを何故と問いかけたわけではありません。

以上お話ししましたように、「何故」と問いかけて十分に答えが出る問題は人生全般の中で極く限られています。それでも現代人は何か事が起ると「何故」と言って問題の解決を過去の記憶とそのデータに結びつけることで、物事が何とかなると錯覚しているのです。

私がお話を申上げている言霊の原理を理解するという事柄についても同様なことが言えるでしょう。言霊布斗麻邇とは人間の精神の何処に存在するのでしょうか。人の心の住家は言霊ウオアエイ五母音宇宙を住家とします。そして言霊五十音は五つの次元のうちの言霊イの次元に存在しています。言霊イの次元に視点を持った時、人間の心は五十音の言霊で構成されている、ということが出来ます。言霊の原理は言霊イの次元に存在するのですから、言霊オの経験知をいくら働かせても、そのすべての理解は得られるはずはありません。

では人間は自ら精神的に苦勞して、自分の魂をウオアエイと五段階を登り言霊イの次元に引き上げるまでは、言霊の原理を理解することは出来ないのか、というと、そうではありません。人は生れながらにして言霊ウオアエイの性

能は全て授かっており、この五つの性能によってこの世の中に生きていくからです。五つの性能を持って生きていくのですが、何か分らない事に遭遇すると、直ぐに「何故」と概念による経験知だけがそれを解決する唯一の方法だと錯覚するのです。そして自分自身が生れた時から授かっている経験知以外の他の性能に頼ろうとはしません。

色々な事をとりとめもなくお話ししたようですが、言霊のことを理解するためにはどうしたらよいか、の問題に入ります。言霊の本を読んでお分りにならない処はチェックしておいて、それを先輩に尋ねることです。それがどんなに些細に思えることであっても、躊躇することなく尋ねることです。尋ねて、返って来た答えの中に分らない事があつたら、またその事について尋ねることです。恥ずかしながら、ためらう事ありません。その繰り返しのうちに、貴方の心の琴線に触れ、「あゝ、そうだったのか」と納得することが出来る所に来るでしょう。そうなつたら「しめた」ものです。その修得はもう決して貴方から離れることはありません。要はその間に貴方の経験知「何故」「何か」をさし挟まない事でありませぬ。

現代人は生れて二・三年も経つと「何故」「何」の教育を受

けるようになります。現代の教育は「何」「何故」以上の教育はまるで存在しないかの如く、「何」「何故」を詰め込みます。その影響なのでしよう。言霊の学問をするにも、理解が進んでいる時は勉学に勇気が出て、講習会にも、私方にも度々出席なさいます。けれど、理解出来ない事に会い、それを打開出来ないでいる時、勉学の氣勢をそがれるからでしょうか、パタツといらっしやらなくなります。これは誠に残念な現象です。言霊の勉学にはむしろ反対の心構えが必要なのではないでしょうか。不明で理解出来ない所に突き当り、自分ではどうしていいか分からなくなった時、その時こそチャンスなのです。「自分はこの所から先が何を説いているか、さっぱり見当が付きません。どうしたらよいでしょうか」という言霊を学ぶ上で最も効果的な質問が出来る時なのです。理解が進む時より、理解が進まなくなった時の方がチャンスなのです。このチャンスは、また理解を妨げている自らの心の中の雲(自らの経験知)が何であるか、を知るチャンスでもあります。

話題を変えることにしましょう。「万葉集の歌を理解するためには、万葉の時代に帰ることだ」とよく言われます。

人は現代に住み、その風習・言葉・流行に浸り切っていますので、ともすると百年前・二百年前も現代と同じ考えであった、と錯覚してしまふことがあります。ですから昔の出来事の起った状況やそれに関係した人々の心理を推察する時、ためらう事なく自分自身の心を投入して推理して少しも疑いません。明治維新の時、活躍した西郷隆盛の作った詩に「子孫の為に美田を買わず」という有名な一節があります。私がある漢詩の本を読んでいましたら、東京大学のある教授がこの隆盛の詩を評してまるで人間離れた考えとしか思えない、と言った冷やかしの批評を書いているのを見て驚いた事があります。明治維新に功労のあった人達の殆どが、明治新政府の要人になってからは利権に走り、華美な生活をしたのに反し、西郷隆盛は死ぬまで質実剛健の気風を忘れず、大勢の人々から慕われた人でした。「子孫の為に言つて過分の財産を遺すことはしない」と詩に詠んだ心ビツタリの一生を送った人だったので。

西郷が死んで百二十年が経ちます。たった百年余の歳月がその時代の風潮をすっかり忘却の彼方に押しやっています。としたり千三百年の昔の万葉人の心を現代人が推察する事が如何に冒險的な事であるか、お分りになる

ことと思います。ましてそれよりも更に古い、神代と呼ばれ、縄文時代と言われる今より二千年以上の昔に生きていた私達の祖先の心を理解しようとしたら、どの様な心構えを持ち、心の内にどんな手続きをしなければならぬか、そこに何かが必要であることを御理解頂けると思っています。では現代人の心と、二千年以前の昔の日本人の祖先の心との間に如何なる相違があるのか、その基本的な問題をお話して行く事にします。

言霊の原理が古昔に発見されて以来現代に至るまで、言霊の学問とその運用には時代と共に色々な変遷がありました。その変遷が人々の思考の仕方にどんな影響を与えることになったか、を先ず第一に検討して見ましょう。次にこれらの変遷を経験した結果、現代人の思考の仕方は現在どのような状態になっているか、現代人の心の構造の内容についてお話することになります。第一の観点が歴史的・時間的な検討であるとするならば、第二の取り上げ方は現代人の心の空間的・次元的な見地のものだ、ということが出来ましょう。

言霊の原理は今から約一萬年前、日本人の祖先によって発見されました。人間の心を構成する五十個の言霊と、そ

の言霊の運用操作の典型的な方法五十計百個の原理です。言霊のことをまた霊と言ひ、言霊原理を知る人を霊知りと呼びました。霊知りの集団が大挙してこの日本列島にやって来て、国を開きました。言霊原理に則つてその風土・習慣に合わせて物事に名前を付け、その原理的な名前がそのまま集団生活に受け入れられる文化社会を作る事です。国家の始まりです。

八千年以前より約三千年前までの五千年間、日本に於ては邇々芸皇朝・日子穗々出見皇朝・鵜草葺不合皇朝と精神文明の華やかな平和な時代が続きました。日本の精神文明の成果は世界に向つて移出され、「世界は一つの言葉であった」と聖書に記された世界平和の時代が続いたのです。この五千年の時代を世界の各宗教・神話・伝説は神代の時代として現代に伝えていきます。

五千年間続いた人類の精神文明時代の末期、外国に於ては今より三千年から四千年以前、日本に於ては二千年より三千年以前、長い間続いた精神文明に転換の時が来ました。日本から外国に向けての精神文明の移出は徐々に中止されました。そして外国に於ては精神文明とは反対に、物事を自らの外に見て観察研究する物質科学的研究が発達して来

ました。人類の第一文明である精神文明に次ぐ第二の科学的な文化の台頭です。そしてこの人類の物事を観察する新しい傾向を百パーセント決定づけたのが、今から二千年前、日本に於て断行された言霊原理の隠没という政治選択でありました。

五千年にわたる人類の精神文明の中心的拠り所は、物事を見る人間の内なる精神性能の全てを解明した言霊原理であります。この原理によって創造した精神文化の日本より外国に向けての普及を止め、その末にその原理を保有し、伝承して来た日本の皇室自体が原理の運用を中止し、その原理自体を人間の自覚の段階から外なる信仰の対象である伊勢神宮の神様として祀ってしまった事があります。神倭皇朝十代崇神天皇の時のことでありました。

この人類の精神の歴史における一つの決定は、その後の地球上の人々の心の持ち方を百八十度転換させてしまいました。その時まで自明の理であった自らの家庭・社会・国家を創造する人間本来の能力を忘れ去ってしまいました。明日に何が起り、自分がどうなっているか分からなくなった人間は、自分が実際に授かっている性能を神として祀った神社を拝み、明日の幸運を祈願するようになりました。

平和共存から弱肉強食の獣の社会に変わった人類に対して為政者が執った政策は儒・仏・耶をはじめとする各宗教の創設でした。人々は自らの中にある人間の最も素晴らしい能力である創造の原理を、今度は自らの外なる神様として「明日に幸あれ」と拝むように変ったのであります。

爾来二千年間、人類は打ち続く戦乱・飢餓・貧困・病苦の社会の中から、輝かしい人類第二の文明である物質科学文明を建設したのでした。人類の第一文明である精神文明の基礎となった言霊原理とほぼ同様の厳密・正確な物質構造原理の解明に到達するのも近いことでしょう。と同時に、この物質科学文明が人間精神の規制を越えて独走するならば、人類の破滅という運命が待ち構えている事態となりました。

この時を期していたかの如く、人類の第一文明の精神原理言霊布斗麻邇は、日本人の祖先、皇祖皇宗の御経緯に従ってこの地球上に昔ながらの姿を現わしたのです。しかも昔の日本皇室の言霊原理独占の制度ではなく、真理は全世界に公開・開放されて日本語を話すことが出来、志あるものならば誰しもが言霊布斗麻邇の原理を修得することが出来る状況が開かれたのです。

以上お話しました言霊の原理をめぐる人類の精神の歴史を図080-Aで示しましょう。

「万葉集を語るには、自ら万葉人の心に帰れ」と前にお話ししました。同じ様に言霊布斗麻邇をマスターしようとするならば、言霊原理が自明の理であった所謂神代と言われる時代の心に帰ることを要求されるでしょう。日本で

言えば、二千年以前、崇神天皇以前の時代の人々の心に復帰しなければならぬ。そのことが昔の人々の心を理解する道を開きます。

では現代の人間が数千年前の時代の人々の心に復帰するとはどういう事なのか、またどうしたらそれが可能なのか、またどうしたらそれが昔の心に復帰する方法を一概に定めることは出来ません。けれど復帰の方法に公式がないではありません。それをお話ししましょう。

図 080-A

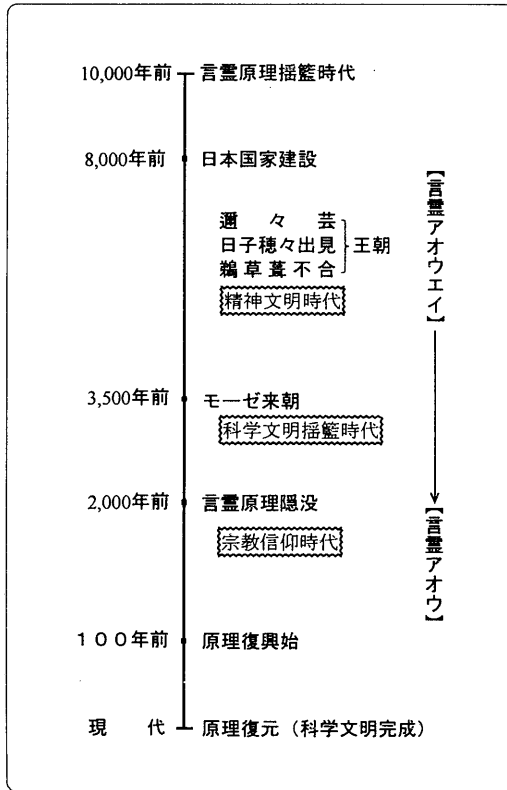


図080-Aを御覧下さい。年代順に見て行きましょう。一万年前の原理発見から精神文明が続いた約三千年前迄、言霊の原理は一般社会に受け入れられていた時代でありましたから、人間性能が言霊ウオアエイの五界層から成立している事は常識であったでしょう。とすれば私達が心掛ける

事もこの時代の人々の心に帰ることということが出来ません。

ところが、外国に於ては三千年前、日本に於ては二千年前、言霊の原理は人々の脳裏から忘却されてしまいました。その結果、人々は精神生命の五界層の中から言霊原理が存在する言霊イと、その原理を適用・操作して歴史を創造して行く能力である言霊エの二界層を忘れ去ったのです。そしてこの二・三千年間、人類は僅かに言霊ウオアの三界層だけの自覚の中で自らの生活を営む事を余儀なくさせられました。この間、人々の心の慰めとなるものは言霊アの界層の芸術・宗教のみとなりました。そうして現代に至ってゐます。

現代は言霊ウオアの枠の中に人々がうずくまっている時代です。言霊ウの欲望性能の表出は大変なものです。言霊オの性能は素晴らしい物質科学時代を到来させた事で人々を魅了し、現代人は人間の知恵と言えば、この言霊オの経験知より他にないと思う程です。言霊アの芸術・宗教活動も盛んの様です。ではこの現代人が二千年以上前の人々の心に回帰するにはどうしたらよいのでしょうか。

神代への回帰の方法の一般法則は次の様に言う事が出来

るでしょう。「今お話して来ました人類精神の年代順の変遷をそのまま逆に昔に向って迎ればよいわけです。この時、現代より二千年前の神代にまで橋渡しをして呉れるのは、今迄この間の暗黒の世に於て人々の心の支えとなつて来た宗教・信仰心です」

宗教とは言霊アの次元の心です。純粹な言霊アの心を知るためには、自らが生れて後に修得した学問・経験知というものが、人生行路を決定する上でどんな能力を持つてゐるか、の限界(分際)を知ることがどうしても必要です。経験的知識の分際を知るといふのは、経験知を放棄することではありません。人間は一度知つた事は全く忘れ去ることは決してありません。ただその経験知が自らの生来の自分ではなく、他からの借物なのだといふ事をよく知る事なのです。その為に宗教は大いに役に立ちます。

言霊アの心、自らの本態である広い宇宙の心になると、その宇宙を構成している五十個の言霊の原理は、古事記が教え示して呉れるそのままに理解する事が出来るようになります。そこに「何故」の疑問をさし挟む事はありません。

人は母親の胎内に生命が宿つてから誕生までの十月十日の間に、それまでの人類が経験して来た幾百万年の生物

としての事柄を全て潜在意識の中に記憶として修得し、その上でこの世に誕生して来ると言われています。人が一人この地上に生きていくという事は、よくよく考えて見ますと、人類発生以来の歴史を生きた生き通しの人として生きている、という事が出来ます。ですから、人類発生から現在までの途方もない長年月に比べれば、たかだか二千年の昔への心の回帰など、その法則に従って行うならば、それ程難しい事ではありません〔注二〕。

以上言霊の原理を中心とした人類の精神の変遷と対処法についてお話をしてみました。

変遷と対処法の、時間的検討と言えるでしょう。これに対し、原理の空間的な検討を付け加えておくことにしましょう。即ち

図 080-B



以上の様な変遷の歴史を経て現代の人々の頭脳(思考)の構造は言霊原理からみてどの様になっているのか、という事があります。

人の心はこの世に生れてから五段階の進化をします。その進化の順序は言霊ウより始まり、オアエイと進みます。進むと言っても、この進化は単なる自然現象ではなく、意

識的な文化現象であるので、意識し、それを欲しなければ進化は実現しません。進化とはそれぞれの段階を自らの心の中に自覚・確認して行く事の進歩のことです。

図 080 B を御覧下さい。下より上へ人間の精神的自覚の進化の順を示しています。第三段の言霊アの次元を横線で半分仕切って書きました。さて言霊ウは五官感覚による欲望の次元です。何が欲しい、こうなりたい、という欲望です。進化の次の段階は言霊オです。人が物心ついて「何故」を覚え、学校その他で学問を習い知識を覚えます。概念知識・学問・物質科学はこの領域からの産物です。進化の第三は言霊アの次元感情の世界です。ここから各種の芸術・宗教が現出します。次の進化で人間は言霊エとイの、実践智(道徳智)と言霊原理(麻邇)そのものの自覚に入りますが、この二つの次元は二千年前、言霊原理を隠没させることで人類の自覚をシャット・アウトしてしまっています。これが現代人の言霊原理より見た精神的構造です。

言霊ウオアに局限されている現代人の心が、シャット・アウトされている言霊エ・イの自覚に進むにはどうしたら

よいか、矢張り、図に示された進化の順序通りに進むより他に道はないでしょう。言霊アである人間の感情性能を経験知にいちいち左右されない広々とした境地にまで高め、自覚することです。そうすれば今までシャット・アウトされていた言霊原理の次元が古事記に示されている如く、眼前に展開していることを明らかにすることが出来ます。

さてここで、現代人の心の進化の構造を示す図を再び見て下さい。言霊アの段を横半分づつに区切って見ました。

この次元が楽しい・悲しい・好き・嫌いという感情の領域である、と説明されますと、御理解を頂く方は多い事と思えますが、その純粹境地が芸術的には絶対美、宗教的には心の救われ、広々とした空といわれる宇宙を自覚した境地である事を知る人は少ないでしょう。それは過去数百年以前までは当然の事であつたのですが、芸術は極端な商業主義に毒され、宗教は末法・末世といわれて、個人の心の慰めだけの御利益信仰と墮してしまつた感がある時代のためであります。

宗教界に頼れないならどうしたらよいのでしょうか。簡単です。宗教の創設以来伝承されている各宗教の經典・聖書を読めばいい事です。そこに書かれている宗教的な先師

の人々の言葉を素直に自らの心に移して見る事です。難しい事ではありません。自ら創作した借り物の経験知を一つ一つ洗い流して、人の心を生れたばかりの赤き心に帰して呉れる事でありましょう。その赤き心こそ、古事記上つ巻の冒頭の言葉「天地の初発の時」なのであります。

〔注一〕自分の心を反省して昔の日本人の心に回帰を計る時、そこで経験する出来事を表現する言葉は宗教の經典・聖書の中の言葉を用いる事をおすすめします。その表現に自らの経験知の言葉を使用することは、何処まで行つても経験知の域から脱出出来なくする事となります。宗教經典の中にある人の心の動きについての言葉は、魂の救われ、広々とした心の宇宙を視点とした表現であるのに対し、経験知による言葉は個人的カルマから抜け出せない表白です。言霊とは言であると同時に霊であります。心の操作にとつて言葉は重要な因子なのです。

【収載】第八十号（平成七年二月）

●底・中・上筒の男三命について

底筒の男の命・中筒の男の命・上筒の男の命の三神は、古事記言霊百神のうち終りの方、天照大神・月読命・須佐

男の命の三貴子(みはしらのうずみこ)が誕生する前提となる神として登場して来ます。古事記はこの三神を墨の江の三前の大神と呼びます。

この三神を祀る神社を住吉神社といい、本社は大阪市住吉区にあります。筆者がこの神社にお参りしたのは今から六年と少し前でありました。その時は前の昭和天皇が大病を患われ、神社拜殿前には多数の信者の人々が集まり、平癒祈願をされていた光景が思い浮びます。

この底・中・上筒の男の三神は、大方の古事記の注釈書に「海の神」と記されています。古事記でこの三神と一緒に出て来る底津・中津・上津綿津見の三神の綿津見の綿が海の事だと思われるためでありましょう。けれどそれは現代の古文学者が、古事記上つ巻を人が眼で見ると見ると異なる働き様の物語だと思ひ込んでいる為の解釈であり、事実は全く違つたものであります。

「古事記と言霊」のお話の中で説明しましたように、底・中・上の筒の男の三神とは、言霊エ・ウ・オのそれぞれの次元に即して、物事をその現在ある状態よりそれが当然あるべき目的まで導くのに、どの様な言葉を与えるか、またその言葉に従えば現状より目的までどの様な経路を辿る

か、を明らかにする働きの神であります。

現状より目的に渡す、その事から筒の男の神を海の神と解釈を広げたのかも知れません。また渡すとは、仏教で言え、この世である此岸よりあの世である極楽浄土である彼岸に渡すことにもなります。

ただ古神道祓(みそぎはらひ)の筒の男の命は、此岸より彼岸に渡す事に関係するだけでなく、その渡す経路をはつきりとその変化を追つて明らかに示しているのです。筒の男の筒とは一つのチャンネルとして、変化の状態を現象の変化の推移言い換えますと八つの子音の配列として明らかに示している事でもあります。

古神道言霊学の布斗麻邇の原理が右のように厳格で精密なものでありますから、この筒の男三神を前提として誕生いたします天照大神・月読命・須佐男命(三貴子)の言霊学の総結論の神々の表白する言葉はそれぞれの事態処理の当為(当然やるべき行為)となり、哲学で言う至上命令ともなる言葉なのであります。

お話が大分屈つぽくなりました。お許し下さい。神様の働きそのものを説明しますと、右のように固苦しい文章になる神様なのですが、この三神が堂々と自らの名前を名

乗って、日本の歴史上に姿を現わす場面が古事記中つ巻にただ一度だけあります。そこで、日本の文明創造上の重大な転期に当って、現れ出て来る筒の男三神がどんな働きをしたか、古事記の実際の記述に基づきながらこの三神の内容について話を進めて行く事にしましょう。

三筒の男命が実際に日本の歴史の中に姿を現わしますのは、神倭朝十四代仲哀天皇の時、古事記「神功皇后」の章にであります。この時天皇は九州北部訶志比かしひ（現在の名は香椎）の宮にいらつしやって、南の方熊曾の国を征伐しようとしていました。皇后息長帯日売おまがたらしひめの命（神功皇后）は神懸りが出来る巫子さんでありました。

ある日、皇后は神懸りとなりました。古事記には次の様に記されています。

「天皇筑紫の訶志比の宮にましまして熊曾の国を撃たむと
したまふ時に、天皇御琴を控つかして、建内の宿弥すくねの大臣沙
庭さぢに居て、神の命を請こひまつりき、ここに太后、神かみ帰かへせし
て、言教ことづかひへさしさりたまひつらくは、……」

神懸りを神に要請する時、昔から霊媒となる人の傍で琴を引く事がありました。「琴引き」は「言引き」で、神様の教えを霊媒を通じて引き出すリズムを作る働きがあるようです。そこで神懸りの事を「琴引き」と呼ぶ事もあります。この時は神懸りする皇后の夫君である天皇が琴を引き、神の教えを要請したのでした。

また「建内の宿弥の大臣沙庭さぢに居て」とあります。沙庭とは探神さだめとも書き、その言葉の元は朝廷あまのつとです。朝廷とは昔、天皇及び文武百官が政治を行う場所の事と言われました。その通りなのですが、その場所を「あさにわ」と呼ぶ語源は言霊学の結論である八咫鏡やたがたの音図、天津太祝詞あまのつと（音図）のA段、ア・タカマハラナヤサ・ワにあります。昔の政治は言霊布斗麻邇の原理に則って行われました。と言う事は政治の任に当る人々は天津太祝詞音図の精神構造を理解し、自覚していた事を意味します。その心構えの下に行う政治でありましたので、政治を行う場所を天津太祝詞音図のAよりサまでの原理の庭の意で朝廷あまのつとと名付けられたわけですから。政治と同様、神懸りにつきましても、その「神の教え」なるものが正しいものか、否か、の判断も五十音言霊原理によつてなされましたので、その判断の場を「あさにわ」略し

て「さにわ」と言つたわけでありませう。神の教えを要請して琴を控く人、現われた神懸りによる神の教えの当否を言霊原理によつて沙庭する人、それに神懸りをする人、三つの役が揃つて正式な「神帰せ」が成立することになります。

神功皇后に懸つた神の教えは次の様なものであります。

「西の方に国あり、金銀とはじめて、日輝く種々の珍宝その国に多むると、吾今その国と帰せたまはむ」

天皇はこの神のお告げを聞いて気に入らなかつた。多分南の方熊曾を伐つ為のお告げがあるものと期待していましたが、全然別の西の方の国を伐つと言われたのです。仲哀天皇は神のお告げを信じませんでした。そして神に向つてお答えなさいました。

「高き地に登りて西の方と見れば、国は見えず、ただ大海のみあり」と。

そして皇后に懸つた神は詐りを言う神である、と思われて、今迄控いていた琴を傍に押し退けて、控かないでただ黙つてしまいました。この天皇の態度を見て、神懸りの

神は大層お怒りになり、おっしゃいました。「この日本の国は汝の治めるべき国ではないのだ。汝は前から思つてゐる通り、南の方に向つて進めばよい」

この間の様子を見ていました沙庭の役にある建内の宿弥大臣は、神様と天皇との間を何とか取持とうとして、「天皇様、それは恐れ多いことです。どうかお願いでありますから、もう一度御琴を控いて神様の御教えを聞いて下さいませ」と申しました。

大臣からそうお願いされて天皇は気の進まぬままに御琴を身ずから引き寄せ、いやいやながらお控になりました。その内、いくらも時が経たない時に、琴の音が聞こえなくなりました。そこで人々が燈火を挙げて見ますと、仲哀天皇はその時既におなくなつていたのです。

おそばに仕えていた人々は皆大層驚き、恐れおののきました。そして天皇のお葬式のための宮殿を建てたり、国中の穢の大祓をしたりしました。建内の宿弥は前の如く沙庭の役をして、再び神様のお教えを頂くようお願いしました。神の神懸りの教えは以前と同じ西の方、海の向うの国を伐つて、ということですが、付け加えて神は次の様にお告げになりました。

「この国は、汝の命(神功皇后)の御腹の中にいる御子が治めるべき国なのだ」と。

これを聞いて建内の宿弥は神様に申し上げました。以下神様と建内の宿弥との間に、神功皇后を仲立ちとした問答が続きます。「わが大神様、恐れ多い事で御座います。皇后様の御腹にいらっしゃる御子はどのような御子で御座いますか」

神様は答えました。「男の子である」

建内の宿弥は尋ねました。「今迄このように教え賜わります大神は、何という神で御座いましょうか。その御名をお聞きしたいと存じます。」

神様はお答えになりました。「かく教えるのは天照らす大神の御心である。また底筒の男、中筒の男、上筒の男の三柱の大神である。」

ここで神様は初めて自らの御名を「天照大神の御心」と名乗られました。またそれは底・中・上筒の男三柱の大神だと言うのです。三筒の男の命の初めての登場です。この神のお告げの言葉が、言霊の原理の教科書としての古事記上つ巻に出ている底・中・上筒の男三神の言霊学的意義を表わした正確な言葉であることが、この後に展開される神功

皇后の三韓(朝鮮)征伐の事実によって証明されることとなります。この説明はこの文章の後半に譲ることに致します。神様のお告げは更に続きます(古事記本文)。

「今まことにその国を求めむと思はさば、天つ神地つ神、また山の神海河の神たらまでに悉に幣帛奉り、我が御魂と御船の上にませて、真木の灰と糝に入れ、また箸と葉盤とと多に作りて、皆皆大海に散らし浮けて、度りますべし」とのりたまひき。

神様のお告げとして難解な文章が出て来ました。昔は一つの事を告げるのに面倒臭いことを言うものだ、などと思つたら大変な心得違いです。崇神天皇の同床共殿制度の廃止以来、今日に到るまで、こと真実、天照大神または国常立命として神懸りのお告げがある場合、そのお告げの神が真に天照大神または国常立命であるか、否かの最初の判断は、そのお告げの言葉に言霊原理(布斗麻邇)に関する言葉が付け加えられているか、どうかを見ることです。言霊に関する言葉がなければ、そのお告げの主は真正の神ではありません。

大昔でなく比較的近い時代の例を挙げましょう。明治時

代に興った大本教（皇道大本）の教祖出口ナホ女史に突然起つた神懸りはユニークなものでした。自分の名前さえ書く事が出来ない京都は綾部の近郊に住む一女性が、突然国常立命の神霊と名乗って半紙にお告げを書き始めたのでした。

「大千世界、一度に開く梅の花。梅で開いて松で収める神国の世が来るぞ」に始まる膨大な量のお筆先です。このお筆先の中の「梅で開いて松で収める」の言葉が立派な言霊原理を表わしています。先に「コトタマの話」や「言霊」の本の中で詳しく説明しましたので、ここでは簡単にお話しますが、梅は「ウの芽」で古事記の先天構造の中の天の御中主の神・言霊ウを示し、「松」はやがては自我の意識に発展する宇宙の目覚めとも言える言霊ウが、次の段階で私と貴方の言霊アとワに分かれる状態を、松の葉が根元から二本の針状葉に分かれる形状でいみじくも形容していることです。「梅で開いて松で収める」とは造化三神と呼ばれる言霊ウーアーワの原理のことであり、言霊の原理によって治められる新しい神の国の到来を予言しているのです。

では「天照らす大神の御心」と名乗って神功皇后に懸ったお告げは、どの様な言霊学的意味を持っているのでしょうか。

か。お告げの前半「天つ神地つ神、また山の神海河の神たちまでこゝろごとにこゝろごと幣帛奉り、我が御魂を御船の上にませて」は特別のことはありません。「天つ神地つ神、また山の神海河の神たちまでこゝろごとにこゝろごと幣帛奉り」とは「日本国中にお祀りしてある神々に御幣をささげ、即ち日本国中の人々の真心をこめて」ということであり、「我が御魂を御船の上にませて」とは、「天照らす大神の御魂を皇后のお乗りになる船の上にお祀りして」ということです。言霊原理が明らかに示されるのは次に続く後半の言葉であります。

「真木の灰とひまじ瓠ひまじに納れ、また箸とひらで葉盤とを多さばに作りて、皆皆大海に散らし浮けて、度りますべし」

言葉の順序に従って解説して行きますよう。

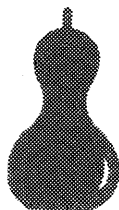
「真木の灰を瓠に納れて」とは、何を示しているのでしょうか。

真木は真の気、灰は葉の霊の意味です。全部で真実を表わす（五十音の）言霊、という事

になります。「瓠に納れて」とは奇妙で、また巧みな謎です。

瓠は今で言う瓢箪です。夕顔

図 081-A



ひやく

の実より作り、酒などを入れる道具であります。その形は図081・Aに示しましたように中途でくびれていて上下二段の形をしています。それは古事記鳥生みの章の最後の島として出て来る両児島またの名、天の両屋を意味した謎なのです。簡単にお話しますと、言霊布斗麻邇の原理は心の要素である五十個の言霊とその運用法五十、計百の原理から成立しています。その要素五十言霊を上五十音に、運用法五十を下の段にとると、下の図081・Bのような百音図が出来上ります。これを図の上と下が完成した原理として両児の島と古事記は名付けます。言霊原理の完成図であります。

瓠の形は上下二段の言霊百音図を表徴した謎なのです。「瓠の中に真木の灰を入れよ」とはこの言霊百音図の中に言霊を入れて両児の島といわれる言霊原理を完成させよ、という意味であります。「箸と葉盤とを多に作りて、皆皆大海に散らし浮けて、度りますべし」の説明に入ります。箸は食べるための食事道具、葉盤とは葉っぱで作った皿の事です。また「ひら」は言葉ま

図 081-B

イ	エ	両児の島	ウ	イ
エ	オ		ウ	エ
ワ	カ		ウ	エ
ヲ	キ		ウ	エ
ウ	ク		ウ	エ

たは文字のこと、葉の形は手のひらの形をしているので、食物をのせるものを意味します。この場合食物とは心の食物である言霊のことです。「皆皆大海に散らし浮けて、度りますべし」とは「その箸と皿とを海上に散らし浮かべながら、海を渡りなさい」ということです。

そこで神のお告げの全文では「上下二段の言霊図を完成させて、その布斗麻邇の原理の恩恵に国の内外の人々が浴せるよう、心の食物を摂る食器である箸と皿とを沢山作り、それを海に投げ浮べて渡りなさい。布斗麻邇の威徳により神の告げたこの計画は寸分の狂いもなく成就するであろう」と言うこととなります。

この時代即ち仲哀天皇とは神倭皇朝十四代天皇であり、第十代崇神天皇の同床共殿制度の廃止、言霊原理の政治への適用の廃止が行われた時より年月が経っております。それ故にこそこのような神のお告げの中に実際の言霊原理適用を型とし、形として表現することによって、言霊原

理の実用と同様の厳密な神の計画であり、至上命令であることを示したものでありましょう。

それに沙庭さにはにいる建内の宿弥すくねは祭祀の役を司る天の児屋こゝねの命の子孫であります。言霊原理の知識は充分心得ていたはずでありますので、神のお告げの言葉が言霊原理に叶った正しいお告げであることを推察することが出来たであります。

神功皇后に懸りました神のお告げの中にあります言霊原理を型どった言葉が御神霊の真実であることを証明するものであるとお話して来ましたが、更に御神霊である「天照らす大神の御心」に加えて底・中・上筒の男命三神の名が告げられている事は、どんな意義を持っているのでしょうか。このお話の初めに申上げました問題に入ることとしましょう。

筒の男三神は前にお話しましたように、物事の発端から結末までの推移を実相である言霊子音の変化として確定して行く神であります。初めから終りまでの変化を手にとつて見るように教えて呉れる神なのです。しかも底・中・上筒の男三神ですから、言霊エウオの三次元にわたる変化の相を見事に推定することとなります。でありますから、当

事者がお告げにあります事を一から十まで信じて実行するならば、その仕事はまるで絵に画いた様に順調に運び、初期の成果を取めることが出来ます。そんな事が本当にあるのだろうか、という事が実際となるのであります。

実際にどんな事が起つたか、お告げを頂いた神功皇后と建内の宿弥がお告げそのままに実践する出来事を古事記の文章で見ることとしましょう。口語体に直して引用します。

「そこで悉く神の教えた通りにして軍隊を整え、多くの船を並べて海をお渡りになりました時に、海中の魚どもは大小となく全て出て、御船を背負つて渡りました。順風が盛んに吹いて御船は波のまにまに進みました。その御船の波が新羅の国に押し上つて国の中ばにまで到りました。よつてその国の王が畏おそじ恐れて、『今からは天皇の御命令のままに馬飼うまかひとして、毎年多くの船の腹を乾かわかすことなく、柁かじま楫を乾かすことなく、天地のあらん限り、止まずにお仕え申し上げましょう』と申しました。このような次第で新羅の国を馬飼とお定めになり、百済くだらの国を船渡りの役所とお定めになりました。そこで御杖を新羅の国主の門におつき立てになり、墨江すみのかへの三神のうち、荒魂あらみたまである中筒の男の

命を、国をお守りになる神として祭って、神功皇后は日本にお帰りになりました」

かくて神功皇后の朝鮮半島征伐はまことに順調に終了したのでした。

以上、天照らす大神の御心と筒の男二神の神懸りのお告げと、そのお告げの実現である朝鮮半島国くに帰せとの関係についてお話して来ました。古事記の「神功皇后」章はここで終わっています。しかし大きな疑問が残ると感じるの一人筆者だけではないと思います。日本民族最高の神と崇められている天照らす大神の、しかもその上に事件の推移をはつきりと知らせて呉れる三箇の男の神を伴ったお告げが、海の向うの隣国の金銀財宝を我が物にせよ、などと日本の皇室に要求したのは何故なのでしょう。しかもそれを肯んじなかつた仲哀天皇の生命を即座に奪ってしまふ程の厳格さを以てです。天照らす大神が国際的覇権主義の先頭に立ったのでしょうか。

否、決してそうではありません。神功皇后の朝鮮半島国帰せという仕事は、国と国との覇権主義的事件という事を遙かに越えた意義を持ったものであったからなのです。私

達日本民族の遠い祖先の靈知りと呼ばれる人々、即ち皇祖
皇宗の、言霊原理に基づいた人類文明創造の歴史の上で、
欠くべからざる画期的な事件であったのです。その実際の
影響は千数百年後の今日に至るまで続いている大事件であ
りました。その意義を説明してこのお話を締めくくる事と
しましょう。

今より約二千年以前、神倭朝十代崇神天皇の御代を境と
して、日本の政治・文化の様相は百八十度の転換を遂げま
した。崇神天皇による三種の神器の同床共殿制度の廃止が
転機となりました。その時までの日本は数千年にわたって
日本人の祖先である靈知りの皇祖皇宗の言霊布斗麻邇の原
理による平和で心豊かな精神文明を謳歌した時代が続いて
いました。この精神文明の成果は外国にも輸出され、世界
は「一つの言葉」の下に心の文明を等しく楽しむ時代であつ
たのです。この時代を人類の第一精神文明時代と呼びます。
やがてこの精神文明の時代に転機が来ます。人類の第二
の物質文明の創造を促進させるための方策がわが皇祖皇宗
によってとられたのでした。外国に於ては三千年五百年程前、
日本よりの精神文明の輸出は徐々に停止されました。この
時を契機に外国に於ては物質科学の研究が盛んになりま

す。成果も挙がり出して来ました。物品生産、美術工芸の産業が次第に興って来ました。

外国の転換に後れること千年、日本は神武天皇によって神倭皇朝が発足しました。外国と同様、精神文明より物質文明に政治の目的を転換させる為です。六百年後、崇神天皇は精神文明の原器、言霊の原理(三種の神器)を伊勢神宮の神として世の中から完全に隠没させました。日本に於ける第一精神文明時代の終了であります。

更に四百年後、神倭朝十四代仲哀天皇の時となり、外国に於て千年以前にスタートして、漸く発達して来た外国の物質文化の成果を輸入することによって、日本の文明社会を築いて行かざるを得ない状況に立ち到っていたのです。もっと詳しく言うならば、日本がこれ以上過去の精神文化に固執して行くならば、日本の隣国の物質文化が進み、日本はその物質的権力によって滅ぼされ、将来来るであろう精神文明と物質文明のドッキングによる人類の第三文明時代建設の時、第一の精神文明の原器の奉持国としての重要な任務を遂行し得ない破目に陥る瀬戸際の時であったのです。物質文明の時代とは、生存競争・弱肉強食が避け難い時代なのですから。

以上の様な世界・東洋の状況を背景として、天照らす大神と三箇の男の神の御神霊が神功皇后に懸られたのです。単に古事記の文章に見るような、隣国の金銀財宝をとるというためのみの神懸りではなかったのです。それは数千年という長い年月の人類の歴史の上で、日本民族が果すべき使命の遂行のために、必要欠くべからざる日本国の政策転換を促す大号令であり、至上命令であったのです。

この日本と朝鮮の戦争を契機として、第十五代応神天皇の時より日本と朝鮮や中国大陸との交流が盛んとなり、日本の物質文明発展のための基礎が築かれて行つたのです。その影響は千六百年の後の今日にまで続き、近い将来、起るであろう人類の第三文明時代幕明けに於ける日本民族の果すべき役割に大きな関係を持つ事となります。

古事記神功皇后の章に現われた天照らす大神と底・中・上箇の男の神の御神示によって、私達の大祖先、皇祖皇宗の壮大な御経綸を窺うことが出来るであります。

【収載】第八十一号(平成七年三月)

●「古事記と言霊」刊行に当たって

近々「古事記と言霊」が刊行されることとなりました。「古事記がなければ言霊布斗麻邇の学問は世に出ることが出来ず、言霊学を知らなければ古事記を説くことは出来ない」と言われて来ましたように、古事記と言霊学の両者は密接不離の關係にあり、それぞれ片方ずつではその意味内容を真に捉えることが出来ないものであります。

遠い昔、人類の精神文明を創造して来ました基本原理である言霊布斗麻邇の学問を、人類の第二の文明である物質科学文明創造促進のために、方便としてこの世から隠没させたのが今から二千年前、崇神天皇の御代のことでありました。方便として一時的に隠したのでありますから、時が来れば（物質科学文明完成の時には）再びこの言霊の学は世に現われねばなりません。原理再生のためのよすがになる施策が種々講ぜられたのであります。日本の国家機関が時代的に最後の施策として行ったのが、この古事記の編纂でありました。奈良時代初めの頃であります。

撰者太安万呂は朝廷の意を体し、苦心の結果古事記特にその上つ巻の神話を編纂・完成させたのでした。安万呂の苦心とはどんなものであったのでしょうか。それはいみじくも大本教々祖出口ナホ女史がそのお筆先の中で「言うては

ならず、言わいではならず、神はつらいぞよ」と指摘しましたように、世の中から隠してしまった言霊の原理をあらさまに説くわけには行かず、そうかと言って、時が来たならば後世の人々に言霊学の存在とその全貌を気付いて貰わねばならず、そこで考え出したのが、言霊五十音の原理の自覚の下に、多勢の神々の名前を集め、五十音言霊の一つ一つと、その運用法五十にそれぞれ適当な神様の名前を当てはめて行き、それ等の神様の神話を作り、その神話全体で言霊布斗麻邇の原理の全容を構成しようという精密にして壮大な編纂の作業を成就させた事であります。

安万呂の古事記編纂より千三百年の歳月が流れました。安万呂の苦心の神話の謎々を解くべき時が到来しました。今から百年前、明治天皇御夫妻に始まる古事記神名の言霊学的解明は、幾多先輩の努力を経て、著者の師、小笠原孝次氏に至って初めて言霊学の全貌が解明され、一冊の本として刊行されましたのが「古事記解義言霊百神」であります。昭和四十四年（一九七〇）のことでありました。

御参考までに先師の著「古事記解義言霊百神」の冒頭の文章、「開闢・天地のはじめの時」という第一章を引用してみましよう。

天地は今此処で絶えず開關しつゝある。古事記が説く「天地のはじめ」とは天文学や生物学や歴史上の観念で取扱うところの事物の初めを言っているのではない。古事記神代巻は必ずしも過ぎ去つた大昔の事を取扱つているわけではない。今が、そして此処が、すなわち now-here が恒常に天地の初めの時であり場所である。すなわち天地は実際に今、此処で絶えず剖判し開關しつゝある。その今を永遠の今という。この事を禪では「一念普観無量劫、無量劫事即如今」（無門関）などという。「永劫の相」（スピノザ）とも言う。そしてその場所が常に宇宙の中心である。この今此処を「中今」（続日本紀）という。

この始原である中今から天地は瞬間に剖判して、忽然として森羅万象を現出する。言霊麻邇はその瞬間に活動する生命の知性の内容でありその原律である。この恒常の天地の初めである「中今」を把握するところがあらゆる事物をその根源から理解する上の正規の出発点である。仏教、キリスト教、儒教等の古来の哲学宗教の修証である「空」「悟り」「救われ」「天」などと言われる宗教上の体認は全て此の中今を把握することに他ならない。そしてこの中今と言う天地のはじめの把握が神道に入る門であり、神道の出発点である。布斗麻邇とはこの「空」である中今の精神的宇宙

宙、法界の中に活現する人間生命の自覚内容、すなわち、般若経で言う「諸法の空相」と法華経で言う「諸法実相」の原理と原律のことであり、並びにその原理原律を人間の自覚と自主自律性の下に社会国家に活用して行く方法を言うのである。

わが師、小笠原孝次氏は極めて博識であり、その文章は名文、その論理は明快でありました。難解な箇所を幾度となく繰返し読み、その真意を把み、その上で更めて読み直してみますと、そのカミソリのような文章の正確さに驚かされた事がしばしばでありました。ただ残念な事には、師が余りに博識でありましたので、その文章を読み勉強する後進の若い人達にとっては極めて難解なものとなります。

禅を、スピノザの哲学を、般若経を、そして法華経等々を読んだことのない人にとっては、その文章は全く取りつく島のないものに思えた事でした。私の家内がよく言う言葉があります。「小笠原先生の文章には、その中の用語をやさしく説明する解説者が必要だ。」

「言霊百神」が世に出て二十五年、師がこの世を去つて早や十二年が経ちました。この間、私は私なりに師の文章を咀嚼し真意に迫り、その上で更に五十音言霊麻邇そのものの

実態を知ろうと務めて来ました。人は何々の事がしたい、成し遂げ度いという願望が強ければ強い程、自らの怠惰、非才を感じるもののようにあります。あちらへチヨロチヨロ、こちらへキヨロキヨロしながらも、一途に思いつめたもののように古事記上つ巻の謎を現代人の心と用語とに結びつけようと努力した結果が今回刊行される「古事記と言霊」であります。

「古事記と言霊」は、私の家の直ぐ近くに新築された大田区立田園調布富士見会館の会議室を会場に、昨年十一月までの過去二十一ヶ月にわたり、月一回開講いたしました言霊学講習会における私の講話を基礎にして、古事記上つ巻の初めより三貴子の誕生までに示されました神話の謎を解き、言霊学の全貌を明らかにした言霊原理の解説書であります。講話の要旨はその都度、翌月の会報「言霊研究」に載せて会員の皆様にお知らせいたしました。その会報の文章を更に推敲し、足らざるを補い、余分を除いて一冊の本の文章として初めから終りまで話の筋道が一本にまとまるように務めました。

「古事記と言霊」という題で毎月一回、二十一ヶ月にわたり古事記上つ巻の神話の謎解き、言霊学の入門より奥義まで

の話を受けて参りましたが、その間、私自身の心の中に種々の変革・変遷が起りました。人に対してお話を申上げるということは、聞いて下さる方々から瞬間々々に有言・無言のお話を返って頂いているようなものであります。私の話を聞いて頂いた方、御質問を賜った方々に厚く御礼を申上げる次第であります。この講習会の二十一ヶ月の間に、私自身が特に教えられた事、感じた事などを御披露申上げて、読者の皆様の言霊学勉強の御参考に供したいと思えます。

二十一ヶ月にわたる「古事記と言霊」と題するお話の間、また一冊の本にまとめる原稿の推敲中、私は私の言霊学の師、小笠原孝次氏の著書を自らの座右に置かないよう務めました。それは何も師に対抗して自らの主張を強調しようとしたためではありません。そうではなく、師から教えられた言霊学の知識を自らの心の内にしっかりと持ちながらも、千三百年前、古事記の編者太安万呂が朝廷の意を体し、大昔の靈知りの日本人の祖先である皇祖皇宗が、それによって政治を行い、それによって人類数千年の歴史創造の経緯を設計した言霊布斗麻邇の真理を神話の謎として

後世に遺そうとした当の太安万呂の真意が、現代に生きる私自身の心の内で、どの様な内容で表現され、証明されるのであろうか、を確かめたかったからであります。

ということは、言葉を換えて言えば、日本人の大祖先である皇祖皇宗の御経綸と、そのための原理である言霊の原理を神話の謎として後世に遺そうと身を傾けた太安万呂の真意を、私という現代に生きる一個の人間の心の中に表現し、自覚し、この世界の状況に当てはめて少しも間違いない真理であることを自身で証明しようとするのであります。更に敢えて言うならば、日本人の祖先の世界歴史創造の経綸と、その土台となる言霊布斗麻邇の原理が、太安万呂の伝える古事記の真意に則って間違いないものであり、その御経綸が現実には自らの生命の中で活動していることを身を以て証明したかったからであり、また証明しなければならぬ問題だと思われたからでもあります。

何故なら、大転換の時を迎えたといわれる現代世界の状況が、皇祖皇宗の人類歴史創造の経綸の示す通りに動いて行くか、否か、それは太安万呂の遺した古事記神話の謎を解き、それによって示される生きている人間の心の構造の全てである言霊の原理通りに著者自らが生きていくか、ど

うかの自覚を得ることに依つてのみ証明されることだからであります。それを表現するためには、神話の謎によって後世に語りかける安万呂と著者自身との直接の無言の対話を必要と感じたからであります。

古事記の編者と私との、またそれを通して数千年前より世界の経綸を行っていらつしやる皇祖皇宗との誰をも交えない直接の対話は、「古事記と言霊なる題の講習会が行われた二十一ヶ月間、間断なく続きました。その二十一ヶ月間の丁度中ば頃の昨年二月下旬、私は家内と共に奈良市の東山を越えた部落の茶畑に発見されたという太安万呂の墓に詣ずる機会に恵まれました。謎解きによる私達大先祖との対話は、その都度、胸躍る興味深い緊張の瞬間で御座いました。夜中に目が覚め、皇祖皇宗よりの語りかけを感じ、ベッドの上に静坐して幾時間もの間まんじりともせずにした事幾十度でありましたらうか。

古事記の神話は言霊の原理として甦り、私自身の心の構造の隅から隅まで残す所なくその構造と動きを手を取って教えて呉れるように私の自覚を呼び覚ましてくれたのです。対話が続いて行く毎に、言霊学が真理であること、その原理を人間とその社会に適用して誤りのない事を知らし

て呉れました。人間心理のあらゆる葛藤がこの原理によってほぐれ出し、白日の下にその真実の姿を現出して行く光景は、忘れようとして忘れることは出来ない厳しくも楽しい心の出来事であったのです。

長く私の心の中の出来事のみを強調し、誠に恐縮ではありますが、二千年の闇を通して隠れていたものが今、人間の頭在意識への自覚として浮び上って来る事を感じた喜びは何にも譬えようのない素晴らしいものであります。

古事記の上巻(神代卷)は「天地の初発はじめの時、高天原に成りませる神の名は……」と始まります。この冒頭の言葉である天地の初発の時とは、幾度となくお話して参りましたように、現代の古典文学者や宗教家のいう様な眼前に展開している目に見える外界宇宙の数億年も前の生成の時の事ではなく、私達の内面の心の宇宙について言っているのです。その天地の初発といえは、心の内に何もまだ起っていない透明な、まっさらな宇宙ということになります。この何か起る以前のまっさらな宇宙、意識にのぼる現象が起る以前の宇宙である高天原に、即ち哲学で言う先天宇宙に何があるのか。古事記はその先天宇宙に成るものとしてズ

ラズラと合計十七個の神様の名前を挙げます。

この神名に当たる言霊を並べますとアオウエイの五母音、ワヲエキの四半母音、チイキシリヒニの八父韻、合計十七個の先天宇宙を構成する言霊です。そしてこれ等十七個の言霊が活動を開始して、現象を生み出そうとする瞬間、それが私達にとって今であり、此処であるわけです。続日本紀はこの今・此処を中今と呼んでいます。言い換えますと、宇宙はこの中今に於て剖判して現象を生む、その時が今であり、此処である、ということですよ。

そこで考えて見ましょう。私達の遠い祖先は見ることも意識することも出来ない心の先天宇宙に十七個の言霊があるとどうして分ったのでしょうか。どの様にして発見したのでしょうか。「大昔の人は、めまぐるしい現代のような物質文化に穢されていない感性の鋭い人達であったに違いないから、意識出来ない心の内の存在ともツーカーに連絡出来る感受性を備えていたのでしょ」という人が居ます。

大昔の人々が現代人より清透な感性を持っていた事は、万葉集の歌を見ましても首肯出来ます。けれど先天十七言霊、それに続く三十二の後天子音と言霊学の百個の全体系をただその鋭い感性だけで発見・完成させることなど出来るは

ずはありません。その鋭い感性に支えられた精細な論理性と長年月の研究との結果の発見であつたに違いありません。

では先天の心の構造を私達の祖先はどの様にして知つたのでしょうか、意識することの出来ない先天構造の内部を研究する道はただ一つしかありません。その唯一の道を現代の原子物理学が教えて呉れます。物理学の詳細は勿論分りませんが、聞く所によると、原子核内の粒子を各々分離させ、それを巨大なサイクロトロン等の加速器の中で猛烈な速度に加速させ、その加速された目に見えぬ物質要素を特殊な写真乾板その他に衝突させ、それによつて現われる現象によつて、物質を構成している原子核内の粒子のエネルギーや大きさ等を計算し、そういう作業を注意深く観察し、そのデータを根気よく集めることによつて、逆に現象を現出させて来る物質の先天要素の存在と内容を推察して行く、という方法を取るのだそうです。

私達の祖先が大昔に採用した方法も同様なものであつたに違いありません。ただ違ふのは、現代物理学の研究が人間から見て外界の物質世界の探究であるのに反し、私達祖先のそれは、飽くまで自らの心の内への探究であつた事で

す。人間の心の中に起る出来事、人と人との間に起る心の出来事、そこに展開される心の動き、種々のそれ等の出来事を持ち寄り、それらの出来事が何故起るのか、出来事が起るための、起る以前の心の内面はどうなっているのか。

多勢の人々の長年月にわたる議論研究が行われた事でしよう。現象から現象以前の先天の構造へ、推理された先天構造から見て、集められた後天の心の構造に矛盾が起らないか、どうか。後天より先天へ、先天より後天へ、観察と理論構成は何回となく繰り返され、遂に先天構造として十七言霊、後天現象の要素として三十三子音言霊、合計五十個の言霊とその言霊の典型的な動き五十、計百にまとまる壮大にして精密な人間の心の構造の一切を示す言霊布斗麻邇の原理が完成されたのです。言霊の原理は古代人の感性ばかりでなく、多勢の人の長年月の研究の成果であつた事に間違いありません。

さて「天地の初発の時」の章をお話するに当つて、私は、心の本体と謂われている禪の空、キリスト教の救われ、等と表現される心の宇宙と、それまで私自身と思ひ込んで来たもの、即ち私が生れてからその時まで集めて来た経験知とを真向から対立させて見ました。数えただけでも幾十と

ある私の経験知を以て、それを総動員することによって、生れたままの《まっさら》な心の宇宙に迫ることが出来るか。私の持つ知識は敢えなくも一つ一つ討死して行きました。今まで私の存在の拠り所と思っていた知識が、私自身が思っていた程の力もなく、大きくもない事に気付く事は決して楽しい事ではありません。経験して得た価値あるものと思われた知識が、実際にその知識の総合体と思われた私自身のそれまでの生涯を楽しい意義あるものにして呉れたであろうか、反ってその生涯は闘争と焦虚の暗い一生ではなかったか、そしてそれが空とか救われとは全く縁のない空虚なものであった事に気付き、それを確認する事となつた時、それ等生れてから何十年の間一所懸命に勉強し、集めて来た経験知が、そして自らの思想自体が自分というものの中にあつては何らの価値も持たぬものである事を知つた時、経験知の集積としての自我意識は何時の間に跡形もなく消え去ってしまった事でした。

と同時にそこに内観される心の宇宙の透明さ、なごやかさ、そしてその涯しない無限の広さ、それは実際の表現に言葉のない世界です。今迄の心の葛藤の連続の生活が如何に空虚な物であり、時間と空間の中に押しつぶされた地獄

の様相そのものであつた事か。その自我が消え、眼前に展開する心の宇宙の大きさを知り、またそれを表現するに言葉がなく、それを考え得る思惟もない事を知つた時、人間というものの存在の分際を知つた思いでありました。人間の心と言葉即ち人間の能力の限界は此処まで、と烙印を押されたのです。

言い換えますと、人間の思惟能力には「無限」という壁があつて、その向うに何があるのか、無いのか、それは人間が預り知らぬ事なのです。ある宗教はその無限の向うは更に別の宇宙を設定し、そこにいる神々の事について説いています。如何なる設定も自由ですが、それは虚妄であり、単なる空想の産物に過ぎません。人間に許された性能は此処より彼処まで、それが真実です。

人間の思惟に限界があり、無限という壁がありますので、人間がそれでも何かしようとするならば、行き止まりの壁から今迄の道へ引き返さなければなりません。それしか道はありません。では何処へ引き返すのか、それは物事が始まろうとする瞬間、即ち今・此処である中今です。人間の、そして人類の生命は実はこの永遠の中今に住んでいます。人間の生命である五十音言霊とは、この中今に展開する生

命そのもの、その生命が自らを自覚した姿のことを言うの
です。

この先天の宇宙の中に何があるのでしょうか。先ずはアオ
ウエイ五母音で示される五界層の次元宇宙です。宇宙の中
の实在はこの五つの次元宇宙以外には存在しません。次に
五次元宇宙と陰陽を成す四半母音宇宙です。次には言霊イ
の創造意志の展開である八つの父韻チイキミシリヒニで示
される人間の創造智性の原律です。

この五界層の次元宇宙の自覚を一つ一つ登って行き、創
造意志の言霊イの次元に自らの視点を置く時、この十七の
言霊以外に心の宇宙に存在するものがない事を知るので
す。古事記神話に示される先天を構成する「天津神
諸^{りんしちのみこと}命」である天之御中主の神(言霊ウ)から十七番目の
伊耶那美神(言霊半)まで十七神以外、先天宇宙の神はいま
せん。

右の先天十七神、十七個の言霊は人間を人間たらしめて
いる根本性能であり、人間生命の原動力であります。それ
は生命の光であり、光の根源ともなるものです。

最近関西地方を襲った大地震のショックが大きかった為

か、私の所に各方面から「何か神の警告ではないか」、「淡
路島(アとワの路)、神戸(神の戸)、その線を延長すると大
本教の綾部、それに丹後の元伊勢神宮に通じ、この地震が
いよいよ言霊原理がこの世に出るぞという神の知らせでは
ないか」この大地震は最後の審判と言われて来たものの始
まりであり、余りに不正直で心のねじけた人間が多くなっ
たので、神の裁きが下ったのだ」等々の声が届きました。
しかしこれ等の声は、その声の主がまだ個人の不幸の段
階から抜け切れない経験知の思惑に過ぎず、そのための妄
想であり、たわごとであると言わざるを得ません。「一切
衆生撰取不捨」が永劫に変らぬ神の光と愛と慈悲の態度で
あります。神と言われるものの本態である言霊原理が甦っ
た今、人々に不安と恐怖を与える神など宇宙の何処にも存
在しない事を知るべきであります。

先師の「古事記解義言霊百神」の終りの方の文章を再び引
用させて頂きます(二二七頁)。

「さて此処で飽^{あまく}能^{のう}宇^う斯^し能^の神^{かみ}までの意義は大凡^{おおよそ}釈けたわけだが、
以下の六神に関してはまだはつきりした説明の要領がつかめない。暫

らく先師山腰氏の説いた所に準じて説いて置くことにする。」

とあり、その六神名として奥疎の神、奥津那芸佐毘古の神、奥津甲斐弁羅の神、辺疎の神、辺津那芸佐毘古の神、辺津甲斐弁羅の神の名を挙げています。この六神名の謎については、先師在生中に一度語り合つた事がありました。結局師の死後の私の宿題として残されました。

「古事記と言霊」のお話を続けながら、私の最大の関心事もこの六神名の解明にありました。宿題は果さなければなりません。とは言え教えて呉れる人、話し合う人は居ません。太安万呂の遺してくれた神名と、今に生きる私自身の心の動きを見つめるより他に解明の方法はありません。幾日となく瞑想の日が続きました。そして幸いな事に、私自身の視点を神名解明の理論的(言霊オ)観点から、禊祓実践(言霊エ)の観点に引上げることによって、六神名の謎は私の心の実際の動きの中に、手にとって見るように明らかに知ることが出来たのでした。この事によって、古事記言霊百神の謎は悉く解け、言霊布斗麻邇の原理は古代に於て人類の精神文明を創造していた時と同じ真実の姿を甦えらせたのです。

これも大本教の所謂「世の建替え、建直し」の時が近くなつた証左でありましょうか。この古事記神代卷の解明により、世界人類の歴史創造を担う意志を持ち、自らの魂を真正面から見る事を知る人ならば、この「古事記と言霊」を読むことよつて、大昔の靈知り(聖)と同一眼で見、同一耳で聞く境涯に住むことが可能となりました。歴史の大転換期に於ける一つの関門を乗り越えた事であり、会員の皆様と共に御同慶にたえない所で御座います。

【収載】第八十二号(平成七年四月)

●八十禍津日の神

古事記禊祓の章に出て来る八十禍津日神の意義を仏教の十法界との比較よつて解説することにしよう。

仏教に六道という言葉がある。人間が種々の煩惱によつて奔弄されて作る罪障のために、車輪が回転して果しがないように、過去・現在・未来にわたり生れかわり、死にか

わり永久に苦しまなければならぬ六種類の苦しみの世界のことである。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六種類である。この苦界に沈む人々を救おうとしてお釈迦様は仏法を説いた。苦界より解脱する仏の道である。

図 083-A

仏陀
菩薩
縁覚
声聞
天上・衆生
人間
修羅
畜生
餓鬼
地獄

六道の苦しみに喘ぐ人々のことを仏教で衆生と呼ぶ。衆生とは仏の救済の対象となる一切の人間のことである。そして人はその心の悟りの程度により、衆生・声聞・縁覚・菩薩・仏陀の五段階の境涯に住むとされる。衆生とは六道に苦しむ一切の人々のことである。

図 083-B

ワ	ニ	ヒ	リ	シ	ミ	キ	イ	チ	ア
ヲ	八十音 子音 言霊							オ	ウ
エ								キ	エ

と努力する人、縁覚とはその悟りを開いて解脱し、自由・平安の境地に入った人、菩薩とは自らの悟りに満足せず、苦界にある他の人々を救おうと発心した人のことである。最後の仏陀とは、世の人を救済する努力の末に、人間が人間であるべき究極の法則を知り、その

のことである。図に示すと図 083 B のようになる。

普通五十音図を上下二段にとり、百音図を作る時、上段は言霊五十音、下段はその運用法五十の上下二段の鏡餅の原理の事と言われている。しかしこの五十音図上下二段の

中に住んで一切衆生を見せなわしている境涯である。ここで先に挙げた六道と仏道の五段階とを縦に並べると図 083 A が得られる。この十境涯を仏教は十法界と呼ぶ。仏の眼によって見る時、十法界の内の下の六道の六段階は衆生という一段階に吸収され、苦界は消える。

さて此処で言霊学の話に移ろう。古事記上つ巻の禊祓の章に八十禍津日神という神が登場する。八十禍津日神の「八十」とは人間の心の要素である五十音言霊図を上下にとった百音図の内、左右の母音・半母音の合計二十音を百音より差引いた八十音

百音図は更に広い意味内容を蔵しているのである。この事に関して「古事記と言霊」では要点を簡単に述べたが、今、更に詳しく説明して見よう。

昔、言霊のことを一文字で霊と呼んだ。またその動きを靈駆ひんかと呼んだ。またその動きを靈駆ひんかと呼んだ。

図 083-C

縁	覚	ア
声	聞	オ
衆	生	ウ
菩	薩	エ
仏	陀	イ
地	獄	イ
餓	鬼	エ
人	間	ウ
修	羅	オ
畜	生	ア

よいであろう。

「しかしその果てしない生存競争のおかげで、物質科学文化が発達し、かくも便利な社会を現出したのではないか」と反論する人もあろう。確かに世の中は便利になり、夢にも思われなかった華麗な社会が作られた。と同時に人間が大自然と

いう本性から遠ざかる結果を招来した事も事実である。

そこで自らの外にある便利で興味ある機械、多様な社会文化というものを一先ず傍わきに置いて、それを経験し、享樂し、追い求めている自分自身の心の内面だけを見つめて見てはどうであろうか。そこには次々に変わる享樂の対象、それを追い求める飽くなき欲求、一日でもそれら享樂の対象が遠のく時には忽ち欲求不満を起す心、多様で便利な社会の裏に繰り広げられる欲望の黒い渦巻を容易に見出すことが出来る。現代社会の底では飽くなき欲求と生存への絶え間ない闘いを見ることである。

かく見て来ると、一方に言霊原理の自覚ある高天原の清浄世界と、片方に言霊の自覚のない黄泉国の闘争と暗黒の世界がある。そしてその双方共が人間生命が其処に生きる

り(光)と言った。この霊で構成される高天原の心の世界は五母音、四半母音、八父韻、三十三の子音という五十音言霊の世界である。高天原と言われる人間の思考の中枢領域にはこの五十音言霊以外に他の要素は存在せず、極めて平安・清浄な世界である。

この高天原の清浄無垢な世界に対し、古事記で黄泉国と記される高天原以外の国がある。この領域は霊である言霊原理の自覚がなく、光のない暗闇の世界である。黄泉国とは黄きさす(兆)泉の国の意である。文化の元となる種々雑多な考え方・思想が泉から水が湧き出る如く現われる。それらの思想・アイデアは互いに競争し合い、攻撃し合い、結ばれ、離れ、果てしない葛藤の中にいろいろな社会の文化を生んで行く。その姿はまさに、葛藤の連続と言ったら

世界なのだ。そこで前に示した八十禍津日神の百音図の上
下二段の母音の内、同じ母音の上下の実相の相違について
考えて見よう。

言靈イ

【上段】 布斗麻邇(言靈)の存在する次元。

言靈イ以外の四次元を統轄し、八父韻によって、四
次元から現象を発生させる根元となる次元。仏教の
仏陀のいます境涯であり、すべての事を知って、他
の四乗を見そなわす仏の居処である。全ての事を知
って(自覚して)しかも自らは決して動かない境涯で
ある。仏教で総持という。時間・空間の現象を成立
させる根源である。

【下段】 言靈の自覚(光)がなく、それ故暗黒で時間・
空間の停止した世界であり、正に救いのない仏教で
説く蟻地獄・血の池地獄・針地獄等、一度そこに落
ちたら永久に脱出し得ず、同じ苦しみが果しなく続
く世界である。

言靈工

【上段】 言靈イの麻邇の原理の自覚に基づいて、言靈
ウオアの次元の事物を選び、個人・社会・国家・世
界人類の福祉増進の創造のために働く道徳の次元で
ある。仏教で菩薩乗という。

【下段】 人間の心の構造の法則の自覚を欠くため、そ
の創造行為の選択は個人的体験に基づくこととな
り、気まぐれで定見がない。よいと思えば何にでも
飛びつく。世の混乱のもととなる。仏教で餓鬼道と
いう。

言靈ア

【上段】 世の一切の現象が現出して来る根源の宇宙が
自らの生命の本体であることを自覚した人の境涯。
一切の業縁から解脱し、生れたばかりの赤子に帰っ
た人の境涯。心のわだかまりのない、さわやかな感
情の次元。仏教で縁覚乗と呼び、その境涯にある人
を阿羅漢という。

【下段】 生命についての自覚の全くない、気促奔放な
心の人の境涯。大人でありながら大人の分別がなく、

世の中の規律の外に住む人の境涯。赤ん坊や獣が時と処を選ばず大小便を垂れ流す如く、人の迷惑も省り見ず、人生を送る人の境涯。仏教で畜生道という。

言靈才

【上段】正しい原理・法則を学び、やがて自らの経験知を総合して真理に達しようとする研究、努力している人の境涯。人との論争も、その論議を通じて、お互いに真理に達することを信じる境涯。仏教で声聞乘という。

【下段】自らの経験による知識を絶対と心得て、何が何でも人や社会に押しつけようと主張する人の世界。その論争の目的は真理に達することではなく、他人の議論に打ち勝つだけを事とし、当然果てしない論争を巻き起し、人と人とのいさかい、果ては国家間の戦争の原因をつくる。仏教はこの境涯を修羅道と呼ぶ。

言靈ウ

【上段】五感感覚に基づく欲望の世界に明け暮れして

いるが、それがそのまま光の自覚の恩恵の中に生かされて、人類文明創造の担い手として生きる生きとし生ける人々。仏教で衆生乗と呼び、天上と名付けらる。

【下段】光の自覚を失って、六道に輪廻する人の総称。仏教で人間と呼ぶ。所謂沙婆世界の事。

以上、アオウエイ五母音次元に住む人の、光の自覚の有無によりその境涯に大きい相違が生じることを見て来た。そしてこのアオウエイ五母音を上下にとった十段階は人間のあるべき境涯のすべてであり、またそのそれぞれの境涯の八十の実相は視点を言靈アの次元にとることによって最も明瞭に認識・識別されることである。

それならこの八十禍津日神が「かの穢き繁き国に到りたまひし時の、汚垢けがれによりて成りませる神なり。次にその禍を直さんとして……」と伊耶那岐大神が禊祓の実行方法として採用しなかつたのは何故か。その事について説明し、八十禍津日神の説明の本筋に入ろう。

八十禍津日神とは、天の御中主神より須佐男命までの言

霊原理を示す百神の中の八十七番目に当たる禊祓の章に出る神である。禊祓とは仏教の所謂「一切衆生撰取不捨」の個人救済だけでなく、世界のあらゆる精神的産物・文化を撰取しコントロールして人類の歴史を創造して行くことである。

但し、諸文化を撰取・コントロールして新しい歴史を創造するという事は、素材としての文化を取り上げ、批判し、取捨選択することと考え勝ちであるが、そうではない。

伊耶那岐命は高天原から、妻神のいる黄泉国に行き、その未整理の物質科学文化を見て、高天原に逃げ帰った。そこで禊祓が始まる。禊祓とは清浄無垢の言霊原理をもって、対象である黄泉国の未整理の物質文化を批判し、取捨することではない。対象を批判するのは言霊オの働きである。けれど禊祓の創造は言霊エに属している。禊祓とは、主体である伊耶那岐命が客体である耶那美命と一つになった立場、主客の対立でなく、主と客が一つになった宇宙身(絶対)の伊耶那岐大神となつて、自らの大身の祓いをする事である。禊祓とは相手を包含して、自分自身のこととした創造である。

批判するにしろ、または禊祓をするにしろ、その素材と

なる黄泉国の文化の実際の姿や内容をよく知らねばならない。よく知るためには視点をア次元に置く事が望ましい。ア次元から見て高天原と黄泉国の文化の実相(現象)を上下二段の八十言霊として図にまとめたのである。然るにその八十禍津日神を「かの穢き繁き国に到りたまひし時の、汚垢によりて成りませる神なり」と言つて禊祓の原理としては採用しなかつた。それは何故か。

素材の実相を明らかに見る仕事は、実は八十禍津日神より以前に言霊百神の中に己に出て来ているのである。それは禊祓の行為の基礎となる建御雷男神の属性として仕事を受け持つ五神の内の最後に現われる飽咋大人神である。明らかに組む仕事の主人公となる働き、の意を持つ神名である。この神の働きによって素材の姿は己に明らかに識別されているのであるから、その上更に八十禍津日神の所でその作用を繰返す必要はない。八十禍津日神は禊祓の対象を上下二段の光の有無という八十個の実相として見る働きのことではなく、禊祓の仕事とは八十の実相として見てその実態を明らかにすることだけでは済まされず、またその事だけで済ますことが悪い(禍)事となるのだという事の確認を示した神名なのである。この事をふまえることによって

八十禍津日神なる神名の眞の内容が理解されて来る。

人は他人の非をただそうとする時、「君はかくかくの状況の折に、かくかくの行動をとったのだよ。多分かくかくの気持でやった事であろうけれど……」とその時の状況を明らかに告げて、その上で「だから反省し、改めなさい」という態度を以て臨む。それで成功することがない事はないが、大抵の場合はいまよく行かない、何故か。非難される大方の人は、そういう状況下に於ける自らの行動の非なる事を知っており、然もその非なる行動をどうしてもとらざるを得なかつたというのが実状だからである。「分かっちゃいるけど、止められない」という事なのだ。こういう場合、實際の状況や心理の暴露を手段とする非難や説得は何の役にも立たない事となる。

右の如きやり方が上手な手段ではない、ということを確認すること、それが八十禍津日神という神名の示す意味である。それでは事態を改善させるにはどうしたらよいのか。心理のもつれを解決する方法は何時の場合にも唯一つしかない。関係する人々のすべての状況や心理を承知し、それを踏まえながら、人を非難するのではなく、また愚痴をこぼすのでもなく今・此処で何をすべきか、の一点に帰るこ

とであろう。

ある人がいさかきを起したとする。その人にどう対処したらよいか。先ず事が起つた時の状況、その人の心理状態、事件のために気まづくなつた人々の心境等をよく理解し、その上でどんな結末に持つて行つたら八方円満に事をおさめることが可能か、を心の内にまとめ、更にその上で、これ等諸般の状況を知識として心にとどめながら、然もそれを一応傍に置いておき、更めて事を起した当事者である本人が納得出来る、しかも今・此処で実行し得るどんな行動が可能か、を発見することであろう。

一つの出来事を契機として、個人の生活、社会、国家、世界の将来を円満に創造して行く為には、心理的に右に示した様な手順が必要であり、また不可欠である。事件の状況の分析と認識に留^{とどま}つて、その事態をただ人々の前に明らかにさらけ出すことだけでは物事の円満な解決にはならない事を確認した、これが古事記に於ける八十禍津日神の神名が示す内容である。

「この二神（八十禍津日神と大禍津日神）は、かの穢き繁き国に到りたまひし時の、汚^{けがれ}垢によりて成りませる神なり」と古事記は指摘している。言霊布斗麻邇の靈^{ひか}駟りの自覚の

世界はアオウエイ五界層の世界である。その高天原から出て黄泉国に行き、其処の文化を見聞した事によって伊邪那岐の命は靈驅りの自覚を欠いた百音図の下の段の実体を知ることが出来た。そして靈驅りの自覚のある世界とない世界の八十の実相をただ見るだけでは創造の行為にならない事も知った。「かの穢き繁き国に到りたまひし時の、汚垢によりて成りませる神なり」である。

「次にその禍を直さむとして」と古事記の文章は続く。どのように直そうとしたのか。今迄に検討した事によれば、「已に明らかになった八十の実相を知識として心に留めながら（言靈オ）、然もそれを一応傍に置いておいて、更めて今・此処で当事者が納得出来、実行可能な事は何か、を採すこと（言靈エ）」である。言靈オより言靈アへ、更に言靈エへの飛躍が要求される。

さて「状況に関する知識を傍に置く」事は言うは易く行うに難い事である。人は往々にして知った知識を被露けかしたがる。言い換えると、知識がそれを知った人を操って動かしたがる。それを抑えて知識を傍に置き、自らの頭の中を白紙にもどす事は至難である。常なる実行には修練が要する。知識は古事記神名で宇麻志阿斯訶備比古遲の神と示す

ように葦の芽の如く次から次へと連続して止むことがない。この連鎖を心中に打ち切って白紙に帰る、禪で言う空に帰ることは心の練習の末に可能となる事である。白紙に帰る事（言靈ア）とは自らが知識の束縛から脱して、本来の創造の一点である今・此処に立つ事である。すると白紙であり、空そのものの中から人間が本来授かっている創造意志の知恵がほとばしり出て来る。創造意志は言靈イであり、その知恵は言靈エである。

古事記は更に教えて呉れる。「その禍を直さむとして成りませる神の名は神直毘神。次に大直毘神。次に伊豆能売」毘は日の謎である。三神は創造意志の原理、言靈布斗麻邇に則って社会・国家・世界を創造して行く人間智性を代表する三つの根本英智のことである。

この根本智によって撰取される時、黄泉国の光の自覚のない発想の暗闇の知識は、瞬時に姿はそのままに創造の光の因子となつて、コントロールされ、事態進展の、歴史創造の素材の役目を果す事が可能となる。闇は光が当たると同時に消える。闇の中の因子は即座に《れっき》とした光の素材因子として創造の歴史の中に組込まれる。

起ってしまった事態の如何なる因子も、それが個人的に

はいまわしく思われる出来事であっても、光の中に摂取・コントロールされる時は、一つの現象として姿はそのままに闇が消え、光の因子となつて採用される。それは何故か。本来、闇は存在しないものだからである。言霊オからエへ、八十禍津日から伊豆能売へ、の転換とは以上の如きものである。

以上、言霊学の五次元母音、それを上下にとつた百音図に關係する古事記の八十禍津日神と仏教の十法界との比較から禊祓と呼ばれる創造英智の発動の詳細について述べて来た。古神道言霊学の奥義である禊祓と呼ばれる道法の心理上の消息は以上のようなのであるが、話が少々堅苦しくなつ

たきらいがある。そこで最後にこの消息の実例として、筆者自身の体験を述べて見ることにしよう。その参考として先ず言霊学に於ける人間の五次元生長と

仏教の十法界との対比図(図083-D)を掲げる。

筆者が自分自身の心とその動きを観察し、その命ずる処

図 083-D

仏	陀	イ
菩	薩	エ
緣	覺	ア
声	聞	オ
天上	衆生	ウ
人	間	ウ
修	羅	オ
畜	生	ア
餓	鬼	エ
地	獄	イ

に忠実に生きようと志したのは、今から五十余年前、第二次大戦末期の事である。学徒動員という切迫した事態を眼前にして、「死とは、生とは、心とは、人間とは何ぞや」を死ぬまでにどうしても確かめたい、との願望で心は一杯であった。その日々の思索は幼稚であったが、思いつめた真剣さがあった。

幸い出征予定日直前に敗戦となり、現実の死は遠のいたが、自らの生命の真実を知り度いという願望は止むどころか、益々強くなり、その馬鹿の一つ覚えの一途な心は五十年が経つた今も続いている。

自分の生命の真実などというものは、ほとんど誰も教えてはくれない。探究の手段は読書と思索であった。学校その他の図書館で哲学書、歴史書、心理学書、道徳哲学等々をむさぼるように読んだ。自らの心の内容とその動きを見つめながら、自ら感受したその内容をどう表現し、自覚したらよいか、を過去の先哲の書の中に求めたのである。

これは、と思う先哲の知識を積重ねて行く事によって自らの心と生命の真実に近づいて行こうとしたのである。

さて、十九才の時から自らの心を見つめて来て、それに適当な言葉の表現を追求して五十年の歳月が流れた。その五十年間、経験と知識の積重ねの連続の生活であった。これを今日の自己の宗教的「反省の目で見たらどうであろうか。五十年の経験と知識の積重ねは真実の自分を正確に写し出す事が出来たか。否、である。経験と知識が生きている自己の姿の真実に迫ろうとすればする程、反って真実からは離れ、遠のいて行ってしまった事を、現在の私は知っている。私の今迄の七十年の人生の中で、その時々々の転機に私自身の経験とその知識が私自身の進む方向を詳細に決定した事は一度としてなかった事を、今更のように驚きの目で確認している。私自身の経験と知識は、私の人生にそれ程の力を持つてはいなかったという事を認めざるを得ない。

親鸞の歎異抄に「如来よりたまはりたる信心」という文章がある。浄土真宗の「南無阿弥陀仏」の信心とは、人間が、救われ度いと願って称える念仏ではない。一人では決して救われる事のない地獄に堕ちた身を憐れと思召す弥陀が、人に向って手を差し延べて下さった念仏である。同様に、五十首言霊学とは、皇祖皇宗が私にたまわり教えて下さった

た学問であり、使命である。私の所有では決してない。言霊学と信仰を除いて、後に残る私の自我、七十年の経験と知識を見るならば、暗黒の中に闘争の輪廻を繰返している地獄以外の何ものでもない。そこには靈驅りがなく、単なる繰返して時間もなく、空間もない。時処位共に失われた世界なのだ。私は動いてもいない。生きてもいない……ただ「居る」だけなのだ、と。そこで知った「地獄は言霊イ、即ち仏乗の裏の世界であることを」

生きてはいないが、居る、ただ居る、という事に信仰の感謝が授かる時、有難いと思う時、いの世界は瞬時にして仏陀のいます言霊イの世界に入る。生命・人生のすべての原動力である世界を知る。暗黒地獄もこの原動力によって成立している事を知る。その原動力を自覚する時、人は「生きる」事の意義を知る。生きるとは、言霊イの気が活動する、ということである。気とは言霊イの展開である八父韻のことである。

【収載】第八十三号（平成七年五月）

●スメラミコト

筆者が言霊学の師、小笠原孝次氏を初めて訪ねましたのは昭和三十九年（一九六四年）東京オリソニックの年でありました。今でもはつきり覚えていますが、氏の部屋に「皇学研究所」の札が置いてあった事であります。皇学とは珍しい学問もあるものだな、と思ったものです。

「皇学とは多分天皇学という事であろう。敗戦から已に十九年が過ぎた今、主権在民の時代に天皇学などを標榜しているのは、この方は戦前右翼の成れの果ての人なのかな」と思い質問して見ました。小笠原氏の答えは次の様でありました。

「皇学を《こうがく》と読んでは真の意味は出て来ません。正確には、スメラのマナヒと読みます。日本の古典である古事記や日本書紀が神代と呼んでいる太古の時代、『人間の心とは何か、心と言葉との関係は』という問題の究極の答えであるアイウエオ言霊布斗麻邇の学問を学び、理解し、自覚してその御稜威（徳）によつて世界の政を行つていた聖をスメラミコトと呼びました。スメラは統べる、統一するということ、ミコトとは御言とも命とも言い、この世の中にそれぞれの使命を持って生活している人々、またはそれ等の人々の言葉のことで、スメラミコトとは世界中の人々の言葉を統一する人ということですよ……」

「皇学とは太古にスメラミコトが学んだ学問のことであり、やがて完成され、また行き詰まるであろう物質科学文明時代を救済し、人類の輝かしい新しい時代を築くためには、太古と同じくスメラミコトの出現が不可欠です。そのためスメラミコトの学問である言霊学を研究する所として皇学研究所の名札を掲げています。」

氏のこの話を聞いて、氏と初対面であった私は大層驚き、また疑問を持ちました。「人間の心とは何ぞや」とは筆者が旧制高校の時、幾度となく自らも口にし、また他人からも聞いた言葉です。けれどそれに完全な答えを出した学問があるなど、聞いた事がありませんでした。それに、心の問題を解明したという学問が日本のみならず世界全体の理想の政治を行うことなど出来るのであろうか。自分の目の前にいる人は、いとも真面目であり、論理は明快ではあるが、大法螺吹きではなからうか、との思いも起りました。

けれど小笠原氏の言霊学の講義の論理は誠に精密であり、何事に対してもアイマイさがない事でした。アイウエオ五十音言霊学が果して氏の言うようにスメラミコトの学として全世界に通用し得る学問なのか、どうか、それは筆者自らが勉強し、確かめなければならぬ問題だ、と決意し

たのでした。

魅せられたように小笠原氏に言霊学の手積きを仰いでから、三十年の歳月が経ちました。怠惰・非才な筆者でも次第に言霊学という壮大な殿堂の全容が理解されて来ました。人間の眼前に展開している外界の宇宙が果てしなく大きく、その中に繰り広げられる現象がまた数限りなく多種多様であり、しかもその幾多の現象が厳密な原理・法則の下に現われては消えて行くのと同様に、それら外界の現象を見ている人間の内なる心の世界も、果てしなく広く大きく、その中に数限りない心の現象を現出し、しかもそれら現象のすべてが心の厳密な法則の下に現出・消滅している、という事実を明らかに掌を指し示す如く理解し、自覚することが出来る、ということが分つて来ました。

言霊学とは文字通り言葉と心に関する学問です。心の出来事がどのような原因で起り、どのような構造の下に現われ、どんな現象となるか、それを言葉としてどう表現し、その間にどの様な原理・法則が存在しているか、言霊学は一点のアイマイさもなく、小気味よく答えてくれます。

他の学問と同様、言霊学も初めのうちは本やその他の出版物を読んだり、師の講義を聞いたりする眼や耳の学問です。

それによって理論の上で学問の理解が進みます。けれどもこの理解は証明を伴いません。理論の証明はただ自分自身の心でのみ可能な事柄なのです。そこで否応なく自らの心を見つめることとなります。

心の語源は《ころころ》だそうです。ころころと転がって変転極まりないのが心です。その自らの心を有りのままに見ることは易しい事ではありません。まして言霊学で天津磐境と呼ぶ、心の現象を起させる、現象以前の先天構造を内観することは更に難しい事かも知れません。けれど「習うより馴れる」で心を見ることに習熟すれば、それ程難しい事ではありません。

かくて初心より今迄三十年、言霊学の全貌が明らかになり、今年の春完成・刊行することが出来ました「古事記と言霊」の著書で、人間の心の先天・後天の要素言霊五十、その運用法五十計百個の原理が残す処なく解明され、太古に日本のスメラミコトが学び、自覚していたスメラのマナビの学の全貌がはつきりと暗闇の底から浮び上って来たのでした。

さて、ここで三十年の筆者の勉学の過程を検討しながら、スメラミコトと呼ばれる世界の歴史を転輪し得る人の心の

構造を明らかにして行く事としましょう。それによって、三十年前、師小笠原孝次氏の言葉に抱いた疑問にはつきりとした筆者自らの解答を出す事が出来る事にもなりません。

日本民族伝統のアイウエオ五十音言霊復活のための唯一の教科書である古事記神代卷は「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天の御中主の神(言霊ウ)……と始まります。即ち言霊学の勉強の第一歩はアイウエオ五母音の検討です。この五母音のことを中国の儒教は木火土金水と伝え、印度の哲学は地水風火空と名付けています。木火土金水も地水風火空も実際に外界世界に存在するものを喩えとする概念表徴でありますから、それが実際に何を指しているか、を考える人を自然外界の事物に導びいてしまう傾向があります。ところが、言霊学はアイウエオ五母音で示しています。

母音一音では、人の思惟が入り込む余地がありません。ですから、それが何であるかは、古事記が示す神様の名前に基づいて、自らの心の中に求めるより方法は残されません。そこに古事記言霊学の心と言葉の根本原理を学ぶため

の他に比類のない独壇場が展開されているのです。

母音言霊アイウエオは心の何を示しているのでしょうか。それは人間の心の現象のすべてがそこから現われそこに消えて行く元の宇宙です。言霊ウの宇宙から人間の五官感覚による原識、それに基づいた欲望が現出します。言霊オの宇宙から経験知が、言霊アから感情現象が、言霊エから実践智・選択智が、言霊イから人間の創造意志が発現して来ます。人間天与の性能はこの五母音から発現して来る性能で全部であり、その他の性能はありません。言い換えますと、人の心はこの五母音宇宙を住家として居るのです。五重次元構造の宇宙が心の家であります。五重が人の住む家の語源であります。

母音の次はウヲワエキの半母音です。半母音とは、母音が一切の現象を生み出す主観の宇宙であるのに対し、半母音は主観の呼びかけに答える客観宇宙です。母音は私、半母音は貴方です。

勿論、古事記が教えるように母音も半母音も「隠り神」であり、それ自身は決して現象として姿を現わすことはありません。母音としての私が目を閉じ、耳・口・鼻をふさいで、じっと何もしないならば、何の出来事も起りようがあ

りません。目を開け、耳・口・鼻を活動させ、人や物に何らかの働きかけを始めますと、初めてそこに何かの出来事が起ります。現象の発現です。それは対象となる半母音宇宙に母音宇宙が呼びかける(婚よ)事から始まります。そして、その呼びかけとなる母音と半母音の橋渡しの働きをするのが八つの父韻ということになります。

八父韻のことはさて置き、現象を生むに当つての母音と半母音(私と貴方)の関わり合いについてお話してみましよう。私が出来事を生むためには、私自身が何かを対象として捉え(その対象となるものは、自分であっても、他人でも、または物や事でも構いません)、それに何らかの働きかけを行う時だけに限られます。何の関心も示さず、何もなければ現象は起りません。現象が起るにはアとワの交渉が必要なのです。

それなら、人間の心は母音である五つの次元宇宙から発現するのですから、そのそれぞれの、次元の現象はアとワ、私と貴方がどの様な関わり合いで発現して来るのか、を考へてみることにします。その作業の末に、スメラミコトの世界政治の心の構造が明らかになる筈です。

前にもお話しましたが、言霊ウの宇宙から五官感覚の原識の現象が、社会的には産業・経済活動が起ります。言霊オからは経験知が、そして学問・科学が起ります。言霊アから感情が、芸術・宗教が起り、言霊エから実践智が、そして道徳・政治の世界が始まります。言霊イから発現する人間性能は創造意志でありますが、意志そのものは現実の現象とはならず、ただアとワ、私と貴方とを結ぶ懸け橋である八つの父韻として発現し、後天のウオアエ四次元に属する現象を起させる原動力となります。

さて、右のように次元を表わす母音の違いが私と貴方(アとワ)との関係でどう違つて来るかを検討して行きましよう。先ず言霊ウの次元です。その現象の典型として商売の心を取り上げてみます。商売には売手と買手があります。売手をアとすると買手はワとなります。

普通の商売でしたら、売手は買手に品物を買ってもらわなければなりません。もつと正直に言えば、買手には非でも買わせなければなりません。買うことを成るべく長い期間持続させることが望ましい事です。「いらっしやい」有難う御座いました」の言葉、値引きのサービス、買手に対する御世辞、すべては商売繁盛のための手段であつて、買

手の人格の尊嚴を認めてなどのものではありません。むしろ、買手そのものが売手の手段となるのが最も商売をし易くすることでしょう。アはワを目的とせず、手段と考えます。

「それは余りに極端な言い方だ。商人だってお客様に本当に有難い、と思っている人も居るのだ」と不満に思う方もいらつしやるでしょう。お気持は分ります、けれど商人のお客に対する「有難う」が御利益信仰ではない真の信仰の「有難い」とは全く質の違ったものであることをお気付きになることと思います。言霊ウの次元におけるアとワの関係は以上のようなものであります。そしてこのウ次元に於けるアとワを結ぶこの様な関係を言霊学は父韻を以てア・カサタナハマヤラ・ワと示しているのです。

次に言霊オ次元について考えましょう。オから発現する現象は人間の経験知です。その社会的現象は学問・科学です。そこで学問の担い手である学者の心理について考えて行くことにします。

一人の学者が居ます。同僚が新説を発表しました。学者はその新説について真偽を調べ考えます。「うん、これは真理に対してユニークな学説だ」と知ります。そこで新説

に全面的に感心し、屈服してしまつたなら、その学者の学者生命は終りとなるでしょう。

けれど、その学者がもう一歩ふん張つて「新説は確かに良い所に目をつけた。しかし更めて私の経験の立場からもっと幅広いデータを集め、一段高い視野に立つならば、従来の説と彼の説とを矛盾なく総合した更に高次の法則が得られるのではないか」と考え研究を続けて行くならば、その学者としての生命は延び、学問自体も進歩発展して行くことでしょう。

以上の学者の心理と学問の発展状況を考えてみますと、学者とその同僚との関係はライバル同志ということになります。学者にとつてその同僚は、個人的にいくら親しくとも、仕事の上では何時追ひ抜かれるかも知れない油断のならぬ敵なのです。そして以上の様な経験知の葛藤による学問の発展を哲学で正反合の弁証法的発展と呼びます。従来の学説(正)、新説(反)、二つを統合した高次の立場(合)、という三角形に発展して行く形式のことです。そしてこの心理並びに発展形式の時置師を言霊学でア・カタマハサナヤラ・ワと示しています。アとワは敵対同志なのです。

言霊ア次元の検討に入りましょう。言霊アの宇宙から発

現する人間性能は感情です。その社会的表現は宗教・芸術ということになります。今・此処に一人の宗教家を例にとり、その心理を検討することによって、この次元のAとワの関係を明らかにしましょう。

人を金のなる木と思つて頑張る商売は富をもたらしません。同僚をライバルと思つて競い合う学者社会は学問の成果を生みます。けれどもそれらの人々の心の中に大きなストレスを生むことも確かです。矛盾が積み重なれば、人は耐え切れなくなり、悩み苦しむ事となります。「人生とは何なのだろうか」と考えざるを得ません。人生の矛盾の解消を求めて信仰に入り、神仏にすがり、愛や慈悲の世界に目覚めて行きます。人を手段とし、同僚を敵として来た自分自身の欲望や経験的知識の空しさ、はかなさ、小ささに気付いて来ます。そして、その時まで最も大切だと思つて主張し戦つて来た自我自身が脆くも崩れ去ります。絶望が訪れます。

絶望に次いで、この人が生まれてからその時まで経験した事のない真実と感情に出合うこととなります。「私は好き勝手に自分で生きて来たと思つていた。けれど実は生かされていたのだ。何と有難いことではないか」と。生きる

ことの絶望が生かされて来たという感謝に変わります。自我意識の百八十度の転換です。

意識の主役だと思ひ込んでいた自我はこの時以後端役となつて薄い存在となり、意識の主役は生かして下さつてゐるもの、神・仏・大いなるもの・宇宙生命・光・愛・慈悲等々に変わります。「我は生かされている者、汝も同様に生かされている者、我と汝と同根、また奇特ならずや」が実感となつて証明されます。ここに到つて私と貴方は個々別々のものではなく、神・仏・宇宙を同じ根つ子とした神の子・仏の子・宇宙の子として兄弟・姉妹・同胞と考えられることとなります。言霊ウとオに於て、貴方と私は全く個別の自我と考えられたものが、各々の本体は大きな宇宙であり、宇宙の子として、個を超えた立場で結び付くこととなります。

言霊アの次元の次に言霊エに於ける検討に入りましょう。言霊アの宇宙の自覚によつて、人はテンデバラバラの個別化を卒業して、自らの生命の本体が広い宇宙そのものである事に気付きます。迷いと束縛から放れ、心は自由に宇宙の中に遊ぶように楽しくなります。けれどその時まで自分が苦しみぬいていたように、世の中には大勢の不幸

な人がいる事に今更のように気付きます。自分も悩みから抜け出そうとして修行を積んで来た。これは自利の行であった。自ら自由になった今日からは、人々を楽しい生活に導く利他の行をしようと決心します。その利他の行の段階が言霊エの次元です。言霊エのエとは選ぶの「え」です。その次元からは選択智・実践智が発現します。人を導き、世を導くに当り、自らが今まで経験して来た言霊ウオアの次元をどの様に選んで言葉とするか、の選択が仕事となります。それは道徳行為であり、また政治行為でもあります。

さて、言霊アから言霊エの、自利より利他の行為に入る時点で大きな岐路、分れ道がある事に気付かねばなりません。言霊エの実行に当り、分れ道があります。その分れ道を右するか、左するかは決定は、過去二・三千年の暗黒の中から甦って来た言霊の原理を自覚するか、否かなのです。それについてお話することによって、この文章の表題である「スメラミコト」の出現とその御稜威が本当かどうか、の解答に行きつく事となります。

先ず従来の言霊エ、実践智の道を検討しましょう。自らの束縛を脱し自由な天地に躍り出る事が出来た喜びを他の人に伝えようとして人を導きます。そこに問題があります。

人を導く方法として取られるのは、導く人が昔、修行した自利の行の時の自らの経験知なのです。自利の行の末に折角自我の殻を破り、広い宇宙に躍り出ることが出来たのに、利他の導きに入ると直ぐに以前の個別化の言霊オの経験知に頼らなければなりません。逆戻りを余儀なくさせられます。自由な天地に躍り出て、大きく世界や人類の事を見る視野・土台に立つ事が出来たのに、その利他の行でまた個人の殻に後戻りしなければなりません。「地獄に墮ちること箭の如くならん」と仏語は教えています。この段階に於てのアとワの結び付きを言霊字はア・タカラハサナヤマ・ワと示しています。

「自利の行で自由な天地を得た者を縁覚といい、初地の仏である。黙坐している時にのみ仏である。故に更に発意して人生の第一義、一切種智(言霊)の修行に入れ」と法華経は教えます。そしてその修行の末に普賢菩薩の行法・即ち世界人類を普ねく統一する賢い法が存在する、と説くのです。スメラミコトの道の事でありませぬ。

自利の行によって広い宇宙に開放された人が、自らの生命の本体が宇宙そのものであることを知り個人の殻を破った人が、そのまま利他の行に入ると個の殻に後戻りをしな

ければならなくなるのは何故なのでしょう。その理由はただ一つ、自らの生命の本体だと気付いた宇宙・神・仏・光・愛……と表現するものが、実は生命の究極のものではなく、言霊オの次元の所で用いて来た経験知の概念であるからです。神も仏も……人により、社会・民族により、その受け止め方がまちまちです。

魂が自由な境地にある人が、他に働きかけるに於てもその自由を保ち、更に働きかけられた人にも自由をもたらし事を可能とするためには、生命の本体と見なされた神・仏・光……等の更なる究極の実体とその法則にまでさかのぼることが必要です。人間であるならば誰でも究極の生命存在とその法則として承認出来、いろいろな概念説明を必要としない明らかなものに基づいた働きかけであることです。そのことを必要にして十分に満たす生命そのものであり、光・神・仏……の真実の実体であるのがアイウエオ五十音布斗麻邇の原理なのです。

アイウエオ言霊五十音布斗麻邇の原理は、「人間の心とは何か」の問いを完全に解明した人間生命の最も合理的な厳密な学問です。個人の瞑想や呪いまじないによって得られる霊能力ではありません。その原理は人類に普遍共通の真理で

す。この原理は人間の創造意志の宇宙である言霊イの次元に存在しています。言霊イの創造意志は、他の四つの次元、言霊ウ(原識)・オ(経験知)・ア(感情)・エ(実践智)を統一し、発動させる原動力です。それ故にこの普遍の真理に基づいて他に対する働きかけが行われるならば、世界の道德・政治は何の停滞もなく行われる事となります。

日本神道で天津罪と呼ばれ、キリスト教で原罪といわれる人間が生れた時より負うとされる不幸の原因となる罪とは数千年前、この言霊の原理が世に埋れたが為に始まった罪であります。それ故、この原理を自覚し、世界政治の責任を負う人が立つならば、戦争・飢餓等々人類の不幸の大部分の原因となる罪は跡形なく消えてなくなってしまうでしょう。暗黒は光の出現によって消える道理です。スメラミコトの御稜威はこの様にして道德による世界政治を可能にするのです。

大和石上神宮の布留ふるいの言本ことばは以上のスメラミコトの世界経綸の方法を「アセエホレケ」と言霊を以て教えています。

「アセ」とはアの瀬、ア次元の我と汝と同根という慈悲と愛の心によって、ということ。この心をスメラミコトの大御心と呼びます。それは世界中に起るであろう出来事を、

全て我が身のことと考える立場です。「エホレケ」とはエ次元の実践智の結論(エ)を言霊(ホ)の列(レ)がよく整えられよう(ケ)宣べよ、ということです。

スメラミコトの経綸に於ける私と貴方、アとワの結び付きを父韻を以てア・タカマハラナヤサ・ワと表わします。

人類社会の永久の平和をもたらす人類最高の真理といえましよう。スメラミコトとは世界人類を一人の人間とした時、その中枢神経となり、良心に当る人なのです。

五十首言霊の一つ一つを霊ひかといえます。その動きは靈ひか馭り、即ち光です。ここ三千年の須佐男の命の暗黒の夜を月読の命のおぼろげな月の光が照らして来しました。悩みに対する慰めの役目を果しました。今や太陽にたとえられる天照大神の光の言霊学の復活です。光は世の中のすべての罪穢れを消し去ります。古代の日本天皇のことを武内歴史は天津日嗣身光天皇(アマツヒツギミヒカル・スメラミコト)と伝えています。

【収載】第八十五号(平成七年七月)

●著者退院の弁

病室の窓の前に赤松の大木が聳えていました。朝日が輝くと幹を赤々と染め、生きよ、生きよと励ましてくれる様でした。赤松の隣りに八重桜の木がありました。四月中旬、枝もたわわに花を咲かせました。好きな漢詩を口遊くちゆうみました。

年々歳々 花また同じ

歳々年々 人同じからず

梅雨に入り、木々の枝葉が繁り、大空をいっぱい覆いました。芭蕉の句が心に浮かびました。

あらとうと 青葉若葉の 日の光

「お前には七十年かけて言霊布斗ふと麻邇まにの学を教えた。このままあの世に食い逃げする事は許さん。分った事を世の人に伝えて生きよ」と言われ、再び社会に戻って参りました。聖書パウロの言葉を借りて退院の弁を次の如くまとめます。

「今よりは我生きるにあらず。皇祖皇宗我が内にありて生きるなり」

強情怠惰な自らに鞭打って勉学の道を歩み続けます。今

後共御指導御鞭撻よろしく御願ひ申し上げます。
入院中の御見舞、御声援有難う御座いました。

平成七年七月三十日

言霊の会

各位

島田正路

【収載】第八十六号（平成七年八月）

言靈學隨想

●終末感について

今年はキリスト世紀一九九五年、二十世紀もあと五年と半年を残すだけとなった。この世紀末が近づくに從つて、社会の人々の心の底流に所謂終末観思想が静かに広がりを見せているようである。先の関西大震災に際して種々の宗教団体が「神の審判」「神の警告」等と一斉に発言したのも、この終末観思想の影響を受けてのものであらうし、また最近毎日マスコミにニュース・ソースを盛大に提供しているオウム真理教事件もこの思想を受けての突出現象と言つて差しつかえあるまい。

終末観、人類生命の終りが近い、という思想は正確にはどんな考え方なのであらうか。先ず辞書を引いてみよう。「終末観とは世界及び人類が最後に遭遇すべき破滅の運命を説く宗教上の教え。特にユダヤ教・キリスト教で、天変地異が起つて神の直接支配が来るとする教え」とある。

この解説が説明する終末観の中には二つの主張が含まれ

ている。一つは「人類は最後に破滅の運命に遭遇する」という警告、もう一つは「その破滅の後に神の直接支配が始まる」とする予言である。要するに「人類の大部分は審きに會つて死に」、その後「日頃から神を信じ、心直き人々のみが助かり、人間の支配ではない神直接の支配する世の中が来る」という教えであらう。

以上の終末観思想に対して日本人の、また世界の人々の大多数はマスコミを含めて無関心である。相当な知識人と思われている或る大学の教授が最近テレビで次の様な発言をしていた。「地球上には人類社会の危機状況というものは何時の時代にも二つや三つはあるものであり、今の状況を殊更に終末観と結びつけて考える人の気持が理解出来ない」と。しかしこれは誠に無知な発言である。今日人類が置かれている危機的状況、例えば地球の温暖化、大気汚染、大気オゾン層の破壊、酸性雨、原子力発電所の増加に伴う放射性廃棄物の年々の激増、その処理法の未発見、発展途上国への核拡散、テロ活動の慢性的増加、教育の頹廢、麻薬等の蔓延……どれ一つをとって見ても、人類の過去の歴史の中で質量ともにかつてない危機要因が醸成されつつある。これ等の処置を一步誤るならば、人類の破滅は必至の

情勢であることは事実である。

しかもそれ等危機の原因の発生は現在社会の生活文化の基盤と密接不離に結び付いたものばかりであるから、その解決法の発見は一人や二人の個人の思考の能力ではどうにもならないものである。この問題を真剣に考えようとする人も、結局は諦めて無関心層の中に吸収されてしまうのである。「大気汚染を少なくするため、自家用車を手放すか。放射性廃棄物を少なくするために我家のエアコン使用を止めるか。いやいや、自分だけそんな事をしてしまうものではない」ということに落着くのである。種々の学術研究機関やマスコミが、個々の危機要因を研究報道はしているが、その現状は全く「日暮れて道遠し」の観をまぬかれてはいない。人類は自らの危機状況を解決する根本対策を持つてはいない、というのが実状である。

以上のような社会状況であるから、地球人類の生命存続の問題は社会の人々の底流に潜むこととなり、それを取り上げ問題にするのはただ宗教団体のみということになる。無関心でいるなら当面は波風も起らないで済む。しかし一度考えれば、ヒタヒタと押し寄せて来る人類全体の生命の危機的状況、そういう事態には遺憾ながら何時も宗教団体

の独占活動とならざるを得ないのである。

終末観には先に触れたように二つの主張が含まれている。一つは、人類は終末に於て破滅の運命を迎えること、二つはその後で神の直接支配の世が到来することである。この二つの予言に添うように、現在の各宗教の活動も二つの主張から成っている。第一は、関西大震災に見られるような天変地異、または戦争、飢餓が神の最後の審判として地球規模で到来する、という予言。第二に、日頃より信仰に入り、自らの心を直くした人のみが以上の神の裁きを免れて助かり、信仰を中心とした社会・国家が地球上に建設されるであろう、という主張である。然もこの主張に一般国民や政府が無関心であるなら、国家に代り宗教団体が権力を掌握して、神の国を自分達の手で築こう、と直接の過激な活動を計画するものも出て来る。最近のA・S教などはその現われであろう。

今後の世界には、終末論に基づいた天変地異や各種の災害発生の警告、救済のための信仰入会の勧誘等の宗教活動、更にそれより過激な突出現象は今より更に盛んになって行く事が予想される。そういう活動を発生させる地球規模の公害の原因が一向に除去は正されない現今の状況下では、

それは必然的な現象であろうし、社会の人々はこれらの社会の傾向に直接又は間接の影響を受け続けるであろう事は明白である。

以上のような現象とその影響による社会不安は今後益々大きくなるであろうし、それに対する種々の憶測や誤った見通しなどが横行するであろうから、生命全体の学問である日本伝統の言霊学の立場から、それらの宗教的、信仰的、霊能的な予言、警告等に対し、はっきりした結論を申し述べて、人類がたどる明日への道を明示して置く事としよう。先ず予言されている終末論の内容について、項目に分け、その一つ一つについて明快な解答を示そう。

- 一、過去に、また現在に宗教や霊能団体が予言する終末は起るのか、否か。
- 二、起るとすればどんな形で起るか。天変地異か。神の善人・悪人の立て分け、最後の審判とは。
- 三、最後の審判の後に来る、とされる神の直接統治はあるか、否か。あるとすれば如何なる内容か。

先ず右の項目について、それが起るか、起らないか、の

結論をイエスカノーではつきりと答えておく事にしよう。イエスカノーかを明らかにしておかないと、そこに不必要な疑心暗鬼が入りやすい。第一の問題、各宗教や霊能団体が予言する人類全滅の運命は実際に起るのか。答えは「このままで行けば当然に起る。現在進行中の地球規模の公害はそのどれ一つをとっても、社会の趨勢が今のままで進んで行けば、人類生命に壊滅的打撃を与えないではおかないものばかりである。だから起らざるを得ない。

けれど実際には起らない。正確に表現すれば、決して起させない。今のままでは当然起るべき終末的破滅の運命を百八十度転回して、恒久平和・平穏な人類社会を建設する手段とその歴史的経緯が已に十分に発見・認識されているからである。理由は後程詳説される。

神の最後の審判といわれる天変地異(洪水・大地震)は起るか。答え、起らない。洪水・地震などの自然災害は何時の世にも起って来た。その意味で今後数年間の内に地球上の何処かで、関西大地震を上回る災害が起るかも知れない。けれど、神の予言としての終末的天変地異、最後の審判としての大災害は決して起らない。そういう考え方は信仰という態度を視点とする宗教的、霊能者団体の妄想・虚言に

過ぎない。正確に言えば、比喩的表現に過ぎない。比喩、即ち譬え話であるから、実際に起ることではない。何故そう明言し得るのか。これも後述されるであろう。

次に神の審判である天変地異の後に神の直接支配が始まる、と説かれている。それが事実だとしたら、神の直接支配とは如何なるものなのであろうか。天空の彼方から神の姿が現われて、人々の眼に常に見ることが出来、人々に「こうせよ、あゝせよ」と声を出して教えて呉れる事なのであろうか。そうでなければ、神と呼ばれるにふさわしい大聖人・神人・超人がこの世に現われ、心の内に神の声を聞いて、その人が直接指示して政治が行なわれるのであろうか。現代の各宗教や霊能団体の言う所は大方この部類に属している。その答えはどうか。否、である。それ程遠くない將來起るであろう地球人類の政治とは以上の如きものでは決してない。この事についても後程詳しい説明が行われるであろう。

以上、終末論で予言されている現象の各項目についてイエスカ、ノーで答えて来たが、そのような答えが出て来る確乎たる根拠についてお知らせすることにしよう。

終末論について、その本家とも言うべきキリスト教の旧約聖書ダニエル書の一節を記そう。

「彼は海の岡において美しき聖山に天幕の宮殿としつらはん。然れど彼つひにその終りにいたらん。之を助くる者なかるべし。その時汝の民の人々のために立つところの大いなる君ミカエル起あがらん……ダニエルよ、終末の時まで此言を秘し、此書と封じおけ……」(ダニエル書十一章)

奇妙に聞えるかも知れないが、終末論と呼ばれ《終り》があるならば、その《始め》はあるのだろうか。終末とは人類生命の終りを意味するならば、当然始めとは人類が人類としてその生命活動を始めた大昔のことだ、と思われる人が多いのではないか。言葉の表面の意味から考えればそれは当然である。しかし、終末論をそのように当然のこととして受け取ってしまう事から、この問題を訳の分らぬ切迫した脅威のものとして感じ、その対策を根本から間違った方向に引込んでしまふ事となる。終りが論じられるからには始まりがなければならぬ。しかし、その始めとは人類生命の始まりの事ではない。実際は次の様にして始つたのであ

る。

民間に伝わる世界の古代史、武内古文獻によれば、
鵜草不合尊皇朝六十九代神足別豐鋤天皇の章に次のように
記されている。「へブライ国々王モーゼ来る。天皇モーゼ
に天津金木を教う。帰るにあたり、天皇モーゼに御言宣り
して曰く『汝モーゼ、汝ひとりより他に神なしと知れ』かく
てモーゼとその裔に新しき使命を授く」と。

天皇がモーゼに授けた命令とは「汝が授けられた天津金
木の原理を以て、汝と汝の民族とその子孫は世界の人々の
中核となり、高天原日本の精神文明とは違つた物質文明を
開拓発展させ、その成果である武力・金力を以て全世界を
統一せよ」であつた。今より約三千年以上昔の事である。

モーゼの子孫は初め現在のイスラエルの地にへブライ即
ちユダヤ国家を建設し、ダビデ、ソロモンの時代に国家は
最も隆盛を極めた。その後、国家は分裂してイスラエルと
ユダヤ二国となり、次いで両国は滅亡して、その民族は地
球上に散つた。その真意は、民族はチリヂリ、バラバラに
周辺に散り、その他民族の中に於て物質文明とその産業発
展の中核となり、高天原の第一精神文明に次ぐ第二の物質
文明創造という民族の使命を遂行する新しい旅に出発した

のである。

ユダヤ国家滅亡以後二千数百年、その民族は東に西に民
族移動を続け、他国家、他民族の中に散らばり、しかも予
言者の指導の下に民族の団結と信仰を失わず、その学問・
芸術・産業の才能を生かして各国家の物質文明発展の中核
となつて隠然たる勢力を張り、今日の世界に見る如き絢爛
たる物質科学文明を作り上げたのである。と同時にその物
質科学の成果である経済力を駆使して、全世界の国家・民
族の統一という使命と事業の完成を目睫の間に置いて、彼
等民族の祖モーゼの魂の故郷である日本に向つて最後の民
族移動を行わんとする寸前である。その目的は勿論、三千
年前にモーゼが授かつた使命の完了を高天原日本に報告
し、その今後の新しい使命を授与される事を望んでである。
彼等民族の隠れた予言者の中心人物を、長い世界の歴史は
King of kings (王の王)と呼んでいる。彼等の使命完了の
報告のための日本への舞い上がり極めて近い将来である
ことは確実となつている(「古事記と言霊」歴史編参照)。
それなら、使命の完了を報告するため舞い上がつて来る
ユダヤの予言者 King of kings を迎え、彼に「長々間誠に御
苦勞様でした」とねぎらいの言葉をかけ、彼等ユダヤ民族

に新しい使命を授けるであろう「モーゼの心の故郷」とは日本の何処を指して言うのであろうか。本来ならモーゼに使命を授けた神足別豊鋤天皇の三千年後の子孫である現日本天皇であるべきなのだが、遺憾ながら現天皇にはその資格がない。何故なら神足別豊鋤天皇が世界文明の歴史創造のためにモーゼに使命を与え、その使命遂行のために不可欠である天津金木を授けた人間精神の原器である言靈五十音布斗麻邇の原理を所有・自覚することのない、即ち高天原日本を代表する資格を持ち合わせていない現天皇だからである。

それなら舞い上がって来るモーゼの裔うゑを迎え、その報告を受ける人は一体全体誰なのであろうか。ここ数年の間に日本に於ても種々の変動を見る事であらうから、その詳細は他の機会に譲るとして、此処では唯一つはつきりと言える事がある。それは天皇という位が尊いのではない。天皇を名実共に天皇たらしめる資格が尊いのである。その資格とは天皇家の血統ではない。真の資格とは、人間とは何か、という日本民族伝統の言靈布斗麻邇の原理の保持・自覚である。五十音言靈の原理を自覚して、聖みかど(靈知)天皇として日本と世界の統治の先頭に立つ事が出来る人、それが高

天原日本に於けるモーゼの心の故郷となり得るのである。以上、ここ三千年年の人類の歴史の本筋を述べて見ると、終末観といわれ、最後の審判と予言される出来事が、人類の歴史の上で、どの様な形と内容をもつてこの地球上に現象となつて現われるか、が略々正確に認識されて来るであらう。

終末観の終末とは、ユダヤ民族が中核となつて作り上げて来た、ここ三千年間の物質科学文明独走の世の中の終末おわりの事であり、人類生命の終りの事では決してない。物質科学はこの地球上に限りない便利重宝ちゅうほうな社会を作り上げた。物質科学は《物とは何ぞや》の命題を解決し、物質の究極構成要素クオークの全てを解決した。しかし科学を研究する人間の性能である言靈ウ(五官感覚による直接認識)と言靈オ(学問)とが、他の三性能である言靈ア(感情)・言靈エ(実践知)・言靈イ(創造意志の原理)の三性能を抑え独走するならば、確かに人類生命は危殆きふちに瀕ひんすることとなる。

この事態を宗教的に、《終末》と呼んでいるのであろうが、真の意味での終末とは、そういう事態を作り上げた創造責任者であるユダヤ民族の予言者達の独走の世の中の終りの事を意味するのである。先に挙げた旧約聖書ダニエル書に

「彼は海の間にて美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん。然れども彼つひにその終りにいたらん」と記された予言の現在の意味である。

各民族の裏の役者として物質を科学的に解明し、その成果による産業・経済・武力等を以て世界を統一したユダヤの予言者は、その祖先モーゼ以来の使命の完了を報告するため言霊原理の保持国(霊の本)高天原日本に來る。言霊の原理の保持者に King of Kings が報告し、それより後の世に於ては彼が昔授けられた天津金木(カバラ)の原理だけでは用をなさない事を知る事、これが、《終末》である。物質文明創造の三千年の期間の歴史の終りである。

この三千年間に一度の歴史の大転換点に関して、世界六十億の民衆の生命と生活は何の責任も影響も感ずることはない。世界の創造の大方針が一変する事件に世界民衆は何もあざかり知る所はない。一般のマスコミも学会も宗教団体もその事件に関心を持つ事はない。知らされる事がないからである。「キリストは盗人の來つるが如く來る……」である。大本教のお筆先には「九分九厘の一厘の仕組み」とある。世の終りは一人対一人の一期一会の会談に於て決定される。他に世界中の誰にも気付かれることなしに。

次に最後の審判またはハルマケドンについて述べよう。この最後の審判は仏教の地獄の閻魔王の審きと混同される。宗教で最後の審判とは、人間の一人一人が最後の時に當り、神よりその罪穢れの審判を受け、正しきものは助かつて神の国に生き残る事が出来、悪しき者は審かれて地獄の苦しみに落ちる、と説かれている。先の関西大震災に於て各宗教などが「この災害は神の審きである、神の警告である、之から次々と大きな天変地異が起つて不正直者達に大鉦なべを振るう……」等と騒いだのも、昔からの最後の審判という予言の影響を受けての発言であつたのであろう。けれどそんな審判など永久に起ることはない。

最後の審判の實際は、この物質文明創造の時代に主張された幾多の人類の精神的産物、主義・主張・信念・社会正義・歴史観・哲学・宗教観……等々に対する言霊布斗麻邇の原理による撰取不捨の救済作業のことである。それらの主張を、言霊原理に基づいて新しい世紀の文明創造のために役立つようコントロールして行く作業である。人間一人々々の善悪の審き事ではない。審判ではなく救済するための調整作業のことである。

ハルマケドンとは人類生命が滅亡に到る最後の戦い、と

言われて来た。しかしそんな戦いは起らない。使命を完遂して高天原日本に舞い上がって来るユダヤの王の王と、日本伝統の布斗麻邇の原理の保持・自覚者が一処に会することとなる。この時、布斗麻邇の側からユダヤの予言者の側に、長い間の彼等民族のたゆまぬ努力と使命の遂行に対してねぎらいの言葉があり、更にそこで彼等の物質科学文明創造の時代の終了と、その物質文明時代をリードした天津金木(カバラ)の原理だけでは今後の新しい物心両輪の備わった第三文明時代を創造・維持して行く事は不可能であることの宣言と説得が行われる。古神道でこれを「言向け」と呼ぶ。しかし三千年余それによって世の中を牛耳って来た金木即ち彼等のカバラを諦めて、直ちに新しい天津太祝詞の原理の傘下に入ることは、彼等「項強き者」のプライドが許さない。そこで説得には丁々発止の駆引が行われる。この駆引きは古事記神代巻の最後の章「山幸と海幸」で言霊原理の謎を以てつぶさに示されている。この駆引き、心と心の鏢迫合の戦い、これが実際のハルマケドンである。この戦いは何回かにわたり行われ、遂にユダヤの王の王の側が自らの非を悟る事で幕となる。人類が戦争と飢餓と病苦の暗黒の運命から脱出するための精神的な戦争である。

キリスト教(ユダヤ教)予言の終末の後に約束されている神の直接統治とは如何なるものであるのか。先に挙げたダニエル書に「その時汝の民の人々のために立つところの大きいなる君ミカエル起あがらん」とある処である。「大きいなる君ミカエル」とは如何なる神であるのか。神の直接支配とどう関係するのであろうか。

聖書に五大天使(ガブリエル・ラファエル・ミカエル・ウリエル・ルシファー)の事が記されている。言霊学のアイウエオ五母音を意味する信仰上の表徴である。このうち大いなる君ミカエルとは言霊エに当る。日本神道では天照大神である。天照大神とは五十音言霊による精神の最高理想構造天津太祝詞音図ふとりのこによって世界文明創造を行う経綸の神である。信仰上これを天照大神と呼ぶ。実際には人間によって自覚される天津太祝詞音図のことであり、五十音言霊の原理のこともある。言霊原理がその姿を余す処なく明らかにされた現在、生きて世界の歴史を創造する神とは、人間の精神要素である五十個の言霊及び五十の操作法、計百個の布斗麻邇の原理そのものである。

それ故最後の審判の後に約束された神の直接支配の社会とは、従来神と呼ばれて来たものの実体である五十音言霊

の原理による世界の政治のことであつて、靈感によつて天の神と通じていると称される神人のお告げによる社会統治ではない。また一つの信仰団体で主張する信仰綱領に基づく政治でもない。従来神とは何ぞや、を解明した生命の合理的法則原理に基づく合理的政治である。人間を人間たらしめる根本原理を自覚した人々による政治の事である。神と人間との間に何らの媒介もさしはさむことのない人間の政治である。

以上、歴史的に予言され、また現在社会に流布されている終末観・最後の審判・ハルマケドン・神の直接支配等について、それが実際に起る時はどんな形で起るのか、と、その理由について説明して来た。御理解を頂けた事と思う。ただ此処で読者が不審に思われることがあるのではないか。それはユダヤ教やキリスト教で従来教えて来た終末観・最後の審判等と、また現今の各宗教が告げる神の審判・警告なるものと、言霊学に基づく文明創造の経綸の歴史より見た實際とが、かくも相違した内容となるのは何故か、ということであろう。これについて説明しよう。

人間は五つの次元の性能を本来具有している。ウオアエ

イ五母音で表わされる。人間が過去の出来事をどう解釈するか、現在進行中のものにどんな見解を持つか、将来起るであろう出来事をどのように霊感的に察知し表現するか、はその人が拠つて立つ自覚の次元によつて見解が全く違つて来る。

終末論に対する見解も同様である。それが将来に起るであろう人類の運命に関することだけに、その見解の正しいか誤っているか、は影響重大である。

終末論に対し、キリスト教その他各種の宗教が、天変地異だとか、人間一人々々の正邪の審判だとか言うのは、言霊の信仰による個人の魂の救済の立場から物申している為である。将来に対し何か分らないが大きな不安を感じた時、それを自然現象の天変地異と表現して、個人の信仰の勧誘、日頃の行いへの警告に利用することは当然であろう。霊能者が予言する大災害近しとは、すべて右の如き人間社会の思想・制度・文化の大改革の事を間違つて感受した結果である。

ところが、終末論を始め人類歴史の本筋の事件は全て昔に日本人の祖先、霊知りの天皇が言霊の原理に基づいて決定した経綸であるから、その言霊原理の次元の見地に立た

ない限りその正確な解釈と予測はなし得ないのである。

神とは何ぞや、それはまた人間とは何ぞやと同様のことであるが、それを同時に解明した古代日本民族の伝統である言霊布斗麻邇の原理が不死鳥の如く復活した現在、二千年の間予告されて来た終末論に正しい解釈と、それを乗り切る確乎たる手段を予知し、これを公表することが可能となったのである。

【収載】第八十四号（平成七年六月）

● 経緯

夜、目が覚めた。眠れぬままに越し方、行末を思う。優柔不断な私はこの世で為になる何事をもなす事が出来なかった。そんな私を日本人の遠い祖先である皇祖皇宗は時処位に応じお導き下さり、世界の精神秘宝言霊布斗麻邇を教えて下さった。今新たに知る。性悪で怠惰な私を救世の原理にお導き下さった如くに、世界の全ての人々の魂を補導して、誰一人欠けることなく、恒久平和の御代に行き着くよう皇祖皇宗の御経緯は今、現に続いていると、いうことを。

【収載】第九十号（平成七年十二月）

著者略歴

島田正路 しまだまさみち

1925年 東京銀座生まれ

1963年 故小笠原孝次氏に師事し言霊学を学ぶ

1987年 「言霊」著出版（絶版のため文中の「言霊」参照部分は
他既刊書参照）

1988年 「言霊の会」創立、毎月会報発行

1995年 「古事記と言霊」著出版

1999年 「コトタマ学入門」著出版

2007年 「コトタマ学 会報集成書 上巻・下巻」著出版

2009年 12月28日没。享年84歳

コトタマ学 会報集成書上巻

第一号（昭和63年7月号）～ 第九十号（平成7年12月号）

平成 19 年 7 月 23 日 第一版発行

平成 24 年 2 月 23 日 第二版

著 者 島田正路

発行所 言霊の会

〒145-0062 東京都大田区北千束1-14-14

電話 03-3723-1105

振替 00120-3-653594 言霊の会

HP <http://www.futomani.sakura.ne.jp>

印刷所 昇美印刷株式会社

Copyright©2007 Masamichi Shimada

落丁・乱丁はお取替えいたします。